佐賀県文化財調査報告書 第121集
九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（17）

東福寺遺跡

1994年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書 第121集
九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（17）

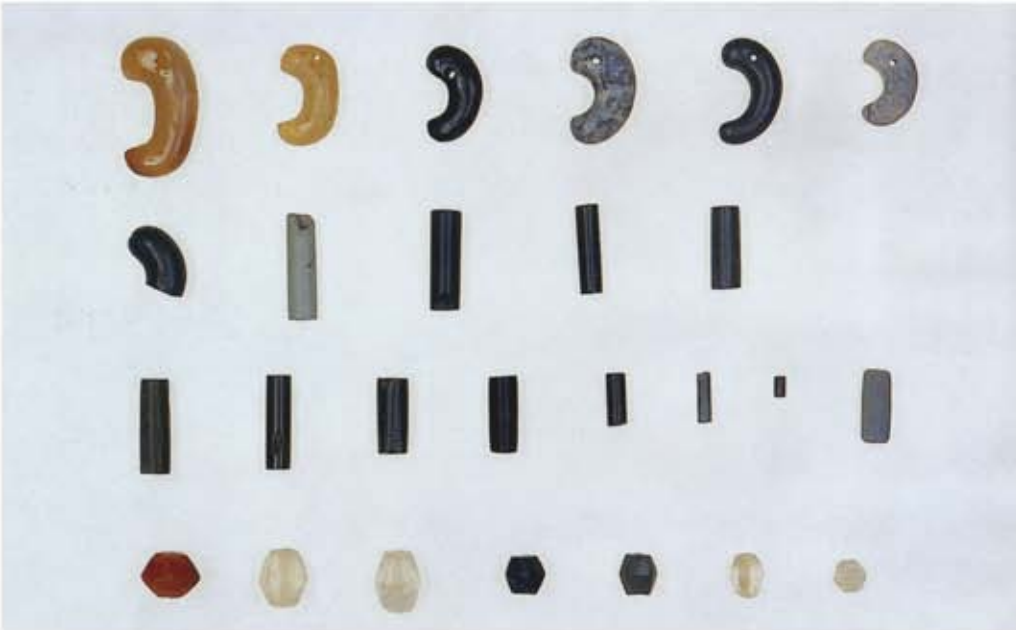
東福寺遺跡

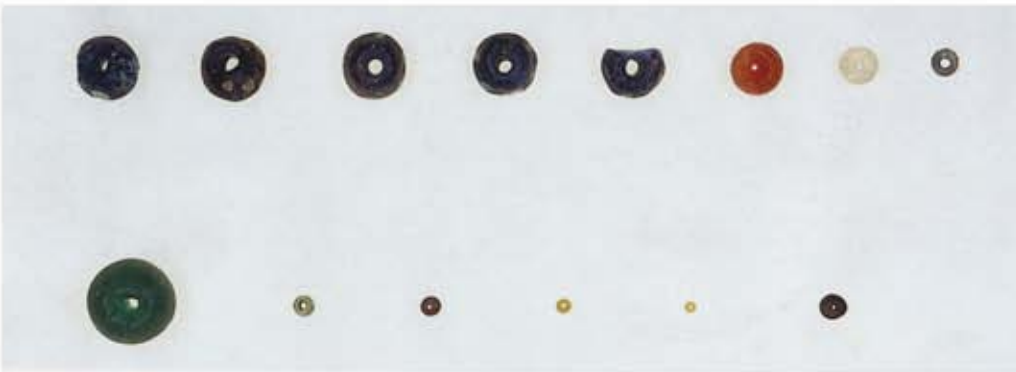
東宮裾遺跡
馬場遺跡
小野原遺跡Ａ区
みやこ遺跡Ｂ・Ｃ区
玉江遺跡１～３区
皿山窯跡
東福寺遺跡

１９９４年3月

佐賀県教育委員会

東福寺ＳＴ014古墳出土馬具





東福寺ＳＴ014古墳出土銅釧・玉類

序

この報告書は、佐賀県教育委員会が日本道路公団の委託により、昭和58年度から昭和63年度にかけて実施した、杵島郡北方町所在の東宮裾遺跡と武雄市所在の馬場遺跡・小野原遺跡・みやこ遺跡・玉江遺跡・皿山窯跡・東福寺遺跡の発掘調査の記録をまとめたものです。

今回の調査では、弥生時代の集落や墓地、古墳時代の古墳群、古代末から中世の村落や墓、更には明治期の磁器窯など、各時代の多様な遺跡が対象となり、この地域の歴史を明らかにする上で欠かすことのできない情報が得られました。

本書が学校教育や生涯教育の資料として活用され、学術文化の向上に幾分とも寄与するものであれば幸いに存じます。

発刊にあたり、酷暑や厳寒の時節を通じ調査作業に従事していただきました地元の皆様をはじめ、関係各位から賜った深い御理解と多大な御協力に対し、心より厚くお礼申し上げます。

平成６年３月

佐賀県教育委員会

教育長　堤　　清　行

例　　言

1．本書は、九州横断自動車道建設に伴い、埋蔵文化財の事前調査のうち、昭和58･59･61～63年度に発掘調査を行った杵島郡北方町所在の東宮裾遺跡と武雄市橘町・武雄町所在の馬場遺跡・小野原遺跡・みやこ遺跡・玉江遺跡・皿山窯跡・東福寺遺跡の調査報告書である。

2．発掘調査は、日本道路公団の委託を受けて、佐賀県教育委員会が実施した。

3．発掘調査にあたっては、武雄市・北方町の各教育委員会、長崎大学医学部解剖学第二教室、並びに地元各位の協力を得た。

4．本書の執筆は下記の分担で行い、編集は徳永 貞紹と百崎 正子が担当した。

第１～８章・第９章（弥生時代・中世）……徳永　貞紹

第４章（遺構のうち土坑）……高瀬　哲郎

第９章（古墳時代）……家田　淳一

5．報告書作成作業は下記の分担で行った。

遺物整理：新井　久美・嬉野みつ代・陣内香代子・瀬山由規子・田中美穂子
土井マサ子・野田美恵子・村瀬　邦子・室岡　勝代・森崎　和子・山口カズヨ

遺物実測：江副　朋子・蒲原　淑子・上瀧　光子・末吉 由紀子・鶴田　啓子・徳永　貞紹
兵動　律子・光石　逸子・村里　育子・吉田　雅子

整　　図：鶴田　啓子・徳永　貞紹・兵動　律子・三好　文子・光石　逸子・村里　育子

遺物写真撮影：黒木　優子・古賀　栄子・高瀬　哲郎・松尾　直子

写真現像焼付：黒木　優子・古賀　栄子

6．測定値の表示に用いた単位は遺構がｍ、遺物が㎝である。

7．本書で用いる方位は国土座標第Ⅱ系の座標北で、磁北はこれより西偏約６°０′である。

8．本書に収録した遺跡は佐賀県教育委員会の遺跡台帳に下記の略号で登録されている。

東宮裾遺跡：ＨＭＳ　小野原遺跡：ＯＮＯ　みやこ遺跡：ＭＹＫ

玉江遺跡：ＴＡＭ　　東福寺遺跡：ＴＦＧ　皿山窯跡：ＳＲＡ

但し、第１章に記した事情により、現地作業及び整理段階での遺物や記録類に用いた略号が上記と異なるものがある（みやこ遺跡Ｂ・Ｃ区：ＯＮＯ－Ｂ・Ｃ、皿山窯跡：ＴＦＧ）。

9．遺構の分類記号は下記のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物　ＳＣ：石棺墓・石蓋土坑墓　ＳＤ：溝・堀・流路　ＳＥ：井戸

ＳＦ：道路状遺構　ＳＨ：竪穴建物　ＳＪ：土器棺墓　ＳＫ：土坑　ＳＰ：土葬墓

ＳＴ：古墳・墳丘墓　ＳＸ：その他

10．出土遺物と遺構実測図や写真などの調査記録及び遺物実測図や遺物写真などの資料は、佐賀県教育委員会で保管しており、各々登録番号を付けて検索が可能なように整理している。

本　文　目　次

第１章　調査の概要 …… 1
　１．調査の経過 …… 2
　２．調査組織 …… 3
　３．遺跡の名称と所在地 …… 5

第２章　遺跡の位置と環境 …… 7
　１．地理的環境 …… 8
　２．歴史的環境 …… 10

第３章　東宮裾遺跡 …… 15
　１．東宮裾遺跡の概要 …… 16
　２．Ⅰ区の遺構と遺物 …… 19
　３．Ⅱ区の遺構と遺物 …… 23
　４．Ⅲ区の遺構と遺物 …… 38
　５．その他の遺物 …… 38
　６．まとめ …… 43

第４章　馬場遺跡 …… 45
　１．馬場遺跡の概要 …… 46
　２．遺構 …… 51
　３．遺物 …… 67
　４．まとめ …… 82

第５章　小野原遺跡Ａ区 …… 83
　１．小野原遺跡Ａ区の概要 …… 84
　２．遺構と遺物 …… 87
　３．まとめ …… 104

第６章　みやこ遺跡Ｂ・Ｃ区 …… 105
　１．みやこ遺跡Ｂ・Ｃ区の概要 …… 106

2．B区の遺構と遺物 ……111
3．C区の遺構と遺物 ……121
4．まとめ ……131

第7章　玉江遺跡1～3区 ……133
1．玉江遺跡の概要 ……134
2．1・2区の遺構と遺物 ……137
3．3区の遺構と遺物 ……143
4．まとめ ……156

第8章　皿山窯跡 ……157
1．皿山窯跡の概要 ……158
2．遺構 ……165
3．遺物 ……167
4．まとめ ……174

第9章　東福寺遺跡 ……175
1．東福寺遺跡の概要 ……176
2．弥生時代の遺構と遺物 ……180
3．中世の遺構と遺物 ……188
4．古墳時代の遺構と遺物 ……192
5．まとめ ……285

挿　図　目　次

遺跡の位置と環境　図１　東福寺遺跡の位置……9
図２　武雄盆地周辺の主な遺跡……11
東宮裾遺跡　図３　東宮裾遺跡周辺の地形……17～18
図４　Ⅰ区の遺構……19
図５　Ⅰ区ＳＫ026・ＳＫ027……20
図６　Ⅰ区ＳＣ024……21
図７　Ⅰ区ＳＣ025……22
図８　Ⅰ区ＳＫ026出土遺物１……24
図９　Ⅰ区ＳＫ026出土遺物２……25
図10　ⅡＡ区の遺構……26
図11　ⅡＡ区ＳＪ001・ＳＨ009……27
図12　ⅡＡ区出土遺物……29
図13　ⅡＢ区の遺構……30
図14　ⅡＢ区ＳＫ014出土遺物……31
図15　ⅡＣ区の遺構……33
図16　ⅡＣ区出土遺物１……35
図17　ⅡＣ区出土遺物２……36
図18　Ⅱ区出土石製遺物……37
図19　Ⅲ区の遺構……39
図20　その他の遺物……40
馬場遺跡　図21　馬場遺跡・小野原遺跡Ａ区周辺の地形……47～48
図22　馬場遺跡の遺構……49～50
図23　ＳＫ003・ＳＫ004・ＳＫ005・ＳＫ007……51
図24　ＳＫ006・016・ＳＫ009・ＳＫ008・ＳＫ010……52
図25　ＳＫ011・ＳＫ012・ＳＫ013・ＳＫ014……53
図26　ＳＫ015・ＳＫ017・ＳＫ018・ＳＫ020……54
図27　ＳＫ019・057・ＳＫ021・ＳＫ022……55
図28　ＳＫ023・ＳＫ026・ＳＫ024・025……56
図29　ＳＫ028・ＳＫ029・ＳＫ030・ＳＫ031……57
図30　ＳＫ032・ＳＫ033・ＳＫ034……58

図31　ＳＫ035・ＳＫ036・ＳＫ037・ＳＫ038……59
図32　ＳＫ039・ＳＫ041・ＳＫ042・ＳＫ043……60
図33　ＳＫ044・ＳＫ045・ＳＫ047・048……61
図34　ＳＫ049・ＳＫ050・ＳＫ051・ＳＫ052……62
図35　ＳＫ053・ＳＫ054・ＳＫ055 ……63
図36　ＳＨ056 ……64
図37　ＳＢ040，ＳＤ001土層……66
図38　馬場遺跡出土遺物１……68
図39　馬場遺跡出土遺物２……69
図40　馬場遺跡出土遺物３……71
図41　馬場遺跡出土遺物４……72
図42　馬場遺跡出土遺物５……74
図43　馬場遺跡出土遺物６……75
図44　馬場遺跡出土遺物７……77
図45　馬場遺跡出土遺物８……78
小野原遺跡Ａ区　図46　小野原遺跡Ａ区の遺構……85～86
図47　ＳＥ005・ＳＥ015，出土遺物……88
図48　ＳＥ020・ＳＫ024，出土遺物……89
図49　ＳＫ024出土遺物２ ……90
図50　ＳＫ041・ＳＫ019・ＳＫ043，出土遺物 ……92
図51　ＳＫ042，出土遺物 ……93
図52　ＳＸ009 ……95
図53　ＳＸ009・ＳＸ033出土遺物……96
図54　ＳＤ007土層・ＳＤ030土層・ＳＤ037土層，出土遺物 ……98
図55　ＳＤ032土層・ＳＤ023土層，出土遺物……99
図56　ＳＤ016土層・ＳＤ001土層，出土遺物 ……101
みやこ遺跡Ｂ・Ｃ区　図57　みやこ遺跡Ｂ・Ｃ区周辺の地形……107～108
図58　みやこ遺跡Ｂ・Ｃ区の遺構……109～110
図59　Ｂ区ＳＤ001出土遺物１……112
図60　Ｂ区ＳＤ001出土遺物２……113
図61　Ｂ区ＳＤ001出土遺物３……114
図62　Ｂ区ＳＤ001出土遺物４……115
図63　Ｂ区ＳＤ001出土遺物５……116

図64　B区ＳＤ001出土遺物６……117
図65　B区ＳＤ001出土遺物７……118
図66　B区ＳＤ001出土遺物８，ＳＤ001横断面……119
図67　B区ＳＫ013，B区出土遺物……120
図68　C区ＳＰ001・ＳＰ002，出土遺物……122
図69　C区ＳＰ003・ＳＰ010，ＳＰ003出土遺物……123
図70　C区ＳＸ004出土遺物……125
図71　C区ＳＸ004・ＳＸ006出土遺物……126
玉江遺跡１～３区　図72　玉江遺跡周辺の地形……135～136
図73　１区の遺構……138
図74　１区ＳＸ001出土遺物１……139
図75　１区ＳＸ001出土遺物２……140
図76　１区ＳＸ002出土遺物……141
図77　１区その他の出土遺物……142
図78　２区の遺構，ＳＢ001……144
図79　３区の遺構……145
図80　３区ＳＢ306，出土遺物……146
図81　３区ＳＢ309，出土遺物，ＳＢ315……147
図82　３区ＳＫ316，出土遺物……148
図83　３区ＳＤ310土層，ＳＤ310出土遺物１……150
図84　３区ＳＤ310出土遺物２……151
図85　３区ＳＰ308，３区上層出土遺物……152
皿山窯跡　図86　皿山窯跡・東福寺遺跡周辺の地形……159～160
図87　皿山窯跡平面……161～162
図88　皿山窯跡断面見透……163～164
図89　皿山窯跡３～５室横断面土層……166
図90　皿山窯跡出土遺物１……168
図91　皿山窯跡出土遺物２……169
図92　皿山窯跡出土遺物３……171
図93　皿山窯跡出土遺物４……172
東福寺遺跡　図94　東福寺遺跡の遺構……177～178
図95　ＳＨ004・ＳＨ009，出土土器……181
図96　ＳＨ005，出土土器……182

図97　ＳＨ006・ＳＨ007 ……183
図98　ＳＨ006・ＳＨ007出土土器 ……184
図99　ＳＨ010，出土土器……186
図100　ＳＸ019，出土遺物１ ……189
図101　ＳＸ019出土遺物２ ……190
図102　ＳＴ001古墳墳丘測量図 ……194
図103　ＳＴ001古墳墳丘土層図 ……195
図104　ＳＴ001古墳石室１ ……196
図105　ＳＴ001古墳石室２ ……197
図106　ＳＴ002古墳墳丘測量図（調査前） ……199
図107　ＳＴ002古墳墳丘測量図（調査後） ……200
図108　ＳＴ002古墳墳丘土層図 ……201
図109　ＳＴ002古墳石室閉塞状況 ……202
図110　ＳＴ002古墳石室 ……203
図111　ＳＴ002古墳玄室遺物出土状況 ……204
図112　ＳＴ003古墳墳丘測量図（調査前） ……206
図113　ＳＴ003古墳墳丘測量図（調査後） ……207
図114　ＳＴ003古墳墳丘遺物出土状況 ……207
図115　ＳＴ003古墳周溝遺物出土状況 ……208
図116　ＳＴ003古墳墳丘土層図 ……208
図117　ＳＴ003古墳石室閉塞状況 ……209
図118　ＳＴ003古墳石室 ……210
図119　ＳＴ003古墳玄室遺物出土状況 ……211
図120　ＳＴ013古墳墳丘測量図および周溝遺物出土状況 ……213
図121　ＳＴ013古墳石室 ……214
図122　ＳＴ013古墳玄室遺物出土状況 ……215
図123　ＳＴ014古墳墳丘測量図１ ……216
図124　ＳＴ014古墳墳丘測量図２ ……217
図125　ＳＴ014古墳墳丘土層図 ……218
図126　ＳＴ014古墳石室 ……219
図127　ＳＴ014古墳玄室遺物出土状況 ……220
図128　ＳＴ014古墳墓道前遺物出土状況 ……221
図129　ＳＴ014古墳石室線刻文様 ……222

図130　ＳＴ015・018古墳墳丘測量図……223
図131　ＳＴ015古墳周溝土層図 ……224
図132　ＳＴ015古墳北側主体１ ……225
図133　ＳＴ015古墳北側主体２ ……226
図134　ＳＴ015古墳南側主体 ……227
図135　ＳＴ015古墳周溝遺物出土状況 ……227
図136　ＳＴ017古墳石室 ……228
図137　ＳＴ018古墳石室 ……230
図138　ＳＣ016石棺墓 ……232
図139　ＳＴ001古墳出土遺物 ……235
図140　ＳＴ002古墳出土遺物 ……236
図141　ＳＴ002古墳出土鉄器 ……237
図142　ＳＴ002古墳出土耳環 ……239
図143　ＳＴ002古墳出土玉類 ……240
図144　ＳＴ003古墳出土土器１ ……242
図145　ＳＴ003古墳出土土器２ ……243
図146　ＳＴ003古墳出土鉄刀 ……245
図147　ＳＴ003古墳出土鉄鏃 ……246
図148　ＳＴ003古墳出土工具・武器付属金具・馬具 ……247
図149　ＳＴ003古墳出土玉類・耳環 ……248
図150　ＳＴ013古墳出土土器 ……249
図151　ＳＴ013古墳出土鉄器 ……250
図152　ＳＴ013古墳出土玉類 ……251
図153　ＳＴ014古墳出土土器１ ……254
図154　ＳＴ014古墳出土土器２ ……255
図155　ＳＴ014古墳出土土器３ ……256
図156　ＳＴ014古墳出土土器４ ……257
図157　ＳＴ014古墳出土土器５ ……258
図158　ＳＴ014古墳出土土器６ ……259
図159　ＳＴ014古墳出土土器７ ……260
図160　ＳＴ014古墳出土土器８ ……261
図161　ＳＴ014古墳出土馬具１ ……269
図162　ＳＴ014古墳出土馬具２ ……270

図163　ＳＴ014古墳出土鉄鏃１ ……271
図164　ＳＴ014古墳出土鉄鏃２ ……272
図165　ＳＴ014古墳出土鉄鏃３ ……273
図166　ＳＴ014古墳出土農工具 ……275
図167　ＳＴ014古墳出土銅釧・耳環 ……277
図168　ＳＴ014古墳出土玉類１ ……279
図169　ＳＴ014古墳出土玉類２ ……280
図170　ＳＴ015古墳出土遺物 ……282
図171　ＳＴ018古墳出土玉類 ……284
図172　東福寺古墳群古墳分布図……287
図173　各古墳の造営時期……289

写真図版目次

東宮裾遺跡

写真図版１　Ｉ区全景（南東から）　Ｉ区ＳＫ026・ＳＫ027（東から）
写真図版２　Ｉ区ＳＣ024（北から）
写真図版３　Ｉ区ＳＣ025（東から）
写真図版４　ⅡＡ区全景（東から）　ⅡＢ区全景（北から）
写真図版５　ⅡＡ区ＳＨ009（西から）　ⅡＡ区ＳＪ001（東から）
写真図版６　ⅡＢ区ＳＫ014（西から）　Ⅲ区全景（東から）
写真図版７　Ｉ区ＳＫ026出土土器　ⅡＢ区ＳＫ014出土土器

馬場遺跡

写真図版８　馬場遺跡全景（北東上空から）
写真図版９　馬場遺跡調査区全景（南東から）　ＳＨ056（北から）
ＳＢ040（北から）
写真図版10　ＳＫ003（東から）　ＳＫ004・ＳＫ005（東から）
ＳＫ006・ＳＫ016（東から）　ＳＫ007（北から）
ＳＫ008（西から）　ＳＫ009（南から）
ＳＫ010（西から）　ＳＫ010土層堆積状況（南から）
写真図版11　ＳＫ011（南から）　ＳＫ012（北から）
ＳＫ013（北から）　ＳＫ014（西から）
ＳＫ015（北から）　ＳＫ017（西から）
ＳＫ018（東から）　ＳＫ019（東から）

写真図版12　ＳＫ020（北から）　ＳＫ021（北から）
ＳＫ022（東から）　ＳＫ023（東から）
ＳＫ024・ＳＫ025（東から）　ＳＫ028（南から）
ＳＫ026（北から）　ＳＫ026土層堆積状況（西から）
写真図版13　ＳＫ029（東から）　ＳＫ030（東から）
ＳＫ031（西から）　ＳＫ035（東から）
ＳＫ036（西から）　ＳＫ037（西から）
ＳＫ038（西から）　ＳＫ039（東から）
写真図版14　ＳＫ041（北から）　ＳＫ045（北から）
ＳＫ047・ＳＫ048（西から）　ＳＫ049（南から）
ＳＫ051（西から）　ＳＫ052（北から）
ＳＫ053（北から）　ＳＫ054（西から）
写真図版15　土坑出土土器　土坑その他出土石器
写真図版16　ＳＤ001下部出土土器　ＳＤ001上部出土土器
ＳＤ001出土石器
小野原遺跡Ａ区　写真図版17　小野原遺跡Ａ区全景（北東上空から）
小野原遺跡Ａ区全景（南東上空から）
ＳＸ009・ＳＤ007・ＳＤ030（北上空から）
写真図版18　ＳＥ005（北から）　ＳＥ015（西から）　ＳＥ020（西から）
写真図版19　ＳＫ013（東から）　ＳＫ018（東から）　ＳＫ024（東から）
ＳＫ042（南から）　ＳＫ043（西から）　ＳＤ032（北から）
写真図版20　ＳＸ009　ＳＸ009遺物出土状況　ＳＸ033（西から）
写真図版21　ＳＥ015出土瓦器椀　ＳＫ024出土古瀬戸卸皿
ＳＤ016出土遺物　ＳＤ032出土遺物
ＳＸ009出土遺物
みやこ遺跡Ｂ・Ｃ区　写真図版22　Ｂ区全景（北から）　Ｂ区ＳＤ001（南西から）
Ｂ区西側の遺構（北から）
写真図版23　Ｃ区全景（北から）　Ｃ区ＳＰ001・ＳＰ002（西から）
Ｃ区ＳＰ001土層（北から）　Ｃ区ＳＰ003（南から）
Ｃ区ＳＰ003遺物出土状況
写真図版24　Ｃ区ＳＰ010（西から）　Ｃ区ＳＸ004（西から）
Ｃ区ＳＸ006（北から）
写真図版25　Ｂ区ＳＤ001出土土師器小皿　Ｂ区ＳＤ001出土土師器杯

B区ＳＤ001出土瓦器椀
写真図版26　B区ＳＤ001出土白磁椀
写真図版27　B区ＳＤ001出土白磁椀　B区ＳＤ001出土白磁皿
写真図版28　B区ＳＤ001出土青磁椀・皿
B区ＳＤ001出土陶器・須恵器
写真図版29　B区ＳＤ001出土石鍋　B区ＳＤ001出土鞴羽口
写真図版30　C区ＳＰ001・ＳＰ002出土遺物
C区ＳＰ001出土白磁杯　C区ＳＰ001出土銅製容器
C区ＳＰ003出土遺物
玉江遺跡　写真図版31　玉江遺跡全景（南東上空から）
玉江遺跡全景（西上空から）
写真図版32　1区全景（南東から）　1区全景（西から）
写真図版33　1区全景（北から）　1区ＳＸ001・ＳＸ002（南から）
写真図版34　2区全景（西から）　2区ＳＢ001（西から）
写真図版35　3区全景（北西上空から）　3区全景（南西上空から）
写真図版36　3区全景（北西上空から）　3区南側（北西上空から）
写真図版37　3区ＳＢ306検出状況（南西から）　3区ＳＢ306Ｐ－2
3区ＳＢ306Ｐ－3　3区ＳＢ306Ｐ－7
3区ＳＢ306（南上空から）
写真図版38　3区ＳＢ309（西から）　3区ＳＢ315（西から）
写真図版39　3区ＳＤ310（南東から）　3区ＳＫ316（東から）
3区ＳＰ308（西から）
写真図版40　1区出土中国磁器　1区出土朝鮮王朝陶磁器・国産陶器
1区出土石鍋
写真図版41　3区ＳＤ310出土遺物　3区ＳＫ316出土鞴羽口
皿山窯跡　写真図版42　皿山窯跡全景（西から）
写真図版43　皿山窯跡窯体（西から）
皿山窯跡下半部　皿山窯跡上半部
写真図版44　5室南側部分　皿山窯跡出土窯道具
窯道具の使用状況を示す遺物
型紙摺と銅版摺の同時焼成を示す遺物
写真図版45　皿山窯跡出土染付椀
写真図版46　皿山窯跡出土染付鉢・皿

写真図版47　皿山窯跡出土染付皿
写真図版48　皿山窯跡出土染付皿
東福寺遺跡　写真図版49　東福寺遺跡・皿山窯跡全景（西上空から）
写真図版50　ＳＨ004・ＳＨ009（西から）　ＳＨ005（西から）
写真図版51　ＳＨ006・ＳＨ007（西から）　ＳＨ010（西から）
写真図版52　ＳＨ006・ＳＨ007出土土器　ＳＨ010出土土器
写真図版53　ＳＸ019（羨道部側から）　ＳＸ019（北から）
写真図版54　ＳＸ019西側　ＳＸ019東側
写真図版55　ＳＸ019南側遺物出土状況　ＳＸ019人骨遺存状況
写真図版56　ＳＸ019出土土器・磁器　ＳＸ019出土白磁椀
ＳＸ019出土瓦器椀
写真図版57　ＳＸ019出土土師器杯・小皿
写真図版58　ＳＴ001古墳　検出状況（北西から）　全景（南西から）
写真図版59　ＳＴ001古墳　石室全景（南西墓道側から・南東から）
右壁（北西から）　左壁（南東から）
奥壁（南西から）　石室二次床面（南西から）
石室一次床面（南西から）
写真図版60　ＳＴ002古墳　調査前検出状況（南から）
ＳＴ002・013古墳全景（下が西）
写真図版61　ＳＴ002古墳　石室全景（下が南）　閉塞（西から）
玄室右壁（北から）
玄室および閉塞状況（東から）
写真図版62　ＳＴ002古墳　完掘後全景（西から）
完掘後石室（下が南）
写真図版63　ＳＴ003古墳　全景（南から・下が南）
写真図版64　ＳＴ003古墳　墳丘（北から）　墳丘および羨道（南から）
玄室内遺物出土状況（奥側から）
玄室完掘後（奥側から）
羨道左壁（東から）　玄室左壁（東から）
玄室右壁（西から）　羨道右壁（西から）
写真図版65　ＳＴ013古墳　全景（下が西）　石室全景（西から）
写真図版66　ＳＴ014古墳　調査前墳丘（南から・下が南）
表土除去後墳丘（南から・下が南・北から・西から）

写真図版67　ＳＴ014古墳　玄室床面（羨道から）
玄室内遺物出土状況（西から）
石室全景（前庭から）
玄室奥壁（玄門部から）
玄室左壁（東から）　玄室右壁（西から）
羨道左壁（東から）
羨道右壁線刻文様（西から）
写真図版68　ＳＴ014古墳　線刻文様（左玄門立石）
写真図版69　ＳＴ015古墳　全景（下が東）　北側主体（東から）
北側主体棺内遺物出土状況（南から）
南側主体（東から）
南・北主体完掘状況（東から）
写真図版70　ＳＴ017古墳　石室（南東から）
ＳＴ018古墳石室（西から・南から）
写真図版71　ＳＣ016石棺墓　蓋石検出状況（南から）
蓋石撤去後（南から）
写真図版72　ＳＣ016石棺墓　人骨出土状況（南から）
鉄器出土状況（頭位側）
完掘状況（南から）
写真図版73　ＳＴ001古墳出土鉄器　ＳＴ002古墳出土土器
ＳＴ002古墳出土土製品
写真図版74　ＳＴ002古墳出土鉄刀　ＳＴ002古墳出土鉄鏃
写真図版75　ＳＴ002古墳出土耳環　ＳＴ002古墳出土玉類
写真図版76　ＳＴ003古墳出土土器１
写真図版77　ＳＴ003古墳出土土器２
写真図版78　ＳＴ003古墳出土鉄刀　ＳＴ003古墳出土鉄鏃
写真図版79　ＳＴ003古墳出土鉄器　ＳＴ003古墳出土玉類
ＳＴ013古墳出土土器
写真図版80　ＳＴ013古墳出土鉄器　ＳＴ013古墳出土玉類
写真図版81　ＳＴ014古墳出土土器１
写真図版82　ＳＴ014古墳出土土器２
写真図版83　ＳＴ014古墳出土土器３
写真図版84　ＳＴ014古墳出土馬具

写真図版85　ＳＴ014古墳出土鉄鏃１
写真図版86　ＳＴ014古墳出土鉄鏃２　ＳＴ014古墳出土鉄鏃３
写真図版87　ＳＴ014古墳出土武器付属金具　ＳＴ014古墳出土農工具
写真図版88　ＳＴ014古墳出土銅釧　ＳＴ014古墳出土耳環・その他
写真図版89　ＳＴ014古墳出土玉類１　ＳＴ014古墳出土玉類２
写真図版90　ＳＴ015古墳出土土器　ＳＴ015古墳出土鉄鏃・鉄鎌
　　ＳＴ015古墳出土鉄剣

原色写真図版目次（巻頭）

原色写真図版１　東福寺ＳＴ014古墳出土馬具
原色写真図版２　東福寺ＳＴ014古墳出土銅釧・玉類

表　目　次

表１　東宮裾遺跡出土遺物一覧……41
表２　馬場遺跡出土遺物一覧……79
表３　小野原遺跡Ａ区出土遺物一覧……102
表４　みやこ遺跡Ｂ・Ｃ区出土遺物一覧……128
表５　玉江遺跡出土遺物一覧……154
表６　皿山窯跡出土遺物一覧……173
表７　東福寺遺跡遺構一覧……179
表８　東福寺遺跡弥生時代遺物一覧……187
表９　東福寺遺跡ＳＸ019出土遺物一覧……191
表10　古墳一覧表……192
表11　須恵器坏蓋型式の編年対照表……234
表12　ＳＴ001古墳出土鉄鏃観察表……235
表13　ＳＴ001古墳出土鉄器観察表……235
表14　ＳＴ002古墳出土土器観察表……238
表15　ＳＴ002古墳出土土製品観察表……238
表16　ＳＴ002古墳出土鉄刀観察表……238

表17　ＳＴ002古墳出土鉄鏃観察表……238
表18　ＳＴ002古墳出土耳環観察表……239
表19　ＳＴ002古墳出土玉類観察表……240
表20　ＳＴ003古墳出土土器観察表１……241
表21　ＳＴ003古墳出土土器観察表２……242
表22　ＳＴ003古墳出土土器観察表３……243
表23　ＳＴ003古墳出土鉄刀観察表……246
表24　ＳＴ003古墳出土鉄鏃観察表……247
表25　ＳＴ003古墳出土工具・武器付属金具・馬具観察表……247
表26　ＳＴ003古墳出土玉類観察表……248
表27　ＳＴ003古墳出土耳環観察表……248
表28　ＳＴ013古墳出土土器観察表……250
表29　ＳＴ013古墳出土鉄鏃観察表……250
表30　ＳＴ013古墳出土鉄器観察表……250
表31　ＳＴ013古墳出土玉類観察表……252
表32　ＳＴ014古墳出土土器観察表１……257
表33　ＳＴ014古墳出土土器観察表２……262
表34　ＳＴ014古墳出土馬具観察表……270
表35　ＳＴ014古墳出土鉄鏃観察表……274
表36　ＳＴ014古墳出土武器付属金具観察表……276
表37　ＳＴ014古墳出土農工具観察表……276
表38　ＳＴ014古墳出土銅釧観察表……277
表39　ＳＴ014古墳出土耳環観察表……278
表40　ＳＴ014古墳出土不明金銅製品観察表……278
表41　ＳＴ014古墳出土玉類観察表……281
表42　ＳＴ015古墳出土土器観察表……283
表43　ＳＴ015古墳出土鉄剣観察表……283
表44　ＳＴ015古墳出土農工具観察表……283
表45　ＳＴ018古墳出土玉類観察表……284
表46　東福寺古墳群新旧古墳対照表 ……289

第１章　調査の概要

第1章　調査の概要

1．調査の経過

九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査は、佐賀県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託により、昭和44（1969）年6月から路線予定地域全域を対象として行った遺跡分布調査に始まる。その後、昭和48（1973）年9月の日本道路公団による路線発表を受けて更に詳細な分布調査を実施し、昭和51（1976）年12月に一応の事前調査を終了した。その結果、本格的な発掘調査の対象は路線延長約91.9kmにおいて遺跡総数209箇所・総面積135万m²に達した。

発掘調査は昭和52（1977）年に開始され、建設工事計画に合わせて、まず鳥栖－佐賀大和間、次いで佐賀大和－武雄北方間、武雄北方－嬉野間、佐賀大和ＩＣと続き、発掘調査開始から第13年次にあたる平成元（1989）年の鳥栖ＩＣを最終地点として、県内全線の供用開始に関わる発掘調査を終えている。各年度における発掘調査の経過と概要は、『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』１～12に記されているのでそれに譲る。

昭和54（1979）年度以来、報告書の刊行を続けており、平成４（1992）年度までに下記の計16集の作成を終了しているが、本書以降の４冊を加えた全20集の刊行によって、本事業を終了する予定である。

第１集	大門西遺跡	大門西遺跡　六本黒木遺跡　藤附Ｂ遺跡　藤附Ｃ遺跡 藤附Ｅ遺跡　藤附Ｆ遺跡　綾部八本松遺跡
第２集	香田遺跡	香田遺跡　獅々喰遺跡　白虎谷遺跡　寺ケ里遺跡 戦場遺跡　藤附Ａ遺跡　藤附Ｋ遺跡　藤附Ｅ遺跡 三郎山遺跡　長尾遺跡
第３集	西原遺跡	西原遺跡　浦田遺跡　西一本杉遺跡　上三津栗原遺跡 山古賀遺跡
第４集	金立開拓遺跡	金立開拓遺跡
第５集	久保泉丸山遺跡	久保泉丸山遺跡
第６集	下石動遺跡	下石動遺跡　堤一本黒木遺跡　谷渡古墳群　一本桜古墳群
第７集	撰分遺跡	山の上古墳群　中村谷遺跡　出口Ａ遺跡　西出口遺跡 鴻ノ巣遺跡　原田遺跡　今出川Ａ遺跡　今出川Ｂ遺跡 大工田古墳群　十井手遺跡　撰分遺跡
第８集	長尾開拓遺跡	山王遺跡　長尾開拓遺跡
第９集	礫石遺跡	礫石Ａ遺跡　礫石Ｂ遺跡　久池井Ｃ遺跡 久池井一本松遺跡
第10集	老松山遺跡	織島東分上遺跡　老松山遺跡　織島西分古墳群　滝Ｃ遺跡

		滝A遺跡　寺浦遺跡　寺浦瓦窯跡　寺浦前方後円墳
		畑田三本松遺跡　寄居遺跡　一本松古墳群
第11集	惣座遺跡	惣座遺跡　久池井B遺跡　春日遺跡
第12集	西石動遺跡	西石動遺跡　石動二本松遺跡　山古賀遺跡
第13集	志波屋六本松乙遺跡	志波屋六本松乙遺跡　的遺跡　上志波屋遺跡
第14集	都谷遺跡	都谷遺跡　宮西遺跡　山浦西北方遺跡　山浦新田遺跡
		荻野遺跡　日岸田遺跡　東田遺跡　本川原遺跡
第15集	朝日北遺跡	朝日北遺跡　朝日遺跡　城山遺跡　大門西遺跡H地区
第16集	切畑遺跡	鈴熊遺跡　猿嶽A遺跡　猿嶽C・D遺跡　切畑遺跡

今回の第17集で報告するのは、杵島郡北方町所在の東宮裾遺跡と武雄市所在の馬場遺跡・小野原遺跡A区・みやこ遺跡B・C区（小野原遺跡B・C区）・玉江遺跡1～3区・皿山窯跡・東福寺遺跡の計7遺跡である。

これにより、九州横断自動車道関係で未報告の遺跡は、東から順に三養基郡基山町三川下遺跡、鳥栖市畑ケ田遺跡・七浦遺跡・山都町遺跡・山田遺跡、三養基郡中原町香田遺跡2次・綾部城跡、佐賀郡大和町東山田一本杉遺跡・西山田二本松遺跡・西山田三本松遺跡・今山八幡原遺跡・大久保三本松遺跡、武雄市甕屋窯跡、藤津郡嬉野町内野山北窯跡、となる。

2．調査組織

東宮裾遺跡・馬場遺跡・小野原遺跡・みやこ遺跡・玉江遺跡・皿山窯跡・東福寺遺跡の発掘調査は、いずれも佐賀県教育委員会の直営事業として実施した。その発掘調査及び整理・報告に関わる組織は、下記のとおりである。

発掘調査（昭和58・59・61～63年度）

総括	教育長	古藤　浩（58年度）・志岐　常文（59～63年度）
	教育次長	大塚　正道（58年度）・高橋　一之（58・59年度）
		釈　憲正（59年度）・古賀　信夫（61年度）
		堤　清行（61・62年度）・野角　計宏（61・62年度）
		水野　豊（63年度）・久間　三郎（63年度）
	文化課長	中島　信行（58年度）・北村　一義（59～62年度）
		武藤佐久二（63年度）
	参事	尾形　善郎（62年度）・高島　忠平（63年度）
	課長補佐	山田　陸三（58年度）・高島　忠平（58・59年度）
		尾形　善郎（61年度）・宮原　義幸（61年度）
		大坪　英樹（62～63年度）

発掘調査総括	参　　事	尾形　善郎（62年度）・高島　忠平（63年度）
	課長補佐	高島　忠平（58・59年度）・尾形　善郎（61年度）
	調査第1係長	中牟田賢治（58～63年度）
＜東宮裾遺跡＞		
	文化財保護主事	田平　徳栄（58・59年度）
	指導主事	副島　正道（59年度）
＜小野原遺跡A区＞		
	指導主事	副島　正道（61年度）
	嘱　　託	家田　淳一（61年度）
＜みやこ遺跡B・C区（小野原遺跡B・C区）＞		
	主　　査	松尾　吉高（62年度）
	指導主事	副島　正道（62年度）
	文化財保護主事	家田　淳一（62年度）
＜玉江遺跡・馬場遺跡＞		
	指導主事	副島　正道（62年度）
	嘱　　託	木島　慎治（62年度）
＜東福寺遺跡・皿山窯跡＞		
	主　　査	松尾　吉高（62～63年度）
	文化財保護主事	家田　淳一（62年度）
	嘱　　託	中島恒次郎（63年度）
庶　務	庶務係長	中野　安正（58年度）・菊池　文夫（59～62年度）
		稲富　安徳（63年度）
	主　　査	山下　行夫（58～61年度）
	主　　事	山口　　勝（58年度）・井原　裕子（58・59年度）
		東　　英明（58・59年度）・鶴田　明美（61～63年度）
		西岡　真一（61～62年度）・直塚　清純（62～63年度）
		本山　恵悟（63年度）

整理・報告（平成5年度）

総　括	教育長	堤　清行
	教育次長	深川　弘一・土居　正
	文化財課長	高島　忠平
	課長補佐	中牟田賢治・瀬戸　明廣

	調査係長	高瀬　哲郎
整　理	文化財保護主事	徳永　貞紹・武谷　和彦
	嘱　託	百崎　正子
報　告	調査係長	高瀬　哲郎（馬場遺跡）
	文化財保護主事	家田　淳一（東福寺遺跡）
		徳永　貞紹（東宮裾遺跡・馬場遺跡・玉江遺跡 小野原遺跡・みやこ遺跡 皿山窯跡・東福寺遺跡）
庶　務	文化課庶務企画係長	永松　和久
	主　査	濱野　清子・鷲崎　義彦
	主　事	池田　学
	嘱　託	瀬戸喜久子

3．遺跡の名称と所在地

本書で報告する遺跡の名称と所在地は下記のとおりである。

東宮裾遺跡	略号HMS	佐賀県杵島郡北方町大字大崎字柳町 九反坪・梅ノ尾・今山
馬場遺跡	略号BAB	佐賀県武雄市橘町大字片白字馬場
小野原遺跡A区	略号ONO－A	佐賀県武雄市橘町大字大日字小ノ原
みやこ遺跡B・C区	略号ONO－B・C	佐賀県武雄市橘町大字大日字郷ノ木
玉江遺跡1・2区	略号TAM－Ⅰ・Ⅱ	佐賀県武雄市武雄町大字永島字溝ノ上
玉江遺跡3区	略号TAM－Ⅲ	佐賀県武雄市橘町大字永島字北上野
皿山窯跡	略号SRA	佐賀県武雄市橘町大字片白字片白
東福寺遺跡	略号TFG	佐賀県武雄市橘町大字片白字片白

今回の報告にあたって、調査時の遺跡名や地区名を変更した部分があるので、変更内容とその理由を述べておく。

先ず、小野原遺跡A区であるが、発掘調査時には「小野原遺跡A（略号：ONO－A）」とされている。『佐賀県遺跡地図（杵西地区）』では小野原遺跡よりも、むしろ馬場遺跡に近接した地区で、武雄市教育委員会が圃場整備事業に伴い調査した小野原遺跡とは離れた位置にあるが、馬場遺跡とは東川によって画され遺構・遺物の内容や時期も全く異なっているため、調査時の遺跡名を踏襲して小野原遺跡A区とする。

次に、みやこ遺跡B・C区であるが、両地区は調査時には「小野原遺跡B・C（ONO－B・C）」とされていた。ところが、位置図をみれば小野原遺跡A区とはかけ離れた場所にあること

が一目瞭然である。隣接する地区は武雄市教育委員会が六角川河川改修事業に伴い調査を行っており、これと対照すると「小野原遺跡B」は茂手遺跡Ⅰ・Ⅱ区の東側に、「小野原遺跡C」はみやこ遺跡Ⅵ区の西側にあたり、遺跡の時期や内容も一連のものとして理解できる。また、『佐賀県遺跡地図（杵西地区）』では、ほぼ「みやこ遺跡」の範囲に相当する。従ってこの両地区を「小野原遺跡」の一部として報告するのは明らかに問題があり、遺跡の実態からも遺跡地図の標記からも「みやこ遺跡」とした方が矛盾を生じない。武雄市教育委員会による「みやこ遺跡」の調査は六角川河川改修関係がⅠ～Ⅻ区と命名され、圃場整備事業関係は計画水路の名称を援用した地区名が付けられている。これとの区別のために調査時の標記である「B・C」を生かして、「小野原遺跡B・C」を各々みやこ遺跡B区・C区として報告する。

次に、玉江遺跡については「玉江遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区」として調査されているが、このうち「玉江遺跡Ⅰ・Ⅱ区」については、『佐賀県遺跡地図（杵西地区）』の玉江遺跡とは六角川を挟んで相対する位置にあり、従来の玉江遺跡が橘町の範囲にあたるのに対して武雄町に含まれている。従って、「玉江遺跡Ⅰ・Ⅱ区」については本来であれば玉江遺跡とは別の遺跡として認識すべきものである。「玉江遺跡Ⅲ区」の隣接地区は武雄市教育委員会により六角川河川改修事業と圃場整備事業に伴って発掘調査が行われており、六角川河川改修事業関係は玉江遺跡Ⅰ～Ⅲ区、圃場整備事業関係は玉江遺跡４～７区として報告されている。向後の混乱を避けるためには、少なくとも武雄市教育委員会の調査区とは区別する必要があり、「玉江遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区」をそれぞれ玉江遺跡１・２・３区として報告する。

東福寺遺跡は、『佐賀県遺跡地図（杵西地区）』では「東福寺古墳群」として周知されており、調査時や概報段階でも「東福寺古墳群」と呼称されているが、弥生時代中期の集落遺構等が重複することから、本書では全体を東福寺遺跡とし、古墳群に限った名称として東福寺古墳群と呼ぶことにする。また、皿山窯跡については、東福寺古墳群の範囲にある周知の窯跡であり、調査段階の記録類は東福寺古墳群の略号ＴＦＧで注記されているが、整理報告段階の記録類は皿山窯跡の略号ＳＲＡで注記されている。

いずれにしても、調査担当者の異動等により現場をよく知らない者が整理報告を担当することになった結果、かなりの混乱が生じている。ここで報告する内容について調査担当者の意図と反する部分があれば整理担当者の責任であることは言うまでもないが、実際の遺跡を見たこともない整理担当者にとっては、限られた記録類と調査担当者への聞き取りから調査成果を復元・推測しなければならないのが現実である。このような事情により、調査担当者による所見が本来は優先されるべきにもかかわらず、概報段階での記述と異なる部分については、本書をもって最終的な見解とせざるをえない。

第２章　遺跡の位置と環境

第２章　遺跡の位置と環境

１．地理的環境

今回報告の遺跡が所在する武雄市及び杵島郡北方町は佐賀県の西部に位置し、東は多久市・杵島郡大町町・白石町と、西は杵島郡山内町・長崎県波佐見町と、南は藤津郡塩田町・嬉野町と、北は伊万里市・東松浦郡相知町と、各々接している。

武雄市は、仮に市庁舎を中心とすると東経130°1′18″、北緯33°11′24″に位置し、市域は東西9.0km、南北17.1km、面積127.28㎢で、平成２年度の国勢調査によれば、人口34,490人、世帯数9,640戸の地方都市である。気候は1992年の観測で、平均気温15.5°C、最高気温33.3°C、最低気温－4.0°C、年間降水量1,791.5mmと温暖湿潤である。

武雄市の地勢は松浦・杵島丘陵地によって規制され、北側の真手野盆地（武内町）と川古盆地（若木町）、中央部の武雄盆地（武雄町・橘町・朝日町）、南西部の川登盆地（東川登町・西川登町）に大きく区分できる。東福寺遺跡が位置する武雄盆地は、広義の佐賀平野の西端部にあたる白石平野とは六角川を介して繋がりながらも、南北に延びる杵島山山地によって遮られて独立した世界を形成している。

武雄盆地周辺の地形は、東側の杵島山山地（鳴瀬山：206.1m，勇猛山：258.1m，犬山岳：342.0m，飯盛山：317.8m，白岩山：340.3m）、北東側の徳連岳・鬼ノ鼻山山地（徳連岳：標高443.6m）、北西側の赤穂山山地（蓬莱山：329.9m）、西側の御船山山地（御船山：207.4m）、南側の虚空蔵山山地（虚空蔵山：287.9m）が屏風のように連なり、朝日丘陵（猪熊山：130.7m）、花島丘陵、おつぼ山丘陵が盆地側に張り出して地形に強弱をつけている。段丘の発達は顕著でなく、扇状地も小規模なものが盆地周縁に点在する程度である。盆地中央部の六角川流域は有明海沿岸低地に連なる沖積低地で、盆地を囲む山地や丘陵地を小河川が開析した谷底平野が放射状に延びている。

武雄盆地を流れる河川はいずれも六角川水系で、本流である潮見川は、市内の西川登町と杵島郡山内町・長崎県波佐見町の境にあたる神六山（446.9m）に発して川登盆地を縫うように北東に流れた後、武雄町永島と橘町永島とが接する辺りの地峡を通り抜けて潮見山を巻き込むように方向を変え、更に北流して橘町二俣で武雄川と合流し六角川となる。六角川はここから北方町の地峡部を横断するように東流し、白石平野に出て大きく蛇行しつつ有明海に注ぐ。

この地域の表層地質は、成因や構造の異なる山地の状況を反映してやや複雑である。山地・丘陵地は古第三紀統の固結堆積物と新第三紀統～更新統の火山性岩石、低地は完新統の未固結堆積物が主体である。したがって土壌の母材も様々であるが、主として山地・丘陵地は褐色森林土壌、低地は灰色低地土壌・細粒グライ土壌等が分布する。

植生は、植林が進み自然植生があまり見られないが、潜在自然植生は照葉樹林（暖温帯常緑

広葉樹林）と考えてよいだろう。杵島山山地の反対側になるが、杵島郡有明町稲佐神社のシイ林がその例として挙げられる[61]。

動物相は、大型獣ではキツネ、タヌキ、アナグマの３種が確認されているが、県内の他地域に生息するニホンザル、イノシシ、ニホンジカは早くに絶滅している[2]。

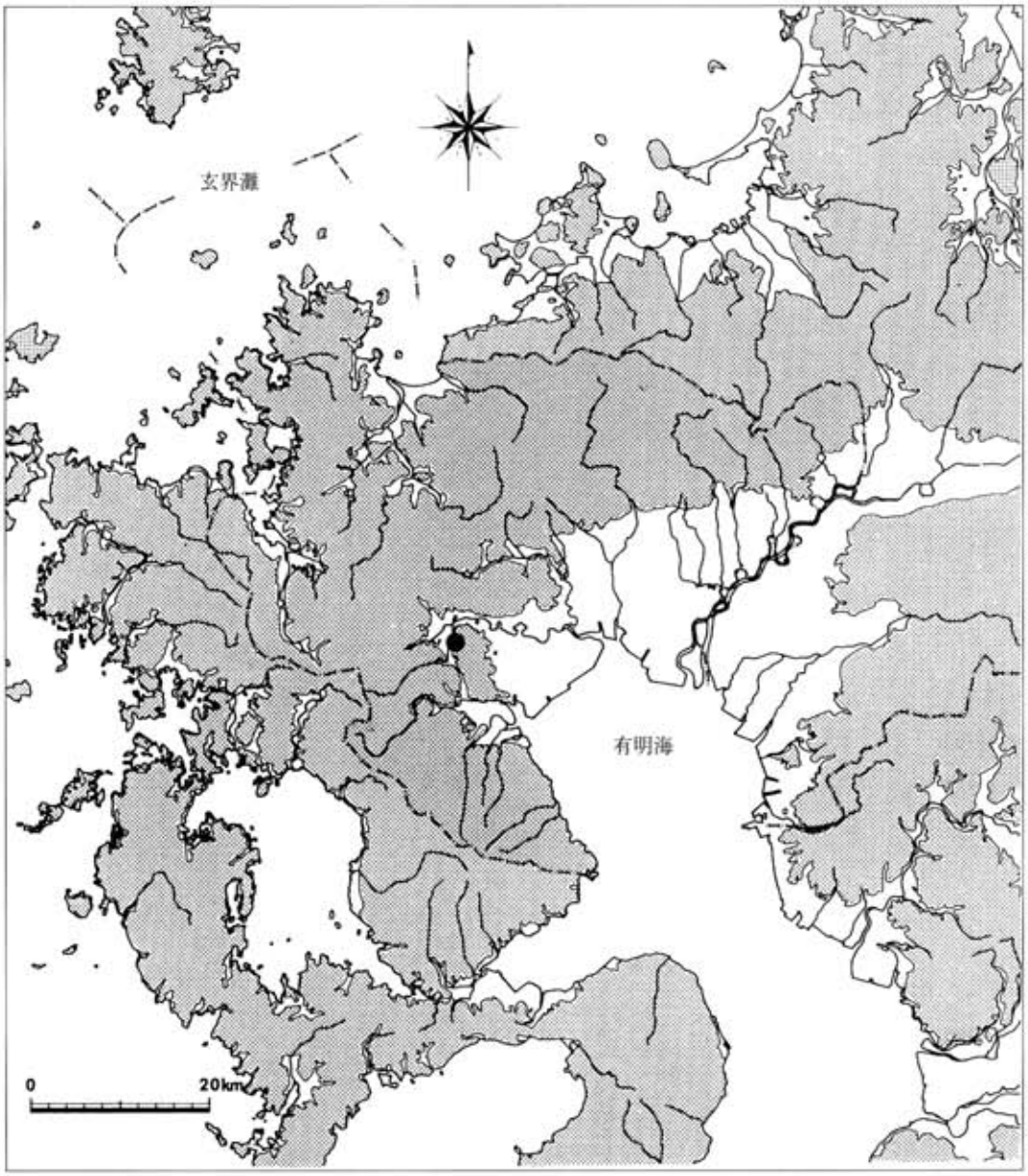


図１　東福寺遺跡の位置（１：800,000）

2．歴史的環境

武雄盆地周辺の歴史的環境全般については『武雄市史』[55]や『北方町史』[6・7]に詳しいので、これを参照していただくとして、ここでは近年の遺跡調査によって急速に充実してきた考古学的な所見を中心に概述する。

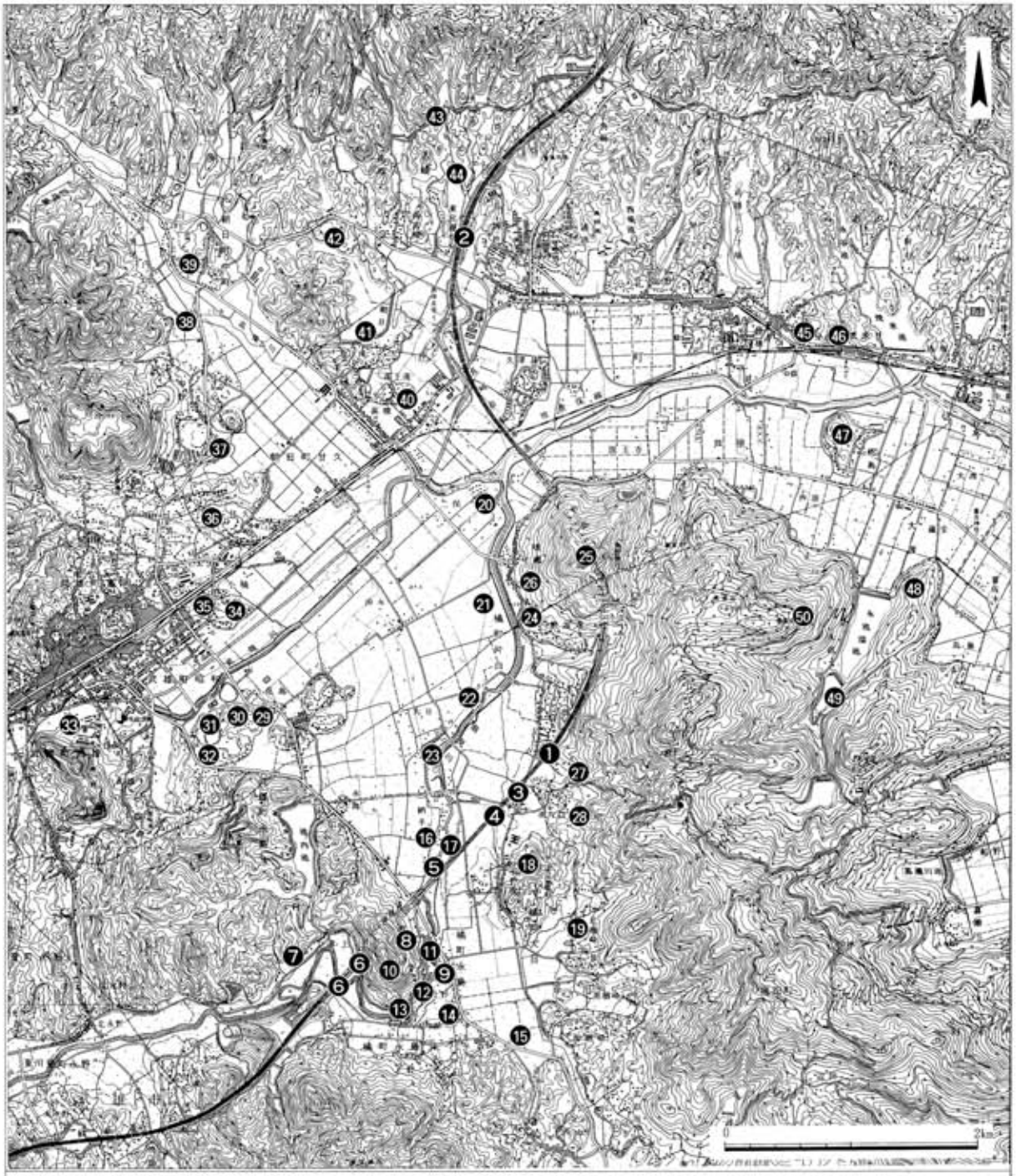
旧石器(岩宿)時代では、遺構や遺物包含層の調査例は今のところなく、橘町おつぼ山遺跡[16]・草場遺跡[11]等でナイフ形石器が確認されている程度である。縄文時代の遺物は各時期に及び、朝日町馬ノ谷遺跡[55]で曽畑式土器、おつぼ山遺跡[16]で阿高式土器、橘町郷ノ木遺跡[41]で晩期の浅鉢が確認されているが、遺構を伴うものはなく量的にも多くない。

弥生時代開始期の刻目突帯文土器期から前期の遺跡では、武雄町小楠遺跡[51]の調査成果が特筆される。ここでは刻目突帯文土器期から前期中葉までの遺物を包含するV字溝が検出されており、地形に合わせて復元すると長径約170m、短径約140mの卵形に巡るものと推定され、内部施設は不明ながら集落を囲う環濠である可能性が強い。この他、集落遺跡としては、橘町馬場遺跡・潮見遺跡[41]・みやこ遺跡[41]・市場遺跡[41]・郷ノ木遺跡[41]が調査されている。

弥生時代中期以降は遺跡の数が急増する。集落遺跡では武雄町梶原遺跡[51]・小楠遺跡[51]、橘町東福寺遺跡・茂手遺跡[42・44]・下貝原遺跡[45]・小野原遺跡[44]等がある。墓地では武雄町小楠遺跡[51]・梶原遺跡[51]・祇園山遺跡[55]、橘町釈迦寺遺跡[50]・みやこ遺跡[41・46・53]・郷ノ木遺跡[41]・茂手遺跡[42]・納手遺跡[42]・小野原遺跡[44・47]・南楢崎遺跡[55]・おつぼ山遺跡[16]、朝日町北上滝遺跡[55]、北方町東宮裾遺跡[26・27]・椛島山遺跡[17・32]等、盆地周縁部を中心に多くの遺跡が確認されている。青銅器等の副葬品を有する墓は特定地域への際立った集中はないが、橘町片白・大日地区（釈迦寺遺跡、みやこ遺跡、納手遺跡、郷ノ木遺跡）、武雄町富岡地区（祇園山遺跡）、北方町宮裾地区・朝日町上滝地区（東宮裾遺跡、北上滝遺跡）、北方町椛島地区（椛島山遺跡）の4地域がややまとまりを成す。なお、橘町玉江遺跡は、かつて粘土採掘の際に中広形銅矛を単独に出土した遺跡として知られていたが[55]、近年の一帯の調査でもこれに関連する集落や墓地の遺構は確認されず、青銅製武器型祭具の埋納遺跡であった可能性が強まった。

古墳時代前期の集落としては、玉江遺跡[43・47]、納手遺跡[42]、小楠遺跡[51]、朝日町森崎遺跡[40]等が、中～後期の集落は、市場遺跡[41・49]、みやこ遺跡[41]、潮見遺跡[41]、茂手遺跡[42・44]、納手遺跡[42]、玉江遺跡[43・47]、下貝原遺跡[45]、武雄町野間峠遺跡[56]等があるが、いずれも集落構造を把握できる程の成果はない。

前期古墳は、朝日町多蛇古1号墳[54]や武雄町矢ノ浦古墳[39]といった前方後円墳、武雄町白岩山古墳[8]・上の山古墳[55]、朝日町朝日丸山古墳[38]・多蛇古2号墳[54]、橘町おつぼ山古墳[16]等の中・小型円墳が、中期古墳は、円墳としては県内最大級の規模を有し初期の横穴式石室を内部主体とする橘町玉島古墳[37]や、竪穴式石室を内部主体にもち鉄製農工具を副葬する北方町追分古墳[4]がある。



❶ 東福寺遺跡・皿山窯跡
❷ 東宮裾遺跡
❸ 馬場遺跡
❹ 小野原遺跡A区
❺ みやこ遺跡B・C区
❻ 玉江遺跡
❼ 溝ノ上東古墳群
❽ 潮見古墳
❾ 潮見遺跡
❿ 潮見城跡
⓫ 郷ノ木遺跡
⓬ 市場遺跡
⓭ 山下遺跡
⓮ 下貝原遺跡
⓯ 玉島古墳
⓰ 納手遺跡
⓱ 茂手遺跡
⓲ おつぼ山遺跡
⓳ 草場遺跡(北横崎古墳群)
⓴ 板橋（二俣）遺跡
㉑ 林廻遺跡
㉒ 庄ノ前遺跡
㉓ 井手橋遺跡
㉔ 釈迦寺遺跡
㉕ 鳴瀬山頂古墳群
㉖ 鳴瀬古墳群
㉗ 立石古墳群
㉘ 南片白古墳群
㉙ 上ノ山古墳
㉚ 矢ノ浦古墳(矢ノ浦経塚)
㉛ 白岩山古墳
㉜ 野間峠遺跡
㉝ 武雄（柄崎）城跡
㉞ 小楠遺跡
㉟ 梶原遺跡
㊱ 多蛇古古墳群
㊲ 笹尾山遺跡(牛ノ谷経塚)
㊳ 馬ノ谷遺跡
㊴ 朝日丸山古墳
㊵ 森崎遺跡
㊶ 北上滝遺跡
㊷ 向野窯跡群
㊸ 牧窯跡群
㊹ 立山古墳群
㊺ 追分古墳
㊻ 崇判山経塚
㊼ 椛島山遺跡
㊽ 箕具崎古墳群
㊾ 永池古墳
㊿ 勇猛寺・勇猛山古墳群

図２　武雄盆地周辺の主な遺跡（１：50,000）

古墳時代後期には、特に杵島山山地山麓一帯での群集墳の形成が顕著である。杵島山の北側から西側へかけて主なものを列記すると、北方町箕具崎古墳群[6]・永池古墳群・勇猛山古墳群[17]・鳴瀬山頂古墳群[5]、橘町鳴瀬古墳群・片白古墳群・東福寺古墳群、等がある。杵島山山地以外の盆地周縁部にも武雄町溝ノ上東古墳群[9]、橘町潮見古墳群、北方町立山古墳群[3・20]等があるが、杵島山山地側と比べてやや疎らな印象は否めない。後期古墳のほとんどは小規模な円墳であるが、橘町潮見古墳[38]は径約25mの円墳で、豊富な馬具等の出土で知られる。また、未調査ではあるが箕具崎古墳群や東福寺古墳群の中には全長30m未満の小型の前方後円墳が存在することが確認されている[13]。

律令期においては、武雄盆地一帯は肥前国杵島郡の範囲にあたる。杵島郡は『肥前国風土記』に「郷肆所、里一十三、駅壹所」とあり、この風土記所載の4郷は『和名類聚抄』の多駅・杵島・能伊・島見と、駅は『延喜兵部式』にみえる杵島駅と考えられている。これらの郷や駅そして郡衙の故地の比定には諸説があり、杵島郡衙の所在地については『肥前国風土記』や同逸文の記述や地名等から現在の北方町北方から高野にかけての一帯が有力視されているが、遺構や遺物からその位置を決するには至っておらず、橘町おつぼ山神籠石[16]の存在等から橘町片白・大日地区を候補地として挙げる向きもある。当該期の生産遺跡として北方町宮裾地区一帯に須恵器窯跡群が知られており[3・12]、郡衙との関わりで注意される。集落遺跡としては、玉江遺跡[17]で掘立柱建物が確認されている以外は潮見遺跡[41]、みやこ遺跡[41]、茂手遺跡[42]、等で若干の土坑等が検出されているに過ぎない。

平安時代中後期には肥前国内で多くの荘園が成立しているが、本地域の関連で特に重要なのは蓮華王院領長嶋荘である。長嶋荘については関連史料の集成[35]や個別研究[59・60・63]が公にされており、それによって立荘の過程や在地領主による土地開発と経営の実態等がかなり明らかになっている。長嶋荘の荘域は武雄盆地周辺の過半を占めており、鎌倉後期の史料ではあるが肥前国内の公領・荘園を網羅的に知りうる正応五（1292）年八月十六日河上宮造営用途支配惣田数注文（河上神社文書第23号）[24]によれば、杵島郡関係では庄園分として長嶋庄・太田庄・大町庄・杵島南郷庄・須古庄・久治國・黒髪社・稲佐社・武尾（社）・黒尾（社）が、公田分として杵島北郷・六箇里保が挙げられており、長嶋庄は一千五百十七丁と肥前国内では神崎庄三千丁に次ぐ広大な荘園である。荘の政所は、建治三（1277）年十二月廿日地頭領家田地屋敷注文案（橘中村文書第7号）[31]中の「一、しやうふんのやしき　一所、まんところ中橋ゝつめ」の記述から、橘町中橋にあったものと推定されている。

在地領主としては、武雄社大宮司伴（藤原）氏、橘薩摩氏、墓崎後藤氏等が有力氏族として史料に登場する。とりわけ橘公業が長嶋荘惣地頭として入部して以来、長嶋荘在所にあって地頭領主制を展開させていった橘薩摩氏の動向は、長嶋荘の開発過程を語るうえで重要な鍵を握っている。

平安後期から中世の遺跡としては、みやこ遺跡[41]、市場遺跡[41・48・49]、郷ノ木遺跡[41]、茂手遺跡[42]、板橋（二俣）遺跡[42]、山下遺跡[42]、小野原遺跡[44・47]、玉江遺跡[47]、小楠遺跡[51]、梶原遺跡[51]、井手橋遺跡[49]等で村落の一部が、潮見遺跡[41]では在地領主の館かと思われる遺構群が調査されている。また、平安後期の経塚として北方町宗判山経塚[18]、武雄町矢ノ浦経塚[39]、朝日町牛ノ谷（笹尾山）経塚[62]、橘町 毅 山神社経塚[16]等を挙げられる。

戦国期には墓崎後藤氏が武雄盆地周辺をほぼ押さえていたが、天正５（1577）年に龍造寺隆信の３男家信が後藤家を継ぎ、武雄地方は龍造寺氏の支配下となった。

天正15（1587）年の豊臣政権による九州平定をもって当地方は中世から近世へと移行する。武雄領（邑）主後藤家は家信の嗣子茂綱の代に鍋島と改姓し、武雄鍋島家は佐賀藩の親類同格として佐賀藩家老職を努めることになる。近世の武雄地方を語る上で欠かせない陶磁器生産は、北部の武内町・若木町と南部の東川登町・西川登町とに窯場が集中し、陶器の生産が主体である。現在、武雄市教育委員会によって市内の陶磁器窯跡についての詳細分布調査が進行中であり[52]、その実態が次第に明らかになっていくものと期待される。

参考・引用文献

1）池邊 彌（1981）和名類聚抄郡郷里驛名考證．吉川弘文館
2）環境庁（1981）第２回自然環境保全基礎調査 佐賀県動植物分布図．
3）北方町教育委員会（1976）牧古窯跡．北方町文化財調査報告書第１集
4）北方町教育委員会（1983）迫分古墳．北方町文化財調査報告書第２集
5）北方町教育委員会（1987）鳴瀬山頂古墳群．北方町文化財調査報告書第３集
6）北方町町史編さん委員会（1985）北方町史．上巻．北方町
7）北方町町史編さん委員会（1986）北方町史．中巻．北方町
8）木下 之治（1974）新しく発見された佐賀の文化財④　武雄市白岩山古墳．新郷土．第305号．pp.40－41．新郷土刊行会
9）木下 之治・安本 雪男（1963）回顧と展望 考古学界．新郷土．第168号．pp.12－14．新郷土刊行会
10）工藤 敬一（1965）肥前国武雄社領の支配構造．原田敏明古稀記念 国史論叢［(1969) 九州庄園の研究．pp.155－175．塙書房］
11）国平 健三（1970）佐賀県武雄市草場遺跡出土の石器．先史．６．pp.11－31．駒沢大学考古学研究会
12）国平 健三（1985）向野山唐人原古窯跡．北方町史．上巻．pp.464－471．北方町
13）近藤 義郎　編（1992）前方後円墳集成 九州編．山川出版社
14）佐賀県企画部（1974）佐賀県長期総合開発地域 土地分類基本調査 武雄．佐賀県
15）佐賀県教育委員会（1964）佐賀県の遺跡．佐賀県文化財調査報告書第13集
16）佐賀県教育委員会（1965）おつぼ山神籠石．佐賀県文化財調査報告書第14集
17）佐賀県教育委員会（1967）勇猛山古墳群．
18）佐賀県教育委員会（1970）佐賀県の経筒．
19）佐賀県教育委員会（1981）佐賀県遺跡地図（杵西地区）．佐賀県文化財調査報告書第59集
20）佐賀県教育委員会（1985a）東宮裾遺跡群．佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書３．pp.67－68
21）佐賀県教育委員会（1985b）九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第８集．
22）佐賀県教育委員会（1989）九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第11集．

23) 佐賀県教育委員会（1990）九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第12集.
24) 佐賀県史編纂委員会　編（1955）河上神社文書．佐賀県史料集成．古文書編第１巻
25) 佐賀県史編纂委員会・佐賀県郷土研究会（1951）校本肥前風土記とその研究.
26) 佐賀県文化館（1970ａ）北方町東宮裾弥生遺跡．新郷土．第256号．pp.48－50．新郷土刊行会
27) 佐賀県文化館（1970ｂ）北方町東宮裾弥生遺跡発掘調査報告（その二）．新郷土．第257号．pp.40－43．新郷土刊行会
28) 佐賀県立図書館　編（1956）武雄神社文書．佐賀県史料集成．古文書編第２巻
29) 佐賀県立図書館　編（1962）後藤家文書．佐賀県史料集成．古文書編第６巻
30) 佐賀県立図書館　編（1976）小鹿島文書．佐賀県史料集成．古文書編第17巻
31) 佐賀県立図書館　編（1977）橘中村文書．佐賀県史料集成．古文書編第18巻
32) 佐賀県立博物館（1977）椛島山遺跡調査報告書．佐賀県立博物館調査研究書第３集
33) 杉谷 昭・日野 尚志・太田 順三　編（1982）角川日本地名大辞典　41　佐賀県．角川書店
34) 瀬野 精一郎（1975）肥前国における鎌倉御家人．鎮西御家人の研究．pp.157－214．吉川弘文館
35) 瀬野 精一郎　編（1965）肥前国長嶋荘史料．九州荘園史料叢書11．竹内 理三
36) 武雄市企画情報課（1993）平成４年度版統計要覧．武雄市
37) 武雄市教育委員会（1973）玉島古墳.
38) 武雄市教育委員会（1975）武雄市潮見古墳.
39) 武雄市教育委員会（1980）矢ノ浦古墳．武雄市文化財調査報告書第８集
40) 武雄市教育委員会（1983）森崎遺跡．武雄市文化財調査報告書第12集
41) 武雄市教育委員会（1986ａ）六角川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（上巻）みやこ遺跡．武雄市文化財調査報告書第15集
42) 武雄市教育委員会（1986ｂ）六角川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（下巻）茂手遺跡．武雄市文化財調査報告書第15集
43) 武雄市教育委員会（1987ａ）玉江遺跡．武雄市文化財調査報告書第16集
44) 武雄市教育委員会（1987ｂ）小野原遺跡　付 茂手遺跡・北田遺跡．武雄市文化財調査報告書第17集
45) 武雄市教育委員会（1988）下貝原遺跡．武雄市文化財調査報告書第18集
46) 武雄市教育委員会（1989ａ）みやこ遺跡Ⅱ．武雄市文化財調査報告書第19集
47) 武雄市教育委員会（1989ｂ）甕屋遺跡．武雄市文化財調査報告書第20集
48) 武雄市教育委員会（1990ａ）南永野遺跡．武雄市文化財調査報告書第22集
49) 武雄市教育委員会（1990ｂ）天神裏遺跡．武雄市文化財調査報告書第23集
50) 武雄市教育委員会（1990ｃ）釈迦寺遺跡．武雄市文化財調査報告書第24集
51) 武雄市教育委員会（1991）小楠遺跡．武雄市文化財調査報告書第26集
52) 武雄市教育委員会（1992）武雄市内古窯跡分布調査報告書．武雄市文化財調査報告書第27集
53) 武雄市教育委員会（1993ａ）みやこ遺跡Ⅲ．武雄市文化財調査報告書第28集
54) 武雄市教育委員会（1993ｂ）多蛇古古墳群．武雄市文化財調査報告書第32集
55) 武雄市史編纂委員会（1971）武雄市史．上巻　武雄市
56) 中島 平一（1968）野間峠遺跡の発掘調査報告．湯か里．第28号．武雄歴史研究会
57) 中島 平一（1972）佐賀の弥生時代を掘る．私家版
58) 中島 平一（1978）杵島曲．（有）コンパス
59) 服部 英雄（1978）開発・その進展と領主支配－肥前国長嶋庄の橘薩摩一族－．地方史研究．152．地方史研究協議会
60) 服部 英雄（1979）肥前国長嶋庄の開発主体－条里制耕地の復元と変遷－．史學雑誌．第88編第６号．pp.１－50．史學会
61) 文化庁（1978）天然記念物緊急調査 植生図・主要動物地図　41 佐賀県.
62) 松尾 禎作（1957）武雄市朝日町牛の谷経塚．佐賀県文化財調査報告書第６集．佐賀県教育委員会
63) 三好 不二雄（1971）古代三・中世一・中世二．武雄市史．上巻．pp.295－482．武雄市

第３章　東宮裾遺跡（ひがしみやすそ）

遺跡名：東宮裾遺跡（ひがしみやすそ）（略号ＨＭＳ）

所在地：佐賀（さが）県杵島（きしま）郡北方（きたがた）町大字大崎（おおさき）字柳町（やなぎまち）・梅ノ尾（うめのお）
九反坪（くたんつぼ）・今山（いまやま）

第３章　東宮裾遺跡

１．東宮裾遺跡の概要

東宮裾遺跡は、佐賀県杵島郡北方町大字大崎字柳町1503外に所在する。遺跡は徳連岳山地から南に延びる舌状丘陵に挟まれた標高８～10ｍの谷底平野にあり、周辺で発掘調査の行われた主な遺跡としては古墳時代後期の立山古墳群（北方町教委1976・佐賀県教委1985）と平安時代前期の牧窯跡群（北方町教委1976）が挙げられる。

東宮裾遺跡は、昭和37（1962）年の水田耕地整理中に巴形銅器等の副葬品を収める石蓋土器棺墓が出土したことで発見された。昭和44（1969）年に当時の県教育庁文化財主査木下之治氏等が、発見者である山下二郎氏の保管していたこれらの遺物の存在を知り、急遽、発掘調査が企画された。第１次調査は昭和44（1969）年12月３日～４日に、第２次調査は翌昭和45（1970）年３月26日～30日に実施され、この２回にわたる調査によって副葬品の出土した土器棺墓に加えて、大型土器棺墓・小型土器棺墓・石蓋土坑墓各１基を検出し、弥生時代後期初頭頃の墓地であることが明らかになった（佐賀県文化館1970ａ・1970ｂ）。今回の九州横断自動車道建設に伴う調査は、これに続く第３次調査ということになる。その後、東宮裾遺跡ではＩ区東方の丘陵上で宅地造成に伴う調査が実施され、尾根の先端部に築かれた小円墳の墳丘下から弥生中期前半の土器棺墓６基と岩盤を刳り貫いた石蓋土坑墓・土坑墓８基が検出されており[1]、時期と立地の異なる弥生時代墓地が近接して存在することがわかった。

今回の調査では、対象面積30,200㎡を工事等の関係で南から順にＩ～Ⅲ区３箇所の調査区を設定し、3,390㎡の範囲について調査した。なお、Ⅱ区はⅡＡ区・ⅡＢ区・ⅡＣ区に３分した。

Ｉ区（字柳町）は長方形の調査区で南端部は削平されており、中央部南寄りに集中して石棺墓・石蓋土坑墓各１基とやや不整な土坑２基を検出した。ⅡＡ区（字梅ノ尾）は南北に長い調査区で、南側で隅丸方形の竪穴建物１棟、北側で小児用の土器棺墓１基を検出した他に土坑数基と小穴群があるが、調査区の東西両側には遺構が分布しない。ⅡＢ区（字九反坪）も南北に長い調査区で、調査区内の西側は削平により遺構が残っておらず、東側北半部分で土坑・小穴数基を検出した。ⅡＣ区（字九反坪）は南北に細長い調査区で、北側に集中して土坑数基・小穴を検出した。Ⅲ区（字今山）は丘陵裾のやや斜面になる台形の調査区で、まばらに分布する数基の土坑を検出したのみであった。Ⅱ・Ⅲ区の遺構から出土した遺物は弥生時代中期の土器がほとんどであるが、Ｉ区ＳＫ026からは後期に下る資料がややまとまって出土した。

以上のように、東宮裾遺跡の今次調査では弥生時代中期～後期の集落と墓地の一部を確認した。特にＩ区は第１・２次調査地点の西に接しており、この辺りが比較的短期間に狭い範囲で営まれた墓地であった可能性が強まった。

図3　東宮裾遺跡周辺の地形（1：2,500）

2．Ⅰ区の遺構と遺物

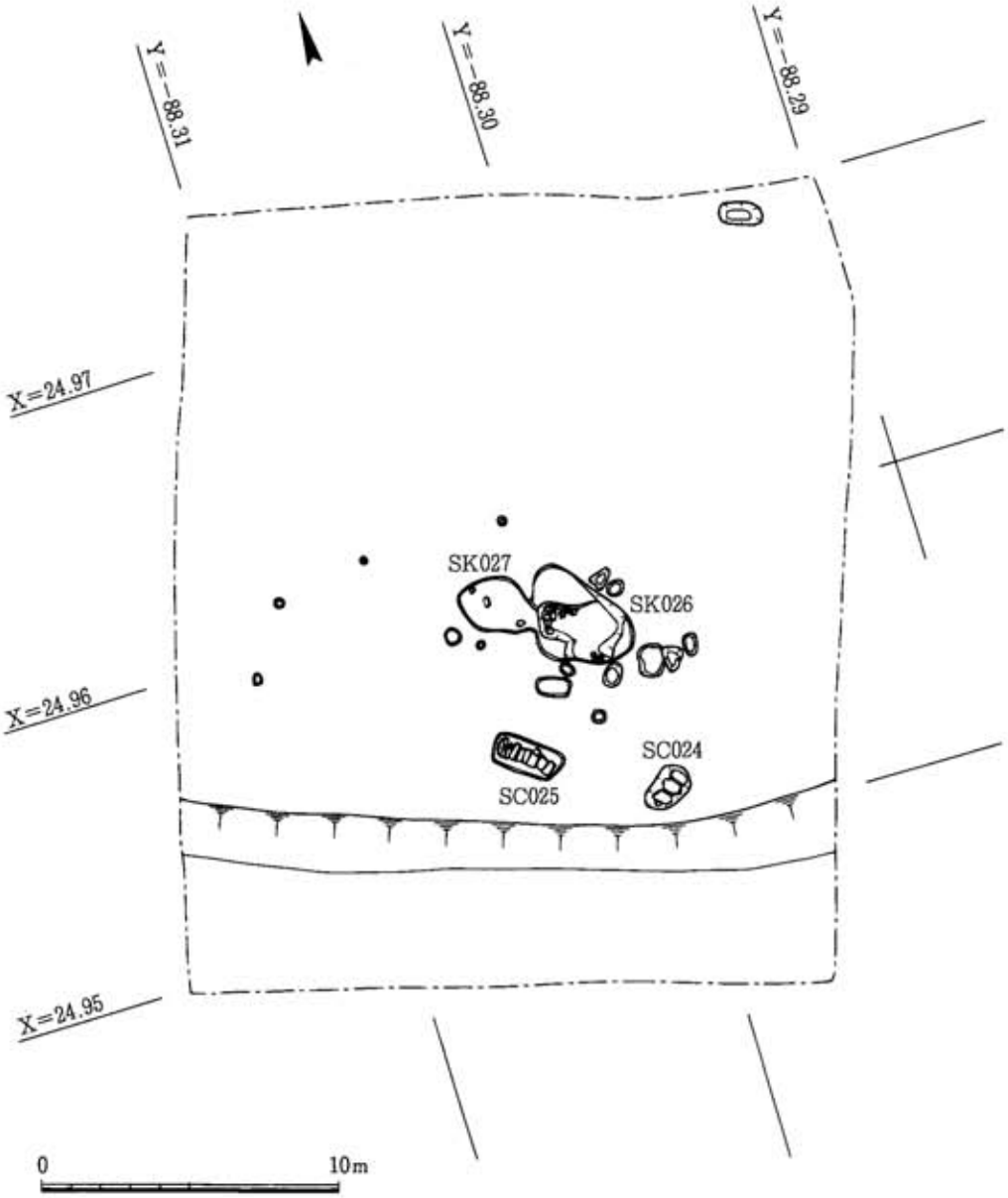


図4　Ⅰ区の遺構（1：250）

1）Ⅰ区の遺構（図４）

Ⅰ区（570㎡）は、第１・２次調査で弥生時代墓地が検出された地点の西に接しており、関連遺構の広がりが予想されていた（ただし第１・２次調査地点の位置が正確には特定できず、今次調査地点との関係は厳密には不明である）。Ⅰ区では、石棺墓１基、石蓋土坑墓１基、不整形土坑２基等を検出した。遺構検出面は耕作土下の青灰色粘土で、石蓋土坑墓の蓋石が自重により沈下していた程の軟弱地盤である。土坑から弥生時代中期～後期の土器が出土した。

ＳＫ026・ＳＫ027（図５）

Ⅰ区中央部に位置する不整形の大型土坑で、重複するが先後関係は不明である。ＳＫ026で、長軸2.0ｍ、短軸1.4ｍ、深さ0.2ｍ、ＳＫ027で長軸1.4ｍ、短軸0.9ｍ、深さ0.1ｍである。埋土中からややまとまって弥生土器が出土した。

ＳＣ024（図６）

Ⅰ区中央部南東寄りに位置する小型の箱形石棺墓で、小児用と思われる。頭位はN60°Eである。棺は内法で長さ1.1ｍ、頭位幅0.3ｍ、足位幅0.2ｍである。両側の小口は各々１枚ずつの板石を立て、両側石で挟む組み合わせとなっている。側石は２枚ずつの板石で、南側は外に押さえをもう一枚立てている。蓋石は、３枚の板石でほぼ覆い足位側にもう一枚を付け足している。掘方は検出状態で、長軸1.7ｍ、幅1.1ｍ、深さ0.6ｍのいびつな長楕円形である。掘方に壁石を立てて、灰褐色粘質土を充填させている。遺物は出土しなかった。

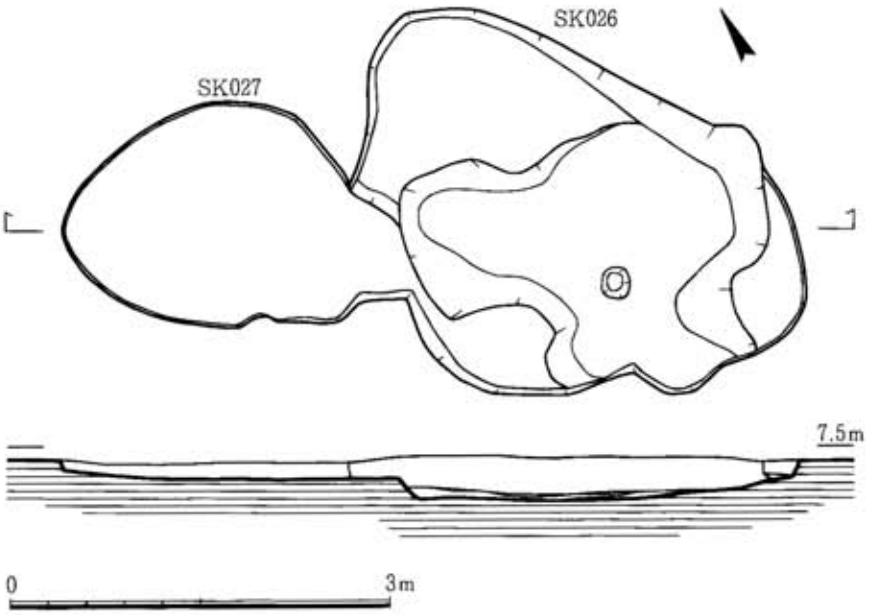


図５　Ⅰ区ＳＫ026・ＳＫ027（１：60）

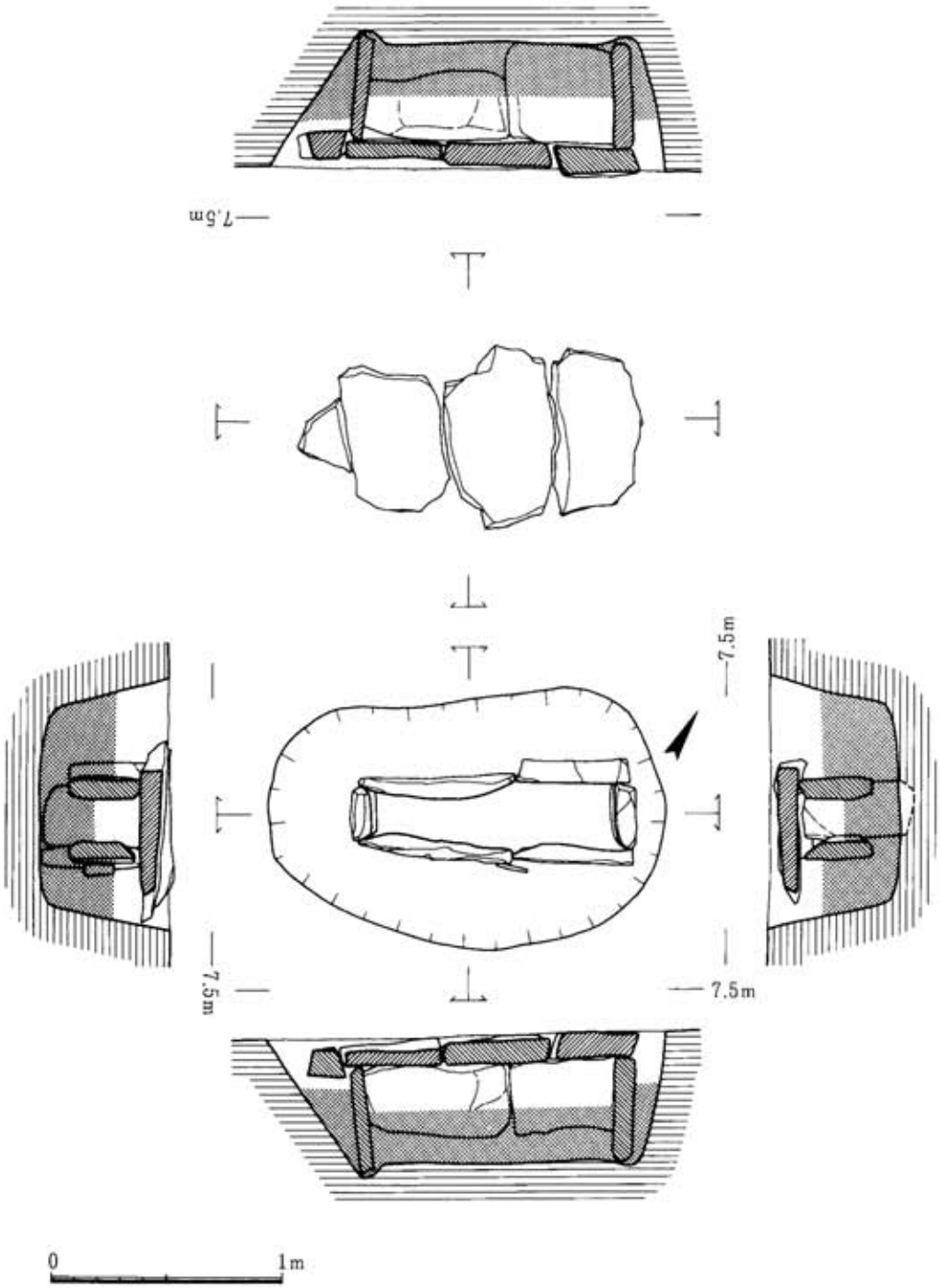


図6　I区SC024（1：30）

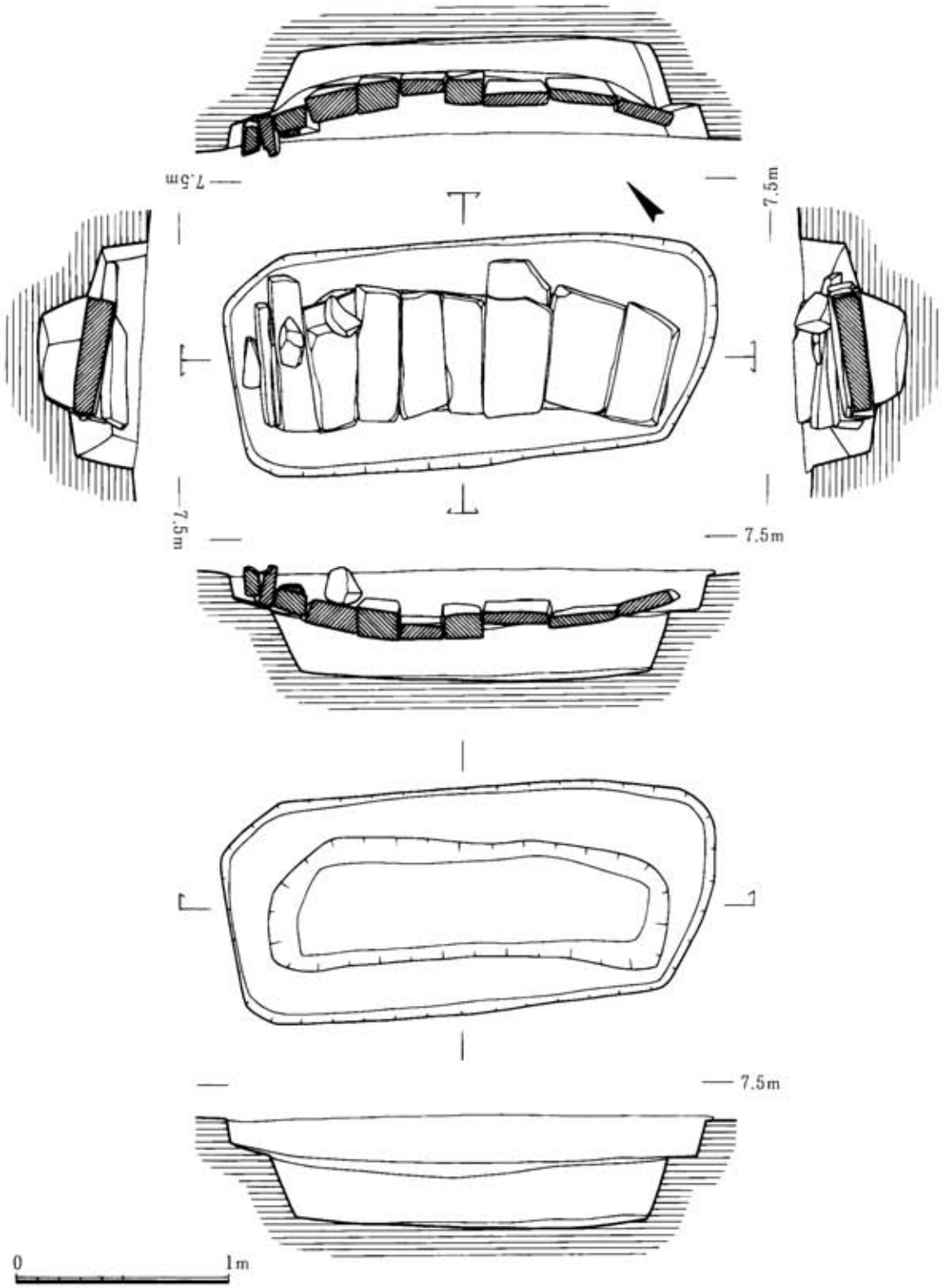


図7　Ⅰ区ＳＣ025（1：30）

ＳＣ025（図７）

Ｉ区中央部南寄りに位置する石蓋土坑墓で、頭位はＮ47°Ｗである。掘方は隅丸長方形の２段掘りで、１段目で長軸2.4ｍ、幅1.1ｍ、深さ0.3ｍ、２段目で長軸1.9ｍ、幅0.6ｍ、上面からの深さ0.5ｍである。２段目の上に８個のやや厚みのある緑泥片岩の板石で蓋をし、頭位にはこれらの蓋石に続けて板石を横に立てて据え、その背後に支えるように石を置いている。坑底に赤色顔料が少量付着していた。遺物は出土しなかった。

２）Ｉ区の遺物（図８・９）

ＳＫ026出土遺物（図８・９）

弥生土器　１～９は甕形土器（以下、「○○形土器」は○○とのみ省略）の口縁部である。断面Ｌ字形のものと断面Ｔ字形のものがあり、１は口縁下に断面三角形の突帯を１条巡らせる。10・11は甕の底部でいずれも安定した平底である。12は高杯の杯部で鋤先状の口縁部である。13は高杯の脚部である。14は胴部が算盤玉状に屈曲する壺で、肩部に連続する６条の突帯を巡らせる。頸部以上は欠損のため不明であるが、かなり細い頸部が想定される。15は胴部が緩やかに屈曲する無頸の壺で、口縁部は内傾して真っすぐ終わり、屈曲部の上位に連続する５条の突帯を巡らせる。胴部下位には焼成後の穿孔が１箇所ある。16は屈曲部から底部にかけて急にすぼまる形態の広口の壺と思われ、頸部に１条の突帯を、胴部の屈曲部に連続する３条の突帯を巡らせる。17はやや不安定な平底の壺の底部と思われる。18は大型の複合口縁壺で、接合しない部分を図上で復元したため、若干の狂いが生じている可能性がある。口縁部は強く屈曲し、頸部に断面三角形の突帯を、胴部最大部に断面コ字形の突帯を巡らせている。

鉄鏃　19は茎を大きく欠損する鉄鏃で、鏃身部は偏平な木葉形、茎部は断面長方形である。現存長7.2cm、鏃身部最大幅2.9cm、鏃身部厚さ0.4cm、茎部幅0.8cm、茎部厚さ0.4cmである。

３．Ⅱ区の遺構と遺物

１）ⅡＡ区の遺構（図10）

ⅡＡ区（980m²）では、弥生時代中期の竪穴建物１棟、小型土器棺墓１基、土坑５基、小穴等を検出した。遺構は調査区の中央部に南北の帯状に分布しており、東西両側にはない。

ＳＨ009（図11）

ⅡＡ区南端部に位置する竪穴建物である。平面形は長軸4.3ｍ、短軸3.8ｍの南北方向にやや長い隅丸方形である。残存壁高0.2ｍで、全周に壁溝を巡らせる。床面は平坦で、小穴が数基あるが、主柱穴と特定できるものはない。貼り床等の構造や炉等の施設については不明である。遺物は床面上から磨製石斧が１点出土した他、埋土中から弥生土器が少量出土した。

ＳＪ001（図11）

ⅡＡ区北側に位置する小型の合口土器棺墓で、小児用と思われる。頭位はＳ50°Ｅ、埋置角度

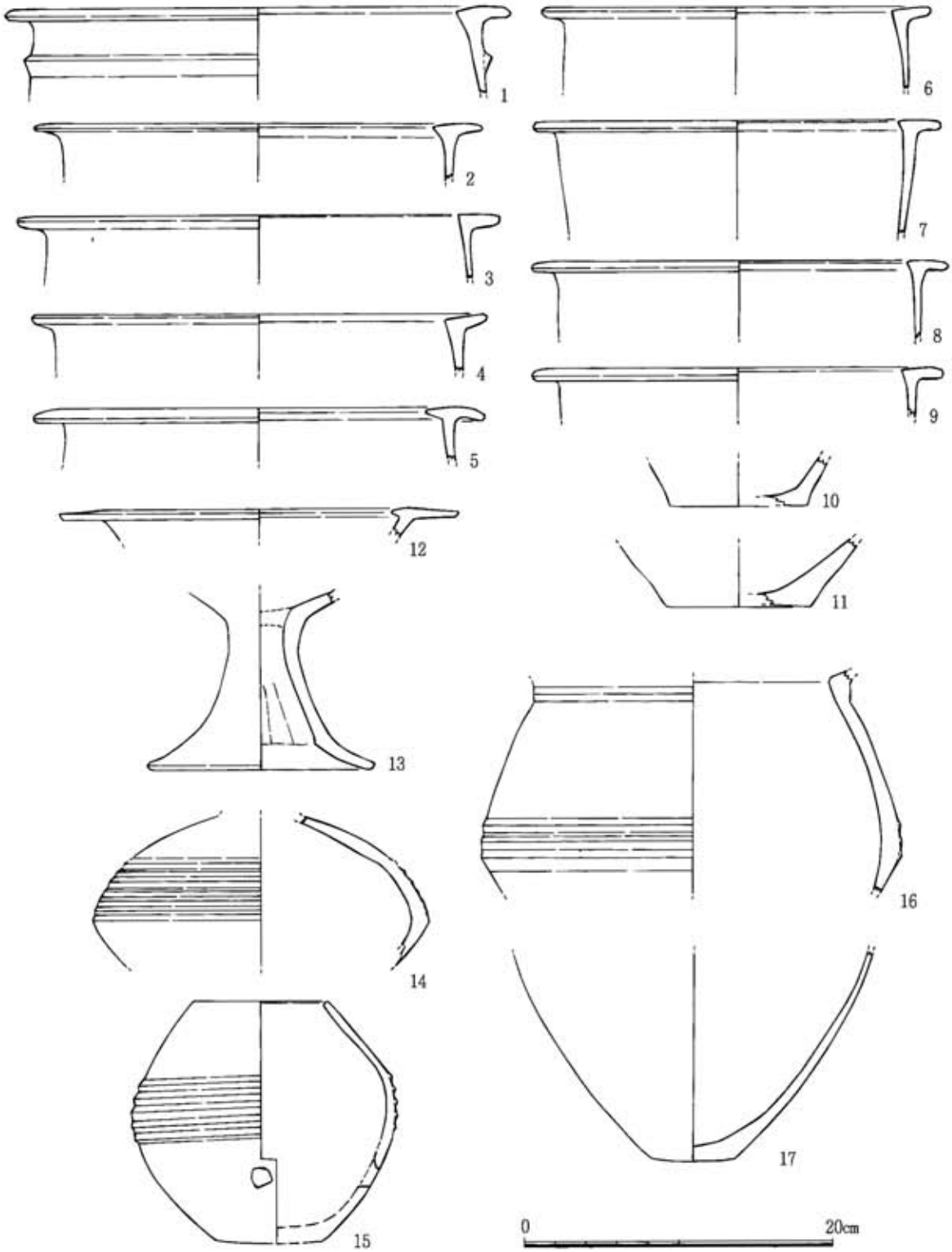
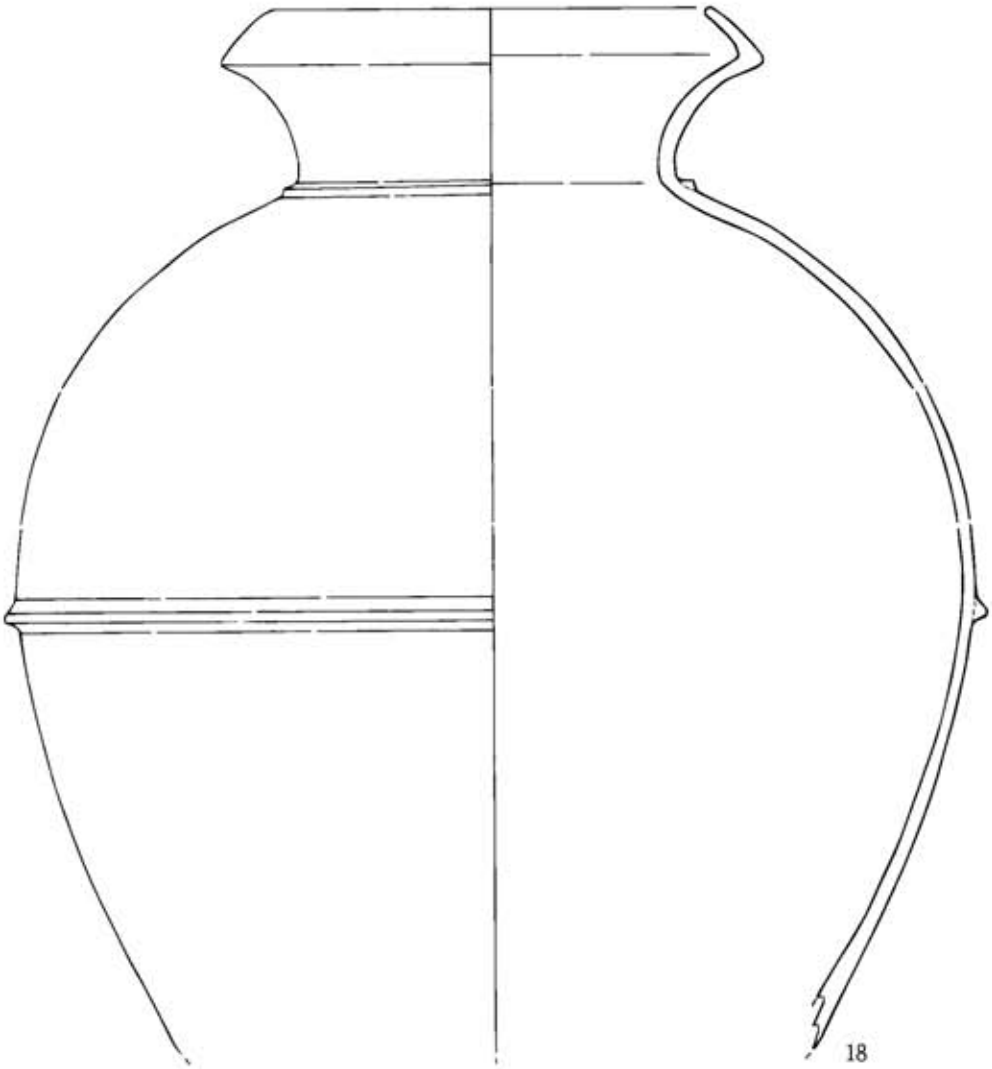


図８　Ⅰ区ＳＫ026出土遺物１（１：４）



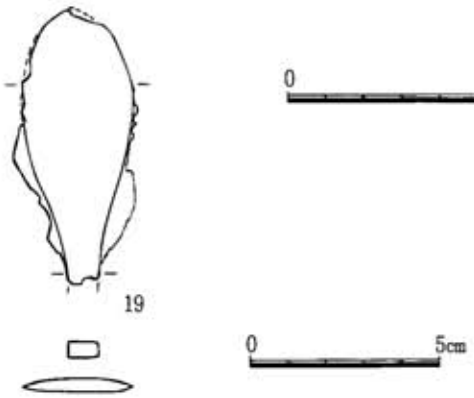


図９　Ⅰ区ＳＫ026出土遺物２（18は１：４，19は１：２）

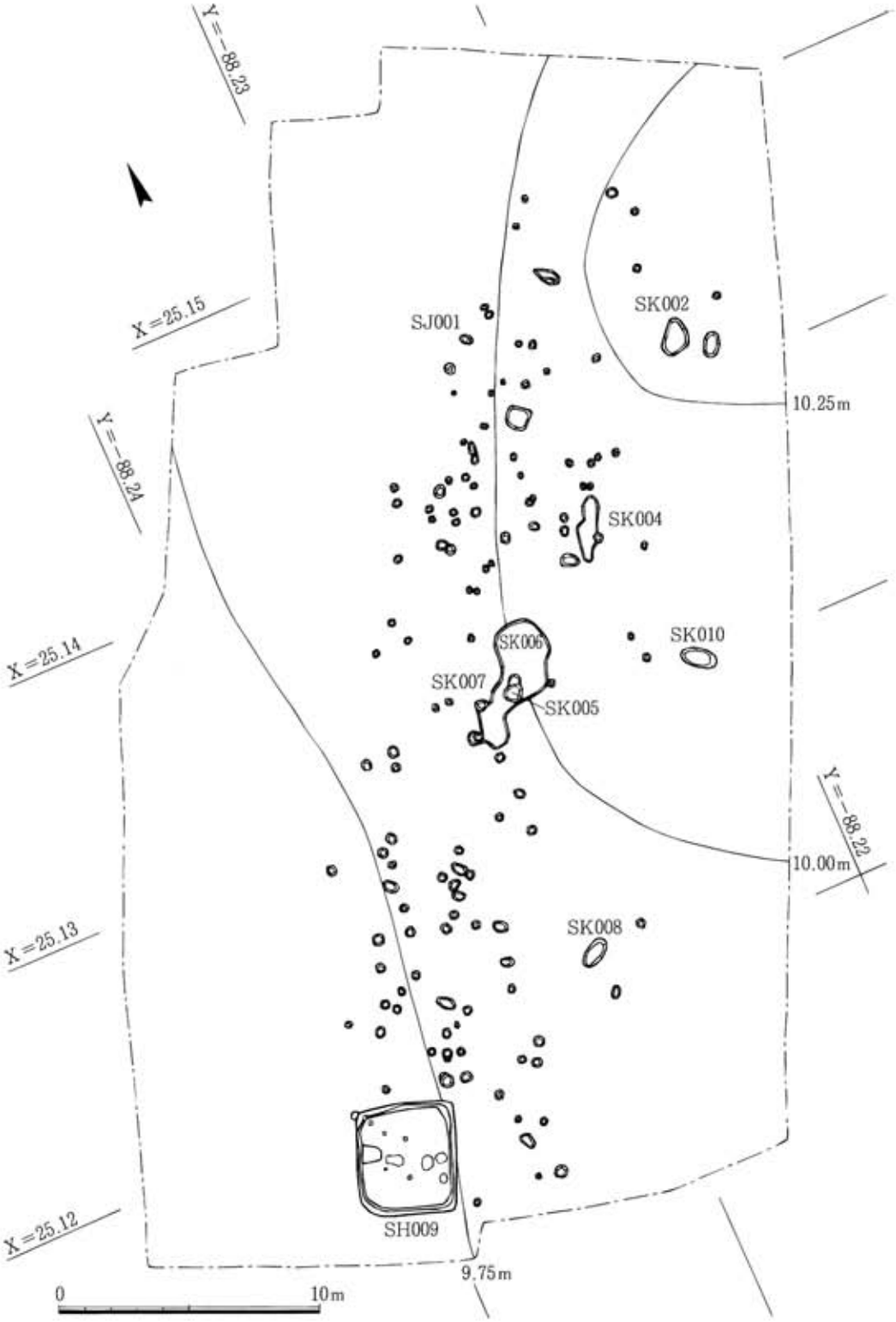


図10　ⅡA区の遺構（1：250）

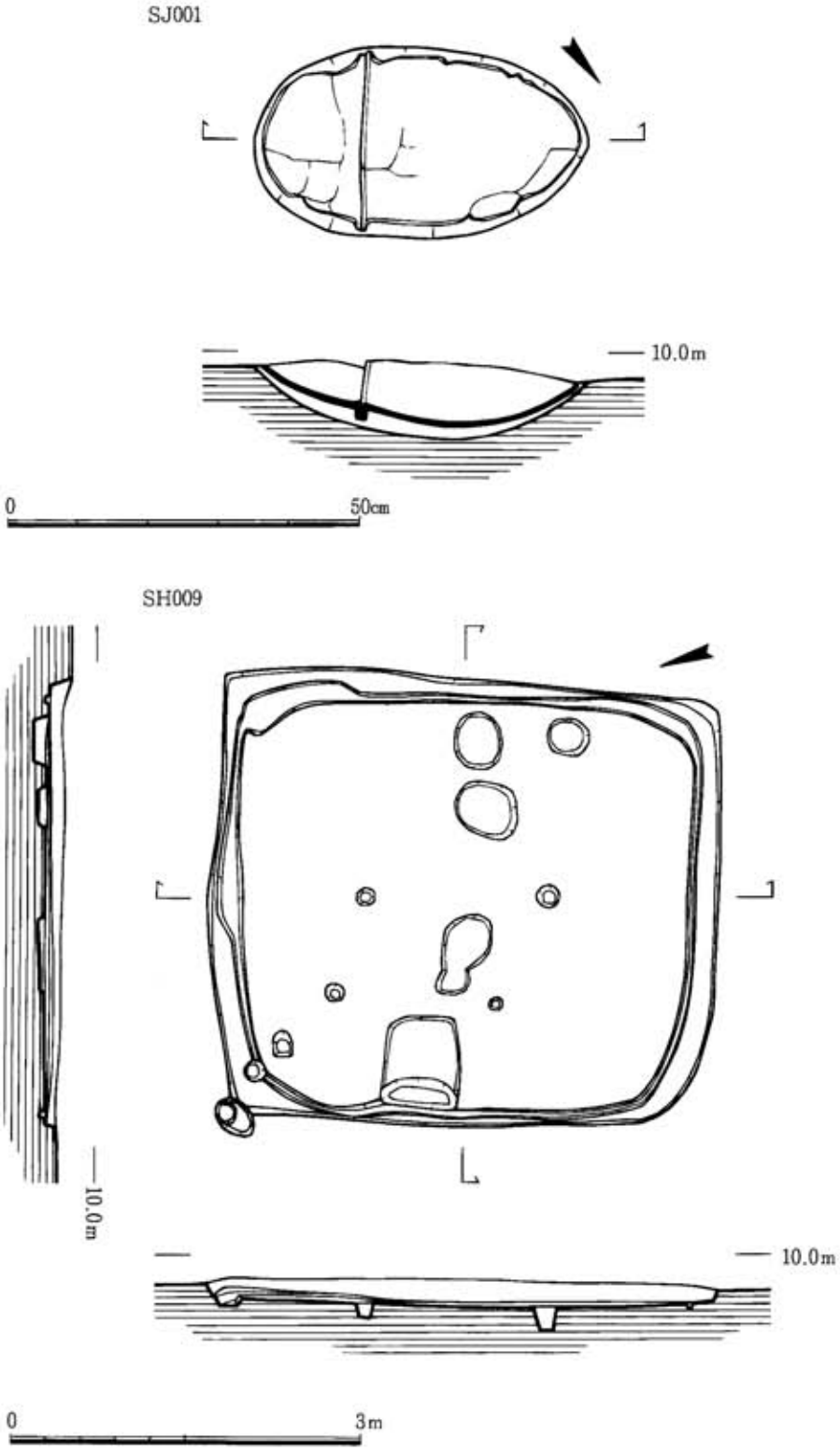


図11　ⅡA区 SJ001（1：10）・SH009（1：60）

は5°とほぼ水平に近い。上部が削平され遺存するのは半分以下に過ぎず、掘方の状況も不明確である。下甕に水抜き穴が穿たれている（ただし実測原図に図示されていないので、図11には表現されていない）。

ＳＫ002（図10）

ⅡＡ区の北東部に位置する長軸1.5ｍ、短軸1.0ｍの土坑である。埋土中から弥生土器が少量と円盤形石製品が出土した。

ＳＫ004（図10）

ⅡＡ区の中央部北寄りに位置する長軸2.6ｍ、短軸0.8ｍの土坑である。埋土中から弥生土器が少量と黒曜岩製石鏃が出土した。

ＳＫ005（図10）

ⅡＡ区の中央部に位置する土坑で、ＳＫ006と重複するが前後関係は不明である。長軸0.8ｍ、短軸0.7ｍである。埋土中から弥生土器が出土した。

ＳＫ008（図10）

ⅡＡ区の南側東寄りに位置する長軸1.2ｍ、短軸0.6ｍの土坑である。埋土中から弥生土器が少量出土した。

ＳＫ010（図10）

ⅡＡ区の中央部東端に位置する長軸1.4ｍ、短軸0.8ｍの土坑である。埋土中から弥生土器が少量出土した。

2）ⅡＡ区の遺物（図12・18）

ＳＨ009出土遺物（図12・18）

弥生土器（20～22）　20は甕ないし鉢の口縁部で、断面Ｌ字形である。21・22は甕の底部である。

磨製石斧（98）　いわゆる太形蛤刃の石斧で、基部と図の裏面側を大きく欠損する。

ＳＪ001棺体（図12）

弥生土器（23～25）　23はＳＪ001の上甕、24・25はＳＪ001の下甕である。遺存状態が悪く、接合も図上での復元もうまくいかなかった。いずれも日常用の中型甕を転用したものと思われ、口縁部は断面Ｌ字形である。

ＳＫ002出土遺物（図12・18）

弥生土器（26～27）　26・27は断面Ｌ字形の甕の口縁部、28はやや大型の甕の底部である。

石製品（97）　円盤形の石製品で全面が磨かれている。図の表面中央部に浅い窪みがあり、紡錘車の未製品の可能性もあるが、厚さがかなりある点でやや異なる印象を受ける。

ＳＫ004出土遺物（図18）

石鏃（96）　黒曜岩製の凹基式で、基部の一端を僅かに欠く以外は完形に近い。

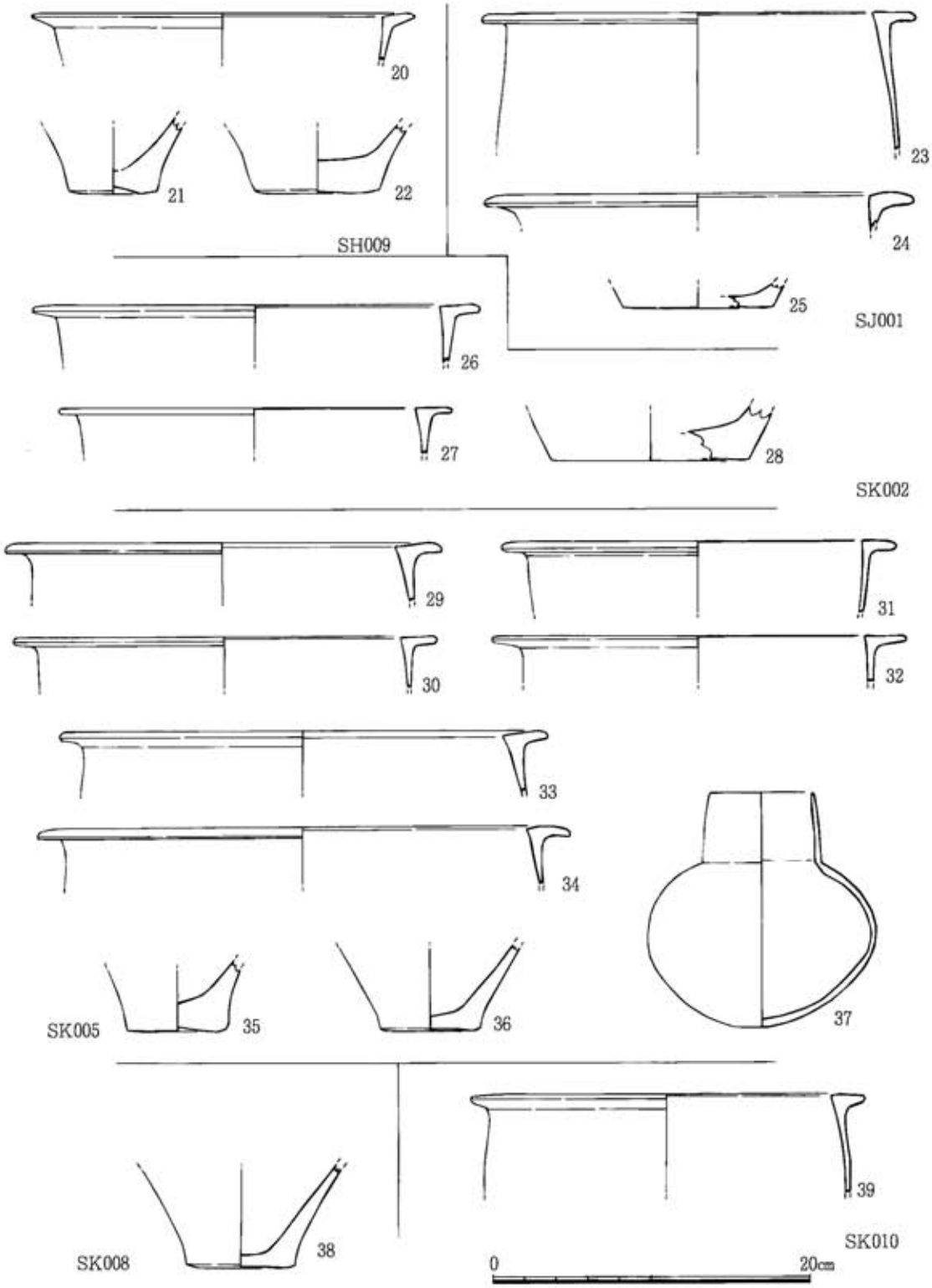


図12　ⅡA区出土遺物（1：4）

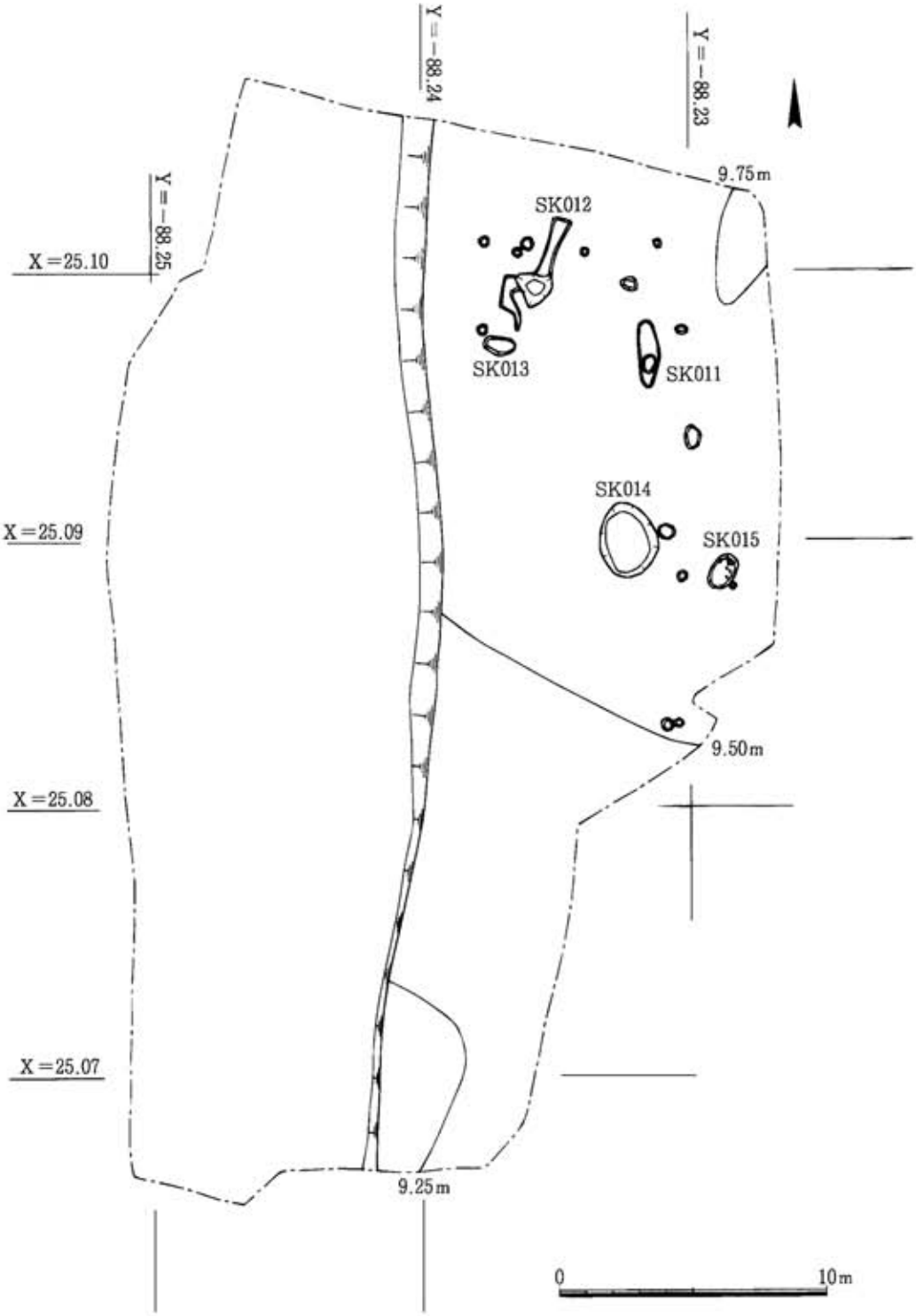


図13　ⅡB区の遺構（1：250）

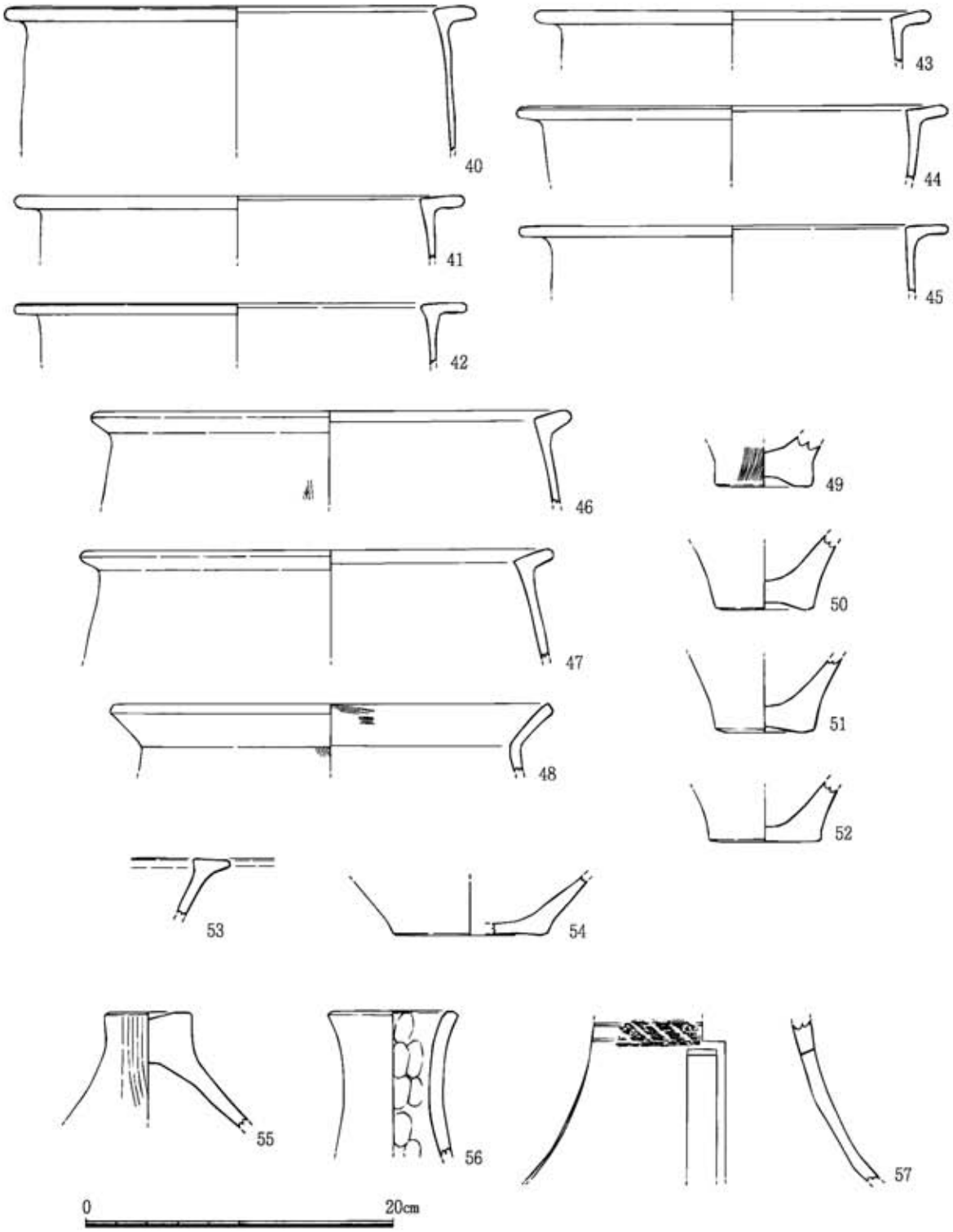


図14　ⅡＢ区ＳＫ014出土遺物（１：４）

ＳＫ005出土遺物（図12）

弥生土器（29～37）　29～34は断面Ｌ字形の甕の口縁部、35・36は平底の甕の底部である。37はやや特異な形態の小型の壺で丸底である。頸部は内傾ぎみに直行するが、体部との接合部分の遺存状態が悪く、頸部以上の傾きはやや不確実である。器面調整も摩耗により不明である。

ＳＫ008出土遺物（図12）

弥生土器（38）　甕の底部で、安定した平底である。

ＳＫ010出土遺物（図12）

弥生土器（39）　甕の口縁部で、断面はやや未発達なＬ字形である。

３）ⅡＢ区の遺構（図13）

Ｂ区（740㎡）では、弥生時代中～後期の土坑５基と小穴10数基を検出した。調査区の西側半分は削平されており、遺構は存在しない。

ＳＫ014（図13）

Ｂ区の東側中央部北寄りに位置する長軸2.8ｍ、短軸2.1ｍ、深さ0.5ｍの土坑である。埋土中から弥生土器と砥石が出土した。

４）ⅡＢ区の遺物（図14・18）

ＳＫ014出土遺物（図14・18）

弥生土器（40～57）　40～48は甕の口縁部で、40～45は断面Ｌ字形の口縁部上面が水平なもの、46・47は口縁部上面が内傾するものである。48はく字形の口縁部で時期が下るものである。49～52は甕の底部である。53はおそらく精製広口壺の口縁部で、やや未発達な鋤先状口縁である。54は壺の底部と思われる。55は蓋、56は器台である。57は長方形の透かし窓を持つ鼓形器台で、時期が下るものである。上部と底部を双方とも欠損するため全体の形状は推定によるが、旧状は上下２段の透かしを有するものと思われ、透かしの間に平行沈線で画した連続短斜線文を巡らせる。

砥石（99～101）　99は断面不整五角形の砥石で、欠損する上下以外の全周を使用している。100・101は長方形の板状の砥石である。

５）ⅡＣ区の遺構（図15）

ⅡＣ区（200㎡）では土坑７基と小穴数基を検出した。弥生時代中期の遺物が少量出土したが、いずれも掘り込みが浅く、確実にこの時期の遺構であるとは断定できない。

ＳＫ016（図15）

ⅡＣ区南端に単独で位置する長軸1.9ｍ以上、短軸1.2ｍの土坑である。埋土中から弥生土器が少量出土した。

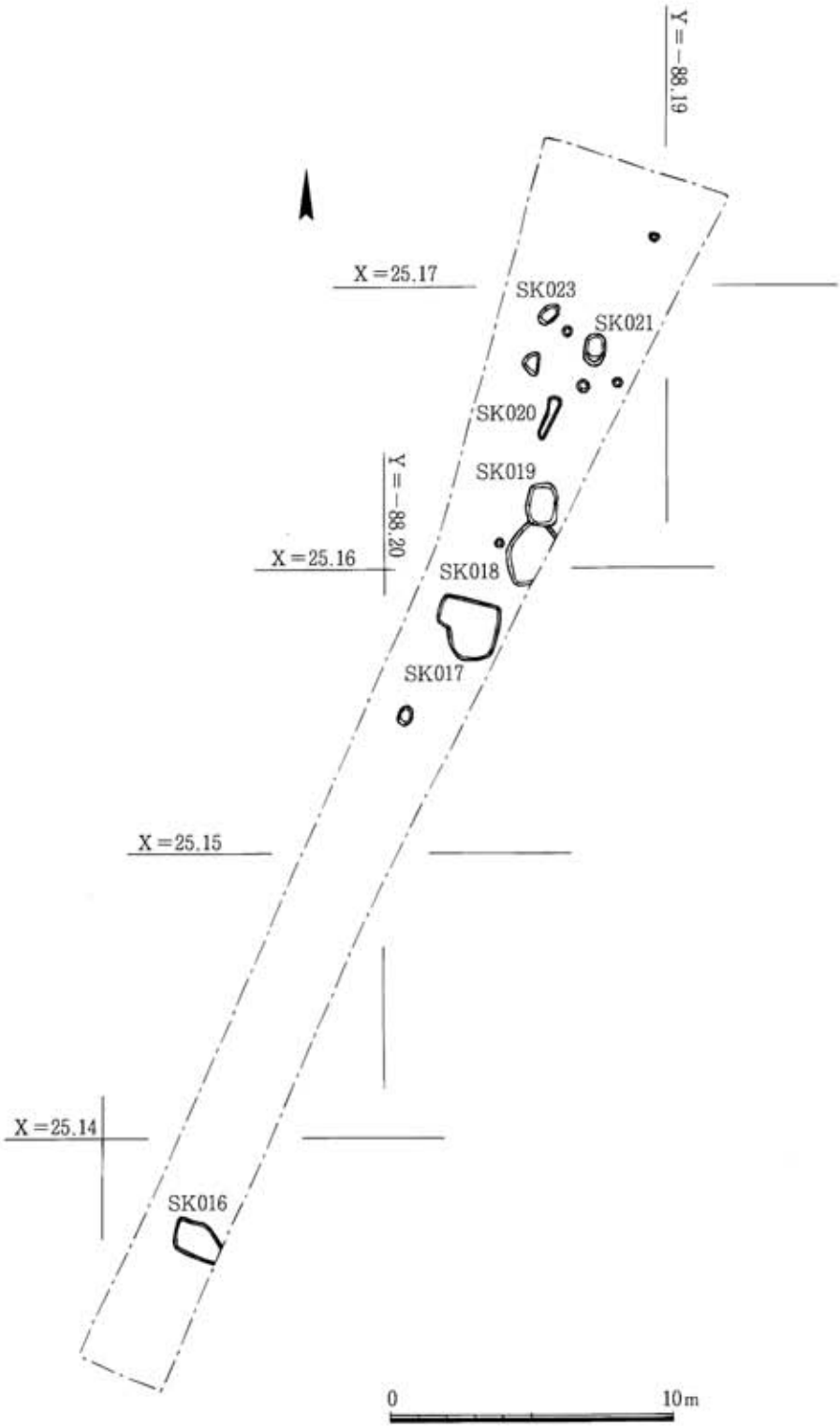


図15　ⅡC区の遺構（1：250）

ＳＫ017（図15）

ＩＩＣ区北側中央寄りに位置する長軸2.2ｍ、短軸2.1ｍ、深さ0.1ｍの土坑である。埋土中から弥生土器が出土した。

ＳＫ018（図15）

ＩＩＣ区北側に位置する長軸2.3ｍ、短軸1.3ｍ以上、深さ0.1ｍの土坑である。ＳＫ019と重複するが、新旧関係は不明である。埋土中から弥生土器が出土した。

ＳＫ019（図15）

ＩＩＣ区北側に位置する長軸1.5ｍ、短軸1.2ｍ、深さ0.1ｍの土坑である。ＳＫ018と重複するが、新旧関係は不明である。埋土中から弥生土器が少量出土した。

ＳＫ020（図15）

ＩＩＣ区北側に位置する長軸1.1ｍ、短軸0.4ｍ、深さ0.2ｍの土坑である。埋土中から弥生土器が少量と磨製穂摘具が出土した。

ＳＫ021（図15）

ＩＩＣ区北側に位置する長軸1.1ｍ、短軸0.6ｍ、深さ0.3ｍの土坑である。埋土中から弥生土器が少量出土した。

ＳＫ023（図15）

ＩＩＣ区北側に位置する長軸0.9ｍ、短軸0.6ｍの土坑である。埋土中から弥生土器が少量出土した。

６）ＩＩＣ区の遺物（図16～18）

ＳＫ016出土遺物（図16）

弥生土器（58～61）　58・59は中型の甕で、58の口縁部断面形はＴ字に近い。60・61は同一個体と思われる大型の壺で、胴部の突帯は断面コ字形である。

ＳＫ017出土遺物（図16）

弥生土器（62～74）　62～67は中型の甕の口縁部、68～73は甕の底部である。74は壺の底部と思われる。

ＳＫ018出土遺物（図17・18）

弥生土器（75～83）　75・76は甕の口縁部、77～79は甕の底部、80は広口壺で鋤先状の口縁部、81は壺の底部である。82・83は高杯の口縁部と思われる。

敲石（102・103）　いずれも図の表裏両面の中央部に顕著な使用痕のある敲石で、凹石とすべきかもしれない。

ＳＫ019出土遺物（図17）

弥生土器（84～86）　いずれも甕の口縁部で、84は断面Ｌ字形でやや内傾し、口縁下に１条の三角突帯を巡らせる。

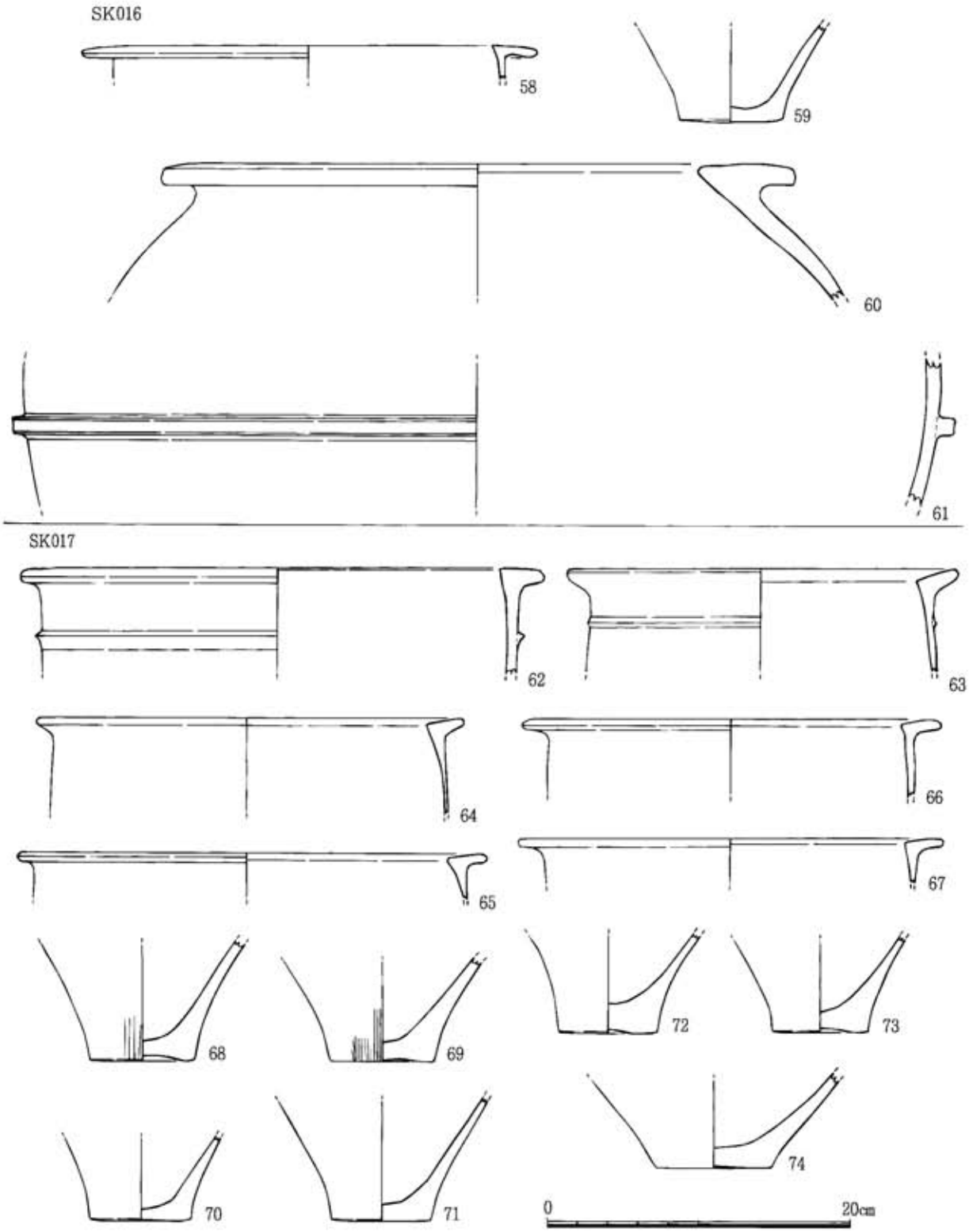


図16　ⅡC区出土遺物1（1：4）

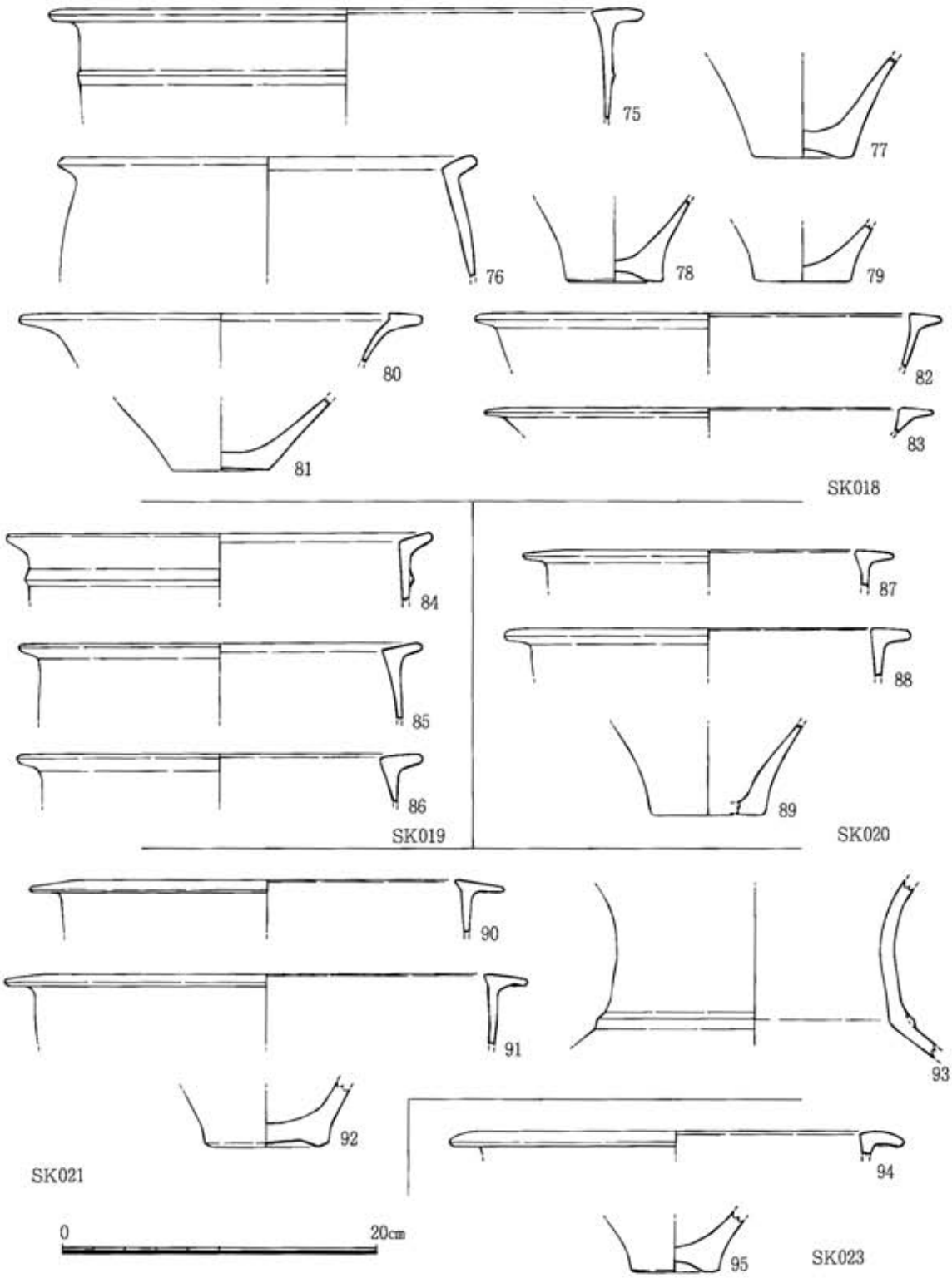


図17　ⅡC区出土遺物２（１：４）

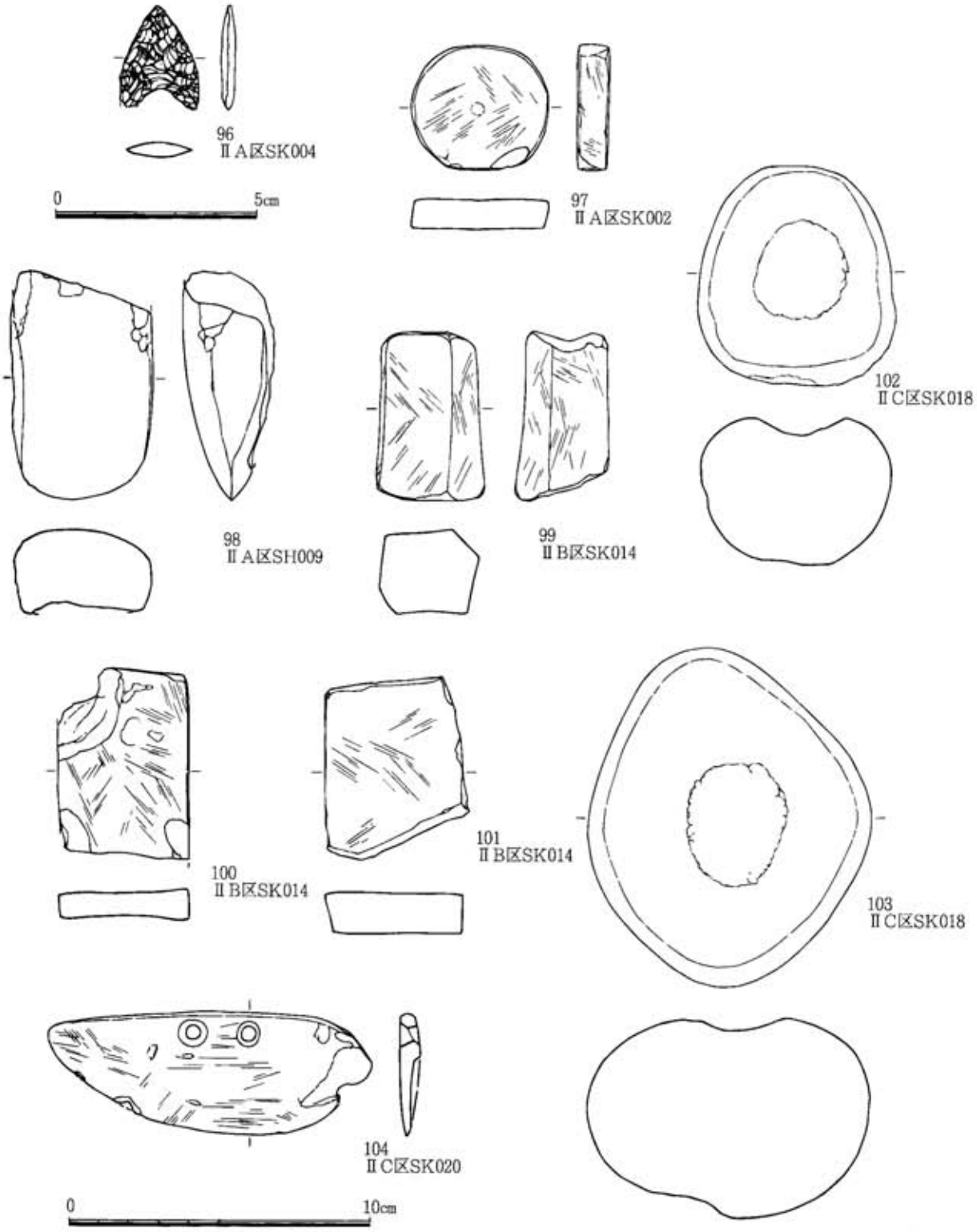


図18　Ⅱ区出土石製遺物（96は２：３，97～104は１：２）

ＳＫ020出土遺物（図17）

弥生土器（87～89）　87・88は甕の口縁部、89は甕の底部である。

磨製穂摘具（104）　外湾刃半月形の磨製穂摘具で、孔間長は心々で1.8cmである。

ＳＫ021出土遺物（図18）

弥生土器（90～93）　90・91は甕の口縁部で鋤先状を示す。92は甕の底部、93は広口壺の頸部である。

ＳＫ023出土遺物（図17）

弥生土器（94・95）　いずれも中型の甕で、94は断面Ｌ字形の口縁部、95は底部である。

４．Ⅲ区の遺構と遺物

１）Ⅲ区の遺構（図19）

Ⅲ区（900m²）では、土坑７基等をまばらに検出したのみで、出土遺物も僅少であった。

ＳＫ003（図19）

Ⅲ区中央に位置する長軸3.7ｍ以上、短軸2.3ｍの土坑で、ＳＫ005と重複するが新旧関係は不明である。埋土中から円盤形石製品が出土した。

ＳＫ004（図19）

Ⅲ区中央に位置する長軸2.2ｍ、短軸0.8ｍの土坑で、埋土中から弥生土器が少量出土した。

２）Ⅲ区の遺物（図20）

ＳＫ003出土遺物（図20）

石製品（107）　片岩質の磨製石製品で、周縁部を丁寧に面取りする。用途や時期は不明。

ＳＫ004出土遺物（図20）

弥生土器（105・106）　105は筒形器台の鍔部で、表面に赤色顔料が僅かに残る。106は壺の底部である。

５．その他の遺物（図20）

その他、各区で遺構に伴わずに出土した遺物で特徴的なものについて報告する。

石鏃（108）　Ｉ区で出土した黒曜岩製の凹基式石鏃で、先端部を僅かに欠損する。

石鍋再加工品（109）　調査前の現地踏査時に採集されたらしい滑石製石鍋の再加工品である。いわゆるパレン形の製品で、石鍋の鍔部を鈕状に用い中央部分に残る孔の内部に棒状の鉄が遺存する。

須恵器（110）　Ⅱ区で出土した釦形のつまみを持つ短頸壺の蓋で、天井部は回転ヘラケズリである。

白磁（111・112）　共にＩ区で出土した別個体の口禿げの白磁椀である。

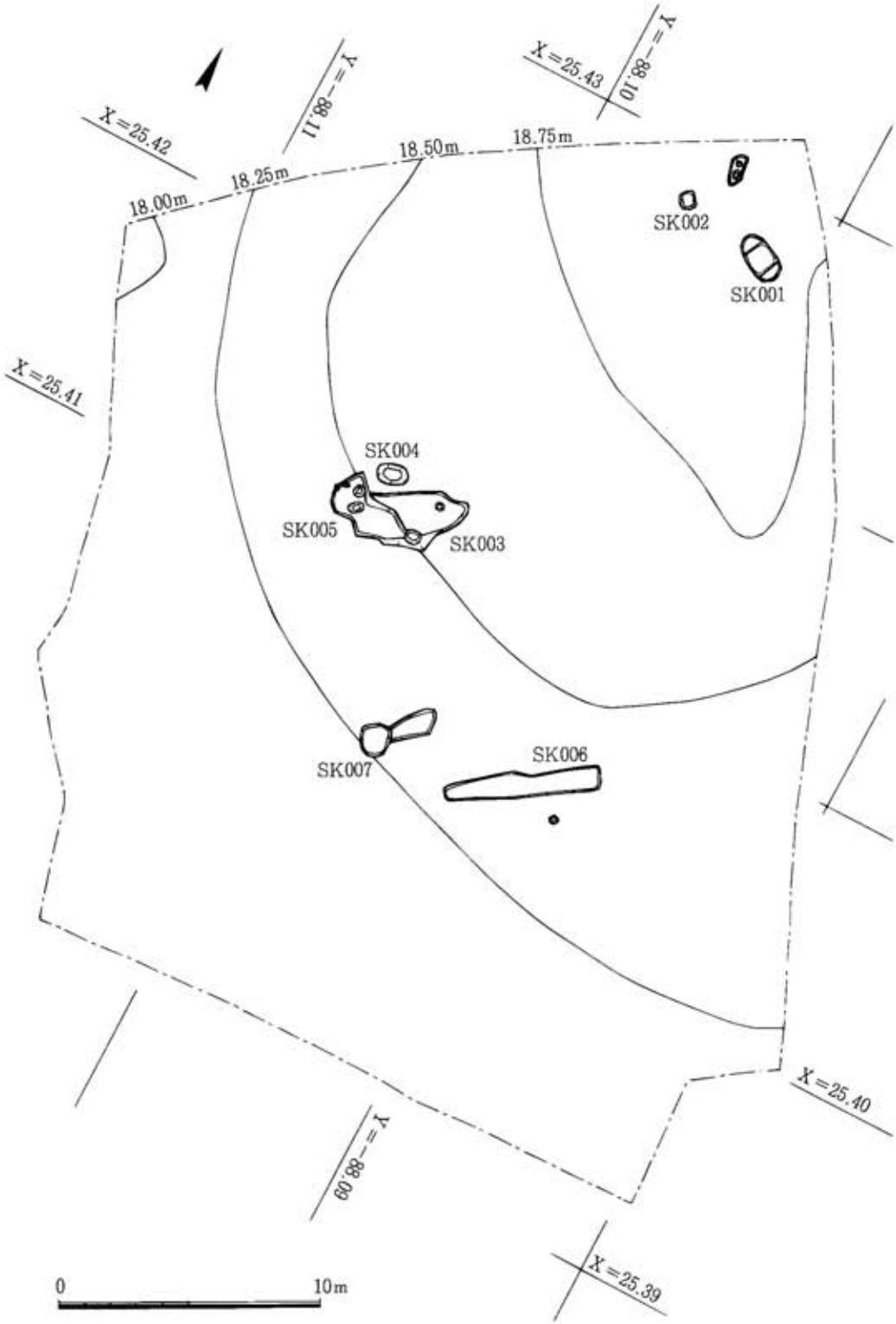


図19　Ⅲ区の遺構（1：250）

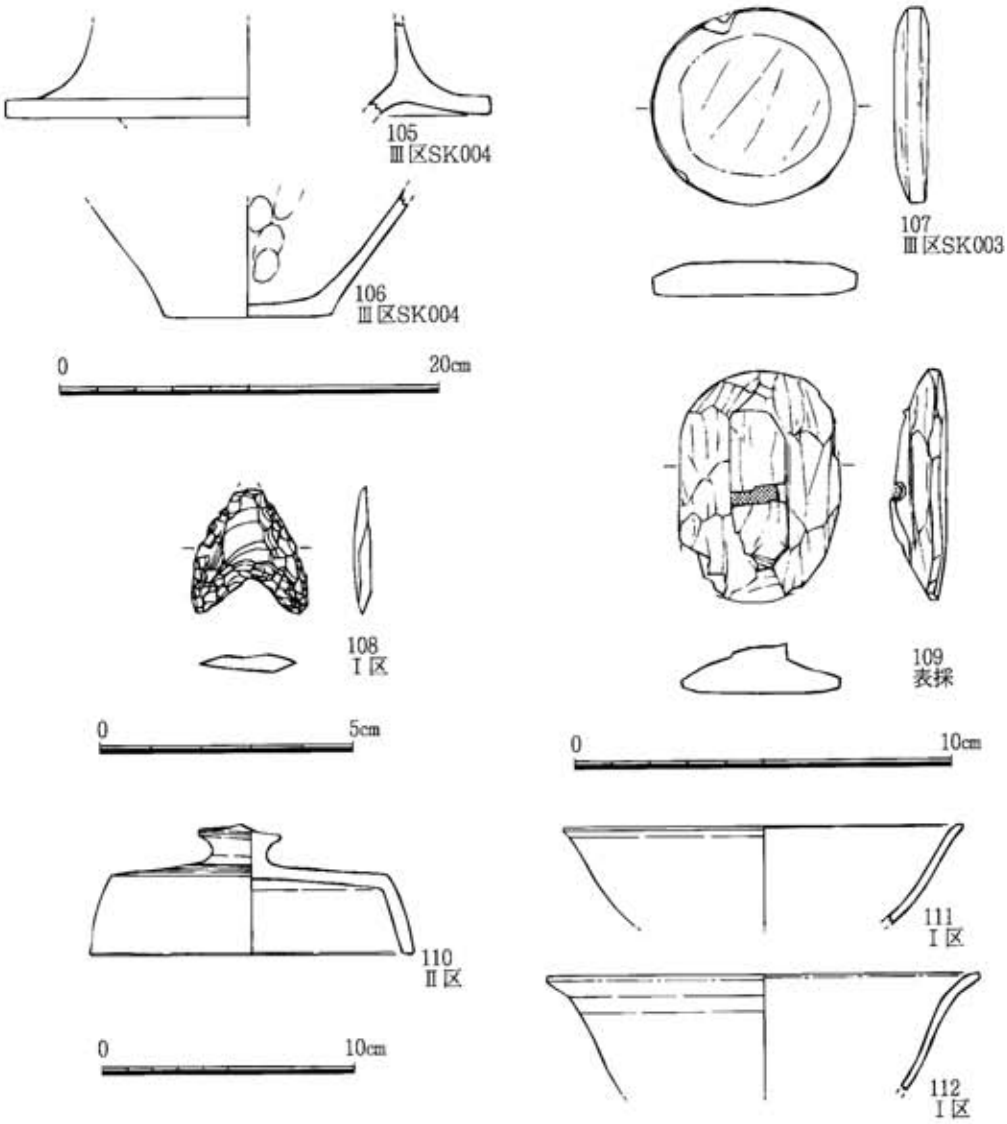


図20　その他の遺物（105・106は１：４，107・109は１：２，108は２：３，110～112は１：３）

表1　東宮裾遺跡出土遺物一覧

法量の単位はcm・g，（　）は復元値

遺物番号	挿図番号	出土遺構	遺物の種類	法量 ①口径②底径③器高④胴部径⑤長さ⑥幅⑦厚さ⑧重量	色調・石材	登録番号
1	図8	I区SK026	弥生土器・甕	①(32.4)	浅黄橙色	93004553
2	図8	I区SK026	弥生土器・甕	①(28.8)	内：淡黄色・外：にぶい黄橙色	93004547
3	図8	I区SK026	弥生土器・甕	①(31.0)	浅黄橙色	93004546
4	図8	I区SK026	弥生土器・甕	①(29.2)	内：褐色・外：にぶい黄橙色	93004550
5	図8	I区SK026	弥生土器・甕	①(29.0)	内：褐色・外：橙色	93004552
6	図8	I区SK026	弥生土器・甕	①(25.2)	内：にぶい黄橙色・外：橙色	93004551
7	図8	I区SK026	弥生土器・甕	①(26.4)	明黄褐色	93004545
8	図8	I区SK026	弥生土器・甕	①(27.0)	にぶい黄橙色	93004548
9	図8	I区SK026	弥生土器・甕	①(26.6)	浅黄橙色	93004549
10	図8	I区SK026	弥生土器・甕	②(9.0)	内：黒褐色・外：浅黄橙色	93004555
11	図8	I区SK026	弥生土器・甕	②(9.4)	内：黒褐色・外：にぶい黄橙色	93004554
12	図8	I区SK026	弥生土器・高杯	①(25.6)	浅黄橙色	93004544
13	図8	I区SK026	弥生土器・高杯	②(14.6)	浅黄橙色	93004560
14	図8	I区SK026	弥生土器・壺	④(21.6)	灰黄色	93004558
15	図8	I区SK026	弥生土器・壺	①8.6②(6.8)④17.2	橙色	93004559
16	図8	I区SK026	弥生土器・壺	④(27.2)	浅黄橙色	93004557
17	図8	I区SK026	弥生土器・壺	②5.4	にぶい黄橙色	93004556
18	図9	I区SK026	弥生土器・壺	①(23.0)④(49.2)	内：にぶい黄橙色・外：橙色	93004561
19	図9	I区SK026	鉄鏃	⑤7.2⑥2.9⑦0.4		93004984
20	図12	II A区SH009	弥生土器・甕	①(24.4)	橙色	93004513
21	図12	II A区SH009	弥生土器・甕	②(5.6)	内：黒灰色・外：黄橙色	93004514
22	図12	II A区SH009	弥生土器・甕	②7.9	橙色	93004515
23	図12	II A区SJ001	弥生土器・甕	①(27.2)	にぶい黄橙色	93004510
24	図12	II A区SJ001	弥生土器・甕	①(27.0)	淡黄色	93004511
25	図12	II A区SJ001	弥生土器・甕	②(9.4)	淡黄色	93004512
26	図12	II A区SK002	弥生土器・甕	①(28.4)	赤橙色	93004538
27	図12	II A区SK002	弥生土器・甕	①(25.0)	内：淡黄白色・外：黄橙色	93004537
28	図12	II A区SK002	弥生土器・甕	②(12.4)	暗黄橙色	93004539
29	図12	II A区SK005	弥生土器・甕	①(27.8)	灰白色	93004503
30	図12	II A区SK005	弥生土器・甕	①(27.0)	にぶい黄橙色	93004502
31	図12	II A区SK005	弥生土器・甕	①(24.8)	灰白色	93004501
32	図12	II A区SK005	弥生土器・甕	①(26.1)	淡赤橙色	93004505
33	図12	II A区SK005	弥生土器・甕	①(31.0)	内：灰赤橙色・外：橙色	93004506
34	図12	II A区SK005	弥生土器・甕	①(33.8)	灰白色	93004504
35	図12	II A区SK005	弥生土器・甕	②6.4	内：黒灰色・外：橙色	93004508
36	図12	II A区SK005	弥生土器・甕	②(6.3)	にぶい黄橙色	93004507
37	図12	II A区SK005	弥生土器・壺	①6.4③14.8④14.3	にぶい黄橙色	93004509
38	図12	II A区SK008	弥生土器・甕	②(6.8)	黄橙色	93004540
39	図12	II A区SK010	弥生土器・甕	①(24.8)	黄橙色	93004541
40	図14	II B区SK014	弥生土器・甕	①(30.8)	淡黄色	93004516
41	図14	II B区SK014	弥生土器・甕	①(29.4)	橙色	93004519
42	図14	II B区SK014	弥生土器・甕	①(29.6)	黄橙色	93004522
43	図14	II B区SK014	弥生土器・甕	①(25.4)	赤橙色	93004521
44	図14	II B区SK014	弥生土器・甕	①(27.6)	赤橙色	93004520
45	図14	II B区SK014	弥生土器・甕	①(27.6)	黄橙色	93004523
46	図14	II B区SK014	弥生土器・甕	①(31.0)	赤橙色	93004517
47	図14	II B区SK014	弥生土器・甕	①(28.6)	赤橙色	93004518
48	図14	II B区SK014	弥生土器・甕	①(28.6)	黄橙色	93004524
49	図14	II B区SK014	弥生土器・甕	②(6.2)	内：黒灰色・外：にぶい黄橙色	93004528
50	図14	II B区SK014	弥生土器・甕	②(6.2)	内：黄橙色・外：赤橙色	93004526
51	図14	II B区SK014	弥生土器・甕	②(6.3)	内：淡黄橙色・外：赤橙色	93004527
52	図14	II B区SK014	弥生土器・甕	②(7.2)	内：黒灰色・外：黄橙色	93004529
53	図14	II B区SK014	弥生土器・壺		黄橙色	93004525
54	図14	II B区SK014	弥生土器・壺	②(10.0)	淡黄白色	93004530
55	図14	II B区SK014	弥生土器・蓋	上部径5.7	黄橙色	93004531
56	図14	II B区SK014	弥生土器・器台	①(8.2)	内：にぶい黄橙色・外：橙色	93004532
57	図14	II B区SK014	弥生土器・器台		内：黒茶色・外：淡黄色	93004533
58	図16	II C区SK016	弥生土器・甕	①(30.2)	内：にぶい橙色・外：橙色	93004564
59	図16	II C区SK016	弥生土器・甕	②6.7	にぶい黄橙色	93004565
60	図16	II C区SK016	弥生土器・甕	①(41.8)	浅黄橙色	93004563
61	図16	II C区SK016	弥生土器・甕	④(62.8)	浅黄橙色	93004563
62	図16	II C区SK017	弥生土器・甕	①(35.2)	にぶい黄橙色	93004566
63	図16	II C区SK017	弥生土器・甕	①(25.6)	橙色	93004571
64	図16	II C区SK017	弥生土器・甕	①(28.6)	内：浅黄橙色・外：黄橙色	93004569
65	図16	II C区SK017	弥生土器・甕	①(31.7)	橙色	93004570
66	図16	II C区SK017	弥生土器・甕	①(27.5)	浅黄橙色	93004567
67	図16	II C区SK017	弥生土器・甕	①(27.9)	黄橙色	93004568
68	図16	II C区SK017	弥生土器・甕	②6.9	内：浅黄橙色・外：にぶい橙色	93004576

遺物番号	挿図番号	出土遺構	遺物の種類	法量 ①口径②底径③器高④脚部径⑤長さ⑥幅⑦厚さ⑧重量	色調・石材	登録番号
69	図16	II C 区 SK017	弥生土器・甕	②(6.8)	内：明黄褐色・外：にぶい黄橙色	93004577
70	図16	II C 区 SK017	弥生土器・甕	②6.7	橙色	93004573
71	図16	II C 区 SK017	弥生土器・甕	②6.5	内：にぶい黄橙色・外：橙色	93004572
72	図16	II C 区 SK017	弥生土器・甕	②6.5	内：にぶい黄橙色・外：橙色	93004574
73	図16	II C 区 SK017	弥生土器・甕	②6.3	内：黄橙色・外：浅黄橙色	93004575
74	図16	II C 区 SK017	弥生土器・壺	②7.6	内：浅黄橙色・外：にぶい黄橙色	93004578
75	図17	II C 区 SK018	弥生土器・甕	①(37.6)	内：灰黄色・外：にぶい橙色	93004583
76	図17	II C 区 SK018	弥生土器・甕	①(26.4)	橙色	93004582
77	図17	II C 区 SK018	弥生土器・甕	②(6.4)	内：にぶい黄橙色・外：橙色	93004585
78	図17	II C 区 SK018	弥生土器・甕	②6.1	内：灰黄色・外：にぶい黄橙色	93004584
79	図17	II C 区 SK018	弥生土器・甕	②6.2	内：にぶい橙色・外：浅黄橙色	93004586
80	図17	II C 区 SK018	弥生土器・壺	①(25.4)	橙色	93004580
81	図17	II C 区 SK018	弥生土器・壺	②6.2	内：橙色・外：にぶい橙色	93004587
82	図17	II C 区 SK018	弥生土器・高杯	①(29.6)	橙色	93004581
83	図17	II C 区 SK018	弥生土器・高杯	①(28.4)	橙色	93004579
84	図17	II C 区 SK019	弥生土器・甕	①(26.8)	橙色	93004590
85	図17	II C 区 SK019	弥生土器・甕	①(25.4)	内：にぶい橙色・外：橙色	93004589
86	図17	II C 区 SK019	弥生土器・甕	①(25.6)	浅黄橙色	93004588
87	図17	II C 区 SK020	弥生土器・甕	①(23.4)	内：にぶい黄橙色・外：浅黄橙色	93004592
88	図17	II C 区 SK020	弥生土器・甕	①(25.7)	橙色	93004591
89	図17	II C 区 SK020	弥生土器・甕	②(7.0)	内：淡黄色・外：にぶい黄橙色	93004593
90	図17	II C 区 SK021	弥生土器・甕	①(29.8)	内：黄灰色・外：浅黄橙色	93004595
91	図17	II C 区 SK021	弥生土器・甕	①(32.9)	灰白色	93004594
92	図17	II C 区 SK021	弥生土器・甕	②(7.8)	内：にぶい黄橙色・外：橙色	93004597
93	図17	II C 区 SK021	弥生土器・壺		浅黄橙色	93004596
94	図17	II C 区 SK023	弥生土器・甕	①(28.9)	にぶい黄橙色	93004599
95	図17	II C 区 SK023	弥生土器・甕	②(5.6)	内：にぶい黄橙色・外：明赤褐色	93004598
96	図18	II A 区 SK004	石鏃	⑤2.6⑥2.0⑦0.4⑧1.5	黒曜岩	93004601
97	図18	II A 区 SK002	円盤形石製品	径4.5⑦1.0⑧28.2		93004600
98	図18	II A 区 SH009	石斧	⑤(7.5)⑥(4.9)⑦3.0⑧153.3		93004602
99	図18	II B 区 SK014	砥石	⑤(5.5)⑥(3.5)⑦(3.0)⑧81.6		93004607
100	図18	II B 区 SK014	砥石	⑤(6.4)⑥(4.4)⑦(1.0)⑧47.8		93004608
101	図18	II B 区 SK014	砥石	⑤(6.1)⑥(4.7)⑦(1.4)⑧62.0		93004609
102	図18	II C 区 SK018	敲石	⑤7.2⑥6.4⑦4.9⑧292.2		93004603
103	図18	II C 区 SK018	敲石	⑤11.2⑥9.2⑦6.5⑧838		93004604
104	図18	II C 区 SK020	磨製穂摘具	⑤10.8⑥4.1⑦0.7⑧27.2		93004610
105	図20	III区 SK004	弥生土器・器台	脚部径22.5	淡黄白色	93004542
106	図20	III区 SK004	弥生土器・甕	②8.8	内：褐色・外：暗褐色	93004543
107	図20	III区 SK003	円盤形石製品	径5.4⑦0.9⑧41.7	滑石	93004611
108	図20	I 区表採	石鏃	⑤(2.5)⑥2.3⑦0.4⑧1.4	黒曜岩	93004606
109	図20	表採	石錘再加工品	⑤6.1⑥4.1⑦1.5⑧37.6	滑石	93004605
110	図20	II区表採	須恵器・短頸壺蓋	①(12.8)③5.2つまみ部径3.3	明灰色	93004536
111	図20	I 区表採	白磁・椀	①(15.7)	素地・釉調：灰白色	93004535
112	図20	I 区表採	白磁・椀	①(17.1)	素地：明灰色・釉調：緑灰色	93004534

6．まとめ

今回の東宮裾遺跡の調査では、弥生時代を中心とした遺構・遺物が検出されたが、遺構の残存していた範囲は狭く、しかもかなり削平を受けていた。Ⅰ区は後期の墓地、Ⅱ区は中期の集落の一部と考えられる。

東宮裾遺跡では、第1・2次調査で後期初頭の土器棺墓3基（成人棺2・小児棺1）と石蓋土坑墓からなる墓地が検出されている。今次調査のⅠ区はこの墓地の西側に接しており、合わせて土器棺墓3基、石蓋土坑墓2基、石棺墓1基が比較的狭い範囲に集中することが確認されたわけである。

第1・2次調査で出土した2基の大型土器棺は、全体に丸みを帯びており、口縁はく字形に強く外反して短く伸び、頸部直下に1条の三角突帯を、胴部中位の最大径部分に2ないし3条のコ字形突帯を巡らせ、底部は安定した平底であるが、やや小径となっているものである。また器面には調整のハケメないしタタキを留めている。このような特徴から、第1・2次の1・2号土器棺は、原田（1993）の編年による武雄地方Ⅵ式の内の古い部分、橋口（1979）のKⅣa式並行に比定でき、後期初頭に位置付けるのが妥当であろう。また、第2次調査の小型土器棺についてもほぼ同時期のものと考えられる。したがって東宮裾Ⅰ区周辺の弥生時代土器棺墓はほぼ後期初頭に限定される[2]。

これに対して石棺墓・石蓋土坑墓については、棺や墓坑の内部からの出土遺物がなく時期比定が困難であるが、武雄盆地周辺は大型土器棺墓による集団墓分布圏の西端部に位置しており、中期から後期初頭頃までは大型土器棺墓が墓地の主体を成し、その後に石棺墓・石蓋土坑墓が盛行するものと考えられることから、東宮裾遺跡の石棺墓・石蓋土坑墓も土器棺墓に後出するものである可能性が強い。第2次調査石蓋土坑墓の上部及び周辺からは透し入器台約3個体分・高杯約10個体分・壺類が出土しており、石蓋土坑墓に供献されたものとされているが（柴元1985）、図示された透し入器台は弥生後期中葉から終末のものと考えられる[3]。また、Ⅰ区SK026も墓に伴ういわゆる祭祀土坑の可能性が強いが、出土土器に後期初頭から後半の資料が含まれている。以上のことから、東宮裾遺跡の弥生後期の墓地は、後期初頭の頃に土器棺墓が築かれた後に石棺墓・石蓋土坑墓からなる墓地に移行し、古墳時代に入る以前に形成を終えたものと考えておきたい。

註

1）平成元（1989）年に北方町教育委員会が発掘調査を実施したが、未報告である（1989年4月7日付の佐賀新聞に記事がある）。

2）ここでは第1・2次調査報告の図によった。実物は佐賀県立博物館に保管されているらしいが、確認していない。

3）この種の透し入器台は長崎県や佐賀県の有明海側を中心に出土例が多く、その系譜や型式の細別については意見の一致をみていないが、後期中葉から後半に盛行期があるのはほぼ確実である（原田1986を参照のこと）。

引用文献

北方町教育委員会（1976）牧古窯跡．北方町文化財調査報告書第１集

佐賀県教育委員会（1985）東宮裾遺跡群．佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書３，pp.67－68

佐賀県文化館（1970ａ）北方町東宮裾弥生遺跡．新郷土，第256号，pp.48－50，新郷土刊行会

佐賀県文化館（1970ｂ）北方町東宮裾弥生遺跡発掘調査報告（その二）．新郷土，第257号，pp.40－43，新郷土刊行会

柴元 静雄（1985）東宮裾遺跡．北方町史，上巻，pp.393－403，北方町

橋口 達也（1979）甕棺の編年的研究．九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXXI，中巻，pp.133－203，福岡県教育委員会

原田 保則（1986）透窓をもつ器台について．六角川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（下巻）茂手遺跡，pp.242－244，武雄市教育委員会

原田 保則（1993）小結．みやこ遺跡Ⅲ，武雄市文化財調査報告書第28集，武雄市教育委員会

第４章　馬場（ばば）遺跡

遺跡名：馬場（ばば）遺跡（略号ＢＡＢ）
所在地：佐賀（さが）県武雄（たけお）市 橘（たちばな） 町大字片白（かたしろ）字馬場（ばば）

第4章　馬場遺跡

1．馬場遺跡の概要

馬場遺跡は、佐賀県武雄市橘町大字片白字馬場に所在する。遺跡は杵島山山地西麓に接する標高5m程の水田部に立地しており、現況では不明瞭であるが扇状地ないし埋没段丘に載っているものと考えられる。調査区のすぐ西に接して潮見川の支流である東川が流れており、対岸に小野原遺跡A区がある。馬場遺跡の調査対象面積は11,700㎡で、調査範囲は2,070㎡である。発掘調査の行われた周辺の主な弥生時代遺跡としては、みやこ遺跡・潮見遺跡・郷ノ木遺跡（武雄市教委1986ａ）・茂手遺跡・納手遺跡（武雄市教委1986ｂ）、小野原遺跡（武雄市教委1987）、釈迦寺遺跡（武雄市教委1990）がある。このうち弥生前期の集落関連遺構は、みやこ遺跡・潮見遺跡・郷ノ木遺跡で土坑等が検出されているが、竪穴建物は発見されていない。墓地では、釈迦寺遺跡で中期の土器棺墓群が、みやこ遺跡・郷ノ木遺跡・小野原遺跡で中期から後期の土器棺墓・石棺墓等からなる墓地が検出されている。いずれにしても弥生時代の居住域が盆地周縁部だけでなく自然堤防上等の低地部にも及んでいることは興味深い。

遺構検出面は耕作土直下の黄褐色土で、調査区北東部では灰色粘質土が多く混じり遺構が急激になくなる。検出した遺構は中世と思われるＳＫ003を除けばいずれも弥生時代のもので、土坑50基、溝１条、竪穴建物１棟、掘立柱建物１棟、流路１条と小穴多数である。土坑は調査区中央部に南北方向の帯状に分布しており、この土坑群より東側は無遺構地帯、西側は段落ちとなって急に土坑の分布が疎らになるが竪穴建物（ＳＨ056）・掘立柱建物（ＳＢ040）各１棟がある。ＳＢ040より南側にはほとんど遺構が存在せず、１箇所だけ小穴のまとまる部分があり１間×１間の掘立柱建物に復元できる可能性があるが確証はない。西端には３基の土坑（このうちＳＫ003は中世の所産）と南北方向と思われる流路（ＳＤ001）が位置するが、試掘坑を設定したのみで全掘されていないため詳細は不明である。検出遺構の主体を占める土坑は、平面形態が円形・楕円形・隅丸方形・不整形と多様である。規模もまちまちではあるが、長径１～３ｍの範囲にほぼ収まる。埋土中に炭化物を含むものや、形態的に貯蔵穴の可能性が強いものなど、その性格もひとくくりにはできないようである。遺物のほとんどはこれらの土坑から出土している。土器はいずれも破片資料で量的にも多くないが、石鏃や石錐等の剥片石器類が比較的多く出土している。竪穴建物と思われるＳＨ056は周壁が全く遺存していないが、平面円形の竪穴建物であったと推測される。

以上のように、今回の馬場遺跡の調査では弥生時代前期の幅でほぼ収まる集落の一部を確認することができた。

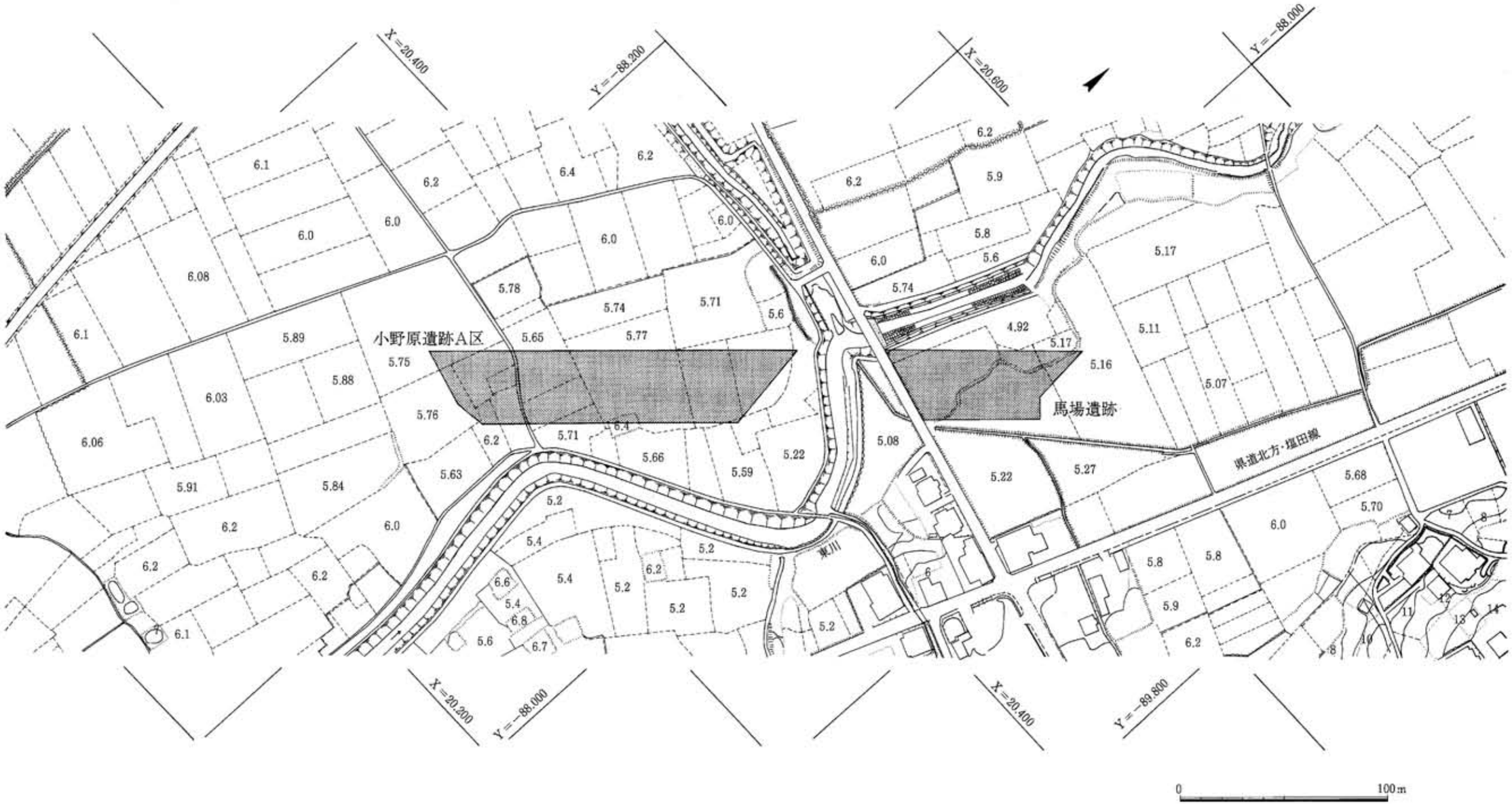
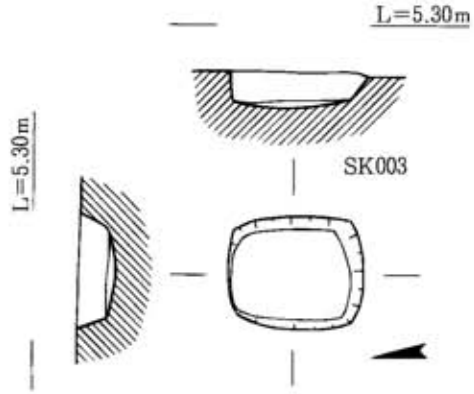


図21　馬場遺跡・小野原遺跡A区周辺の地形（1：2,000）

図22　馬場遺跡の遺構（1：250）

2．遺構

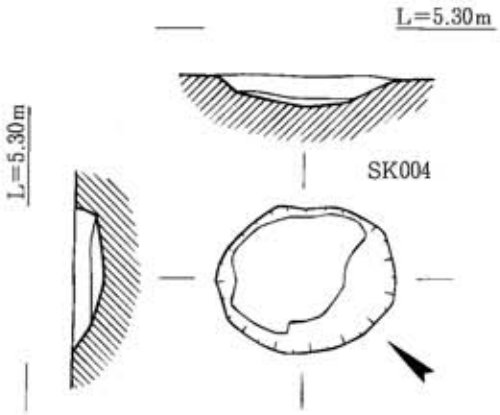


ＳＫ003

調査区西端で確認された川跡ＳＤ001の東岸辺に、３基の土坑が位置している。本土坑は、その最も南側のものである。

平面はやや隅丸の長方形。北側短辺の壁はほぼ直であるが、他は斜めに掘り込まれている。坑底は、中央に向けてゆるやかに深くなる。長さ1.11ｍ・幅0.92ｍ・深さ0.29ｍ。

須恵器・土師器（杯）・磨石が出土。

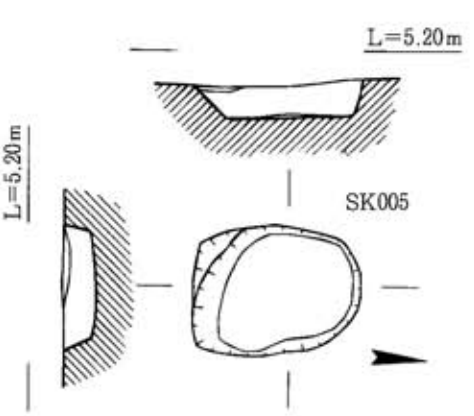


ＳＫ004

ＳＫ003と同じく、ＳＤ001の東岸辺に位置している。すぐ北側には、ＳＫ005がみられる。

平面は不整な楕円形。東壁はやや直であるが、他の壁からはかなり斜めに掘り込まれている。坑底はやや狭く不整であるが、各壁から中央にむけてゆるやかに深くなる。長径1.43ｍ・短径1.16ｍ・深さ0.24ｍ。

弥生土器・石片（黒曜石・安山岩）が出土した。

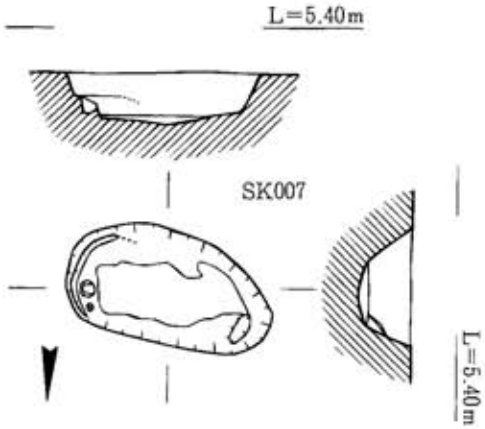


ＳＫ005

ＳＤ001の東岸辺に位置する３基の土坑のうち、最も北側のものである。

南西部が外側に広くなっているが、基本的には楕円形である。北側の壁はやや直であるが、南側は斜めに掘り込まれている。坑底はほぼ平坦である。長径1.46ｍ・短径1.13ｍ・深さ0.28ｍ。

弥生土器・石片（黒曜石・安山岩）が出土した。



ＳＫ007

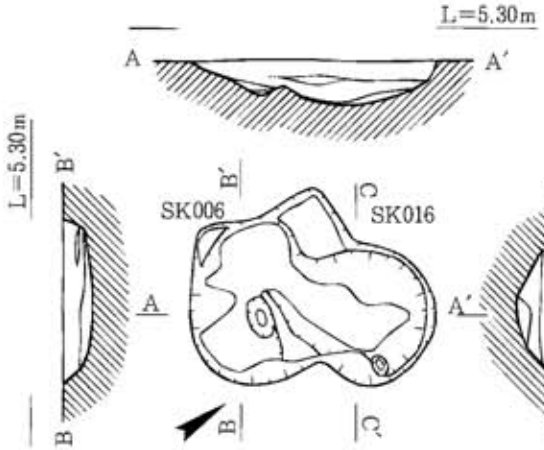
調査区中央よりやや南側に位置している。北側にＳＫ008・009がみられる。

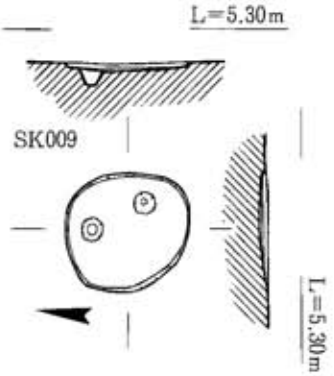
平面は楕円形。東側のみ２段に掘り下げる。他の壁はいずれも１段であり、斜めに掘り込まれている。坑底は不整であるが、各壁から中央にむけてゆるやかに深くなる。長径1.69ｍ・短径0.91ｍ・深さ0.43ｍ。

弥生土器・石鏃・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

0　2m

図23　ＳＫ003・ＳＫ004・ＳＫ005・ＳＫ007（１：60）





ＳＫ006

調査区南側に位置している。南側にＳＫ019・057がみられる。

東側のＳＫ016と切り合っているが、本土坑の方が新しい。

平面は隅丸長方形が考えられるが、坑底も不整形であるため、不明。各壁からは斜めに掘り込まれ、坑底もゆるやかに深くなる。長さ1.31ｍ・深さ0.24ｍ。幅は不明。また、坑底の北側に１個の小穴があるが、本土坑との関係は不明。

弥生土器・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

ＳＫ016

西側をＳＫ006と切り合っているが、平面は楕円形。各壁からは斜めに深く掘り込まれている。坑底はやや狭く、ゆるやかに深くなる。長さ1.20ｍ＋αｍ・幅1.10ｍ・深さ0.37ｍ。

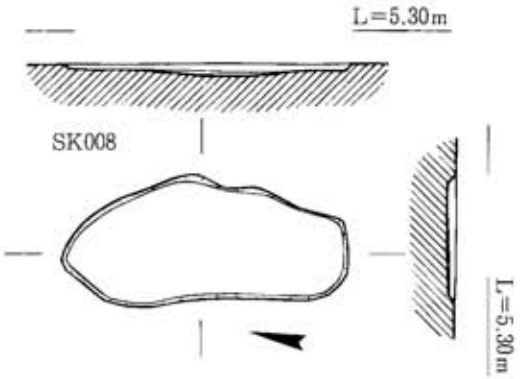
弥生土器・石鏃・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

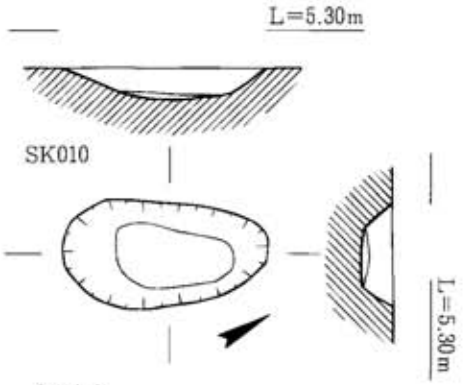
ＳＫ009

調査区中央よりやや南西側に位置している。東側にＳＫ007・008がみられる。

平面はやや不整な円形。大きく削平されており、ほとんど残存していないが、各壁からは斜めに掘り込まれている。坑底もわずかに深くなる。直径0.95～1.00ｍ・深さ0.08ｍ。また、坑底に２個の小穴があるが、本土坑との関係は不明。

遺物は出土していない。





ＳＫ008

ＳＫ009と同じく、調査区中央よりやや南西側に位置している。

平面は南北方向に細長い不整形。大きく削平されており、ほとんど残存していないが、各壁からは斜めに掘り込まれている。坑底はわずかに中央部が深くなる。最大長2.30ｍ・最大幅1.00ｍ・深さ0.07ｍ。遺物は出土していない。

ＳＫ010

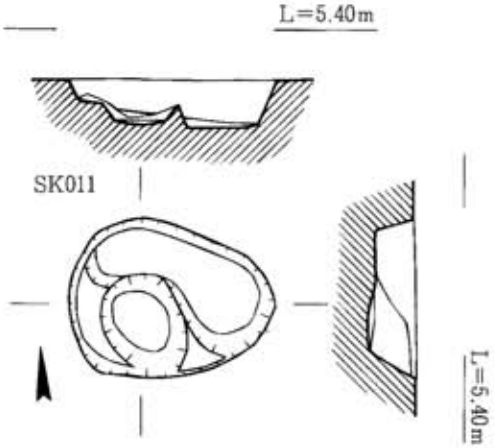
調査区北側に土坑の一群が分布しているが、その中の南西部に位置するものである。北側にＳＫ014、東側にＳＫ015、そして西側にＳＫ011・026がみられる。

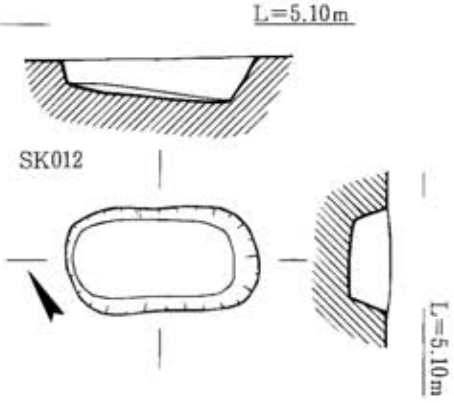
平面はやや不整な楕円形。各壁からは、斜めに深く掘り込まれている。坑底はやや狭く、平坦である。長径1.66ｍ・短径0.86ｍ・深さ0.25ｍ。

弥生土器・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

0　2m

図24　ＳＫ006・016・ＳＫ008・ＳＫ009・ＳＫ010（１：60）





ＳＫ011

調査区北側に位置する土坑群の中では、最も南西端のものである。

平面はやや不整な楕円形であるが、その中にはさらに２箇所の掘り込みがみられる。北側のものは不整形で、坑底は平坦。最大長1.57ｍ・最大幅0.74ｍ・深さ0.39ｍ。南側のものは楕円形で、坑底は中央にむけてゆるやかに深くなる。長径0.88ｍ・短径0.63ｍ・深さ0.37ｍ。いずれの壁も斜めに掘り込まれている。

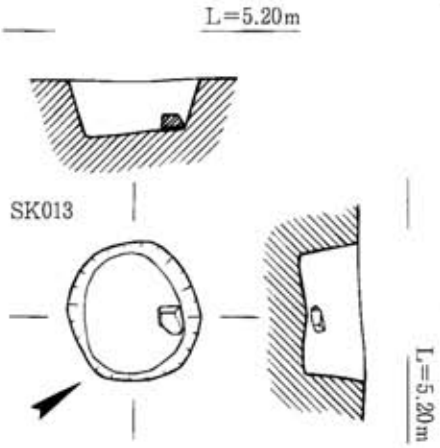
弥生土器・砥石・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

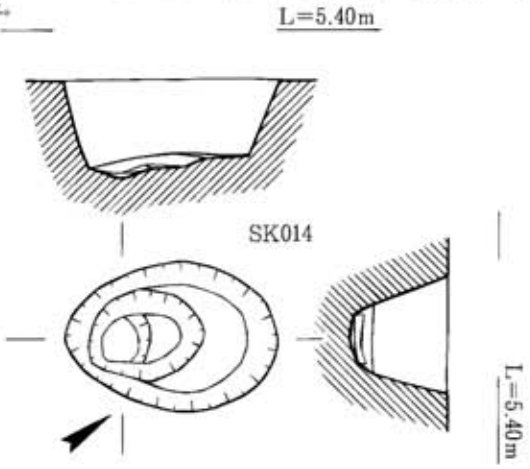
ＳＫ012

調査区のなかで、最も北側に位置する土坑のひとつである。すぐ南側にＳＫ013がみられる。

平面は隅丸長方形。各壁からは、斜めに掘り込まれている。坑底はほぼ平坦であるが、東側へむけて次第に深くなる。長さ1.55ｍ・幅0.82ｍ・深さ0.19～0.35ｍ。

弥生土器・石鏃・石片（黒曜石・安山岩）が出土。





ＳＫ013

調査区の北側に位置しており、すぐ北側にはＳＫ012がみられる。

平面はやや不整な円形。各壁からはやや直に掘り込まれている。坑底はほぼ平坦であるが、西側がわずかに深くなる。直径1.08～1.12ｍ・深さ0.39～0.45ｍ。また、坑底北隅に大きさ0.2ｍほどの石が１個みられるが、本土坑との関係は不明。

弥生土器。石片（黒曜石・安山岩）が出土。

ＳＫ014

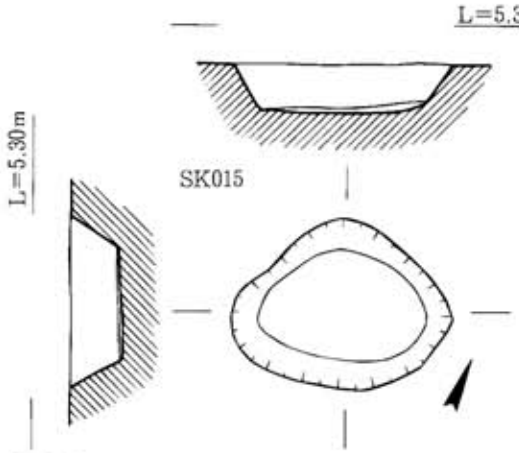
調査区北側の土坑群の中では、南西端に位置する土坑のひとつである。すぐ南側にＳＫ010・ＳＫ011・ＳＫ026がみられる。

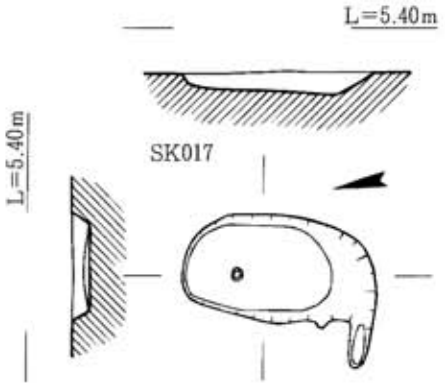
平面は楕円形。土坑西隅にむけて３段に掘り下げているが、その各壁からの最初の掘り込みは斜めに深い。坑底の１・２段めは平坦であるが、３段めは狭く、中央にむけて深くなる。長径1.72ｍ・短径1.21ｍ・深さ0.79ｍ。

弥生土器・石鏃・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

0　2m

図25　ＳＫ011・ＳＫ012・ＳＫ013・ＳＫ014（１：60）





ＳＫ015

ＳＫ010・011・014と同じく、調査区北側の土坑群の中では、南部に位置している。西側にＳＫ010・014がみられる。

平面は不整形。各壁からは、斜めに掘り込まれている。坑底はほぼ平坦。最大長1.77ｍ・最大幅1.37ｍ・深さ0.39ｍ。

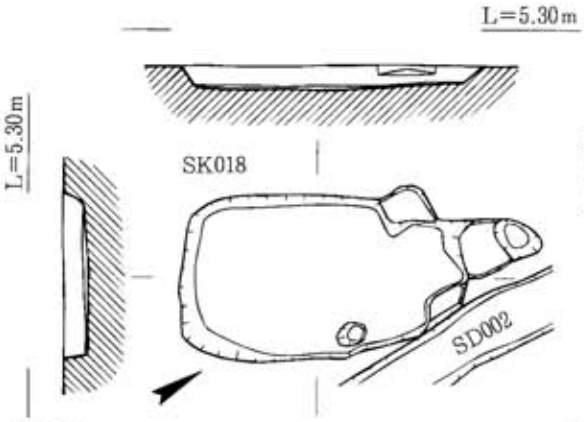
弥生土器・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

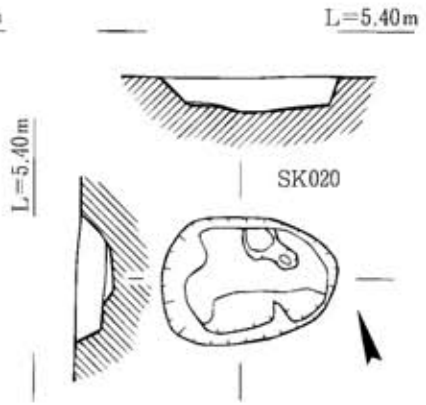
ＳＫ017

調査区中央より南側に位置している。この区域に他に土坑はなく、離れている。

南西部に小さな掘り込みがあるが、平面は隅丸の長方形。各壁からは、斜めに掘り込まれている。坑底はほぼ平坦であるが、南側にむけて次第に深くなる。長さ1.57ｍ・幅0.86ｍ・深さ0.08～0.18ｍ。

弥生土器・石鏃・石片（黒曜石・安山岩）が出土。





ＳＫ018

調査区の南東側に位置している。この区域に他に土坑はなく、離れている。

土坑の北東隅をＳＤ002と切り合っているが、新旧関係については明確でない。

平面は、北側部分では不整形であるが、南側部では明瞭な隅丸長方形をなしている。切り合いはみられなかったが、北側は別の遺構と重複しているのかもしれない。各壁からは、斜めに掘り込まれている。坑底は広く、ほぼ平坦である。最大長2.88ｍ、最大幅1.31ｍ・深さ0.20ｍ。

弥生土器。石片（黒曜石・安山岩）が出土。

ＳＫ020

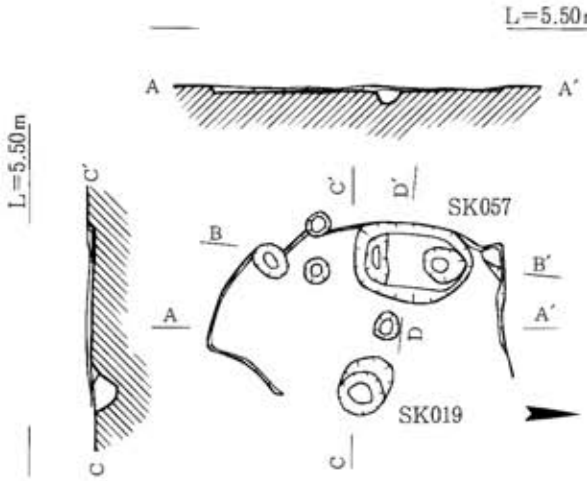
調査区の南東側に位置している。南東側にＳＫ024・025がみられる。

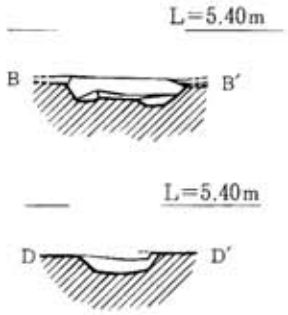
東側がやや狭いが、平面は隅丸長方形。南側からだけは２段に掘り下げている。その各壁からの掘り込みは斜めである。坑底は不整であるが、中央にむけてゆるやかに深くなる。長さ1.41ｍ・幅1.01ｍ・深さ0.27ｍ。

弥生土器・土弾・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

0　　2m

図26　ＳＫ015・ＳＫ017・ＳＫ018・ＳＫ020（１：60）





ＳＫ019

調査区南端に位置している。北側にＳＫ006・016がみられるだけで、他に土坑はない。

西端部でＳＫ057と切り合っているが、その新旧関係は不明。

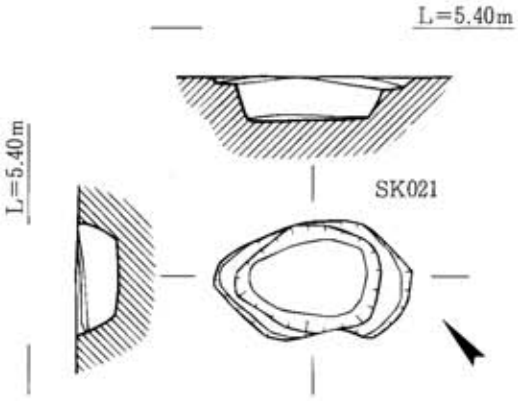
全体を大きく削平されており、東壁部は消滅。平面は不整形である。最大長2.38ｍ・最大幅1.37＋αｍ・深さ0.05ｍ。土坑内に小穴がみられるが、互いの関係は不明。

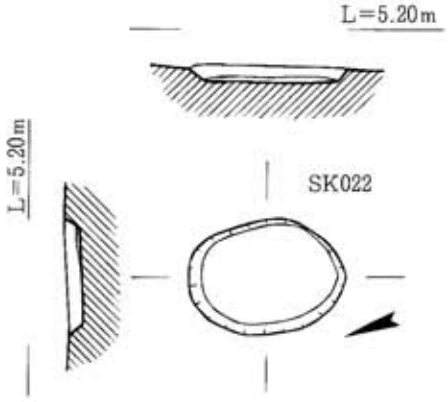
弥生土器。石片（黒曜石・安山岩）が出土。

ＳＫ057

平面はやや不整な隅丸長方形。各壁からは斜めに掘り込まれている。坑底はほぼ平坦であるが、その南北両端にさらに掘り込みがなされている。深さはそれぞれ0.03ｍと0.05ｍで、かなり浅い。全体の長さ0.95ｍ・幅0.64ｍ・深さ0.17ｍ。

遺物は出土していない。





ＳＫ021

調査区の南東端に位置している。ＳＤ002を挟んで、西側にＳＫ024・025がみられる。

２段に掘り込まれているが、その平面は定形ではない。不整な楕円形か。１・２段の各壁からは、いずれもやや斜めに掘り込まれている。坑底はほぼ平坦である。１段めの長径1.60ｍ・短径0.89ｍ・深さ0.09ｍ、２段めの長径1.18ｍ・短径0.86ｍ・深さ0.30ｍ。

弥生土器。土製紡錘車・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

ＳＫ022

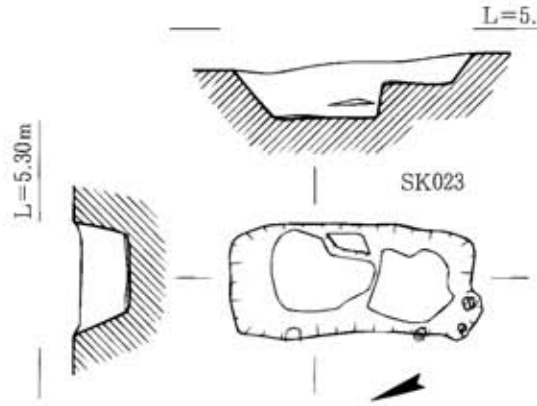
調査区中央よりやや西側に位置している。すぐ西側にはＳＢ056がみられるが、この遺構の壁が残存していると、切り合うかあるいはその住居内に収まるという関係になろう。

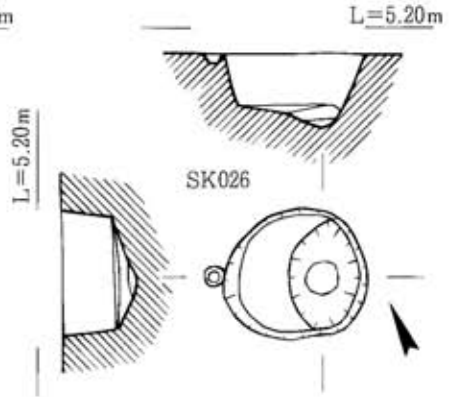
平面は楕円形。各壁からは、斜めに掘りこまれている。坑底はほぼ平坦。長径1.26ｍ・短径0.91ｍ・深さ0.13ｍ。

弥生土器・石鏃・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

0　2m

図27　ＳＫ019・057・ＳＫ021・ＳＫ022（１：60）





ＳＫ023

調査区の最も南端に位置している。この１基だけで、他に土坑はない。

平面は隅丸長方形。土坑は２段であり、１段めの北側をさらに掘り下げ、２段めを造っている。１段めの各壁からは、斜めに掘り込まれている。２段めは、南壁がほぼ直であるが、他は斜めに深い。坑底は、いずれもほぼ平坦である。全体の長さ1.94ｍ・幅0.88ｍ・深さ0.44ｍ。

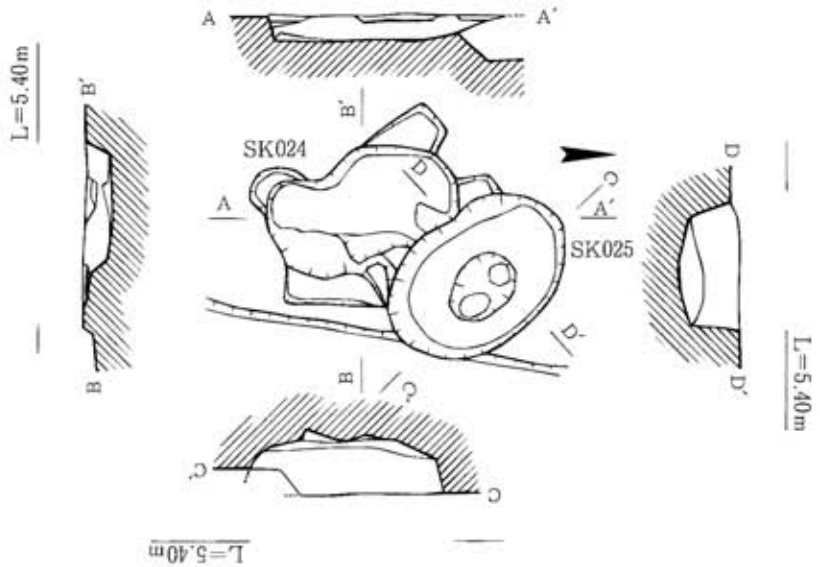
弥生土器・石鏃・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

ＳＫ026

調査区北側に分布する一群の土坑の中で、その南西部に位置している。北側にＳＫ053、東側にＳＫ010、南側ＳＫ011がみられる。

平面はほぼ円形。各壁からは、やや直に深く掘り込まれている。坑底は、東側にむけてやや深くなる。その東端部は、さらに0.13ｍほど掘り下げる。直径1.05－1.15ｍ・深さ0.47＋0.13ｍ。

弥生土器・石片（黒曜石・安山岩）が出土。



ＳＫ024

ＳＫ021とともに、調査区の南東端に位置している。

北東部でＳＫ025と切り合っているが、その新旧関係は不明。

平面は不整形。東壁部は不明瞭であるが、他の各壁からはやや斜めに掘り込まれている。坑底はほぼ平坦である。最大長1.55ｍ、最大幅1.28ｍ・深さ0.23ｍ。また、まわりに数箇所の浅い掘り込みがみられるが、本土坑との関係は不明。

弥生土器・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

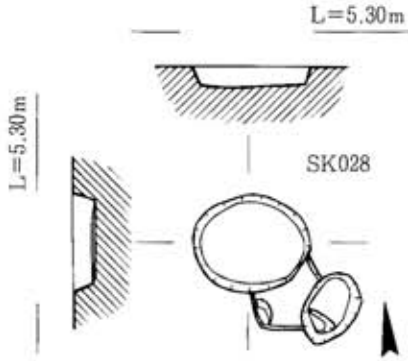
ＳＫ025

平面は楕円形。各壁からはほぼ直に深く掘り込まれている。坑底は中央にむけてやや深くなり、そこにさらに浅い掘り込みがなされている。その平面はやはり楕円形であるが、坑底は南北の２箇所で深い。長径1.58ｍ・短径1.08ｍ・深さ0.44ｍ、また坑底の小穴の長径0.60ｍ・短径0.45ｍ・深さ0.05ｍと0.09ｍ。

弥生土器が出土。

0　2m

図28　ＳＫ023・ＳＫ026・ＳＫ024・025（１：60）



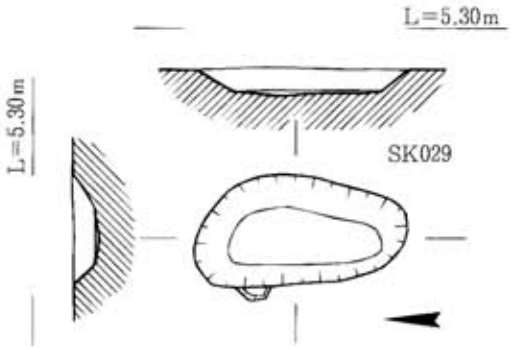
ＳＫ028

調査区中央よりやや東側に位置している。この周囲に他に土坑はなく、やや離れている。

土坑の南東部を他の小穴と切り合っているが、互いの新旧関係は不明。

平面は楕円形。各壁からはほぼ直に掘り込まれている。坑底はほぼ平坦である。長径0.94ｍ・短径0.78ｍ・深さ0.17ｍ。

弥生土器が出土。

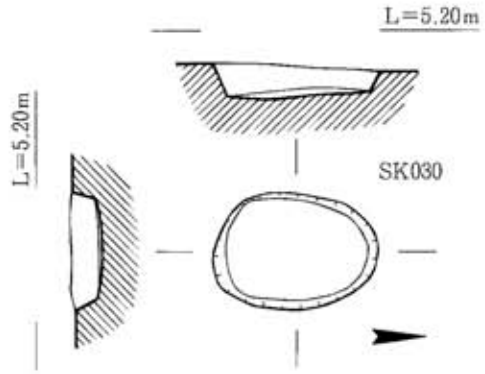


ＳＫ029

調査区の北側に位置している。すぐ北側にはＳＫ012・013がみられる。

平面やや不整な長楕円形。各壁からは、斜めに掘り込まれている。坑底はほぼ平坦である。長径1.71ｍ・短径0.88ｍ・深さ0.22ｍ。

弥生土器・石鏃が出土。

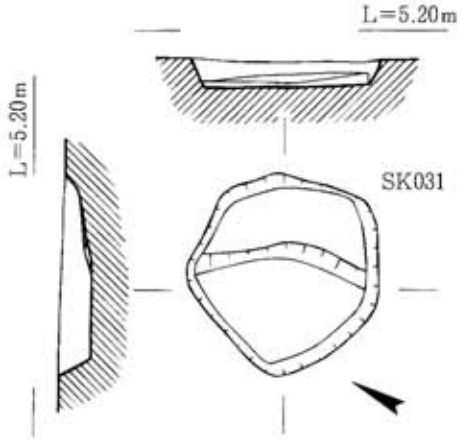


ＳＫ030

調査区北側に分布する一群の土坑の中で、その東部に位置している。西側にＳＫ041・054、南側にＳＫ051がみられる。

平面は楕円形。各壁からは、やや斜めに掘り込まれている。坑底は、南側へむけてわずかに深くなる。長径1.34ｍ。短径0.95ｍ・深さ0.26ｍ。

弥生土器・石片（黒曜石・安山岩）が出土。



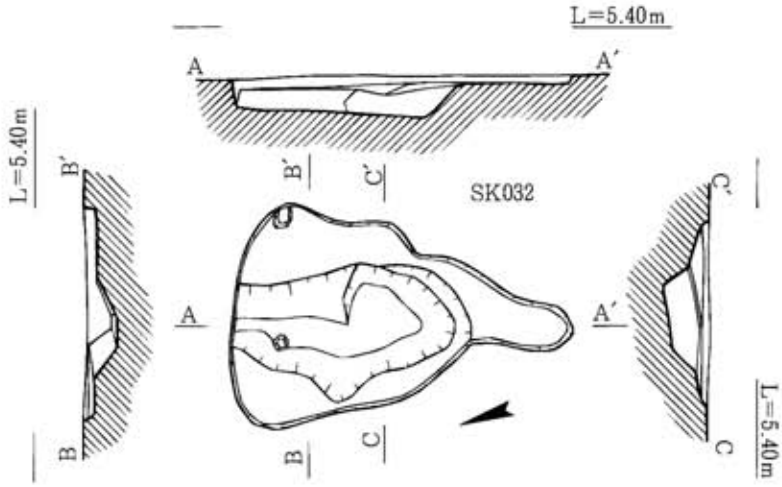
ＳＫ031

調査区の東側に位置している。すぐ西側にはＳＤ002がはしる。

平面は不整形。各壁からは、斜めに掘り込まれている。坑底は、西側へむけてわずかに深くなる。その西半部を、さらに0.06ｍほど掘り下げる。最大長1.64ｍ・最大幅1.50ｍ・深さ0.19＋0.06ｍ。

弥生土器・石錐・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

図29　ＳＫ028・ＳＫ029・ＳＫ030・ＳＫ031（１：60）

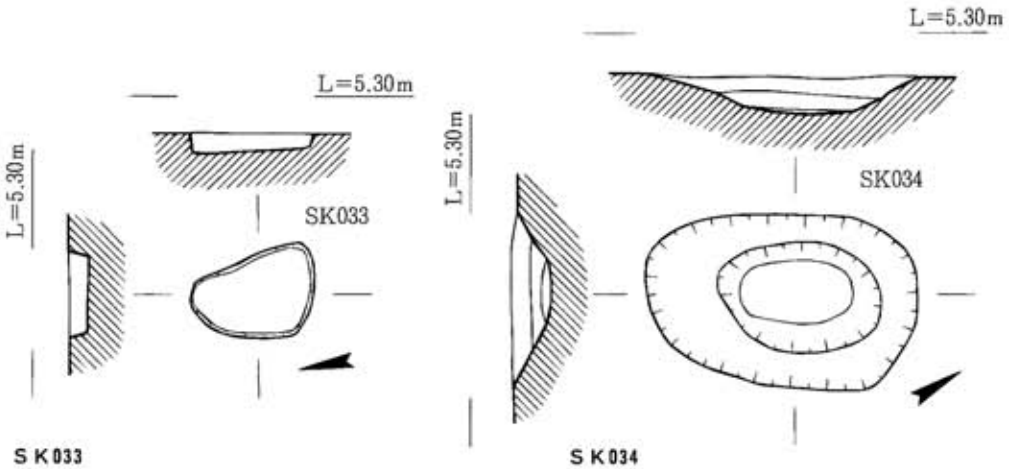


ＳＫ032

調査区中央よりやや南東側に位置している。西側ＳＫ033がみられる。

平面は不整形。土坑は概ね２段であり、１段めのほぼ中央をさらに掘り下げ２段めを造っている。１段めの各壁からはほぼ直に掘り込まれている。２段めは北壁がほぼ直であるが、他は斜めに深い。坑底は、南側にむけて次第に深くなる。最大長2.74ｍ・最大幅1.73ｍ・深さ0.07＋0.28ｍ。

弥生土器・石鏃・石片（黒曜石・安山岩）が出土。



ＳＫ033

調査区中央よりやや南東側に位置している。東側にＳＫ032がみられる。

平面は不整形。各壁からはほぼ直に掘り込まれている。坑底は、北側へむけて次第に深くなる。最大長1.05ｍ・最大幅0.71ｍ・深さ0.18ｍ。

弥生土器が出土。

ＳＫ034

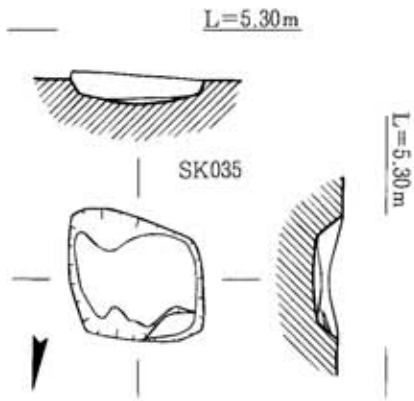
調査区北側に分布する一群の土坑の中で、そのほぼ中央部に位置している。北側にＳＫ043・044がみられる。

平面は楕円形。土坑は２段であり、１段めのほぼ中央をさらに掘り下げ、２段めを造っている。１・２段の各壁からは、いずれも斜めに掘り込まれ、坑底も中央にむけてゆるやかに深くなる。長径2.20ｍ・短径1.39ｍ・深さ0.17＋0.12ｍ。

弥生土器・石鏃・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

0　　2m

図30　ＳＫ032・ＳＫ033・ＳＫ034（１：60）

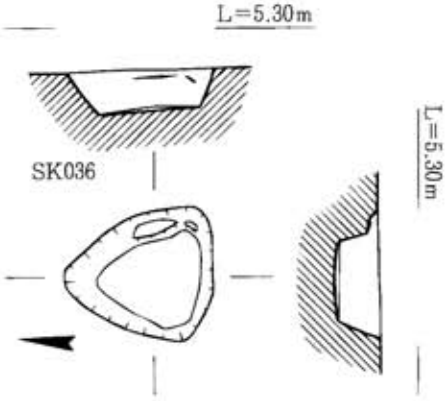


ＳＫ035

調査区の西側に位置している。やや離れるが、東側にはＳＢ040がみられる。

平面は不整形。各壁からは、斜めに掘り込まれている。坑底は不整であるが、中央にむけてわずかに深くなる。最大長1.40ｍ・最大幅1.12ｍ・深さ0.24ｍ。

弥生土器・石鏃が出土。

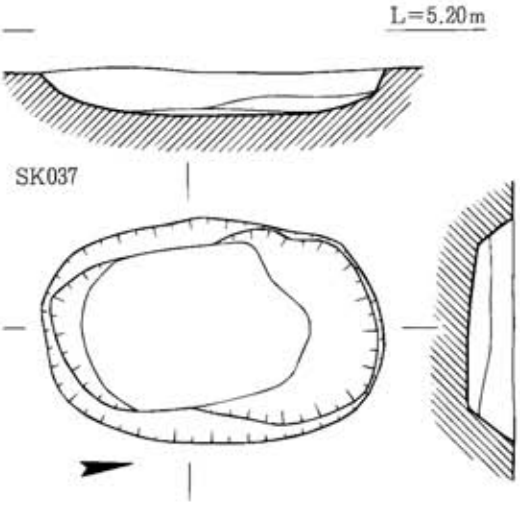


ＳＫ036

調査区の東側に位置している。すぐ西側にはＳＤ002がはしる。

平面は隅丸三角形。各壁からは、斜めに掘り込まれている。坑底は、北側へむけて次第に深くなる。長さ1.18ｍ・幅1.10ｍ・深さ0.35ｍ。

弥生土器・石錐。石片（黒曜石・安山岩）が出土。

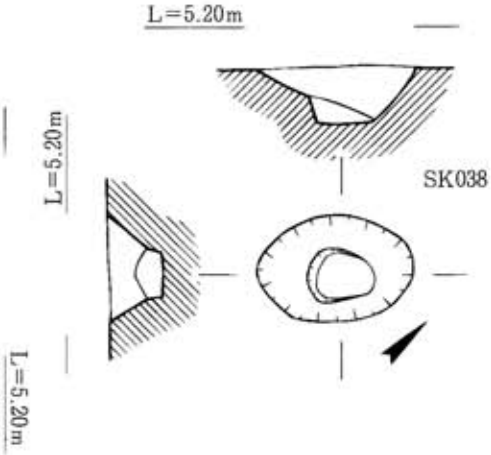


ＳＫ037

調査区の西側に位置している。やや離れるが、東側にはＳＢ056がみられる。

東西両側がやや広がるが、平面は隅丸長方形。土坑の東西両側は１段であるが、南北両側は２段に掘り下げる。各壁からは斜めに掘り込まれ、坑底も中央にむけてゆるやかに深くなる。長さ2.76ｍ・幅1.82ｍ・深さ0.36ｍ。

弥生土器・石鏃・石片（黒曜岩・安山岩）が出土。



ＳＫ038

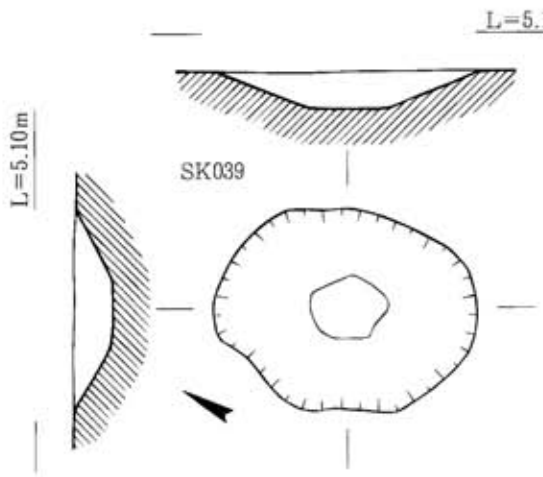
調査区の最も東端に位置している。やや離れるが、両側にＳＫ036・ＳＤ002がみられる。

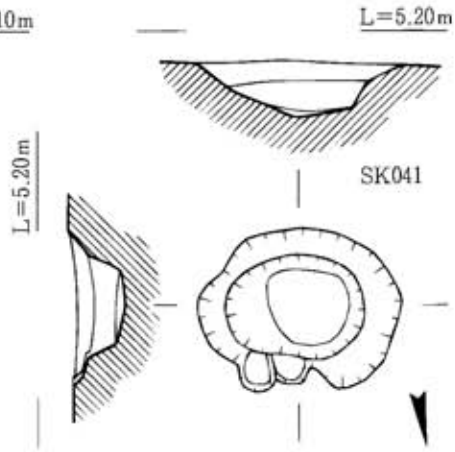
平面は楕円形。土坑は２段であり、１段めのほぼ中央をさらに掘り下げ、２段めを造っている。１段めの各壁からは、斜めに深く掘り込まれている。２段めは、北壁を除く各壁をほぼ直に掘り下げ、造っている。坑底は、ほぼ平坦である。長径1.26ｍ・短径0.87ｍ・深さ0.22＋0.23ｍ。

遺物は出土していない。

0　2m

図31　ＳＫ035・ＳＫ036・ＳＫ037・ＳＫ038（１：60）





ＳＫ039

調査区北側に分布する一群の土坑の中で、その北東端に位置している。南西側にＳＫ050・055がみられる。

西側がやや不整であるが、平面は楕円形。各壁からは、斜めに深く掘り込まれている。坑底は狭く、ほぼ平坦である。長径2.09ｍ・短径1.67ｍ・深さ0.30ｍ。

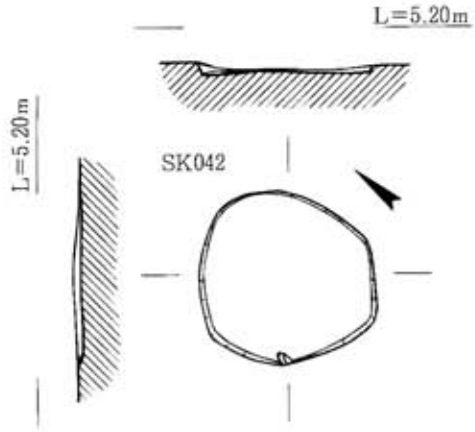
弥生土器・土製紡錘車・石鏃・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

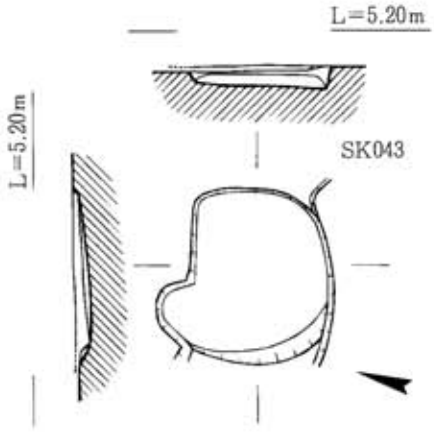
ＳＫ041

調査区北側に分布する一群の土坑の中で、その東部に位置している。南東側にＳＫ030、南西側にＳＫ054がみられる。

北側が不整であるが、平面は楕円形。土坑は２段であり、１段めのほぼ中央をさらに掘り下げ、２段めを造っている。１・２段の各壁からは、いずれも斜めに掘り込まれるが、２段めの方がやや直に近い。坑底は、中央にむけてわずかに深くなる。長径1.66ｍ・短径1.12ｍ・深さ0.45ｍ。また、北壁に小穴がみられるが、本土坑との関係は不明。

弥生土器・石片（黒曜石・安山岩）が出土。





ＳＫ042

調査区北側に分布する一群の土坑の中で、その東部に位置している。南側にＳＫ050・055がみられる。東側の張り出しが弱いが、平面は隅丸方形。各壁からは斜めに掘り込まれる。坑底はほぼ平坦である。一辺の長さ1.40ｍ・深さ0.08ｍ。

弥生土器が出土。

ＳＫ043

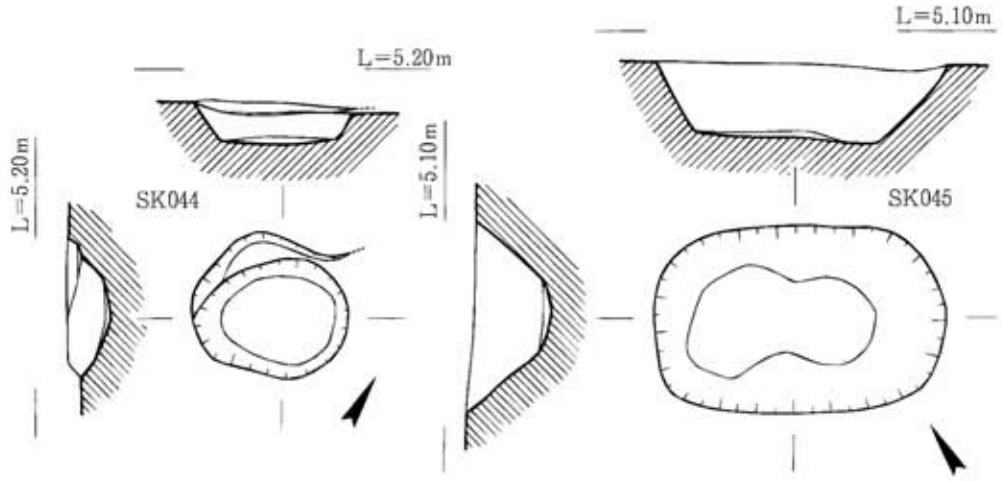
調査区北側に分布する一群の土坑の中で、そのほぼ中央部に位置している。西側にＳＫ044、南西側にＳＫ034がみられる。

平面は、隅丸長方形の北西隅が張り出した形の、不整形である。各壁からは、斜めに掘り込まれている。坑底は、西側へむけてわずかに深くなる。最大長1.41ｍ・幅1.13～1.38ｍ・深さ0.19ｍ。

弥生土器・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

0　　2m

図32　ＳＫ039・ＳＫ041・ＳＫ042・ＳＫ043（１：60）



ＳＫ044

調査区北側に分布する一群の土坑の中で、そのほぼ中央部に位置している。東側にＳＫ043・南側にＳＫ034がみられる。

平面は楕円形。各壁からは斜めに掘り込まれ、坑底も中央にむけてゆるやかに深くなる。長径1.25ｍ・短径0.98ｍ・深さ0.35ｍ。

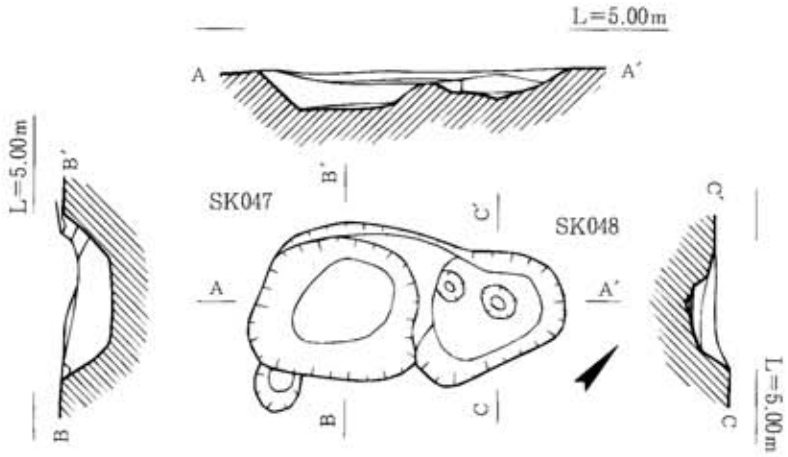
弥生土器・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

ＳＫ045

調査区北側に分布する一群の土坑の中で、その北部に位置している。南側にＳＫ043・044がみられる。

平面は隅丸長方形。各壁からは、斜めに深く掘り込まれている。坑底は、東側にむけて次第に深くなる。長さ2.34ｍ・幅1.52ｍ・深さ0.63ｍ。

弥生土器・石片（黒曜石）が出土。



ＳＫ047

調査区北側に分布する一群の土坑の中で、その最北端に位置するもののひとつである。

北東側のＳＫ048とは隣り合う。東側にＳＫ052がみられる。

北側がやや狭いが、平面は隅丸長方形。各壁からは、斜めに深く掘り込まれる。坑底はほぼ平坦である。長さ1.13～1.35ｍ・幅1.14ｍ・深さ0.40ｍ。なお、ＳＫ048との新旧関係は不明。

弥生土器・磨石・石鏃・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

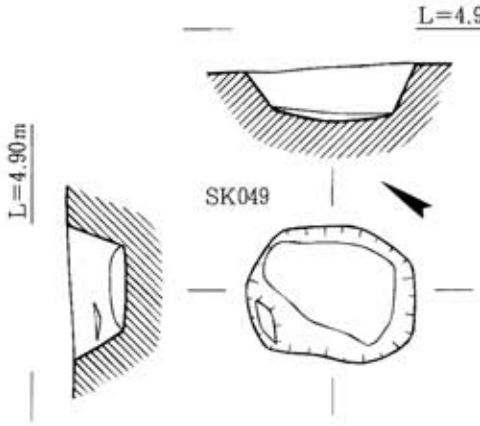
ＳＫ048

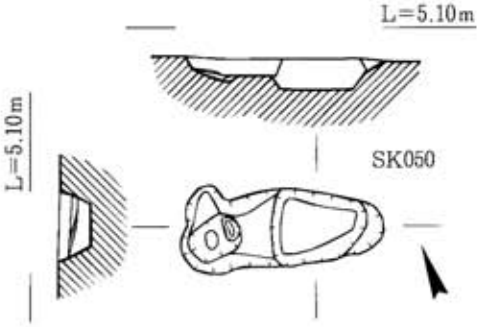
南側がやや広がっており、平面は不整形。各壁からは、斜めに掘り込まれる。坑底はほぼ平坦であるが、そこに２個の小穴が掘られている。最大長1.30＋α ｍ・最大幅1.01ｍ・深さ0.29ｍ。小穴の深さ0.05ｍ。

石片（黒曜石）が出土。

0　　2m

図33　ＳＫ044・ＳＫ045・ＳＫ047・048（１：60）





ＳＫ049

調査区北側に分布する一群の土坑の中で、その最北端に位置している。やや離れるが、南側にＳＫ047・048がみられる。

全体的にやや不整であるが、平面は隅丸長方形。各壁からは、斜めに深く掘り込まれ、坑底も中央へむけてゆるやかに深くなる。長さ1.36ｍ・幅1.07ｍ・深さ0.45ｍ。

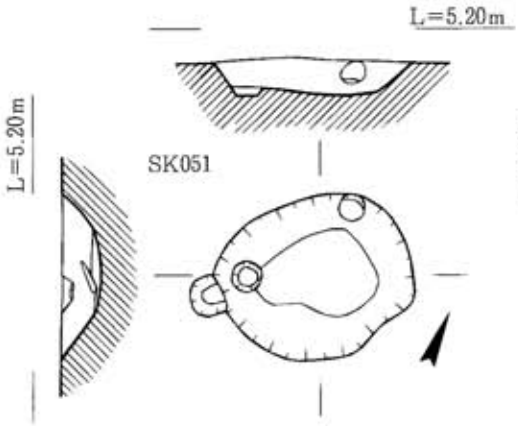
弥生土器・石鏃・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

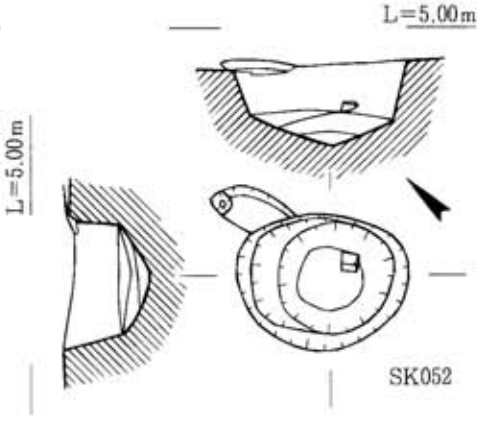
ＳＫ050

調査区北側に分布する一群の土坑の中で、その東部に位置している。西側にＳＫ055がみられる。

平面は不整形。各壁からは、斜めに掘り込まれる。坑底はほぼ平坦であるが、その東西両端にさらに小穴が掘られている。最大長1.65ｍ・幅0.62ｍ・深さ0.14ｍ。東側の小穴の深さ0.11ｍ、西側は0.05ｍ。

弥生土器が出土。





ＳＫ051

調査区北側に分布する一群の土坑の中で、その南東部に位置している。北側にＳＫ030、西側にＳＫ015がみられる。

南東側がやや不整であるが、平面は楕円形。各壁からは、斜めに掘り込まれる。坑底は、東側へむけてゆるやかに深くなる。その西端に、１個の小穴が掘られている。長径1.59ｍ・短径1.32ｍ・深さ0.30ｍ。小穴の深さ0.08ｍ。

弥生土器・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

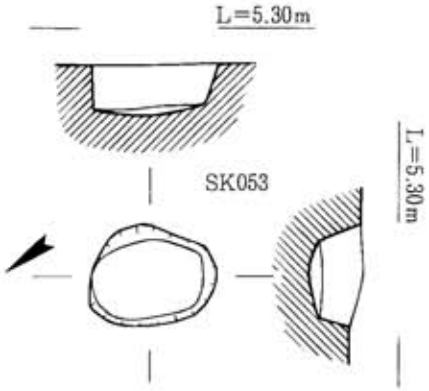
ＳＫ052

調査区北側に分布する一群の土坑の中で、その北東端に位置している。西側にＳＫ047・048がみられる。

平面は楕円形。各壁からは、やや直に深く掘り込んだ後、土坑中央にむけてさらに斜めに掘り下げている。坑底は、かなり狭い。長径1.39ｍ・短径1.10ｍ・深さ0.67ｍ。

弥生土器・石鏃・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

図34　ＳＫ049・ＳＫ050・ＳＫ051・ＳＫ052（１：60）

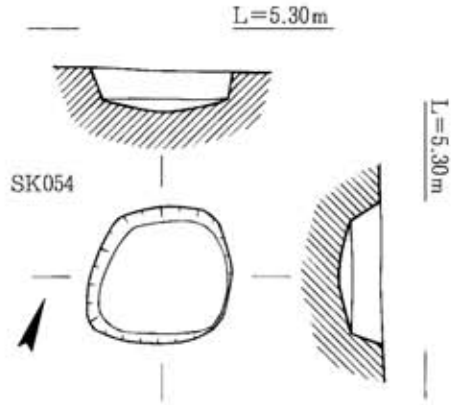


ＳＫ053

調査区北側に分布する一群の土坑の中で、その南西部に位置している。東側にＳＫ014，南側にＳＫ026がみられる。

東側がやや不整であるが、平面は楕円形。各壁からは、やや直に深く掘り込まれ、坑底も中央へむけてゆるやかに深くなる。長径1.02ｍ・短径0.81ｍ・深さ0.42ｍ。

遺物は出土していない。

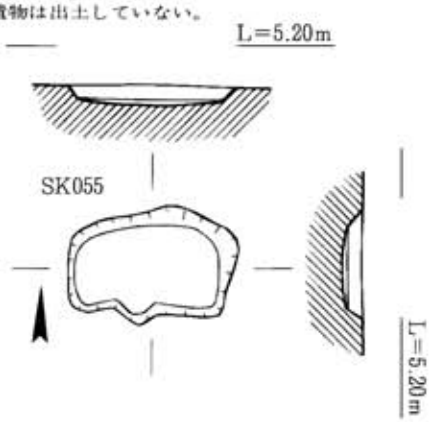


ＳＫ054

調査区北側に分布する一群の土坑の中で、その中央部よりやや南に位置している。

北側がやや狭いが、平面は隅丸長方形。各壁からは、やや直に掘り込んだ後、土坑中央にむけてさらに斜めに掘り下げている。坑底は、かなり狭い。１辺の長さ0.90～1.05ｍ・深さ0.34ｍ。

弥生土器・石片（黒曜石）が出土。



ＳＫ055

調査区北側に分布する一群の土坑の中で、その東部に位置している。東側にＳＫ050がみられる。

南北両側がやや不整であるが、平面は隅丸長方形。各壁からは、斜めに掘り込まれ、坑底も中央にむけてわずかに深くなる。長さ1.36ｍ・幅0.88ｍ・深さ0.16ｍ。

弥生土器・石鏃・磨石・石片（黒曜石・安山岩）が出土。

図35　ＳＫ053・ＳＫ054・ＳＫ055（１：60）

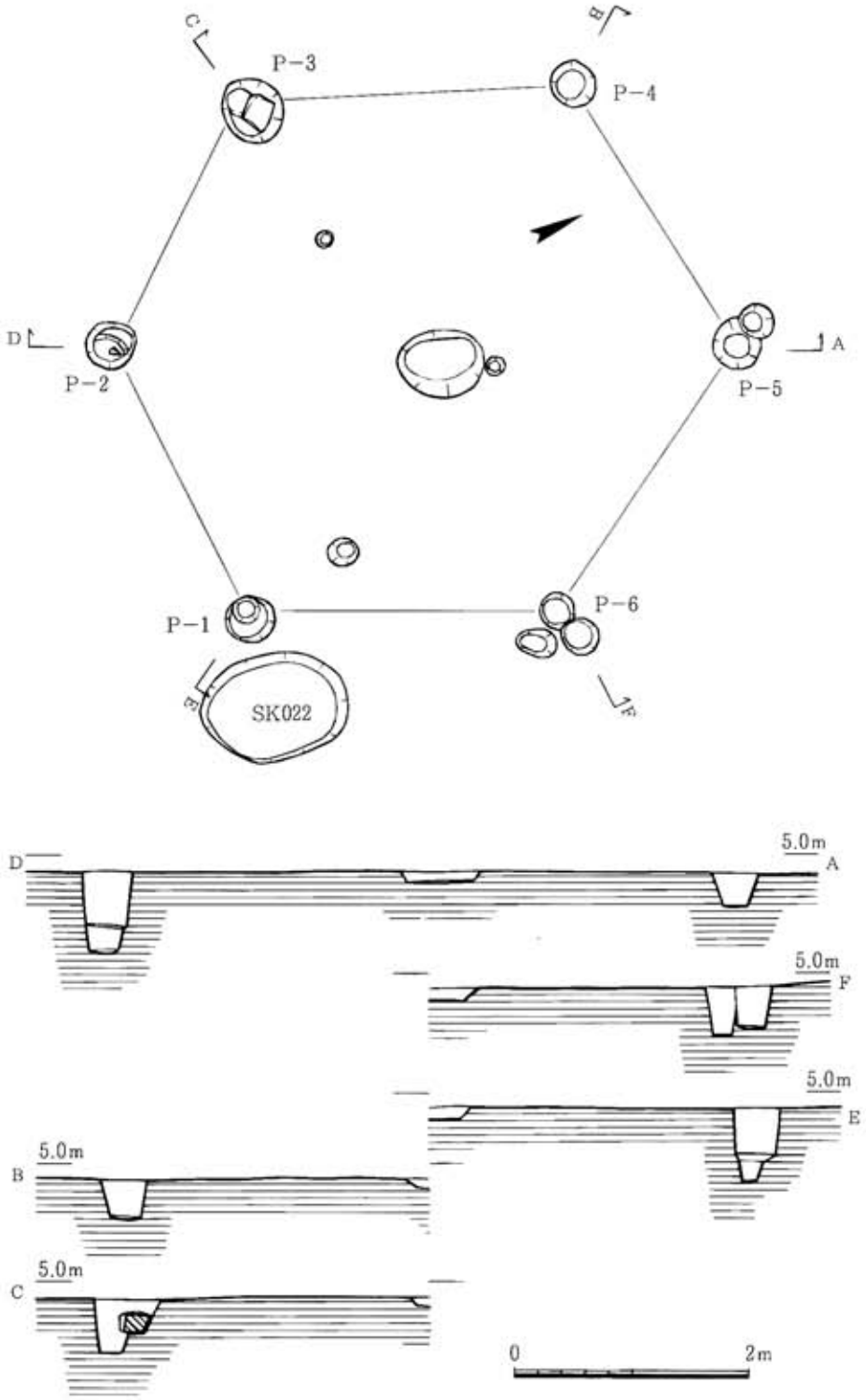


図36　S H056（1：60）

ＳＨ056（図36）

調査区中央部西側に位置する竪穴建物で、すぐ南に接してＳＢ040がある。削平が著しく壁は全く遺存していなかった。炉の可能性がある長軸0.8ｍ、短軸0.6ｍ、深さ0.1ｍの小土坑を中心に６箇所の主柱穴が巡り、平面が円形の竪穴建物であったものと考えられる。柱間は2.3～2.7ｍ、柱掘方は径0.3～0.6ｍと小型である。遺物はＰ－２から石鏃が出土した。

ＳＢ040（図37）

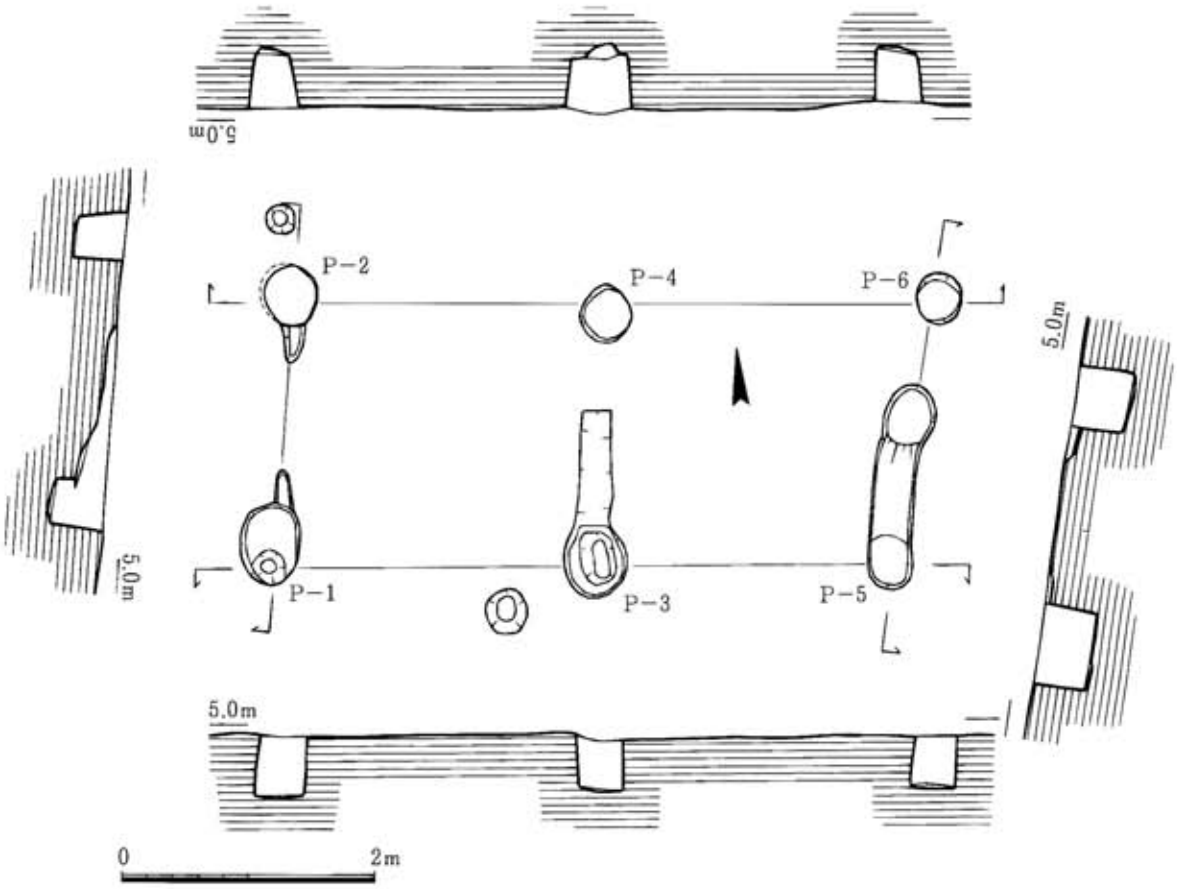
調査区中央部西側に位置する掘立柱建物で、すぐ北に接してＳＨ056がある。主軸はN85°Wのほぼ東西方向である。梁行１間（2.1ｍ）、桁行２間（4.90ｍ、5.03ｍ）で梁行柱間2.1ｍ、桁行柱間2.4～2.6ｍである。柱掘方は径0.4～0.5ｍと小型で、内側に向かって延びる部分は染み状に土質の異なっていた部分である。遺物はＰ－５から削器が出土した。

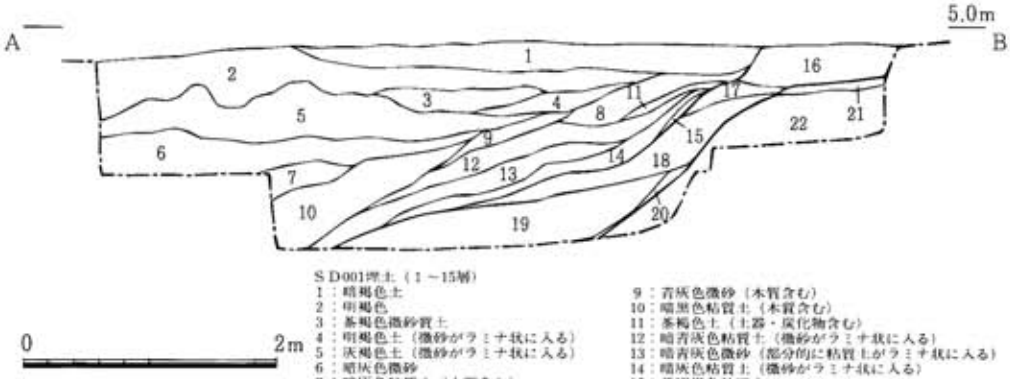
ＳＤ001（図22・37）

調査区南西端に一部がかかる流路で、片方の岸しか確認されていないので全体の規模や走行は不明であるが、調査区内ではほぼ南北方向に走る。調査期間の関係からか１箇所に試掘坑を設定されたのみで全掘されておらず詳細は不明であるが、少なくとも幅14ｍ以上、深さ1.6ｍ以上の大規模なものである。調査時の所見によれば土層は自然堆積の状況を示しており、15層より上位が人工遺物を含む堆積でＳＤ001の埋土、その下位に木質を多量に含むが人工遺物を含まないＳＤ001以前の低湿地堆積層があって、基盤層を覆うものとされている。馬場遺跡の集落が営まれていた時にＳＤ001がいくらか流れのある状態で存在していたのは確認できるが、人為的な掘削が加えられているかどうかを別にしても、結局のところＳＤ001が馬場遺跡の弥生時代集落の中でどのような存在であったのか、記録からは判断できなかった。遺物は小破片が多いが割にまとまった量がある。上下に分けて取り上げられているものの、どの層を各々上層・下層に比定しているのかは記録がない。

ＳＤ002（図22）

調査区中央の土坑群が帯状に集中する部分の東寄りに位置し、ほぼ南北方向に伸びる溝である。幅0.4～0.6ｍ、深さ0.1～0.2ｍ、調査区内での延長24.5ｍで、北端は途切れるが、南側は調査区外に続いている。ＳＫ025やＳＫ018と重複するが、新旧関係は不明である。埋土中から弥生土器が少量と黒曜岩製石鏃が出土した。





ＳＤ001埋土（１～15層）
1：暗褐色土
2：明褐色
3：茶褐色微砂質土
4：明褐色土（微砂がラミナ状に入る）
5：灰褐色土（微砂がラミナ状に入る）
6：暗灰色微砂
7：暗灰色粘質土（木質含む）
8：明黄灰色土（やや粘性あり）
9：青灰色微砂（木質含む）
10：暗黒色粘質土（木質含む）
11：茶褐色土（土器・炭化物含む）
12：暗青灰色粘質土（微砂がラミナ状に入る）
13：暗青灰色微砂（部分的に粘質土がラミナ状に入る）
14：暗灰色粘質土（微砂がラミナ状に入る）
15：黄灰褐色粘質土

人工遺物を含まないＳＤ001以前の低湿地の埋土（16～20層）
16：茶褐色土　17：黄褐色粘質土　18：暗青灰色粘質土（木質多量に含む）
19：暗黒色粘質土（木質多量に含む）　20：青灰色微砂

21：明褐色粘土　22：暗褐色粘土

図37　ＳＢ040，ＳＤ001土層（１：60）

3．遺物

ＳＫ003出土遺物（図38）

１は底部回転糸切り離しの土師器杯形土器（以下、○○形土器は○○とのみ記述。）で、復元底径7.2cmである。

ＳＫ005出土遺物（図38）

２は甕の底部である。３はやや不安定な丸底に近い底部である。

ＳＫ006出土遺物（図38）

いずれも甕で、４・６は口縁部と胴部上位に刻目突帯を巡らせる。５・７も口縁部であるが、刻みの有無は不明である。８・９は安定した平底の底部である。

ＳＫ007出土遺物（図38）

いずれも甕で、10・11は口縁部と胴部上位に突帯を巡らせる。器面摩耗のため不明瞭であるが、おそらく刻みを施すものであろう。12・13は安定した平底の底部である。

ＳＫ011出土遺物（図38）

14は口縁部と胴部上位に刻目突帯を巡らせる甕、15～17は平底の甕の底部である。18は壺の口縁部で、口縁部は大きく外反し、段や肥厚部はない。

ＳＫ012出土遺物（図38）

19～21は甕の口縁部で、小破片で摩耗が著しい。口縁端部に突帯を巡らせるが、刻みの有無は不明である。22は完形の石鏃で、やや細みの凹基式である。23は柳葉形の石鏃である。

ＳＫ014出土遺物（図38）

24は柳葉形の石鏃である。25は２条突帯の甕で、摩耗のため不明であるが刻みを施すものと思われる。26は平底の甕の底部、27はやや上げ底の壺の底部である。

ＳＫ016出土遺物（図39）

28はやや大型の剥片の縁辺部に刃部を作出した削器である。

ＳＫ017出土遺物（図39）

29は２条突帯の甕で、摩耗により刻目の有無は不明である。30・31は平底の甕の底部である。32は凹基式の石鏃で先端部を欠損する。

ＳＫ018出土遺物（図39）

33・34は２条突帯の甕で、34は刻目が観察されるが33は不明である。35は外反して終わる壺の口縁部である。

ＳＫ020出土遺物（図39）

36は壺の底部、37は大型壺の頸部で断面三角の突帯を１条巡らせる。38はラグビーボール形の土弾で、重量20.7ｇである。

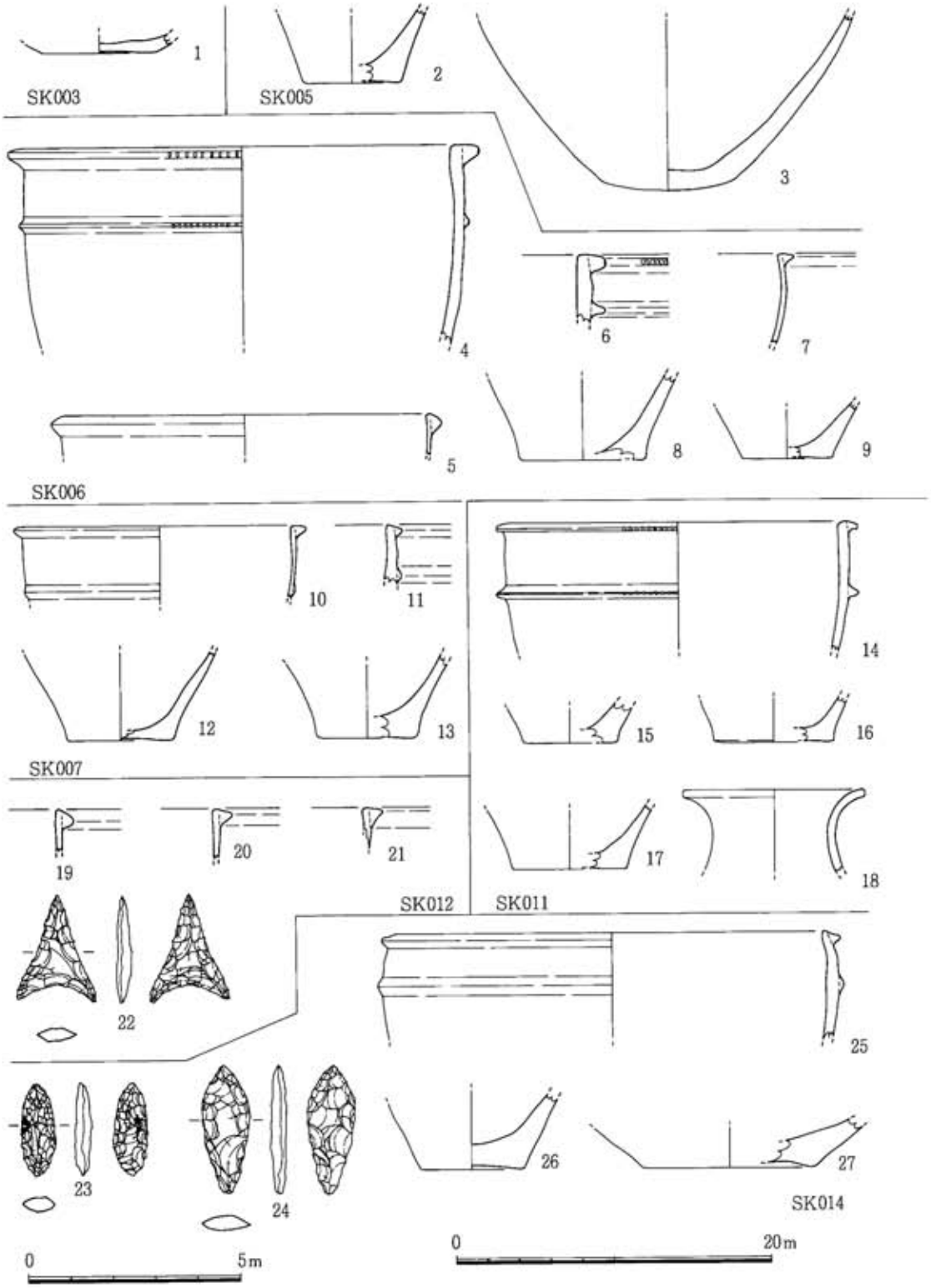


図38　馬場遺跡出土遺物１（土器は１：４，石器は２：３）

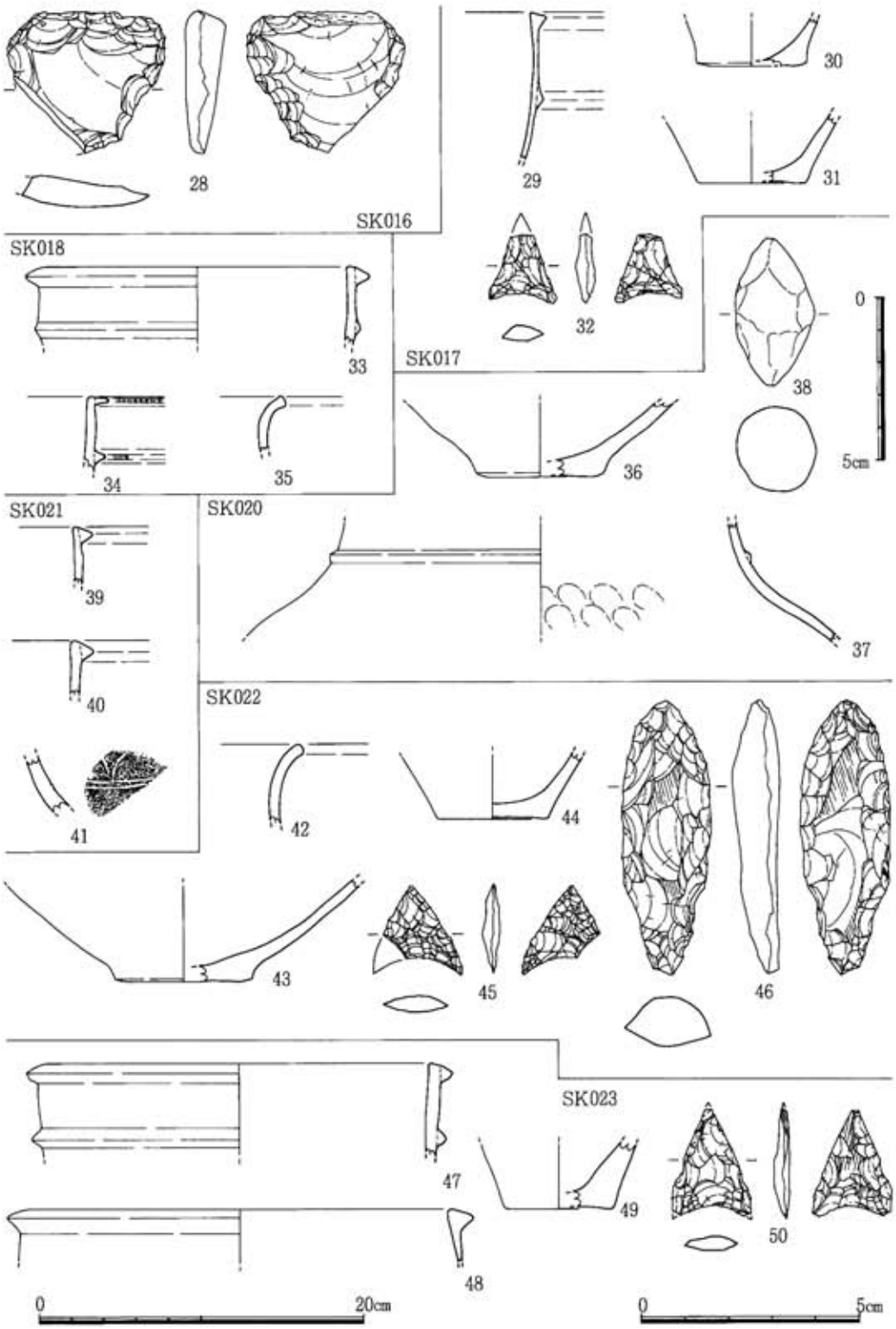


図39　馬場遺跡出土遺物２（土器は１：４，石器は２：３，土弾は１：２）

ＳＫ021出土遺物（図39）

39・40は口縁部に突帯を巡らせる甕の小破片である。41は中型壺の頸部で、２条の平行沈線の上位に放射筋のある二枚貝による重弧文が施されているが、小破片のため全体の文様構成は不確実である。

ＳＫ022出土遺物（図39）

42は壺の口縁部、43は壺の底部である。44は平底の甕の底部である。45は片脚を欠損する凹基式石鏃、46はやや大型の石鏃で、表裏両面に部分的に研磨が施されている。基部は抉れたように細くなっており、有茎石鏃としておきたい。

ＳＫ023出土遺物（図39）

47は２条突帯の甕で、摩耗のため刻みの有無は不明である。48は口縁部に突帯を巡らせる甕で、刻みや胴部上位の突帯の有無は不明である。49は平底の甕の底部である。50は凹基式の石鏃で、先端部を僅かに欠く。図の裏面中央と両側の側縁に研磨を施しており、側縁の研磨部より下位は抉れたような線の流れで、意図的な平面形と思われる。

ＳＫ024出土遺物（図40）

51は口縁部に１条、胴部上位に連続２条の突帯を巡らせた甕で、刻みの有無は不明である。52は平底の甕の底部である。

ＳＫ024・025出土遺物（図40）

53は大型の壺の口縁部で、端部を窪ませて上下両端を突出させたように強調している。54は大型の壺の底部である。55はやや厚手の幅広剥片を素材とし、１辺に連続的な剥離を施して刃部を作出した削器である。

ＳＸ027出土遺物（図40）

ＳＸ046北側の落ち込みがＳＸ027とされており、石鏃数点が出土している。56は柳葉形の、59は平基式二等辺三角形の、57・58・60・61は凹基式の石鏃である。56は素材剥片の形状を留め、未製品の可能性がある。

ＳＫ028出土遺物（図40）

62・63は２条突帯の甕、64～67は甕の底部、68・69は大型の壺の口縁部である。

ＳＫ029出土遺物（図41）

70・71は凹基式の石鏃である。

ＳＫ031出土遺物（図41）

72はやや小型の石錐で、刃部を中心に周縁を加工しており、素材剥片の主要剥離面を留める。

ＳＫ032出土遺物（図41）

73は石鏃の未製品と思われる。74は縦長剥片の一辺に刃部とみられる連続する小剥離痕をもつもので、削器としておく。

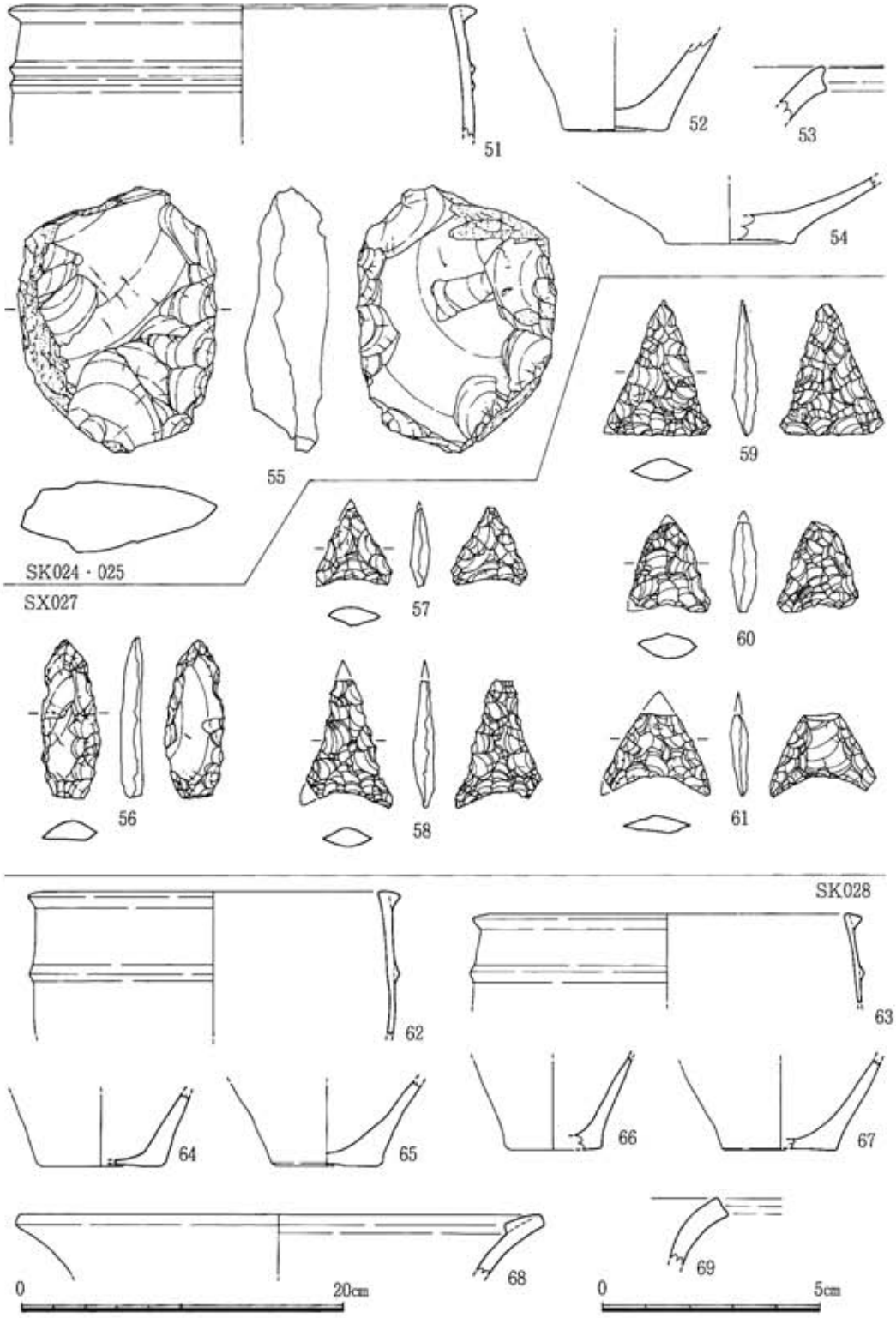


図40　馬場遺跡出土遺物３（土器は１：４，石器は２：３）

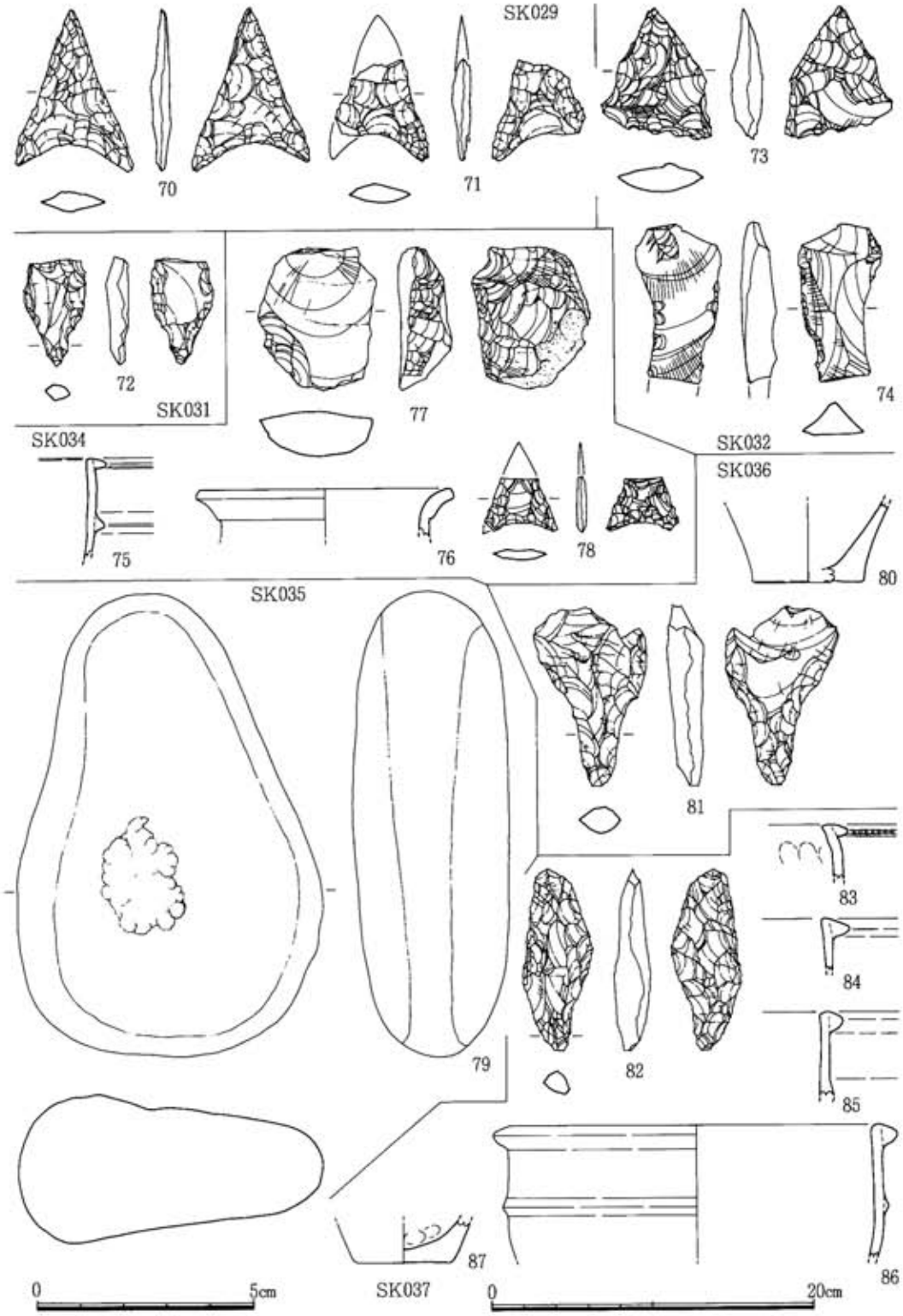


図41　馬場遺跡出土遺物４（土器は１：４，石器は２：３）

ＳＫ034出土遺物（図41）

75は２条突帯の甕、76は口縁部が外面に段を持つ壺で、やや不明瞭ではあるが削り出しではなく張り付けによる段らしい。77は厚みのある剥片を用いた掻器、78は凹基式小型三角形の石鏃である。

ＳＫ035出土遺物（図41）

79は自然礫をそのまま用いた敲石で、使用痕と思われる浅い敲打痕が表面の中央部のみに認められる。

ＳＫ036出土遺物（図41）

80は甕の底部、81はやや大型の石錐で、刃部には丁寧な調整剥離を施す。

ＳＫ037出土遺物（図41）

82は左右非対称の小型両面調整石器で、石錐としておく。83～86は突帯をもつ甕の口縁部、87は甕の底部である。

ＳＫ039出土遺物（図42）

88は２条突帯の甕、89は甕の底部と思われる。90は壺の口縁部で、外反するが段や肥厚部はない。91はやや小型の鉢と思われる。92は土器片再加工の有孔円盤で、紡錘車の可能性がある。93･94は凹基式の石鏃で、94は大型で5.7ｇと重量がある。95は素材剥片の主要剥離面を大きく留め周縁部に調整加工を施す削器で、両側から抉りを入れていることからいわゆる石匙の１種とみられる。96は厚みのある剥片の一端に角度のある刃部を作出した掻器である。

ＳＫ041出土遺物（図42）

97は甕の底部で、安定した平底である。

ＳＫ043出土遺物（図42）

98は突帯をもつ甕の口縁部、99は甕の底部である。

ＳＫ049出土遺物（図42）

100・101は２条突帯の甕の口縁部、102・103は甕の底部である。104は柳葉形の小型両面調整石器で、石鏃としておく。

ＳＫ050出土遺物（図42）

105は２条突帯の甕の口縁部である。

ＳＫ047出土遺物（図42）

106はやや柔らかい凝灰岩質の石材を木葉形に加工したもので、磨いた痕跡はないが磨製石鏃の未製品と思われる。

ＳＫ051出土遺物（図43）

107は２条突帯の甕である。

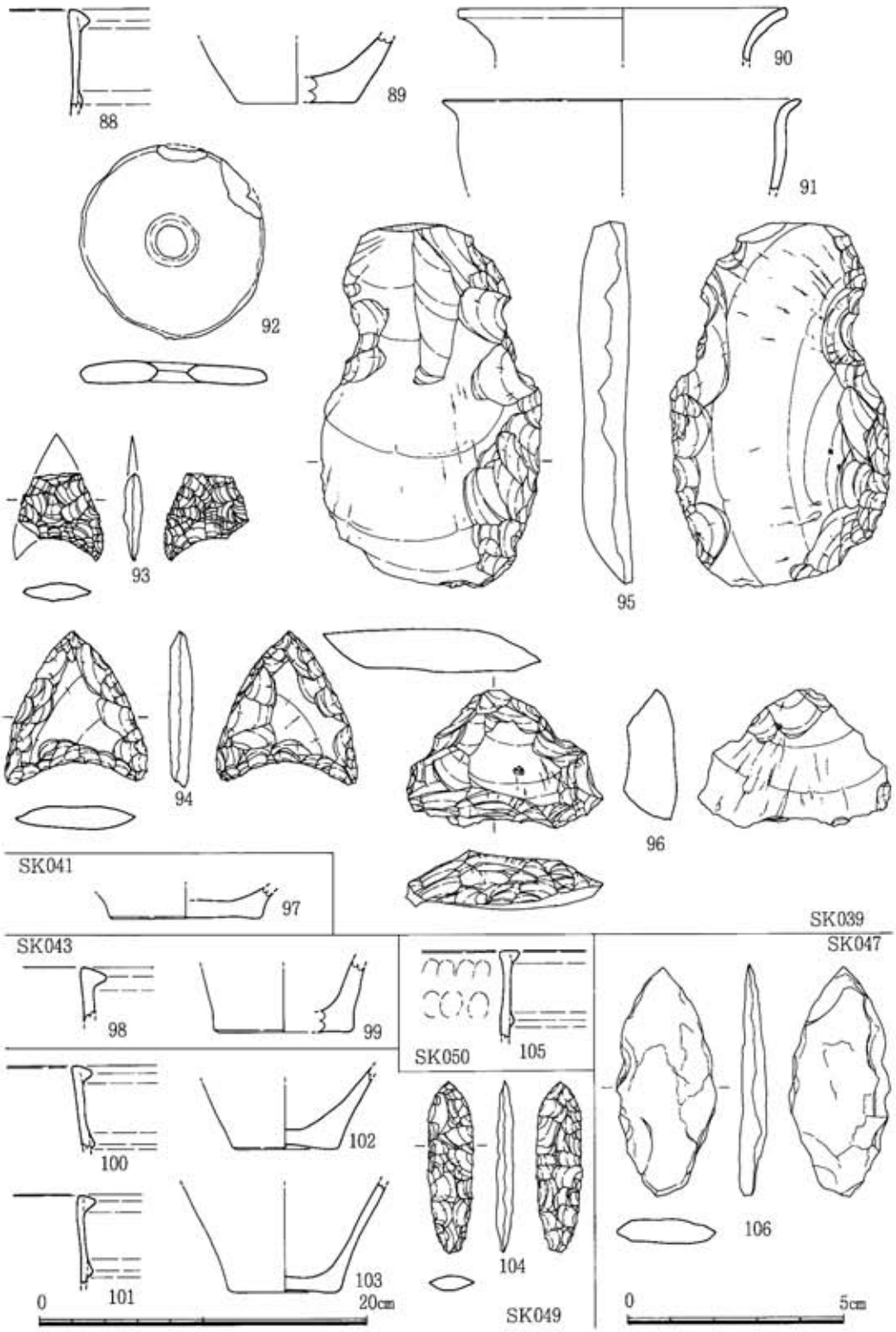


図42　馬場遺跡出土遺物５（土器は１：４，石器・土製品は２：３）

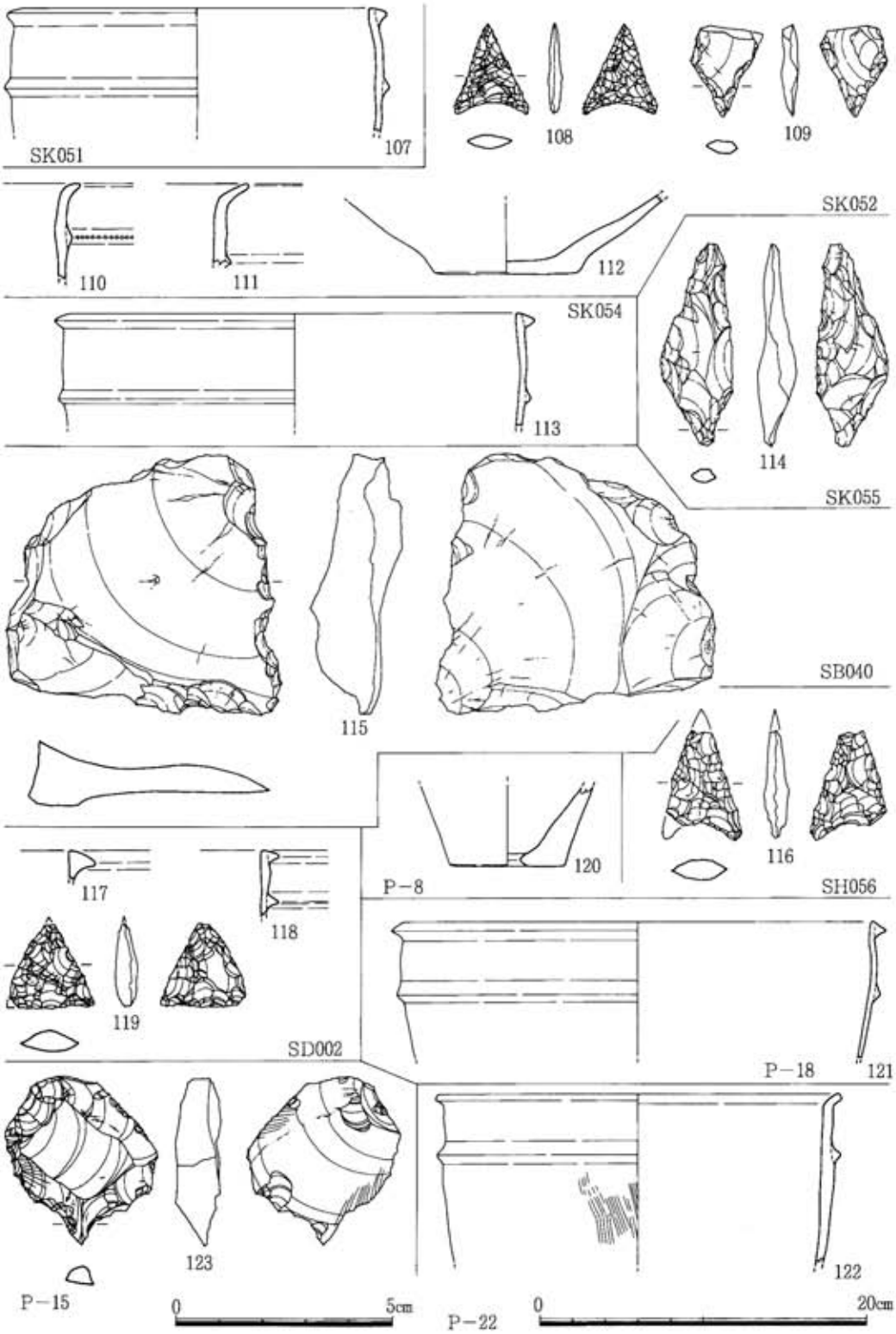


図43　馬場遺跡出土遺物６（土器は１：４，石器は２：３）

ＳＫ052出土遺物（図43）

108は三角形凹基式の石鏃、109は小型剥片の周縁部のみを加工した石錐である。110・111は口縁部が外反し、口縁下に三角突帯をもつ甕で、摩耗により不明ではあるが、本来は刻目を施していたものと考えられる。112はやや大型の壺の底部である。

ＳＫ054出土遺物（図43）

113は２条突帯の甕である。

ＳＫ055出土遺物（図43）

114は両面調整の石錐と思われる。

ＳＢ040出土遺物（図43）

115は大型で薄手の素材剥片の連続する２辺に調整剥離を施して刃部を形成するものである。

ＳＨ056出土遺物（図43）

116は凹基式の石鏃で、やや細身である。

ＳＤ002出土遺物（図43）

117・118は甕の口縁部、119は厚みのある小型三角形の平基式石鏃である。

小穴出土遺物（図43）

120はＰ－８出土の甕の底部で、焼成後の穿孔を施す。121はＰ－18出土の２条突帯の甕である。122はＰ－22出土の甕で、口縁部は外反し、口縁下に突帯を巡らせる。123はＰ－15出土の石錐で、素材剥片の形状を大きくは改変せずに利用して刃部を作出している。

ＳＤ001出土遺物（図44・45）

ＳＤ001出土遺物は試掘坑部分から検出したものである。124～144は下部出土土器、145～154は上部出土土器である。124～133は甕の口縁部で、刻目突帯を巡らせるものが多いが、130は外反する口縁の端部下側に刻目を施すものである。134～136は壺の口縁部、137～140は壺の肩部で沈線を巡らせるもの、141・143・144は甕の底部、142は壺の底部である。145～150は甕の口縁部で、下部出土のものに比べ遺存状態が悪いため不明瞭ではあるが、旧状は刻目を施していたものと思われる。151～153は甕の底部で、153は厚みのある上げ底状である。154は壺の底部で外面に器面調整のヘラミガキを留める。155～165はＳＤ001出土石器で、155～158・160～162・164・165は三角形凹基式の石鏃である。159は円基状のやや不整な石鏃で、163と共に石鏃未製品の可能性が強いものである。

その他の遺物（図45）

遺構に伴わずに出土した遺物のうち、特徴的なものを一括して報告する。166は全面を丁寧に磨いた完形の石斧である。厚みがなく偏平で、刃部は両刃である。167・168は凹基式三角形の石鏃、169は平基式三角形で厚みのある石鏃である。170・171は中国産白磁で、170は口縁部を大きめの玉縁に作る椀、171は口縁端部の釉を剥ぎ取る口禿げの皿と思われるものである。

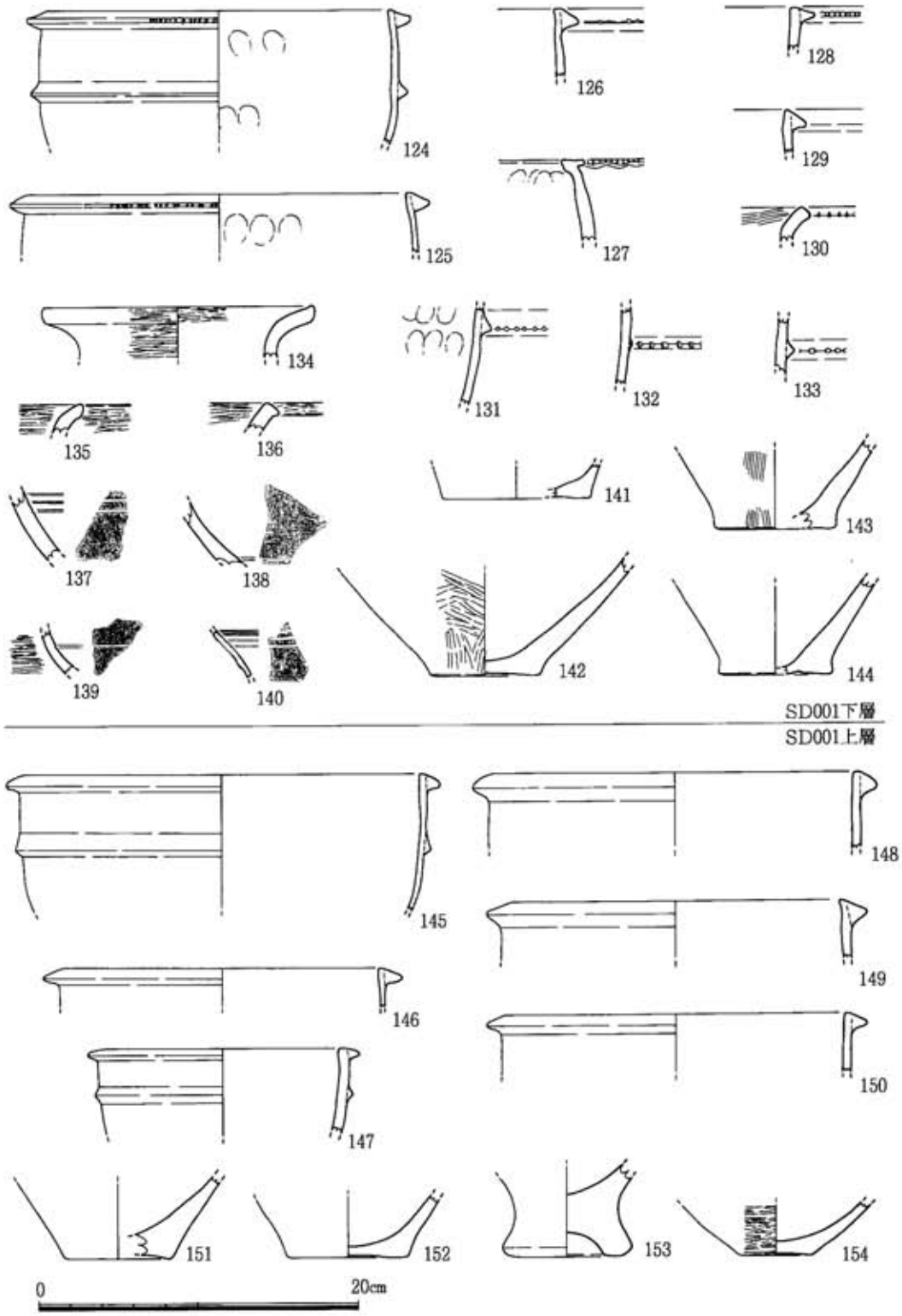


図44　馬場遺跡出土遺物７（１：４）

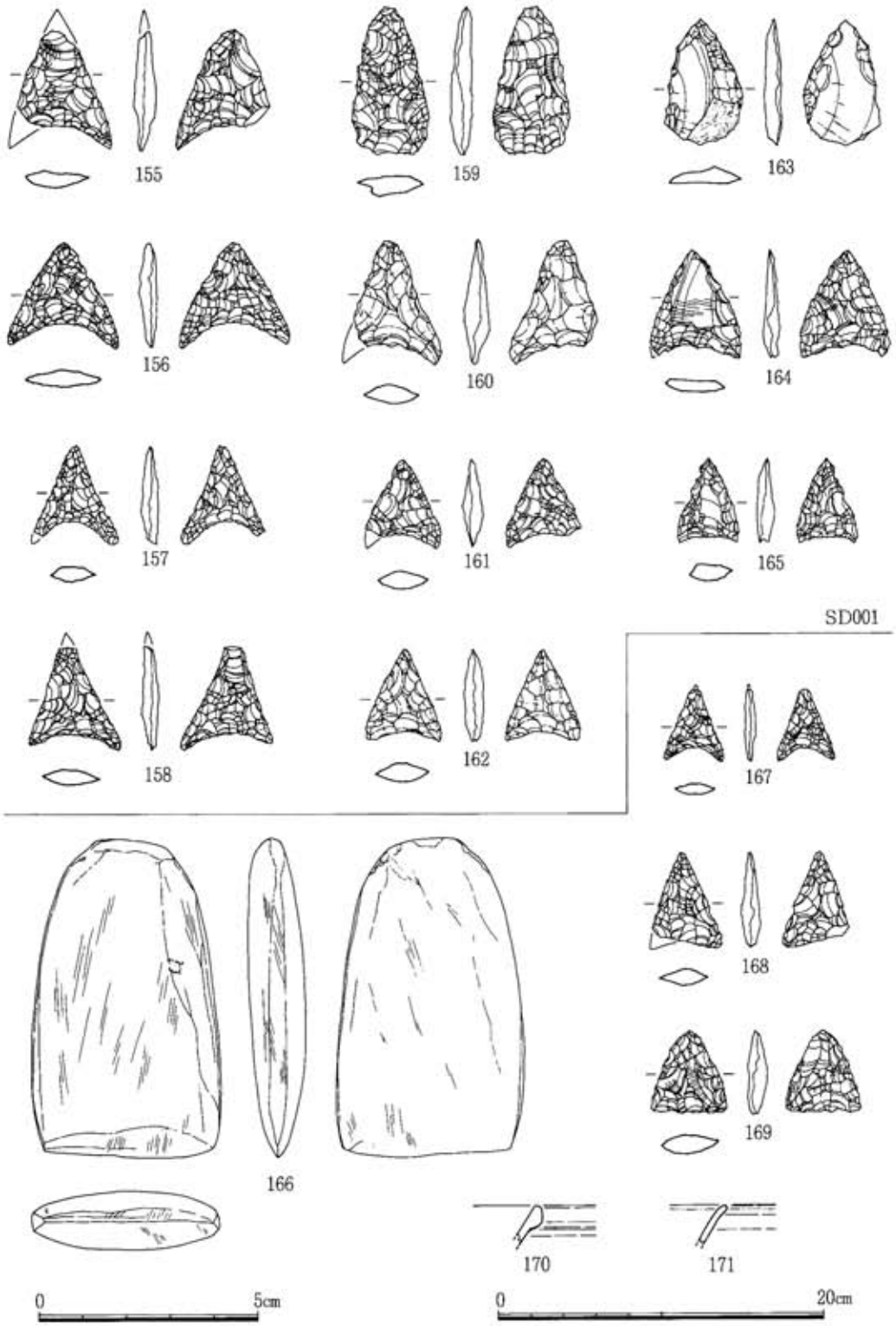


図45　馬場遺跡出土遺物８（石器は２：３，磁器は１：４）

表2　馬場遺跡出土遺物一覧

法量の単位はcm・g、（　）は復元値

遺物番号	挿図番号	出土遺構	遺物の種類	法量 口径②底径③器高④胴部径⑤長さ⑥幅⑦厚さ⑧重量	色調・石材	登録番号
1	図38	SK003	土師器・杯糸切	②(7.2)	浅黄橙色	93002384
2	図38	SK005	弥生土器・甕	②(6.2)	内：浅黄橙色・外：橙色	93002386
3	図38	SK005	弥生土器・甕	②(8.6)	にぶい橙色	93002385
4	図38	SK006	弥生土器・甕	①(29.9)	内：にぶい橙色・外：にぶい黄橙色	93002387
5	図38	SK006	弥生土器・甕	①(24.7)	にぶい黄橙色	93002389
6	図38	SK006	弥生土器・甕		褐色	93002388
7	図38	SK006	弥生土器・甕		橙色	93002390
8	図38	SK006	弥生土器・甕	②(8.0)	内：にぶい褐色・外：橙色	93002391
9	図38	SK006	弥生土器・甕	②(5.8)	内：にぶい橙色・外：橙色	93002392
10	図38	SK007	弥生土器・甕	①(18.4)	黄褐色	88002237
11	図38	SK007	弥生土器・甕		内：黒色・外：褐色	88002239
12	図38	SK007	弥生土器・甕	②(6.6)	内：褐色・外：灰色	88002240
13	図38	SK007	弥生土器・甕	②(6.2)	褐色	88002241
14	図38	SK011	弥生土器・甕	①(22.9)	褐色	93002393
15	図38	SK011	弥生土器・甕	②(5.8)	内：浅黄橙色・外：橙色	93002398
16	図38	SK011	弥生土器・甕	②(7.6)	内：にぶい黄橙色・外：橙色	93002400
17	図38	SK011	弥生土器・甕	②(7.2)	にぶい橙色	93002399
18	図38	SK011	弥生土器・壺	①(11.4)	黒褐色	93002395
19	図38	SK012	弥生土器・甕		褐色	93002501
20	図38	SK012	弥生土器・甕		内：灰黄色・外：にぶい黄橙色	93002502
21	図38	SK012	弥生土器・甕		内：淡黄色・外：にぶい黄橙色	93002503
22	図38	SK012	石鏃	⑤2.5⑥1.9⑦0.4⑧0.9	讃岐岩質安山岩	94000647
23	図38	SK012	石鏃	⑤2.2⑥0.8⑦0.4⑧0.6	黒曜岩	94000653
24	図38	SK014	石鏃	⑤3.1⑥1.1⑦0.4⑧1.3	讃岐岩質安山岩	94000651
25	図38	SK014	弥生土器・甕	①(29.1)	にぶい褐色	93002606
26	図38	SK014	弥生土器・甕	②6.4	内：にぶい橙色・外：にぶい赤橙色	93002605
27	図38	SK014	弥生土器・壺	②(11.0)	内：黄白色・外：にぶい赤橙色	93002604
28	図39	SK016	削器	⑤3.3⑥3.7⑦0.9⑧9.5	讃岐岩質安山岩	94000706
29	図39	SK017	弥生土器・甕		内：にぶい褐色・外：橙色	93002504
30	図39	SK017	弥生土器・甕	②(6.6)	内：にぶい黄橙色・外：橙色	93002505
31	図39	SK017	弥生土器・甕	②(6.6)	内：にぶい黄橙色・外：橙色	93002506
32	図39	SK017	石鏃	⑤1.6⑥1.5⑦0.4⑧0.7	讃岐岩質安山岩	94000649
33	図39	SK018	弥生土器・甕	①(21.1)	内：にぶい橙色・外：淡黄色	93002507
34	図39	SK018	弥生土器・甕		内：灰黄色・外：褐色	93002508
35	図39	SK018	弥生土器・壺		内：黄橙色・外：淡橙色	93002509
36	図39	SK020	弥生土器・壺	②(7.8)	内：灰色・外：にぶい赤橙色	93002602
37	図39	SK020	弥生土器・壺		内：灰色・外：黄白色	93002603
38	図39	SK020	土弾	⑤4.6径2.4⑧20.7	にぶい橙色	94000681
39	図39	SK021	弥生土器・甕		内：にぶい黄橙色・外：灰白色	93002512
40	図39	SK021	弥生土器・甕		暗褐色	93002511
41	図39	SK021	弥生土器・壺		にぶい黄橙色	93002510
42	図39	SK022	弥生土器・壺		浅黄橙色	93002515
43	図39	SK022	弥生土器・壺	②(8.5)	内：暗褐色・外：橙色	93002514
44	図39	SK022	弥生土器・甕	②(6.8)	にぶい黄橙色	93002513
45	図39	SK022	石鏃	⑤2.0⑥1.8⑦0.4⑧0.7	黒曜岩	94000643
46	図39	SK022	石鏃	⑤6.3⑥2.0⑦1.1⑧13.8	讃岐岩質安山岩	94000703
47	図39	SK023	弥生土器・甕	①(26.2)	内：橙色・外：にぶい黄橙色	93002516
48	図39	SK023	弥生土器・甕	①(28.7)	内：淡黄色・外：にぶい黄橙色	93002517
49	図39	SK023	弥生土器・甕	②(6.6)	内：にぶい黄橙色・外：橙色	93002519
50	図39	SK023	石鏃	⑤2.5⑥1.8⑦0.4⑧1.3	讃岐岩質安山岩	94000646
51	図40	SK024	弥生土器・甕	①(28.8)	黄白色	93002350
52	図40	SK024	弥生土器・甕	②6.3	内：灰白色・外：赤橙色	93002601
53	図40	SK024・025	弥生土器・壺		黄白色	93002347
54	図40	SK024・025	弥生土器・壺	②(7.8)	赤橙色	93002349
55	図40	SK024・025	削器	⑤6.2⑥4.6⑦1.8⑧54.3	讃岐岩質安山岩	94000682
56	図40	SK027	石鏃	⑤3.7⑥1.3⑦0.5⑧2.7	讃岐岩質安山岩	94000676
57	図40	SK027	石鏃	⑤1.9⑥1.8⑦0.5⑧1.0	讃岐岩質安山岩	94000675
58	図40	SK027	石鏃	⑤3.0⑥1.9⑦0.5⑧1.8	黒曜岩	94000671
59	図40	SK027	石鏃	⑤3.1⑥2.4⑦0.6⑧2.4	黒曜岩	94000672
60	図40	SK027	石鏃	⑤2.1⑥1.9⑦0.6⑧1.8	黒曜岩	94000674
61	図40	SK027	石鏃	⑤1.9⑥1.9⑦0.4⑧1.1	黒曜岩	94000673
62	図40	SK028	弥生土器・甕	①(22.9)	褐色	92003680
63	図40	SK028	弥生土器・甕	①(23.9)	黄褐色	92003682
64	図40	SK028	弥生土器・甕	②(7.4)	灰褐色	92003684
65	図40	SK028	弥生土器・甕	②6.9	内：灰黒色・外：褐色	92003678
66	図40	SK028	弥生土器・甕	②(6.0)	内：灰黒色・外：黄褐色	92003685
67	図40	SK028	弥生土器・甕	②(6.9)	内：灰色・外：褐色	92003679
68	図40	SK028	弥生土器・壺	①(32.7)	灰褐色	92003683

遺物番号	挿図番号	出土遺構	遺物の種類	法量 ①口径②底径③器高④胴部径⑤長さ⑥幅⑦厚さ⑧重量	色調・石材	登録番号
69	図40	S K028	弥生土器・壺		内：黒色・外：褐色	92003681
70	図41	S K029	石鏃	⑤3.8⑥2.7⑦0.4⑧2.5	讃岐岩質安山岩	94000650
71	図41	S K029	石鏃	⑤2.4⑥2.1⑦0.4⑧1.4	讃岐岩質安山岩	94000642
72	図41	S K031	石錐	⑤2.5⑥1.4⑦0.5⑧1.6	讃岐岩質安山岩	94000655
73	図41	S K032	石鏃未製品	⑤3.0⑥2.5⑦0.8⑧3.9	黒曜岩	94000704
74	図41	S K032	削器	⑤3.7⑥2.0⑦0.8⑧4.6	黒曜岩	94000705
75	図41	S K034	弥生土器・甕		灰黄色	93002608
76	図41	S K034	弥生土器・壺	①(15.8)	灰黒色	93002609
77	図41	S K034	掻器	⑤3.3⑥2.8⑦1.2⑧11.4	黒曜岩	94000707
78	図41	S K034	石鏃	⑤1.2⑥1.7⑦0.2⑧0.4	黒曜岩	94000648
79	図41	S K035	敲石	⑤10.9⑥7.1⑦3.6⑧350		94000709
80	図41	S K036	弥生土器・甕	②(6.9)	内：灰色・外：灰白色	93002607
81	図41	S K036	石錐	⑤4.2⑥2.6⑦0.8⑧5.9	讃岐岩質安山岩	94000702
82	図41	S K037	石錐	⑤4.2⑥1.6⑦0.8⑧5.1	讃岐岩質安山岩	94000701
83	図41	S K037	弥生土器・甕		内：にぶい黄橙色・外：褐色	93002531
84	図41	S K037	弥生土器・甕		内：浅黄橙色・外：にぶい黄橙色	93002528
85	図41	S K037	弥生土器・甕		にぶい黄橙色	93002529
86	図41	S K037	弥生土器・甕	①(25.0)	にぶい黄橙色	93002527
87	図41	S K037	弥生土器・甕	②(6.2)	内：にぶい黄橙色・外：にぶい橙色	93002532
88	図42	S K039	弥生土器・甕		黄白色	93002611
89	図42	S K039	弥生土器・甕	②(7.2)	内：にぶい灰褐色・外：赤褐色	93002613
90	図42	S K039	弥生土器・壺	①(20.2)	内：黄褐色・外：にぶい黄褐色	93002612
91	図42	S K039	弥生土器・鉢	①(21.9)	内：にぶい褐色・外：にぶい灰褐色	93002610
92	図42	S K039	有孔土製品	径4.3孔径0.7⑦0.5⑧8.6	内：灰白色・外：褐灰色	94000680
93	図42	S K039	石鏃	⑤2.0⑥1.9⑦0.4⑧1.2	黒曜岩	94000645
94	図42	S K039	石鏃	⑤3.6⑥3.3⑦0.5⑧5.7	讃岐岩質安山岩	94000641
95	図42	S K039	削器（石匙）	⑤8.4⑥5.1⑦1.2⑧60.4	讃岐岩質安山岩	94000708
96	図42	S K039	掻器	⑤3.2⑥4.5⑦1.3⑧17.5	讃岐岩質安山岩	94000678
97	図42	S K041	弥生土器・壺	②(9.4)	内：灰橙色・外：にぶい黒灰色	93002346
98	図42	S K043	弥生土器・甕		にぶい褐色	93002344
99	図42	S K043	弥生土器・甕	②8.4	内：にぶい褐色・外：にぶい赤橙色	93002345
100	図42	S K049	弥生土器・甕		黄白色	93002342
101	図42	S K049	弥生土器・甕		内：にぶい赤橙色・外：にぶい黄褐色	93002343
102	図42	S K049	弥生土器・甕	②6.4	にぶい黄橙色	93002341
103	図42	S K049	弥生土器・甕	②6.9	内：黄橙色・外：黒灰色	93002340
104	図42	S K049	石鏃	⑤4.0⑥1.1⑦0.4⑧1.5	讃岐岩質安山岩	94000652
105	図42	S K050	弥生土器・甕		灰黄橙色	93002334
106	図42	S K047	磨製石鏃未製品	⑤5.3⑥2.3⑦0.6⑧7.1	凝灰岩	94000685
107	図43	S K051	弥生土器・甕	①(23.4)	灰黒色	93002338
108	図43	S K052	石鏃	⑤2.1⑥1.7⑦0.3⑧0.6	黒曜岩	94000644
109	図43	S K052	石錐	⑤2.1⑥1.6⑦0.4⑧1.0	讃岐岩質安山岩	94000654
110	図43	S K052	弥生土器・甕		にぶい黄橙色	93002336
111	図43	S K052	弥生土器・甕		内：灰色・外：赤橙色	93002335
112	図43	S K052	弥生土器・壺	②(8.8)	にぶい黄橙色	93002337
113	図43	S K054	弥生土器・甕	①(29.6)	にぶい黄橙色	93002339
114	図43	S K055	石錐	⑤4.7⑥1.7⑦0.9⑧4.9	讃岐岩質安山岩	94000700
115	図43	SB040・P-5	削器	⑤6.0⑥6.4⑦1.6⑧46.7	讃岐岩質安山岩	94000683
116	図43	SH056	石鏃	⑤2.5⑥1.7⑦0.6⑧1.7	黒曜岩	94000667
117	図43	S D002	弥生土器・甕		内：橙色・外：にぶい橙色	93002382
118	図43	S D002	弥生土器・甕		内：灰黄色・外：にぶい黄橙色	93002383
119	図43	S D002	石鏃	⑤2.0⑥2.0⑦0.5⑧1.5	黒曜岩	94000679
120	図43	P-8	弥生土器・甕	②7.0	内：にぶい橙色・外：明赤褐色	93003412
121	図43	P-18	弥生土器・甕	①(30.2)	黒褐色	93003413
122	図43	P-22	弥生土器・甕	①(24.8)	内：浅黄橙色・外：褐色	93003414
123	図43	P-15	石錐	⑤3.9⑥3.5⑦1.0⑧10.3	黒曜岩	94000677
124	図44	SD001下部	弥生土器・甕	①(24.0)	黒褐色	93002379
125	図44	SD001下部	弥生土器・甕	①(26.3)	内：灰黄褐色・外：黒褐色	93002377
126	図44	SD001下部	弥生土器・甕		にぶい黄橙色	93002378
127	図44	SD001下部	弥生土器・甕		浅黄橙色	93002373
128	図44	SD001下部	弥生土器・甕		黒褐色	93003403
129	図44	SD001下部	弥生土器・甕		黒褐色	93003404
130	図44	SD001下部	弥生土器・甕		黒褐色	93003402
131	図44	SD001下部	弥生土器・甕		内：にぶい褐色・外：黒褐色	93003405
132	図44	SD001下部	弥生土器・甕		内：灰黄褐色・外：灰黄色	93003406
133	図44	SD001下部	弥生土器・甕		内：にぶい黄橙色・外：にぶい褐色	93003407
134	図44	SD001下部	弥生土器・壺	①(16.8)	浅黄橙色	93002380
135	図44	SD001下部	弥生土器・壺		にぶい橙色	93003401
136	図44	SD001下部	弥生土器・壺		にぶい橙色	93003250

遺物番号	挿図番号	出土遺構	遺物の種類	法量 ①口径②底径③器高④胴部径⑤長さ⑥幅⑦厚さ⑧重量	色調・石材	登録番号
137	図44	SD001下部	弥生土器・壺		内：にぶい黄橙色・外：灰黄褐色	93003408
138	図44	SD001下部	弥生土器・壺		黄灰色	93003409
139	図44	SD001下部	弥生土器・壺		内：暗褐色・外：黒褐色	93003410
140	図44	SD001下部	弥生土器・壺		黒褐色	93003411
141	図44	SD001下部	弥生土器・甕	②(9.2)	橙色	93002376
142	図44	SD001下部	弥生土器・壺	②(6.8)	内：褐灰色・外：浅黄橙色	93002374
143	図44	SD001下部	弥生土器・甕	②(7.4)	内：にぶい黄褐色・外：黒褐色	93002375
144	図44	SD001下部	弥生土器・甕	②(7.0)	灰黄褐色	93002372
145	図44	SD001上部	弥生土器・甕	①(27.2)	橙色	93002357
146	図44	SD001上部	弥生土器・甕	①(22.5)	内：黒褐色・外：にぶい黄橙色	93002364
147	図44	SD001上部	弥生土器・甕	①(17.0)	内：浅黄橙色・外：橙色	93002358
148	図44	SD001上部	弥生土器・甕	①(25.0)	内：にぶい黄橙色・外：褐色	93002365
149	図44	SD001上部	弥生土器・甕	①(23.6)	黒褐色	93002359
150	図44	SD001上部	弥生土器・甕	①(23.6)	内：黄橙色・外：橙色	93002363
151	図44	SD001上部	弥生土器・甕	②(6.8)	内：浅黄橙色・外：黄橙色	93002369
152	図44	SD001上部	弥生土器・甕	②(7.6)	内：灰白色・外：にぶい黄橙色	93002370
153	図44	SD001上部	弥生土器・甕	②(7.9)	黄橙色	93002368
154	図44	SD001上部	弥生土器・壺	②4.6	内：暗褐色・外：灰黄色	93002371
155	図45	SD001下部	石鏃	⑤2.7⑥2.1⑦0.5⑧1.7	黒曜岩	94000656
156	図45	S D001	石鏃	⑤2.4⑥2.5⑦0.4⑧1.3	黒曜岩	94000661
157	図45	S D001	石鏃	⑤2.3⑥1.9⑦0.4⑧0.8	黒曜岩	94000663
158	図45	S D001	石鏃	⑤2.4⑥2.1⑦0.4⑧1.2	黒曜岩	94000660
159	図45	SD001上部	石鏃	⑤3.4⑥1.8⑦0.5⑧1.5	黒曜岩	94000665
160	図45	S D001	石鏃	⑤2.9⑥2.0⑦0.6⑧2.0	讃岐岩質安山岩	94000659
161	図45	S D001	石鏃	⑤2.1⑥1.7⑦0.5⑧0.9	黒曜岩	94000662
162	図45	S D001	石鏃	⑤2.1⑥1.7⑦0.4⑧1.2	讃岐岩質安山岩	94000664
163	図45	SD001上部	石鏃	⑤2.9⑥1.8⑦0.4⑧1.7	讃岐岩質安山岩	94000666
164	図45	S D001	石鏃	⑤2.5⑥2.1⑦0.4⑧1.4	黒曜岩	94000658
165	図45	S D001	石鏃	⑤1.9⑥1.4⑦0.4⑧0.6	黒曜岩	94000657
166	図45	表採	磨製石斧	⑤7.4⑥4.3⑦1.3⑧68.1		94000684
167	図45	表採	石鏃	⑤1.7⑥1.4⑦0.3⑧0.3	黒曜岩	94000669
168	図45	表採	石鏃	⑤2.2⑥1.6⑦0.4⑧0.9	黒曜岩	94000668
169	図45	表採	石鏃	⑤1.9⑥1.7⑦0.5⑧1.1	黒曜岩	94000670
170	図45	表採	白磁・椀		素地・釉調：灰白色	93002522
171	図45	表採	白磁・皿		素地・釉調：灰白色	93002523

4．まとめ

馬場遺跡での発掘調査は今回が初めてであり、面積はそれほど広くなかったが、弥生時代前期の遺構・遺物をほぼ単純に検出することができた。今回の調査成果のうち、出土遺物について簡単にまとめておく。

まず土器については、破片資料ばかりでありしかも遺存状態が良くないので、器形や器面調整に関して不明な部分が多いが、一定の傾向と特徴をうかがうことはできる。もっとも多く出土した甕についてみると、主体を占めるのは刻目突帯文系の屈曲しない２条突帯の甕で、如意形口縁で胴部に突帯を持ついわゆる折衷形の甕は少量（110・111・122）であり、如意形口縁の板付系の甕はＳＤ001下層出土の１点（130）のみである。底部は円盤状の厚手平底のものはなく、ＳＤ001上層出土の１点（153）のみが中期初頭に多い厚手上げ底で、これ以外はややくびれ気味の平底である。また壺に関しては、口縁部外面に段のつく肥厚部をもつ板付系の要素を示す資料はＳＫ034出土の１点（76）のみで、他はいずれも刻目突帯文系の壺である。このように馬場遺跡出土土器は、刻目突帯文系の伝統を色濃く留めるのに対して板付系の影響は希薄で、こうした様相が有明海沿岸地域では一般的な傾向であることはしばしば指摘されているところである。当地域の弥生前期土器と板付Ｉ式～II式との関係を明らかにするためには、いわゆる亀ノ甲式の内容把握と細分を行う必要があり、すでに公にされた研究（藤尾、1990）もあるが、前段階の刻目突帯文単純期の資料が墓葬関係に著しく偏っており、今少し集落遺構関連資料の蓄積が待たれる。

石器については、組成や製作技術について提示できなかったが、図示できた石鏃・石錐・削器以外に黒曜岩と讃岐岩質安山岩の石核・剥片・砕片が多数出土しており、遺跡内で剥片石器の生産が盛んに行われたことを表している。また、両刃の磨製石斧（166）は縄文時代的な形態を示し、いわゆる大陸系磨製石器としては磨製穂摘具（小破片のため図示していない）１点があるのみで、石器保有に関する馬場遺跡の特徴としてあげておく。

引用文献

武雄市教育委員会（1986ａ）六角川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（上巻）みやこ遺跡．武雄市文化財調査報告書第15集

武雄市教育委員会（1986ｂ）六角川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（下巻）茂手遺跡．武雄市文化財調査報告書第15集

武雄市教育委員会（1987）小野原遺跡．　付 茂手遺跡･北田遺跡．武雄市文化財調査報告書第17集

武雄市教育委員会（1990）釈迦寺遺跡．武雄市文化財調査報告書第24集

藤尾　慎一郎（1990）西部九州の刻目突帯文土器．国立歴史民俗博物館研究報告、第26集

第５章　小野原遺跡Ａ区

遺跡名：小野原遺跡Ａ区（略号ＯＮＯ－Ａ）
所在地：佐賀県武雄市橘町大字大日字小ノ原

第５章　小野原遺跡Ａ区

１．小野原遺跡Ａ区の概要

小野原遺跡Ａ区は、佐賀県武雄市橘町大字大日字小ノ原に所在する。対象面積は20,600㎡で、調査範囲は3,350㎡である。今回の調査と同時期に、調査区の東南側に並行する圃場整備事業の水路部分が武雄市教育委員会によって調査されており、図46の遺構配置図には併せて示している。潮見川支流の東川に隣接した標高６ｍ程の自然堤防上に立地し、東川を挟んだ対岸には馬場遺跡が位置する。本来の小野原遺跡は今回調査のＡ区より南方の東川と潮見川に挟まれた小野原集落の周辺に広がる弥生時代遺跡として周知されており、武雄市教育委員会が圃場整備に伴って調査した地点では、弥生時代中期を主体とする掘立柱建物等の遺構が検出されている（武雄市教委，1987ｂ）。「小野原」の地名は、享徳四（1455）年三月十五日渋江公代書状（橘中村文書64号）に「長嶋庄内小野原十五町」とあるのが初見と思われるが、この15町分の田地が、現在のどの範囲にあたるのかは確認できない。

検出した遺構は、大きく奈良時代と鎌倉時代前後の２時期に別れ、溝32条、井戸３基、土坑９基、不明遺構等がある。この他、柱穴と思われる小穴も多数検出されたが、掘立柱建物は確認できていない。遺構は旧地表面の標高が高かった畠部分は比較的遺存状態が良好であったが、全体に削平を受けており、集落構造を把握するまでには至らなかった。奈良時代の遺構は土坑３基があり、須恵器食膳具や土師器甕等が出土している。鎌倉期前後の遺構は、溝のほとんど、井戸３基、土坑６基、不明遺構がある。鎌倉期前後の遺物を出土する溝の多くは、互いに並走するか直交する走向を示しており、これは遺跡周辺の復元条里の方位にほぼ一致するものである。また、ＳＸ009とした不明遺構は、「廿」字状の溝で囲まれた範囲に灰や炭化物層が堆積するもので、この遺構の北側と西側をＬ字状に区切るものと思われるＳＤ007・ＳＤ030から鞴羽口が出土していることから、具体的な構造は不明であるが鍛冶に関連する可能性が強い。鎌倉期前後の遺物としては、土師器杯・小皿・椀、瓦器椀、東播系須恵器捏鉢、須恵器甕、中国陶磁、滑石製石鍋、土錘、鞴羽口、等が出土しており、編年資料として重要な在地土器群もある。遺物の中には古瀬戸の卸皿等も含まれており、これらの搬入経路が問題となるだろう。

この他、ＳＤ001は出土遺物から弥生時代前期末ないし中期初頭頃の遺構と考えられ、資料的には貧弱であるが、対岸の馬場遺跡との関連で興味深い。

以上のように、小野原遺跡Ａ区の調査では奈良時代と鎌倉時代前後の集落遺構を検出した。特に鎌倉期前後の集落と思われる遺構群は遺存条件のため、その構造を把握することができなかったが、条里型地割りに規制されていることを確認できた。

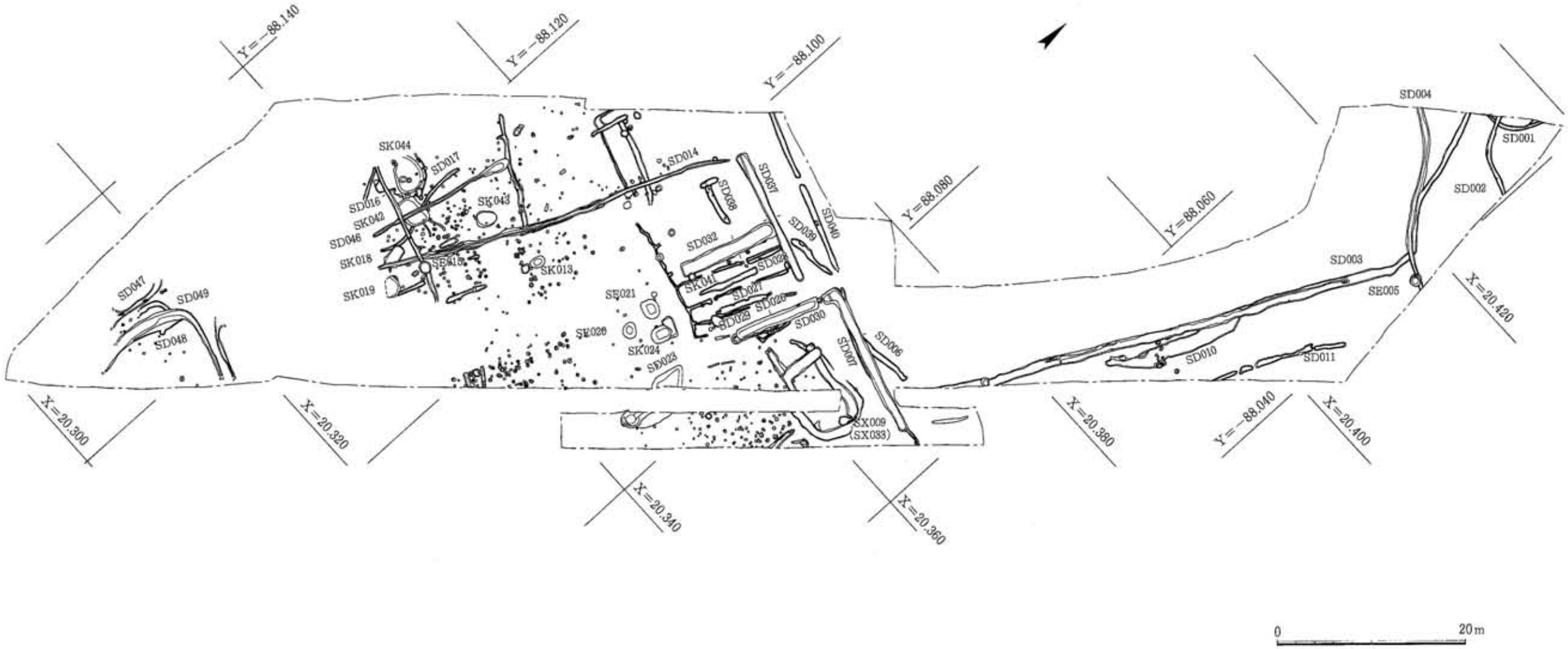


図46　小野原遺跡A区の遺構（1：500）

2．遺構と遺物

ＳＥ005（図47）

調査区北側に単独で位置する。ＳＤ004と重複し、これより新しい。平面は径1.3ｍの円形、断面は逆台形で深さは0.7ｍである。北西側に２段の平場が付く。

ＳＥ005出土遺物（図47）

１は底部回転糸切り離しの土師器杯で、板状圧痕はない。復元口径13.3cm、器高3.8cm、底径7.6cmである。２・３は龍泉窯系青磁で、２は横田・森田（1978）分類の椀Ｉ－１類（以下、中国陶磁の分類に関しては横田・森田分類による）、３は椀Ｉ－４類の小破片である。

ＳＥ015（図47）

調査区南側の中央部に位置する。ＳＤ016と重複し、これより新しい。平面は長径1.3ｍ、短径1.2ｍの楕円形に近い円形で、断面は直に立ち上がり深さ1.1ｍである。

ＳＥ015出土遺物（図47）

４は土師器小皿で器面摩耗のため調整や底部切り離し手法は不明。復元口径9.5cm、器高0.8cm、復元底径7.2cmである。５は底部回転糸切り離しの土師器杯で、板状圧痕を留める。６・７は底部回転糸切り離しの瓦器小皿で、７は板状圧痕を留める。いずれも底部をやや丸底気味に作る。８・９は瓦器椀である。８は完形に近く、内面は１方向のヘラミガキ、外面は口縁部がやや雑な横方向のヘラミガキ、体部は山形に交差するヘラミガキを施す。外面体部下半には押し出しの際のユビオサエを留める。重ね焼きにより口縁部・内外底部と内外体部とで色調が異なる。９は約1/3個体の破片で、外面はやや間隔のあくヘラミガキ、内面は分割ヘラミガキを施す。重ね焼きにより、内面から口縁部外面は灰色、外面体部以下は灰白色である。10は須恵器甕の小破片で、内外面平行タタキである。

ＳＥ020（図48）

調査区中央部の東寄りに位置し、北側に接してＳＫ024とＳＥ021がある。平面は長径1.7ｍ、短径1.4ｍの楕円形に近い円形で、断面は逆台形で深さ1.0ｍである。

ＳＥ020出土遺物（図48）

11は底部回転糸切り離しの土師器小皿で、不明瞭ながら板状圧痕を留め、内底ナデを施す。復元口径9.2cm、器高1.1cm、復元底径7.2cmである。

ＳＫ024（図48）

調査区中央部の東寄りに位置し、西側に接してＳＥ020とＳＥ021がある。平面は長軸2.2ｍ、短軸1.73ｍの不整な長楕円形で、深さ0.5ｍである。

ＳＫ024出土遺物（図48・49）

12は底部回転糸切り離しの土師器小皿で、板状圧痕はない。復元口径8.5cm、器高1.3cm、復元底径6.5cmである。13は瓦器椀で、外面はケズリに近い強いヨコナデの後部分的にヘラミガ

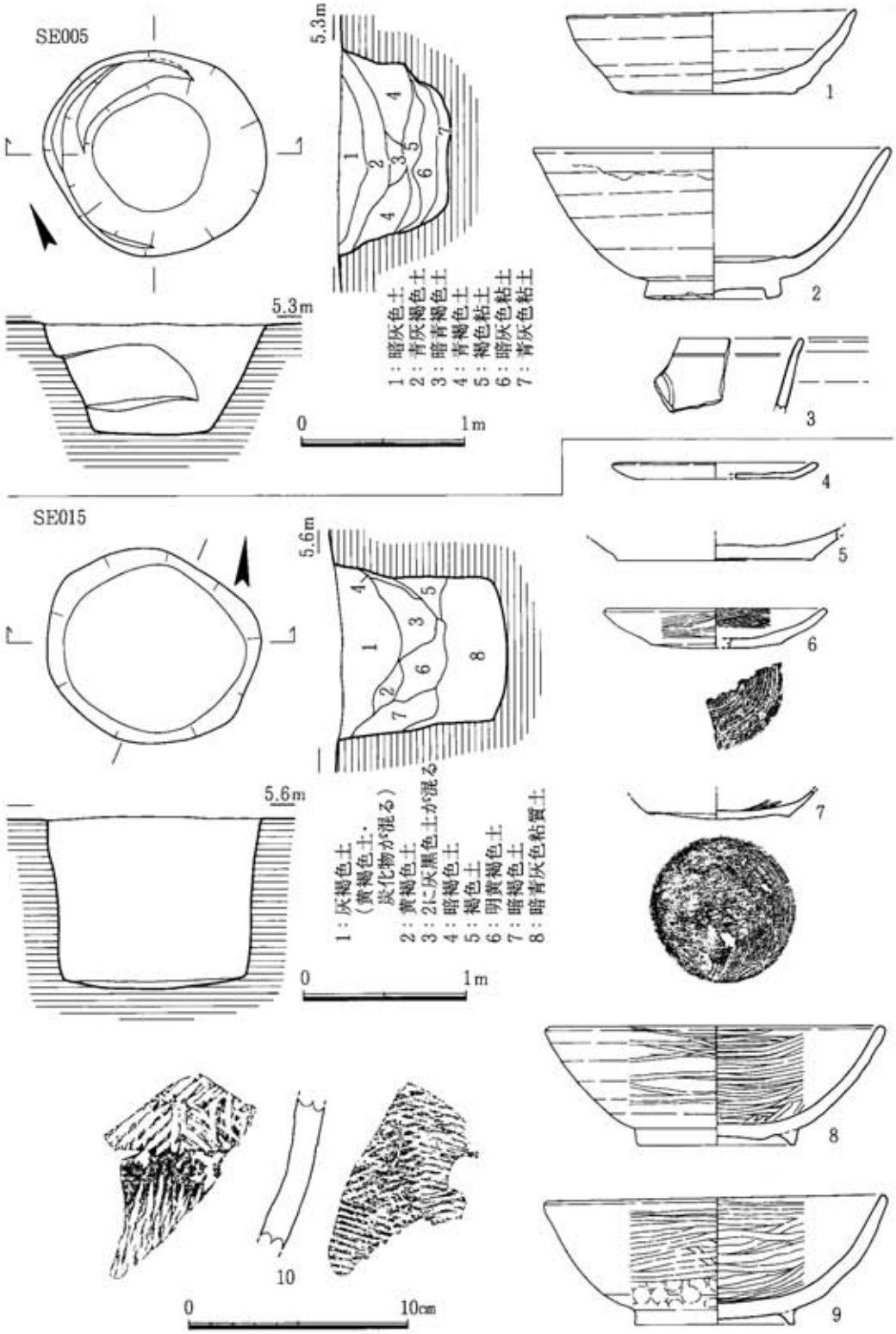


図47　ＳＥ005・ＳＥ015（１：40），出土遺物（１：３）

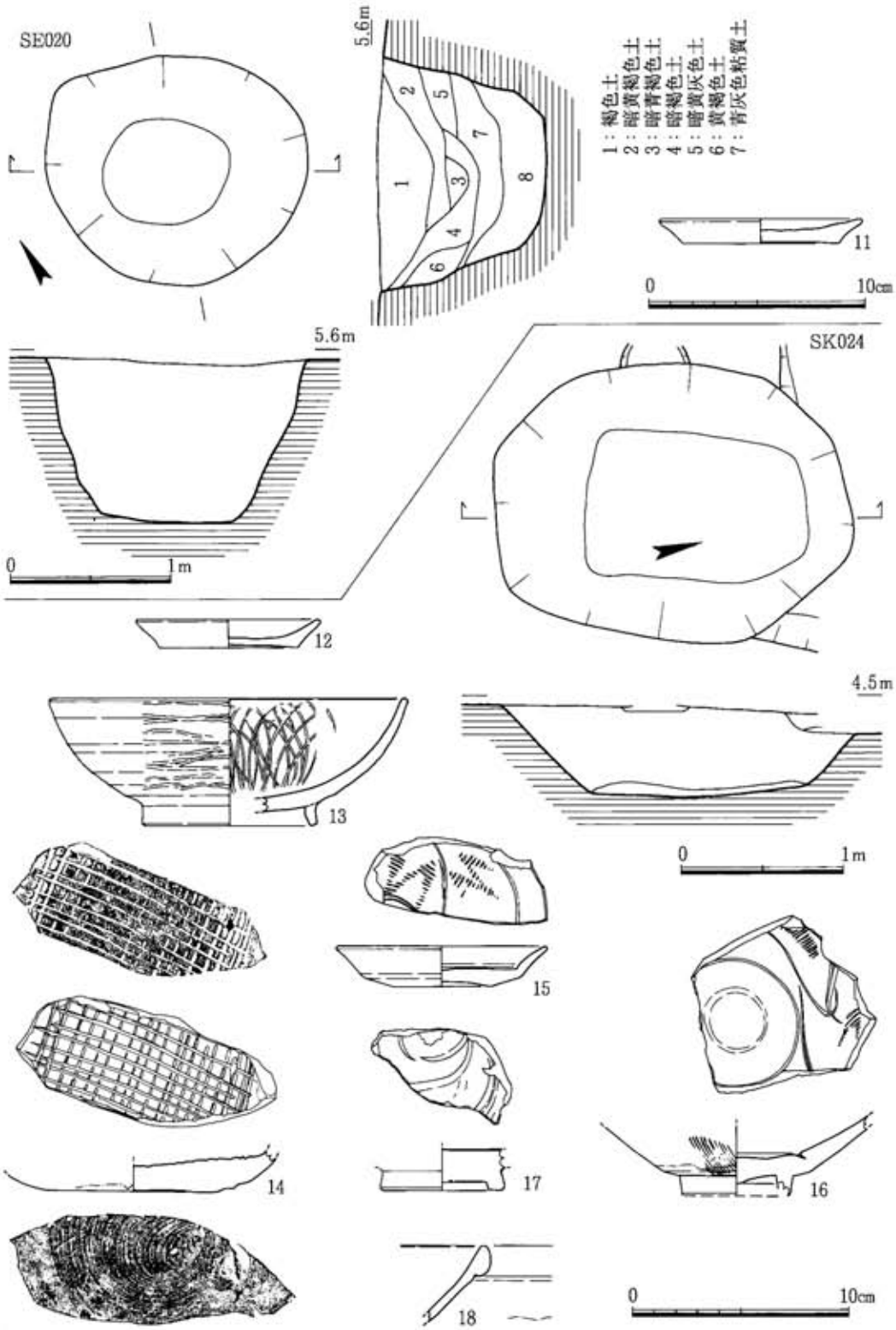


図48　ＳＥ020・ＳＫ024（１：40），出土遺物（１：３）

図49　ＳＫ024出土遺物２（１：３）

キ、内面は底部を起点として放射状に回帰するヘラミガキを施す。内面にはコテ当て痕を留める。重ね焼きにより、口縁部外面から内面体部は灰色、外面体部以下と内底部は灰白色で、特に内底部は高台径に一致する円形の異色部分が明瞭に観察される。14は古瀬戸の卸皿で口縁部は欠損する。底部は回転糸切り離しで、内面全体と外面の底部近くまで灰釉が施されている。内底部の卸目部分は使用により著しく摩滅している。15・16は同安窯系青磁で、15は皿、16は椀Ⅰ－1ｂ類である。17は龍泉窯系青磁椀Ⅰ－4類である。18は白磁椀Ⅳ類である。19～22は須恵器甕である。19・20は同一個体の可能性がある。22は平底の底部で、外面は正格子タタキ、内面はハケメである。23は東播系須恵器捏鉢で、重ね焼きにより口縁部外面のみがやや暗い色調である。24は滑石製石鍋で断面が不等辺台形の鍔で、口縁が斜め上方に立ち上がり底部がすぼまる木戸分類Ⅲ類ｃ（木戸，1993）である。25～27は砥石である。

ＳＫ041（図50）

調査区中央部に位置し、ＳＤ032の南端と重複するが新旧関係は不明である（調査記録ではＳＫ041が新しいような図化がされているが、新旧関係の記述はない）。平面円形の小型の土坑で、径0.8ｍ、深さ0.4ｍ、底面は平坦である。

ＳＫ041出土遺物（図50）

28はほぼ完形の瓦器椀であるが、器壁が薄くなるほどに摩滅が著しく器面調整などは全く観察できない。重ね焼きにより内面口縁部と外面口縁部下が帯状にやや薄い色調である。29は器種不明の土師器の口縁部である。頸部はくびれて内面は稜をなし、口縁部は外折して大きく開く。口縁部外側は断面三角形に大きく肥厚させる。器面調整は、内面が丁寧なナデ、口縁部はヨコナデ、頸部外面は縦方向のハケメである。器壁は厚く胎土に砂粒を含み、煮炊用の土器と思われる。全体の器形が不明で周辺での類例もないが、形状からすると釜形かもしれない。

ＳＫ019（図50）

調査区南側中央部に位置する。南側が大きく削平されて全体形は不確実であるが、不整な隅丸長方形の土坑である。現況で長軸2.2ｍ、短軸1.7ｍ、深さ0.4ｍである。

ＳＫ019出土遺物（図50）

30は口縁部が外反する土師器甕で、器面調整は、口縁部がヨコナデ、外面は縦方向のハケメ、内面頸部以下はヘラケズリである。31～33は須恵器杯で、器形は３点各々が若干異なるが、法量は口径12cm代、器高４cm以下にまとまる。いずれも底部回転ヘラ切り離し未調整で、33は体部と底部の境を回転ヘラケズリする。34は須恵器高台付杯の底部で、器面摩耗のため調整は不明である。

ＳＫ043（図50）

調査区中央部南寄りのＳＤ014とＳＤ046の間に位置する。平面はやや不整な卵形で、長軸2.2ｍ、短軸1.0ｍ、深さ0.1ｍである。

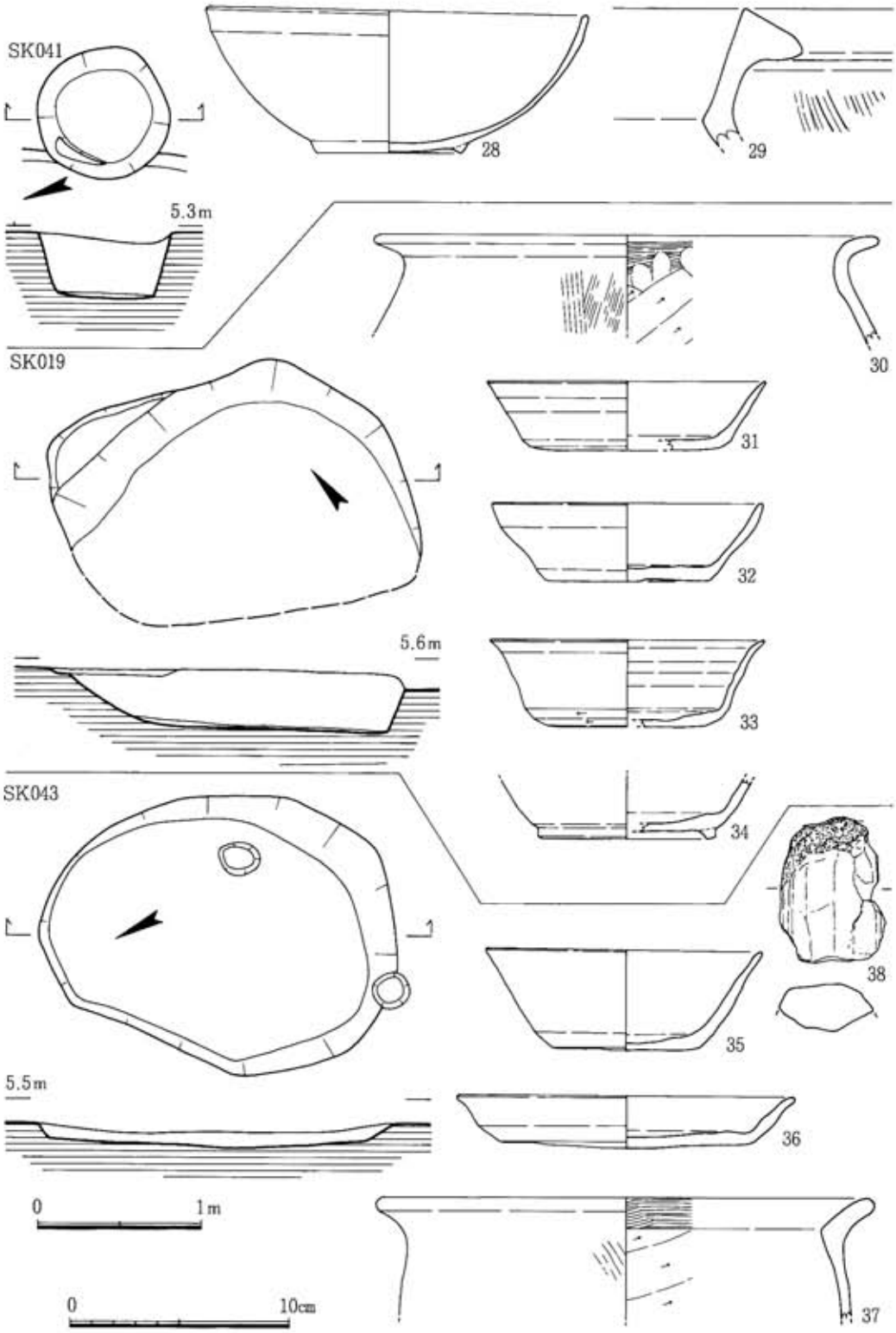


図50　ＳＫ041・ＳＫ019・ＳＫ043（１：40），出土遺物（１：３）

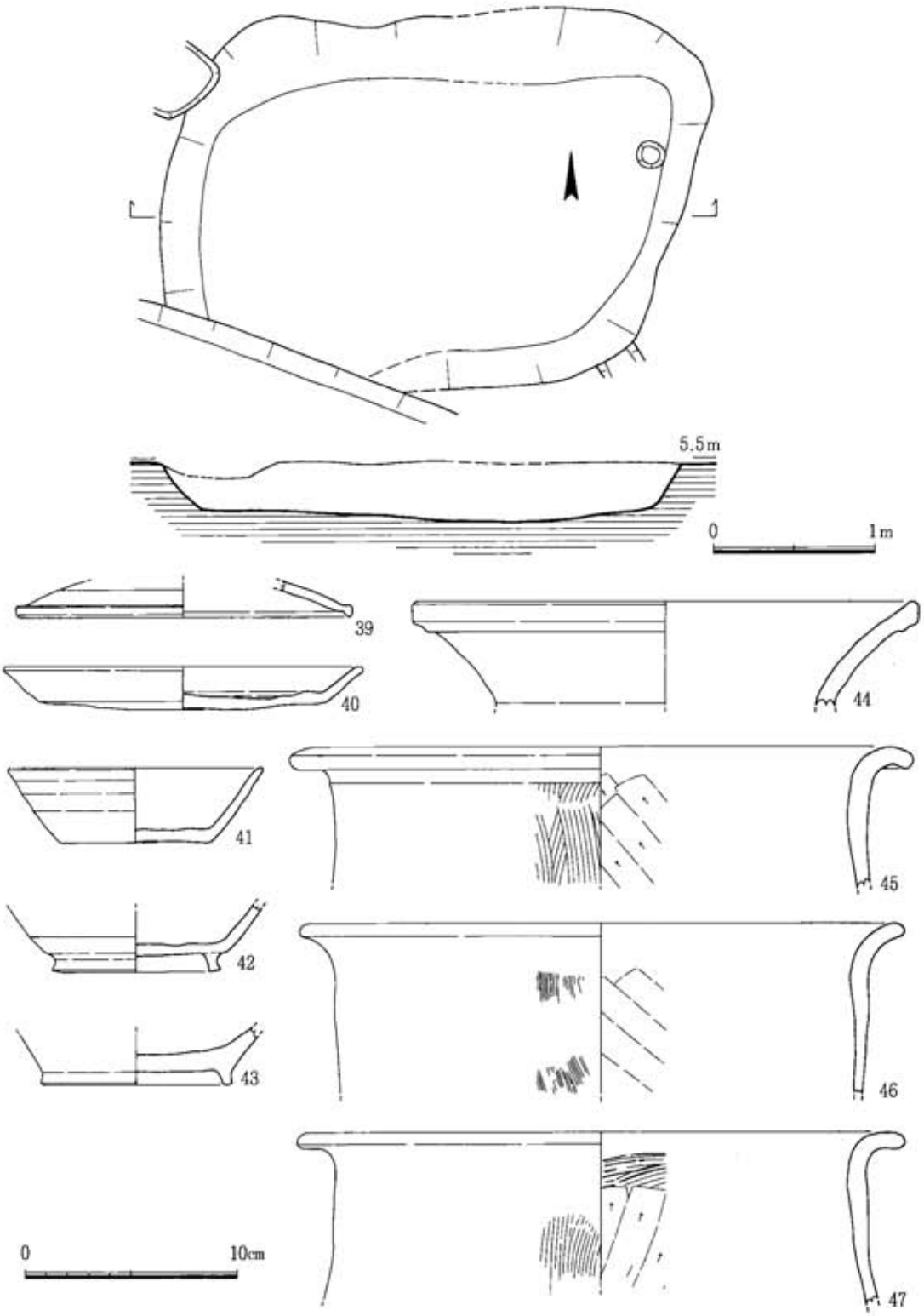


図51　ＳＫ042（１：40），出土遺物（１：３）

ＳＫ043出土遺物（図50）

35は須恵器杯、36は須恵器皿で、いずれも底部は回転ヘラ切り離しの後かるくナデ。37は土師器甕、38は鞴羽口である。

ＳＫ042（図50）

調査区南側中央に位置する。ＳＤ016･ＳＤ046と重複しこれらより古い。長軸3.2ｍ、短軸2.3ｍのやや不整な隅丸長方形で、深さは0.4ｍである。

ＳＫ042出土遺物（図50）

39は須恵器蓋で、口縁部は嘴状、天井部は欠損するが回転ヘラケズリを施す。40は須恵器皿である。底部は回転ヘラ切り離し未調整でヘラ記号がある。41は須恵器杯で、底部は回転ヘラ切り離し未調整。42は須恵器高台付杯で、底部回転ヘラケズリ。43は土師器高台付杯で、器面摩耗のため調整は不明である。44は須恵器甕の口縁部で口縁部外面が台形に肥厚する。45～47は、口縁部が外反し胴部のあまり膨らまない土師器甕で、内面をヘラケズリする。

ＳＸ009（図52）

調査区中央部東端に位置し、一部は圃場整備事業水路関係の調査区に延びている。平面形は「廿」字状で、長軸12.5ｍ、短軸6.5ｍの不明遺構である。外周を幅0.8～1.4ｍ、深さ0.2～0.3ｍ程の溝が巡り、その溝に囲まれた中に灰や炭化物を多く含む層が堆積するものである。また、ＳＸ033とされた遺構は、やはり炭化物等を含む層が堆積するもので、平面形･断面形がはっきりせず、ＳＸ009と重複することは解るが、両者の構造上の関係については調査担当者に聞き取りをしてもよく解らなかった。この遺構の北側と西側をＬ字状に区切る形でＳＤ007・ＳＤ030が位置しているが、これらの溝とＳＸ009とは出土遺物の年代観と位置関係から、一連の遺構群と認識して大過ないものと考えられる。このＳＤ007とＳＤ030の双方から鞴羽口が出土していることから、ＳＸ009を中心とする遺構群は、製鉄ないし鍛冶に関連する可能性が強く示唆されるのであるが、具体的な性格や構造について明らかにすることができなかった。

ＳＸ009・ＳＸ033出土遺物（図53）

48～51は底部回転糸切り離しの土師器杯で、法量は平均値で口径15.7cm、器高3.9cm、底径8.5cmである。51はＳＸ033との接合資料である。52～56は瓦器椀で、55は外面体部下半に回転糸切り離しの痕跡を留める。いずれも重ね焼きによる同一個体内の色調変化が認められる。特に明瞭なのは53と56で、53は口縁部外面と口縁部内面端部が暗い色調、内底部が円形に薄い色調、内面体部が両者の中間で、56は内底部のみが円形に薄い色調である。つまり53と58は垂直に重ねられ、53が３個体以上重ねた場合の中間、58が２個体以上重ねた場合の下側、という重ね焼き方法を復元できる。57は白磁椀Ⅳ類の口縁部。58は滑石製石鍋で、木戸（1993）Ⅱ類の口縁部であろう。59は底部回転糸切り離しの土師器杯で、復元口径15.2cm、器高3.5cm、復元底径9.4cmである。60は白磁椀Ⅳ類の口縁部、61は底部である。62は同安窯系青磁皿、63は褐釉系陶器

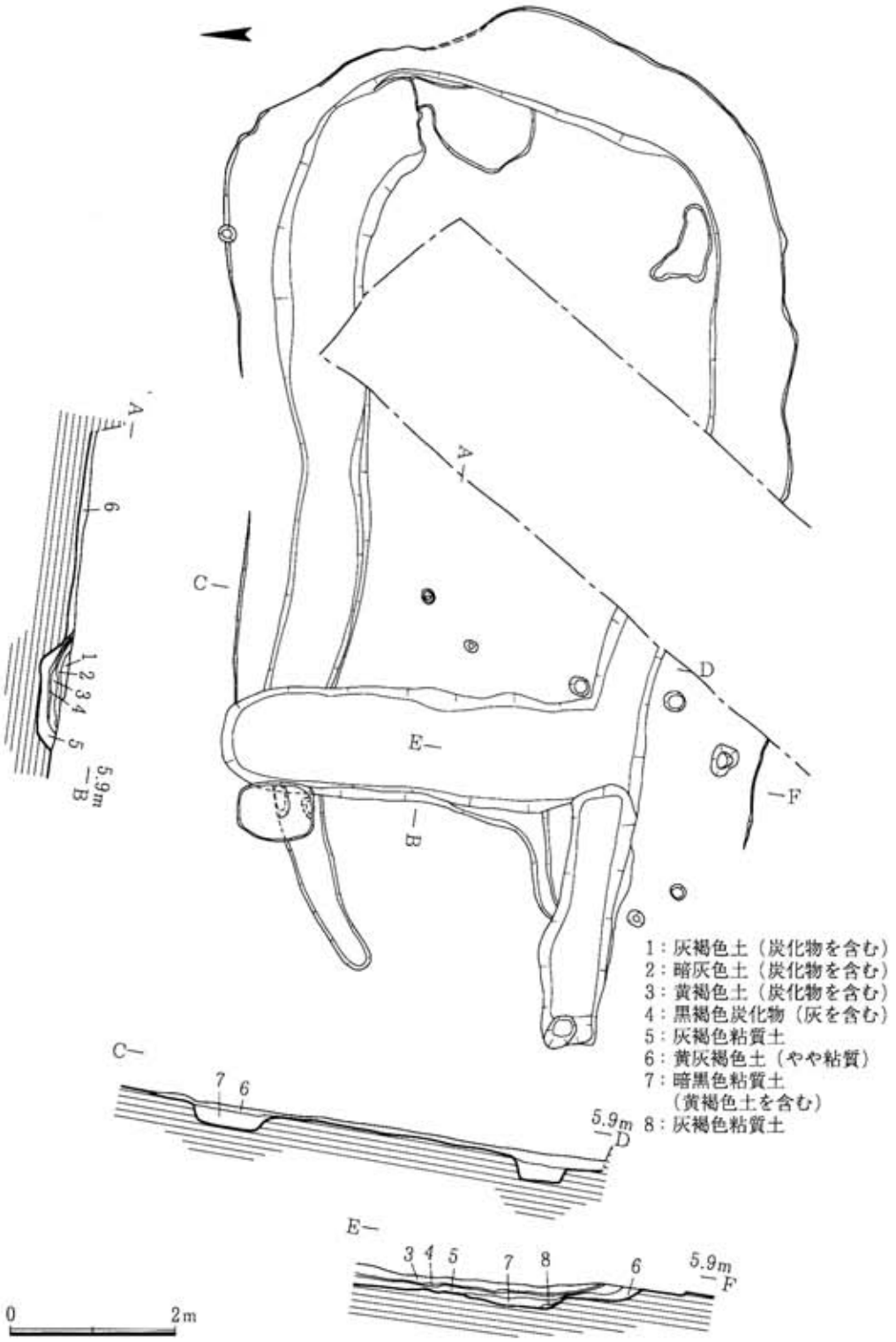


図52　ＳＸ009（１：80）

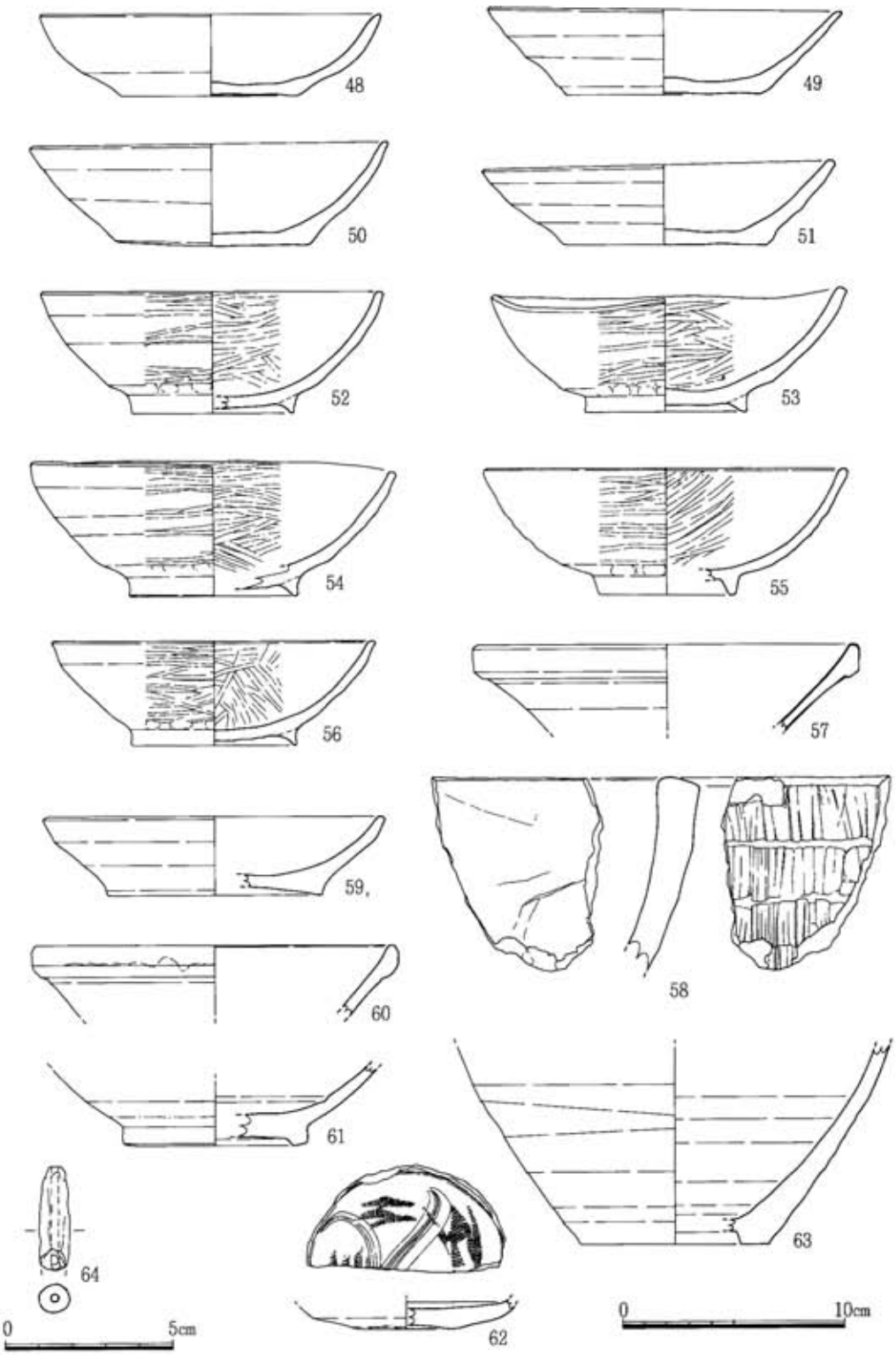


図53　ＳＸ009・ＳＸ033出土遺物（48～63は１：３，64は１：２）

壺の底部である。64は細い紡錘形の土錘で、片側を一部欠損する。

ＳＤ007（図46・54）

調査区中央部東側に位置する東西方向の溝で、走向はN74°Wである。幅0.9～1.4ｍ、深さ0.3ｍ、延長17ｍである。東端には細い溝が連なって調査区外に続き、西端は鍵状にほぼ直角に折れて細い溝でＳＤ030と連結する。南側に位置するＳＸ009と関連する遺構と考えられる。

ＳＤ007出土遺物（図54）

65は東播系須恵器捏鉢の口縁部で、重ね焼きにより外面端部のみがやや暗い色調である。66は白磁椀Ⅳ類の口縁部、67は底部で、同一個体の可能性がある。68は約1/3個体の瓦器小皿で、口縁部はやや歪む。器面調整は外面口縁部がヨコナデ、外面体部にはユビオサエ痕を留め、外面底部は１方向にナデ、内面は工具のあたりと思われる痕跡がある。内外面共に明瞭なヘラミガキは施されていない。素地は灰白色で砂粒をほとんど含まず、焼成は良好で銀黒色を示す。69・70は鞴羽口の破片である。

ＳＤ030（図46・54）

調査区中央部に位置する南北方向の溝で、走向はN19°Ｅである。幅1.1～1.3ｍ、深さ0.4ｍ、延長10ｍである。南端は途切れ、北端は細い溝でＳＤ007と連結する。東側に位置するＳＸ009と関連する遺構と考えられる。また、西側にはＳＤ026・ＳＤ027・ＳＤ028・ＳＤ032が間隔を置いて並行する。

ＳＤ030出土遺物（図54）

71は青白磁合子の蓋、72・73は同安窯系青磁で、72は椀Ｉ－１ｂ類、73は皿である。72は使用のためか口縁端部の釉がかすれている。74はやや焼成が甘い須恵器甕で、正格子タタキと山形タタキが重ねて施され、内面は目の粗い横方向のハケメである。75は鞴羽口の破片である。

ＳＤ037（図46・54）

調査区中央部西寄りに位置する東西方向の溝である。走向はN73°Wで、ＳＤ007と一致している。幅0.7～1.3ｍ、深さ0.1ｍ、延長15ｍで、東西両端が途切れる。東端からやや間隔を置いてＳＤ030が直交する形で位置する外、東側半分の南に接してＳＤ026・ＳＤ027・ＳＤ028・ＳＤ032が直交する。また、北側にはやや間隔を置いてＳＤ040が並走する。

ＳＤ037出土遺物（図54）

76は褐釉陶器壺の底部、77～79は紡錘形の土錘である。

ＳＤ032（図46・55）

調査区中央部に位置する南北方向の溝で、走向はN16°Ｅである。幅1.1～1.3ｍ、深さ0.3ｍ、延長11ｍである。北端はＳＤ037に接して止まり、南端は途切れる。北側にはＳＤ037が直交し、東側にはＳＤ028・ＳＤ027・ＳＤ026・ＳＤ030が間隔を置いて並行する。

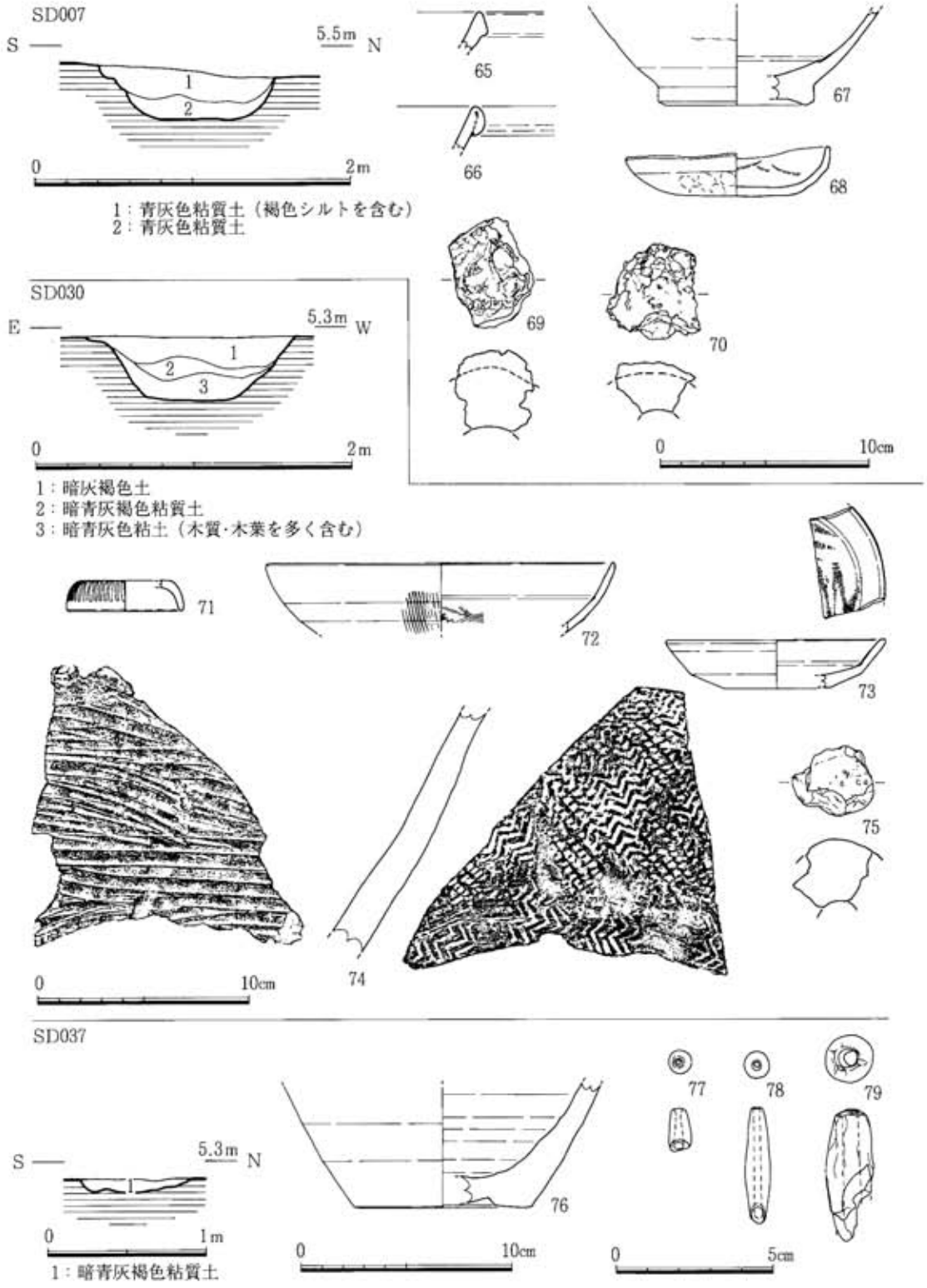


図54　ＳＤ007土層・ＳＤ030土層・ＳＤ037土層（１：40），出土遺物（１：３，77～79は１：２）

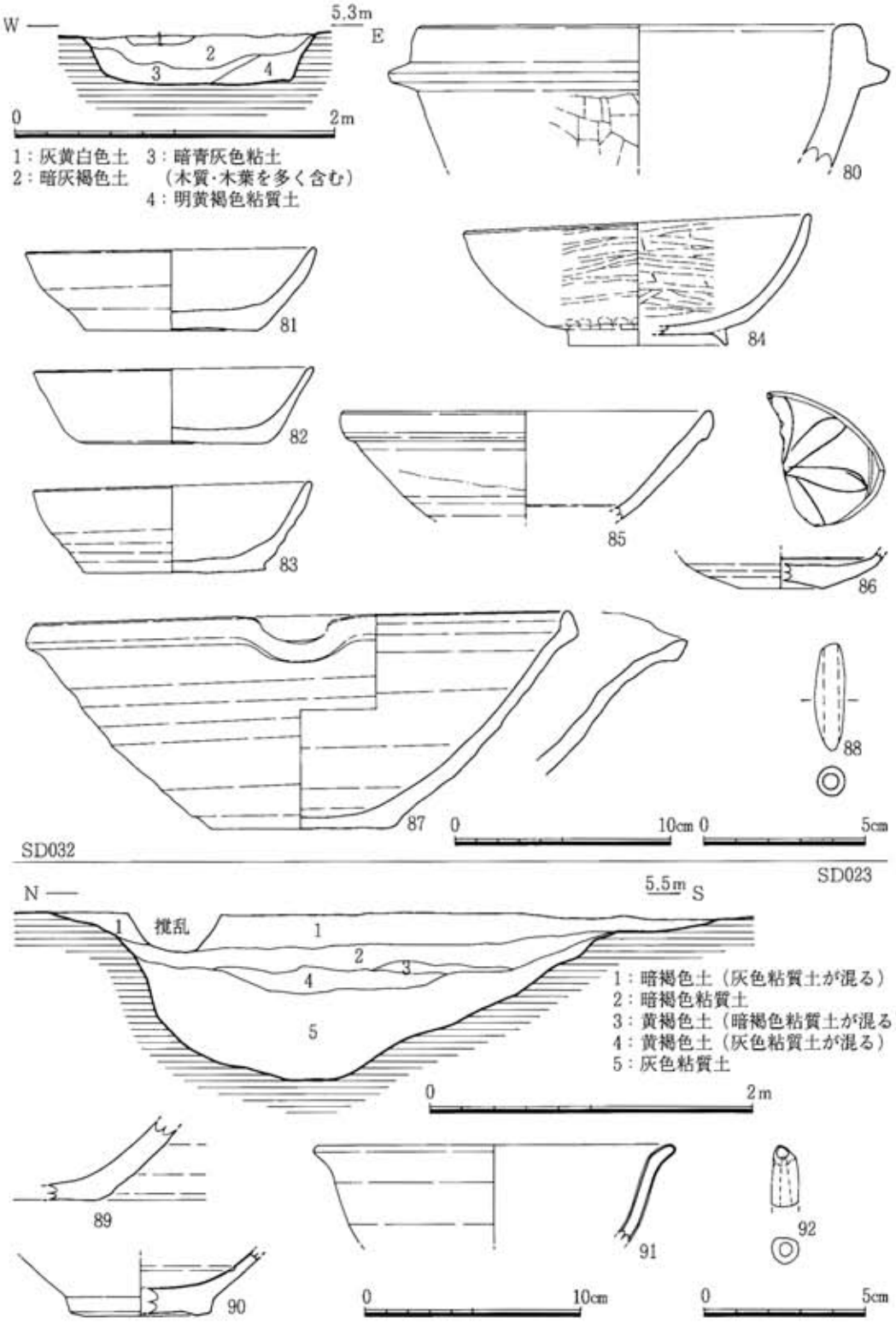


図55　ＳＤ032土層・ＳＤ023土層（１：40），出土遺物（１：３，88・92は１：２）

ＳＤ032出土遺物（図55）

80は滑石製石鍋で、木戸（1993）Ⅲ類ａ－２ないしⅢ類ｂと思われる。81～83は土師器杯である。全体に摩耗しているが底部回転糸切り離しと思われ、法量の平均は口径13.1cm、器高3.8cm、底径8.4cmである。84は瓦器椀で、内面はやや幅のあるヘラミガキ、外面は間隔のあくヘラミガキを施す。また、内面にはコテ当て痕を留める。85は白磁椀Ⅳ類、86は白磁ⅢⅧ類である。87は口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形に復元できる魚住窯産と思われる須恵器捏鉢である。底部は回転糸切り離し。焼成はやや軟質で口縁部内外面は重ね焼きにより暗灰色である。88は紡錘形の土錘である。81～83と87は完形に近い状態で近接して出土しており、ほぼ一括廃棄に近い資料と思われる。

ＳＤ023（図46・55）

調査区中央南東端に位置する縦に長い溝状の落ち込みである。圃場整備水路部の調査区に続き、そこで完結している。出土遺物には明らかに時期差のあるものが含まれる。

ＳＤ023出土遺物（図55）

89は東播系須恵器捏鉢で、回転糸切り離しの痕跡を留める底部破片である。90は白磁椀Ⅳ類の底部、91は釉の厚い端反りの青磁椀、92は紡錘形の土錘である。

ＳＤ016（図46・56）

調査区南側に位置する東西方向の溝で、走向はN73°Wである。幅0.4～0.5ｍ、深さ0.1ｍで、東西両端が削平により失われているが残存長は16ｍである。現場での所見による他遺構との重複関係では、ＳＫ042・ＳＤ046・ＳＤ014より新しく、ＳＥ015よりは古いと記録されている。

ＳＤ016出土遺物（図56）

93～101は瓦器椀で、いずれも口径に比して器高が低く、高台は大きく安定している。93･97は原形の杯を強くは押し出さずに高台を付けており、回転糸切り離しの痕跡及び体部と底部との境も明瞭である。95は重ね焼きにより外面口縁部以下と内底が薄い色調である。また、100は高台内に線彫りの記号を施している。102は白磁椀Ⅳ類である。

ＳＤ001（図46・56）

調査区の北端部に位置する溝で、延長６ｍの弧状に調査区にかかる。幅0.3～0.4ｍ、深さ0.1ｍである。ＳＤ002と重複し、これより古い。

ＳＤ001出土遺物（図56）

103は両刃の磨製石斧の破片である。104はＳＤ001の下部から出土したらしい弥生土器の甕である。口縁部の突帯はやや発達しており、逆に口縁下の突帯は低い。器面は摩耗しており調整は不明である。

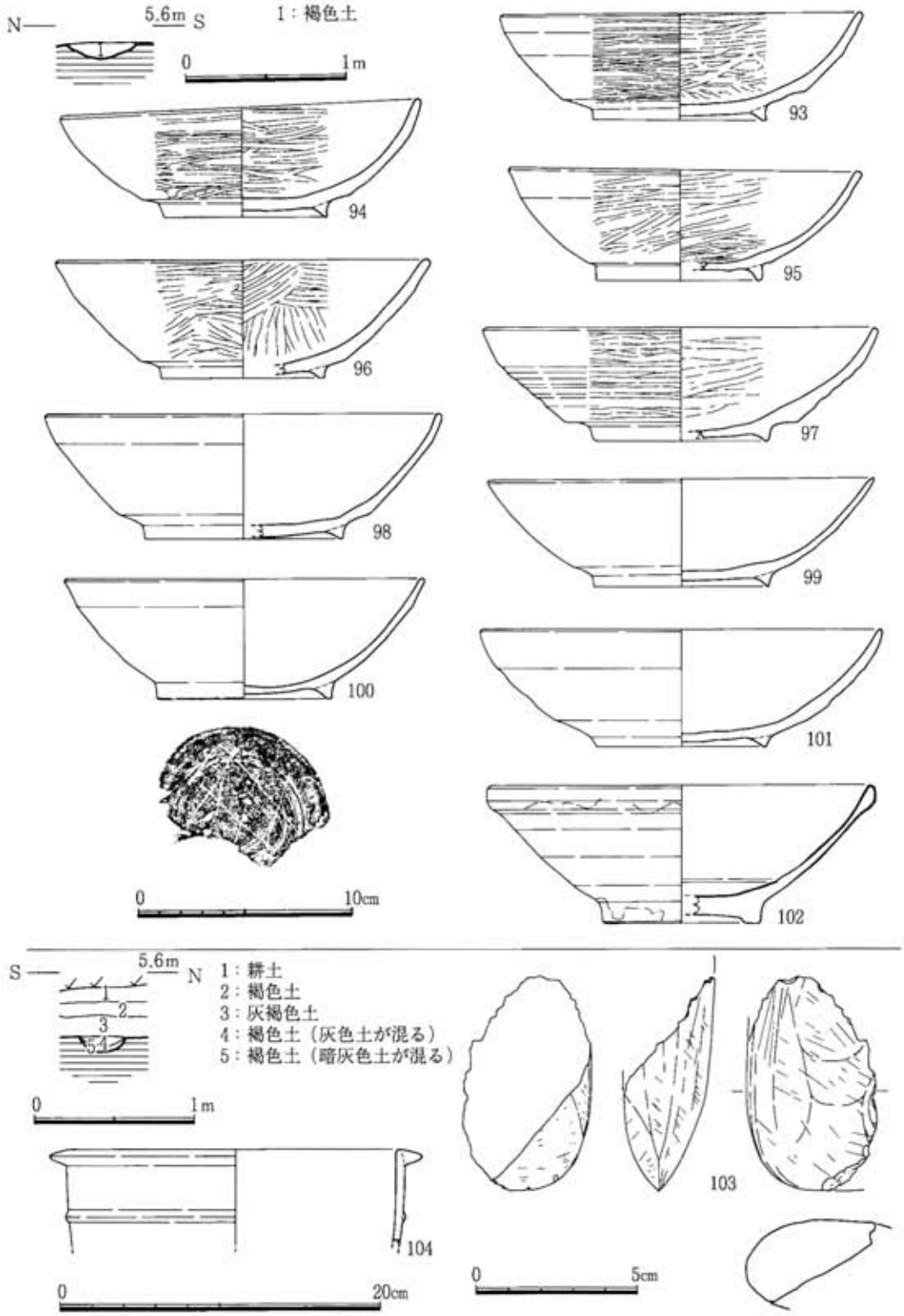


図56　ＳＤ016土層・ＳＤ001土層（１：40），出土遺物（１：３，103は１：２，104は１：４）

表3　小野原遺跡A区出土遺物一覧

法量の単位はcm・g。（　）は復元値

遺物番号	挿図番号	出土遺構	遺物の種類	法量 ①口径②底径③器高④胴部径⑤長さ⑥幅⑦厚さ⑧重量	色調・石材	登録番号
1	図47	S E005	土師器・杯糸切	①(13.3)②7.6③3.8	灰白色	94002901
2	図47	S E005	青磁・椀	①16.4②6.3③6.9	素地・露胎部：灰白色・釉調：オリーブ灰色	94002907
3	図47	S E005	青磁・椀		素地：灰白色・釉調：オリーブ黄色	94002911
4	図47	S E015	土師器・小皿糸切	①(9.5)②(7.2)③0.8	浅黄橙色	94002904
5	図47	S E015	土師器・杯糸切	②9.0	灰白色	94002902
6	図47	S E015	瓦器・小皿糸切	①(10.3)②(6.0)③1.8	口縁部～体部：暗灰色・内底・外底：灰白色	94002905
7	図47	S E015	瓦器・小皿糸切	②6.6	灰白色	94002908
8	図47	S E015	瓦器・椀	①(15.7)②(7.2)③5.5	内面：灰色・外面：灰白色	94002909
9	図47	S E015	瓦器・椀	①15.8②7.3③5.8	灰色・暗灰色	94002910
10	図47	S E015	須恵器・甕		内：褐灰色・外：にぶい褐色	94002906
11	図48	S E020	土師器・小皿糸切	①(9.2)②(7.2)③1.1	灰白色	94002903
12	図48	S K024	土師器・小皿糸切	①(8.5)②(6.5)③1.3	灰白色	94001422
13	図48	S K024	瓦器・椀	①(16.7)②(8.1)③5.9	灰色	94001423
14	図48	S K024	古瀬戸・卸皿	②8.0	素地・露胎部：灰色・釉調：オリーブ灰色	94002828
15	図48	S K024	青磁・皿	①(9.8)②(4.5)③1.9	素地・露胎部：灰色・釉調：明緑灰色	94001425
16	図48	S K024	青磁・椀	②(5.0)	素地・露胎部：灰白色・釉調：オリーブ灰色	94002826
17	図48	S K024	青磁・椀	②(5.7)	素地・露胎部：灰白色・釉調：オリーブ黄色	94001424
18	図48	S K024	白磁・椀		素地・露胎部・釉調：灰白色	94002827
19	図49	S K024	須恵器・甕		灰色	94002832
20	図49	S K024	須恵器・甕		灰色	94002830
21	図49	S K024	須恵器・甕		内：灰色・外：灰白色	94002829
22	図49	S K024	須恵器・甕		灰色	94002831
23	図49	S K024	須恵器・捏鉢		灰白色	94001421
24	図49	S K024	石鍋		滑石	94002836
25	図49	S K024	砥石	⑤10.5⑥6.2⑦4.9		94002834
26	図49	S K024	砥石	⑤12.9⑥7.6⑦7.0		94002835
27	図49	S K024	砥石	⑤6.2⑥5.2⑦3.1		94002833
28	図50	S K041	瓦器・椀	①18.2②6.6③6.7	灰白色	94000340
29	図50	S K041	土師器		黒褐色	94000339
30	図50	S K019	土師器・甕	①(23.2)	浅黄橙色	94000337
31	図50	S K019	須恵器・杯	①(12.8)②(8.8)③3.2	灰白色	94000334
32	図50	S K019	須恵器・杯	①(12.4)②7.5③3.6	灰色	94000333
33	図50	S K019	須恵器・杯	①(12.6)②(7.2)③4.0	灰色	94000332
34	図50	S K019	須恵器・杯	②(8.2)	黄白色	94000335
35	図50	S K043	須恵器・杯	①12.7②6.8③4.7	浅灰色	94000342
36	図50	S K043	須恵器・皿	①15.4②11.6③2.5	浅灰色	94000341
37	図50	S K043	土師器・甕	①(22.8)	内：灰褐色・外：黄橙色	94000343
38	図50	S K043	鞴羽口			94000344
39	図51	S K042	須恵器・蓋	①(15.8)	灰色	94000331
40	図51	S K042	須恵器・皿	①(17.0)②(13.6)③2.0	灰色	94000328
41	図51	S K042	須恵器・杯	①(11.9)②(7.1)③3.5	灰白色	94000329
42	図51	S K042	須恵器・杯	②7.9	暗灰色	94000327
43	図51	S K042	土師器・杯	②8.9	黄橙色	94000326
44	図51	S K042	須恵器・甕	①(23.4)	灰色	94000330
45	図51	S K042	土師器・甕	①(28.9)	内：浅黄橙色・外：にぶい黄橙色	94000323
46	図51	S K042	土師器・甕	①(28.1)	浅黄橙色	94000324
47	図51	S K042	土師器・甕	①(28.2)	灰白色	94000325
48	図53	S X009	土師器・杯糸切か	①(15.2)②7.6③3.6	浅黄橙色	94000577
49	図53	S X009	土師器・杯糸切か	①15.9②8.6③3.8	浅黄橙色	94000578
50	図53	S X009	土師器・杯糸切	①15.9②8.6③4.5	浅黄橙色	94000579
51	図53	S X009	土師器・杯糸切	①15.7②9.1③3.6	浅黄橙色	94000591
52	図53	S X009	瓦器・椀	①(15.2)②(7.2)③5.4	明オリーブ灰色	94000583
53	図53	S X009	瓦器・椀	①15.9②7.2③5.5	灰色	94000582
54	図53	S X009	瓦器・椀	①16.2②7.4③6.1	明オリーブ灰色	94000581
55	図53	S X009	瓦器・椀	①16.2②(6.0)③5.7	灰色	94000584
56	図53	S X009	瓦器・椀	①(14.4)②7.2③4.7	灰色	94000580
57	図53	S X009	白磁・椀	①(17.3)	素地・釉調：灰白色	94000585
58	図53	S X009	石鍋		滑石	94000586
59	図53	S X033	土師器・杯糸切	①(15.2)②(9.4)③3.5	浅黄橙色	94000592
60	図53	S X033	白磁・椀	①(16.0)	素地・釉調：灰白色	94000594
61	図53	S X033	白磁・椀	②(8.2)	素地・露胎部・釉調：灰白色	94000595
62	図53	S X033	青磁・皿	②(3.8)	素地・露胎部：灰色・釉調：灰オリーブ色	94000596
63	図53	S X033	陶器・壺	②(8.4)	灰色	94000593
64	図53	S X033	土錘	⑤3.1⑥0.9⑧2.2	暗灰黄色	94000597
65	図54	S D007	須恵器・捏鉢		灰白色	94002839
66	図54	S D007	白磁・椀		素地：灰白色・釉調：明オリーブ灰色	94002840
67	図54	S D007	白磁・椀	②(7.4)	素地・釉調：灰白色・釉調：灰オリーブ色	94002841
68	図54	S D007	瓦器・小皿	①(9.8)②5.5③2.0	灰色	94002838

遺物番号	挿図番号	出土遺構	遺物の種類	法量 ①口径②底径③器高④脚部径⑤長さ⑥幅⑦厚さ⑧重量	色調・石材	登録番号
69	図54	S D007	鞴羽口			94002849
70	図54	S D007	鞴羽口			94002848
71	図54	S D030	青白磁・合子蓋	①(5.4)天井部径(4.3)	素地・露胎部：灰白色・釉調：灰白色～淡青色	94002844
72	図54	S D030	青磁・椀	①(16.4)	素地・釉調：オリーブ黄色	94002843
73	図54	S D030	青磁・皿	①(10.5)②(5.1)③2.3	素地・釉調・露胎部：灰白色	94002842
74	図54	S D030	須恵器・甕		灰色	94002846
75	図54	S D030	鞴羽口			94002850
76	図54	S D037	陶器・壺	②(8.4)	灰白色	94002845
77	図54	S D037	土錘	⑤1.4⑥0.8⑧0.5	赤橙色	94002928
78	図54	S D037	土錘	⑤3.7⑥0.9⑧2.2	にぶい橙色	94002927
79	図54	S D037	土錘	⑤4.3⑥1.6⑧7.2	褐灰色～黒褐色	94002926
80	図55	S D032	石鍋	①(20.4)	滑石	94002856
81	図55	S D032	土師器・杯糸切	①13.4②8.0③3.7	にぶい黄橙色	94000598
82	図55	S D032	土師器・杯糸切か	①(13.0)②8.8③3.6	褐灰色	94000599
83	図55	S D032	土師器・杯糸切か	①13.0②8.4③4.0	にぶい黄橙色	94000600
84	図55	S D032	瓦器・椀	①(16.0)②(7.3)③5.7	灰色	94002851
85	図55	S D032	白磁・椀	①(17.2)	素地・釉調・露胎部：灰白色	94002853
86	図55	S D032	白磁・皿	②(3.8)	素地・釉調・露胎部：灰白色	94002854
87	図55	S D032	須恵器・擂鉢	①25.0②8.3③10.0	褐灰色	94002852
88	図55	S D032	土錘	⑤3.3⑥0.9⑧1.5	橙色	94002855
89	図55	S D023	須恵器・擂鉢		灰白色	94000587
90	図55	S D023	白磁・椀	②(6.6)	素地・釉調・露胎部：灰白色	94000590
91	図55	S D023	青磁・椀	①(16.6)	素地：灰白色・釉調：淡緑色	94000589
92	図55	S D023	土錘	⑤1.9⑥0.8⑧1.1	浅黄橙色	94000588
93	図56	S D016	瓦器・椀	①16.7②7.9③5.0	内：灰白色・外：灰色	94001346
94	図56	S D016	瓦器・椀	①16.8②7.6③5.1	灰色	94001345
95	図56	S D016	瓦器・椀	①16.3②(7.5)③5.1	灰白色	94001347
96	図56	S D016	瓦器・椀	①(17.4)②(7.6)③5.5	灰色	94001348
97	図56	S D016	瓦器・椀	①(18.2)②(8.0)③5.3	内：灰白色・外：灰色	94001341
98	図56	S D016	瓦器・椀	①(18.4)②(9.2)③5.8	内：灰白色・外：灰色	94001342
99	図56	S D016	瓦器・椀	①(17.9)②(8.0)③5.0	灰色	94001349
100	図56	S D016	瓦器・椀	①(16.8)②(8.2)③5.6	内：灰色・外：灰黄色	94001344
101	図56	S D016	瓦器・椀	①(18.6)②(7.8)③5.4	灰色	94001343
102	図56	S D016	白磁・椀	①(18.3)②(7.1)③6.4	素地：灰オリーブ色・露胎部・釉調：灰白色	94001350
103	図56	S D001	磨製石斧	⑤6.7⑥4.1⑦2.5⑧56.7		94002847
104	図56	S D001	弥生土器・甕	①(23.2)	内：にぶい黄橙色・外：にぶい褐色～褐灰色	94002837

3．まとめ

小野原遺跡A区の調査では、奈良時代と中世前期の2時期を中心とする集落関連遺構を検出した。奈良時代の遺構は土坑のみであったが、律令制下における橘地区を考えるうえで基礎資料の一つとなるものである。中世前期の遺構は、全体に削平を受けていたことと掘立柱建物を復元できなかったことから、集落構造を検討することができなかった。

中世前期の遺構のうち、ＳＸ009は構造も具体的な性格も不明ではあるが、特異な形状や灰層の堆積、周囲を画する溝の存在とその埋土からの鞴羽口の出土、等から集落内ないし集落近接地における鍛治に関連する遺構であると思われる。武雄盆地における中世前期の土師器杯・小皿は、器形や製作技術は大宰府や佐賀平野と相似した変遷をたどっており、口径の変化も佐賀平野に近いようであるが、器高が全体に高い地域的な特徴を有している。ＳＸ009・ＳＸ033出土の土師器杯（48～51・59）は、いずれも底部回転糸切り離しで、口径15cm代、器高3cm後半代であり、器高の高さを先述した武雄盆地の特徴とみれば、おおむね佐賀平野の12世紀後半～13世紀初頭頃に対比できるものと思われる。小野原遺跡A区の土師器杯・小皿は全て底部回転糸切り離しで、全体として12世紀中頃以前には溯らない。新しい様相を示す資料としては、ＳＤ032の3点の土師器杯（81～83）がある。口径13cm前半代、器高3cm後半代であり、器形の特徴を併せて考えると、佐賀平野で13世紀末～14世紀中頃と考えている資料に対比でき、共伴の東播系須恵器捏鉢の形態とも齟齬はない（ＳＤ032出土資料が総体として同時期のものかどうかは別問題である）。その他の土器・陶磁器類もほとんどが12世紀後半から14世紀中頃の時期幅に収まるようである。したがって、在地土器食膳具を基準とした地域編年の確立が課題であるが、小野原遺跡A区の中世集落は、調査区内という条件付きながらほぼ中世前期に限られるものと言えるだろう。

小野原遺跡A区で検出された中世の溝は、走向がN16°～25°Eとこれに直交するN70°～74°Wとに集中している。周辺は、服部（1979）の条里復元案では下立石里の範囲にあたり、基軸線の走向はN25°Eとされている。つまり、検出された鎌倉期前後の集落内もしくは周辺の溝は、この地区の条里型地割りに強く規制されていることが解る。今次調査のもっとも重要な成果はこの点にあると言えよう。

引用文献（第2章で掲げたものは省略）

木戸 雅寿（1993）石鍋の生産と流通について．中近世土器の基礎研究Ⅸ，pp.127―143，日本中世土器研究会

横田 賢次郎・森田 勉（1978）大宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心として―．九州歴史資料館研究論集，4，pp.1―26，九州歴史資料館

第６章　みやこ遺跡Ｂ・Ｃ区

遺跡名：みやこ遺跡Ｂ・Ｃ区（略号ＯＮＯ―Ｂ・Ｃ）
所在地：佐賀県武雄市橘町大字大日字郷ノ木

第６章　みやこ遺跡Ｂ・Ｃ区

１．みやこ遺跡Ｂ・Ｃ区の概要

みやこ遺跡Ｂ・Ｃ区は、佐賀県武雄市橘町大字大日字郷ノ木に所在する。調査対象となった面積は17,000㎡で、調査範囲はＢ区1,040㎡、Ｃ区450㎡の計1,490㎡である。遺跡は六角川（潮見川）改修前の右岸にあたり、標高約６ｍの自然堤防上に立地する。

今回の九州横断自動車道建設に伴う調査区は、Ｂ区が武雄市教育委員会調査の茂手遺跡Ⅰ・Ⅱ区の東に接し、Ｃ区は武雄市教育委員会調査のみやこ遺跡Ⅵ区の西側に各々位置する。第１章に記した理由により、現地調査及び概要報告の段階で小野原遺跡Ｂ・Ｃとなっていた遺跡名を、本報告ではみやこ遺跡Ｂ・Ｃ区に訂正している。

ここ10数年来、橘地区一帯では六角川（潮見川）河川改修や圃場整備等の大規模開発に伴って各時代の遺跡が広範囲に調査されており、中世の遺構・遺物もかなりの頻度で検出されている。集落遺構は、六角川河川改修関係の潮見遺跡、みやこ遺跡、市場遺跡、郷ノ木遺跡、茂手遺跡、納手遺跡、板橋遺跡、山下遺跡、圃場整備関係の小野原遺跡、下貝原遺跡、玉江遺跡、井手橋遺跡、市場遺跡等、枚挙に暇ない。中世墓は、みやこ遺跡と玉江遺跡で副葬品を伴う土葬墓が検出されているが、いずれも墓域を形成するものではなく、いわゆる屋敷墓の類いと思われる。これら長嶋荘故地における中世遺跡の分析や評価はこれからの課題であり、今次調査の成果と合わせて総合的な検討が必要である。「みやこ」の地名は建治三（1277）年十二月廿日地頭領家田地屋敷注文案（橘中村文書７号）に地頭分田地として「都里（みやこがり）」の名で現れるのが初見である。この「都里」は、服部英雄（1979）の条里復元案によれば今回の調査区を含む一帯に比定され、ＮＳ及びＮ４°Ｗの走向を示すとされている。

みやこ遺跡Ｂ区は南北に細長い調査区で、中央部を大規模な溝状遺構のＳＤ001が縦断する。これから西に向かって幅0.5～0.7ｍ程の小溝ＳＤ002・ＳＤ003・ＳＤ004・ＳＤ005・ＳＤ006・ＳＤ007・ＳＤ008がほぼ等間隔に延び、この部分には、やや疎らながらも土坑や小穴が存在する。いずれも中世前期の遺構である。ＳＤ001より東側部分では全く遺構が確認されておらず、調査前の地割りや田面標高等と併せて推察すると、この辺りが潮見川の自然堤防上に展開した中世前期集落の東限を示すのであろう。

みやこ遺跡Ｃ区は、潮見川（六角川）改修以前の右岸堤防下にあたる。Ｃ区東方の武雄市教育委員会調査区では各時代の濃密な集落遺構が展開しているのに対し、Ｃ区では遺構が極めて希薄で、中世後期の土葬墓４基の他は溝・土坑各１基と性格不明の落ち込み３箇所が検出されたのみである。小穴がほとんどなく墓葬のみがやや集中するＣ区の状況は、中世後期における集落外縁の様相を典型的に表しているものと考えられる。

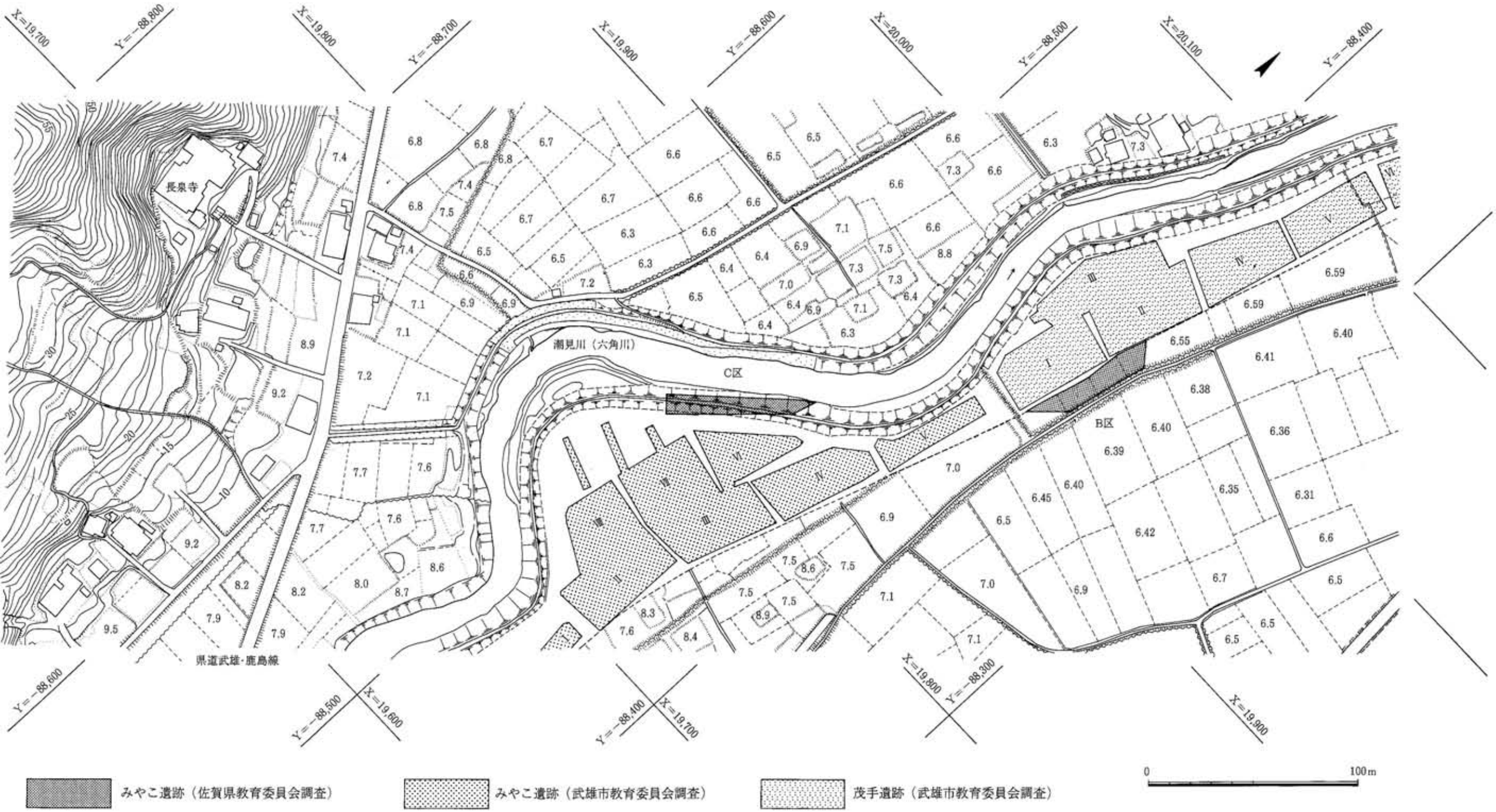
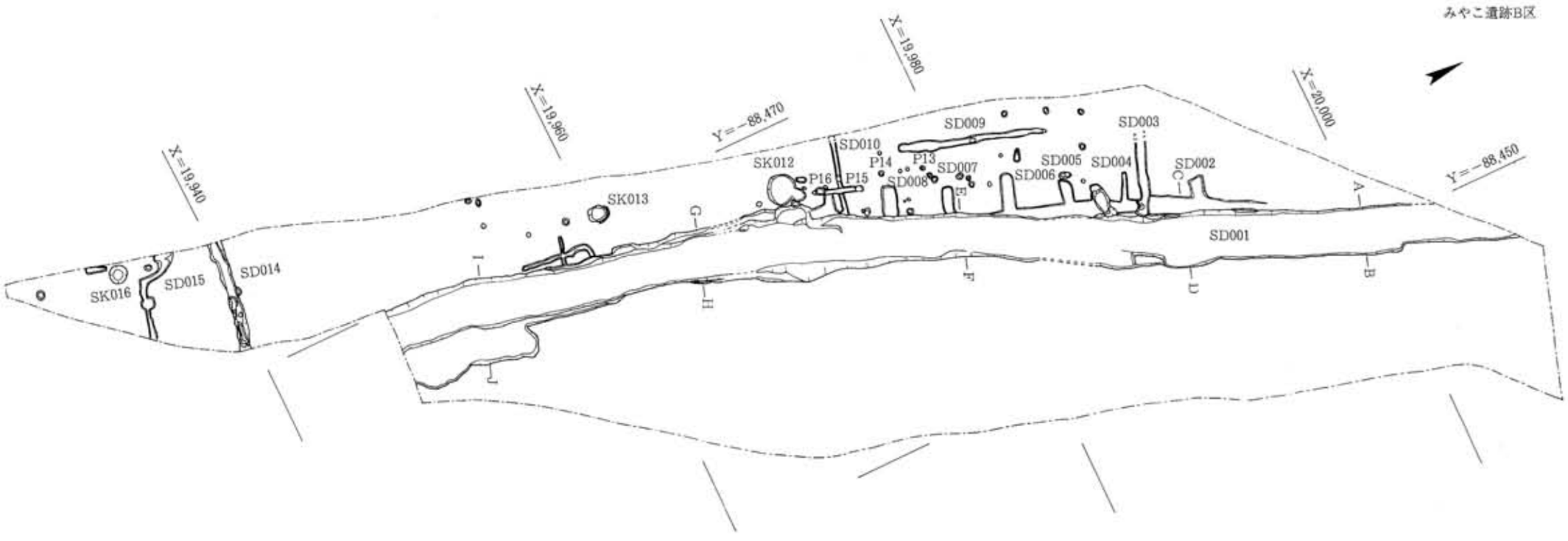


図57　みやこ遺跡B・C区周辺の地形（1：2000）



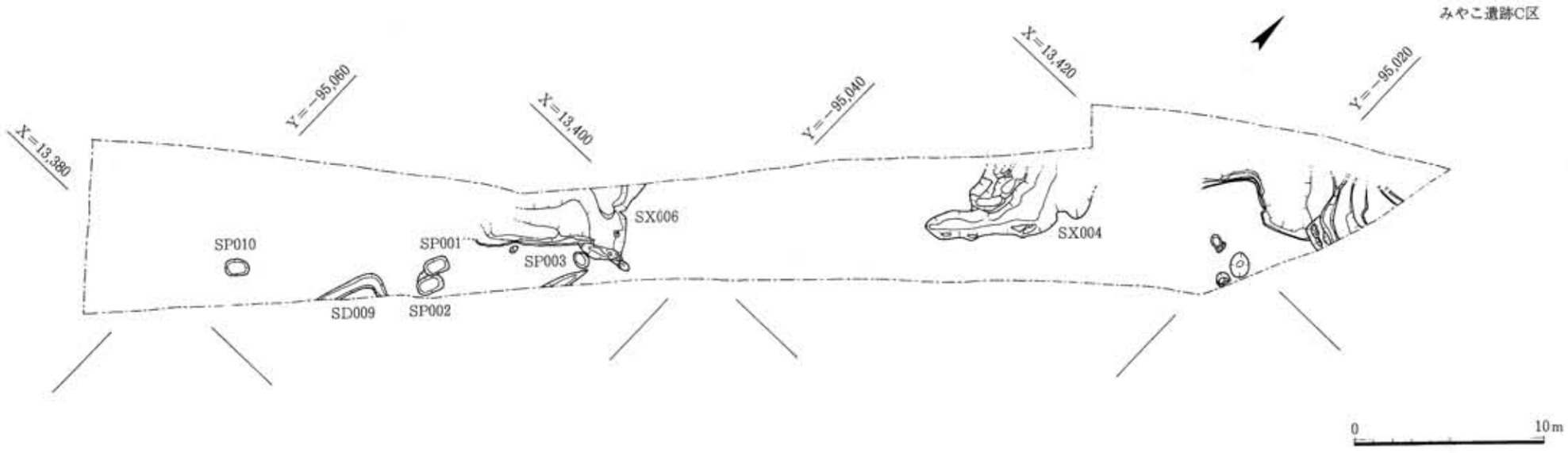


図58　みやこ遺跡B・C区の遺構（1：300）

2．B区の遺構と遺物

ＳＤ001（図58・66）

ＳＤ001は調査区を南北に縦断する溝状遺構である。幅2.2～3.0ｍ、深さ0.3～0.5ｍで、南端部分には東側に幅2.0ｍの浅い段が付く。ＳＤ001の走向は、北側ではＮ24°Ｅであるが、調査区の中程でＮ12°Ｅにやや向きを変えて南に延びる。埋土中から多量の土器類が出土しているが、出土状況は明らかでない。このＳＤ001より東側には全く遺構が確認されておらず、調査精度の問題を考慮しても、この遺構が居住域の東限にあたることは間違いない。

ＳＤ001出土遺物（図59～66）

１～23は土師器杯である。底部切り離し手法は、１が回転ヘラ切り離しの可能性があるものの、他は確認できるもの全てが回転糸切り離しである。

24～40は土師器小皿である。底部切り離し技法は摩耗のため確認できない38・40を除き全て回転糸切り離しである。

41～43は土師器椀で、いずれも摩耗のため器面調整は不明である。41は内面にコテ当て痕がある。43は色調から土師器としたが、瓦器の可能性がある。

44は瓦器の可能性もあるが、黒色土器Ｂ類椀と報告しておく。高台は低く厚い台形状で、ヘラミガキの幅は瓦器に比して狭い。内面にコテ当て痕が認められる。

45～69は瓦器椀である。45～47・63は回転糸切り離しの痕跡を留める。45～47・49・50・52・54・59は重ね焼きによる異色部分が観察される。59・61の高台内には「×」状の線彫がある。70～76は瓦器小皿で、全て底部回転糸切り離しである。70は底部を押し出し丸底に作るもの、71～76は平底のものであるが72には内面にヘラのあたりが観察される。75は外底部にもヘラミガキを施し、口縁部内外面に重ね焼きによる帯状の暗色部分が観察される。

77・78は東播系と思われる須恵器捏鉢である。77は体部が直線的に開き口縁部は切り落としたような端面をなすもの、78は直線的に開く器形に切り落としたような端面をなし、口縁内端側がやや突出するものである。

79は東播系と思われる須恵器甕の胴部破片で、器面調整は内面がナデ、外面は平行タタキの後軽くナデ。焼成は良好で硬質である。

80・81は褐釉系陶器の壺（瓶）である。80は口縁部で、肩部から大きくすぼまり口縁部が短く外折する。口縁部はやや膨らむが口縁端は尖り気味に終わる。81は口縁部を欠失する長胴の壺である。底部外面は中心側を削り幅広の高台に作る。80は褐色の釉調であるが、81は発色の良い部分では粗製の青磁に近い釉調である。

82～126は白磁である。82～86は椀Ⅱ類（横田・森田，1978、以下の中国産磁器の分類に関して特に断らない場合はこれによる）、87～97は椀Ⅳ類、98～104は椀Ⅳ類の底部、105～110は椀Ⅴ類、111・112は椀Ⅷ類、113は椀Ⅸ類である。114～124は皿Ⅵ類で、114は外底部に花押と思

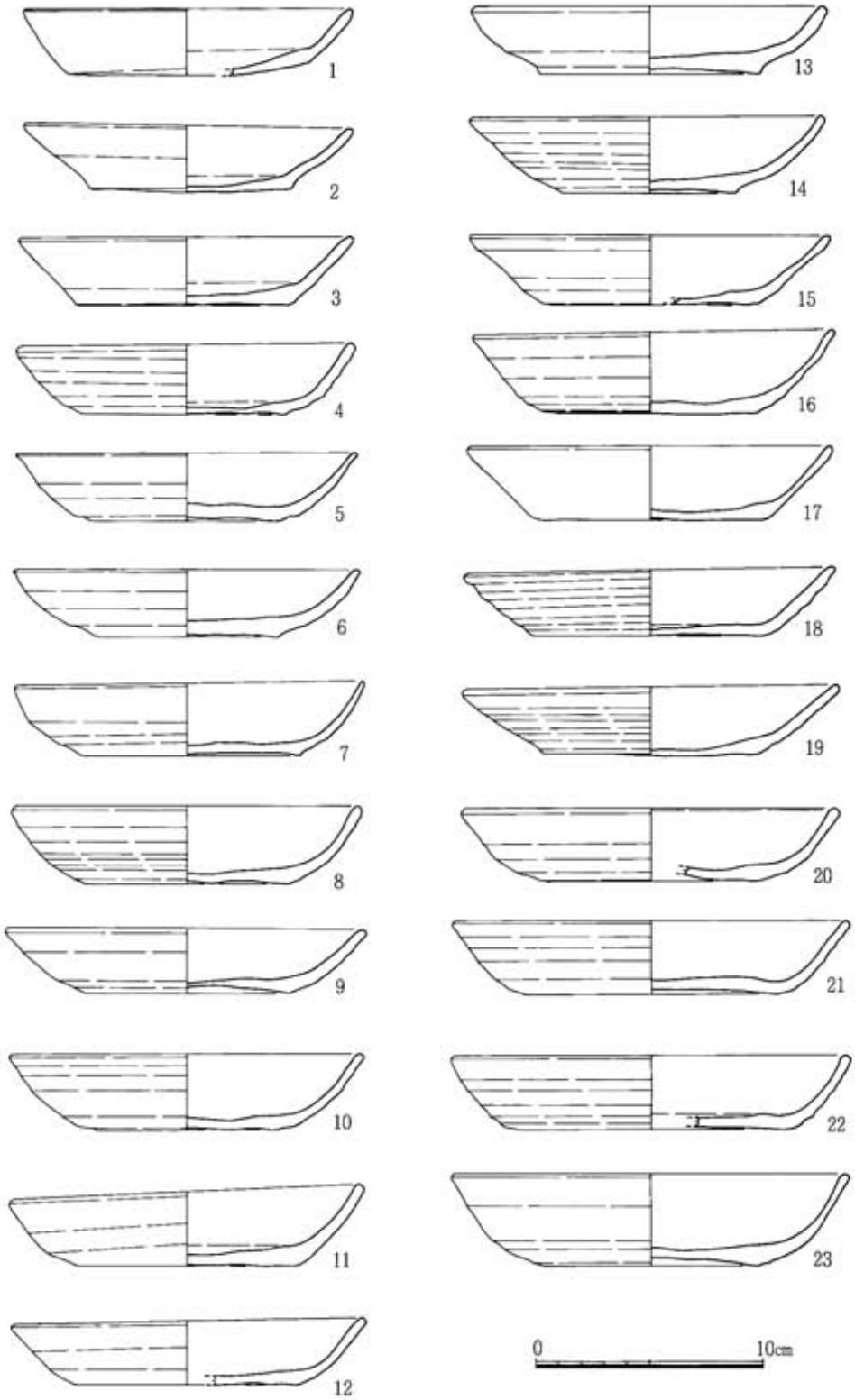


図59　B区ＳＤ001出土遺物１（１：３）

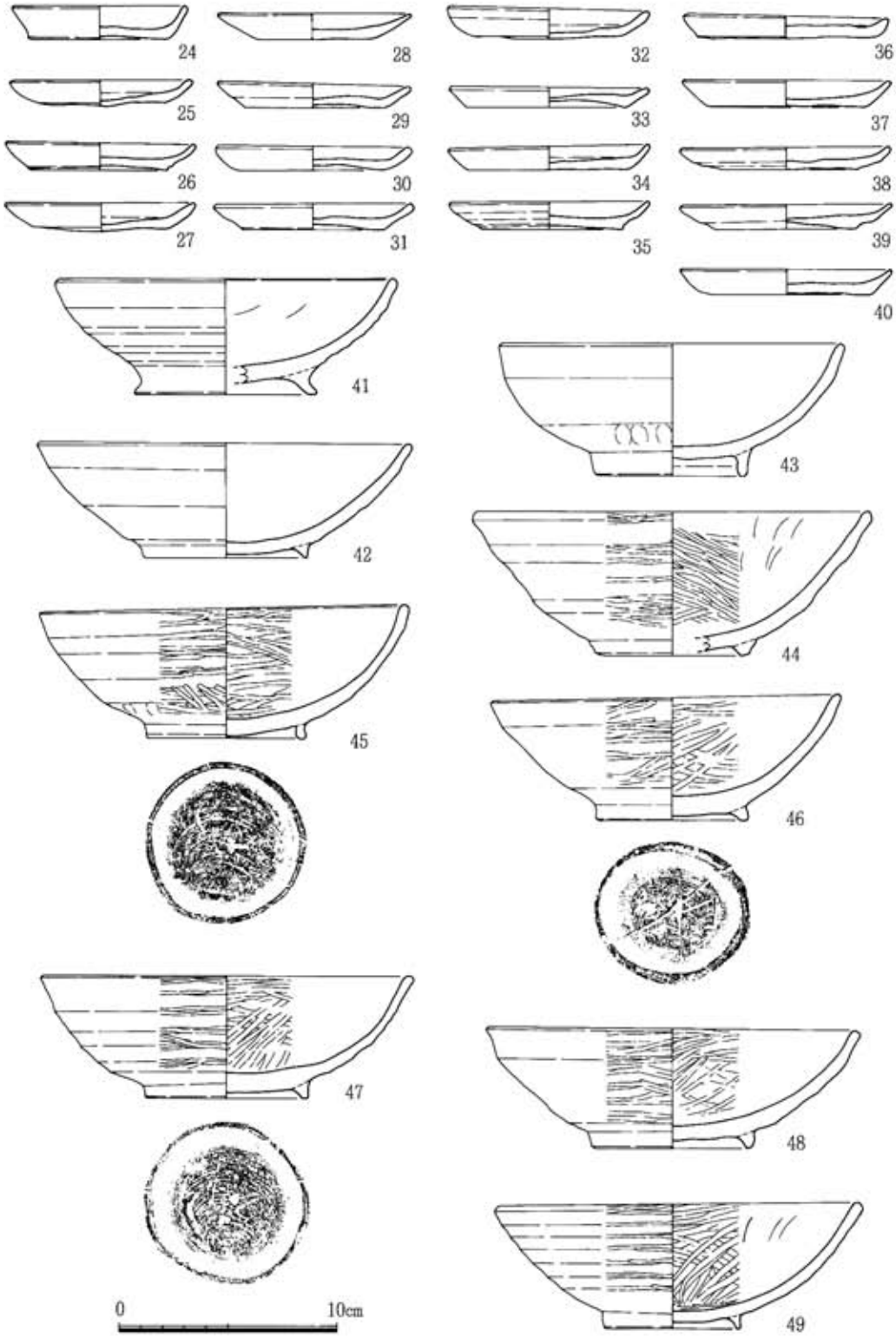


図60　B区ＳＤ001出土遺物２（１：３）

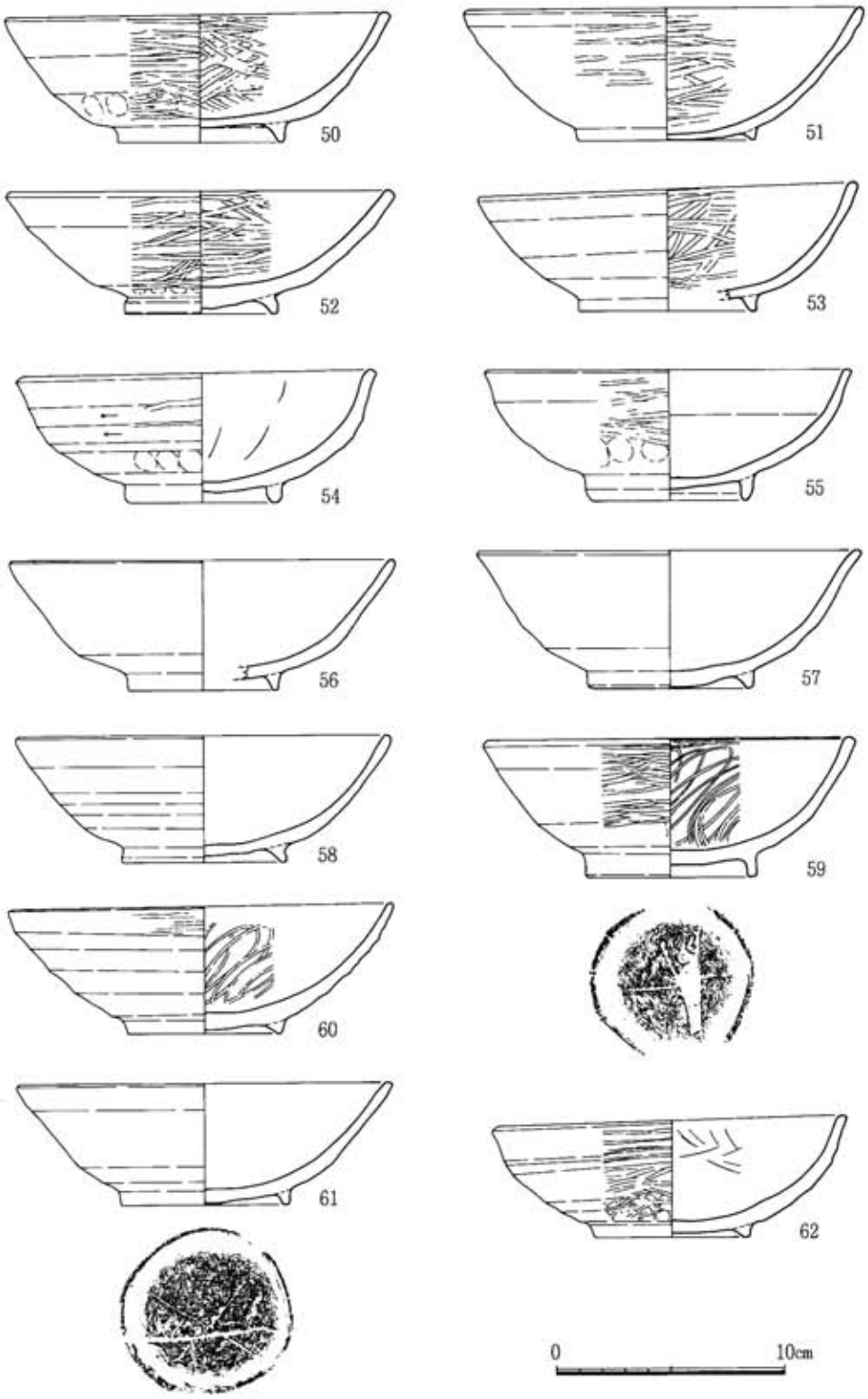


図61　B区ＳＤ001出土遺物３（１：３）

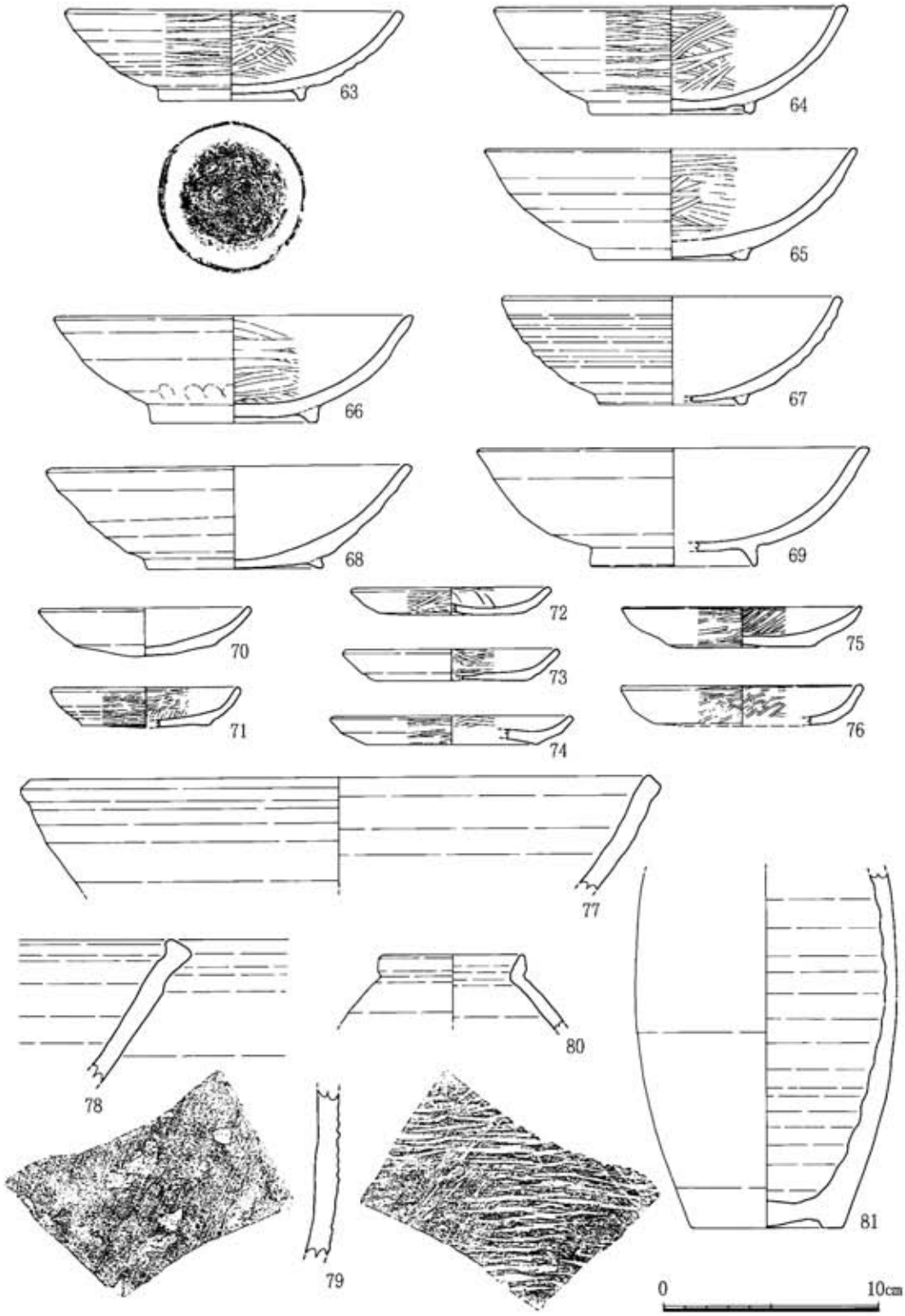


図62　B区ＳＤ001出土遺物４（１：３）

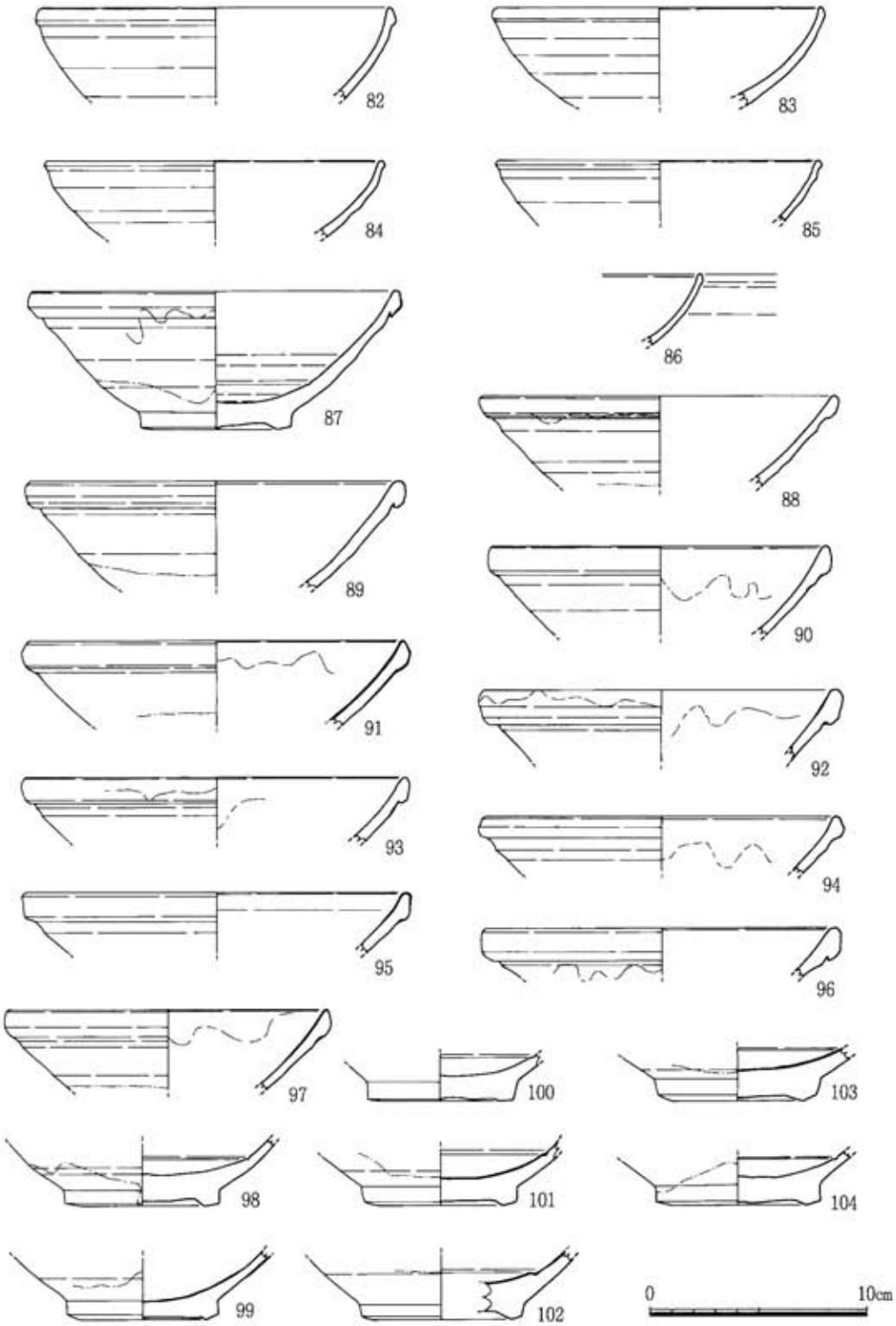


図63　B区ＳＤ001出土遺物５（１：３）

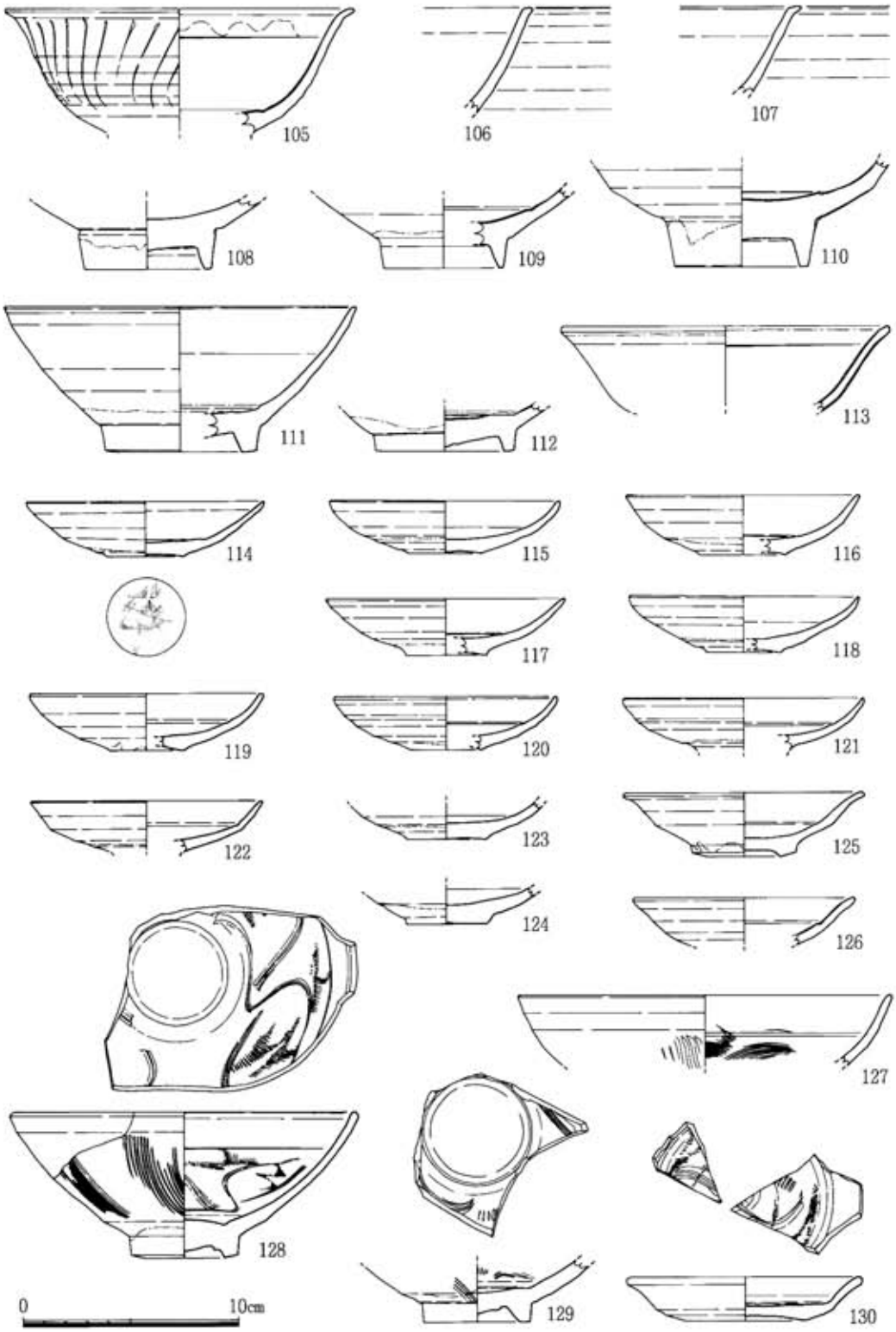


図64　B区ＳＤ001出土遺物６（１：３）

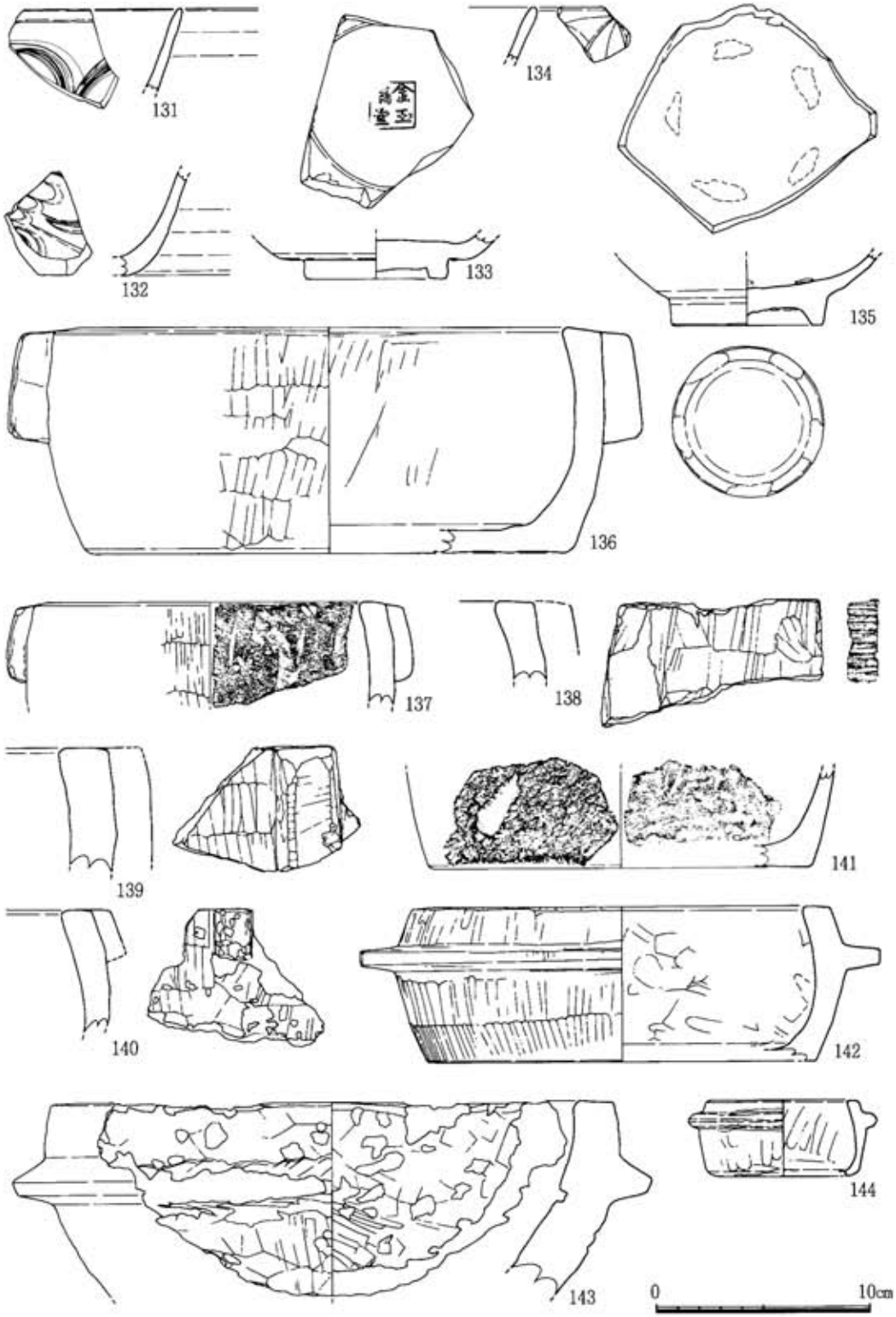


図65　B区ＳＤ001出土遺物７（１：３）

われる墨書がある。125・126は皿II類である。

127～130は同安窯系青磁で、127は椀III類、128・129は椀I－1b類，130は皿である。

131～134は龍泉窯系青磁で、131は椀I－4類、132は椀I－2類、133は椀I類で内底部に「金玉満堂」の印文を施すもの、134は鎬蓮弁文の椀I－5b・c類である。

135は初期高麗青磁で、山本（1985）分類の椀III類にあたる粗製品の底部である。素地は粗く、白色粒が器面にもやや浮いている。透明感のある釉を全面に施したのち、高台端面のみ削り取っている。内底部と高台端面に各々5箇所の白色の耐火土と思われる目跡がある。

136～144は滑石製石鍋である。136～139は長方形の把手が縦に付くII類a（木戸，1993、以下の滑石製石鍋の分類に関してはこれに拠り説明する）である。138は破損後に図の右側の断面を再加工している。140はII類bである。141は底部のみが遺存するものである。142は断面長台形の鍔が付くIII類a1である。143はIII類a2で、素材が粗く表面や断面に孔が多い。144はIII類aを小型にしたものと思われ、明瞭な煤の付着が認められないため模造品の可能性も残るが、他の例からするとおそらく実用に供されたものであろう。145～149は鞴羽口である。

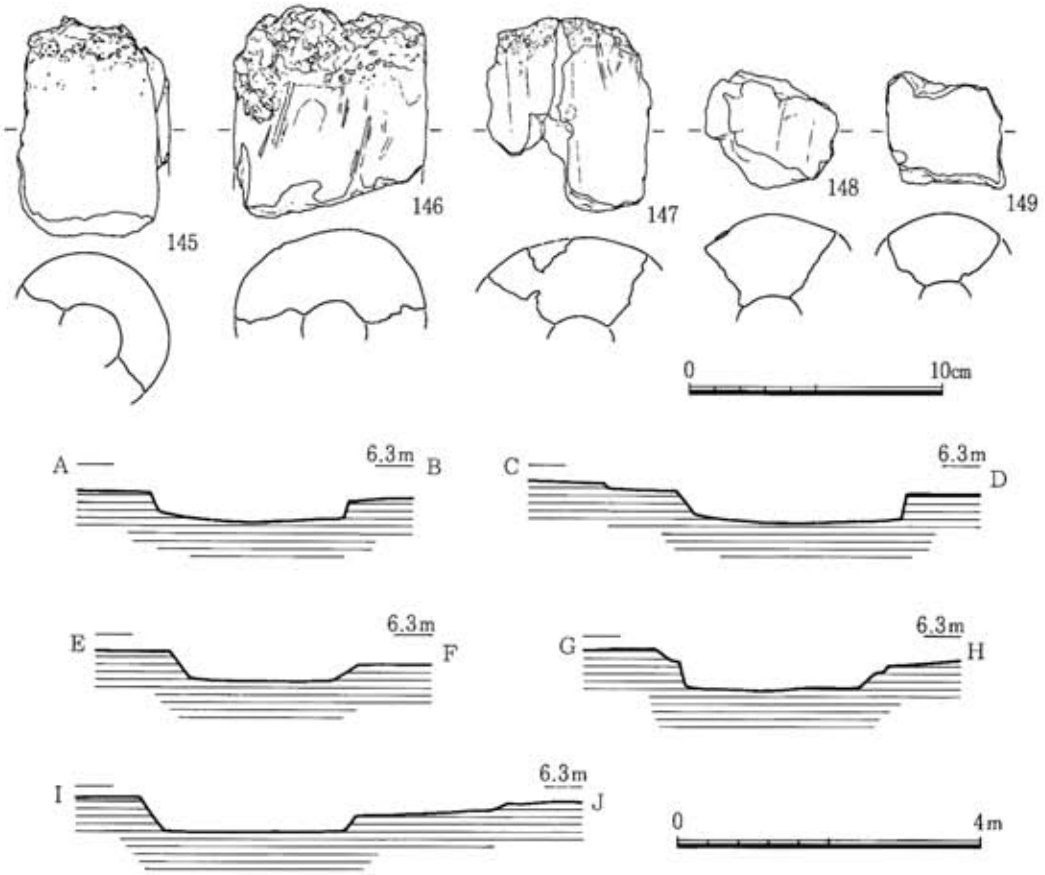


図66　B区SD001出土遺物8（1：3），SD001横断面（1：100）

ＳＫ013（図67）

調査区中央部の南西寄りに位置する土坑である。平面は不整な楕円形で、長径2.2ｍ、短径2.0ｍ、深さ0.3ｍである。

ＳＫ013出土遺物（図67）

150は白磁椀Ⅳ類の口縁部、151は滑石製石鍋の口縁部小破片である。

その他の出土遺物（図67）

152は押印文を留める常滑焼甕、153は白磁皿Ⅱ類、154は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類、155は底部回転糸切り離しの土師器小皿、156は白磁椀Ⅱ類、157は白磁椀Ⅴ類、158は底部回転糸切り離しの土師器杯、159は東播系須恵器捏鉢、160は褐釉系陶器壺、161は鞴羽口である。

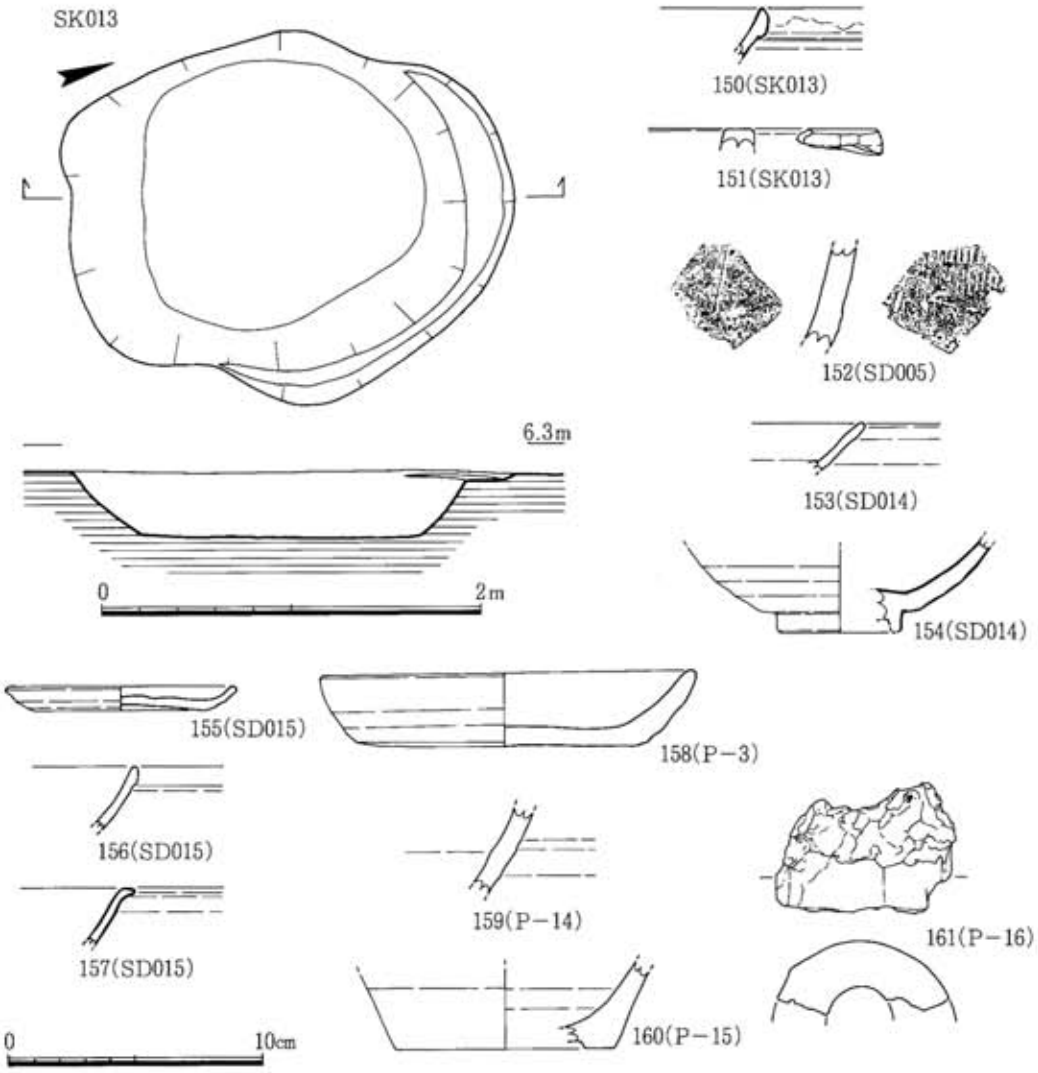


図67　Ｂ区ＳＫ013（１：40），Ｂ区出土遺物（１：３）

3．C区の遺構と遺物

ＳＰ001（図68）

C区の南側東寄りに位置する土葬墓である。ＳＰ002と重複し、新旧関係は実測図ではＳＰ001が新しいような表現がされているが、所見は記されておらず厳密には不明である。土坑の平面形はやや不整な隅丸長方形で、検出面で長軸1.2m、短軸0.9～0.8m、底面で長軸0.9m、短軸0.6m、深さ0.5mである。底面は平坦で、壁はややきつく立ち上がる。土層横断面の状況からすると木棺墓であった可能性が強い。副葬品としては、南側の墓坑上部から棺上に置かれていたものとみられる土師器杯が、北側底面中央部から棺内副葬と見られる白磁杯・銅製八花形容器が、いずれも完形で出土した。白磁杯と銅製容器は倒位に白磁杯を上にして重ねられており、更に銅製八花形容器の中に有機物が収められていた。人骨の遺存がないため頭位は推定によらざるをえないが、仮に墓坑の幅が広い方を頭側とすれば主軸はＳ23°WでＳＰ002と同じである。

ＳＰ001出土遺物（図68）

162は完形の白磁杯である。素地は緻密で磁胎である。粘性の強い不透明の白色釉が施され、高台部以下は露胎である。高台内に円形の記号状の墨書が施されている。163は完形の銅製八花形容器で、仏器ではないかと思われるが類例を見つけることができなかった。164は底部回転糸切り離しの土師器杯で、器壁は薄く内外面とも顕著なヨコナデが認められる。口径12.0cm、器高3.1cm、底径6.3cmである。

ＳＰ002（図68）

C区の南側東端に位置する土葬墓である。ＳＰ001と重複し、新旧関係は実測図ではＳＰ002が古いような表現がされているが、所見は記されておらず厳密には不明である。土坑の平面形はやや不整な隅丸長方形で、検出面で長軸1.4m、短軸0.9～0.7m、底面で長軸1.2m、短軸0.7～0.6m、深さ0.4mである。底面は平坦で、壁はややきつく立ち上がる。副葬品としては、南側の底面近くから完形の土師器杯２点と銅銭約３枚が出土した。銅銭については劣化が著しく銭種の判別ができなかった。人骨の遺存がないため頭位は推定によらざるをえないが、仮に墓坑の幅が広い方を頭側とすれば主軸はＳ23°WでＳＰ001と同じである。

ＳＰ002出土遺物（図68）

165・166は底部回転糸切り離しの土師器杯で、器壁は薄く内外面とも顕著なヨコナデが認められる。165は口径10.9cm，器高3.0cm、底径5.0cm、166は口径11.1cm，器高3.1cm、底径4.5cmである。

ＳＰ003（図69）

C区の中央部南寄りに位置する。平面形は長楕円形で、検出面で長軸0.9m、短軸0.6m、底面で長軸0.8m、短軸0.4m、深さ0.2mである。調査時には土坑ＳＫ003とされていたものであるが、遺物の出土状況や他の遺構との関係から土葬墓として報告しておく。

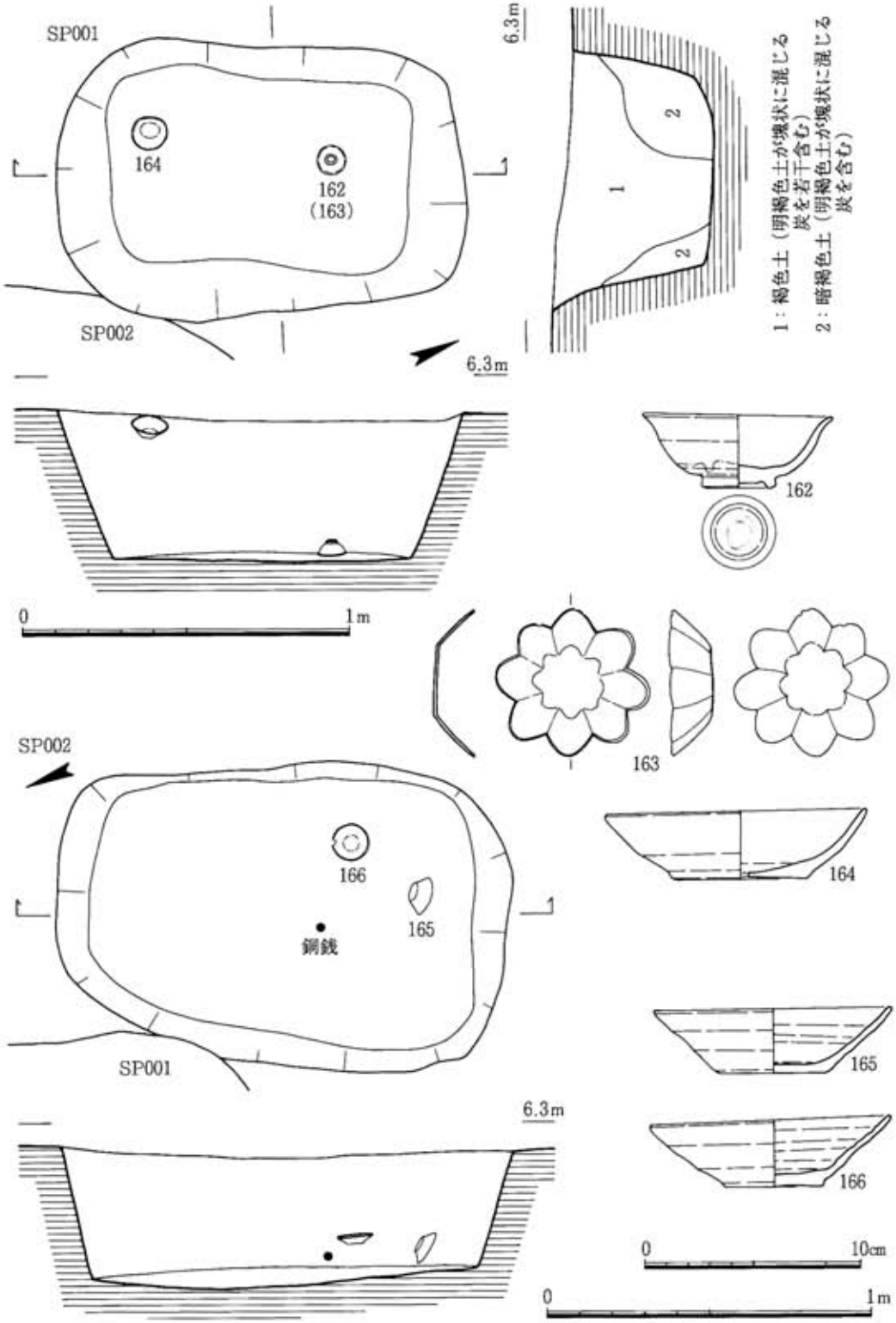


図68　C区ＳＰ001・ＳＰ002（1：20），出土遺物（1：3）

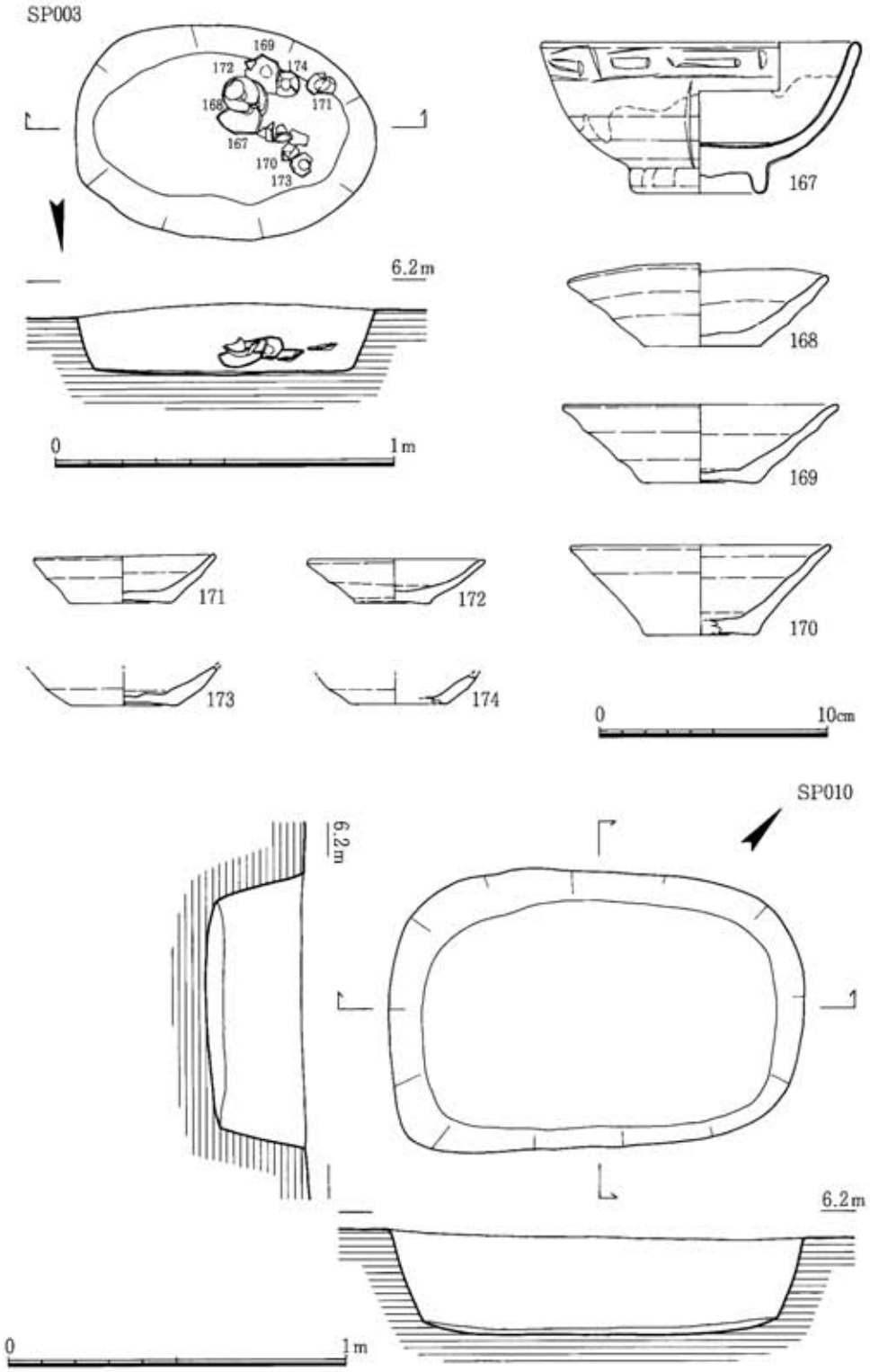


図69　C区ＳＰ003・ＳＰ010（1：20），ＳＰ003出土遺物（1：3）

ＳＰ003出土遺物（図69）

167は青磁椀である。口縁部外面に簡略化した雷文を巡らせる。外面体部は蓮弁文の退化した縦方向の区画線が施されている。釉は厚くやや不透明で、高台内の付け根あたりまでかけられている。168～170は底部回転糸切り離しの土師器杯である。168は口径11.4cm、器高3.3cm、底径5.1cm、169は口径12.0cm、器高3.4cm、底径5.0cm、170は口径11.4cm、器高4.0cm、底径5.0cmである。171・172は底部回転糸切り離しの小皿である。171は口径8.0cm、器高2.1cm、底径4.5cm、172は口径7.8cm、器高1.9cm、底径3.3cmである。173・174は土師器小皿と思われるが底部のみの遺存であり、杯の可能性も残る。

ＳＰ010（図69）

Ｃ区南側に位置する。平面形はやや不整な隅丸長方形で、検出面で長軸1.2ｍ、短軸0.8ｍ、底面で長軸1.0ｍ、短軸0.7ｍ、深さ0.3ｍである。副葬品は出土していないが、規模や形状がＳＰ001・ＳＰ002に類似しており、土葬墓の可能性が強い。主軸はＳ47°Ｗである。

ＳＸ004（図58）

Ｃ区北側に位置する不整形の落ち込みである。潮見川の方に向かって広がりながら落ち込んでおり、底面は凹凸が著しい。遺構埋土中から、時期幅のある中世の遺物が出土している。

ＳＸ004出土遺物（図70・71）

175は白磁椀Ⅳ類、176は抉り高台の白磁小皿で内底に目跡を留める。177は内面底部に印花を施す青磁椀で、高台はやや細く、高台内には施釉されない。178～180は土師器小皿である。178は復元口径8.8cm、器高1.2cm、復元底径5.6cmで、底部回転ヘラ切り離しのようである。179は底部回転糸切り離しで板状圧痕を留め、口径8.8cm、器高0.8cm、底径7.3cmである。180は底部回転糸切り離しと思われ、復元口径8.6cm、器高1.2cm、復元底径6.6cmである。181は底部回転ヘラ切り離しの土師器丸底杯で、口径15.0cm、器高3.5cmである。182・183は底部回転糸切り離しの土師器杯で、182は口径16.2cm、器高3.6cm、底径10.5cm、183は口径13.6cm、器高3.1cm、底径7.8cmである。184・185は土師器椀である。器面が摩耗しており調整は不明であるが、いわゆる研磨土師器と思われる。185は瓦器の可能性もある。186・187は瓦器椀で、187は内面にコテ当て痕がある。188は土師器鍋で、口縁部近くが僅かに厚くなるが全体として素口縁の形態である。外面にはユビオサエが顕著で、内面は横方向の目の細かいハケメを施す。189は土師器擂鉢、190は瓦器擂鉢の底部である。191は土師器茶釜で内面は横方向のハケメを施す。192は深鉢形と思われる土師器火鉢で、口縁下に巡らせた突帯の上位に梅花の印文を施す。193は土師器片を再加工した土製品で、中央部に径0.6cmの孔を両面から穿つ。194は常滑焼甕で、口縁端部を欠損するが受け口状ないしＴ字形の口縁になるものであろう。外面には濃緑色の自然釉がかかる。

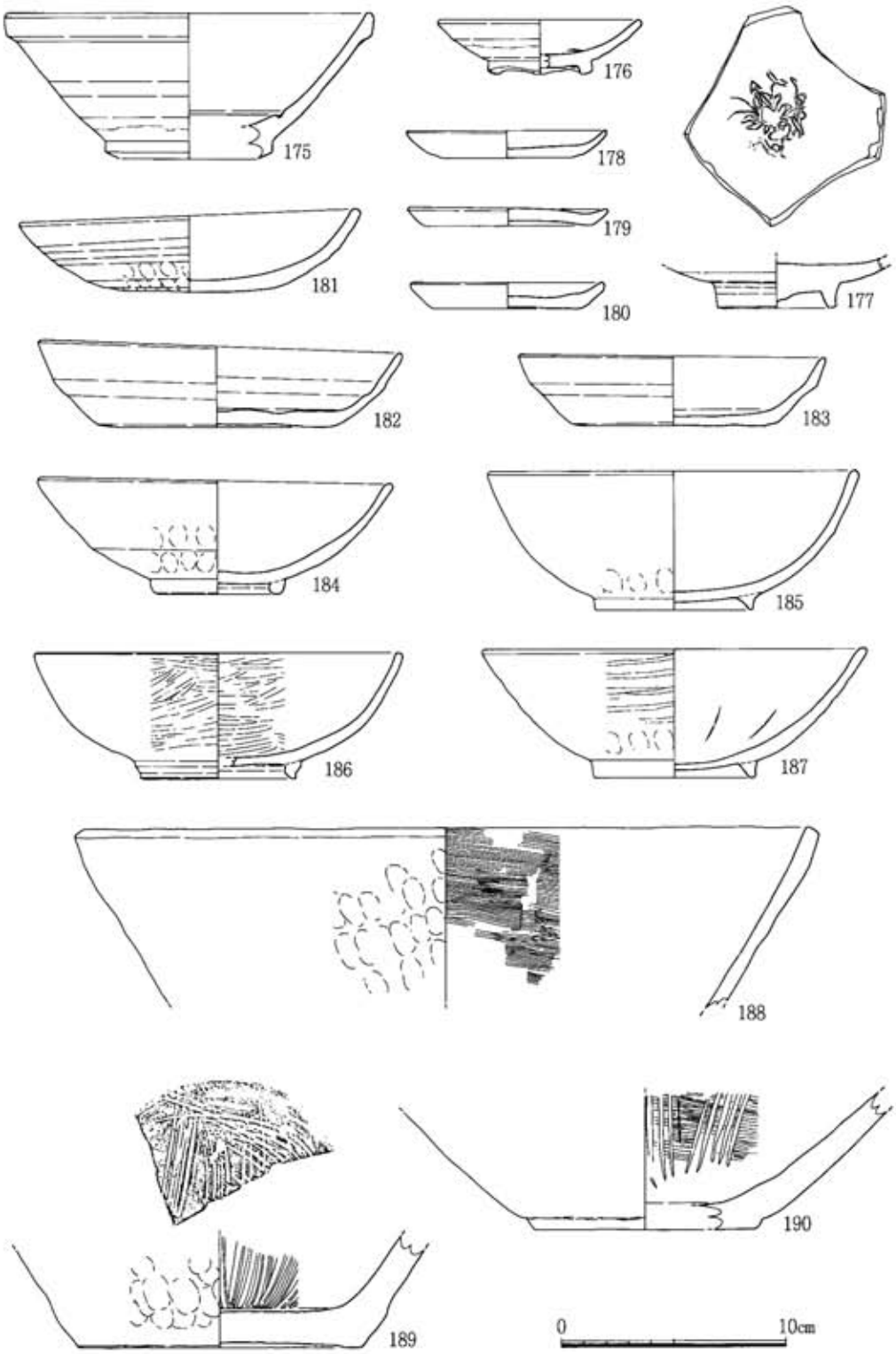


図70　C区ＳＸ004出土遺物（１：３）

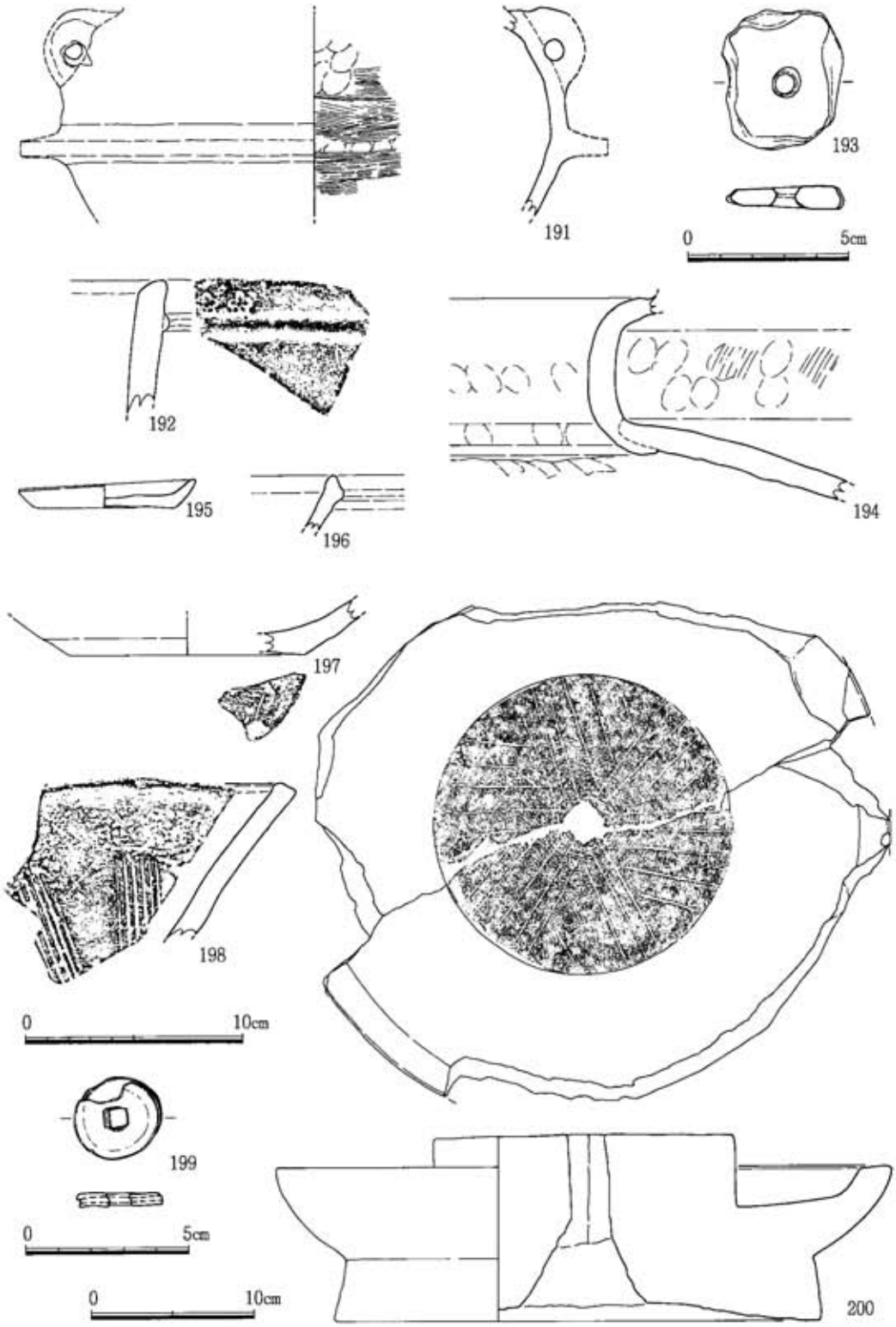


図71　C区ＳＸ004・ＳＸ006出土遺物（193・199は１：２，200は１：４，他は１：３）

ＳＸ006（図58）

Ｃ区中央部南寄りに位置する不整形の落ち込みである。潮見川の方に向かって広がりながら落ち込んでおり、底面は凹凸が著しい。埋土中から中世の遺物が若干出土している。

ＳＸ006出土遺物（図71）

195は底部回転糸切り離しの土師器小皿である。口径8.1cm，器高1.0cm、底径6.4cmで、全体に歪である。196は東播系須恵器捏鉢の口縁部で、重ね焼きにより口縁端部が暗灰色である。197は東播系須恵器捏鉢の底部で、回転糸切り離しの痕跡を留める。198は瓦器擂鉢の口縁部で６条１単位の擂目を施す。外面はユビオサエの痕跡が顕著である。199は銅銭３枚分で、錆びて密着しておりはがせなかったもので、銭種も全く判読できない。200は茶臼の下臼である。中心部から二つに破損する他、受皿の縁を大部分欠く。目は九州に多いとされる六分画で副溝は４～６条、溝は周縁にまで達している。ふくみは1.5～２㎜と僅かである。芯木の孔は１辺２cmの方形である（石臼の名称その他については、多くを三輪，1978に拠った）。

その他の遺構（図58）

上述した遺構以外で遺構番号の付されているものとして、土坑ＳＫ008、不整形の落ち込みＳＸ005、溝状遺構ＳＤ009がある。これらは遺物もほとんど無く時期や性格が不詳の遺構である。このうちＳＤ009は、幅0.6ｍ、深さ0.2～0.3ｍの溝状遺構で、Ｌ字状に折れて両端とも調査区外に続いている。４基の土葬墓が集中する部分に位置しており、中世墓の区画である可能性も考えられる。

表4　みやこ遺跡B・C区出土遺物一覧

法量の単位はcm・g，（　）は復元値

遺物番号	挿図番号	出土遺構	遺物の種類	法量 ①口径②底径③器高④胴部径⑤長さ⑥幅⑦厚さ⑧重量	色調・石材	登録番号
1	図59	B区SD001	土師器・杯篦切か	①14.3②10.4③2.9	浅黄橙色	94001339
2	図59	B区SD001	土師器・杯	①14.4②8.8③3.0	浅黄橙色	94001324
3	図59	B区SD001	土師器・杯糸切か	①14.6②9.4③3.0	灰白色	94001335
4	図59	B区SD001	土師器・杯糸切	①14.8②8.7③3.2	淡橙色	94001318
5	図59	B区SD001	土師器・杯糸切	①(14.8)②(8.2)③3.0	灰白色	94001330
6	図59	B区SD001	土師器・杯糸切	①(15.1)②(8.0)③3.0	にぶい橙色	94001336
7	図59	B区SD001	土師器・杯	①15.2②9.5③3.2	灰白色	94001320
8	図59	B区SD001	土師器・杯糸切	①(15.2)②(8.8)③3.5	浅黄橙色	94001325
9	図59	B区SD001	土師器・杯糸切	①15.3②8.9③2.9	浅黄橙色	94001327
10	図59	B区SD001	土師器・杯糸切	①(15.4)②(7.9)③3.3	浅黄橙色	94001328
11	図59	B区SD001	土師器・杯糸切か	①15.4②9.7③3.2	にぶい橙色	94001319
12	図59	B区SD001	土師器・杯糸切	①15.5②9.7③2.8	灰白色	94001323
13	図59	B区SD001	土師器・杯糸切	①(15.6)②(9.6)③3.0	にぶい黄橙色	94001338
14	図59	B区SD001	土師器・杯糸切	①15.6②7.6③3.3	灰白色	94001322
15	図59	B区SD001	土師器・杯糸切	①(15.8)②(8.7)③3.1	浅黄橙色	94001337
16	図59	B区SD001	土師器・杯糸切	①16.0②9.3③3.6	淡橙色	94001331
17	図59	B区SD001	土師器・杯	①(16.0)②(9.6)③3.3	にぶい橙色	94001329
18	図59	B区SD001	土師器・杯糸切	①16.2②10.1③2.9	淡赤橙色	94001321
19	図59	B区SD001	土師器・杯糸切	①16.5②9.4③3.0	淡黄色	94001326
20	図59	B区SD001	土師器・杯糸切	①(16.6)②(9.7)③3.2	内：黄橙色・外：灰白色	94001334
21	図59	B区SD001	土師器・杯糸切	①(17.3)②(11.0)③3.3	浅黄橙色	94001332
22	図59	B区SD001	土師器・杯糸切	①(17.5)②(11.7)③3.3	灰白色	94001340
23	図59	B区SD001	土師器・杯糸切	①(17.4)②(9.4)③4.0	浅黄橙色	94001333
24	図60	B区SD001	土師器・小皿糸切	①8.0②6.2③1.5	浅黄橙色	94001304
25	図60	B区SD001	土師器・小皿糸切	①8.3②6.0③1.2	灰白色	94001307
26	図60	B区SD001	土師器・小皿糸切	①8.7②6.2③1.2	灰白色	94001315
27	図60	B区SD001	土師器・小皿糸切	①8.7②6.3③1.3	灰白色	94001308
28	図60	B区SD001	土師器・小皿糸切	①8.8②5.1③1.2	灰白色	94001302
29	図60	B区SD001	土師器・小皿糸切	①8.8②6.3③1.1	灰白色	94001312
30	図60	B区SD001	土師器・小皿糸切	①8.9②6.6③1.1	浅黄橙色	94001301
31	図60	B区SD001	土師器・小皿糸切	①9.0②6.4③1.2	浅黄橙色	94001311
32	図60	B区SD001	土師器・小皿糸切	①9.0②6.7③1.4	灰白色	94001309
33	図60	B区SD001	土師器・小皿糸切	①9.0②7.2③1.0	灰白色	94001313
34	図60	B区SD001	土師器・小皿糸切	①9.1②7.0③1.0	灰白色	94001310
35	図60	B区SD001	土師器・小皿糸切	①9.1②6.3③1.3	浅黄橙色	94001314
36	図60	B区SD001	土師器・小皿糸切	①9.2②7.2③1.1	浅黄橙色	94001306
37	図60	B区SD001	土師器・小皿糸切	①9.4②6.8③1.2	にぶい黄橙色	94001317
38	図60	B区SD001	土師器・小皿	①9.5②6.1③1.0	にぶい黄橙色	94001303
39	図60	B区SD001	土師器・小皿糸切	①9.5②6.3③1.1	淡橙色	94001316
40	図60	B区SD001	土師器・小皿	①9.5②7.2③1.2	淡橙色	94001305
41	図60	B区SD001	土師器・椀	①(15.5)②(8.2)③5.3	浅黄橙色	94000562
42	図60	B区SD001	土師器・椀	①(16.8)②(7.3)③5.2	灰白色	94000563
43	図60	B区SD001	土師器・椀	①(15.6)②6.6③6.0	灰白色	94000561
44	図60	B区SD001	黒色土器B・椀	①(18.0)②(7.0)③6.6	黒色（一部灰白色）	94000538
45	図60	B区SD001	瓦器・椀糸切	①16.8②7.3③5.7	灰色（一部黒色）	94000543
46	図60	B区SD001	瓦器・椀糸切	①(15.2)②7.8③5.6	灰色	94000547
47	図60	B区SD001	瓦器・椀糸切	①(17.0)②7.4③5.6	内：灰白色・外：黒色	94000548
48	図60	B区SD001	瓦器・椀	①(17.0)②7.2③5.3	黒色（一部灰白色）	94000551
49	図60	B区SD001	瓦器・椀糸切	①16.6②6.2③5.6	黒色（一部灰白色）	94000530
50	図61	B区SD001	瓦器・椀	①16.7②7.2③5.6	灰白色（一部黒色）	94000544
51	図61	B区SD001	瓦器・椀	①(17.3)②7.6③5.8	内～外口縁：黒色・外：灰黄色	94000541
52	図61	B区SD001	瓦器・椀糸切か	①(16.8)②(6.6)③5.4	黒色（内底・外底：灰白色）	94000539
53	図61	B区SD001	瓦器・椀	①16.6②7.7③5.3	灰白色	94000528
54	図61	B区SD001	瓦器・椀	①(15.2)②7.8③5.6	暗オリーブ灰色（口縁部黒色）	94000545
55	図61	B区SD001	瓦器・椀	①(16.0)②6.6③5.7	内：灰白色・外：黒色	94000549
56	図61	B区SD001	瓦器・椀	①(16.6)②(6.4)③5.7	灰白色（口縁部黒色）	94000536
57	図61	B区SD001	瓦器・椀	①(16.7)②(7.2)③6.1	灰白色（内体～外口縁：黒色）	94000540
58	図61	B区SD001	瓦器・椀	①(16.2)②(7.0)③5.5	暗灰色（口縁部黒色）	94000531
59	図61	B区SD001	瓦器・椀	①16.2②7.4③6.0	灰白色（外体黒色）	94000546
60	図61	B区SD001	瓦器・椀	①16.6②6.6③5.7	黒色（外一部灰白色）	94000550
61	図61	B区SD001	瓦器・椀	①(16.2)②7.2③5.3	灰色（一部灰白色）	94000542
62	図61	B区SD001	瓦器・椀糸切	①17.2②6.7③5.1	黒色（一部銀灰色）	94000553
63	図62	B区SD001	瓦器・椀糸切	①(15.6)②6.6③4.2	内体～外口縁：黒色・内底,外：灰白色	94000535
64	図62	B区SD001	瓦器・椀	①(16.2)②(7.2)③5.0	内～外口縁：黒色・外：灰白色	94000534
65	図62	B区SD001	瓦器・椀	①(17.1)②7.0③5.1	内：黒色・外：にぶい黄橙色	94000533
66	図62	B区SD001	瓦器・椀	①(16.6)②7.6③5.0	内：黒色・外：灰白色	94000529
67	図62	B区SD001	瓦器・椀	①(15.6)②(6.8)③5.0	灰白色（一部黒色）	94000537
68	図62	B区SD001	瓦器・椀	①16.4②8.2③4.8	灰白色（一部オリーブ灰色）	94000552

遺物番号	挿図番号	出土遺構	遺物の種類	法量 ①口径②底径③器高④胴部径⑤長さ⑥幅⑦厚さ⑧重量	色調・石材	登録番号
69	図62	B区SD001	瓦器・椀	①(18.0)②7.6③5.5	内：黒色・外：灰白色	94000532
70	図62	B区SD001	瓦器・小皿糸切	①(9.9)②(6.6)③2.3	黒色	94000554
71	図62	B区SD001	瓦器・小皿糸切	①(8.8)②(6.0)③1.9	黒色	94000559
72	図62	B区SD001	瓦器・小皿糸切	①(9.2)②(6.7)③1.3	黒色	94000555
73	図62	B区SD001	瓦器・小皿糸切	①(10.0)②(7.0)③1.5	黒色	94000560
74	図62	B区SD001	瓦器・小皿糸切	①(11.2)②(7.8)③1.3	黒色	94000558
75	図62	B区SD001	瓦器・小皿糸切	①(11.0)②(6.8)③1.9	灰白色（口縁部黒色）	94000557
76	図62	B区SD001	瓦器・小皿糸切	①(11.1)	黒色（内底灰白色）	94000556
77	図62	B区SD001	須恵器・捏鉢	①(29.6)	灰色	94000515
78	図62	B区SD001	須恵器・捏鉢		灰色	94000516
79	図62	B区SD001	須恵器・甕		青灰色	94000517
80	図62	B区SD001	陶器・壺	①(6.9)	素地：灰黄色・釉調：黒褐色	94000514
81	図62	B区SD001	陶器・壺	②(7.0)	素地・露胎部：灰白色・釉調：緑灰色	94000518
82	図63	B区SD001	白磁・椀	①(16.1)	素地・釉調：灰白色	93004842
83	図63	B区SD001	白磁・椀	①(15.0)	素地・釉調：灰白色	93004843
84	図63	B区SD001	白磁・椀	①(15.4)	素地・釉調：灰白色	93004840
85	図63	B区SD001	白磁・椀	①(14.9)	素地・釉調：灰白色	93004841
86	図63	B区SD001	白磁・椀		素地・釉調：灰白色	93004844
87	図63	B区SD001	白磁・椀	①(16.6)②6.8③6.3	素地・釉調：灰白色	93001445
88	図63	B区SD001	白磁・椀	①(16.4)	素地・釉調：灰白色	93001447
89	図63	B区SD001	白磁・椀	①(17.2)	素地・釉調：灰白色・露胎部：灰色	93001446
90	図63	B区SD001	白磁・椀	①(15.5)	素地・釉調：灰白色	93004828
91	図63	B区SD001	白磁・椀	①(17.3)	素地・釉調：灰白色・露胎部：灰色	93001449
92	図63	B区SD001	白磁・椀	①(16.6)	素地・釉調：灰白色	93001448
93	図63	B区SD001	白磁・椀	①(17.4)	素地・釉調：灰白色	93004827
94	図63	B区SD001	白磁・椀	①(16.3)	素地・釉調：灰白色	93001450
95	図63	B区SD001	白磁・椀	①(17.6)	素地・釉調：灰白色	93004826
96	図63	B区SD001	白磁・椀	①(16.4)	素地：灰白色・釉調：淡黄色	93004829
97	図63	B区SD001	白磁・椀	①(14.6)	素地：灰色・釉調：灰白色	93004830
98	図63	B区SD001	白磁・椀	②6.9	素地・釉調：灰白色	93004831
99	図63	B区SD001	白磁・椀	②(6.8)	素地・釉調：灰白色・露胎部：灰色	93004836
100	図63	B区SD001	白磁・椀	②6.6	素地・釉調：灰白色	93004833
101	図63	B区SD001	白磁・椀	②(6.9)	素地・釉調：灰白色	93004835
102	図63	B区SD001	白磁・椀	②(7.2)	素地・釉調：灰白色・露胎部：灰色	93004837
103	図63	B区SD001	白磁・椀	②7.2	素地・釉調：灰白色	93004832
104	図63	B区SD001	白磁・椀	②7.4	素地・釉調：灰白色・露胎部：灰黄色	93004834
105	図64	B区SD001	白磁・椀	①(16.0)	素地・釉調：灰白色	93004846
106	図64	B区SD001	白磁・椀		素地・釉調：灰白色	93004845
107	図64	B区SD001	白磁・椀		素地・釉調：灰白色	93004847
108	図64	B区SD001	白磁・椀	②5.8	素地・釉調：灰白色	93004848
109	図64	B区SD001	白磁・椀	②(5.4)	素地・釉調：灰白色	93004849
110	図64	B区SD001	白磁・椀	②(6.1)	素地・釉調：灰白色	93004850
111	図64	B区SD001	白磁・椀	①(16.1)②(6.9)③6.7	素地・露胎部：灰白色・釉調：灰緑色	93004838
112	図64	B区SD001	白磁・椀	②6.3	素地・露胎部：灰白色・釉調：灰緑色	93004839
113	図64	B区SD001	白磁・椀	①(14.9)	素地・釉調：灰白色・露胎部：淡黄色	93004876
114	図64	B区SD001	白磁・皿	①10.9②3.6③2.5	素地・露胎部：灰色・釉調：明オリーブ灰色	94000501
115	図64	B区SD001	白磁・皿	①(10.5)②3.4③2.4	素地・露胎部：灰色・釉調：明オリーブ灰色	94000502
116	図64	B区SD001	白磁・皿	①(10.6)②(3.9)③2.7	素地・露胎部：灰白色・釉調：灰オリーブ色	94000506
117	図64	B区SD001	白磁・皿	①(10.9)②(3.7)③2.6	素地：灰白色・露胎部：灰黄色・釉調：明オリーブ灰色	94000505
118	図64	B区SD001	白磁・皿	①(10.5)②(3.4)③2.6	素地・釉調：灰白色	94000503
119	図64	B区SD001	白磁・皿	①(10.7)②(3.4)③2.6	素地・釉調：灰白色	94000504
120	図64	B区SD001	白磁・皿	①(10.2)②(3.2)③2.5	素地・釉調：灰白色	94000510
121	図64	B区SD001	白磁・皿	①(10.9)	素地・釉調：灰白色	94000509
122	図64	B区SD001	白磁・皿	①(10.6)	素地・釉調：灰白色	94000508
123	図64	B区SD001	白磁・皿	②3.6	素地・釉調：灰白色	94000512
124	図64	B区SD001	白磁・皿	②3.6	素地：淡黄色・釉調・露胎部：灰白色	94000513
125	図64	B区SD001	白磁・皿	①(10.9)②(4.7)③2.9	素地・釉調：灰白色	94000507
126	図64	B区SD001	白磁・皿	①(10.1)	素地・釉調：灰白色	94000511
127	図64	B区SD001	青磁・椀	①(17.0)	素地：灰白色・釉調：灰オリーブ色	94000527
128	図64	B区SD001	青磁・椀	①(16.0)②(4.9)③6.7	素地・露胎部：灰白色・釉調：オリーブ黄色	94000525
129	図64	B区SD001	青磁・椀	②(4.8)	素地・露胎部：灰白色・釉調：オリーブ黄色	94000526
130	図64	B区SD001	青磁・皿	①(10.7)②(5.4)③2.0	素地・露胎部：灰白色・釉調：明緑灰色	94000521
131	図65	B区SD001	青磁・椀		素地：灰白色・釉調：灰オリーブ色	94000522
132	図65	B区SD001	青磁・椀		素地：灰白色・釉調：オリーブ黄色	94000524
133	図65	B区SD001	青磁・椀	②(6.4)	素地：灰白色・露胎部：灰色・釉調：オリーブ灰色	94000520
134	図65	B区SD001	青磁・椀		素地：灰白色・釉調：灰オリーブ色	94000523
135	図65	B区SD001	青磁・椀	②7.0	素地：灰色・釉調：緑灰色	94000519
136	図65	B区SD001	石鍋	①(25.2)②(21.8)③10.4	滑石	94001385

遺物番号	挿図番号	出土遺構	遺物の種類	法量 ①口径②底径③器高④脚部径⑤長さ⑥幅⑦厚さ⑧重量	色調・石材	登録番号
137	図65	B区SD001	石鍋	①(16.1)	滑石	94001381
138	図65	B区SD001	石鍋		滑石	94001384
139	図65	B区SD001	石鍋		滑石	94001383
140	図65	B区SD001	石鍋		滑石	94001382
141	図65	B区SD001	石鍋	②(17.6)	滑石	94001386
142	図65	B区SD001	石鍋	①(19.4)②(18.1)③7.1	滑石	94001388
143	図65	B区SD001	石鍋	①(25.8)	滑石	94001387
144	図65	B区SD001	石鍋	①(7.1)②(7.1)③3.5	滑石	94001389
145	図66	B区SD001	鞴羽口			94001380
146	図66	B区SD001	鞴羽口			94001378
147	図66	B区SD001	鞴羽口			94001379
148	図66	B区SD001	鞴羽口			94001376
149	図66	B区SD001	鞴羽口			94001377
150	図67	B区SK013	白磁・椀		素地・釉調：灰白色	94000570
151	図67	B区SK013	石鍋		滑石	94000571
152	図67	B区SD005	常滑焼・甕		内：にぶい赤褐色・外：灰赤色	94000569
153	図67	B区SD014	白磁・皿		素地・釉調：灰白色	94000565
154	図67	B区SD014	青磁・椀	②(4.9)	素地：灰白色・露胎部：にぶい褐色・釉調：明緑灰色	94000564
155	図67	B区SD015	土師器・小皿糸切	①(9.1)②(6.8)③1.0	浅黄橙色	94000566
156	図67	B区SD015	白磁・椀		素地・釉調：灰白色	94000568
157	図67	B区SD015	白磁・椀		素地・釉調：灰白色	94000567
158	図67	B区P－3	土師器・杯糸切	①14.4②11.4③2.8	にぶい黄橙色	94000575
159	図67	B区P－14	須恵器・捏鉢		灰白色	94000572
160	図67	B区P－15	陶器・壺	②(8.6)	内：灰色・外：灰白色	94000573
161	図67	B区P－16	鞴羽口			94000574
157	図68	C区SP001	白磁・杯	①8.8②3.4③3.5	素地・釉調：灰白色	94001420
158	図68	C区SP001	銅製容器	①7.1②3.3③2.0		92003186
159	図68	C区SP001	土師器・杯糸切	①12.0②6.3③3.1	浅黄橙色	94001417
160	図68	C区SP002	土師器・杯糸切	①10.9②5.0③3.0	浅黄橙色	94001418
161	図68	C区SP002	土師器・杯糸切	①11.1②4.5③3.1	内：淡橙色・外：にぶい橙色	94001419
162	図69	C区SP003	青磁・椀	①14.0②6.0③6.7	素地：灰白色・釉調：黄緑色	88002217
163	図69	C区SP003	土師器・杯糸切	①11.4②5.1③3.3	明黄橙色	88002218
164	図69	C区SP003	土師器・杯糸切	①12.0②5.0③3.4	明黄橙色	88002219
165	図69	C区SP003	土師器・杯糸切か	①11.4②5.0③4.0	淡黄褐色	88002220
166	図69	C区SP003	土師器・小皿糸切	①8.0②4.5③2.1	褐黄色	88002221
167	図69	C区SP003	土師器・小皿糸切	①7.8②3.3③1.9	褐黄色	88002222
168	図69	C区SP003	土師器・小皿糸切	②4.8	灰褐色	88002223
169	図69	C区SP003	土師器・小皿糸切	②4.2	黒灰褐色	88002224
170	図70	C区SX004	白磁・椀	①(16.0)②7.4③(6.5)	素地・釉調：灰白色	94001397
171	図70	C区SX004	白磁・皿	①(8.7)②(4.7)③2.5	素地・釉調：灰白色	94001396
172	図70	C区SX004	青磁・椀	②5.2	素地：灰白色・露胎部：灰色・釉調：オリーブ灰色	94001398
173	図70	C区SX004	土師器・小皿篦切か	①(8.8)②(5.6)③1.2	内：灰黄褐色・外：にぶい黄橙色	94001404
174	図70	C区SX004	土師器・小皿糸切	①8.8②7.3③0.8	明褐灰色	94001402
175	図70	C区SX004	土師器・小皿糸切か	①(8.6)②(6.6)③1.2	灰白色	94001403
176	図70	C区SX004	土師器・杯篦切	①15.0③3.5	橙色	94001406
177	図70	C区SX004	土師器・杯糸切	①16.2②10.5③3.6	灰白色	94001407
178	図70	C区SX004	土師器・杯糸切	①13.6②7.8③3.1	浅黄橙色	94001405
179	図70	C区SX004	土師器・椀	①15.8②5.6③5.3	灰白色	94001408
180	図70	C区SX004	土師器・椀	①(16.4)②6.9③6.3	灰白色	94001409
181	図70	C区SX004	瓦器・椀	①(16.3)②(7.9)③5.6	灰色	94001411
182	図70	C区SX004	瓦器・椀	①(17.0)②(7.1)③5.8	灰白色	94001410
183	図70	C区SX004	土師器・鍋	①(32.3)	浅黄橙色	94001392
184	図70	C区SX004	土師器・擂鉢	②(12.6)	浅黄橙色	94001390
185	図70	C区SX004	瓦器・擂鉢	②(10.5)	灰色	94001394
186	図71	C区SX004	土師器・茶釜		褐灰色	94001393
187	図71	C区SX004	土師器・火鉢		橙色	94001391
188	図71	C区SX004	有孔土製品	⑤4.3⑥3.5⑦0.7⑧11.2	浅黄橙色・黄灰色	94001400
189	図71	C区SX004	常滑焼・甕		にぶい赤褐色	94001399
190	図71	C区SX006	土師器・小皿糸切	①8.1②6.4③1.0	浅黄橙色	94001413
191	図71	C区SX006	須恵器・捏鉢		暗灰色・灰色	94001414
192	図71	C区SX006	須恵器・捏鉢糸切	②(10.7)	灰色	94001395
193	図71	C区SX006	瓦器・捏鉢		灰白色	94001412
194	図71	C区SX006	銅銭			94001416
195	図71	C区SX006	茶臼・下臼	上部径：18.5②30.1③11.4受皿径38.0		94000576

4．まとめ

みやこ遺跡の今次調査では、B区で中世前期の大規模な溝状遺構、C区で中世後期の墓地を検出した。いずれも潮見川沿いに立地する中世集落の周縁部分にあたるものと思われる。

B区SD001からは、平安末期を主体とする遺物がまとまって出土している。食膳具は、土師器杯・小皿、土師器椀、黒色土器B類椀、瓦器椀・小皿、中国産磁器椀・皿、初期高麗青磁椀がある。土師器杯・小皿は、ほぼ底部糸切り離しに限られ、杯の法量は口径15cm後半代、器高3cm弱、底径がやや小さめで内湾しながら大きく開く器形のものが主体である。また、体部外面にヨコナデの凹凸が顕著に認められるのものが目立つ。瓦器椀は、広く安定した高台を有し深みのある器形のものが多い。底部に回転糸切り離しの痕跡を留めるものがいくつかあるが、原形段階での底部と体部との境は高台よりも外側にあり、体部下半の指頭圧痕や内面のコテ当て痕からも、いわゆる底部押し出し技法を基本としていることは明らかである。内面のヘラミガキは個体による違いが大きく、外面のヘラミガキはヨコナデによる器面の凹凸を削るように横方向に施されるものが多い。中国産磁器は白磁が主体を占め、青磁の中では同安窯系がやや目立つ。初期高麗青磁椀は県内で過去に報告例がないが、玉江遺跡3区でも出土しており、今後の注意で事例の増加が予想される。調理具は東播系須恵器捏鉢、貯蔵具は東播系須恵器甕と中国産陶器壺（瓶）がある。煮炊具は滑石製石鍋のみで、把手を付けるものと鍔を巡らせるものとが相半ばしている。また、鞴羽口は周辺での金属器の生産・加工を示唆するものである。これら遺物群の時期であるが、土師器杯・小皿の特徴から佐賀平野の12世紀後半頃の型式に対比できるものと考えている。他の資料もおおむねこの時期の所産と考えられるが、1のヘラ切り離しの土師器杯や黒色土器B類椀、初期高麗青磁等、やや先行すると思われるものもある。また、口禿げの白磁Ⅸ類椀と鎬蓮弁文の龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5b・c類の2点は混入の可能性が強い。こうした点を考慮した上で、B区SD001出土遺物は武雄盆地における12世紀後半頃のまとまった資料群としての評価が与えられる。遺物組成に関しては定量的検討を行っておらず、また遺跡の構造や階層が明確でないうらみはあるが、二三の傾向が指摘できる。中国産磁器については、椀・皿に限られながらも安定した量を占め、しかもその多くが白磁である。もちろん量的な多寡や器種については遺跡の正確に左右される部分が多いが、大宰府で指摘されている類別の出土傾向と比較すると、僅かな違いではあるが、白磁主体の様相が残存し青磁の出現率がやや低いようである。煮炊具については滑石製石鍋に限られ、佐賀平野で多い土鍋は1点も出土していないことが注意される。佐賀県の西部から北部地域における中世前期煮炊具の一般的傾向を追認したことになる。なお、石鍋の型式が大別2種に跨がり量的にも拮抗することは、耐久性をある程度考慮したとしても12世紀後半頃における石鍋使用の実態を示しているのであり、把手付きのものから鍔付きのものへの移行期が丁度この時期にあたるか、あるいは2つの型式がかなり長期にわたって併存していたか、ということになろう。

ＳＤ001の性格は、埋土や遺物の出土状況等に関する記録が全くないこともあって、今一つ明らかにできない。Ｂ区の西側に隣接する茂手遺跡Ⅰ・Ⅱ区においてもＳＤ001とほぼ同時期と思われる遺構としてＳＫ101等があり、Ｃ区寄りのみやこ遺跡ＳＤ402やＳＥ104等もほぼこの時期の遺構と思われるが、情報が断片的で具体的な集落構造を把握することは困難である。みやこ遺跡ＳＥ104からは木製馬鞍が出土しており、この辺りは在地領主級の屋敷地である可能性が強い。Ｂ区ＳＤ001では花押と思われる墨書資料が出土しており、先述した中国産磁器のまとまった保有等からすると、これらと一連となる屋敷地の区画溝とも考えられる。平安末期～鎌倉初期の事例としてはやや幅が大きすぎる感があるが、水利を兼ねた溝であるとすれば理解できなくはない。また、幅が広いわりに深さがないことや直交して延びる小溝の存在等からすると、道路遺構の可能性も考慮しておく必要がある。いずれにせよ中世みやこ遺跡を評価するためには、武雄市教育委員会の調査区と合わせて遺物や遺構の検討を行う必要がある。

Ｃ区は、みやこ遺跡の西端部にあたり遺構の極めて希薄な地区であった。検出された遺構は土葬墓４基（可能性のあるものを含む）の他は、性格不明の落ち込みや土坑等が数基あるのみで、この地区が居住域に含まれるとは到底考えられない。副葬品のうち土師器杯・小皿と青磁椀、および白磁杯は、いずれも15世紀代の年代観を与えられるものである。また、仏具と思しき銅製容器を副葬するＳＰ001は出家者の墓である可能性がある。佐賀県内における中世墓の調査例は、いわゆる屋敷墓を除けば、東脊振村霊仙寺跡（東脊振村教育委員会1980）や基山町千塔山遺跡（基山町遺跡発掘調査団1978）の墓地がある程度で、墓制の全体的な様相は明らかでない。こうした状況の中で、集落外縁部に形成されたみやこ遺跡Ｃ区墓地の在り方は中世後期の一典型として重要な事例となるものであるが、造墓主体の具体像解明は今後の課題である。

引用文献（第２章に掲げたものは省略）

木戸 雅寿（1993）石鍋の生産と流通について．中近世土器の基礎研究Ⅸ，pp.127―143，日本中世土器研究会

基山町遺跡発掘調査団（1978）千塔山遺跡．

東脊振村教育委員会（1980）霊仙寺跡．東脊振村文化財調査報告書第４集

三輪 茂雄（1978）臼．ものと人間の文化史 25，法政大学出版局

山本 信夫（1985）日本における初期高麗青磁について―大宰府出土例を中心として―．貿易陶磁研究，№５，pp.１―18，日本貿易陶磁研究会

横田 賢次郎・森田 勉（1978）大宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心として―．九州歴史資料館研究論集，４，pp.１―26，九州歴史資料館

第７章　玉江遺跡１～３区

遺跡名：玉江遺跡１～３区（略号ＴＡＭ―Ⅰ～Ⅲ）

所在地：佐賀県武雄市武雄町大字永島字溝ノ上

橘 町大字永島字北上野

第7章　玉江遺跡

1．玉江遺跡の概要

玉江遺跡は、佐賀県武雄市橘町大字永島字北上野と武雄町大字永島字溝ノ上に所在する。

遺跡の所在する辺りは、潮見山と虚空蔵山とが迫る地峡部で、川登盆地を流れてきた潮見川が武雄盆地に入る前に大きく蛇行しつつ向きを変える地点である。周辺の山麓部には溝ノ上東古墳群、溝ノ上西古墳群、上野古墳群等の群集墳が分布しているが、集落遺跡の展開は狭長な谷底平野部という地形条件のせいか各時代を通してあまり顕著でない。

元々、玉江遺跡は粘土採掘中に中広形銅矛が出土した遺跡として知られていたのであるが、近年の数次に及ぶ発掘調査では弥生時代の遺構は全く検出されておらず、武器形祭具の埋納遺跡であった可能性が濃厚である。武雄市教育委員会による調査では、古墳時代と奈良時代の集落遺構や中世前期の土葬墓が検出されており、今次調査と併せて遺跡の実態が明らかになりつつある。

九州横断自動車道建設に伴う調査は、地形や遺跡の状況に応じて1～3区の3箇所について実施している。1・2区は潮見川左岸の武雄町永島地内にあるのに対し、3区は潮見川右岸の橘町永島地内にあって、遺跡の内容からも両者は区別して考える方が良い。調査対象となった面積は6,000㎡で、調査範囲は1区240㎡、2区780㎡、3区2,940㎡の計3,960㎡である（ただし3区は上層と下層の2面にわたって遺構面があり実際の調査面積はこれより若干増える）。

1区は潮見山の西麓に位置し、石塁状の石積遺構とその前面に集中する小穴群が検出された。記録類の不備のために充分な検討ができなかったが、小穴群は掘立柱建物を構成する可能性が強く、今回の調査区は何らかの居住地区であると推測される。出土遺物は中世後期のものが主体を占める。石積遺構の性格は詳らかでないが、調査地の位置や出土遺物の年代観からすると潮見城跡との関連が示唆される。

2区は1区の西方にあり、掘立柱建物1棟の他は小穴若干が検出されたのみで、全体に遺構は希薄である。遺物もほとんどなく、遺構の時期を示すものは出土しなかった。

3区は潮見川右岸の標高10m前後の谷底平野に位置している。3区では部分的にではあるが上下2面にわたって遺構面が確認された。上層では土葬墓1基と小穴若干が検出されており、出土遺物は中世後期のものが主体である。下層からは古墳時代後半期と中世前期の集落関連遺構が検出された。全体に出土遺物が少ないため遺構の多くは時期を特定できず、また調査区内に分布する小穴群についても検討が充分でなく集落構造を把握するまでには至らなかった。古墳時代後半の遺構は、総柱構造の掘立柱建物2棟と鍛冶関連の廃棄土坑と思われる遺構がある。中世前期の遺構では調査区を横断する溝があり、平安末期の遺物がややまとまって出土している。この他、時期は不詳ながら幅約7mの道路状遺構が検出された。

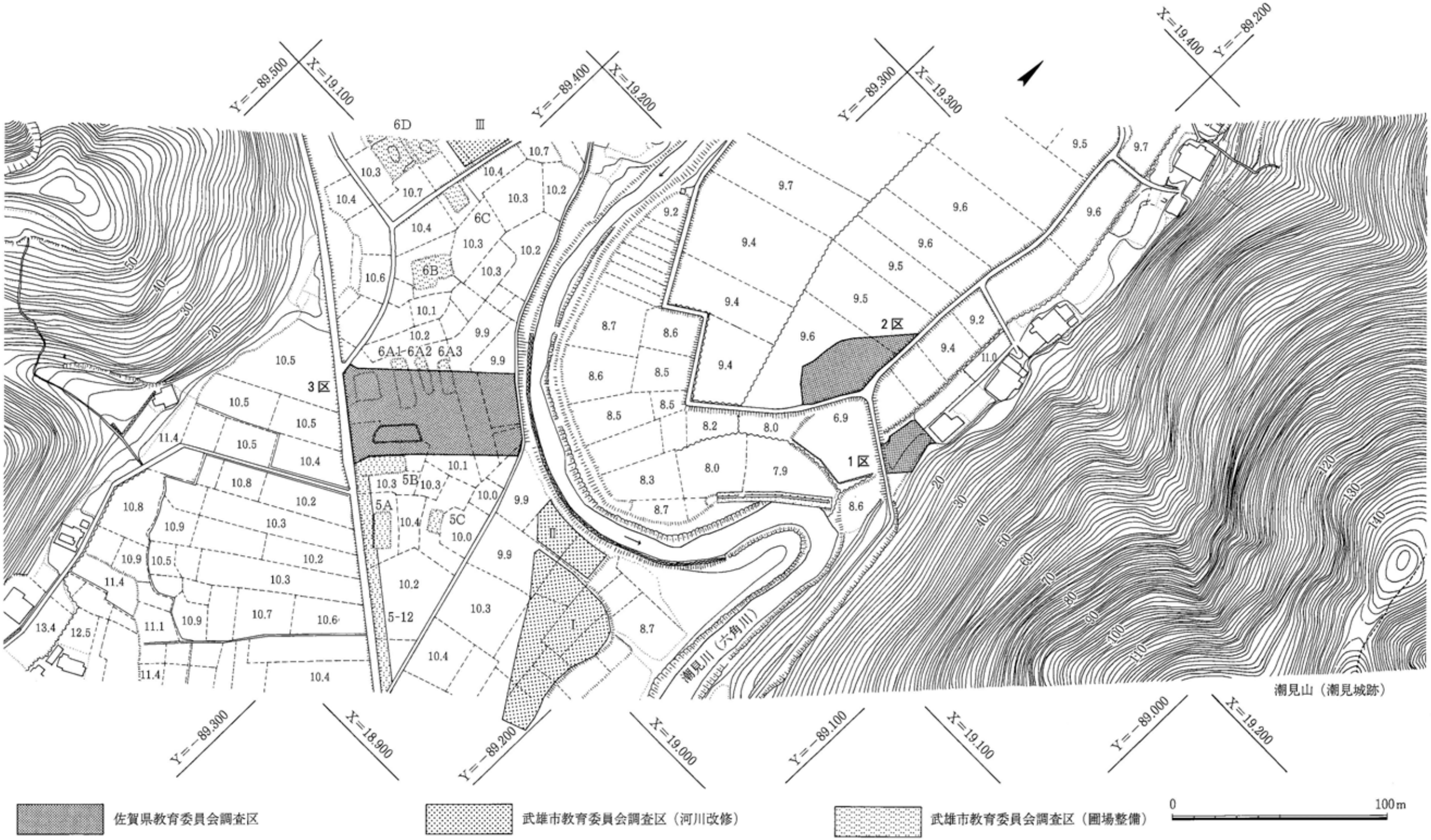


図72　玉江遺跡周辺の地形（1：2000）

2．1・2区の遺構と遺物

1）1区の遺構と遺物

1区は潮見山の西麓に位置する。山側にあたる調査区の東側にはほぼ南北に向く石塁状の石積遺構ＳＸ001があり、その東側にはＳＸ001の石積みを共有する溝状の遺構ＳＸ002が並行する。ＳＸ001・ＳＸ002については試掘坑を設定して断面観察がなされているが、断面図の基準点が平面図中に記載されておらず図示することができなかった。また、ＳＸ001の西側には小穴が密集し、掘立柱建物と思われる小穴列も複数箇所認められるが、遺構の標高を記した調査記録が所在不明となっており、検討することができなかった。

ＳＸ001（図73）

1区東側で南北に延びる石塁状の石積遺構である。北側は先細りで終わり、南側は徐々に広くなって調査区外に続く。両側をやや乱雑に石積し、その間に土を充塡させているようである。石積の間等から遺物が出土している。

ＳＸ001出土遺物（図74・75）

1・2は底部回転糸切り離しの土師器小皿で、1は復元口径7.4cm、器高1.9cm、底径4.3cmである。3は底部回転糸切り離しの土師器杯である。4は青磁椀で、小破片のため全体の文様構成は不明であるが外面には細蓮弁文、内面には草花文が認められる。5は高麗末期～朝鮮王朝初期とみられる青磁椀である。内面底部には二重の圏線と如意頭文、その外側に鶴文を象嵌で配している。また、外面体部下半にも象嵌による圏線を巡らせる。6・7は土師器擂鉢の底部で、使用による摩滅が顕著であるが、間隔をあけて擂目が施されている。8は瓦器擂鉢の口縁部で、全体に摩耗が著しい。9・10は東播系須恵器捏鉢である。9は口縁部、10は底部で回転糸切り離しの痕跡を留め、内面は使用により摩耗している。11～13は備前焼で、小破片のため不確実であるが中・小型の壺であろう。同一個体かどうかは解らない。14・15は土師器鍋である。内面の調整はナデで、佐賀平野の類品にみられるハケメ調整とは異なっている。16は小型で浅い器形の瓦器鍋で、内面は目の細かいハケメである。17・18は口縁から底部に向かって強くすぼまる滑石製石鍋で、鍔は全く形骸化している。19は土師器茶釜で、頸部下の沈線から下向きの笹葉状の刻画を施す。20は瓦器茶釜で、肩部に草花文の枝葉を刻み、花は菊花形の印文であしらう。21は土師器で、破片資料であるため不確実であるが鍔や把手がなく壺と考えられる。内面の調整は板ナデである。頸部下に櫛歯状の押圧文を巡らせ、その下に梅花状の印文を配している。22は茶臼の下臼部で、受皿部と底部のみ遺存する。

ＳＸ002（図73）

ＳＸ001の東側に併走する溝状の部分がＳＸ002とされている。西側の岸はＳＸ001東側の石積を利用し、東側の岸はＳＸ001よりやや大きめの石を並べている。埋土中から遺物が出土しているが、石鍋以外は小破片が多い。

図73　1区の遺構（1：100）

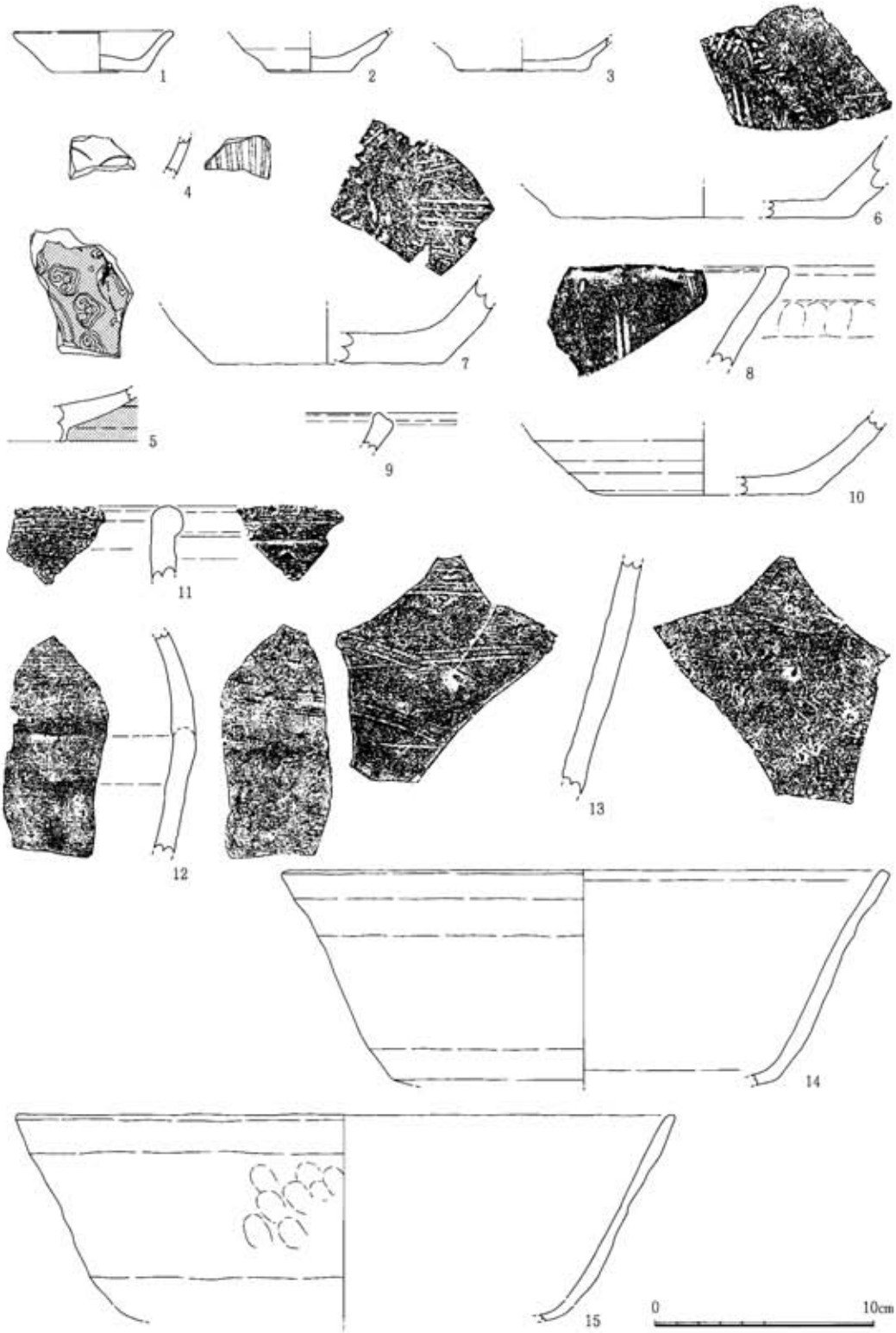


図74　1区ＳＸ001出土遺物１（１：３）

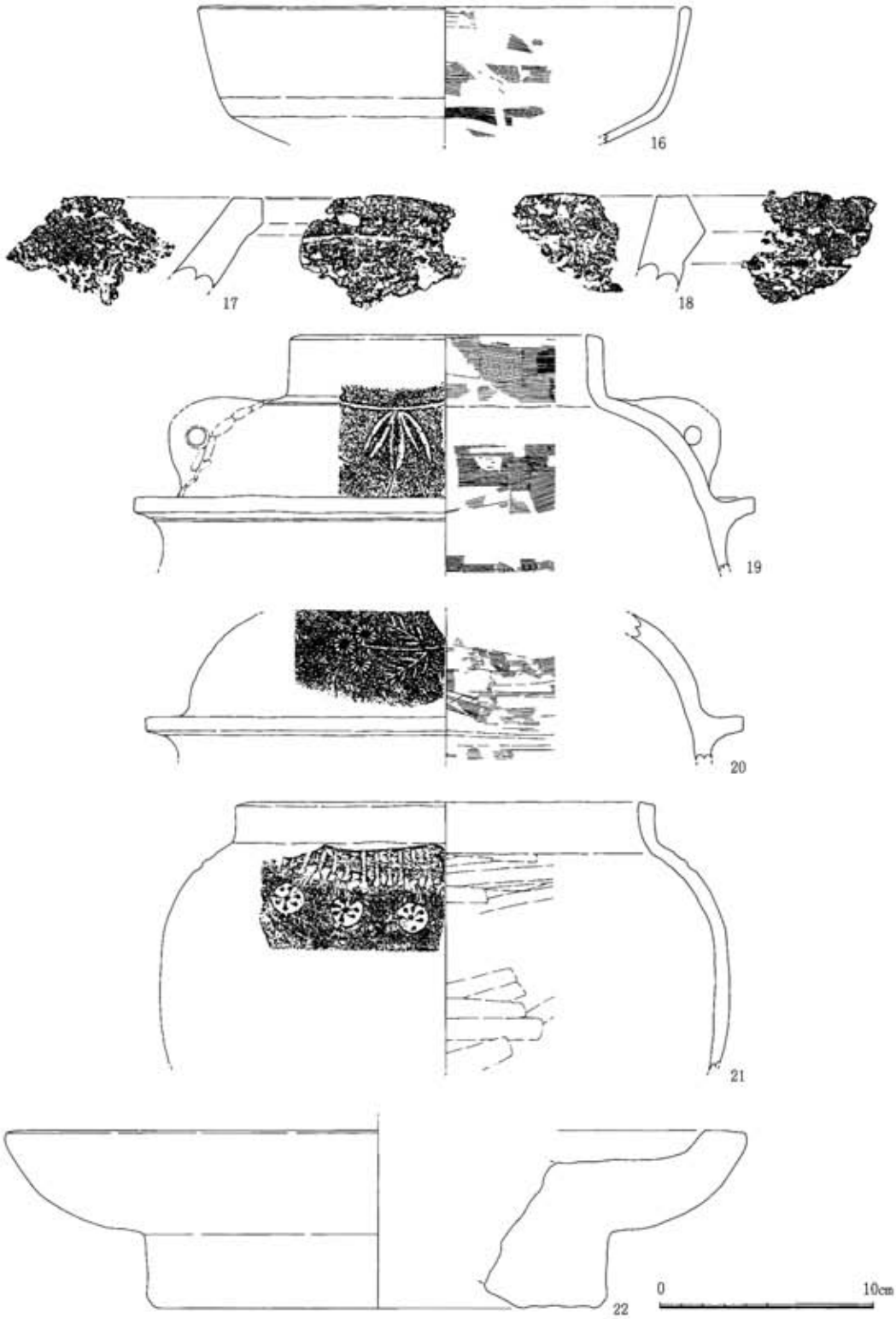


図75　1区ＳＸ001出土遺物２（１：３）

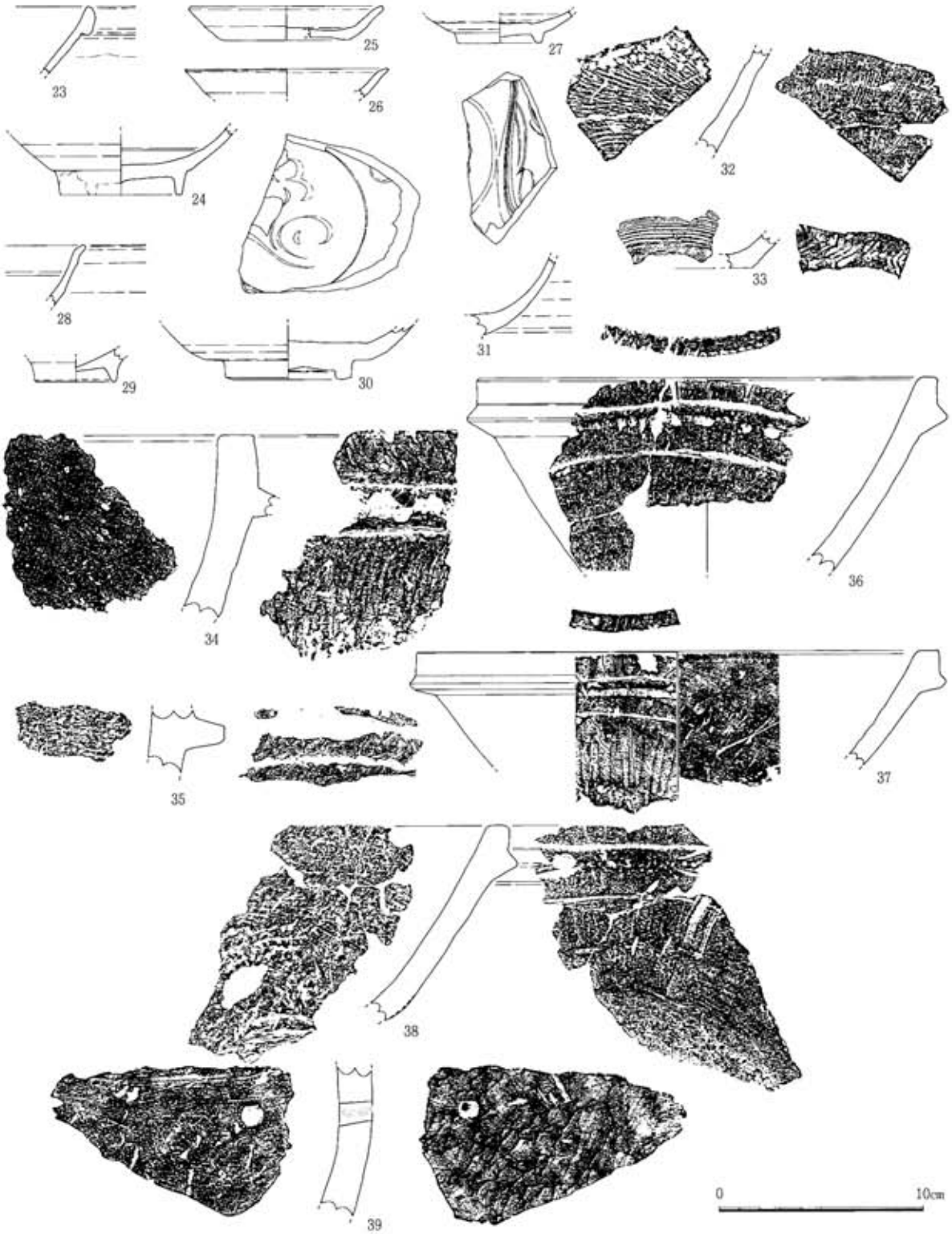


図76　1区SX002出土遺物（1：3）

ＳＸ002出土遺物（図76）

23・24は白磁椀で、23は大きな玉縁、24は高い高台を特徴とするものである。25～27は白磁皿で、25・26は口禿げの無高台皿、27は内面底部を環状に釉剥ぎする高台付皿である。28は同安窯系の青磁椀で、無文のものと思われる。29～31は龍泉窯系の青磁椀である。29は狭い畳付以外の全面に施釉する精製品で、釉は厚みがある。30・31は角高台で、30は内底に茸状文を、31は内面に草花文を施す。32は瓦器捏鉢の体部破片で、ハケメ調整を内面は横方向、外面は縦方向に施す。33は平底の須恵器甕の底部で、外面にはタタキ、内面には横方向の粗いハケメを施す。焼成は良好で硬質である。34～39は滑石製石鍋である。34・35が等辺台形の鍔であるのに対し、36～38はやや退化した鍔を有し器形も底部が強くすぼまるものである。39は形態が不明であるが、弦取手穴があり実際に鉄製の弦の一部が遺存している。

１区その他の遺物（図77）

40・41は白磁椀で、高い高台を持つものと思われる。42は16世紀代の端反りの白磁皿である。43は龍泉窯系の青磁椀の口縁部、44は底部で、いずれも鎬のない蓮弁文である。45は朝鮮王朝のいわゆる雑釉陶器皿である。全面に施釉し、内面底部と高台端面に各々５箇所の砂目を留める。46は土師器擂鉢で、６条１単位の擂目を間隔をあけて施す。47は東播系須恵器の捏鉢である。

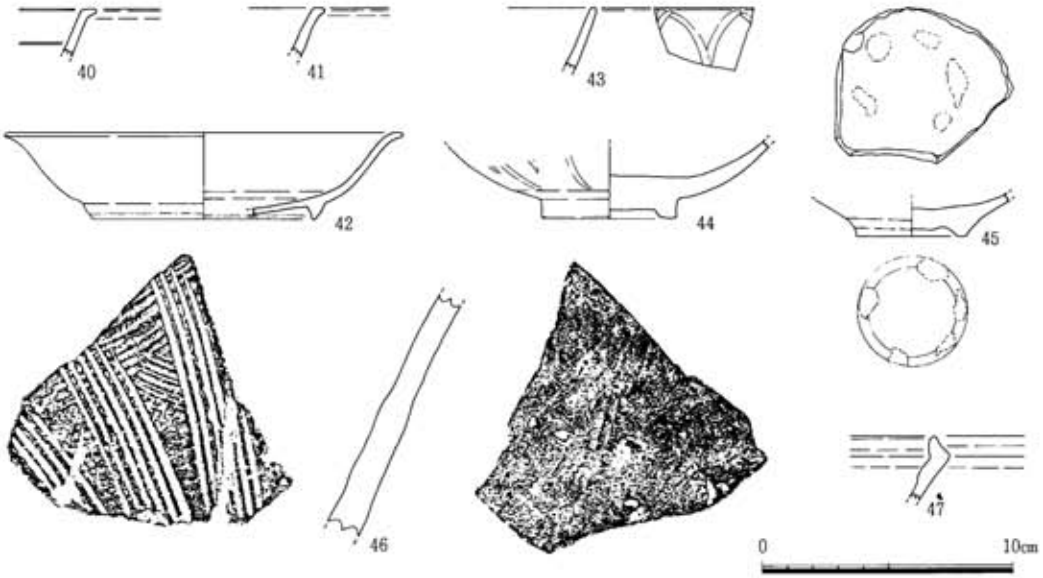


図77　１区その他の遺物（１：３）

2） 2区の遺構（図78）

2区の遺構は、掘立柱建物1棟と小穴若干が検出されたのみで、調査区の南側に集中している。遺物も土器細片が僅少出土したのみで、時期の解るものはない。

ＳＢ001（図78）

2区の南側で1棟だけ検出された掘立柱建物である。梁行1間×桁行2間の東西棟で、主軸はN88°Wである。出土遺物はなく時期は不明であるが、主軸方位は3区のＳＢ306と一致している。

3． 3区の遺構と遺物

3区は潮見川に近接する標高約10ｍの水田部である。一帯には田面より一段高い島状の畠地が点在しており、調査区内にも5箇所がある。これらの畠地部分では遺構面が上下2面にわたって確認され、下位の遺構面は周囲の水田部分における遺構面と同一である。畠地部分での上位の遺構面を上層、畠地部分での下位の遺構面及び水田部分での遺構面を下層として調査が行われているが、上下の遺構面間の土層に関する記録がなく、特に上部の遺構面に関しては形成過程や本来の広がりなどが不明である。上層は中世後期の集落遺跡と思われ、土葬墓1基と小穴群が検出されている。下層は古墳時代後半期頃と中世前期を主とする集落遺跡と思われ、掘立柱建物3棟、道路状遺構、溝、土坑、小穴多数が検出されている。

ＳＢ306（図80）

3区の北東端に位置する掘立柱建物である。梁行2間×桁行3間の総柱の東西棟で、主軸はN88°Wである。柱掘方は径0.7～0.9ｍの円形で、いずれも径0.2ｍ程度の柱痕跡が確認されている。南側に接して浅い溝状の土坑ＳＫ311があり本建物に伴うものと考えられるが、遺物は土器細片しか出土していない。

ＳＢ306出土遺物（図80）

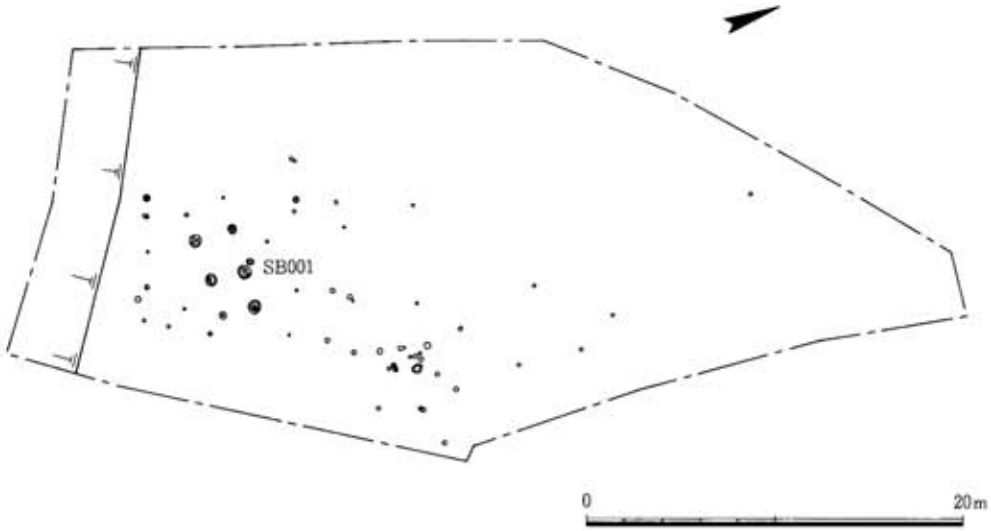
48は土師器高杯の脚裾部である。器壁は薄く、裾が外方へ強く開く。器面は摩耗しており調整は不明である。古墳時代後半期頃のものかと思われる。Ｐ―10から出土した。

ＳＢ309（図81）

3区中央部の南寄りに位置する掘立柱建物である。梁行2間×桁行2間の総柱の東西棟で、主軸はN69°Ｅである。柱掘方は径0.6ｍの円形で、0.1～0.15ｍの柱痕跡を確認できるものがある。

ＳＢ309出土遺物（図81）

49は須恵器の頸部破片で、肩部はカキメ調整である。器種は不明で、壺と報告しておく。古墳時代後半期頃のものかと思われる。Ｐ―6から出土した。



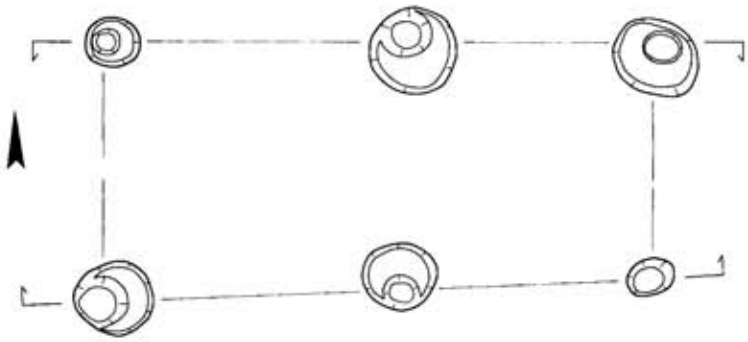


図78　2区の遺構（1：400），SB001（1：60）

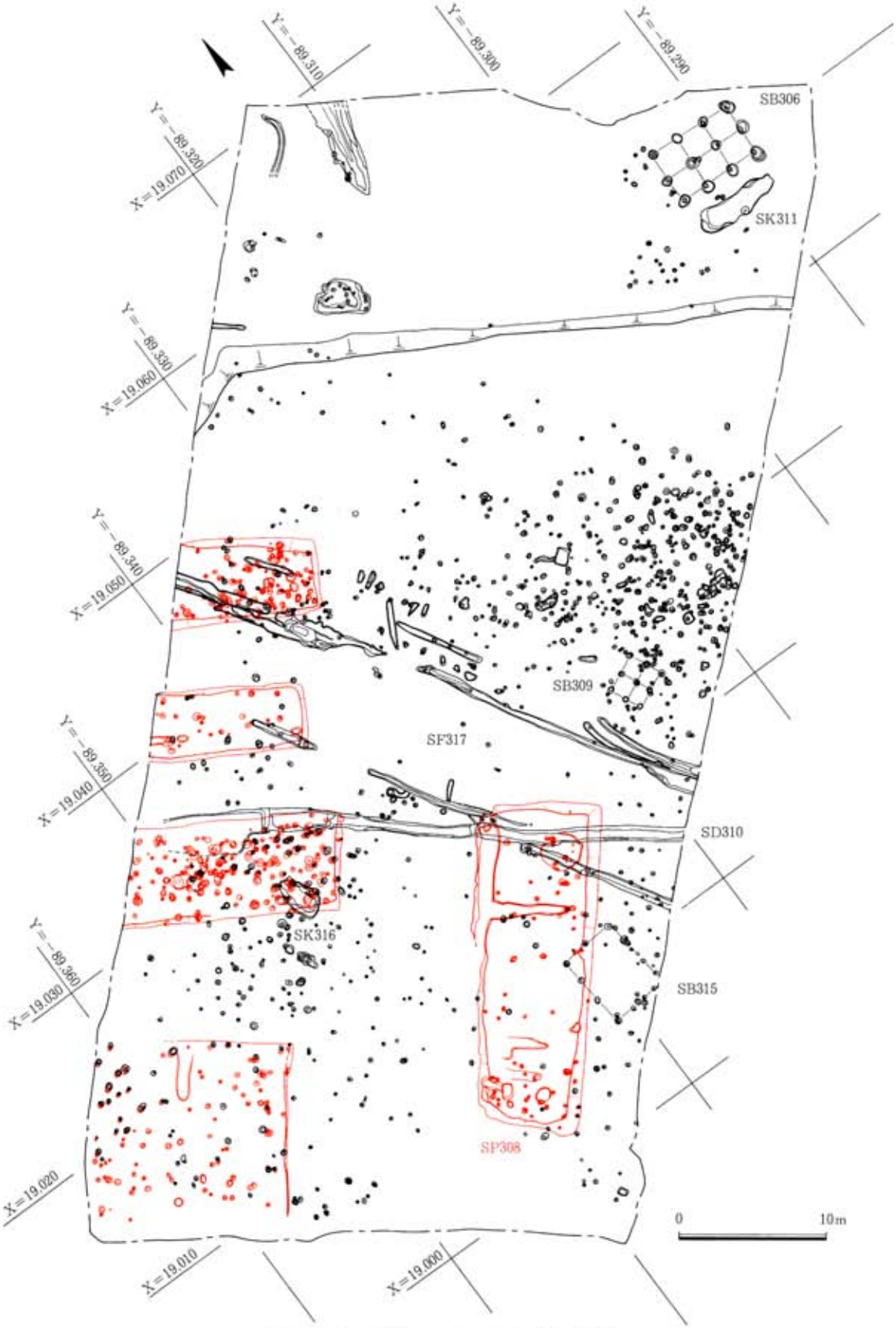


図79　3区の遺構（1：400, 赤は上層の遺構）

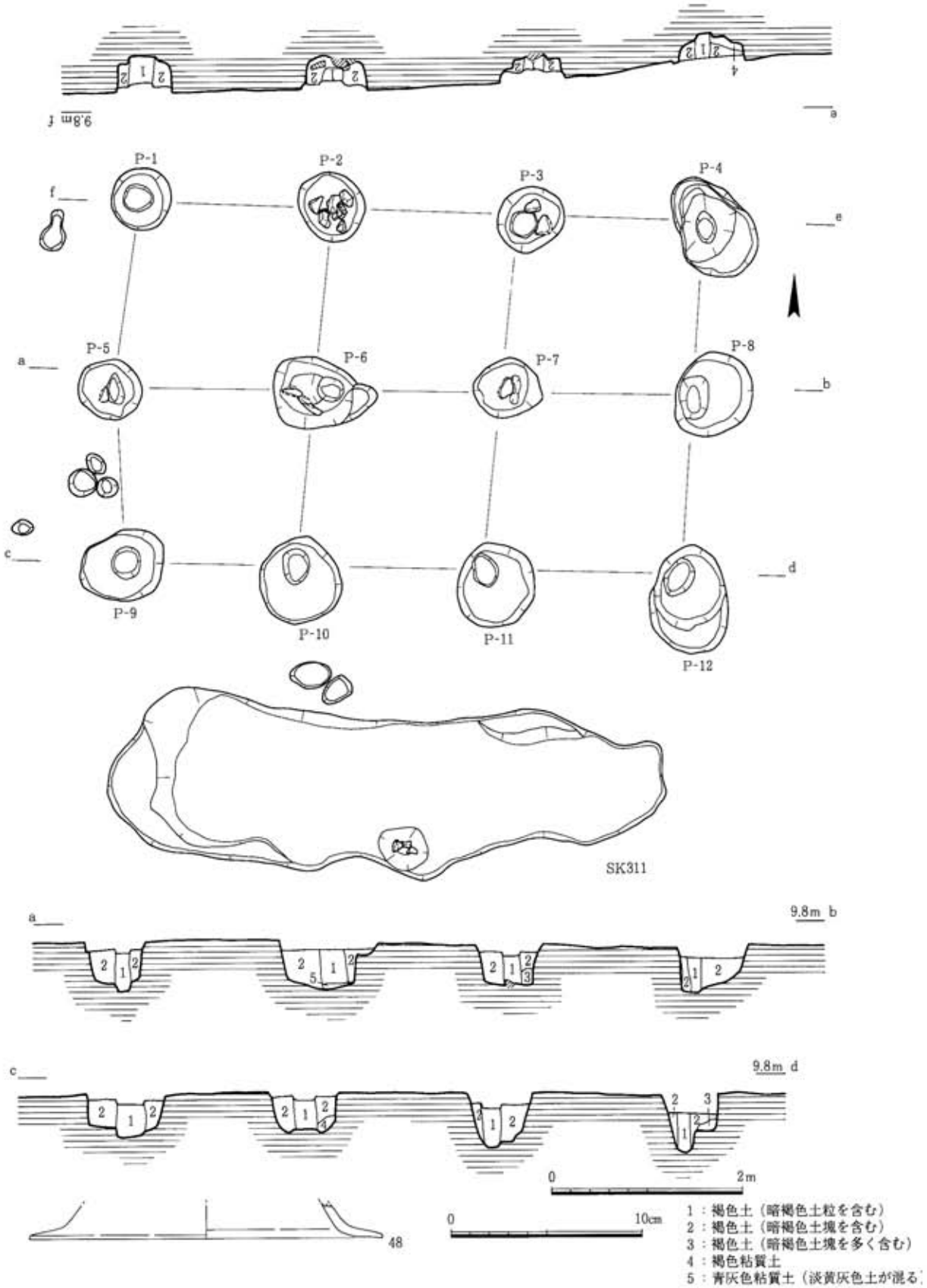


図80　3区ＳＢ306（1：60），出土遺物（1：3）

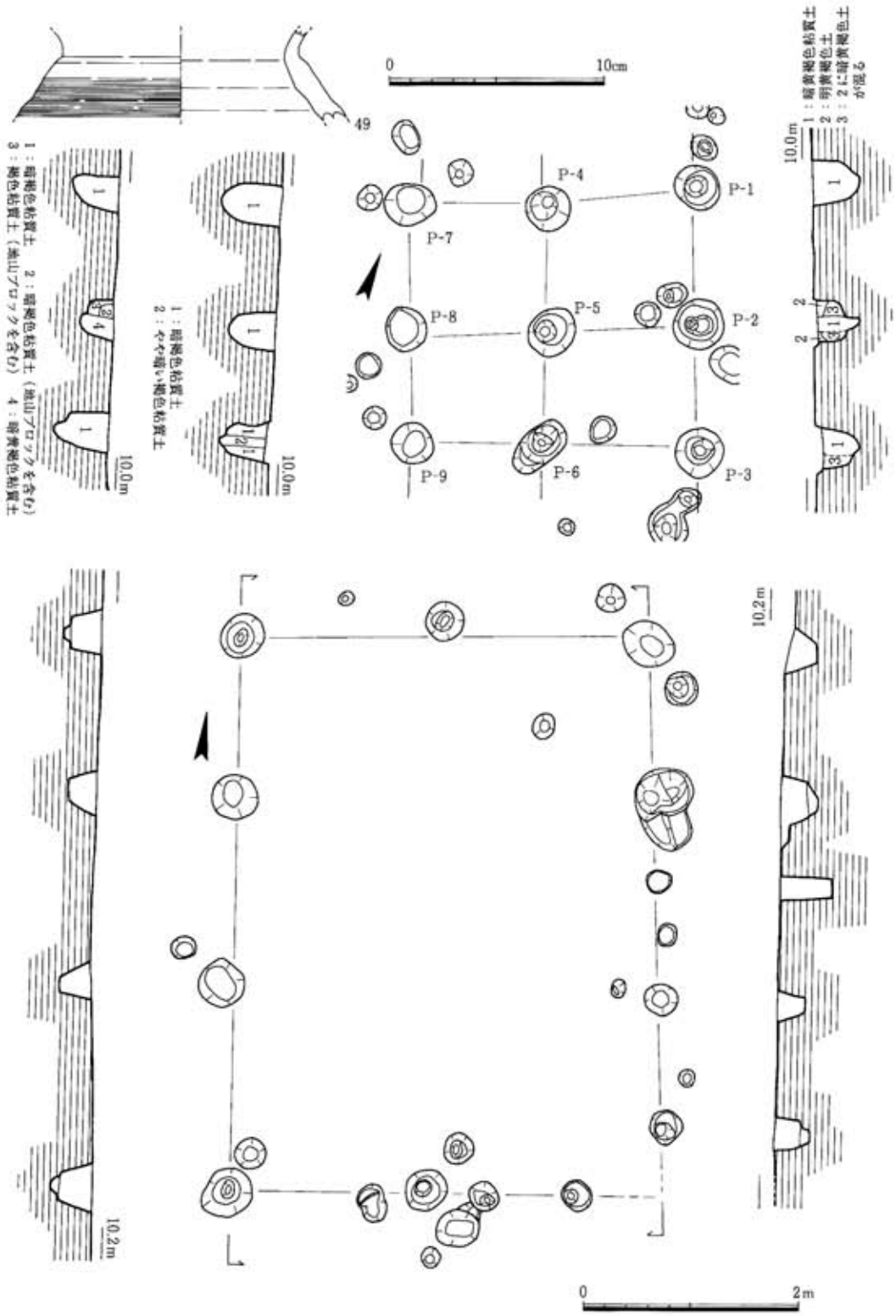


図81　3区ＳＢ309（1：60），出土遺物（1：3），ＳＢ315（1：60）

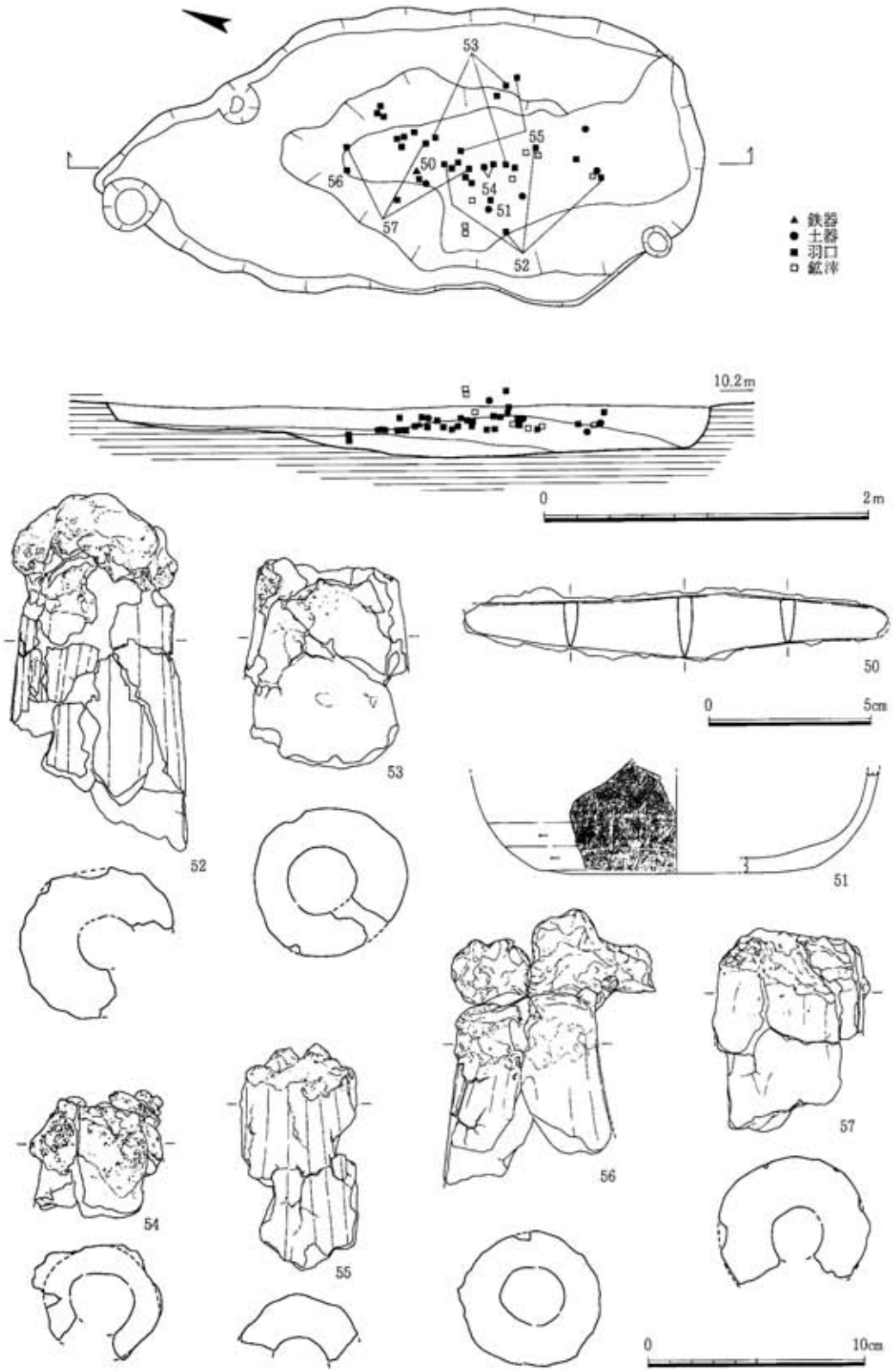


図82　3区SK316（1：40），出土遺物（50は1：2，51～57は1：3）

ＳＢ315（図81）

３区南側の南東端に位置する掘立柱建物である。南東の隅が調査区外になるが、梁行２間×桁行３間の南北棟で、主軸はＮ６°Ｗである。柱掘方は径0.3～0.4ｍの円形で、時期の判断できる遺物は出土していない。

ＳＫ316（図82）

３区南側やや西寄りに位置する。平面は不整な水滴形で、長軸3.8ｍ、短軸1.8ｍ、深さ0.3ｍである。底面はやや凹凸があり、北側が浅く南側は一段下がっている。埋土には炭化物をやや多く含み、鉄刀子１点と土器片数点（土師器・須恵器）の他、破片状態の鞴羽口と鉄滓と思われる鉱滓がややまとまって出土した。またやや大きめの礫も数点あるが、意図的に配置されたものや平坦面をもつものは認められなかったようである。出土遺物や埋土の特徴から鍛治に関連することは確実であるが、壁面や底面には明確な被熱の痕跡が観察されておらず鍛治遺構そのものというよりは廃棄土坑の可能性が大である。出土土器はいずれも小破片であるためやや不確実だが、古墳時代後半期頃と考えられる。

ＳＫ316出土遺物（図82）

50は鉄刀子で、先端部と基部を僅かに欠く以外はほぼ完存である。51は須恵器の底部で、平底の外底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施される。器種は平瓶の可能性が強い。古墳時代後半期頃のものであろう。52～57は鞴羽口である。

ＳＤ310（図83）

３区中央南寄りで調査区を横断するように走る溝である。走向はＮ51°Ｗ、延長36ｍで北西端は不明瞭に途切れる。断面形はＵ字状で、南東部で幅0.9ｍ、深さ0.6ｍ、中央部で深さ0.1ｍと急に浅くなり、北西部で再び深くなる。ＳＦ317と重複しており、実測図の表現ではＳＤ310の方が古い。埋土中から平安末期の土器がややまとまって出土した。

ＳＤ310出土遺物（図83・84）

58～61は土師器小皿で、58は底部回転ヘラ切り離し、59～61は底部回転糸切り離しである。62は土師器椀で、形態から混入の可能性がある。底部回転ヘラ切り離しである。63は黒色土器Ｂ類椀で器面は摩耗しておりヘラミガキが観察できない。64・65は土師器杯で、64は底部回転糸切り離し、65は摩耗のため不明である。66～71は土師器椀で、69以外は器面摩耗のため成形・調整の痕跡が確認できない。69は底部回転ヘラ切り離しで、押し出し技法により成形し、丁寧なヘラミガキが施される。72は瓦器椀で、内面にコテ当て痕跡、外面体部下端にユビオサエの痕跡が認められ、押し出し技法であることが解る。器面は摩耗しており、調整は内面にヘラミガキが観察される以外は不明である。73～75は白磁椀で、74は大きめの玉縁口縁、73・75は足高高台の類である。76は初期高麗青磁椀で、山本（1985）分類の椀Ⅲ類にあたる粗製品である。素地は粗く白色粒を含み、失透性の釉を全面に施したのち高台端面のみ削り取っている。高台

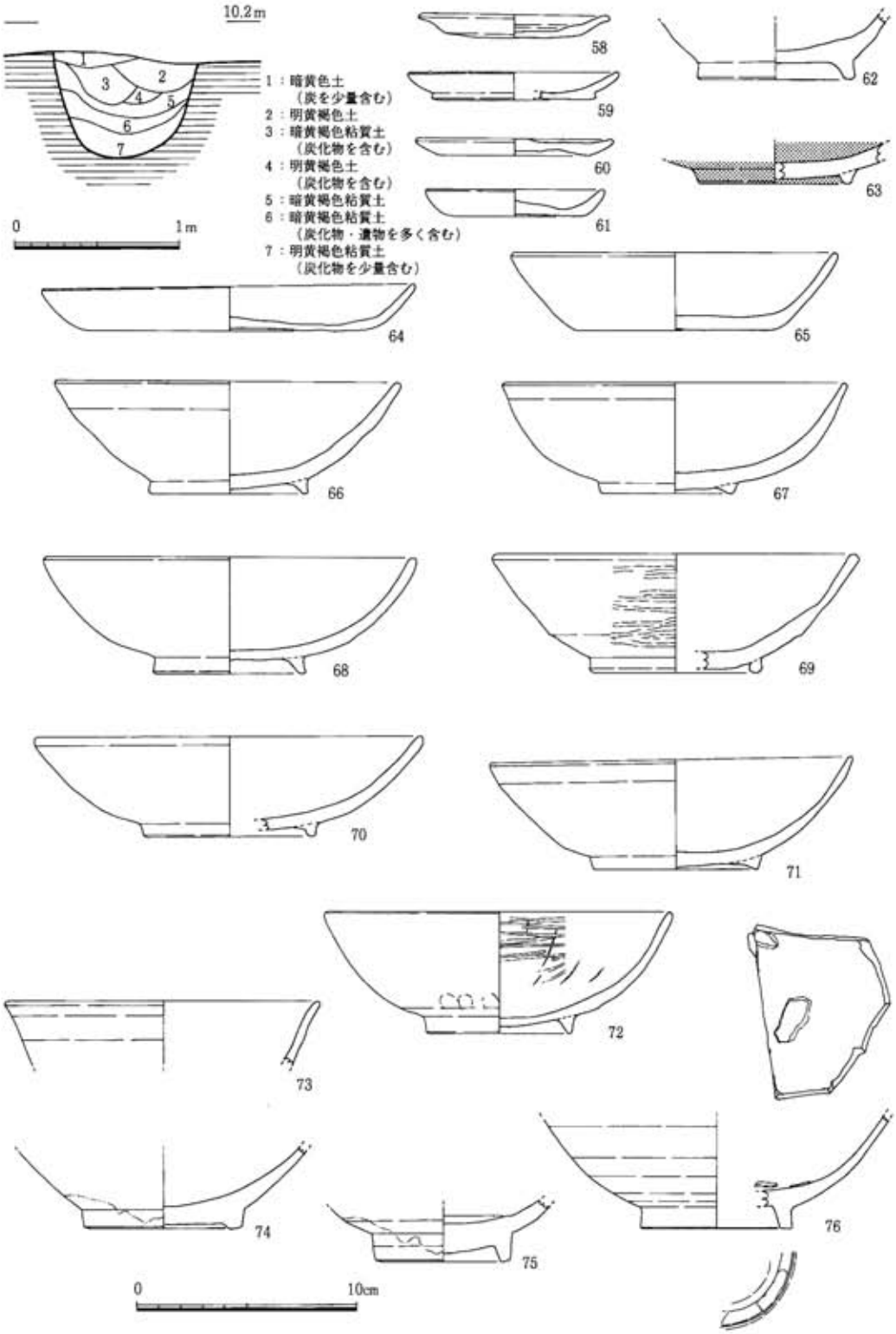


図83　3区ＳＤ310土層（1：40），ＳＤ310出土遺物1（1：3）

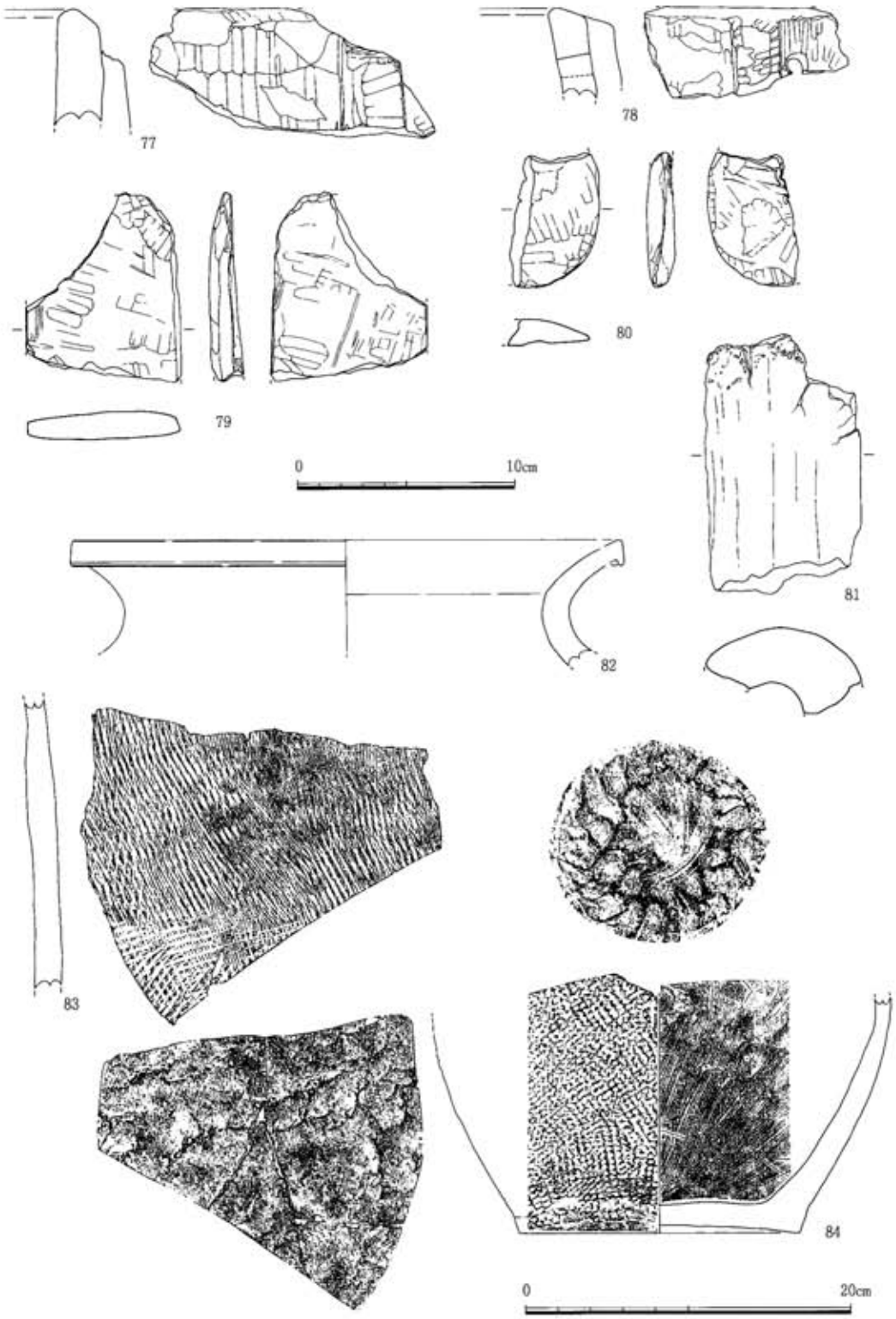


図84　3区SD310出土遺物2（77～81は1：3，82～84は1：4）

は高く削り出した輪高台で、内面底部と高台端面に目跡がある。77・78は滑石製石鍋の口縁部で、いずれも縦に把手のつくものである。79・80は滑石製石鍋の再加工品で、周縁部が面取りされる。81は鞴の羽口である。82～84はやや軟質の須恵器甕で、82と83は同一個体の可能性がある。

ＳＦ317（図79）

ＳＦ317として報告するのは、現場では意識されておらず遺構名が付与されていなかった道路状遺構である。したがって遺構の性格にしたがった調査方針は採られておらず、確実に道路遺構と認定あるいは否定することのできる情報は得られていない。しかし両側溝とみられる２条の溝がやや断続的ではあるが整然と並行して走り、その間は明らかに他の遺構が希薄であることから、不確定要素はあるものの注意を喚起する意味であえて道路状遺構として報告しておく。N30°Wの走向で３区の中ほどを横切っており、東側溝の遺存状況は幅0.5～1.2ｍ、深さ0.06～0.2ｍ程、西側溝の遺存状況は幅0.4～0.8ｍ、深さ0.05～0.2ｍ程である。溝の埋土からは遺物は出土していない。溝と溝の間隔、すなわち道路遺構とみた場合の路面幅は内法で6.0～7.6ｍである。硬化や土質等、路面推定部分の状況は全く不明である。ＳＤ310と重複しており、実測図の表現ではＳＤ310の方が新しい。ＳＤ310からは平安末期の遺物がまとまって出土していることからＳＦ317は平安時代以前の遺構である可能性が強い。

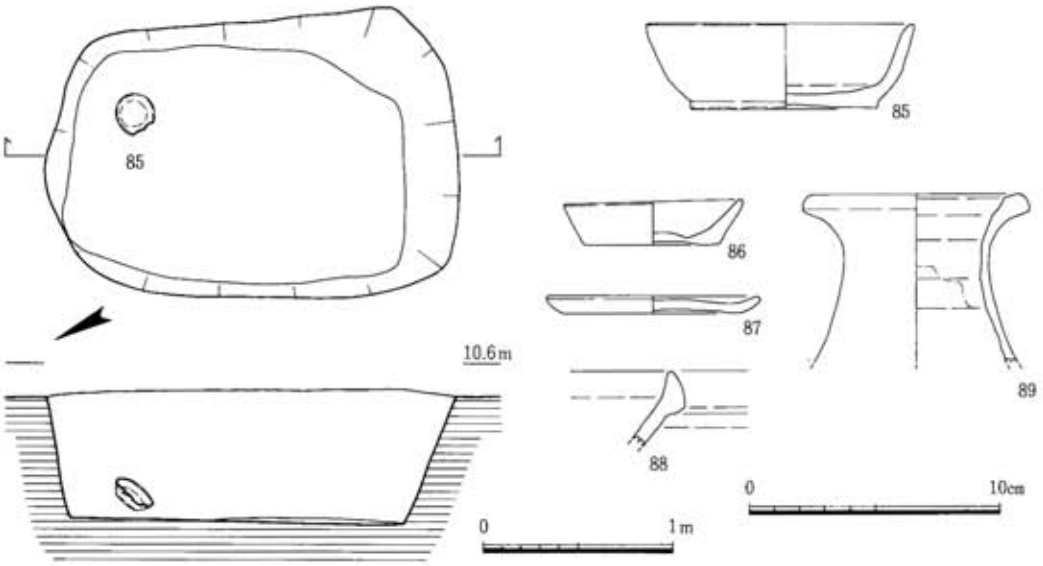


図85　３区ＳＰ308（１：40），３区上層出土遺物（１：３）

ＳＰ308（図85）

３区上層の高段部５段目南西端に位置する土葬墓である。平面はやや歪な隅丸長方形で、長軸2.2ｍ、短軸1.4～1.5ｍ、深さ0.7ｍである。壁はややきつく立ち上がり底面は平坦である。底面北端近くで副葬品と思われる土師器杯１個体が出土しており、仮にこちらを頭側とすれば頭位はＮ27°Ｅである。

ＳＰ308出土遺物（図85）

85は副葬品と思われる土師器杯で、口縁部を一部欠く。底部は回転糸切り離しで板状圧痕はない。口径10.6cm、器高3.4cm、底径7.4cmである。

３区上層出土遺物（図85）

遺構に伴わない上層の遺物を一括して報告する。86は３段目で採集された底部回転糸切り離しの土師器小皿で、板状圧痕は確認されない。口径7.0cm、器高1.8cm、底径5.2cmである。87は５段目で採集された底部回転糸切り離しの土師器小皿で、板状圧痕は確認されない。口径8.4cm、器高0.7cm、底径7.0cmである。88は３段目で採集された東播系須恵器捏鉢で、口縁部外側が肥厚し端部はやや内傾する。魚住窯産であろう。89は３段目で採集された中国産と考えられる褐釉陶器の壺（瓶）である。口縁部は外反し、端部が肥厚して丸みをもって終わる。頸部は口縁部下から細く延びて体部へと続いている。素地は粗く、口縁部内面の一部まで失透性の褐色の釉がかかる。

表5　玉江遺跡出土遺物一覧　　法量の単位はcm・g，（　）は復元値

遺物番号	挿図番号	出土遺構	遺物の種類	法量 ①口径②底径③器高④胴部径⑤長さ⑥幅⑦厚さ⑧重量	色調・石材	登録番号
1	図74	1区SX001	土師器・小皿糸切	①(7.4)②4.3③1.9	橙色	93004882
2	図74	1区SX001	土師器・小皿糸切	①3.8	橙色	93004880
3	図74	1区SX001	土師器・杯糸切	②6.0	橙色	93004881
4	図74	1区SX001	青磁・椀		素地：灰白色・釉調：オリーブ灰色	93004894
5	図74	1区SX001	青磁・椀		素地：灰白色・釉調：緑灰色	93004893
6	図74	1区SX001	土師器・擂鉢	②(12.9)	浅淡黄色	93004884
7	図74	1区SX001	土師器・擂鉢	②(10.4)	浅黄橙色	93004883
8	図74	1区SX001	瓦器・擂鉢		灰白色	93004885
9	図74	1区SX001	須恵器・捏鉢		灰白色	93004890
10	図74	1区SX001	須恵器・捏鉢糸切	②(9.0)	灰白色	93004886
11	図74	1区SX001	備前焼・壺		内：にぶい褐色・外：にぶい赤褐色	93004891
12	図74	1区SX001	備前焼・壺		内：灰褐色・外：赤褐色	93004905
13	図74	1区SX001	備前焼・壺		にぶい赤褐色	93004892
14	図74	1区SX001	瓦器・鍋	①(27.8)	灰黄褐色	93004888
15	図74	1区SX001	土師器・鍋	①(30.2)	橙色	93004878
16	図75	1区SX001	瓦器・鍋	①(22.5)	灰色	93004887
17	図75	1区SX001	石鍋		滑石	93004895
18	図75	1区SX001	石鍋		滑石	93004906
19	図75	1区SX001	土師器・茶釜	①(13.0)	にぶい橙色	93004879
20	図75	1区SX001	瓦器・茶釜	①(17.2)	内：にぶい黄橙色・外：灰色	93004889
21	図75	1区SX001	瓦器・壺か	①(18.0)	にぶい黄橙色	93004877
22	図75	1区SX001	茶白・下白	②(21.2)受皿径(34.2)		93004901
23	図76	1区SX002	白磁・椀		素地・釉調：灰白色	93004918
24	図76	1区SX002	白磁・椀	②(6.0)	素地・釉調：灰白色	93004921
25	図76	1区SX002	白磁・皿	①(9.6)②(6.2)③1.7	素地・釉調：灰白色	93004914
26	図76	1区SX002	白磁・皿	①(10.0)	素地・釉調：灰白色	93004915
27	図76	1区SX002	白磁・皿	②(4.2)	素地・釉調：灰白色	93004919
28	図76	1区SX002	青磁・椀		素地：灰白色・釉調：オリーブ灰色	93004916
29	図76	1区SX002	青磁・椀	②(4.0)	素地：灰白色・釉調：オリーブ灰色	93004917
30	図76	1区SX002	青磁・皿	②(6.2)	素地：灰白色・釉調：オリーブ灰色	93004920
31	図76	1区SX002	青磁・椀		素地：灰白色・釉調：オリーブ灰色	93004913
32	図76	1区SX002	瓦器・捏鉢		内：青灰色・外：灰白色	93004912
33	図76	1区SX002	須恵器・甕		青灰色	93004911
34	図76	1区SX002	石鍋		滑石	93004909
35	図76	1区SX002	石鍋		滑石	88002233
36	図76	1区SX002	石鍋	①(22.4)	滑石	93004908
37	図76	1区SX002	石鍋	①(25.5)	滑石	88002232
38	図76	1区SX002	石鍋		滑石	93004907
39	図76	1区SX002	石鍋		滑石	93004910
40	図77	1区	白磁・椀		素地・釉調：灰白色	93004899
41	図77	1区	白磁・椀		素地・釉調：灰白色	93004897
42	図77	1区表採	白磁・皿	①(15.6)②(8.6)③3.5	素地・釉調：灰白色・露胎部：浅黄色	93004903
43	図77	1区	青磁・椀		素地：灰白色・釉調：オリーブ黄色	93004898
44	図77	1区	青磁・椀	②5.3	素地・露胎部：灰白色・釉調：オリーブ黄色	93004900
45	図77	1区表採	陶器・皿	②4.4	素地：灰白色・釉調：灰色	93004902
46	図77	1区	土師器・擂鉢		浅黄橙色	93004896
47	図77	1区	須恵器・捏鉢		灰白色	93004904
48	図80	3区SB306	土師器・高杯	②(18.2)	明褐色	93001594
49	図81	3区SB309	須恵器・壺		明灰色	93001596
50	図82	3区SK316	鉄製刀子	⑤13.1⑥1.9⑦0.4		93004962
51	図82	3区SK316	須恵器・平瓶か	②(12.6)	灰色	93004958
52	図82	3区SK316	鞴羽口	⑤16.5⑥7.9		93004955
53	図82	3区SK316	鞴羽口	⑤9.7⑥7.5		93004954
54	図82	3区SK316	鞴羽口	⑤5.9⑥6.1		93004957
55	図82	3区SK316	鞴羽口	⑤10.5⑥5.4		93004956
56	図82	3区SK316	鞴羽口	⑤12.6⑥6.2		93004952
57	図82	3区SK316	鞴羽口	⑤9.3⑥7.3		93004953
58	図83	3区SD310	土師器・小皿篦切	①(8.8)②6.2③1.2	内：浅黄橙色・外：にぶい橙色	93004933
59	図83	3区SD310	土師器・小皿糸切	①(9.6)②7.5③1.3	浅黄橙色	93004934
60	図83	3区SD310	土師器・小皿糸切	①(9.0)②(6.8)③0.8	内：浅黄橙色・外：灰白色	93004931
61	図83	3区SD310	土師器・小皿糸切	①8.2②6.3③1.3	内：にぶい橙色・外：灰白色	93004932
62	図83	3区SD310	土師器・椀篦切	②7.2	浅黄橙色	93004930
63	図83	3区SD310	黒色土器B類・椀	②(7.1)	内：褐灰色・外：黒褐色	93004936
64	図83	3区SD310	土師器・杯糸切	①17.0②12.8③2.2	浅黄橙色	93004935
65	図83	3区SD310	土師器・杯	①(15.0)②(9.3)③3.6	黄橙色	93004927
66	図83	3区SD310	土師器・椀	①15.8②7.2③5.3	灰白色	93004922
67	図83	3区SD310	土師器・椀	①(15.8)②(5.9)③5.1	浅黄橙色	93004925
68	図83	3区SD310	土師器・椀	①17.0②7.0③5.4	浅黄橙色	93004923

遺物番号	挿図番号	出土遺構	遺物の種類	注記 ①口径②底径③器高④胴部径⑤長さ⑥幅⑦厚さ⑧重量	色調・石材	登録番号
69	図83	3区SD310	土師器・椀	①(18.2)②(9.3)③5.5	灰白色	93004926
70	図83	3区SD310	土師器・椀	①(17.6)②(7.8)③4.6	内：灰白色・外：淡橙色	93004924
71	図83	3区SD310	瓦器・椀	①(16.7)②7.6③5.2	灰白色	93004929
72	図83	3区SD310	瓦器・椀	①(15.9)②(6.6)③5.6	灰白色	93004928
73	図83	3区SD310	白磁・椀	①(14.3)	素地：白色・釉調：灰白色	93004938
74	図83	3区SD310	白磁・椀	②(7.1)	素地・釉調・露胎部：灰白色	93004939
75	図83	3区SD310	白磁・椀	②6.1	素地・釉調：白色・露胎部：灰白色	93004940
76	図83	3区SD310	青磁・椀	②(7.0)	素地：灰白色・釉調：灰オリーブ色・露胎部：にぶい赤褐色	93004937
77	図84	3区SD310	石鍋		滑石	93004946
78	図84	3区SD310	石鍋		滑石	93004945
79	図84	3区SD310	石鍋再加工品	⑤8.8⑥7.2⑦1.3	滑石	93004942
80	図84	3区SD310	石鍋再加工品	⑤6.2⑥4.1⑦1.3	滑石	93004941
81	図84	3区SD310	鞴羽口	⑤12.1⑥7.2⑦3.0		93004943
82	図84	3区SD310	須恵器・甕	①(34.0)	灰白色	93004961
83	図84	3区SD310	須恵器・甕		灰色	93004960
84	図84	3区SD310	須恵器・甕	②17.7	灰白色	93004959
85	図85	3区SP308	土師器・杯	①10.6②7.4③3.4	明褐色	93001593
86	図85	3区上層	土師器・小皿糸切	①7.0②5.2③1.8	明褐色	93001589
87	図85	3区上層	土師器・小皿糸切	①8.4②7.0③0.7	明褐色	93001590
88	図85	3区上層	須恵器・捏鉢糸切		明灰色	93001595
89	図85	3区上層	陶器・壺	①(9.0)	素地：灰色・釉調：黒褐色・露胎部：灰白色	93001598

4．まとめ

今回の玉江遺跡の調査では、主に古墳時代と中世の遺構・遺物を検出した。性格の特定できない遺構も少なくないが、いくつかの点で重要な知見を得ることができた。

1区では潮見山の西麓に中世後期の石積遺構が設けられており、その前面に居住地と見られる小穴群が展開していた。潮見山の頂部には橘薩摩氏の拠った潮見城が築かれていて、東側の山麓から潮見川までの一帯に居館を中心とする城下集落が形成されている。現状で確認できる潮見城の遺構は戦国末期の姿と思われるが、応安五（1372）年三月日橘薩摩公與軍忠状（橘中村文書44号）に応安4（1371）年12月に「於潮見山、初構城郭、致合戦」との記述があり、南北朝内乱期の14世紀後半には山城としての利用がなされていたことが確認される。1区の位置は潮見城の搦手側にあたる山麓部であり、出土遺物の示す年代観がおよそ14～16世紀代であることは両者の関連を容易に推測させるが、調査範囲が狭く遺構の全体構造は不明であり、具体的な性格や関連は詳らかでない。

3区では古墳時代後半期から中世の集落関連遺構を検出した。古墳時代後半期では総柱構造の掘立柱建物2棟や鍛冶関連の廃棄土坑があり、周辺の調査成果と併せて玉江遺跡における古墳時代集落の実態を探る手掛かりを得ることができた。

3区を横断する溝ＳＤ310からは、いくぶん時期幅のある平安末期の遺物群がまとまって出土した。このうち初期高麗青磁と思われる椀は県内ではこれまで確実な報告例のないものであるが、みやこ遺跡Ｂ区ＳＤ001（本書第6章）からも出土しており、朝鮮王朝期の陶磁器と同様に、今後の注意でかなり事例が増えるものと予想される。

道路状遺構ＳＦ317は、調査段階で認識されていなかったことや出土遺物のないこと等、道路としての認定や時期比定に問題を残しているが、ＳＤ310との関係からすると平安時代後期以前の可能性が強く、古墳時代後半期の集落よりは後出するものであろう。再々述べているように、玉江遺跡の地理的な位置は武雄盆地から川登盆地へ通じる地峡部であり、道路状遺構の走向もおおむねこれに合致している。もちろん両盆地と繋ぐ道を想定した場合でも、現時点ではＳＦ317は点にすぎないのであり、他の調査区での遺構の状況や周辺における遺跡の在り方を含めて総合的な検討が求められよう。

引用文献（第2章で掲げたものは省略）

木戸雅寿（1993）石鍋の生産と流通．中近世土器の基礎研究IX，pp.127―143，日本中世土器研究会

山本信夫（1985）日本における初期高麗青磁について―大宰府出土例を中心として―．貿易陶磁研究，No.5，pp.1―18，日本貿易陶磁研究会

第８章　皿山窯跡

遺跡名：皿山窯跡（略号ＳＲＡ）

所在地：佐賀県武雄市 橘 町大字片白字片白

第8章　皿山窯跡

1．皿山窯跡の概要

皿山窯跡は、佐賀県武雄市橘町大字片白字片白に所在する。窯跡の位置は杵島山地西麓の標高20m前後の西緩斜面にあたり、東福寺遺跡の調査区内南側で単独で検出された。

東福寺遺跡・皿山窯跡の調査対象面積は17,700㎡で、調査範囲は6,650㎡である。東福寺遺跡では、弥生時代の竪穴建物6棟、古墳8基、石棺墓1基、古墳再利用の中世墓等が検出されており、本書第9章で報告する。

遺跡名は佐賀県遺跡地図（杵西地区）にしたがい皿山窯跡として報告するが、開業式の際に焼かれた染付皿には「片白陶釜」と記されているので、操業時の呼び方を尊重すれば片白窯とするのが本来的であろう。

武雄市内における近世以降の陶磁器窯跡は、平成2・3年（1990・1991）年度に武雄市教育委員会が実施した分布調査の報告書（武雄市教委1992）によれば65箇所80基以上があるが、その8割以上は市域北部の川古盆地（若木町）・真手野盆地（武内町）と市域南部の川登盆地（東川登町・西川登町）とに集中しており、武雄盆地（武雄町・朝日町・橘町）には少ない。皿山窯跡の位置する橘町地区では上野本登り窯跡が江戸期に溯る唯一のもので、他はいずれも明治以降の比較的新しい窯である（野田1975）。

今回の発掘調査で確認された遺構は、胴木間（燃焼室）と焼成室6室からなる階段式連房状登窯1基と物原1箇所で、他に窯体覆屋の柱穴と見られる小穴列や排水溝等が付随して検出されている。窯体は胴木間側を西、窯尻側を東にしてほぼ東西に向き、全長25.0m、胴木間幅5.2m、胴木間奥行1.2m、焼成室の平均幅6.9m、焼成室の平均奥行3.6mで、傾斜は約8°である。

遺物はほとんどが物原からの出土である。製品は磁器染付の皿が主体で、椀がこれに次ぎ、鉢が少量ある。装飾技法は大部分が型紙摺であるが、僅かに銅版摺の製品も認められ、2種の技法による製品が溶着したものがあることから、型紙摺から銅版摺への移行段階を示すものと考えられる。窯道具は多様な大きさと形態の焼台が多く、匣鉢が若干ある。主力製品である皿を重ねる場合には三足ハマが多用されているようである。

調査の結果、皿山窯跡の製品・窯道具や窯体の規模・構造等は明治後期頃の特徴を示していることが明確になった。所在地が大字片白字片白の地であり、「片白陶釜開業式」や「柿原」銘の染付皿が出土していることを考え併せると、明治30（1897）年に塩田久間山の工人であった柿原久米吉が橘町片白の地に窯を築き、磁器染付の皿等を5年程にわたって焼いていた、という『肥前陶磁史考』（中島1935）中の記述を裏付けるものと考えられる。

図86　皿山窯跡・東福寺遺跡周辺の地形（1：2,000）

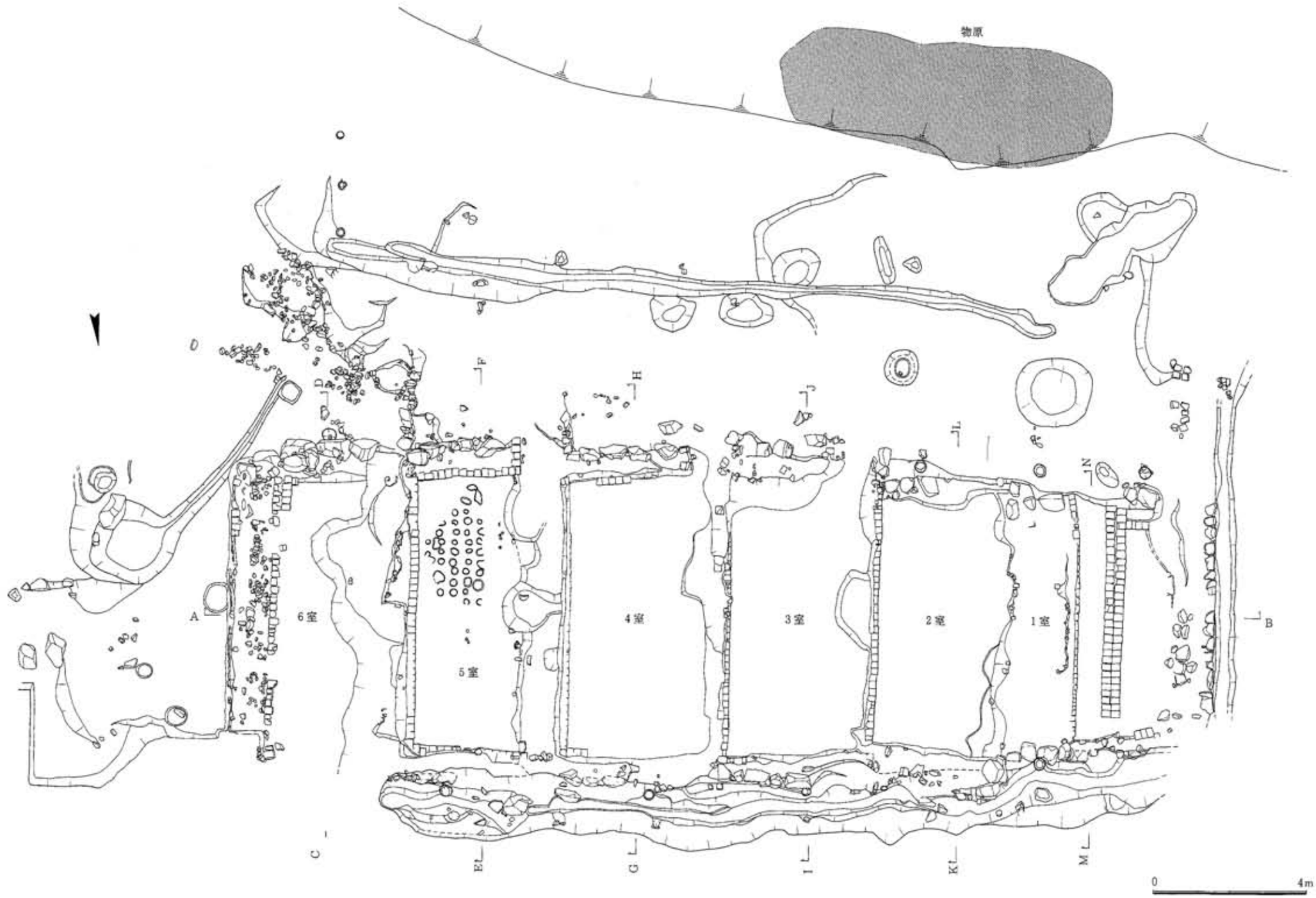


図87　皿山窯跡平面（1：120）

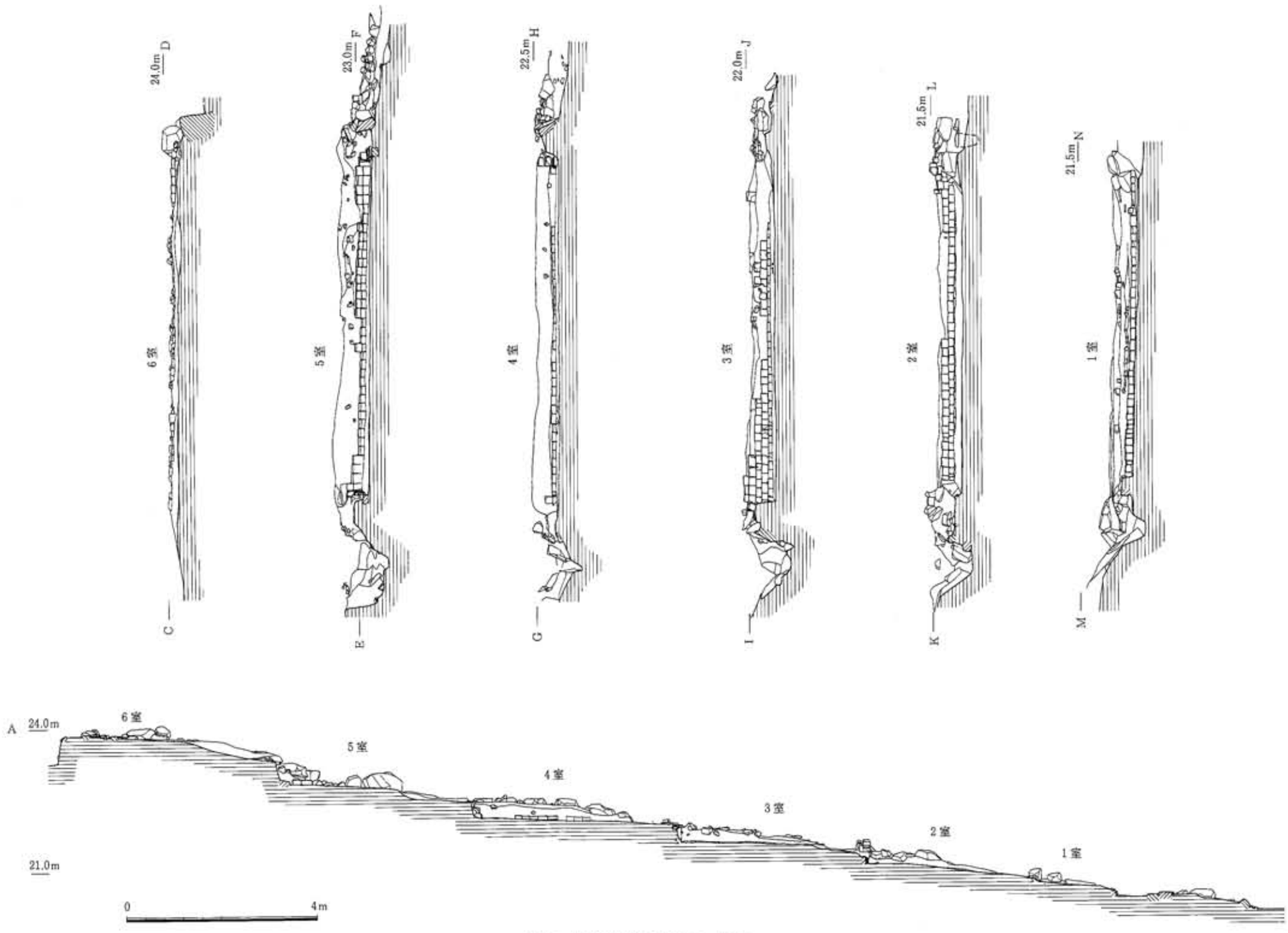


図88　皿山窯跡断面見透（1：100）

2．遺構（図87～89）

検出した遺構は、胴木間（燃焼室）と焼成室６室からなる階段式連房状登窯１基と物原１箇所で、この他に窯体覆屋の柱穴と見られる小穴列や排水溝等が付随して検出されている。

窯体は全長25.0ｍ、胴木間幅5.2ｍ、胴木間奥行1.2ｍ、焼成室の平均幅6.9ｍ、焼成室の平均奥行3.6ｍで、傾斜は約８°である。焼成室は６室で、調査時には窯尻側から順に１～６室と命名されているが、胴木間側から数えるのが通例であるので、焼成室の番号を調査時とは逆に下から順に１～６室として報告する。

１・２室は攪乱のため奥行の長さが推定によるが、１室は幅6.7ｍ、奥行推定2.9ｍ、２室は幅7.0ｍ、奥行推定3.7ｍである。３室は幅7.2ｍ、奥行3.7ｍ、４室は幅6.8ｍ、奥行4.2ｍ、５室は幅7.1ｍ、奥行4.0ｍ、６室は幅6.5ｍ、奥行3.6ｍである。６室に続けて奥行0.9ｍの煙り出し部分がある。

各室とも火床の遺存状況は悪く、辛うじて５室の状態から入り口が右側にあり奥行が1.0ｍ程であることがわかるのみである。通焔孔の構造なども全く不明である。比較的遺存状況の良い３～５室辺りでみると、火床と砂床との高低差は0.1ｍ程、奥壁の高さは0.5ｍ程である。砂床もかなり攪乱を受けているが、傾斜はほとんどなく平坦である。５室砂床の南側には大型のトチンを据え置いた痕跡が窪みとして残っている。砂床部分の土層観察によれば(図89参照)、最終段階の砂床の下位にそれ以前の砂床面があり、少なくとも砂床の造成が２度行われていることがわかる。窯体上部構造の詳細は削平のため知りえないが、奥壁と側壁はトンバイによる構築である。

窯体覆屋の柱穴とみられる径0.3ｍ程の小穴は、胴木間の南側、１室の北側と南側、２室の南側、３室の北側、４室の北側、５室の北側、６室の南側にそれぞれ１箇所ずつ位置している。排水溝は、窯体の北側に接するもの、胴木間の下を区切るもの、窯体の南側に約４ｍの間隔を空けて並行するものがある。５室に残る火床の入り口と排水溝の位置関係から、焼成に関わる作業は窯の南側から行われたことがわかる。窯体南側の排水溝の更に南側は造成された平場がある。その上部（東側）端には小屋掛けの柱穴と思しき径0.2ｍ程の小穴３基が並んでいて、この平場が作業空間として利用されていたことを示している。

物原は１箇所であり、平場の南側斜面に8.8×3.0ｍのやや狭い範囲で集中している。遺物のほとんどは、ここから出土したものである。

近世肥前古窯の変遷を窯体構造や規模の点から明らかにした研究（大橋1986）を参照すると、第６グループとされた18世紀末～19世紀後半頃の窯は、焼成室の平均幅7.1～8.5ｍで奥壁・側壁にトンバイを使用することが特徴として挙げられており、19世紀末に築窯された皿山窯跡もおおむねこれらと同様のものと言える。

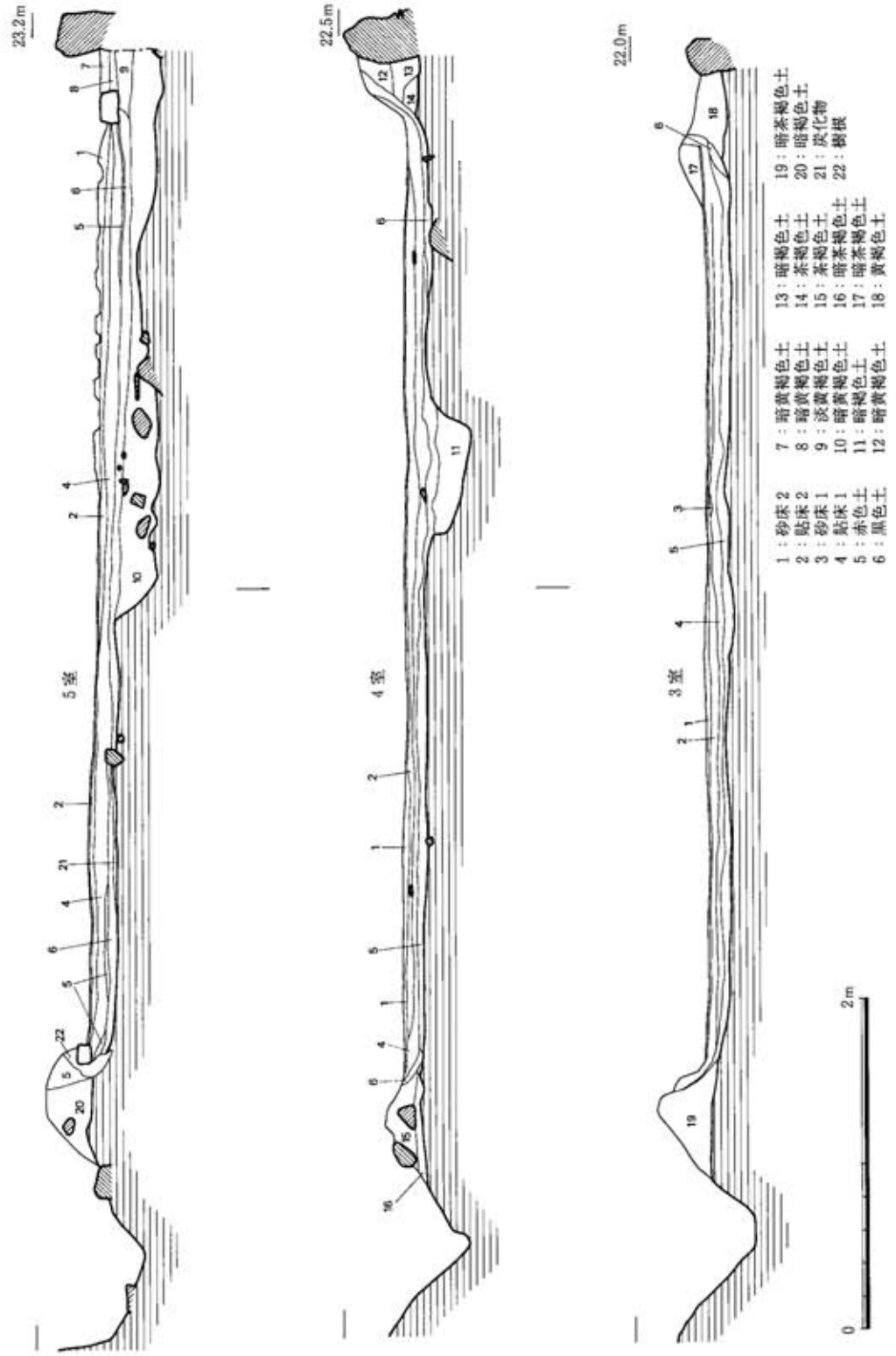


図89　皿山窯跡3～5室横断面土層（1：40）

3．遺物（図90～93）

図示した遺物は全て物原から出土したものである。製品はいずれも磁器染付で、器種は中型の皿が圧倒的に多く、椀が少量と鉢が極少量ある。製品のほとんどは型紙摺によるものであるが、銅版摺によるものも少量あり、両者が溶着した例がある(写真図版参照)。窯道具は多様な形態と大きさの焼台がほとんどで、他に匣鉢が少量ある。焼台の種類はトチン、ハマ、逆台形ハマ、三足ハマ、シノ等と呼ばれるものがある。

型紙摺の製品

椀・蓋（1～11）

椀の器形は、高台から口縁部に向かって大きく開くもの(4～6)、腰が張り口縁部が僅かに端反り気味で高台径が小さいもの（2・7～10)、腰が張り口縁部はまっすぐ立ち上がり高台径の大きいもの（11）がある。1・2は椀の蓋で、文様意匠から1は2と、3は4と組になるものと考えられる。これらは飯椀として生産されたものであろう。文様は外面全体・内面口縁部・見込みに施されており、主題は桜花（1・2)、矢羽根（9)、梅（6～8)、草花（菊か？、3・4・10)、壺と花籠（5)、竹林に人物（11）である。11の高台内には多分に意匠化された銘が記されている。これらは畳付を除く全面に施釉するのを基本とするが、6と9は見込みを同心円状に釉剝ぎしている。また、8と10の見込みには三足ハマの痕跡を留める。

皿（14～30）

皿はいずれも中型のもので、しっかりした高台から口縁部に向かって内湾して立ち上がり、端部はまっすぐ終わる。文様は意匠化が顕著である。口径11cm以下のやや小型の一群（14・15）と出土品の大多数を占める口径12～14cmの一群（16～30）とがあり、両者の作行や文様意匠はほぼ同じであるが、やや小径のものは畳付以外の全面に施釉するのに対して、主製品の方は畳付から高台内を釉剝ぎする（高台内の中央部分は施釉)。

14・15は、主に内面に文様を施し、外面は高台に圏線を巡らせるのみである。15は菊花を中心として風車状に区画し、菊花と、青海波・桜花とを交互に配している。14ではやや不明瞭ながら、15の内面見込みには三足ハマの痕跡がある。15の口縁は平縁であるが、14は波縁に作る。

16～30は、口径や器高・文様意匠等に若干の違いがあるものの全体として類似するもので、皿山窯跡で焼造された主力製品である。文様は内面全体に施されるものが主となるが、外面体部にも草花文（花が菊花のものや草が唐草のもの等がある）を施している。口縁端部は塗り潰し、波縁に作るものが多い。16・20・24・28・30は見込みに三足ハマの痕跡がある。

16～20はいずれも菊花・竹・梅花を組み合わせた意匠を見込みに配している。17・18は扇形の、20は菱形の窓を置き、その中に菊等を配している。

30は20に類似する型紙文様の上に重ねて「柿原」の文字を書いている。

21は見込み中央に菊花を配し、そこから外側に向かって風車状の区画を延ばす。

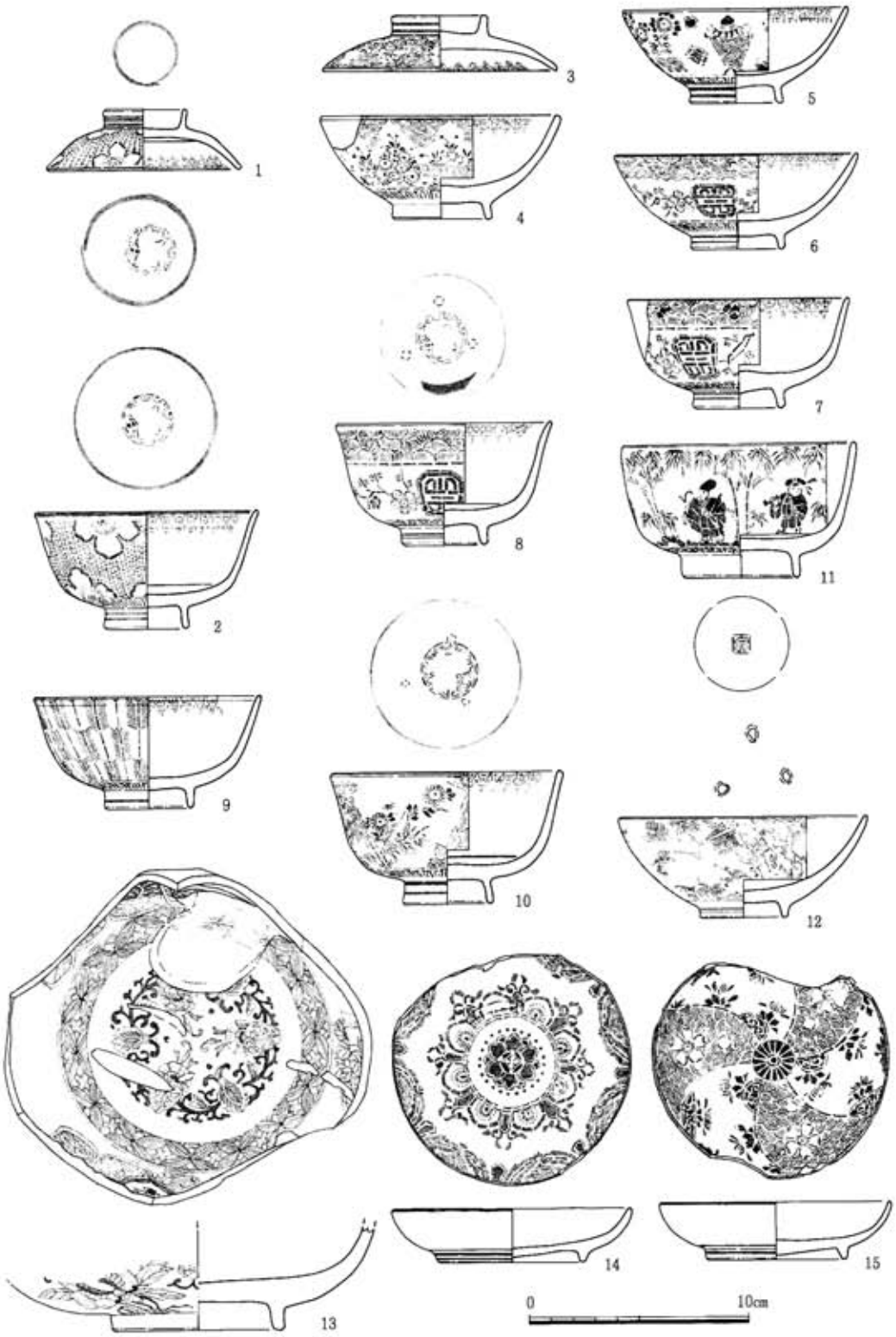


図90　皿山窯跡出土遺物１（１：３）

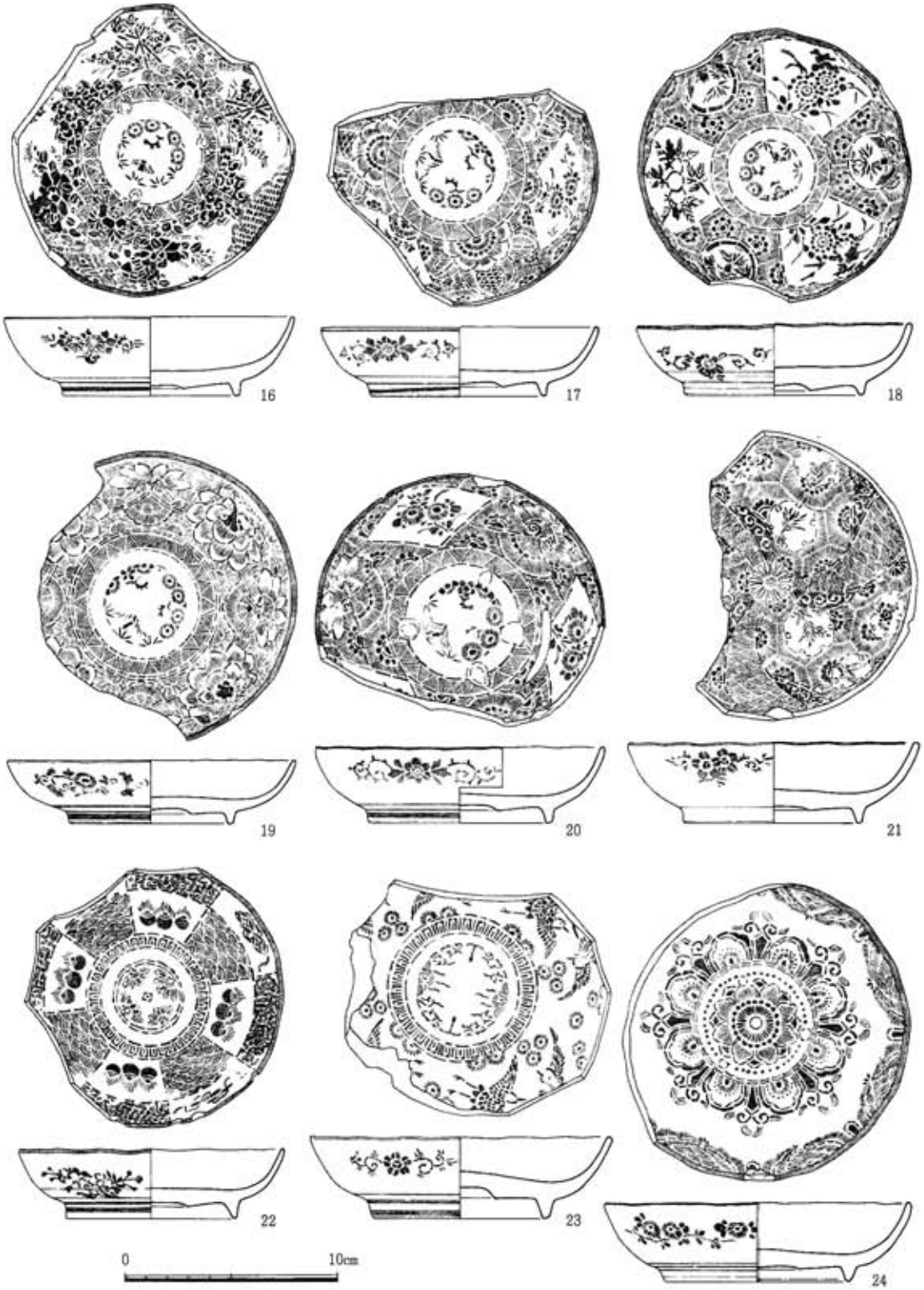


図91　皿山窯跡出土遺物２（１：３）

25は三菱形の窓を配し、その中に蔓草文（葡萄か？）を置く。

27～29は扇形と短冊形の窓を組み合わせており、扇には菊を主題として周囲に竹垣・秋草・蝶を配し、短冊には27が秋草を、28が「菊花眞可愛哉尋出掎ヵ繁ヵ　叢ヵ早春信近清香似春恒ヵ野田製」の漢詩を載せている。29は28と同文様の製品であるが、型紙を表裏逆に摺っており鏡文字になっている。これが単なる誤りなのか作為的なものなのかはわからない。

「片白陶釜開業式」銘皿（31・32）

見込みに「片白陶釜」、その周囲に１文字ずつ「開」「業」「式」の銘を配した皿で、出土量は非常に少ないが操業当時の皿山窯跡を知るうえで重要な資料である。

銅版摺の製品（12・13）

椀（12）　高台から口縁部に向かって大きく開く器形である。畳付以外の全面に施釉し、内面見込みには三足ハマの痕跡がある。外面に松竹梅文を施している。

鉢（13）　口縁部を欠失しており、焼き歪みも全体に著しい。畳付以外の全面に施釉する。内面の文様は、見込みに草束・唐草文を、その周囲に七宝文の帯を巡らせ、体部は不明瞭ながら幾何学文や七宝文等を配している。外面の文様は、体部に草花文を施している。

窯道具（33～52）

窯道具は多様な形態や大きさの焼台多数と匣鉢少量があり、三足ハマ以外はすべて陶胎である。なお、整理時の不手際から大型のトチンについては図示できなかった。

33～35は皿状の焼台で、ハマとして良いだろう。36は逆台形のハマ、38・39は円盤形のハマである。40～42は三足ハマで、40は小型で磁胎のもの、41・42は一回り大きく本体が陶胎で足の部分が磁胎のものである。43・44・47はいわゆるシノか。45・46・48～50は大型の焼台である。上面は平坦で、底部は上げ底に作り、体部に数箇所窪みを入れている。51は匣鉢である。図示はしていないが25に類似する皿が匣鉢に入ったまま溶着した例が出土している。52は非常に大型の逆台形ハマで、上面に円盤状のハマを重ねている。

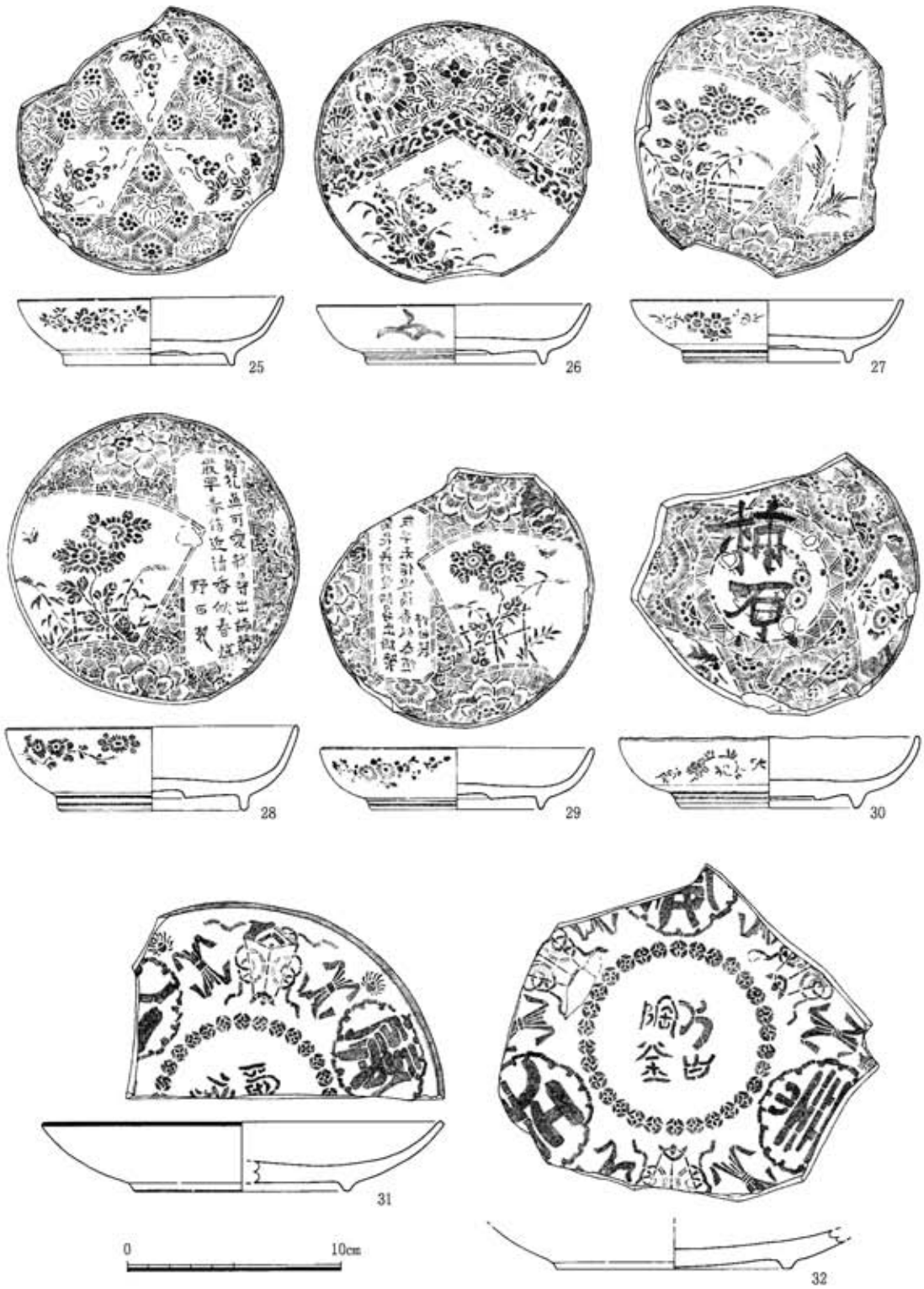


図92　皿山窯跡出土遺物3（1：3）

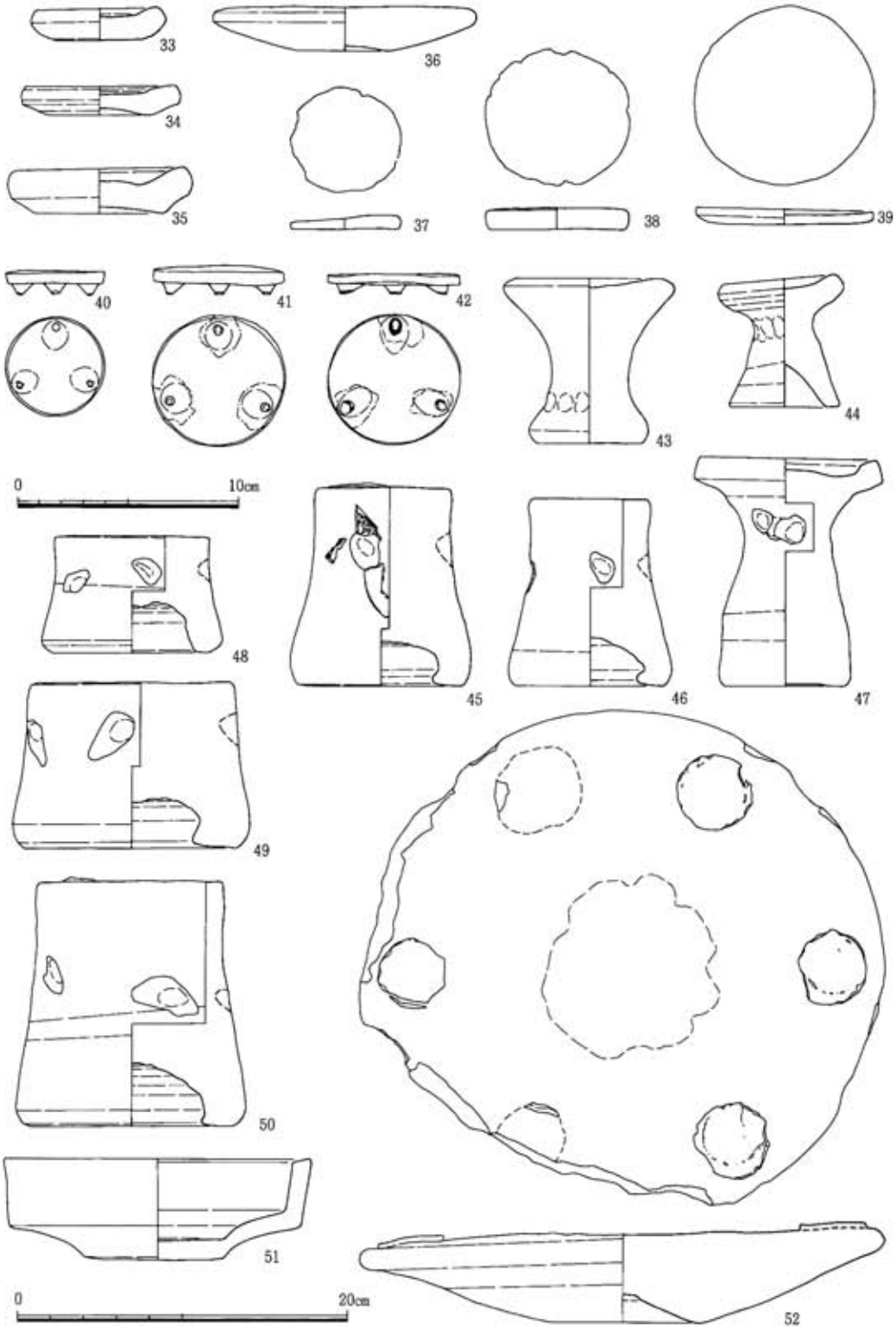


図93　皿山窯跡出土遺物４（33～44は１：３，45～52は１：４）

表6　皿山窯跡出土遺物一覧　　法量の単位はcm。（　）は復元値

遺物番号	挿図番号	出土遺構	遺物の種類	法量①口径・上部径②底径・下部径③器高	色　調	登録番号
1	図90	物原	染付・蓋	①8.6つまみ部径3.8③2.8	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	93001364
2	図90	物原	染付・椀	①(10.1)②3.6③5.4	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	93001365
3	図90	物原	染付・蓋	①(10.6)つまみ部径(4.0)③2.6	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	93001361
4	図90	物原	染付・椀	①(10.8)②(4.2)③4.8	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	93001362
5	図90	物原	染付・椀	①10.2②2.0③4.5	素地：褐灰色・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	92002792
6	図90	物原	染付・椀	①(10.1)②4.0③4.4	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	92002797
7	図90	物原	染付・椀	①(10.0)②3.8③5.1	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	92002796
8	図90	物原	染付・椀	①(9.6)②(3.6)③5.6	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	92002795
9	図90	物原	染付・椀	①(10.2)②3.8③5.2	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	92002793
10	図90	物原	染付・椀	①(10.3)②3.9③6.1	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	92002794
11	図90	物原	染付・椀	①10.6②5.2③6.2	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	92002791
12	図90	物原	染付・椀	①(11.2)②4.0③4.7	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	93001363
13	図90	物原	染付・鉢	②7.9	素地・釉調：灰白色・呉須：淡青色	94005101
14	図90	物原	染付・皿	①(10.8)②(6.7)③2.5	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	92002717
15	図90	物原	染付・皿	①(10.4)②(6.5)③2.7	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	92002718
16	図91	物原	染付・皿	①(13.8)②8.4③3.7	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	92004575
17	図91	物原	染付・皿	①(13.0)②7.9③3.3	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	93001479
18	図91	物原	染付・皿	①12.6②8.0③3.4	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	92002715
19	図91	物原	染付・皿	①(13.6)②7.6③3.0	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	92002716
20	図91	物原	染付・皿	①(13.4)②(8.2)③3.6	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	92002798
21	図91	物原	染付・皿	①(13.4)②(8.3)③3.8	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	92002720
22	図91	物原	染付・皿	①(12.5)②8.0③3.3	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	92002799
23	図91	物原	染付・皿	①(14.1)②8.0③3.9	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	92002800
24	図91	物原	染付・皿	①(14.2)②(8.9)③3.7	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	92002719
25	図92	物原	染付・皿	①12.6②8.0③3.2	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	92004573
26	図92	物原	染付・皿	①12.8②8.3③2.8	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	93001480
27	図92	物原	染付・皿	①(12.4)②7.1③3.0	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	92004574
28	図92	物原	染付・皿	①13.9②9.1③4.0	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	94001361
29	図92	物原	染付・皿	①12.8②8.0③2.9	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	94001362
30	図92	物原	染付・皿	①(13.8)②8.0③3.4	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	93001366
31	図92	物原	染付・皿	①(19.0)②(10.2)③3.3	素地・釉調：灰白色・呉須：コバルトブルー	94001364
32	図92	南斜面	染付・皿	②11.0	素地・釉調：灰白色・呉須：青色	94005102
33	図93	物原	窯道具	①5.6②3.7③1.5	褐色	93001494
34	図93	物原	窯道具	①6.9②4.4③1.4	明褐色	93001495
35	図93	物原	窯道具	①7.6②6.0③2.1	明褐色	93001496
36	図93	物原	窯道具	①12.2②4.1③2.0	明褐色	93001497
37	図93	物原	窯道具	①4.9②4.7③0.8	淡褐色	93001498
38	図93	物原	窯道具	①6.4②6.2③1.0	淡褐色	93001499
39	図93	物原	窯道具	①8.2②7.6③0.5	淡褐色	93002651
40	図93	物原	窯道具	①4.6②4.4③1.1	淡褐色（足部灰白色）	93002652
41	図93	物原	窯道具	①6.0②6.0③1.2	淡褐色（足部灰白色）	93002654
42	図93	物原	窯道具	①6.0②6.0③1.0	褐色（足部灰白色）	93002653
43	図93	物原	窯道具	①(6.7)②4.8③7.6	灰褐色	93001492
44	図93	物原	窯道具	①5.3②5.0③6.1	褐色～暗褐色	93001491
45	図93	物原	窯道具	①8.2②10.0③12.2	褐色	93002657
46	図93	物原	窯道具	①7.1②9.1③11.6	明褐色	93002656
47	図93	物原	窯道具	①(8.2)②(5.6)③10.3	褐色	93001493
48	図93	物原	窯道具	①9.4②9.5③7.2	褐色	93002655
49	図93	物原	窯道具	①12.3②12.9③10.2	明褐色	93002658
50	図93	物原	窯道具	①10.2②(12.1)③15.1	褐色	93002661
51	図93	物原	窯道具	①18.5②8.0③6.2	褐色	93001490
52	図93	物原	窯道具	①(32.3)②(9.1)③6.2	暗褐色	93002662

4．まとめ

皿山窯跡は、単独で築かれた磁器窯であった。胴木間（燃焼室）と焼成室6室からなる階段式連房状登窯1基と物原1箇所が確認され、窯体覆屋の柱穴と見られる小穴列や排水溝等が付随して検出された。窯体は全長25.0m、胴木間幅5.2m、胴木間奥行1.2m、焼成室の平均幅6.9m、焼成室の平均奥行3.6mで、傾斜は約8°である。

製品は型紙摺の中型皿を主として、蓋付椀、鉢等がある。また少量の銅版摺の製品があり、型紙摺の製品と溶着したものがあることから、型紙摺から銅版摺への過渡期にあたるものと考えられ、明治後期頃の年代が与えられる。また、型紙摺の意匠には明治年間頃に塩田町一帯で生産された製品に類似するものがある（塩田町歴史民俗資料館1991）。

これらの点から、『肥前陶磁史考』（中島1935）における以下の記述が注意される。

「**鳴瀬焼**　鳴瀬焼は明治十三年（五十六年前）の好景気に乗じ、前記田中民助、久保忠造及副島亀三等の組合にて六間登を築窯し、久間山の工人を雇用して、天草原料にて染附磁器を製造せしものである。種類は皿、鉢、食碗、小火鉢等にて年産額三千円位であった。中にも久間山の名工浦川軍六が、描きし龍虎画二尺鉢の如きは抜群の物といはれてゐる。又明治十八年東京上野五品共進会に出品して、副島亀三名義に賞牌を授かったのである。斯くて明治二十三年に至って廃窯した。」

「**片白**　片白も亦、同じ橘村にて五十余戸を有し、鳴瀬と上野との中間村落である。明治三十年（三十九年前）前記鳴瀬焼の工人なりし柿原久米吉此地に四間登を築窯し、天草原料を以て染附磁器の八寸刺身皿等を焼き、年額千五六百円を挙げたりしが、五年許りにして廃窯し、後年陶器にて貯金壺、火消壺、擂鉢等を製作せし者ありしも、今や全く廃滅に帰してゐる。」

この、明治30（1897）年に橘町片白の地に柿原久米吉が築いたという染付磁器の窯が、皿山窯跡そのものを指すことは、窯跡の位置や製品の技術的特徴、「片白陶釜」・「柿原」銘等から、まず疑いないものと思われる。

皿山窯跡（片白窯跡）の調査は、明治30年代前半に操業していた磁器染付窯の内容を明らかにしたものとして、肥前の近代窯業史に興味深い知見をもたらすものとなった。

引用文献（第2章で掲げたものは省略）

大橋 康二（1986）肥前古窯の変遷―焼成室規模よりみた―．佐賀県立九州陶磁文化館研究紀要，第1号，pp.61―89

塩田町歴史民俗資料館（1991）明治、大正、昭和、塩田のやきもの．

中島 浩気（1936）肥前陶磁史考．肥前陶磁史考刊行会（引用は1985年青潮社復刻版）

野田 伝（1975）橘町の甕窯について．私家版

第９章　東福寺遺跡

遺跡名：東福寺遺跡（略号ＴＦＧ）

所在地：佐賀県武雄市橘町大字片白字片白

第9章　東福寺遺跡

1．東福寺遺跡の概要

標高345ｍを最高峰とする杵島山は、佐賀県西部の武雄市と杵島郡北方町、白石町、有明町、藤津郡塩田町にまたがる南北に細長い山である。杵島山北西麓は武雄市橘町の鳴瀬、釈迦寺、片白、南片白、楢崎などの諸集落が旧街道沿いに並ぶ落ち着いた場所であった。

ここはまた、武雄盆地の東端にもあたり、杵島山から標高15～30ｍの複数の丘陵がこの盆地に向かって幾筋も派生し多くの後期群集墳が所在している。このうち楢崎には国史跡のおつぼ山神護石という我が国でも代表的な遺跡があり、また釈迦寺では昭和63（1988）年に青銅製鉈や細形銅剣、細形銅戈などが発見された釈迦寺遺跡など重要な遺跡が位置している。

当遺跡は、この武雄盆地に面する幅160ｍの丘陵先端部を中心に分布している。行政上では佐賀県武雄市橘町大字片白字片白に所在する。従来は円墳13基以上からなる後期群集墳としての東福寺古墳群と明治時代の皿山窯跡が知られていた。そして、今回の調査区内で事前に明確に確認されたのはそのうちの開口していた１基（ＳＴ014）と墳丘残骸が確認された１基（ＳＴ003）の２基の調査区南部の古墳だけであった。また、皿山窯跡は径２～３ｍにわたる小規模な磁器の集積が確認されたものの明確な窯体は不明であった。

このような事前の状況のもと、当遺跡は昭和62（1987）年の秋に伐採作業が実施された。この時点で、先の３遺構の他、新たに調査区北端部で径10ｍ程度の円形の高まりが確認され新たな古墳１基が判明した（ＳＴ002）。この古墳は南側に墳丘が伸びており、前方後円墳の可能性も考えられた。また、皿山窯跡も先の磁器集積の物原の北隣付近から窯壁片等が確認されたのでＳＴ003古墳とＳＴ014古墳の中間の辺りに窯跡の所在が想定されるに至った。そこで、これらの古墳は先ず墳丘測量を実施することにしたが、これ以外の広汎な範囲には明確な遺構は確認されなかったので10月下旬から、重機による表土剥ぎを行ない、その他の遺構検出に努めることになった。この結果、北東部から低墳丘の円墳１基（ＳＴ001）のほか、弥生時代の竪穴建物と思われる遺構が新たに確認された。昭和62（1987）年11月９日から、作業員による発掘を開始した。まず、北東部のＳＴ001･002の２基から調査を開始したが、002の南側の前方部状の高まりは後世の畑造成によるものとわかったものの、その下から横穴式石室を内部主体とする削平された円墳（ＳＴ013）と竪穴式石室の残骸（ＳＴ017）が発見された。また、北西端にも方墳（ＳＴ015）が検出された。昭和62年度は以上の遺構の調査を実施したが、当初の予想以上に遺構が確認され、調査期間が大幅に伸びる見込みとなった。そのため工事は、２月中旬から北東側より順次着手されることになり、当該年度はＳＴ014・015の２基を除いた東側の調査を３月30日に終了し、翌31日には工事によってこの部分まで掘削された。昭和63年度は４月初めより残りのＳＴ014･015の調査が実施されたが、その過程で終了していたＳＴ002古墳の床面下

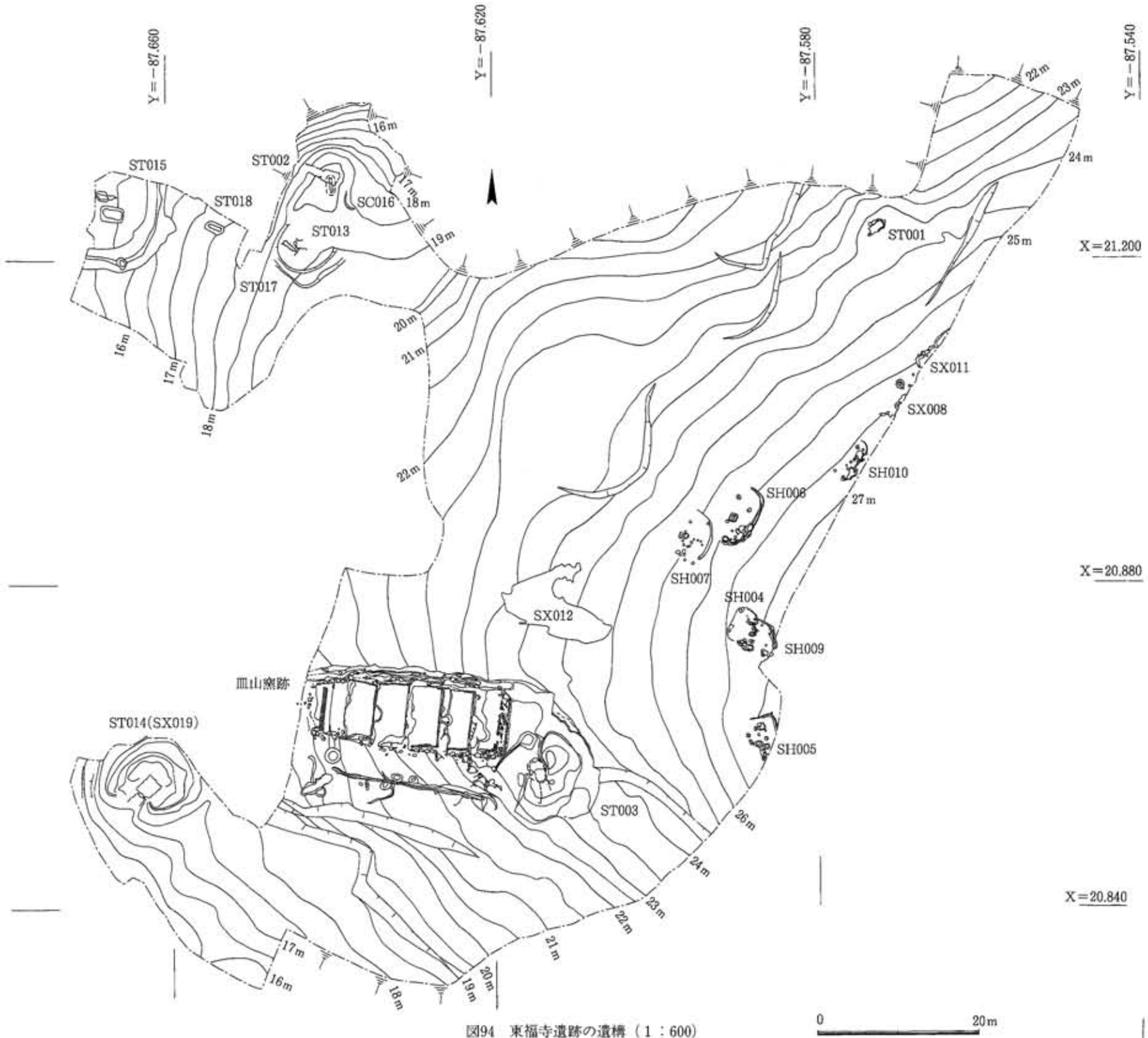


図94　東福寺遺跡の遺構（1：600）

より新たに石棺墓１基（ＳＣ016）が発見された。またＳＴ013のそばから竪穴式石室の残欠ＳＴ017が、ＳＴ015とＳＴ013の間から墳形不明の竪穴式石室（ＳＴ018）が確認され、引き続き調査が行われた。さらに、ＳＴ014古墳では、輸入磁器を伴う良好な中世の石室再利用墓も発見された。そして、昭和63（1988）年８月１日に全調査終了となった。調査対象面積は17,700㎡で、調査範囲は6,650㎡である。

以上によって確認された遺構は表７に示すとおりである。

遺構番号	種　　類	時　　代	備　　考
ＳＴ００１	古墳	古墳時代中期	円墳・竪穴系横口式石室
ＳＴ００２	古墳	古墳時代後期	円墳・葺石・横穴式石室
ＳＴ００３	古墳	古墳時代後期	円墳・葺石・横穴式石室
ＳＨ００４	竪穴建物	弥生時代中期	
ＳＨ００５	竪穴建物	弥生時代中期	
ＳＨ００６	竪穴建物	弥生時代中期	
ＳＨ００７	竪穴建物	弥生時代中期	
ＳＸ００８	不明遺構	弥生時代	
ＳＨ００９	竪穴建物	弥生時代中期	
ＳＨ０１０	竪穴建物	弥生時代中期	
ＳＸ０１１	不明遺構	弥生時代	
ＳＸ０１２	不明遺構	弥生時代	
ＳＴ０１３	古墳	古墳時代後期	円墳・横穴式石室
ＳＴ０１４	古墳	古墳時代後期	円墳・葺石・横穴式石室・線刻文様
ＳＴ０１５	古墳	古墳時代前期	方墳・粘土槨割竹形木棺・箱形木棺
ＳＣ０１６	石棺墓	古墳時代？	人骨２体
ＳＴ０１７	古墳	古墳時代前期	墳形不明・竪穴式石室？
ＳＴ０１８	古墳	古墳時代前期	墳形不明・竪穴式石室
ＳＸ０１９	石室再利用墓	中世	人骨３体

表７　東福寺遺跡遺構一覧

2．弥生時代の遺構と遺物

東福寺遺跡の調査区のうち、標高の高い東側部分に集中して弥生時代の竪穴建物６棟が検出された。いずれも削平を受けて遺存状況が悪く、平面形の全体を把握できるものはなかった。埋土は分層ができず、重複するものも新旧関係は不明であった。出土土器はほぼ中期に限られ、比較的短期間の集落と思われる。この他、調査時に弥生時代の遺構としてＳＸ008・ＳＸ011・ＳＸ012の３箇所が注意されていたが、出土遺物も少なく性格も特定できないため割愛した。

ＳＨ004・ＳＨ009（図95）

竪穴建物群の南寄りの部分に２棟重複して位置する。新旧関係はやや不明瞭ながら、現場での所見によるとＳＨ009の方が新しいと判断されている。ＳＨ004としたのは西側の部分で、長軸4.0ｍ以上、短軸2.6ｍ以上の隅丸長方形ないし小判形ではないかと推定される。現存壁高は0.05ｍで、柱穴その他の内部施設は不明である。ＳＨ009としたのは東側の部分で、径4.4ｍ以上の円形と推定される。現存壁高は0.15ｍで、壁際には深さ0.05ｍの溝が巡る。内部には小穴が数基あるが、主柱穴は特定できなかった。遺物はＳＨ004・ＳＨ009を覆う埋土から弥生土器若干が出土しており、どの土器がどちらの竪穴建物に属するものであるか分離できなかった。

ＳＨ004・ＳＨ009出土遺物（図95）

１～３は甕の口縁部で、断面がＬ字形を成す。４～８は甕の底部で、厚みのない平底である。９は脚台状の甕ないし鉢の底部である。いずれの土器も器面が風化しており、調整等は観察できない。

ＳＨ005（図96）

竪穴建物群のうち、もっとも南に位置する遺構である。西側は削平により失われており、南側は調査区外に続く。平面形は北東隅の角が遺存することから方形ないし長方形と思われ、南北方向の長さ5.4ｍ以上、東西方向の長さ4.1ｍ以上、現存壁高は0.35ｍである。壁際に幅0.2～0.3ｍ、深さ0.05ｍの溝が巡る。内部には炉跡の可能性がある深さ0.2ｍほどの土坑や小穴がある。主柱穴は特定できなかった。

ＳＨ005出土遺物（図96）

10～12は甕の口縁部で、断面はＬ字形を成し、10は口縁下に１条の突帯を巡らせる。13は短く外反する口縁部で、器種は鉢か。14は高杯の口縁部で、鋤形を成し内面側に短く突出する。15・16は中型甕の平底の底部である。

ＳＨ006・ＳＨ007（図97）

竪穴建物群の中央に位置する。重複するが、新旧関係は不明瞭である。どちらも平面円形で、西側は大きく削平されており、東側半分のみが遺存する。ＳＨ006は、径約８ｍ、現存壁高0.2ｍで、壁際に幅0.3ｍ程、深さ0.05ｍの溝が巡る。ほぼ中央部分に焼土を伴う長軸1.3ｍ、短軸1.1ｍ、深さ0.2ｍの土坑があり、炉跡と考えられる。その他に小穴数基があるが、主柱穴は特

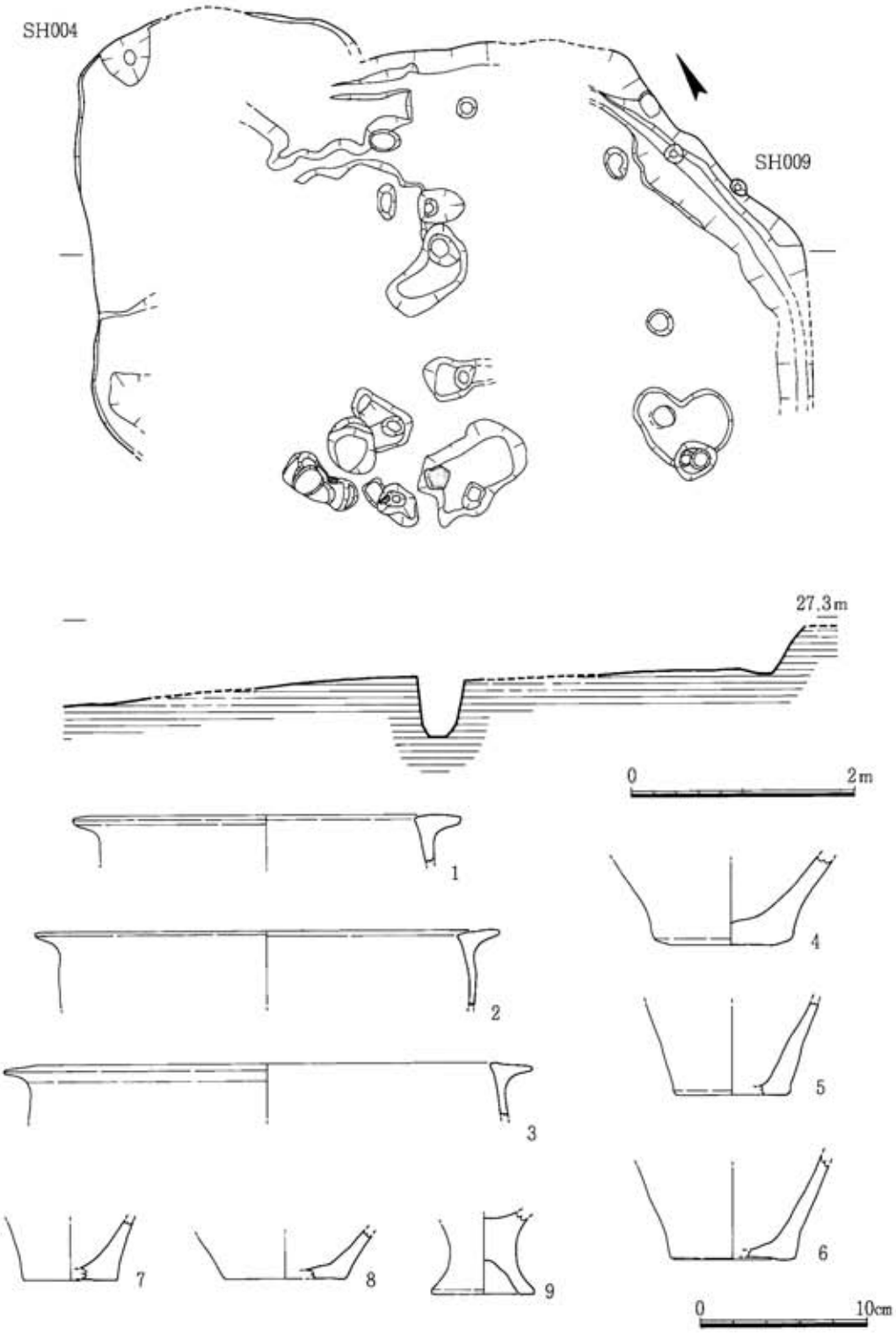


図95　ＳＨ004・ＳＨ009（１：60），出土土器（１：４）

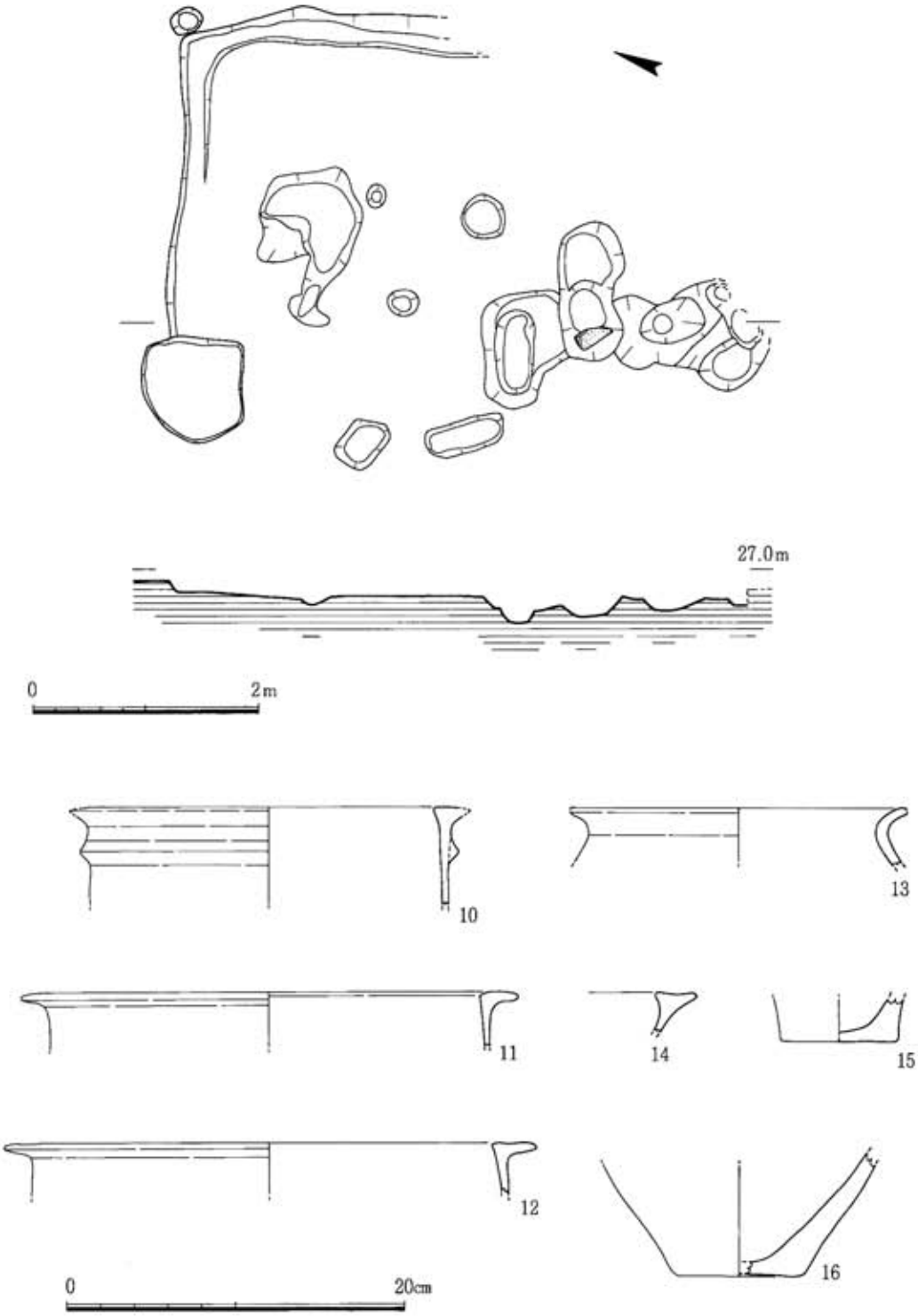


図96　ＳＨ005（１：60），出土土器（１：４）

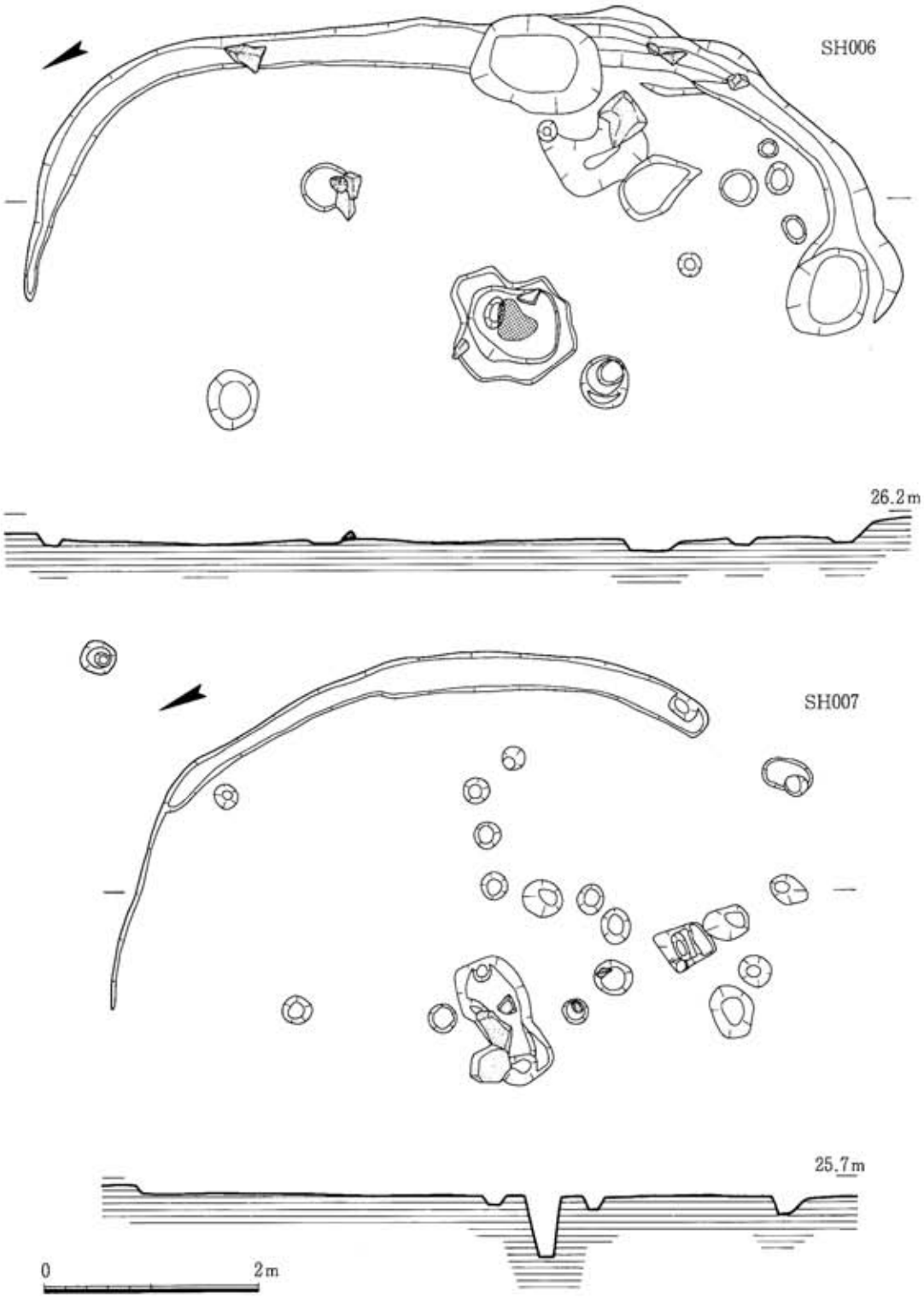


図97　ＳＨ006・ＳＨ007（１：60）

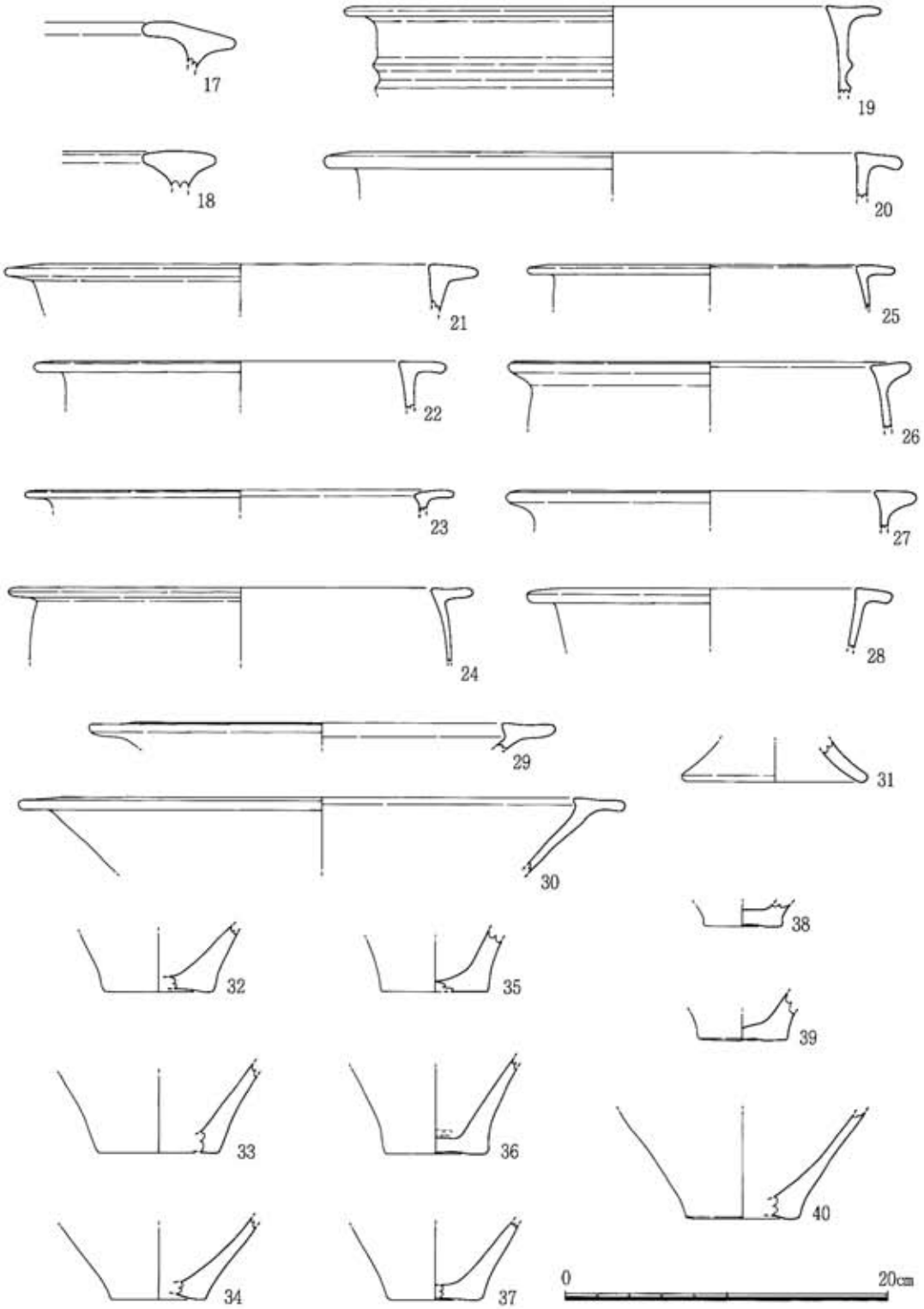


図98　ＳＨ006・ＳＨ007出土土器（１：４）

定できなかった。ＳＨ007は、径７ｍ以上、現存壁高0.1ｍで、壁際に幅0.2～0.3ｍ程、深さ0.05ｍの溝が巡る。ほぼ中央部分に長軸1.2ｍ、短軸0.6ｍ、深さ0.2ｍの土坑があり、炉跡の可能性があるが、焼土等は伴っていない。内部にはその他に小穴数基があるが、主柱穴は特定できなかった。遺物はＳＨ006・ＳＨ007を覆う埋土から弥生土器が出土しているが、明確に両者への帰属を分離できなかった。

ＳＨ006・ＳＨ007出土遺物（図98）

17・18は断面Ｔ字形を示す大型の甕の口縁部で、通常は大型土器棺墓の棺体として用いられることが多いものである。19～27は断面Ｌ字形を示す中型甕の口縁部で、19は口縁下に連続する２条の突帯を巡らせる。28は小型の甕か鉢の口縁部である。29・30は高杯の鋤形口縁部で、内側にやや突出する。31は高杯の底部と思われる。32～40は中型甕の底部と思われ、いずれも厚みのない平底である。

ＳＨ010（図99）

竪穴建物群の北端に位置する。遺存状況が悪く平面形は不明であるが、隅丸の方形ないし長方形ではないかと思われる。規模は少なくとも5.7ｍ×1.6ｍ以上、現存壁高0.15ｍである。内部には小穴数基があるが、主柱穴は特定できなかった。埋土中から弥生土器若干が出土した。

ＳＨ010出土遺物（図99）

41～48は中型甕の口縁部で、41・43は鋤形を示すが、他はＬ字形である。49～56は中型甕の底部と思われ、全て厚みのない平底である。

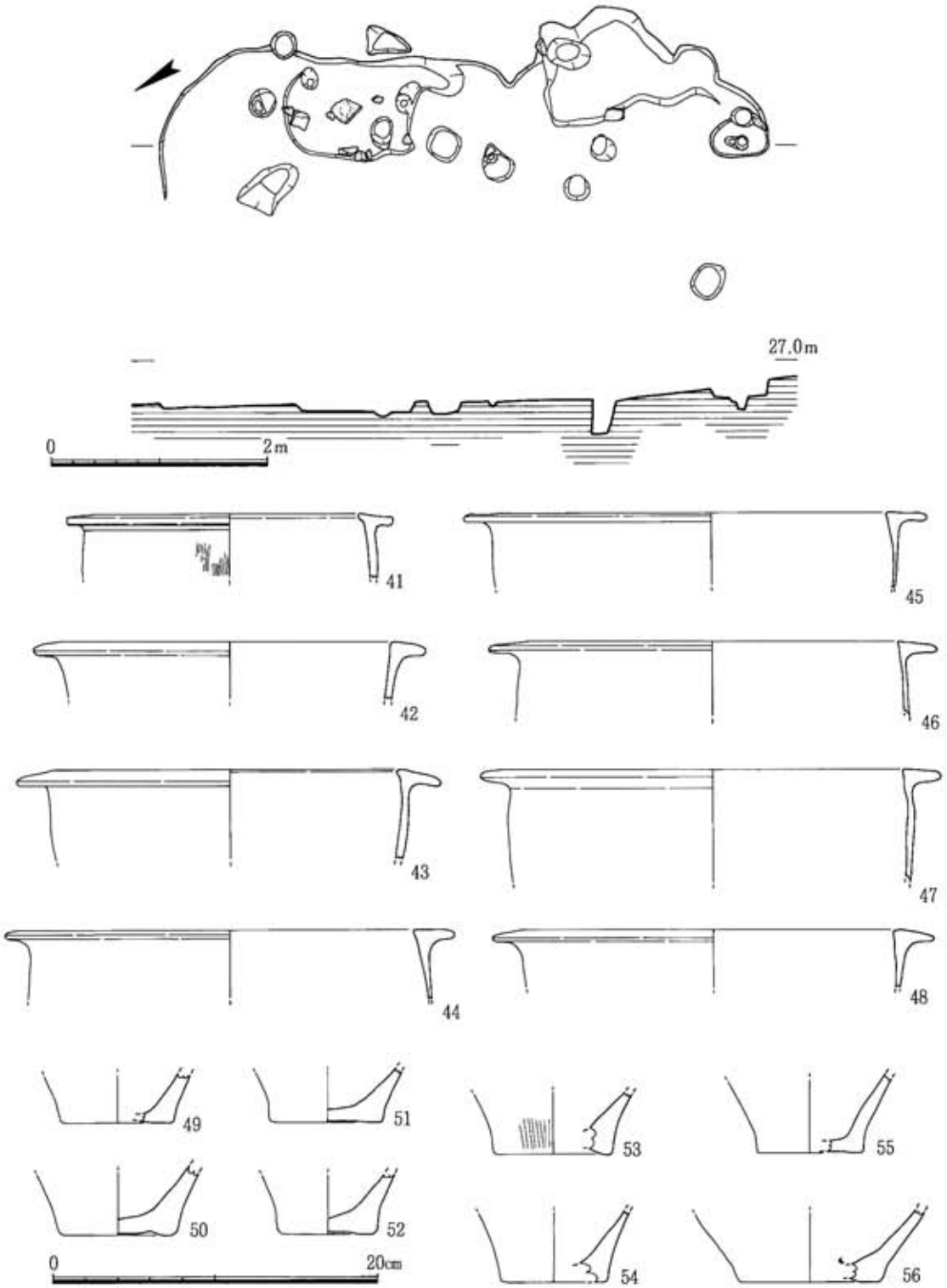


図99　SH010（1：60），出土土器（1：4）

表8　東福寺遺跡弥生時代遺物一覧　　法量の単位はcm，（　）は復元値

遺物番号	挿図番号	出土遺構	遺物の種類	法量 ①口径・上部径②底径・下部径③器高	色調	登録番号
1	図95	S H004・009	弥生土器・甕	①(23.5)	明褐色	92003238
2	図95	S H004・009	弥生土器・甕	①(27.6)	褐色	92003239
3	図95	S H004・009	弥生土器・甕	①(32.0)	明褐色	92003235
4	図95	S H004・009	弥生土器・甕	②(6.1)	明褐色	92003247
5	図95	S H004・009	弥生土器・甕	②(6.6)	外：赤褐色・内：暗褐色	92003249
6	図95	S H004・009	弥生土器・甕	②(6.8)	赤褐色	92003248
7	図95	S H004・009	弥生土器・甕	②(5.6)	外：明褐色・内：暗褐色	92003552
8	図95	S H004・009	弥生土器・甕	②(7.1)	外：赤褐色・内：褐色	92003250
9	図95	S H004・009	弥生土器・甕	②(6.1)	褐色	92003553
10	図96	S H005	弥生土器・甕		明褐色	93001394
11	図96	S H005	弥生土器・甕	①(29.6)	褐色	93001392
12	図96	S H005	弥生土器・甕	①(31.8)	褐色	93001393
13	図96	S H005	弥生土器・甕		明褐色	93001397
14	図96	S H005	弥生土器・高杯		明褐色	93001398
15	図96	S H005	弥生土器・甕	②(7.0)	明褐色	93001400
16	図96	S H005	弥生土器・甕	②(7.8)	明褐色	93001399
17	図98	S H006・007	弥生土器・甕		明褐色	93001435
18	図98	S H006・007	弥生土器・甕		褐色	93001436
19	図98	S H006・007	弥生土器・甕	①(33.3)	明褐色	93001408
20	図98	S H006・007	弥生土器・甕	①(35.8)	明褐色	93001413
21	図98	S H006・007	弥生土器・甕	①(29.1)	明褐色	93001412
22	図98	S H006・007	弥生土器・甕	①(25.4)	明褐色	93001410
23	図98	S H006・007	弥生土器・甕	①(26.4)	明褐色	93001411
24	図98	S H006・007	弥生土器・甕	①(28.6)	明褐色	93001407
25	図98	S H006・007	弥生土器・甕	①(22.8)	明褐色	93001415
26	図98	S H006・007	弥生土器・甕	①(25.0)	褐色	93001409
27	図98	S H006・007	弥生土器・甕	①(25.4)	褐色	93001414
28	図98	S H006・007	弥生土器・甕	①(22.5)	褐色	93001401
29	図98	S H006・007	弥生土器・高杯	①(28.6)	明褐色	93001438
30	図98	S H006・007	弥生土器・高杯	①(37.4)	明褐色	93001437
31	図98	S H006・007	弥生土器・高杯	②(11.1)	褐色	93001406
32	図98	S H006・007	弥生土器・甕	②(6.6)	外：明褐色・内：黒色	93001430
33	図98	S H006・007	弥生土器・甕	②(7.2)	外：褐色・内：黒色	93001431
34	図98	S H006・007	弥生土器・甕	②(5.8)	外：褐色・内：黒色	93001432
35	図98	S H006・007	弥生土器・甕	②(6.4)	外：褐色・内：黒褐色	93001428
36	図98	S H006・007	弥生土器・甕	②6.0	外：赤褐色・内：褐色	93001427
37	図98	S H006・007	弥生土器・甕	②(5.8)	褐色	93001429
38	図98	S H006・007	弥生土器・甕	②(4.8)	明褐色	93001403
39	図98	S H006・007	弥生土器・甕	②(5.6)	明褐色	93001404
40	図98	S H006・007	弥生土器・甕	②(7.0)	外：褐色・内：黒褐色	93001433
41	図99	S H010	弥生土器・甕	①(20.2)	外：黒褐色・内：明褐色	92003218
42	図99	S H010	弥生土器・甕	①(24.4)	褐色	92003150
43	図99	S H010	弥生土器・甕	①(26.3)	明褐色	92003141
44	図99	S H010	弥生土器・甕	①(27.7)	褐色	92003146
45	図99	S H010	弥生土器・甕	①(27.0)	明褐色	92003143
46	図99	S H010	弥生土器・甕	①(28.1)	明褐色	92003144
47	図99	S H010	弥生土器・甕	①(29.0)	明褐色	92003140
48	図99	S H010	弥生土器・甕	①(27.7)	明褐色	92003145
49	図99	S H010	弥生土器・甕	②(6.5)	外：赤褐色・内：黒褐色	92003224
50	図99	S H010	弥生土器・甕	②(6.6)	外：赤褐色・内：黒褐色	92003220
51	図99	S H010	弥生土器・甕	②6.5	外：赤褐色・内：明褐色	92003219
52	図99	S H010	弥生土器・甕	②(5.5)	外：褐色・内：明褐色	92003225
53	図99	S H010	弥生土器・甕	②(7.0)	明褐色	92003231
54	図99	S H010	弥生土器・甕	②(5.7)	外：暗褐色・内：黒褐色	92003226
55	図99	S H010	弥生土器・甕	②(6.4)	褐色	92003223
56	図99	S H010	弥生土器・甕	②(8.7)	明褐色	92003227

3．中世の遺構と遺物

ＳＸ019と出土遺物（図100・101）

ＳＴ014の石室を埋葬空間として再利用した中世墓で、約３体分の人骨と白磁椀３個体・青磁椀２個体・瓦器椀１個体・土師器杯16個体・土師器小皿１個体が、やや雑然と散らばる拳大～人頭大の礫と共に遺されていた。埋葬人骨は、現地調査時の松下孝幸氏からの御教示によれば成人２体と子供１体分で、火葬ではないとのことである。人骨・副葬品・礫の下面には焼土や炭化物がやや広い範囲で認められ、何らかの儀礼的行為に伴うものかと思われる。副葬品の遺存状態は、完形品と破片となって数箇所にちらばるものとがあり、破片で出土したものも多くは完形に近い状態まで復元できた。副葬品とみられる遺物は玄室内の他に羨道部からも若干出土しており、60の青磁椀は玄室内と羨道部から別々に出土した破片が接合した。この場合、埋葬の後に破損・移動したものなのか、埋葬儀礼や追善供養に伴って意図的に割られたものなのかは明らかでない。

57・58は白磁椀Ⅳ－１ａ類、59は白磁椀Ⅴ－４ａ類で、すべて完形である。60は龍泉窯系青磁椀Ⅰ－１類、61は同安窯系青磁椀Ⅰ－１ｂ類で底部を欠失する。62は高台の退化した瓦器椀である。器面は摩耗するが、外面はかなり間隔のあるヘラミガキを、内面はやや丁寧なヘラミガキを施すようである。63は底部回転糸切り離しの土師器小皿で、復元口径9.1cm、器高1.8cm、底径6.4cmである。64～78は土師器杯で、確認できるものはすべて底部回転糸切り離しである。形態と法量から64～68（Ａ群）と69～78（Ｂ群）とに大きく分離できる。Ａ群は、口径13.4～14.2cm、器高3.4～3.9cm、底径8.0～9.2cmで、器高が高く底径がやや小さい。器壁はやや薄手で、外面はヨコナデによる凹凸が顕著である。底部と体部の境は鋭く、体部は直線的に立ち上がる。Ｂ群は、口径14.5～16.4cm、器高2.8～3.4cm、底径9.0～11.4cmで、口径が大きく器高は３cm前後と低い。器壁は全体に厚手で、部位によって不均一である。底部と体部の境はやや不明瞭で、体部は内湾気味に立ち上がる。

武雄盆地において土師器杯Ａ群と法量・形態等が類似する資料としては、小野原遺跡Ａ区ＳＤ032（本書第５章）や下貝原遺跡ＳＫ105（武雄市教委1988）があり、暦年代に関しては大宰府や佐賀平野との対比から14世紀前半～中頃と想定している。土師器杯Ｂ群は複数の型式を含む可能性が強いが、全体としては小野原遺跡Ａ区ＳＸ009（本書第５章）、Ｂ区ＳＤ001（本書第６章）や茂手遺跡ＳＫ301・ＳＫ303（武雄市教委1986）等に対比できる。おおむね12世紀後半から13世紀前半の所産であろう。武雄盆地の中世土器編年が確立していない現状での所見ではあるが、土師器杯の示す年代に半世紀以上の空白があることは注意される。土師器小皿については、１点のみであるため不確実であるが器高の高さや形態からＡ群に伴う可能性が強い。瓦器椀については、小野原Ａ区ＳＸ009やみやこＢ区ＳＤ001に共伴する型式と比較すると、高台の退化やヘラミガキの粗略化等の点で明らかに後出の様相を示している。今のところ武雄盆地

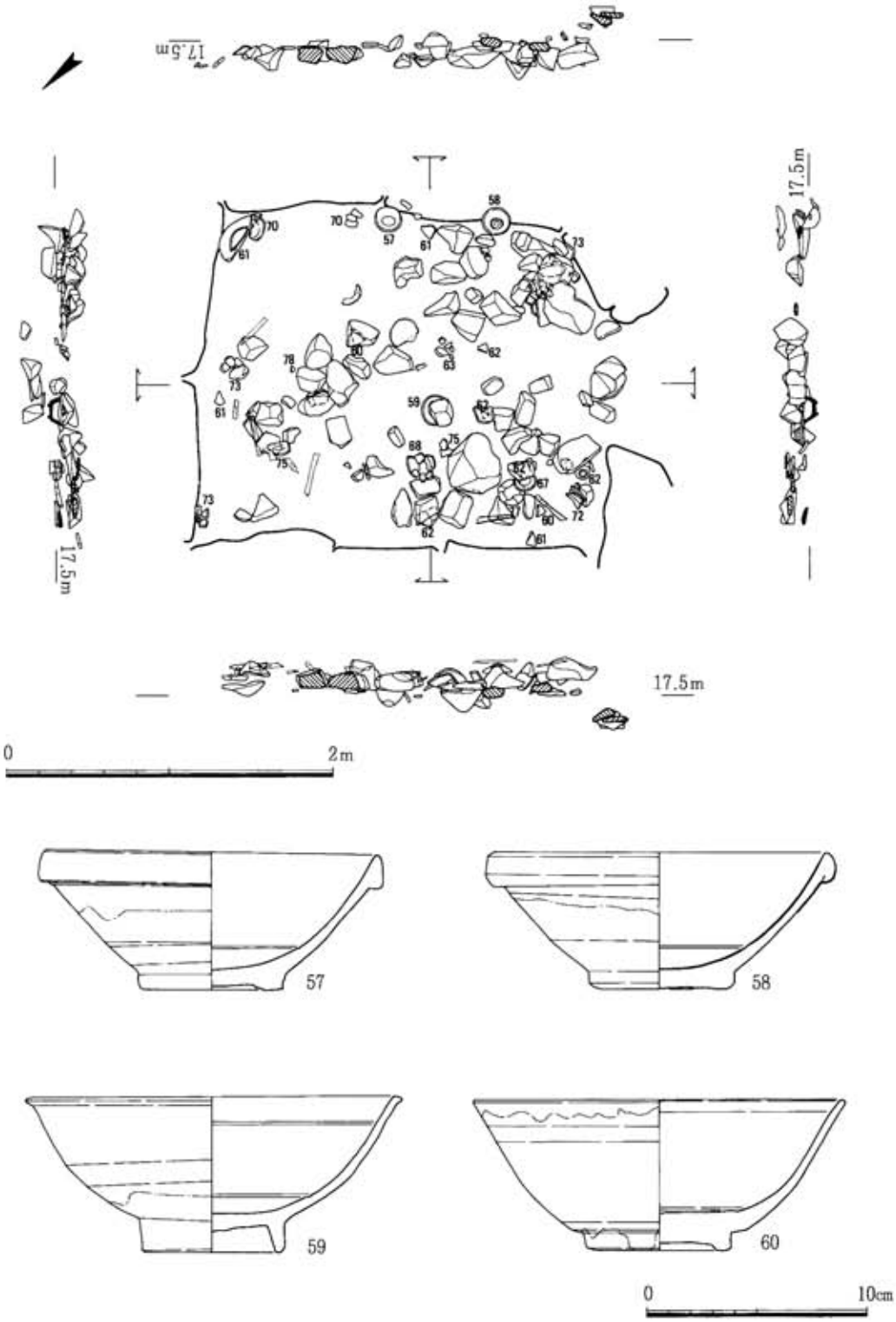


図100　ＳＸ019（１：40），出土遺物１（１：３）

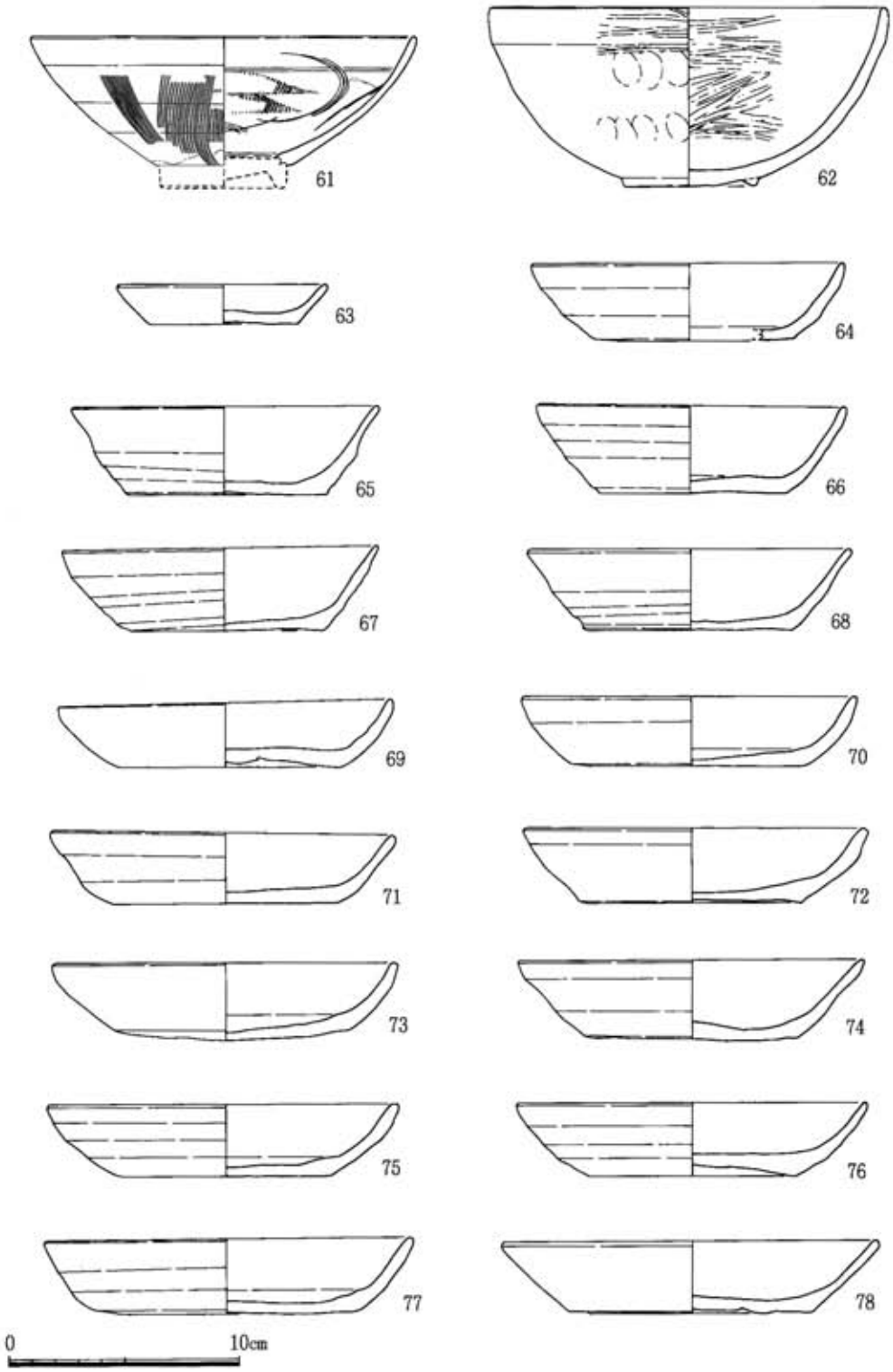


図101　ＳＸ019出土遺物２（１：３）

においては13世紀後半以降の瓦器椀は、その存在も含めて不明であるので、ＳＸ019出土資料が土師器杯Ａ群に伴う14世紀前半～中頃段階のものなのか、土師器杯Ａ群とＢ群の隙間を埋める段階のものなのかは解らない。佐賀平野においては14世紀代に瓦器椀が残存することが明らかになりつつあるので、当該資料についても土師器杯Ａ群に伴う可能性は十分考慮すべきである。白磁・青磁については、土師器杯Ａ群に伴うものと考えられる。

ＳＸ019中世墓造営の背景を考える場合、東福寺の谷地を背後に控えるという遺跡の位置が重要な鍵となる。元々「東福寺」の名は、現在は草庵となった寺院の名称で、文書史料では鎌倉中期の建長二（1250）年七月七日関東裁許状案（橘中村文書３号）が初見である。この史料によると東福寺住僧良慶と地頭橘薩摩公義とが東福寺院主職をめぐって相論しているのであり、服部英雄（1979）が指摘するように、東福寺の寺田や谷からの用水が争奪の対象となったものと考えられる。その後、南北朝期の貞和六（1350）年六月廿日橘薩摩公世軍忠状（橘中村文書35号）では橘薩摩氏の惣領家が「東福寺」姓を名乗っており、戦国期の文明十四（1482）年十二月三日田地屋敷坪付（橘中村文書73号）にも「一所東福寺」として「一丈ほりまち、三反てら田、東福寺　一反あかこのしま、二反めうけんめん」が挙げられていることから、鎌倉中期から南北朝期までの間に、橘薩摩氏が東福寺谷一帯の勧農権や水利権を実力で奪い取ったことが解る。東福寺遺跡の今次調査区は東福寺谷の入り口にあたり、この地に墓所を選定するという行為は、東福寺谷を己が勢力下に置くという意図と無関係ではありえない。先に副葬品の年代観から推測した鎌倉中期頃における墓地利用の空白期間は、当地において在来の開発領主系勢力から新興の地頭系勢力へ転換する過程を意味するものであろう。

表９　東福寺遺跡ＳＸ019出土遺物一覧　　法量の単位はcm、（　）は復元値

遺物番号	挿図番号	取上番号	遺物の種類	法量 ①口径②底径③器高	色調	登録番号
57	図100	No. 2	白磁・椀	①15.7②6.3③6.4	素地：暗灰色・釉調：青白色	93001476
58	図100	No. 3	白磁・椀	①15.8②6.5③6.2	素地：淡黄白色・釉調：淡緑白色	93001477
59	図100	No. 1	白磁・椀	①17.2②6.4③7.1	素地：淡黄灰白色・釉調：淡緑白色	93001475
60	図100	No.6・26・羨道部	青磁・椀	①(16.7)②6.6③6.8	素地：褐色・釉調：黄灰オリーブ色	92003183
61	図101	No.7・14・18・20	青磁・椀	①16.7	素地：灰色・釉調：灰オリーブ色	92003182
62	図101	No.10・27・28・31・35	瓦器・椀	①(17.4)②5.9③7.3	黒灰色・白灰色	92003181
63	図101	No.11	土師器・小皿糸切	①(9.1)②6.4③1.8	明褐色	91000667
64	図101	石室内埋土	土師器・杯	①(13.7)②8.7③3.4	黄灰色	91000699
65	図101	ＳＸ019	土師器・杯糸切	①(13.4)②8.6③3.9	明褐色	91000674
66	図101	ＳＸ019	土師器・杯糸切	①(13.5)②8.0③3.9	明褐色	91000673
67	図101	No. 4	土師器・杯糸切	①13.8②8.3③3.7	明褐色	91000664
68	図101	No. 9	土師器・杯糸切	①(14.2)②9.2③3.6	明褐色	91000666
69	図101	羨道部	土師器・杯	①14.5②9.1③2.8	明褐色	91000697
70	図101	No.16・17	土師器・杯糸切	①14.6②10.3③3.1	明褐色	91000669
71	図101	No.12	土師器・杯糸切	①14.9②9.7③3.1	明褐色	91000668
72	図101	No. 5	土師器・杯糸切	①15.0②9.8③3.3	明褐色	91000665
73	図101	No.19・23	土師器・杯糸切	①15.0②10.1③3.4	明褐色	91000670
74	図101	羨道部	土師器・杯糸切	①(15.1)②9.3③3.4	明褐色	91000698
75	図101	No. 8・22	土師器・杯糸切	①(15.2)②9.0③3.2	明褐色	91002626
76	図101	ＳＸ019	土師器・杯	①(15.3)②9.0③3.2	明褐色	91000675
77	図101	No.29	土師器・杯糸切	①15.9②11.4③3.3	明褐色	91000672
78	図101	No.25	土師器・杯糸切	①(16.4)②10.1③3.2	明褐色	91000671

4．古墳時代の遺構と遺物

(1) 遺構

古墳時代の遺構は、表10に整理したように方墳１基、円墳５基と墳形不明の竪穴式石室２基、石棺墓１基の９遺構である。

なお、かつてＳＴ018古墳として紹介した調査区外の前方後円墳は（近藤　1992)、今回あらためて整理したところＳＴ022と遺構番号を変更することにした（５．まとめ 参照)。

表10　古墳一覧表　　（　　）は残存値

遺構番号	墳丘	規模m	内部主体	方位	全長m	玄室規模 長さ×巾×高さ	備考
ＳＴ001	円	8	竪穴系横口式石室	S50°E	(336)	186×90×(68)	石室半壊
ＳＴ002	円	9	横穴式石室	N71°E	432	196×前128×奥174×(80)	石障あり
ＳＴ003	円	9	横穴式石室	S16°E	(440)	(220)×前110×奥—×(70)	石室半壊
ＳＴ013	円	6.5	横穴式石室	N84°E		(186)×100×(110)	石室半壊
ＳＴ014	円	12.4	横穴式石室	S42°E	520	240×200×(272)	
遺構番号	**墳丘**	**規模**	**内部主体**	**方位**	**墓壙規模 長さ×巾**	**棺規模 長さ×巾×高さ**	**備考**
ＳＴ015	方	14	粘土槨・割竹木棺	S79°E	(300)×(156)	(260)×(60)	
			箱式木棺	S81°E	238×112	184×52	
ＳＴ017	不明		竪穴式石室？	N52°E	300×194	194×34～40	
ＳＴ018	不明		竪穴式石室	S76°E	240×143	163×47×(30)	
ＳＣ016	不明		箱式石棺	N 6°E	206×54	178×頭位34×足位22×20	

ＳＴ001古墳（写真図版58・59）

概要

調査区の北東部に位置し、当遺跡の古墳群では北西部のＳＴ002古墳とともに北端にあたる。南東に弥生時代の住居跡が確認されたが、そのほかに近接する遺構はない。

墳丘・周溝

墳丘は削平が甚だしく、当初は古墳の存在は予想されなかったが、重機による表土剥ぎにより確認された。墳丘の斜面上側（南西～東側）に浅い周溝、下側（北西～北側）に薄い盛土が確認されたが、墳丘の旧状を正確に復元することは困難である。現状では、径約８ｍの円墳と推定される。墳丘の残存高は北側および西側で約1.2ｍである。周溝は幅0.8～2.0ｍ、深さ0.01ｍと残りが非常に悪い。

内部主体

南東に開口する竪穴系横口式石室である。主軸方位はＳ50°Ｗである。

現状の墓壙は墓道を含んで4.04ｍ×2.16ｍ、深さ0.94ｍの規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。これに腰石を設置するために0.1ｍ程度さらに掘込んでいる。また、墓道は長さ2.0ｍ、幅1.6ｍである。玄室は長さ1.86ｍ、前幅0.9ｍ、奥幅0.94ｍを測り、ほぼ長方形の平面形を呈する。天井石は破壊されており、側壁の残存高は0.68ｍである。床面は向かって左側が0.4ｍの幅で高くなっており、一種の屍床状の段を作っている。この床は径2.0cm程の安山岩を敷いて作られている。屍床部分を除去した面も、石の大きさはやや不揃いではあるが、床面状を呈している。さらに、この面を除去した段階で奥壁左隅のみに偏平な石が敷いてあった。仮にこれらの床面を１・２・３面とすると、第２面上に遺物小片が検出されたため、第２面が１次床、３面が２次床面との解釈も可能である。両側壁は最下段に幅0.3～0.7ｍ、高さ0.4～0.5ｍ程度の比較的偏平な石を腰石として３石ずつ用い、それより上位には幅0.2～0.8ｍ、高さ0.1～0.2ｍ程度の石を平積みする。奥壁は、最下段に高さ0.7ｍ程度の偏平な石を１石立て、その上に側壁と同程度の規模の石を平積みする。玄門部は玄門立石はなく、0.96ｍ×0.34ｍの石を置き框石とする。框石の前面が玄室床面より約0.4ｍ高くなり、いわゆる段構造をなす。前庭側壁は明確でないが前方から向かって右側に２石残存しており、破壊された左側を含め元来は両側に存在していたと考えられる。

遺物の出土状況

石室内から、鉄鏃２と兵庫鎖の破片かと思われる鉄片１および土器小片が２次床面上を中心に出土した。墳丘・周溝からも弥生土器片はあったが時期判断の資料となるものは出土しなかった。

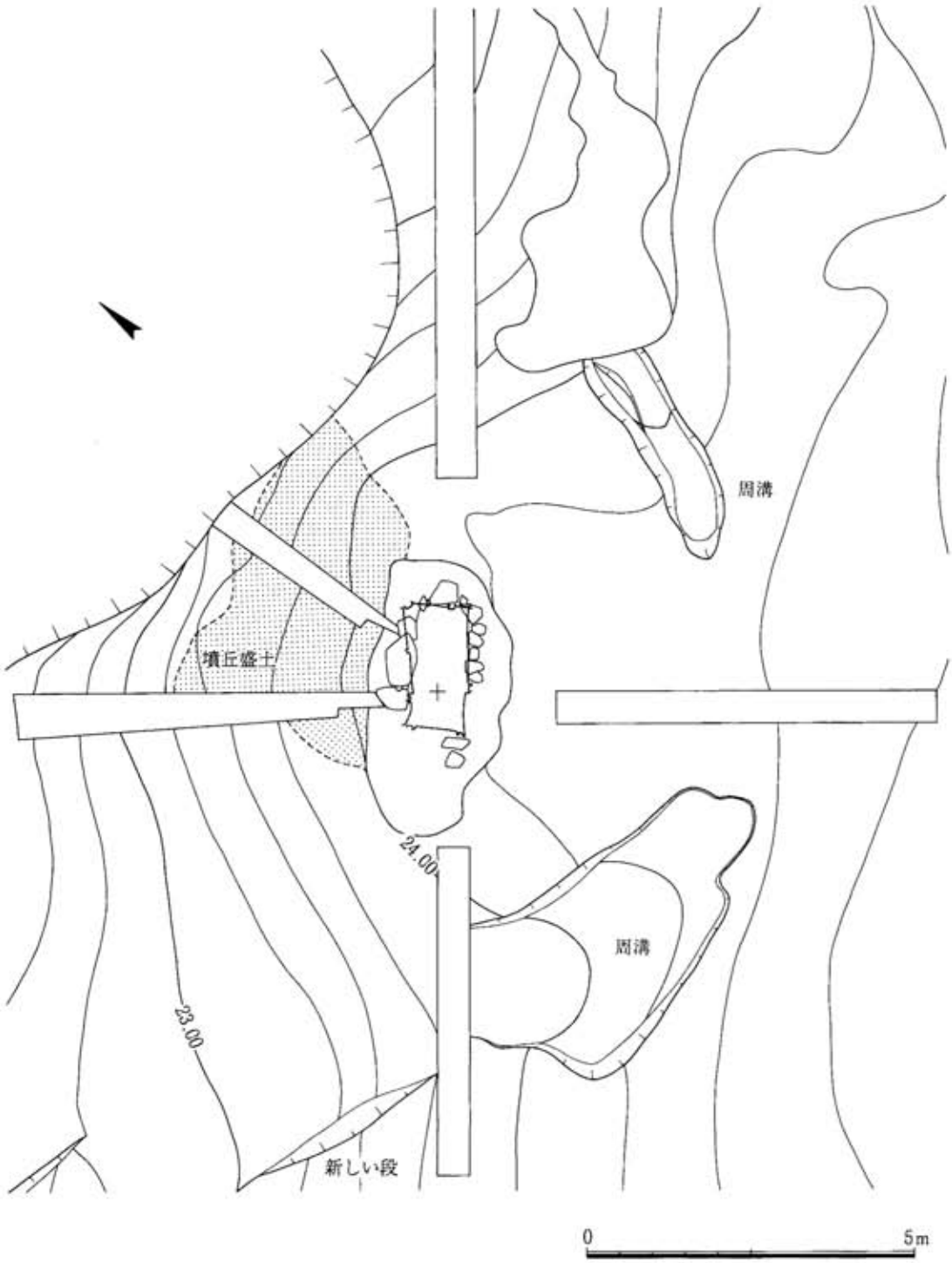


図102　ＳＴ001古墳墳丘測量図（１／100）

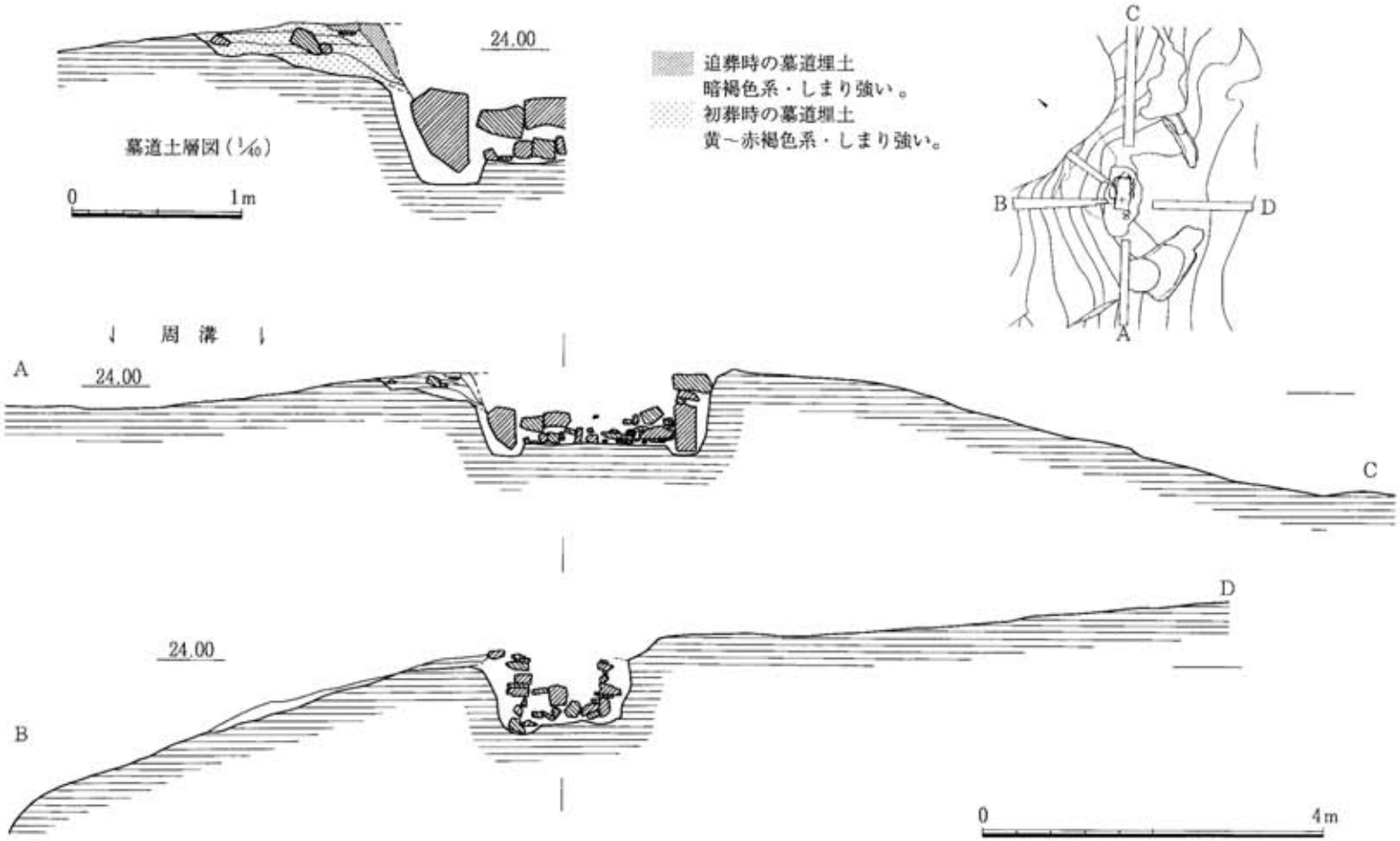


図103　ＳＴ001古墳墳丘土層図（１／80）

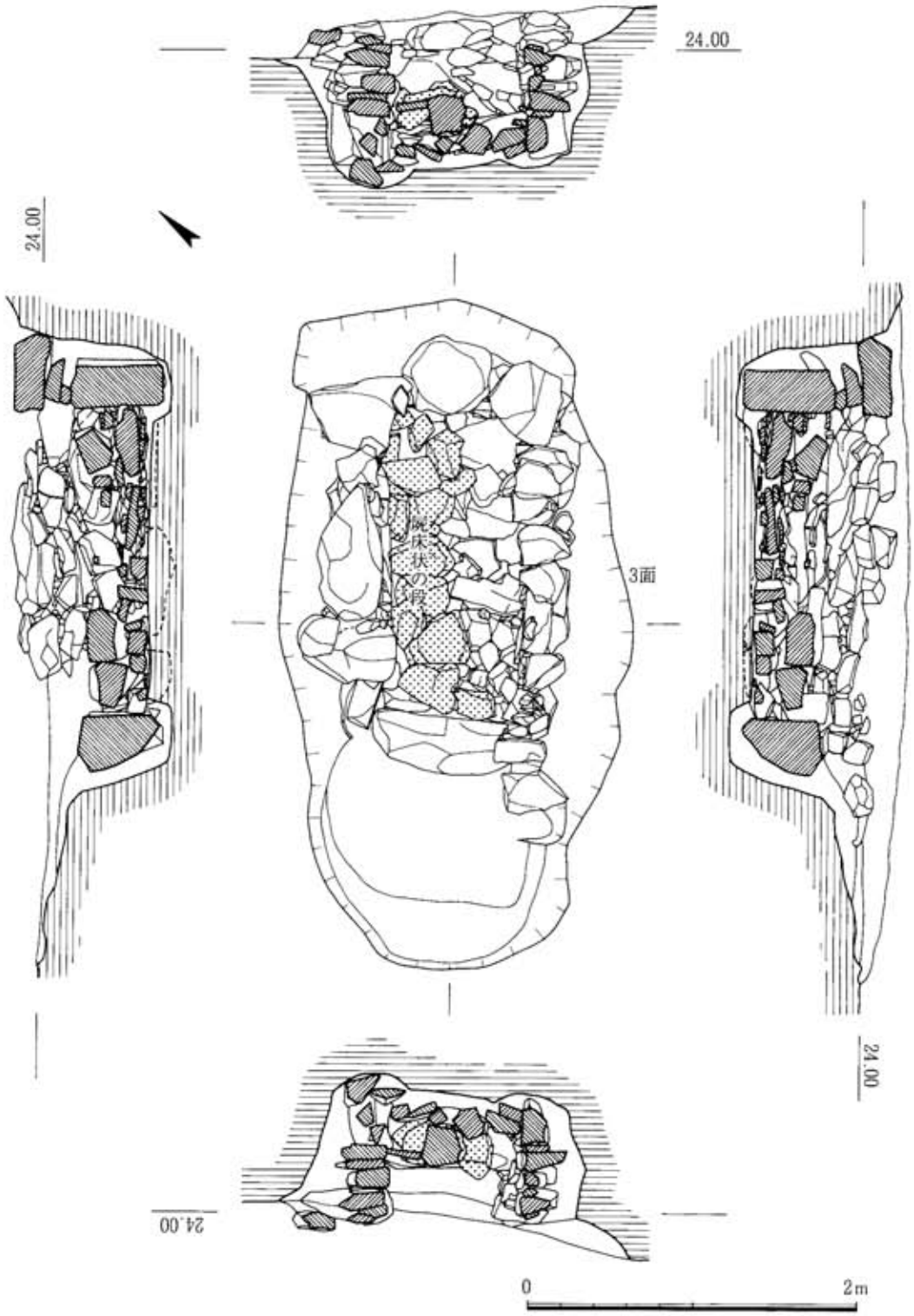


図104　ＳＴ001古墳石室１（１／40）

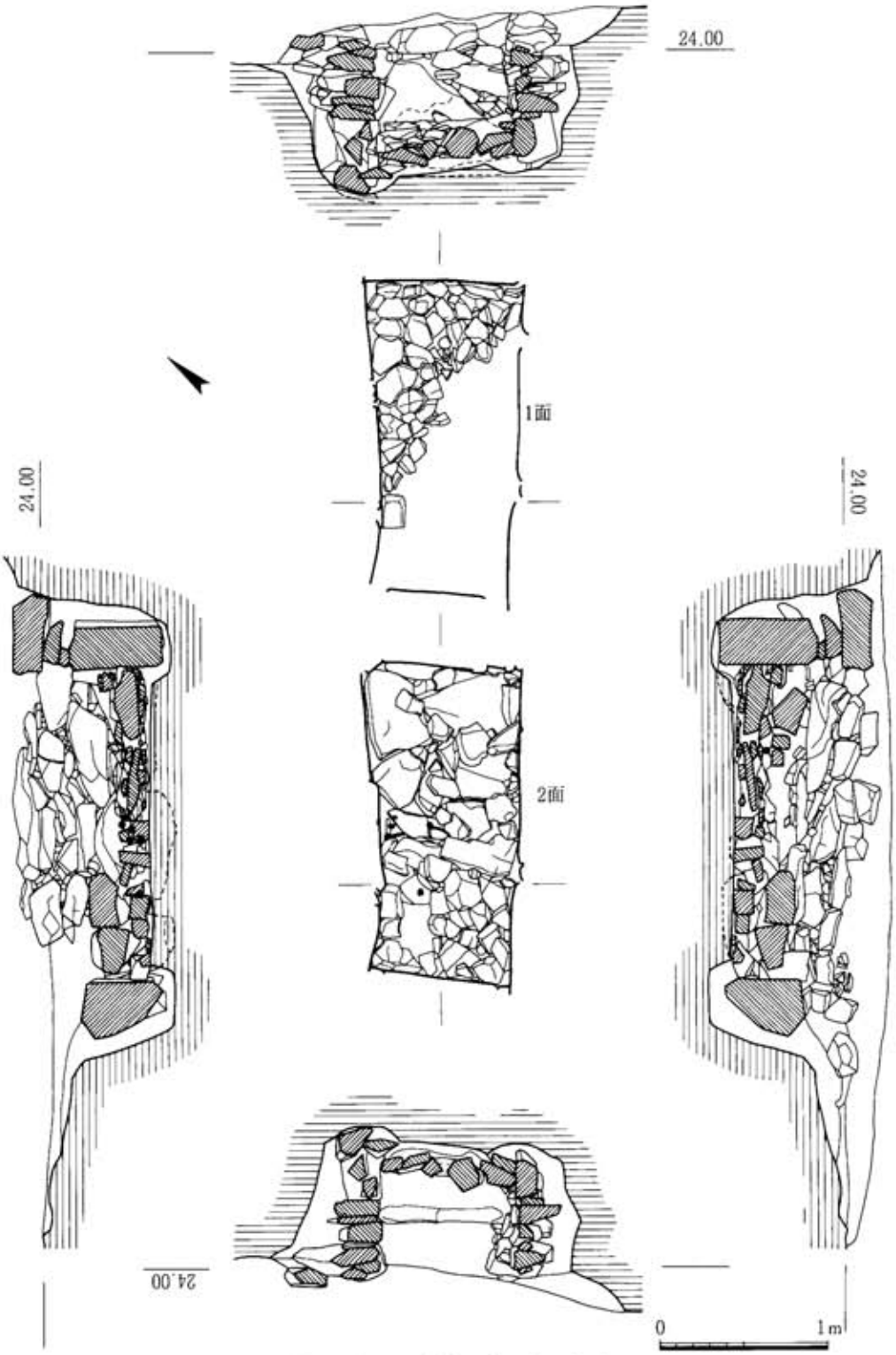


図105　ＳＴ001古墳石室２（１／40）

ＳＴ002古墳（写真図版60～62）

概要

調査区の北西側に位置し、南側にＳＴ013古墳が隣接するとともに、石室直下にはＳＣ016石棺墓が検出された。両遺構よりも、本墳が新しいと考えられる。

墳丘・周溝

墳丘は径約９ｍを測る円墳で、残存する高さは北側で2.0ｍである。発掘前の墳丘測量では南側に墳丘が延びる状況が見られ、表土剥ぎ後も、あたかも前方部状の石列が検出され注意されたが、結局新しい畑に伴うものと判断された。墳丘外表には、杵島山特有の安山岩により葺石が施されているが、東側は近世に破壊されている。周溝は、この東側と崩壊した崖に面する西側は明確でないが、南側のＳＴ013古墳と接する部分には幅2.0ｍ、深さ0.5ｍの規模で確認される。北側は元々なかったと考えられる。

内部主体

西に開口し、全長が4.32ｍを測る横穴式石室である。天井部及び側壁の上半部は既に破壊消失していた。主軸方位はN71°Wである。玄室平面形は羽子板形を呈する。

玄室は長さ1.96ｍ、前幅1.28ｍ、奥幅1.74ｍ、残存高0.8ｍを測る。側壁の最下段には右側が幅0.7～1.1ｍ、高さ0.6ｍ程の石２石を縦置きし、その上に幅0.8～1.2ｍ、高さ0.3ｍ程度の石を平積みする。一方左壁は、最下段の最前列と最後列が幅0.8～1.2ｍ、高さ1.0～1.2ｍの石を縦置きするものの、その間は上段の石と同規模の石を平積みしている。右壁はいわばセオリーどおりの積み方であるのにたいし左壁は腰石が不十分な施工である。奥壁もまた、幅0.4～0.6ｍ、高さ0.7ｍ程度の石を両サイドに立てるがそれだけでは壁全体を埋めることができず、その間の一石は高さが足りないものを用いている。

床面には径0.1ｍ前後の円礫によって敷石が施されるが、左壁側には、壁に沿ったかたちで板石を幅0.5ｍの間隔で配列し石障を作っている。玄門部は床面に框石と幅0.3ｍ、高さ0.8～1.0ｍの長楕円形の石を左右に立てて玄門立石をつくり玄室と羨道部を分けるが、羨道部が玄室両壁の延長として作られるために厳密な意味での袖を成さない。羨道部は、玄門から0.9ｍの位置の、概ね羨道部の中間に框石を配しまた、その間の床には敷石を施している。羨道幅が広がるものではないが、複室構造の影響が伺える構造を呈している。閉塞は礫によるもので比較的良好に残っていた。調査の結果、現状で大きく礫と土の２層に分かれることがわかった。まず、玄門部と羨道中央部の框石の間に羨道幅に近い柱状の石を一石と人頭大の礫を置き、その前後の羨道入り口と玄室側に板石状の偏平な石をあたかも立てかけるように前後から置いている。

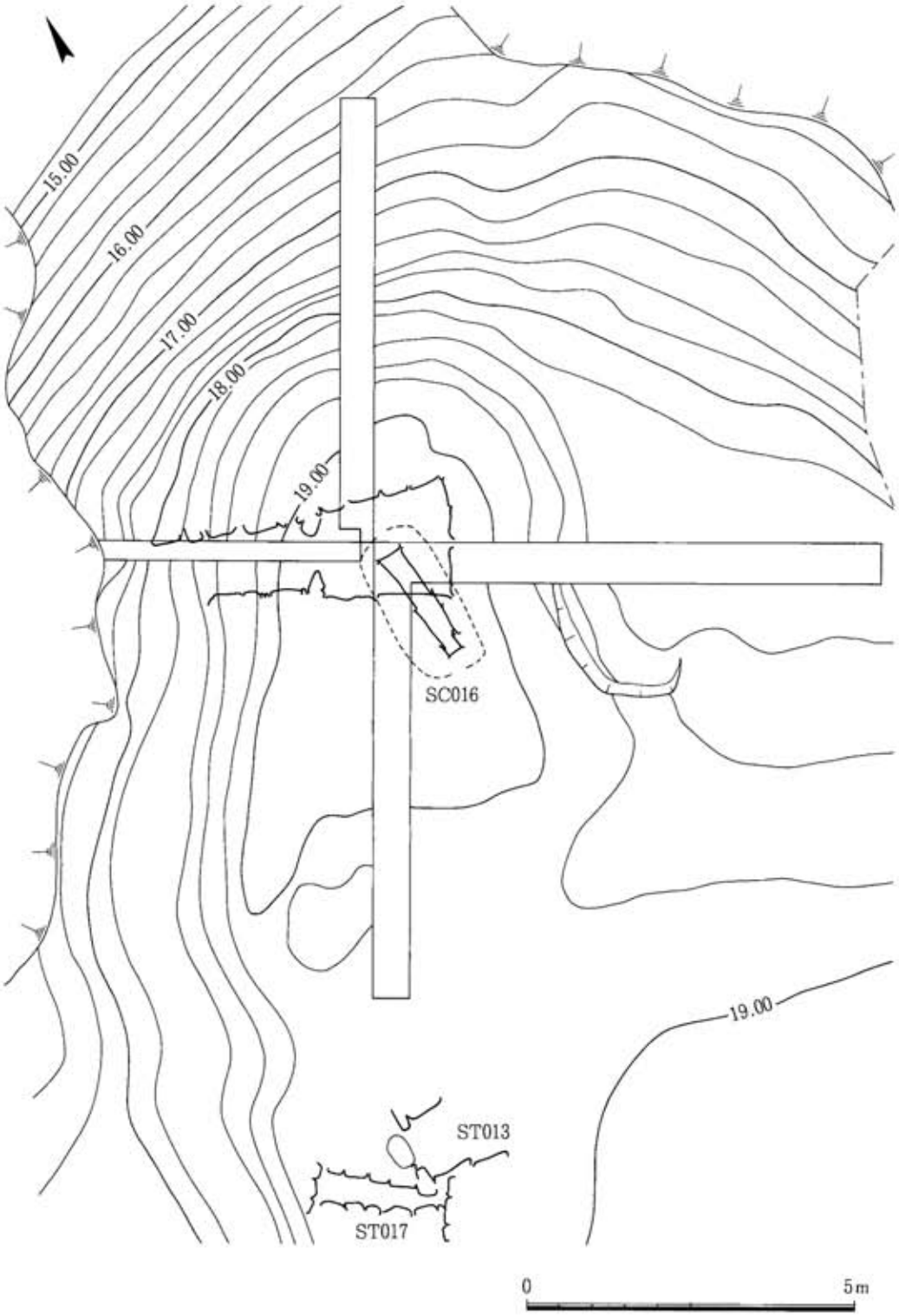


図106　ＳＴ002古墳墳丘測量図（調査前）（１／100）

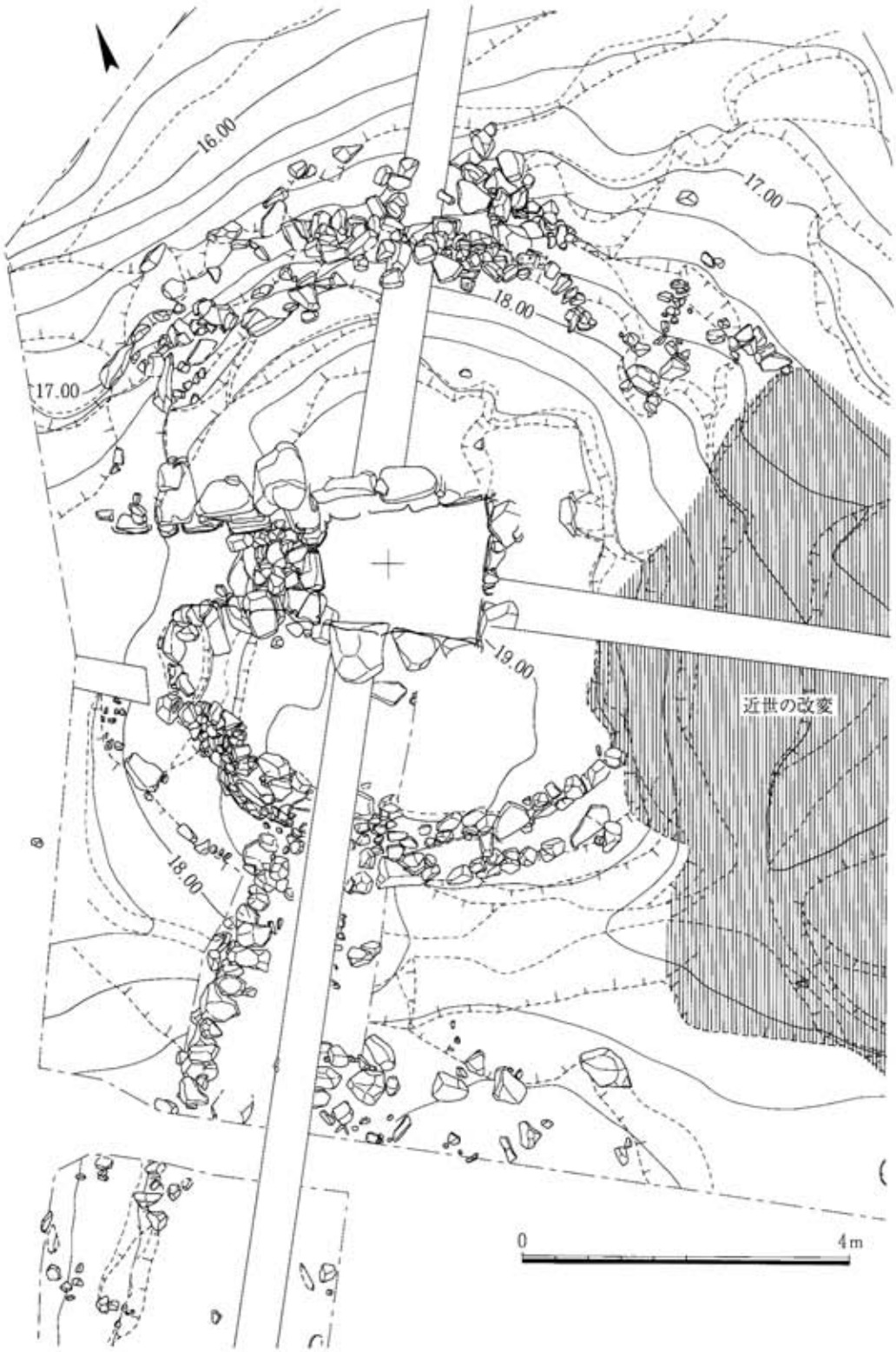


図107　ＳＴ002古墳墳丘測量図（調査後）（１／80）

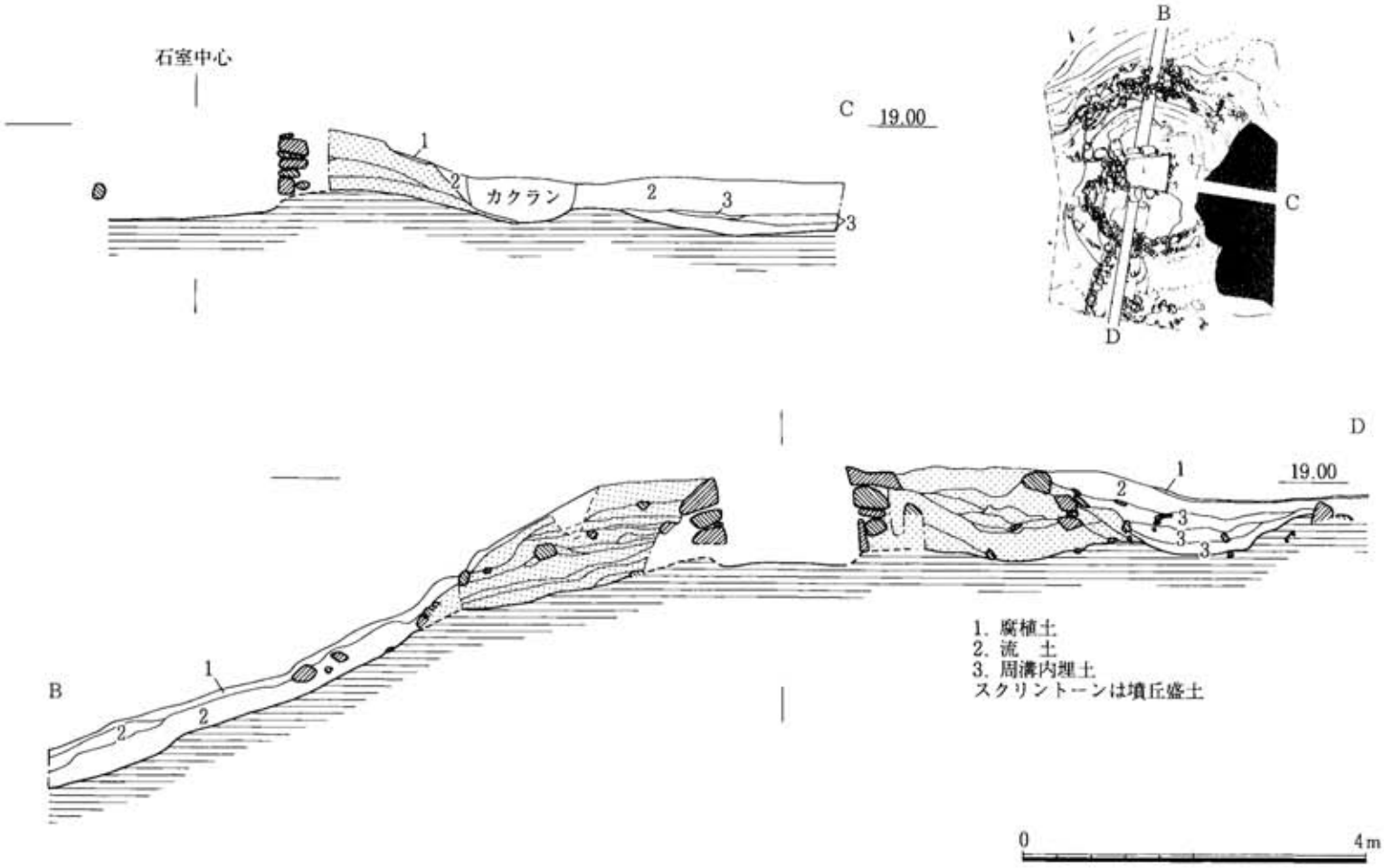


図108　ＳＴ002古墳墳丘土層図（１／80）

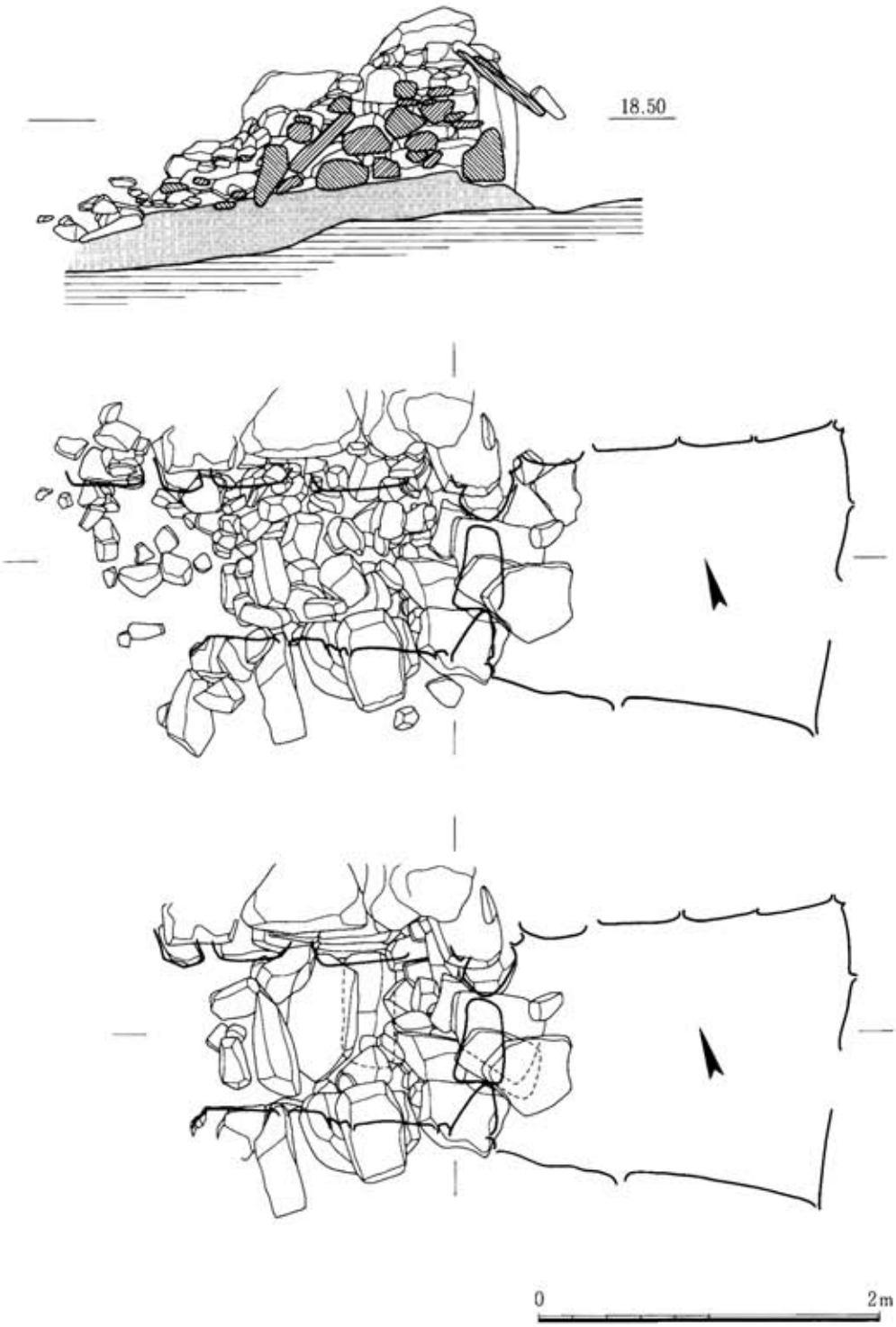


図109　ＳＴ002古墳石室閉塞状況（１／40）

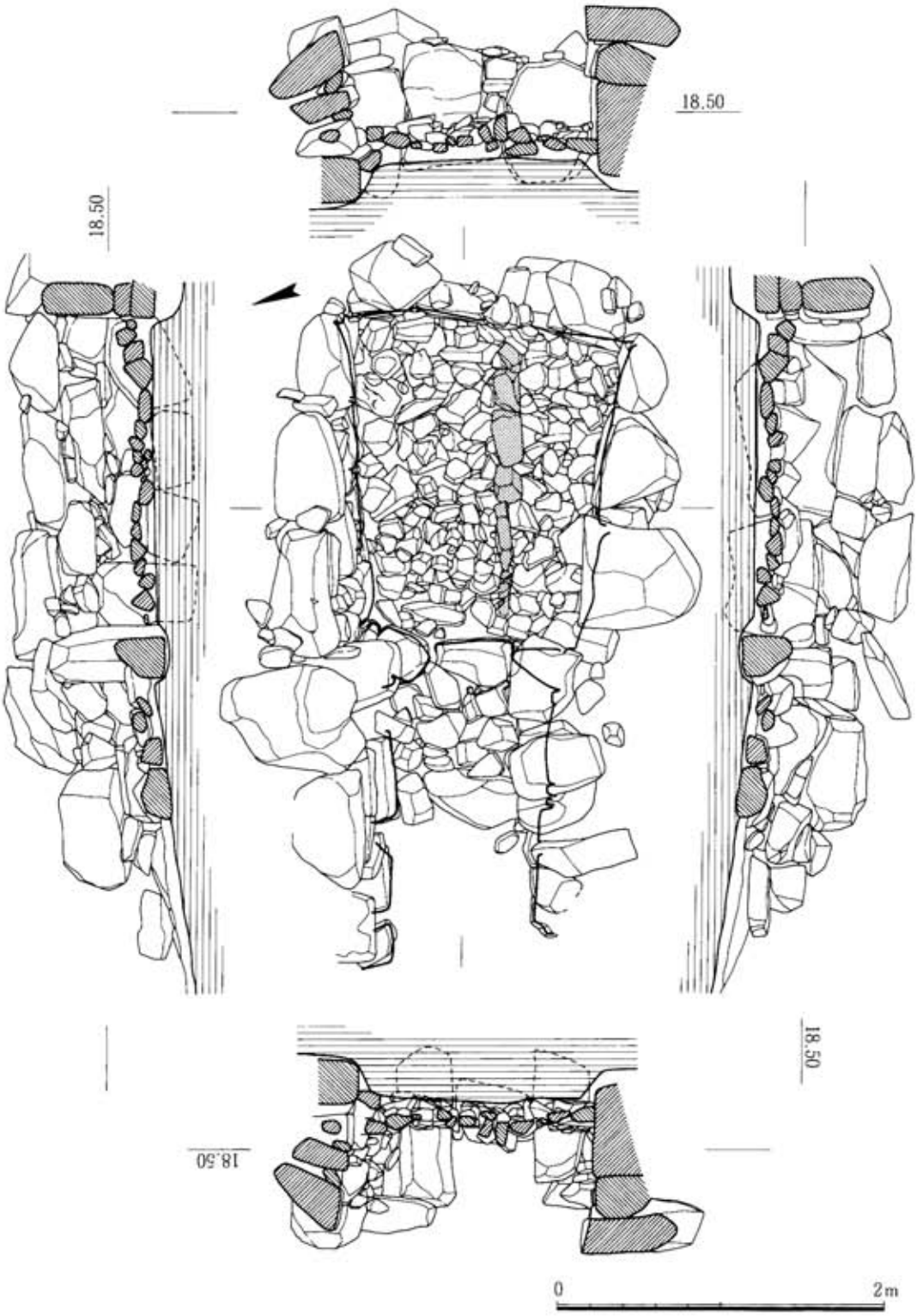


図110　ＳＴ002古墳石室（１／40）

図111　ＳＴ002古墳玄室遺物出土状況（１／20）

ただし、玄門側の板石は上から玄室側に落ち込んだ可能性もある。そしてその上は小礫が混じるものの、基本的には土でおおっていると考えられる（図109）。以上の観察の結果では、追葬の回数は明らかにできなかった。

遺物の出土状況

玄室内から鉄刀１、鉄鏃等の鉄器類、耳環、勾玉、ガラス小玉、白玉等の装身具類が出土した。鉄刀は切先を入り口側に向け石障内の右奥に、鉄鏃は長頸鏃が束の状態、広根鏃が１本で奥壁に刃先を向け鉄刀のとなりに置いてある。その他は装身具類も含め玄室内全体に分布していた。しかしながら、土器類は検出されなかった。また、周溝からは、羨道入り口左側より須恵器の壺等が出土した。

ＳＴ003古墳（写真図版63・64）

概要

調査区の南端に位置する。調査前から周知されていたが、特に西隣の皿山窯跡が明治時代に建設される際に大規模な破壊が行われたようで、墳丘の残骸が認識される程度であった。したがって当初は、石室の残存自体も危ぶまれる状況であったが、予想に反して羨道と玄室の約２分の１は残っていた。また、墳丘も一部分ではあるが墳丘裾の列石が確認された。

墳丘・周溝

墳丘は北～東側の約４分の１が残っていたのみであったが径約９ｍの円墳に復元され、石室中心を中心にして墳丘の設計が行われていると思われる。残存の高さは約1.5ｍしかない。外表には裾と中段付近に二段にわたって葺石が検出されたが、裾部のそれは、ＳＴ002・014古墳と同様列石状に施されている。断面の観察では裾の石の外側にもややしまった土が認められたが、墳丘盛土か流土かの判断が困難でありいわゆる外護列石か内護列石かの判断がつかなかった。中段のものも残りが悪かったが、他の古墳の例から葺かれたものであろう。周溝は北から東側部分に限られ、しかもきわめて浅くしか残っておらず幅1.3ｍ、深さ0.4ｍであった。また、盛土に礫が多く使用されることが特徴としてあげられる。これは、地山中に礫が多量に含まれることによるものと考えられる。

内部主体

南に開口する横穴式石室である。主軸の方位はＳ16°Ｅである。調査は、最初に確認できた玄室から始め、その方向から羨道を確認する順序で実施した。玄室は右側壁が玄門側から約２ｍ、左壁が1.1ｍ残存していたが、奥壁は残っていなかった。石室残存分と腰石掘り方から推定をまじえた玄室の規模は、玄室長2.2ｍ、玄室幅は前部で1.1ｍ、奥壁側で1.4ｍが想定され、玄室平面形は羽子板形である。玄室高は、左右側壁が最も残っているが、現状で0.7ｍしかない。側壁は、右側が最下段に幅0.5～0.8ｍ、高さ0.4～0.8ｍ程の腰石を置き、それ以上は幅0.4ｍ、高さ0.2～0.3ｍ程の石を二段程平積みするが、それ以上は消失している。左側は最下段に幅0.4～0.6ｍ、高さ0.5ｍ程の右側より小ぶりの石を縦置きし腰石とする。それ以上は、最前列に３段残るがそれより奥側は消失している。奥壁も消滅しているが、玄門から2.3～2.4ｍ付近に0.6×0.7ｍの穴が一個あり、奥壁の位置を推定できる。床面は、掘り方内に小円礫を敷いた上に0.3×0.4ｍ～0.5×0.6ｍ程度の広めの板石を敷く特徴的な構造である。

玄門部は両側の玄門立石と床面の框石から構成される。羨道は、右側前半部は破損していたが、左側で長さ2.7ｍを測る。前方部に向かって広がる形態であるが、玄門部付近では幅1.06ｍ

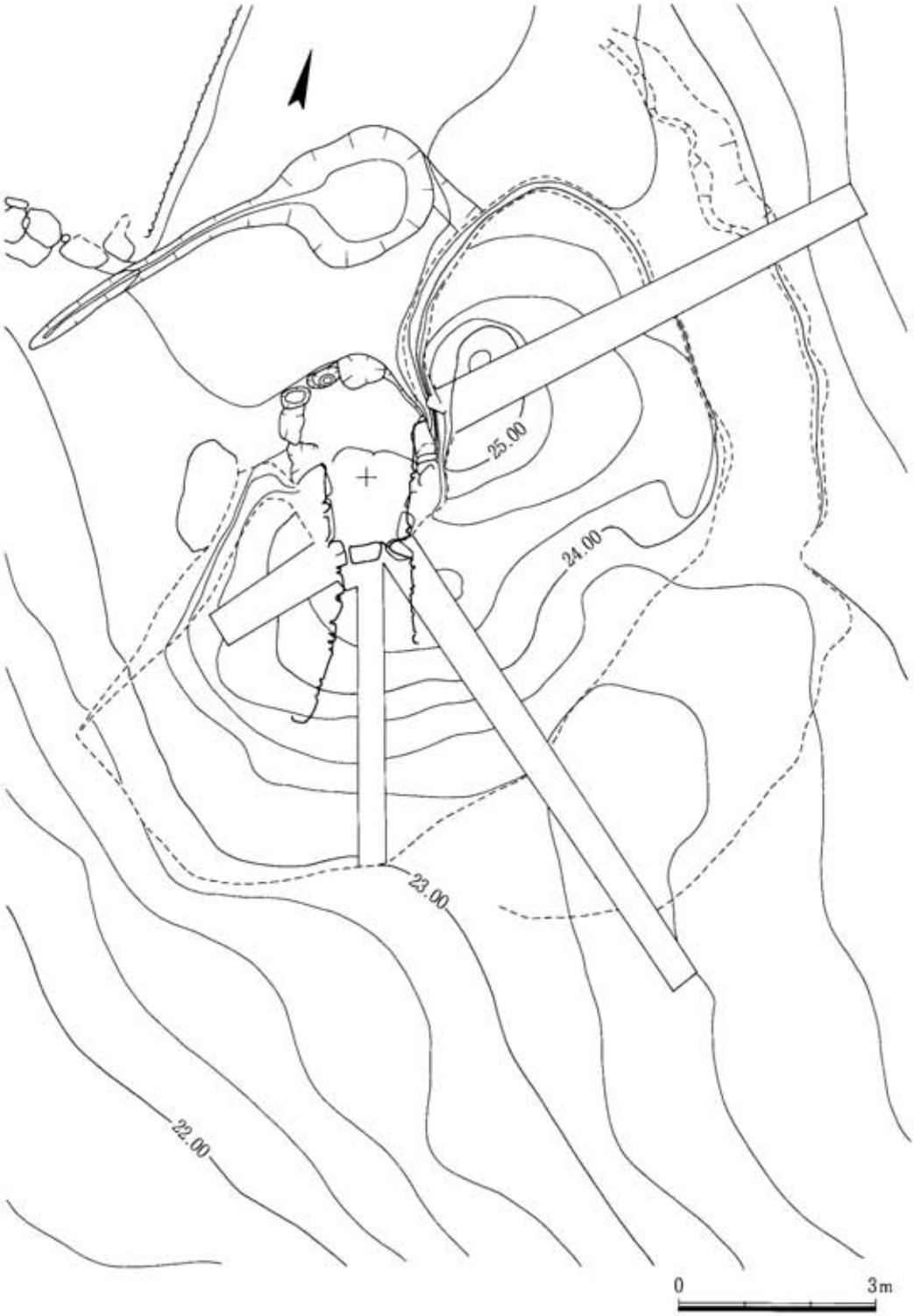


図112　ＳＴ003古墳墳丘測量図（調査前）（１／100）

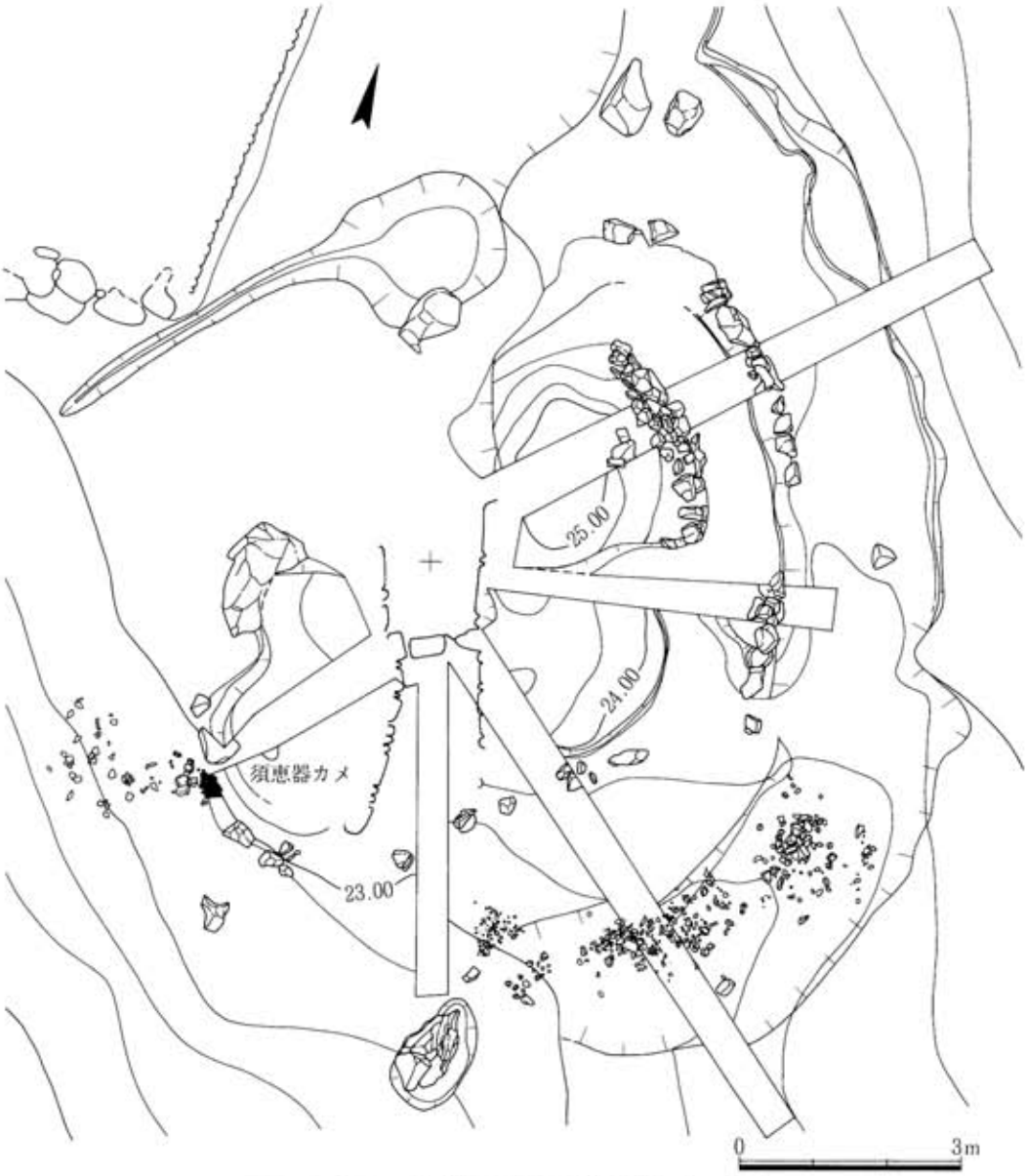


図113　ＳＴ003古墳墳丘測量図（調査後）（１／100）

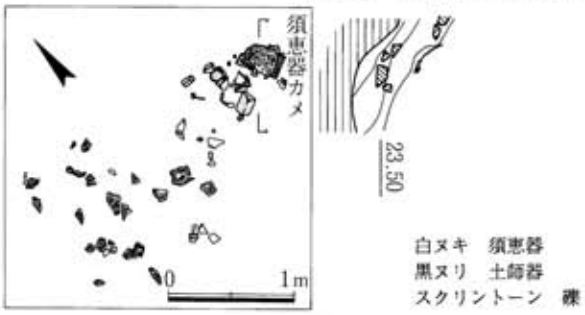


図114　ＳＴ003古墳墳丘遺物出土状況（１／60）

と玄室幅とほとんど変わらない。したがって、厳密な意味での袖構造を成さない。閉側は大きく２層に分かれ、下部が人頭大の礫、上部が土によるものであった。しかし堆積状況から追葬の複数の単位を示すものでなく、一回の埋葬において玄門部付近が礫、それより前

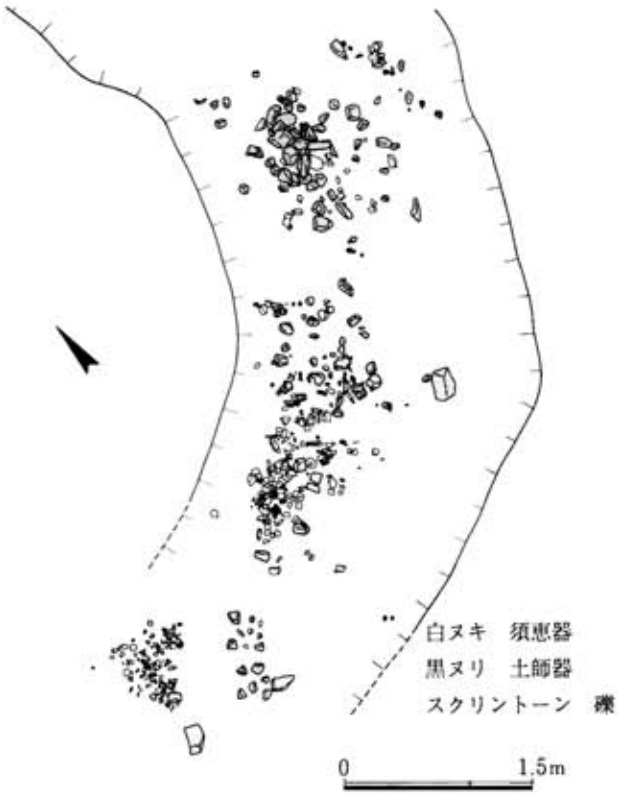


図115　ＳＴ003古墳周溝遺物出土状況（１／60）

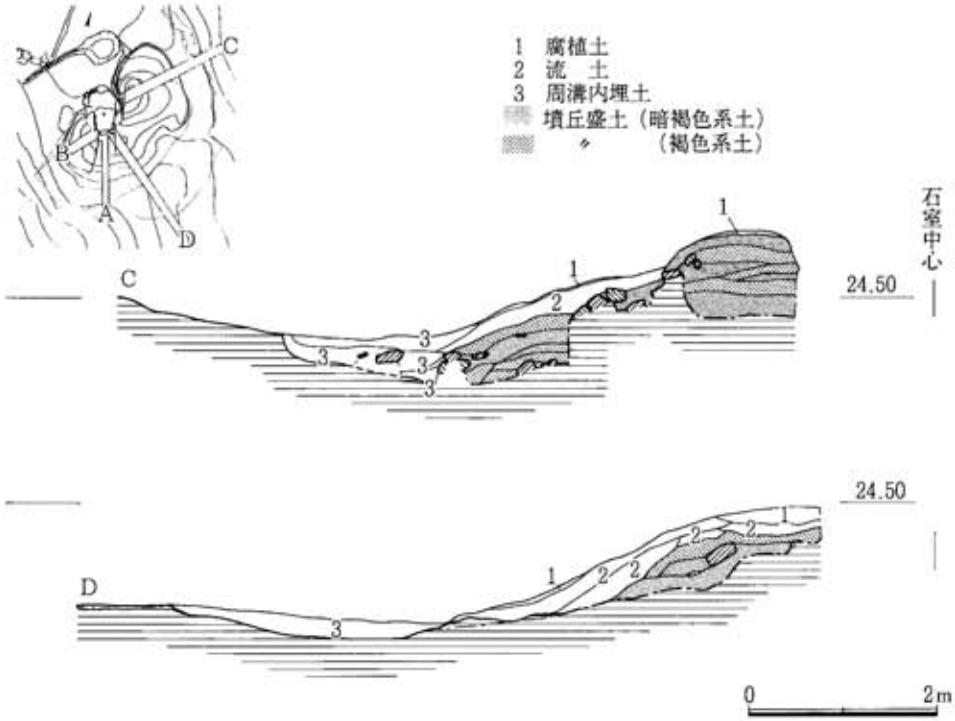
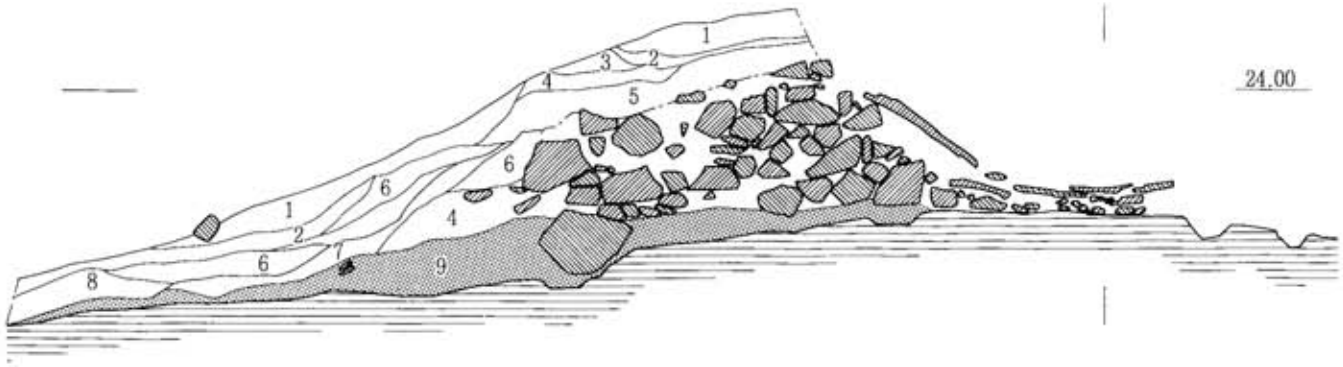
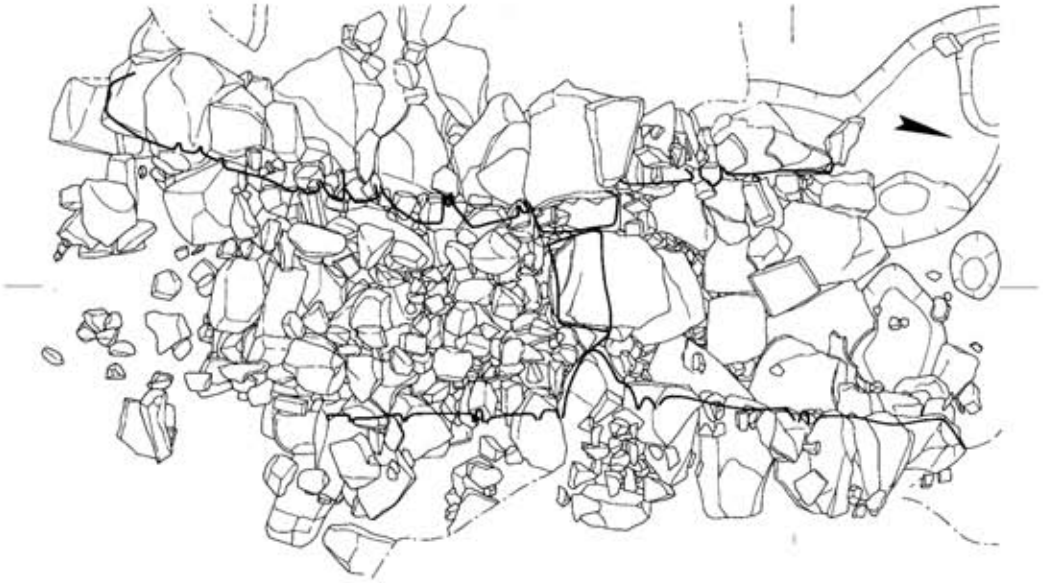


図116　ＳＴ003古墳墳丘土層図（１／80）





1. 腐植土
2. 流　土
3. 暗黄褐色土
4. 暗褐色土
5. 暗赤褐色土
6. 褐色土
7. 明褐色土
8. 暗灰褐色土
9. 暗黒灰色土-置土

閉塞土

0　　2m

図117　ＳＴ003古墳閉塞状況（１／40）

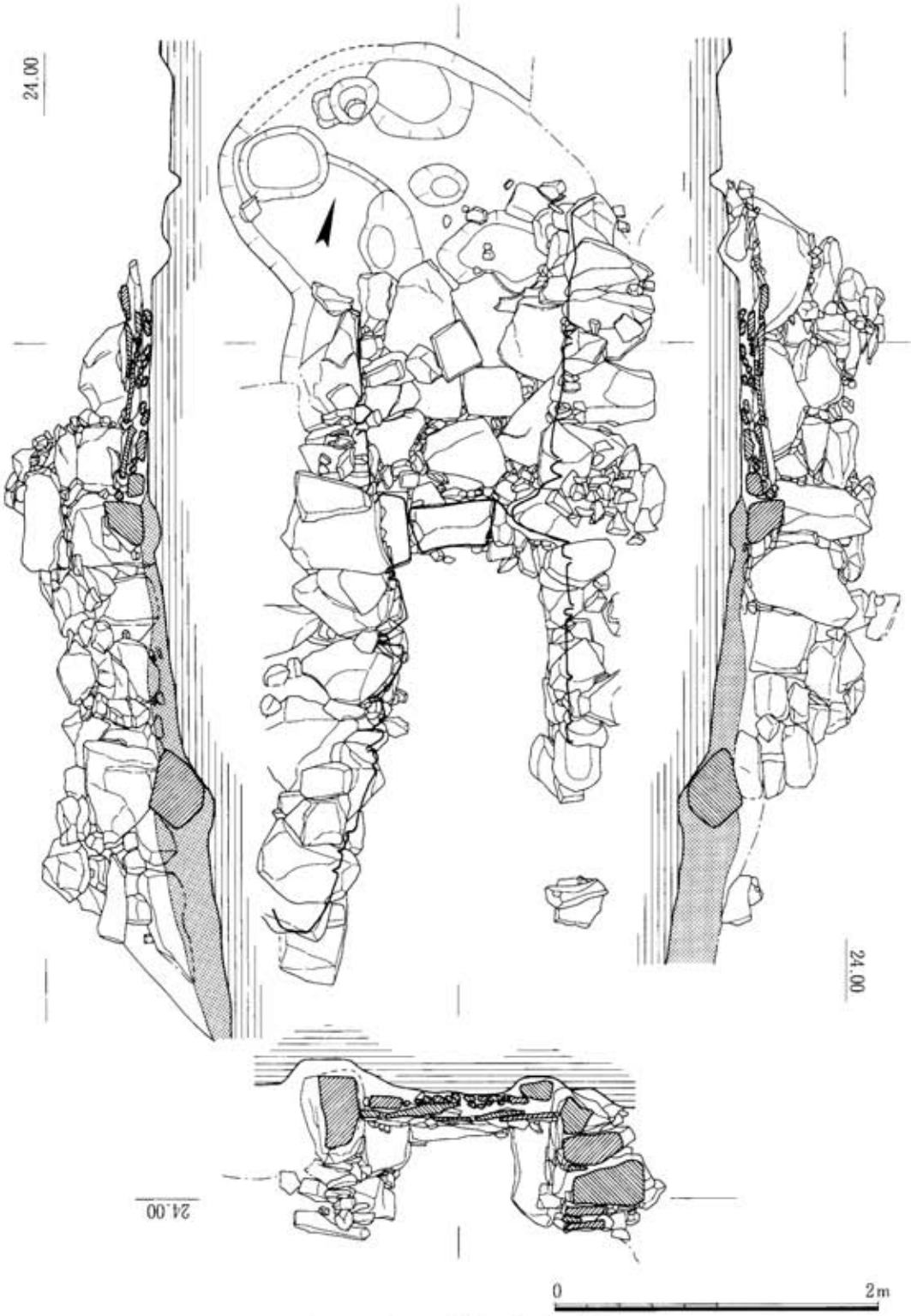


図118　ＳＴ003古墳石室（１／40）

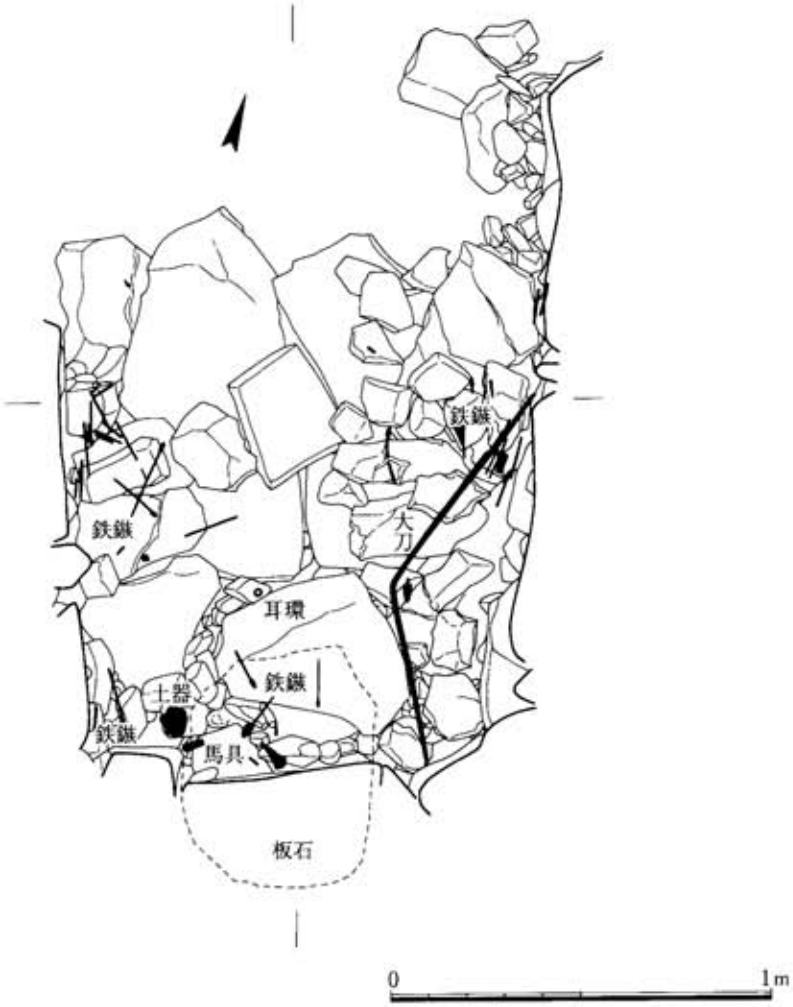


図119　ＳＴ003古墳玄室遺物出土状況（１／20）

面が土で埋められる状況を示すものである。また、玄室側に板石一枚が立てかけられていた。これは、破壊の際に床石の一枚が動かされた可能性が最も高いが、ＳＴ002古墳の閉塞状況とも類似しており興味深い。

遺物の出土状況

玄室から、鉄刀１、鉄鏃、弓付属金具、耳環、碧玉製管玉、ガラス製小玉等が出土したが、かなり撹乱された状況と判断された。特に、鉄刀は中央付近から曲げられた状況で出土しきわめて興味深いものではあるが、玄室内に転落した礫の直上から出土したため、撹乱後の状態とせざるを得ない。墳丘では、入口左側から、須恵器甕の底部破片が据えられた状況で確認された。

ＳＴ013古墳（写真図版60・65）

概要

ＳＴ002古墳の南に隣接するが、当初は全く存在不明の古墳であった。ＳＴ002古墳の前方部の可能性を追究する過程で確認されたもので、辛うじて墓壙と石室の一部および周溝が残る状況であった。

周溝・墳丘

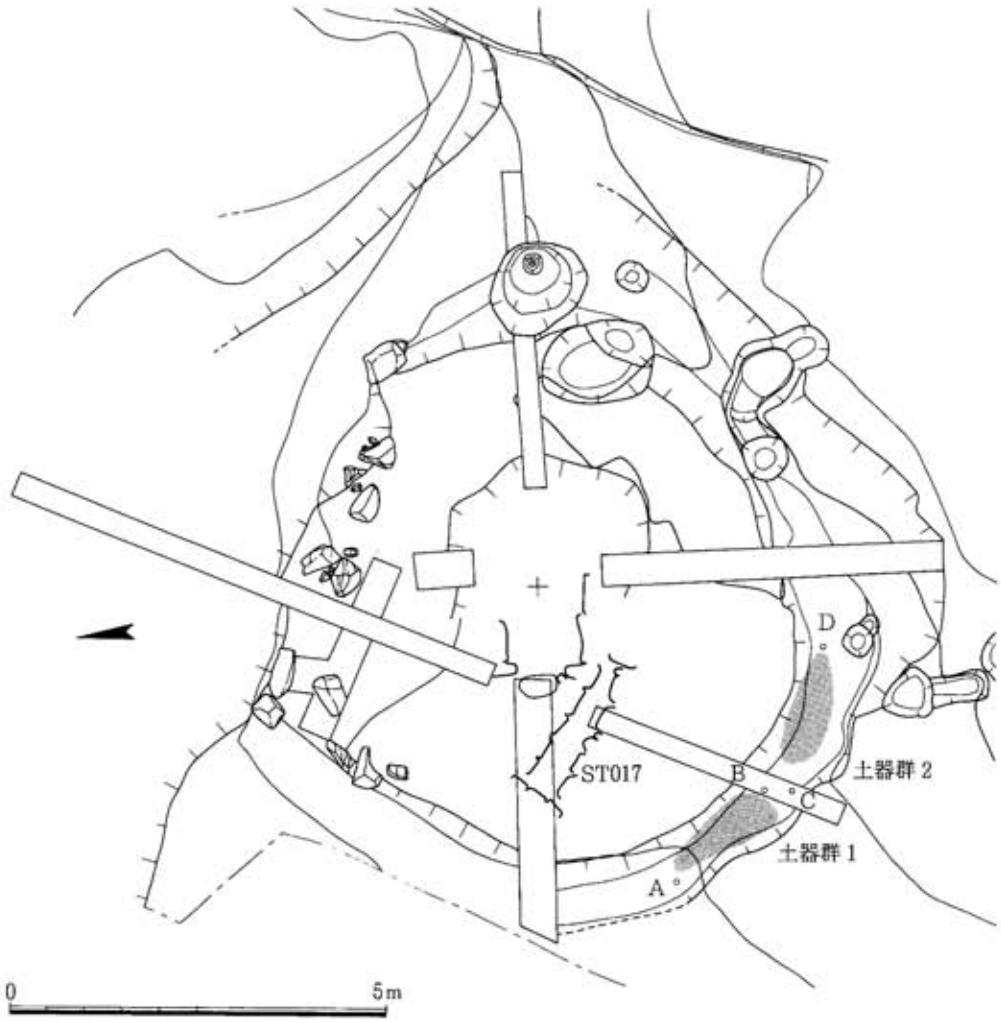
周溝はＳＴ002古墳と接する部分が消失するもののそれ以外は0.4～0.8ｍの幅で確認された。これによれば、径6.5ｍの小形の円墳であるが、墳丘は地山の削りだし部分以外は全く残っていなかった。

内部主体

西に開口する単室の横穴式石室であるが墓壙の状況等から羨道の付設されないものと考えられる。石室の方位はN84°Wである。石室は、最下段の腰石が右側に２石、左側に１石が残っているのみで玄室の規模は前幅が1.0ｍを測られるだけだが、石の抜き跡から元々は両側壁とも３石、奥壁が２石で構成されていたことが分かり、長さ1.86ｍ、奥幅1.10ｍが推定され、羽子板形の平面形を呈する。腰石は幅0.6ｍ、高さ0.3ｍ程度の小形の石を用いている。

玄門は腰石と同程度の石を横に置いて作り、他の古墳が長い直方体の石を縦に置き、いわゆる玄門立柱を作るのと対照的である。また、框石も玄門の間に挟まれるのではなく、１石分前方に設置する。この玄門の石の前には１石ずつ石が残っていたが、明確な羨道の掘り方もないことから、短い墓道が付設される石室形態が想定される。

床面は敷石がほぼ完全に残っていたが１㎝前後の円礫を中心にした細かいもので、比較的大形の角礫あるいは板石を使う他の古墳の敷石とは異なっている。



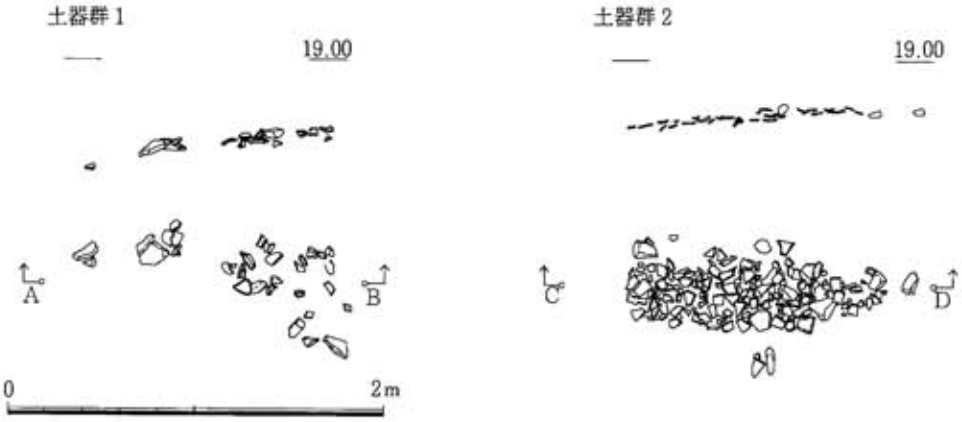


図120　ＳＴ013古墳墳丘測量図（１／100）および周溝遺物出土状況（１／40）

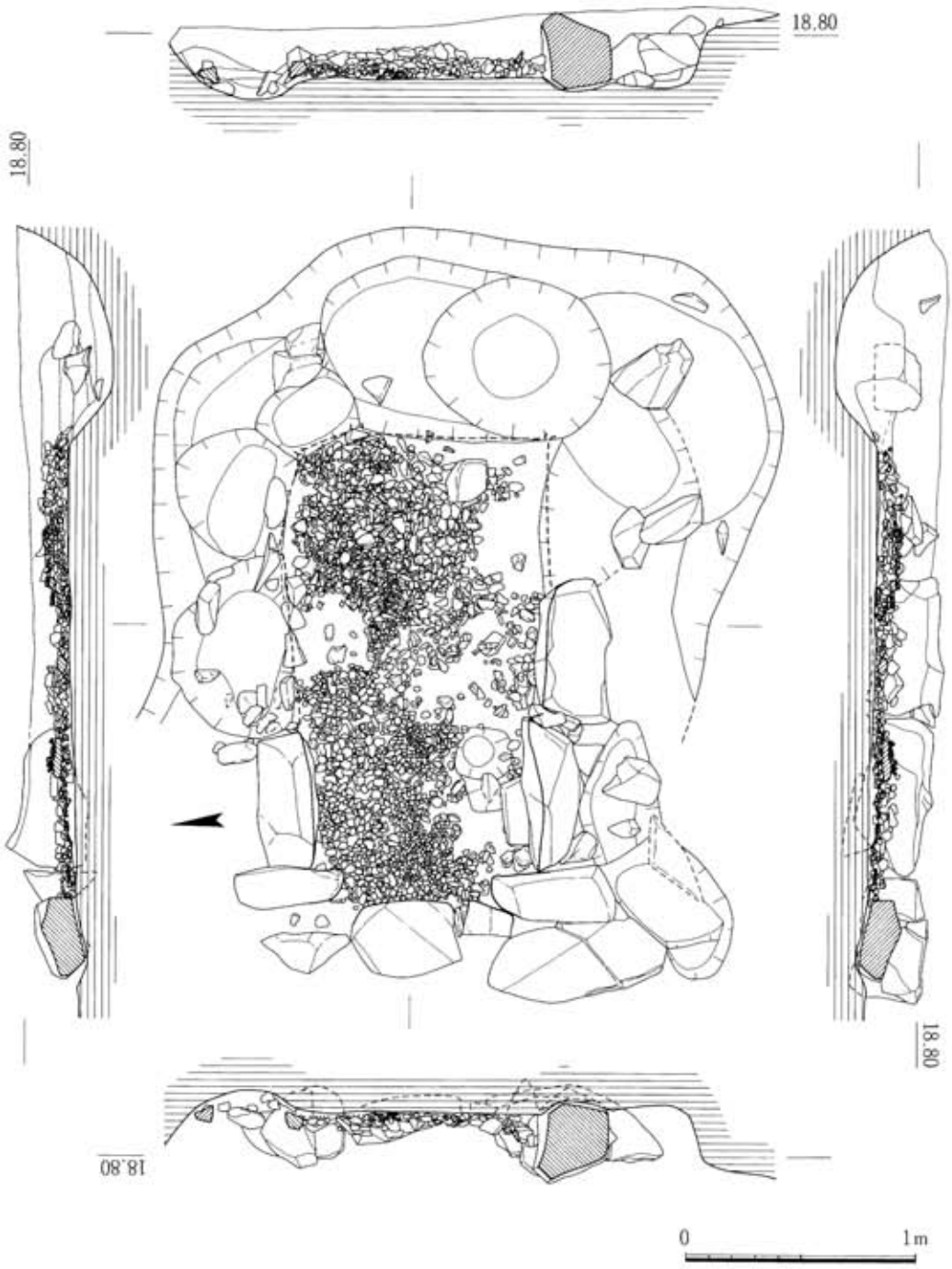


図121　ＳＴ013古墳石室（１／30）

遺物の出土状況

上記の破損状況ではあったが、玄室内には鉄器のほか勾玉１、碧玉製管玉７、ガラス玉118などの多量の玉類が検出された。これらの玉類は玄室の奥半分に限って出土しており、原位置をある程度反映していると考えられる。周溝からは、玄門の右側付近から須恵器・土師器等が二箇所に別れて出土した。この出土位置やいずれも小破片に割れた状況であることがＳＴ003古墳と類似しており注意される。

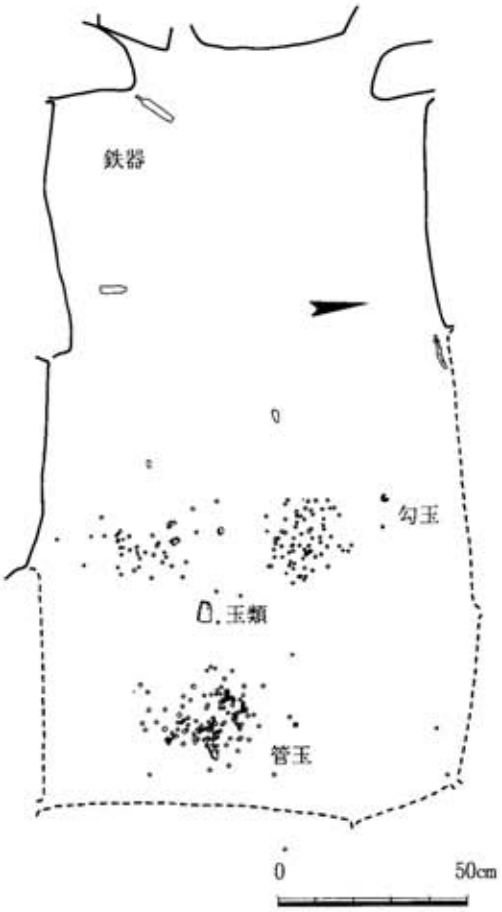


図122　ＳＴ013古墳玄室遺物出土状況（１／20）

ＳＴ014古墳（写真図版66～68）

概要

調査区の南西部に位置し、皿山窯跡の西南に隣接する。高い墳丘が残存し南側の平野に向かって石室羨道が開口していたことから唯一調査前から所在の明確な古墳であり、墳丘が大形であることから当古墳群中でも中心的な古墳であることが想定された。しかし、一方では天井石が持ち出され墳丘頂部が陥没し、また羨道部の前半の石は除去されるなど破壊が進行していることも知れた。そして特に、墳丘の北側背後は、近世から現代に至る墓地造営により墳丘裾部

図123　ＳＴ014古墳墳丘測量図１（１／120）

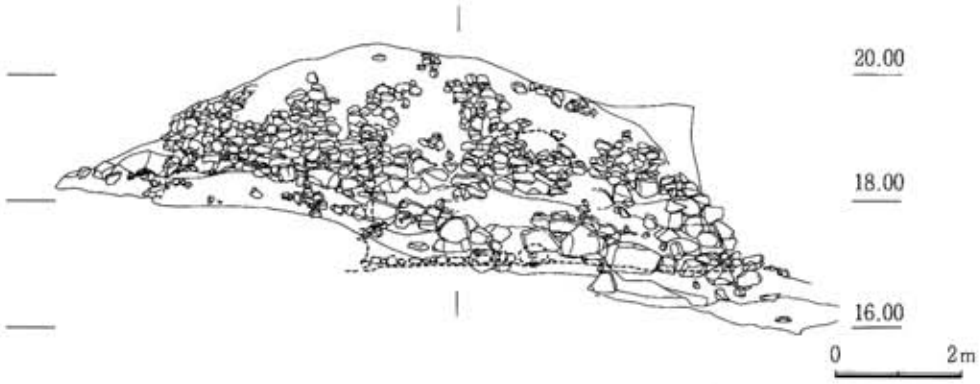


図124　ＳＴ014古墳墳丘測量図２（１／120）

が大きく破壊されていた。

墳丘は径12.4ｍを測る円墳である。外表には裾に列石状、中段以上に葺石と二段に施されているように見えＳＴ002・003古墳と同様な状況だが、裾部も一部で数段葺かれている部分が見られる。葺石は上下とも最下段に比較的大形の礫をならべ、それ以上に小形の石を用いている。周溝は、墳丘東側の一部に若干の溝状の痕跡が見られたが断定はできなかった。

内部主体

南東に開口する単室両袖の横穴式石室である。開口方位はＳ42°Ｗである。玄室は長さ2.4ｍ、幅2.0ｍで平面は長方形を呈する。天井は除去されていたが、左側壁が約2.7ｍの高さまで残っていたので、元来の天井高もこの程度と考えられる。両側壁とも最下段に幅0.6～1.5ｍ、高さ0.6～1.0ｍ程度の石を縦置きし腰石とする。その上は幅0.4～0.8ｍ、高さ0.2～0.4程度の石を平積みし４～５段積んでおり、腰石をふくめ比較的平均的な大きさである。奥壁も特に大形の石を用いることもなく側壁と同程度の大きさの石を上下に用いている。床面は0.1～0.4ｍ程度の礫を用いて敷石を施している。玄門は右側が0.9ｍ、左側が1.2ｍの長さの直方体状の石を立て玄門立石とし、その間の床に框石を置く。

羨道は、天井石が消失し側壁、特に右側壁は１石しか残っておらず破損状況が著しい。左側壁は長さ2.6ｍまで残っている。また、高さは1.4ｍまで残存しておりこれより若干高い位置が天井の高さと考えられる。羨道の床面には敷石は確認されなかった。

遺物の出土状況

玄室内から須恵器坏蓋・身、鉄鏃・刀子等の鉄器類、雲珠や辻金具等の馬具類、耳環、銅釧、約140点の玉類等が出土した。これらは、当古墳群のみならず周辺の古墳群を考慮にいれても特筆すべき内容の遺物といえ、石室規模とともに当墳の位置付けをする上で重要である。

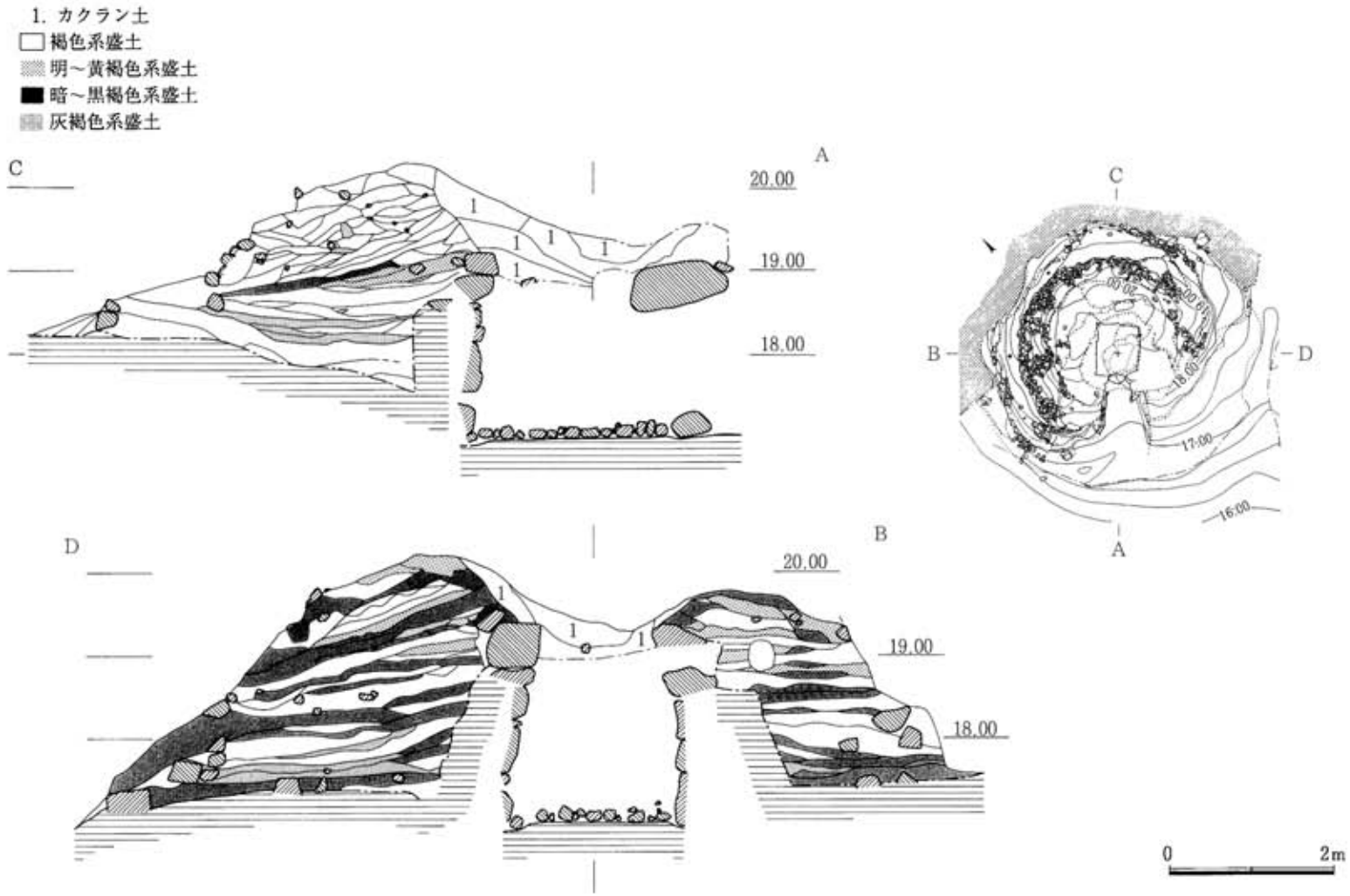


図125　ＳＴ014古墳墳丘土層図（１／80）

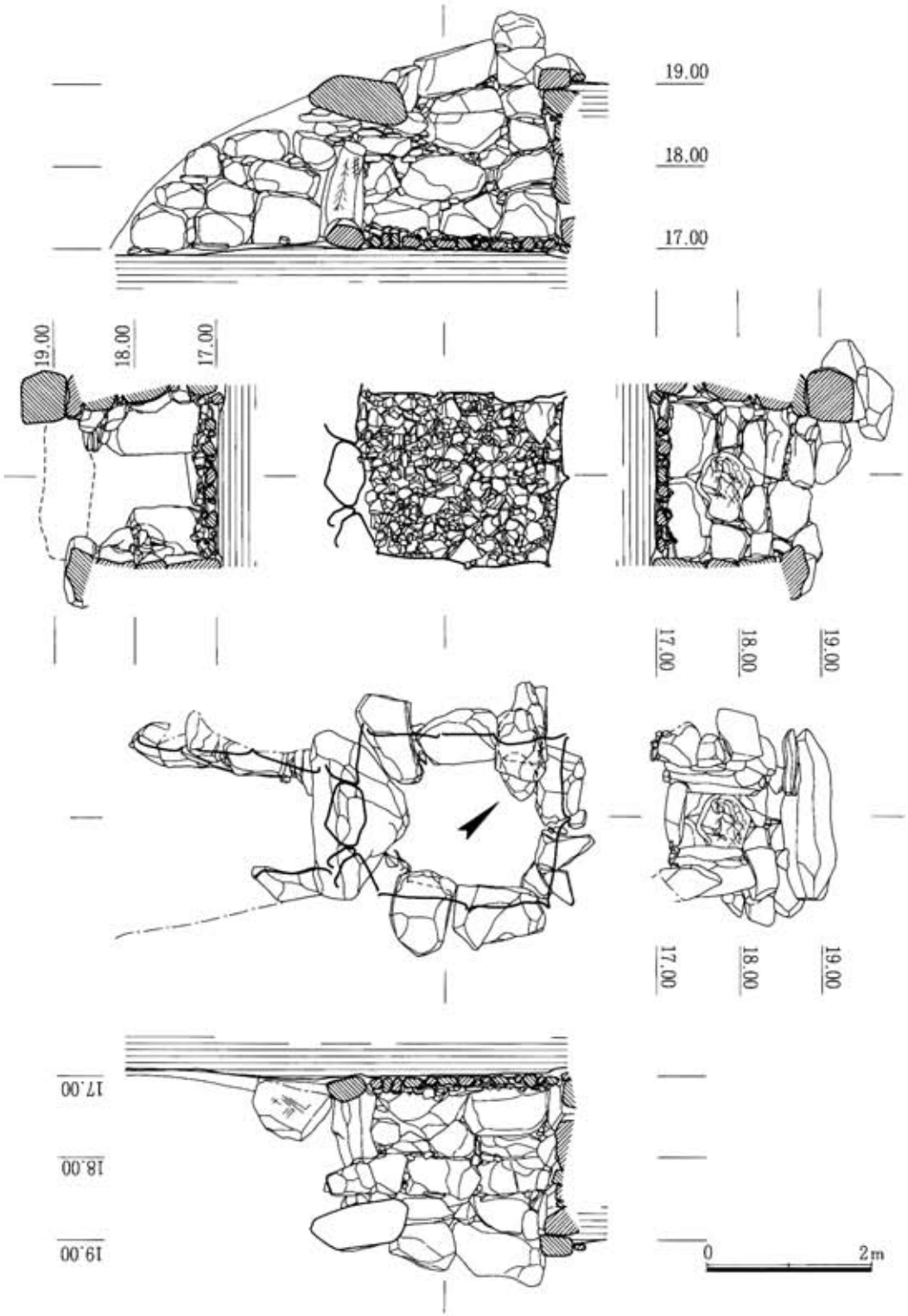


図126　ＳＴ014古墳石室（１／80）

図127　ＳＴ014古墳玄室遺物出土状況（１／20）

1.雲珠(426・427)、2.辻金具(428)、4.辻金具(431)、5.辻金具の脚(436)、6.鋲留金具(438)、11.責金具(509)、22・23.鋼釧(523・524)、24.辻金具(430)、52.鋤先(520)、60・69・70・71.鉄鏃(488・489・448・472)、82.須恵器杯蓋(370)、83.須恵器杯身(362)、84.須恵器杯身(369)、101.須恵器杯蓋(380)、102.須恵器杯身(302)、104.勾玉(544)、105.青金具(508)、117.鐔(504)　　（　）は遺物番号

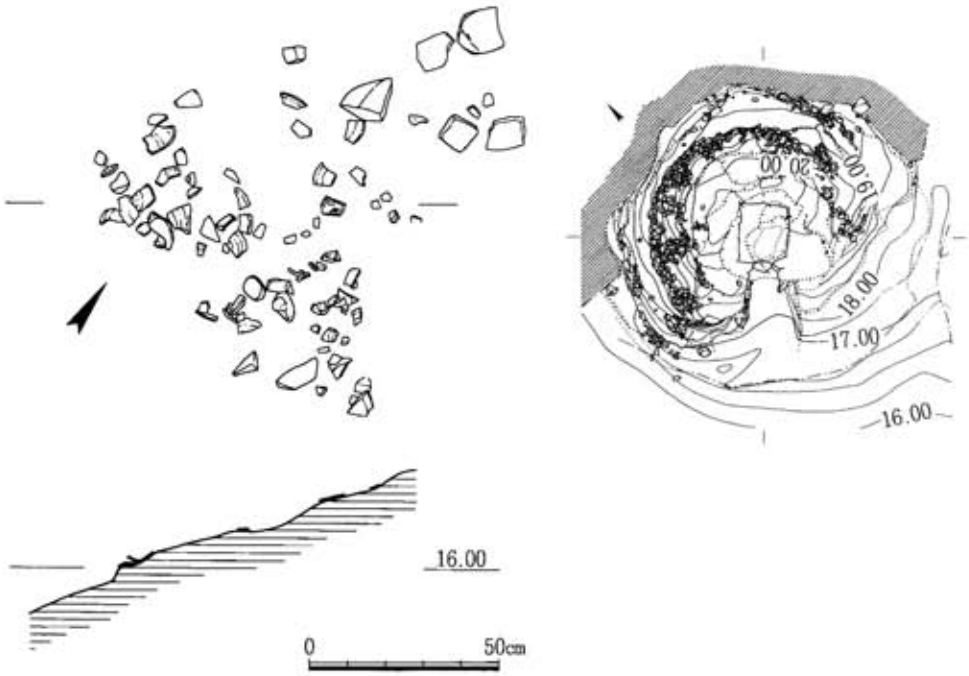


図128　ＳＴ014古墳墓道前遺物出土状況（１／20）

その他に羨道前面から土器類が出土した。もっとも目立つのは須恵器大形甕の破片であったが、土中というよりも腐食した木の葉の中に含まれた状況で原位置とは考えにくかったものの、墳丘あるいは羨道部における祭祀に使用されたものと考えられる。

線刻文様

石室の奥壁、右玄門立石、右羨道壁の３ヵ所に線刻文様が施されていた。

奥壁の文様は、奥壁２段目中央の石に施されている。この石は奥壁の腰石以上の石では最も面が大きく中央に配置されており、当初から線刻文様を施す計画が予定されていた可能性がある。文様は、一見すればこの石の縁に沿うように描かれた一条から三条の曲線を主体にし、若干の斜線を加えているようだが、意味する形は不明である。

右玄門立石は、いわゆる木の葉文様と格子文様の組み合わせでその他に若干の意味不明の短線が加えてある。木の葉文様と格子文様は前者が先に刻まれているようである。

右羨道は直線を主体にした文様であるが、向かって右上に３～４本が水平から右下がりに施されたものと、左下に５～６本が垂直に近くこれに３本程の水平線が施されたものの二つが観察される。後者は格子文様に分類してもよいかもしれない。

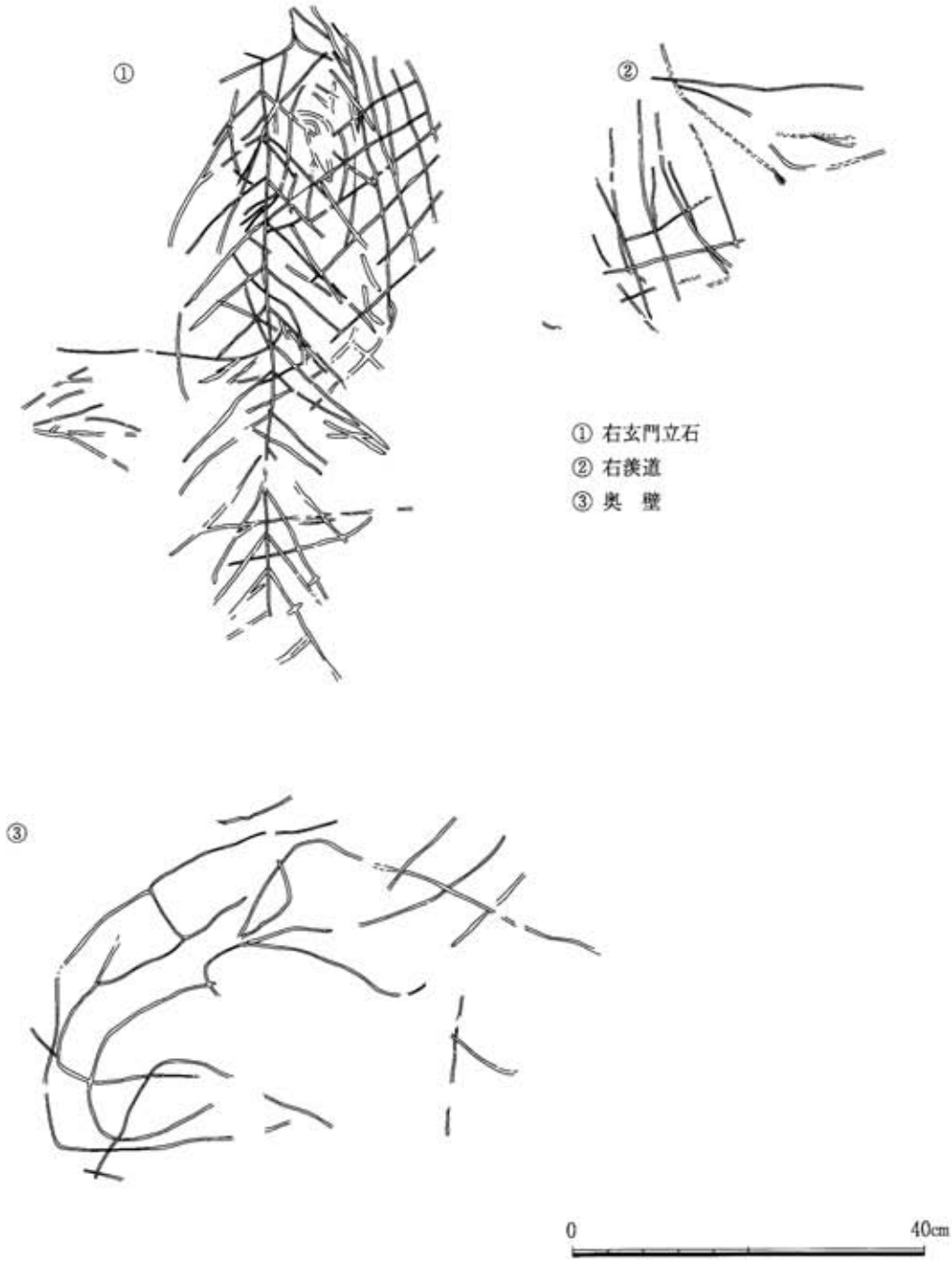


図129　ＳＴ014古墳石室線刻文様（１／８）

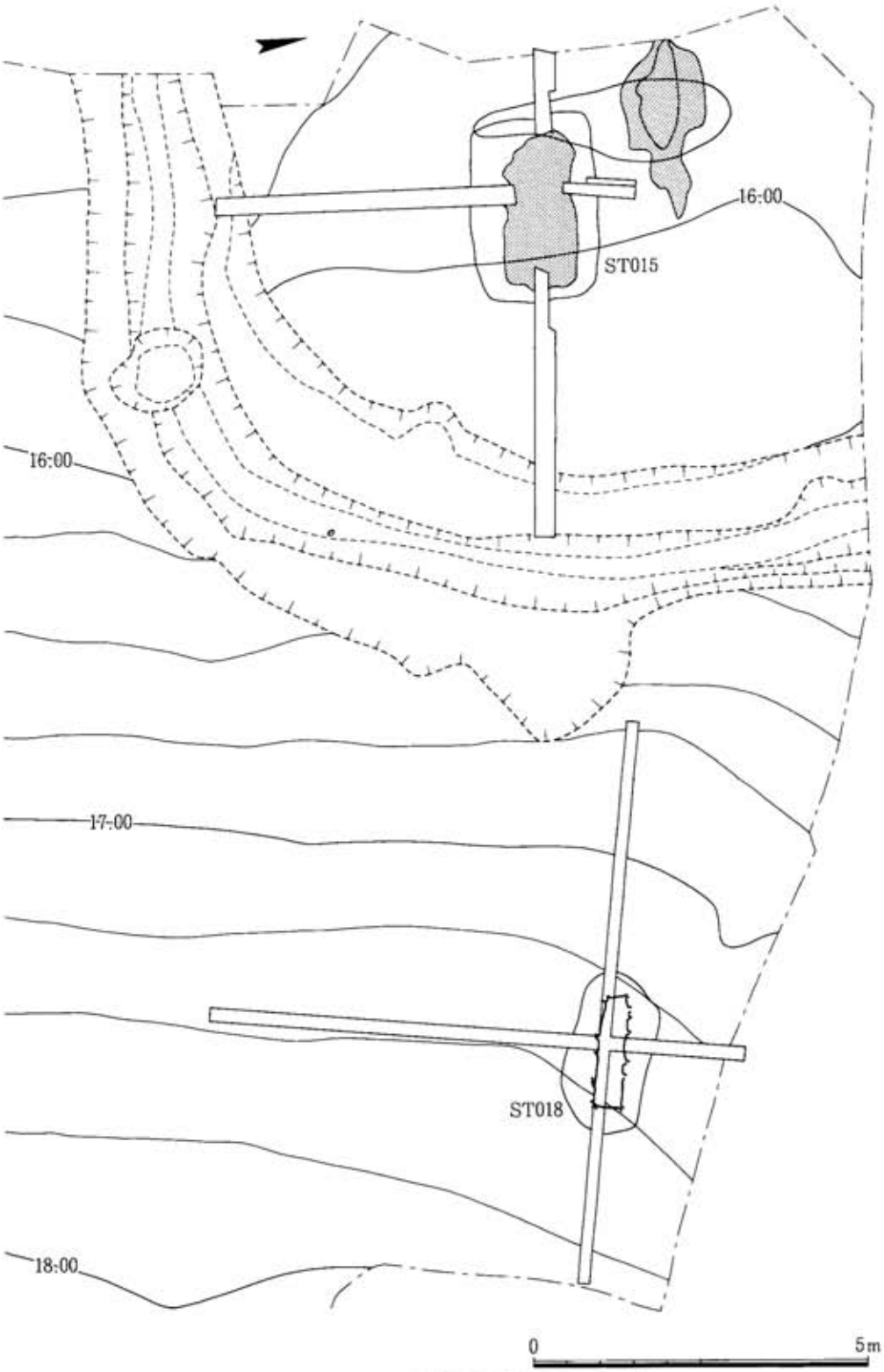


図130　ＳＴ015・018古墳墳丘測量図（１／100）

ＳＴ015古墳（写真図版69）

概要

調査区の北西端に位置する。西は片白公民館の敷地でカットされ、北側は急な斜面である。東隣にはＳＴ018古墳がある。

墳丘・周溝

調査前に墳丘の高まりはほとんど観察されなかったが、調査によっても盛土等はまったく確認されなかった。周溝が南東側のコーナーを中心にＬ字状の平面形で全体の約２分の１が検出され、一辺が14ｍの方墳ということがわかった。残り２分の１は調査区外になるが、隣接地は上記のような土地状況であり大半は残っていないと考えられる。周溝の幅は約2.0ｍであるがコーナー部では3.52ｍと広い。深さは0.8～1.4ｍを測る。断面形は逆台形に近い（図131）。また、南東部に円形の掘込みが見られたが性格は不明である。

内部主体

表土除去後、墳丘の中央に東西方向に長い２ヵ所の粘土の痕跡がみられたが、検出の結果２基の埋葬施設が確認された。

（北側主体）

位置的に北側のものを北側主体とする。調査区西端の土手に切られる状況で長さ3.0ｍ、幅1.6ｍの隅丸長方形の墓壙とその中央部に長さ2.7ｍ、幅1.2ｍの中央が落ち込んだ粘土の面が確認された（図132）。これに四分法でトレンチを設定したところ、当初床面を認識できず掘り下げ

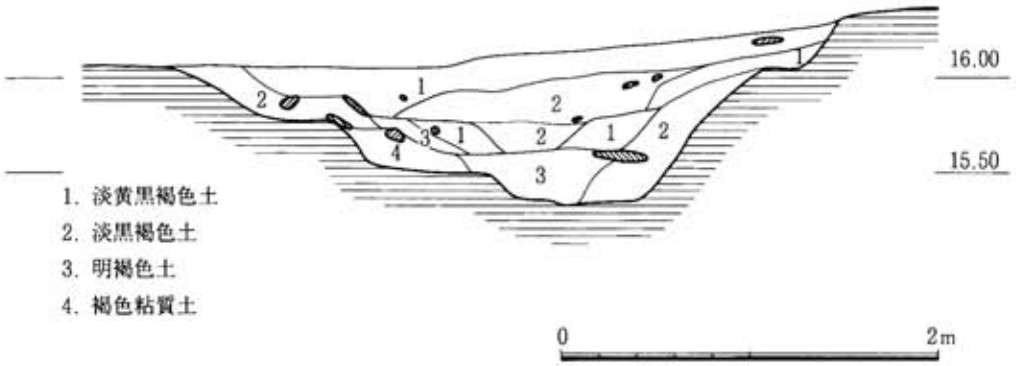


図131　ＳＴ015古墳周溝土層図（１／40）

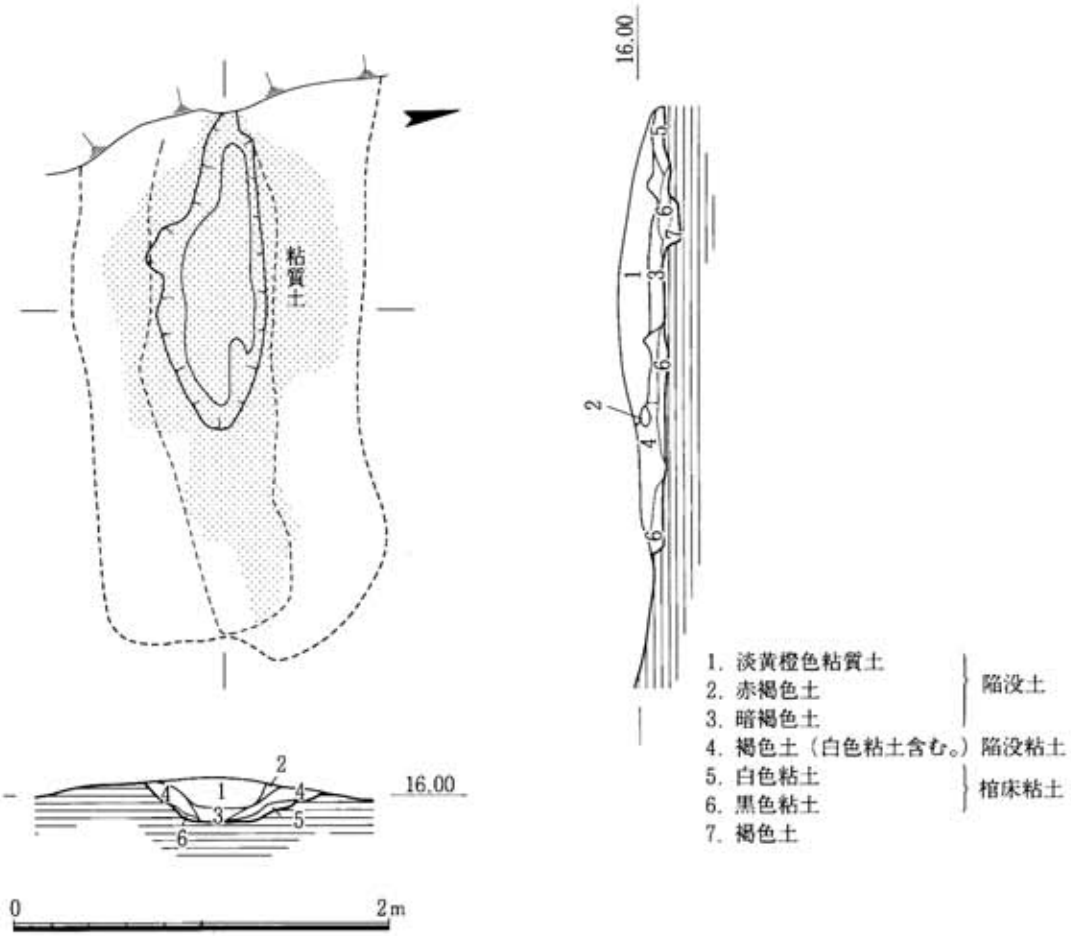


図132　ＳＴ015古墳北側主体１（１／40）

てしまった。その時点で断面により再観察したところ上部の被覆粘土が落ち込んだ断面Ｕ字形の棺痕跡が確認され、この時点で当主体は割竹形木棺と考えられた。そこで次に、この落ち込んだ粘土を除去し棺底と考えられる面まで掘り下げたが、この段階で西隅で赤色顔料、東側で鉄剣と鉄鎌が検出され棺底であることが確定できた。東側が削平されているが外法で径0.6ｍ、長さ2.6ｍ程度に復元される（図132）。さらにこの粘土を除去したところ先に検出されていた墓壙とその中央に棺床を作るための長さ2.6ｍ、幅0.65ｍ、深さ0.01ｍ程の掘込みが確認された（図133）。これによって、北側主体の構築はまず掘り方と中央の掘込みを作り、次にこの中央の掘込みに粘土を入れ棺床を作り棺を設置する。そして、埋葬後棺上部を粘土で被覆する、という過程が想定される。頭位方向は東で、Ｓ79°Ｅである。

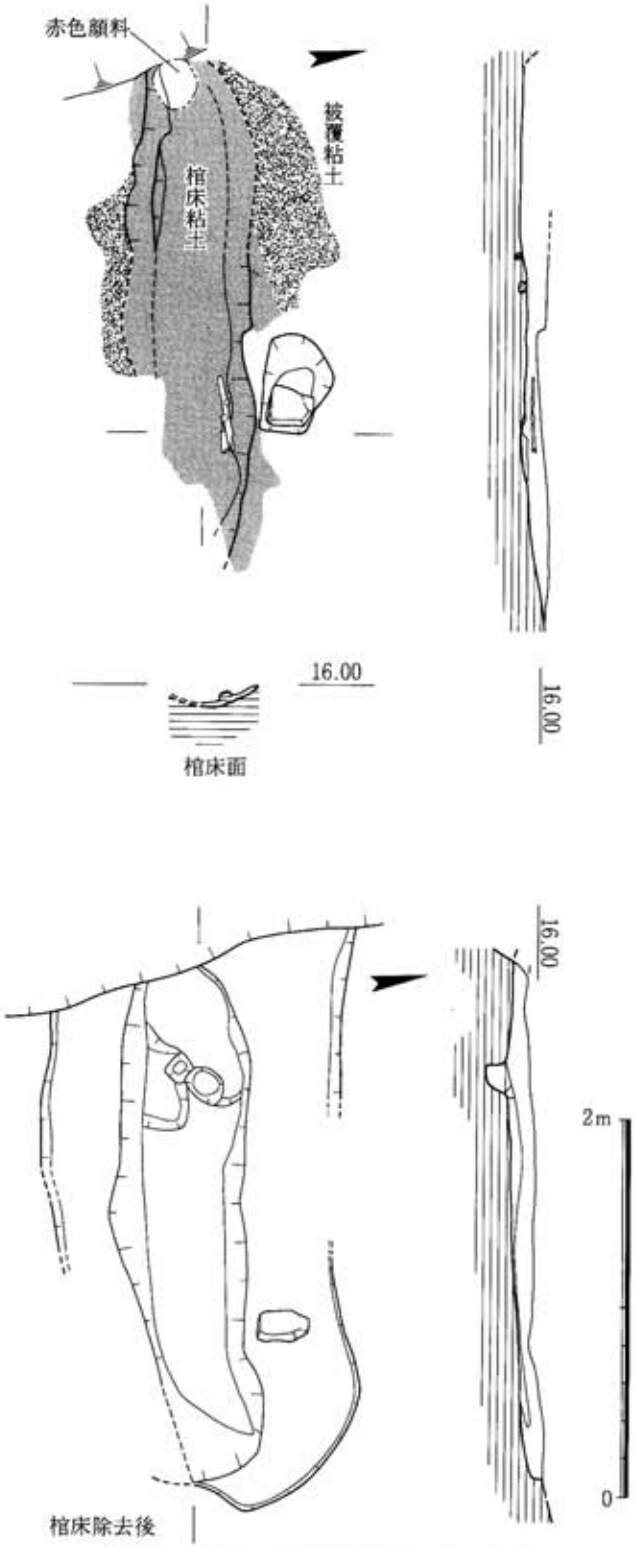


図133　ＳＴ015古墳北側主体２（１／40）

（南側主体）

北側主体の南に約1.5m離れて位置し、同様に掘り方と粘土の痕跡が確認された。墓壙は長さ2.38m、幅1.12mの隅丸長方形である。調査の結果、側板と小口板の痕跡が墓壙底に明瞭に確認された。また特に土層断面で、主軸方向の西側小口板の他は、板材の外面の立ち上がり線が確認されたので長方形の組合せ式の箱式木棺と考えられる（図134）。外法で長さ2.0m、中央幅0.64mを測るが板の厚みを考慮すると数cmずつ小さくなる。墓壙底の掘り方を見ると、西の小口が東より広く、頭位は西と考えられ、N81°Wの方向である。

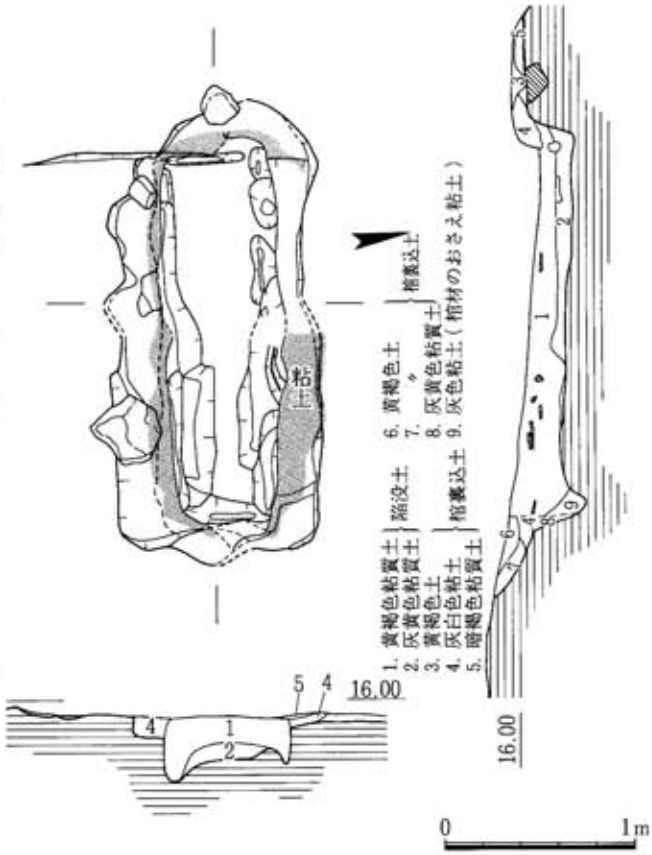


図134　ＳＴ015古墳南側主体（１／40）

遺物の出土状況

北側主体の棺内東の北脇から、鉄剣１口と鉄鎌１点および鉄鉇が重なって出土した。鉄剣は切先が西を向いており、頭位を東とする根拠となった。この位置は、埋葬者の右胸脇辺りの位置と推定される。南側主体からは遺物は出土しなかった。

また、周溝の南東コーナーの底から土師器の鉢１点が出土した（図135）。

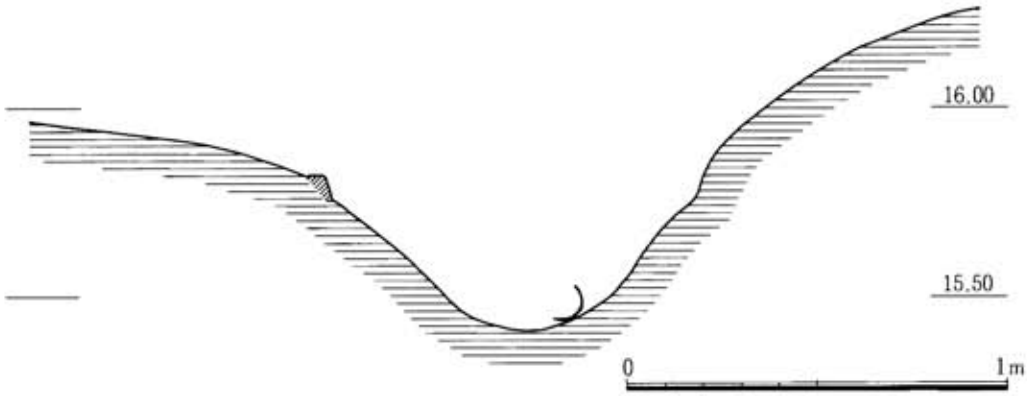


図135　ＳＴ015古墳周溝内遺物出土状況（１／20）

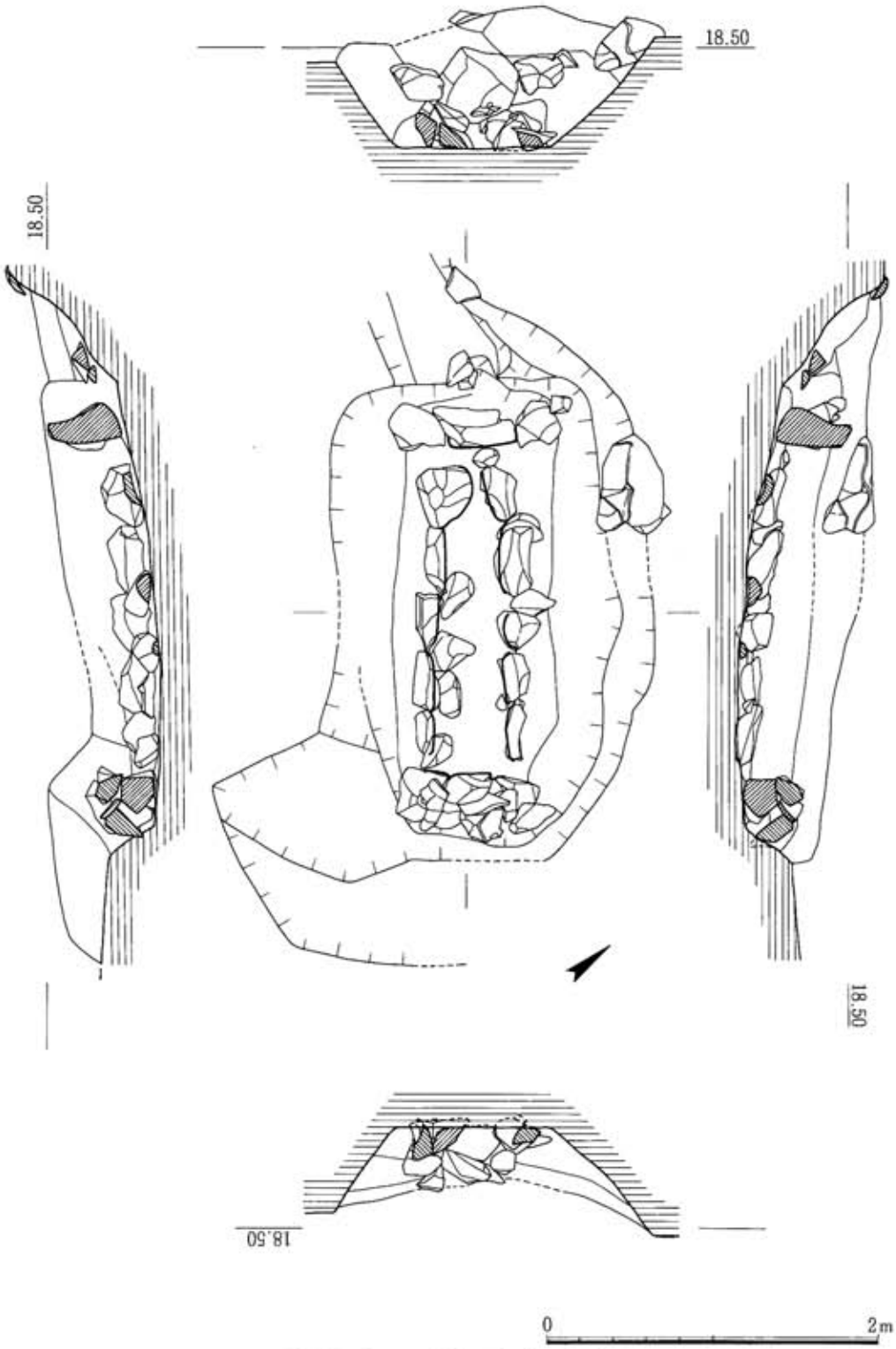


図136　ＳＴ017古墳石室（１／40）

ＳＴ017古墳（写真図版70）

概要

調査区の北側に位置する。ＳＴ002古墳の南でＳＴ013古墳と重複して確認されたが、当墳が先行して作られている。

墳丘・周溝

墳丘及び周溝は全く確認されず、掘り方と石室の基底部のみが残っていた。

内部主体

墓壙は長さ3.0ｍ、幅1.94ｍの概略隅丸の長方形である。石室は大半の石材は抜き取られ石室構造は不明な点が多い。西側の小口は小形の礫で積み、東側のそれは框石上の１石が残っているので竪穴系横口式石室の可能性もあるが正確には判断がつかないので小形の竪穴式石室とした。側壁は0.2ｍ前後の角礫を最下段に並べる。規模は内法で長さ1.94ｍ、幅は西側が0.4ｍ、東側が0.34ｍを測る。小口は東が狭く西が広いので西側の頭位と考えられ、頭位方向はN52°Wである。

遺物の出土状況

遺物は検出されなかった。

ＳＴ018古墳（写真図版70）

概要

調査区の北西部に位置し、西端のＳＴ015古墳とＳＴ013・017古墳の中間に位置する。

この古墳も当初は予想されず、調査の後半に墓壙や石材が確認されたが、天井部および壁上部は既に消失していた。なお、かつてＳＴ018として紹介した古墳（近藤1992）は、今回は都合によりＳＴ022と遺構名を変更した（５．まとめ参照）。

墳丘・周溝

墳丘・周溝は確認されなかった。

内部主体

墓壙は長さ2.4ｍ、幅1.43ｍの平面がややいびつな隅丸長方形である。現状の深さは0.4ｍで

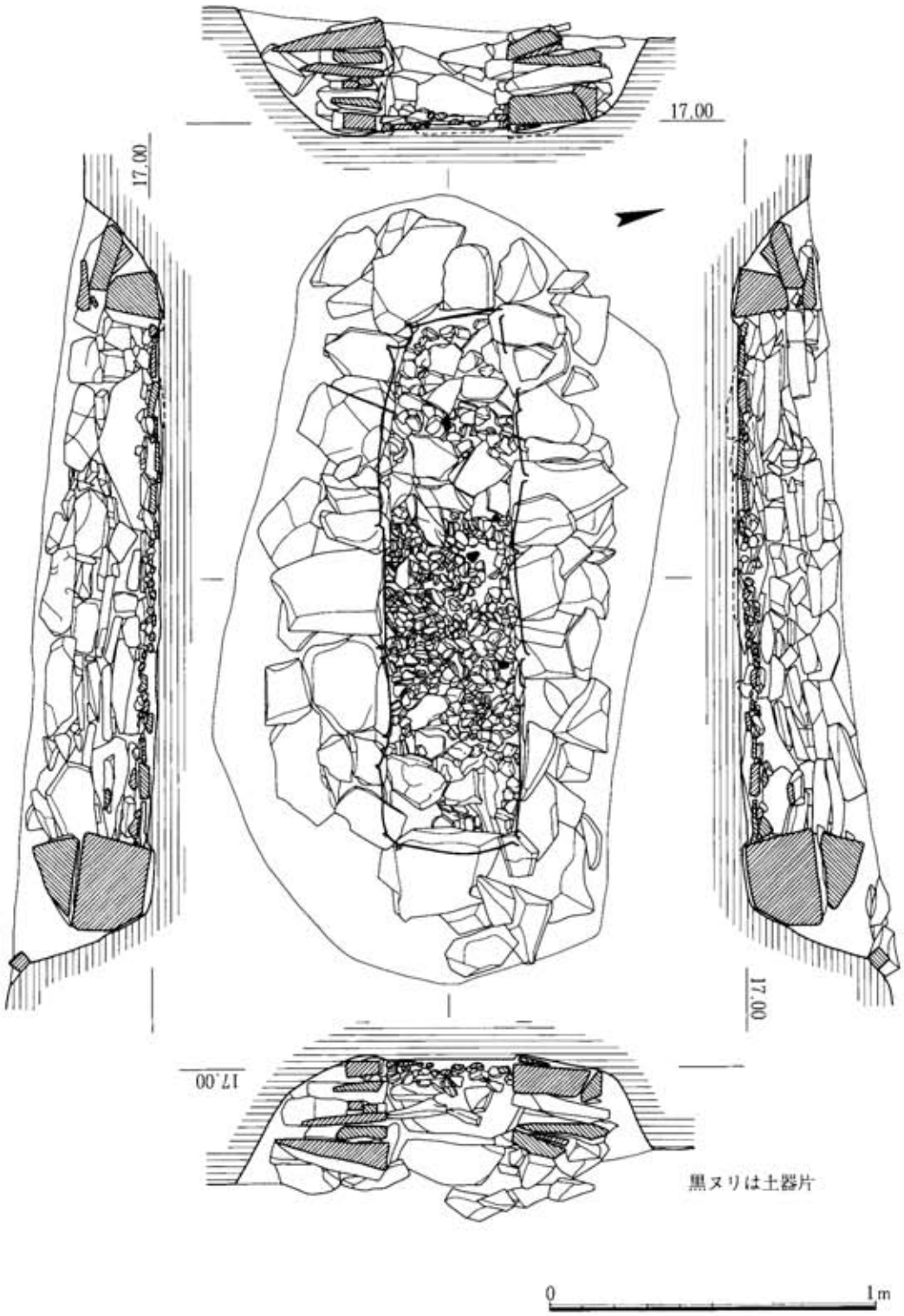


図137　ＳＴ018古墳石室（１／20）

比較的緩やかに立ち上がるが、小口側は東側が西側よりさらに緩やかである。石室は小形の竪穴式石室である。内法で長さ1.63mを測り、幅は東小口から大半が0.4mの規模であるが西隅付近で0.28mにすぼまる。これより、東頭位と考えられ頭位方向はS76°Eである。側壁は最下段より幅0.1～0.3m、厚さ0.05m前後の板石を小口積みを基本にして積み上げる。小口側は最下段に幅0.3～0.4m、高さ0.15～0.2mの大形の石を置きそれ以上は板石を小口積みする。床面は、東の小口付近と西の約2分の1が幅0.15m程度の板石中心の敷石で、その間の中央付近のみが小円礫の敷石である。東小口は頭位と関連する可能性も考えられるが積極的な根拠はない。

遺物の出土状況

石室内からガラス小玉1と時期不明の土器細片が出土したが、確実に伴うものかは慎重を要する。

ＳＣ016石棺墓（写真図版71・72）

概要

調査区の北端に位置し、ＳＴ002古墳石室のほぼ直下に検出された。ＳＴ002古墳の床敷石を除去し石室掘り方の下面を調査する段階で確認されたもので、ＳＴ002古墳の敷石と本石棺墓の蓋石との間隔は10cm以内であった。

墳丘・周溝

墳丘・周溝は確認されなかった。

墓壙・棺

墓壙の規模は蓋石の下面までは長さ2.06m、幅0.54mの隅丸長方形であるが、側板より下側は長さ2.0m、幅0.5mと側板に接する規模に縮小し2段掘りとなっている。

石棺は、内法で長さ1.78m、頭位側の北西小口が0.34m、足位側の南東小口が0.22mの規模を測る。床面までの深さは0.2mである。蓋石は幅0.4～0.8mの板石5枚を基本に丁寧にかぶせている。側板も板石を用いているが、両側とも0.8m程度のものを2枚横位に頭位側から置き足位側の端部に小形の板石を足している。小口石も同様の板石である。

遺物の出土状況

棺内頭位側左側石に近い床面より器種不明の鉄器片が1点出土した。また、2体の人骨が検出された。いずれも成人で、頭骨を中心に残り、四肢骨も若干確認されたが、性別は不明である。いずれも北西頭位である。

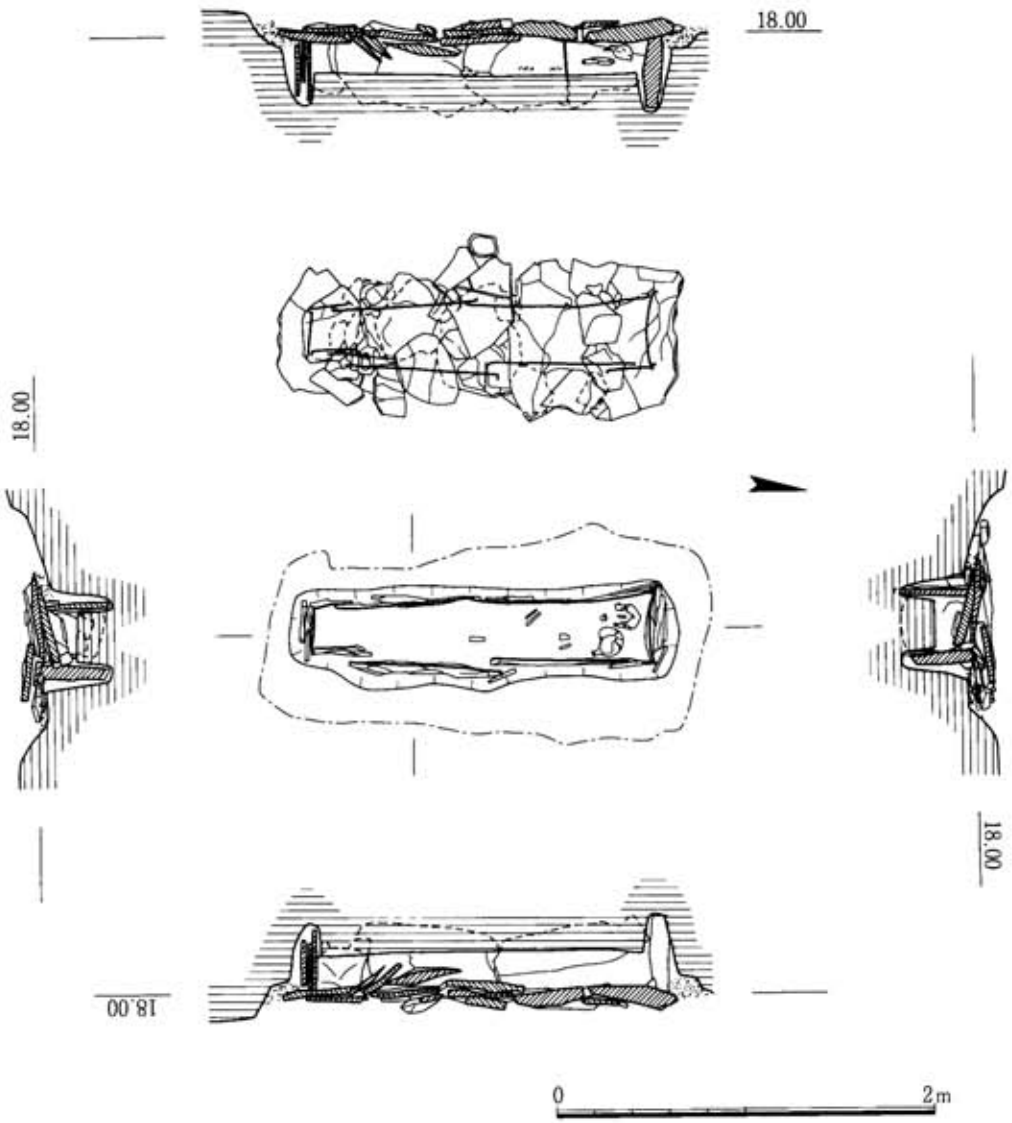


図138　ＳＣ016石棺墓（１／40）

参考文献

近藤義郎　編　1992　前方後円墳集成　九州編　山川出版社

(2) 遺物

前項で述べたとおり、当遺跡から出土した古墳時代の遺物は須恵器・土師器などの土器類、武器・馬具・工具などの鉄器類、耳環・玉類などの装身具類などに大別される。

しかしながら、ＳＴ018古墳については小片で図示するに耐えなかった。また、ＳＴ017古墳・ＳＣ016石棺墓では出土遺物は検出されていない。したがって、本項では残りの５基の古墳について記述するが、古墳の中でも墳丘・周溝・玄室などの出土位置に分けて説明する。また、編年の基準については須恵器を用い、最初に記述に必要な若干のまとめを編年に都合の良い須恵器杯蓋と杯について行う。

１　杯蓋

杯蓋Ａ　　口縁部に身受けの付かないもの。

Ａ－１　口径13～13.7cm、器高４cm前後のもので、口縁部はまだ、垂直に近く立ち上がり、天井部へ丸味をもって移行する。口縁部は天井部と口縁部の境が鈍い稜や凹線を持ち、口縁端部に内傾する面を有するものがある。外面は、全面の1/2～1/3にヘラケズリを施す。

Ａ－２　口径10.2～13.0cm、器高３～４cm前後のもので、口縁部は短く立ち上がり、丸くあるいは角をなして天井部へ移行する。天井部と口縁部の境の稜や凹線はなく、口縁端部は丸い。外面のヘラケズリは、全面の1/3以下に極めて粗雑な回転ヘラケズリを施すか、切り離しのままである。

杯蓋Ｂ　　口縁部に身受けが付き、撮みがないもの。身受けは短く口縁部より低い。天井部は平たい。類例に乏しく１例のみ。口径11.2cm、器高1.2cmである。

杯蓋Ｃ　　口縁部に身受けが付き、撮みが付くもの。

Ｃ－１　撮みは、上端の丸い円柱形。身受けは短いが、口縁部より若干高い。器高は、比較的高く、天井部は丸い。口径8.6cm、器高2.5cmである。

Ｃ－２　撮みは、下部がくびれた円錐形で、いわゆる宝珠形を呈する。身受けは短いが、口縁部より若干高い。器高は、比較的高く、天井部は丸味を残す。口径13cm前後、器高３cm程度である。

Ｃ－３　撮みは、上部に若干ふくらみを持つ偏平な形態。身受けは短く、口縁部と同程度の高さ。器高は2.7cmでＣ－２と同程度であるが、口径14.6cmと大きくなる。

２　杯

杯Ａ　　蓋受けの付くもの。

Ａ－１　杯は、蓋受けが、低くなり内傾度が増すもののＡ－２のものほどではない。口縁

端部の内傾する面はない。外面のヘラケズリは、杯蓋とも全面の1/2以下が大半であるが、底面未調整もある。杯の法量は口径11.5～14.4cmで、立ち上がりが高いが1.1～1.6cm程度である。器高は、良好な資料が少ないが、概ね3.9～4.9cmである。

A－2　蓋受けがさらに低くなり内傾度が増す。口縁端部の内傾する面はない。外面のヘラケズリは、全面の1/3以下に極めて粗雑な回転ヘラケズリを施すか、切り離しのままである。また、杯の法量は口径8.2～12.5cmで、立ち上がり高が0.6～1.0cm程度である。法量から二分される可能性もあるが、保留する。

杯B　丸味のある平底に口縁部が立ち上がるもの。高台無し。口径7.8～10.6cm、器高3.1～3.8cm。

杯C　高台の付くもの。体部は斜めに立ち上がる。高台は、外方向に張り出し、踏ん張るような形態の高台が付く。口径14～15cm、器高3.9cm。

杯D　平底で、体部は斜めに立ち上がる。高台は付かない。口径13.2cm、器高3.4cm。

以上を小田編年に対応させると杯蓋・杯のA－1がⅢB期、A－2がⅣ期、杯蓋B・C－1と杯BがⅤ期、杯蓋C－2・C－3と杯CがⅥ期になる。また、杯DはⅦ期の終わりごろに位置付けたい。

表11　須恵器杯蓋型式の編年対照表

小田編年	杯蓋	杯
ⅢB	A－1	A－1
Ⅳ	A－2	A－2
Ⅴ	B	B
	C－1	
Ⅵ	C－2	C
	C－3	
Ⅶ		D

ＳＴ001古墳出土遺物（写真図版73）

鉄器

玄室内から、鉄器が出土している。79・80は鉄鏃。79は先端を欠くが、かえりのある平根腸抉三角形式。茎には木質が残り、樹皮が巻かれている。80も平根式であるが、基部以下を欠く。圭頭ないし腸抉柳葉式。

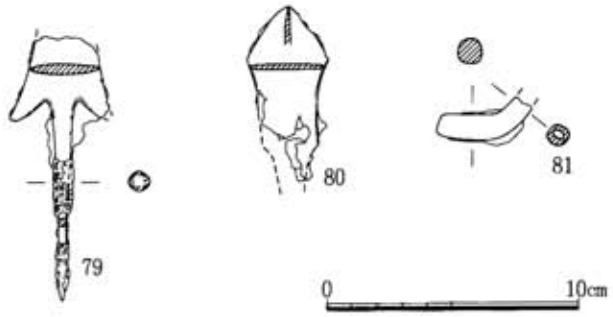


図139　ＳＴ001古墳出土遺物（１／３）

81は、径８㎜程度の円柱状の鉄片。カーブしており、兵庫鎖の可能性が考えられるが不明確である。

表12　ＳＴ001古墳出土鉄鏃観察表　　（　）は残存長

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	型　式	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号	図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	型　式	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号
			鏃身長	鏃身幅					鏃身長	鏃身幅	
139－79 73	石室内No.6	平根 腸抉三角形	(3.35)	(3.9)	92003635 960131	－80 73	No.1	平根　圭頭	6.0	3.15	92003634 960131

表13　ＳＴ001古墳出土鉄器観察表　（　）は残存長

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号
			最大幅	高　さ	
139－81 73	No.7	兵庫鎖？	(3.75)	(1.7)	92003636 960131

ＳＴ002古墳出土遺物（写真図版73～75）

土器

82は、須恵器杯身。歪がひどく口径復元不能である。Ａ－２類。83は、須恵器高杯。杯部のみの破片。84は、須恵器壺。口縁部のみの破片で、波状文が付く。

85は、口縁部が内湾気味に立ち上がる直口の須恵器壺。底部は丸底。肩部にいわゆる耳が４つ付く。肩部から胴部にかけて緑色の自然釉が掛かっている。外面は上部が平行叩きの後カキ目で撫で消し、下部は叩きを残す。内面は同心円叩き。

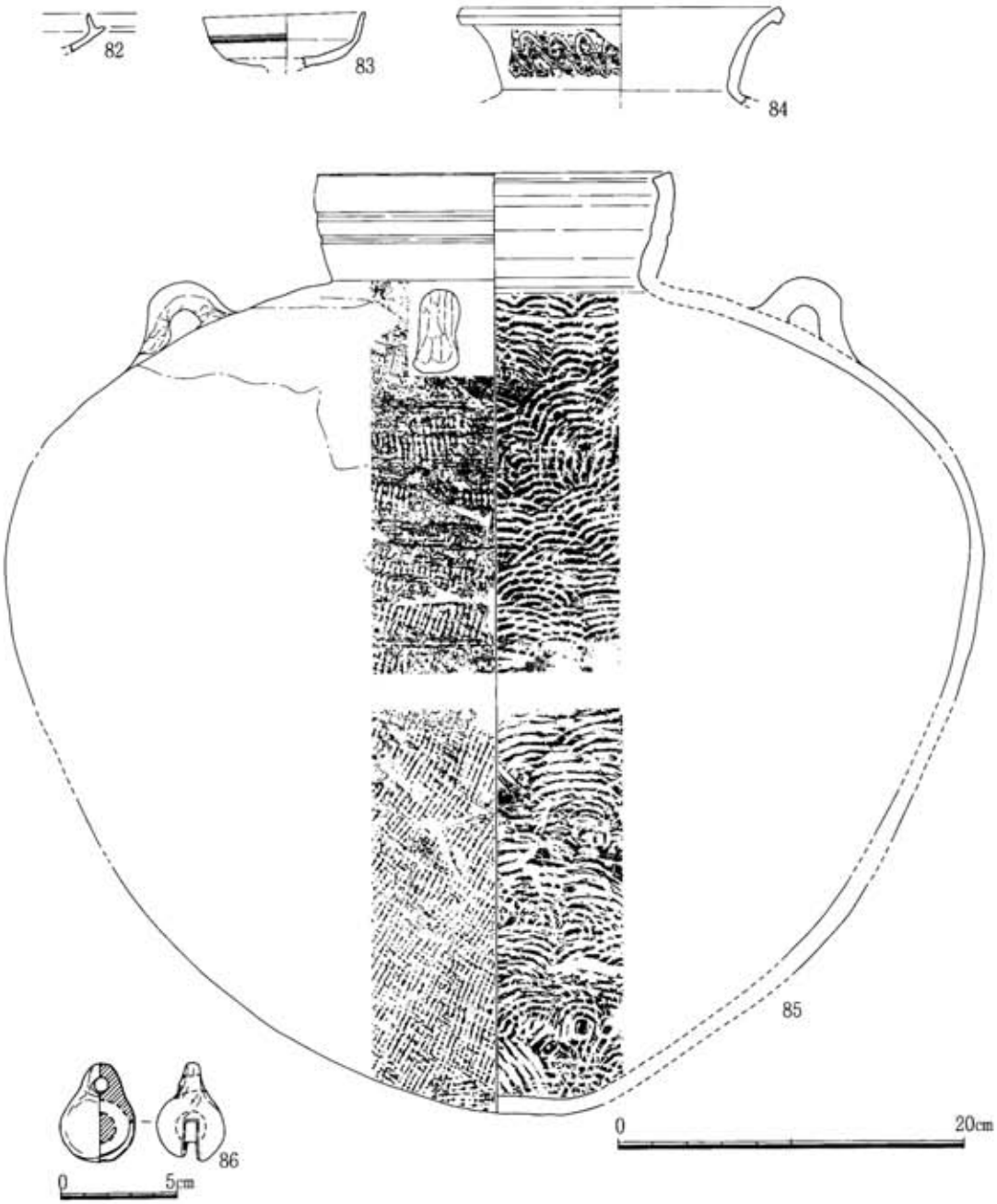


図140　ＳＴ002古墳出土遺物（82～85は１／４・86は１／3）

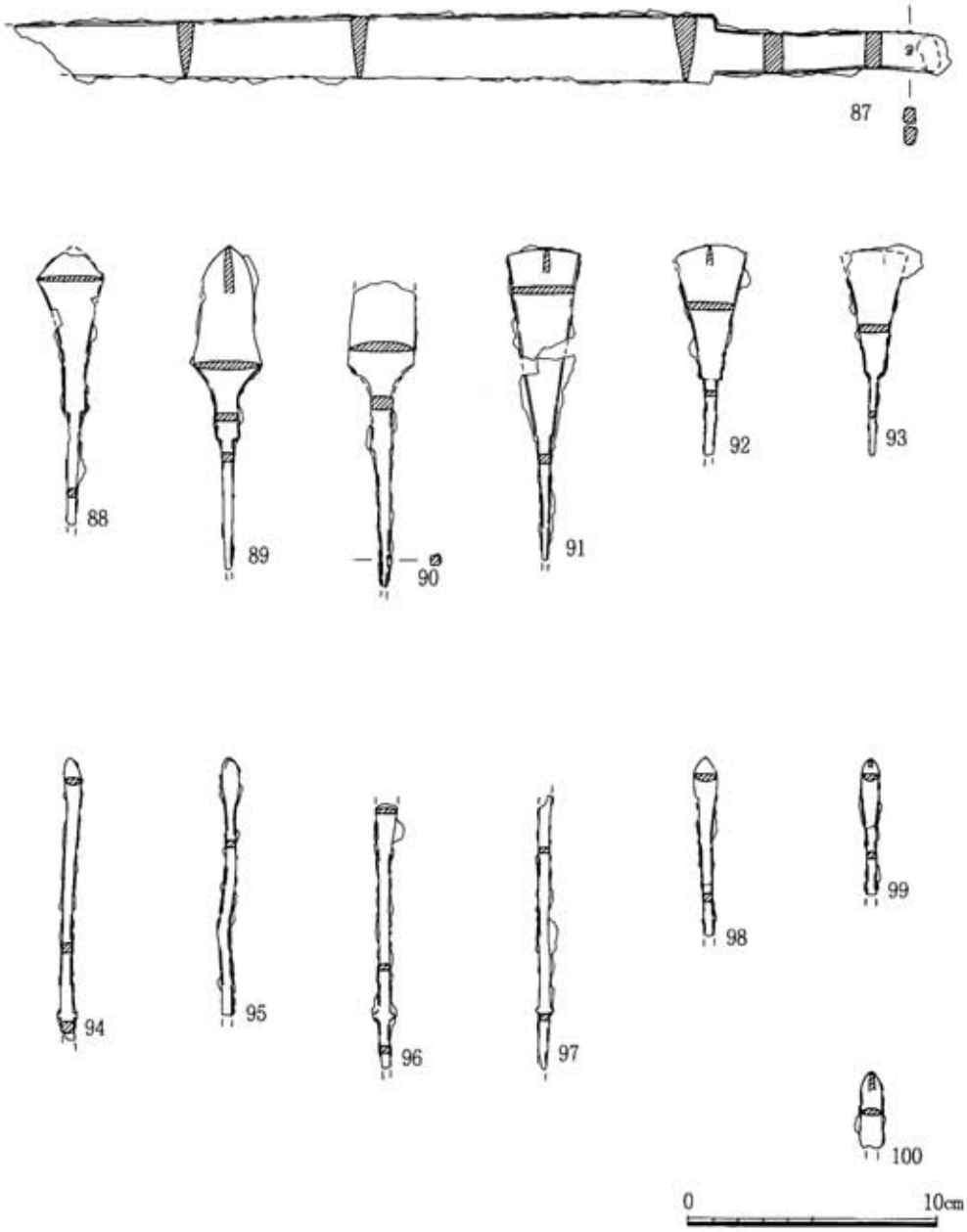


図141　ＳＴ002古墳出土鉄器（１／３）

土製品

86は、土鈴。墳丘盛土内から出土したもの。比較的器壁の薄い作りである。

表14　ＳＴ002古墳出土土器観察表　　Ａ：口径　Ｂ：器高　Ｃ：たちあがり高　Ｄ：底径　（　）は残存長

図—遺物番号 写真図版番号	出土地点	器種	法量(cm)	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
140—82	周　溝	杯　身	C：0.8	蓋受けの立ち上がりは短く，内傾する。	暗灰色	良	94001356
—83	周　溝	高　杯	A：(9.2)	無蓋高杯の杯部。体部と口縁部の境に沈線。	明灰～黒褐灰色	良	94001353
—84	墓　道	壺	A：(18.3)	口縁端部は肥厚。頸部に櫛描波状文。	褐灰色	良	96000816
—85 73	周　溝	壺	A：20.2 B：54.5	体部の上半に最大径があり，底部にむかってややすぼまる。口縁部は内湾する直口。肩部に４個の把手。体部に自然釉。	褐灰～緑灰色	良	92000757 931229

表15　ＳＴ002古墳出土土製品観察表

図—遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号
			タテ	ヨコ	
140—86 73	墳丘盛土中	土　鈴	4.2	3.2	93002107 960132

表16　ＳＴ002古墳出土鉄刀観察表　（ ）は残存長

図—遺物番号 写真図版番号	出土地点	種類	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号
			最大長	最大幅	
141—87 74		短　刀	(37.05)	2.75	92003649 960133

表17　ＳＴ002古墳出土鉄鏃観察表　　（ ）は残存長

図—遺物番号 写真図版番号	出土地点	型　式	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号	図—遺物番号 写真図版番号	出土地点	型　式	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号
			鏃身長	鏃身幅					鏃身長	鏃身幅	
141—88 74	No.5，No.8	平根　圭頭	(6.45)	2.7	92003651 960135	—95 74	No.13	尖根　小形柳葉	2.1	0.65	92003644 960135
—89 74	No.5	平根　椿葉	4.75	(2.75)	92003648 960135	—96 74	No.12	不明	(2.1)	(0.9)	92003643 960135
—90 74	No.5	平根　不明	(3.4)	2.7	92003652 960135	—97 74	No.11	不明			92003642 960135
—91 74	No.5，No.25	平根　方頭	7.55	2.9	92003650 960135	—98 74	No.5，No.18	尖根　小形柳葉	3.0	0.95	92003640 960135
—92 74	No.16	平根　方頭	5.4	(2.8)	92003646 960135	—99 74	No.6，No.18	尖根　小形柳葉	2.3	0.7	92003647 960135
—93 74	No.15	平根　方頭	5.2	(2.4)	92003645 960135	—100 74	No.27	尖根　小形柳葉	(3.15)	0.9	92003658 960135
—94 74	No.10	尖根　小形柳葉	2.0	0.65	92003641 960135						

鉄器

鉄器は、いずれも玄室内から出土したもので、武器に限られる。87は鉄刀。両関式で切先を欠く。88～93は平根式鉄鏃。88は圭頭式。89・90は柳葉式。91～93は方頭式であるが、92の鋒は円頭に近い。94～100は、尖根式鉄鏃。鋒の知れる94～96・99・100は、いずれも柳葉式。

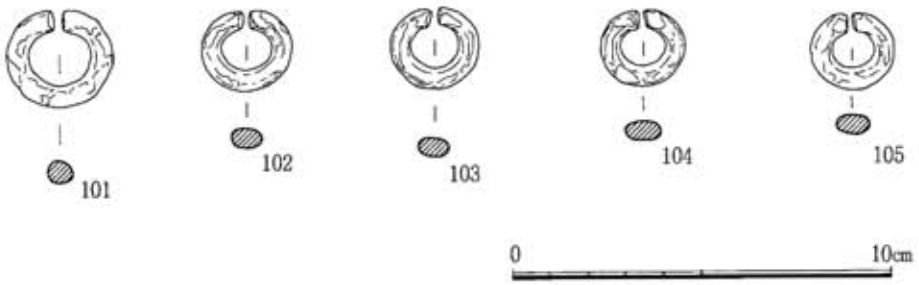


図142　ＳＴ002古墳出土耳環（１／２）

耳環

玄室内から、５点出土した。いずれも銅芯である。101は、最大径が2.85cmと他の４点より大形であるが表面は腐食し、金銀の区別は不能である。103・104は金張、102・105は銀張で、最大径は2.2～2.4cmである。

表18　ＳＴ002古墳出土耳環観察表

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号	図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号
			最大外径	最大幅					最大外径	最大幅	
142－101 75	No.34	耳環 (銅地 表面不明)	2.85	0.6	92003657 960137	－104 75	No.6	耳環 (銅地金張)	2.2	0.55	92003653 960137
－102 75	No.17	耳環 (銅地銀張)	2.4	0.55	92003655 960137	－105 75	No.24	耳環 (銅地銀張)	2.2	0.55	92003656 960137
－103 75	No.16	耳環 (銅地金張)	2.35	0.6	92003654 960137						

玉類

玄室および羨道からの出土で、勾玉、管玉、切子玉、丸玉がある。106･107は勾玉。106はメノウ製、107はヒスイ製である。108は、碧玉製の管玉。109～112は、水晶製の切子玉。113～141は丸玉であるが、113はヒスイ製。114は滑石製。129はメノウ製である。また、117～128、130･131はガラス製。117は、腐食して色調不明。他は紺色・緑色・空色があり、紺色が多い。115・116・132～141は土製で、表面は漆黒色を呈する。

小結

本墳の出土遺物のうち年代の目安になるものは少なかったが、杯身はＡ－２類で小田編年のⅣ期である。また、壺は福岡県宇美町岩長浦古墳群の６号墳および陶邑のＫＭ115号窯から出土しているものなど（宇美町教委1981、大阪府教委1976）に類似するが、前者は小田編年のⅢ－Ｂ～Ⅳ期、後者は中村浩氏のⅡ－５段階に位置付けられており、いずれも６世紀後半・末から７世紀の初頭と考えられる。したがって、本墳の造営期は６世紀後半・末から７世紀初めの間に置くことができるが、きわめて少数の須恵器からの判断であることに注意が必要である。

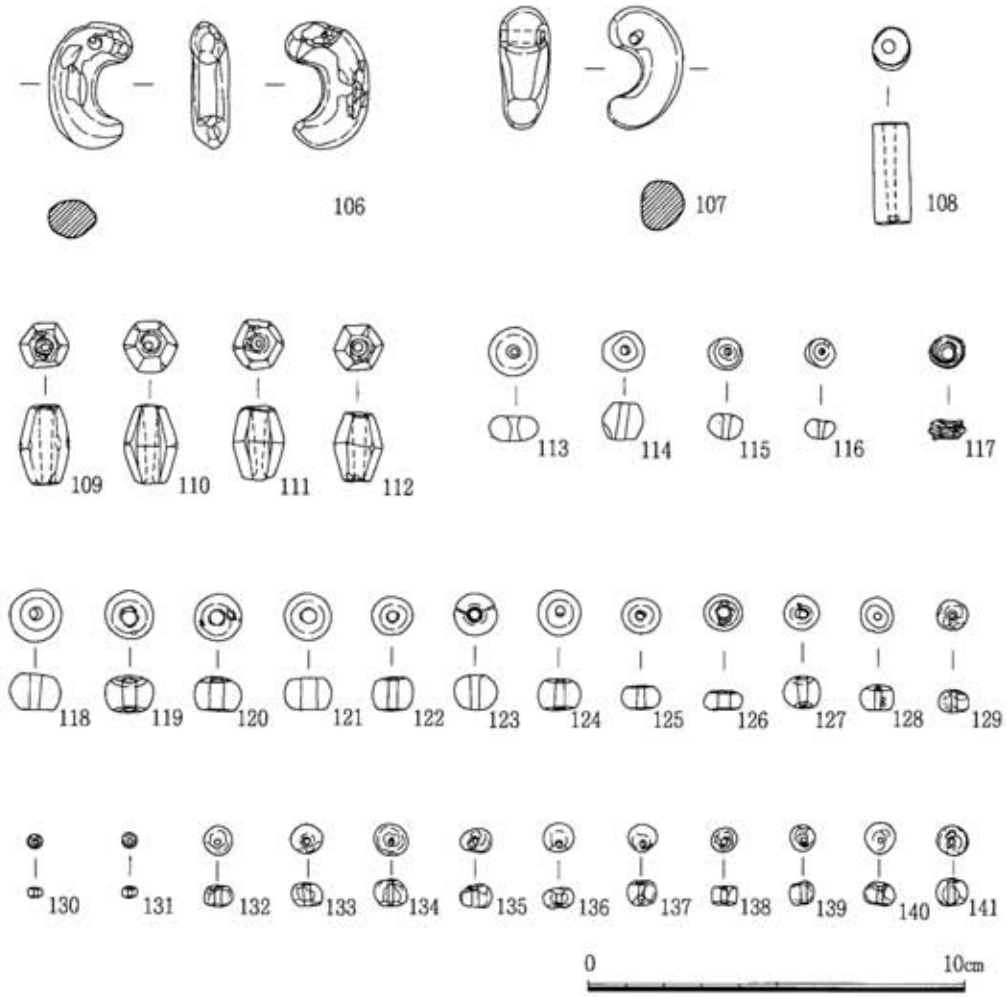


図143　ＳＴ002古墳出土玉類（１／２）

表19　ＳＴ002古墳出土玉類観察表

法量：丸玉は長径・短径　丸玉以外は長さ・幅

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種類	材質	法量(cm)		色調	県遺物登録番号 写真登録番号	図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種類	材質	法量(cm)		色調	県遺物登録番号 写真登録番号
143—106 75	No.2	勾玉	メノウ	3.35	2.22	明黄褐色	93001532 960138	—113 75		丸玉	ヒスイ	1.3	1.25	明るい水色と白が混っている	93002701 960138
—107 75	No.1	勾玉	ヒスイ	3.22	2.0	灰白色 (風化している)	93001531 960138	—114 75	羨道部 埋土中	丸玉	滑石	1.1	1.05	黒色	93001522 960138
—108 75	No.18	管玉	碧玉	2.68	1.0	深緑色	93002709 960138	—115 75	羨道部 埋土中	丸玉	土製	0.9	0.83	黒色	93001525 960138
—109 75	No.28	切子玉	水晶	2.1	1.35	透明	93002717 960138	—116 75	羨道部 埋土中	丸玉	土製	0.8	0.73	黒色	93001524 960138
—110 75	No.4	切子玉	水晶	2.1	1.4	透明	93001527 960138	—117 75	No.40	丸玉？	ガラス	0.95	0.85	乳白色	93002727 960138
—111 75	羨道部 埋土中	切子玉	水晶	1.97	1.38	透明	93001528 960138	—118 75	No.3	丸玉	ガラス	1.4	1.3	緑色	93001523 960138
—112 75	No.13	切子玉	水晶	1.85	1.3	透明	93002707 960138	—119 75	No.25	丸玉	ガラス	1.3	1.28	紺色	93002716 960138

図—遺物番号 写真図版番号	出土地点	種類	材質	法量(cm)		色調	県遺物登録番号 写真登録番号	図—遺物番号 写真図版番号	出土地点	種類	材質	法量(cm)		色調	県遺物登録番号 写真登録番号
143—120 75	No.12	丸玉	ガラス	1.25	1.2	紺色	93002706 960138	—131 75	No.38	丸玉	ガラス	0.4	0.4	空色	93002725 960138
—121 75	No.29	丸玉	ガラス	1.25	1.2	紺色	93002718 960138	—132 75	No.21	丸玉	土	0.78	0.75	表面は黒色（漆が塗ってある？）	93002713 960138
—122 75	No.10	丸玉	ガラス	1.08	1.0	紺色	93002705 960138	—133 75	No.20	丸玉	土	0.85	0.75	表面は黒色（漆が塗ってある？）	93002711 960138
—123 75	No.15 No.35	丸玉	ガラス	1.13	1.1	緑色	93002723 960138	—134 75	No.20	丸玉	土	0.9	0.85	表面は黒色（漆が塗ってある？）	93002710 960138
—124 75	No.30	丸玉	ガラス	1.2	1.1	紺色	93002719 960138	—135 75	No.21	丸玉	土	0.85	0.6	表面は黒色（漆が塗ってある？）	93002712 960138
—125 75	No.8	丸玉	ガラス	1.03	0.95	紺色	93002704 960138	—136 75	No.31	丸玉	土	0.8	0.75	表面は黒色（漆が塗ってある？）	93002721 960138
—126 75	No.7	丸玉	ガラス	1.0	0.95	緑色	93002703 960138	—137 75	No.39	丸玉	土	0.75	0.7	表面は黒色（漆が塗ってある？）	93002726 960138
—127 75	No.14	丸玉	ガラス	0.95	0.9	紺色	93002708 960138	—138 75	No.33	丸玉	土	0.7	0.6	表面は黒色（漆が塗ってある？）	93002722 960138
—128 75	羨道部 埋土中	丸玉	ガラス	0.95	0.87	濃紺	93001521 960138	—139 75	No.22	丸玉	土	0.7	0.65	表面は黒色（漆が塗ってある？）	93002715 960138
—129 75		丸玉	メノウ	0.85	0.8	半透明の オレンジ色	93002702 960138	—140 75	No.31	丸玉	土	0.83	0.78	表面は黒色（漆が塗ってある？）	93002720 960138
—130 75	No.37	丸玉	ガラス	0.4	0.38	うすい緑色	93002724 960138	—141 75	No.21	丸玉	土	0.85	0.75	表面は黒色（漆が塗ってある？）	93002714 960138

ＳＴ003古墳出土遺物（写真図版76～79）

土器

いずれも須恵器だが、周溝ならびに羨道前面の出土が大半で、玄室からは出土していない。杯蓋では154がＡ—１類、142・143がＡ—２類である。また、155はＣ—１類である。杯身は145・148・156・157がＡ—１類。144・146・147・158～164がＡ—２類で、156がＣ—１類である。その他には有蓋、無蓋の高杯がある。有蓋高杯には149・168の長脚のものと150・167のような短脚がある。149は二段スカシ。151・169・170は無蓋高杯。151は小形。169・170は杯部のみの破片で櫛描波状文が体部に施されている。152は短頸壺。153は甕。

表20　ＳＴ003古墳出土土器観察表１　　Ａ：口径　Ｂ：器高　Ｃ：たちあがり高　Ｄ：底径　（　）は残存

図—遺物番号 写真図版番号	出土地点	器種	法量(cm)	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
144—142	周溝No.12(羨道前面) 羨道前面土器A群	蓋	A：(13.1)		内面： 灰白色	良	92003167
—143 76	周溝	蓋	A：13.0 B：3.85	天井部と口縁部の境が不明瞭。 全面の⅓がヘラケズリ。	灰色	良	92003162 931700
—144	羨道前面表土中・羨道前面・土器集積1	杯身		蓋受けの立ち上りを欠く。 底体部の¼がヘラケズリ。	灰色	良	92003151
—145 76	周溝	杯身	A：(11.5) B：4.4 C：1.8	蓋受けの立ち上りは比較的高く，端部は丸い。	灰色	良	88002246 890449
—146	土器集積２・羨道トレンチ内・羨道前面表土中	杯身	A：(12.0) C：1.2	蓋受けの立ち上りは比較的低く，内傾する。	灰色	良	92003155
—147 76	周溝	杯身	A：(10.8) C：0.8	蓋受けの立ち上りは低く，内傾する。 底体部の¼がヘラケズリ。	灰色	良	88002248 890450
—148	周溝	杯身	C：(1.5)	蓋受けの立ち上りは比較的高く，端部は丸い。	灰色～ 褐灰色	不良	92003160

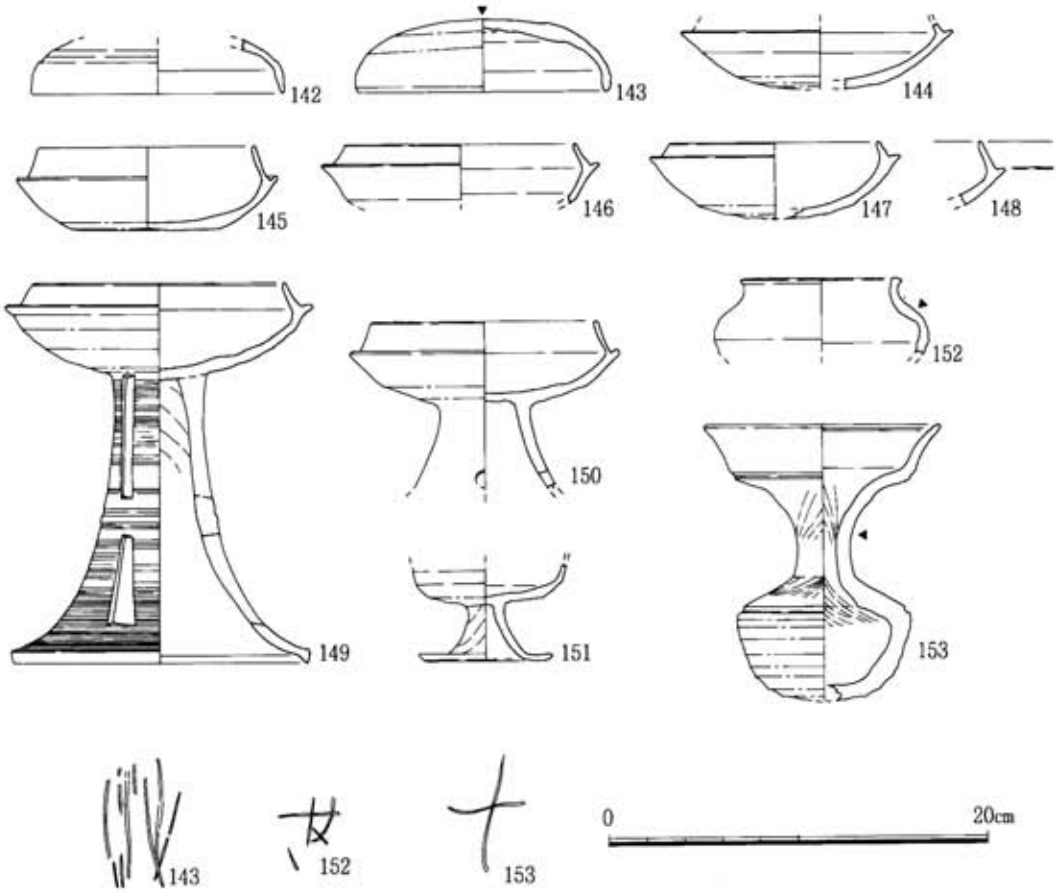


図144　ＳＴ003古墳出土土器１（１／４）

表21　ＳＴ003古墳出土土器観察表２　　Ａ：口径　Ｂ：器高　Ｃ：たちあがり高　Ｄ：底径　（　）は残存

図—遺物番号 写真図版番号	出土地点	器種	法量(cm)	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
144—149 76	周溝	高杯	A：(15.0) B：20.0 C：1.3 D：(15.4)	長脚二段スカシ。有蓋。 杯部底体部の1/3ヘラケズリ。脚部の全面にカキ目。	灰色で黄褐色がかっている	良	88002249 890563
—150 76	周溝	高杯	A：(11.6) C：1.8	短脚で円形のスカシ。有蓋。受け部の立ち上りは高い。杯部底体部の1/3をヘラケズリ。	灰色	良	88002247 890562
—151	周溝	高杯	D：6.2	短脚で小型。無蓋。杯部底面付近のみヘラケズリ。	灰色	良	91002604
—152	周溝	壺	A：(7.5)		外面:灰褐色 黄灰褐色 内面:薄灰褐色	良	88002243
—153 76	周溝	甕	A：(12.0)	口径が体部最大径より大きい。体部の残存部全部をヘラケズリ。	灰褐色	良	88002244 890561

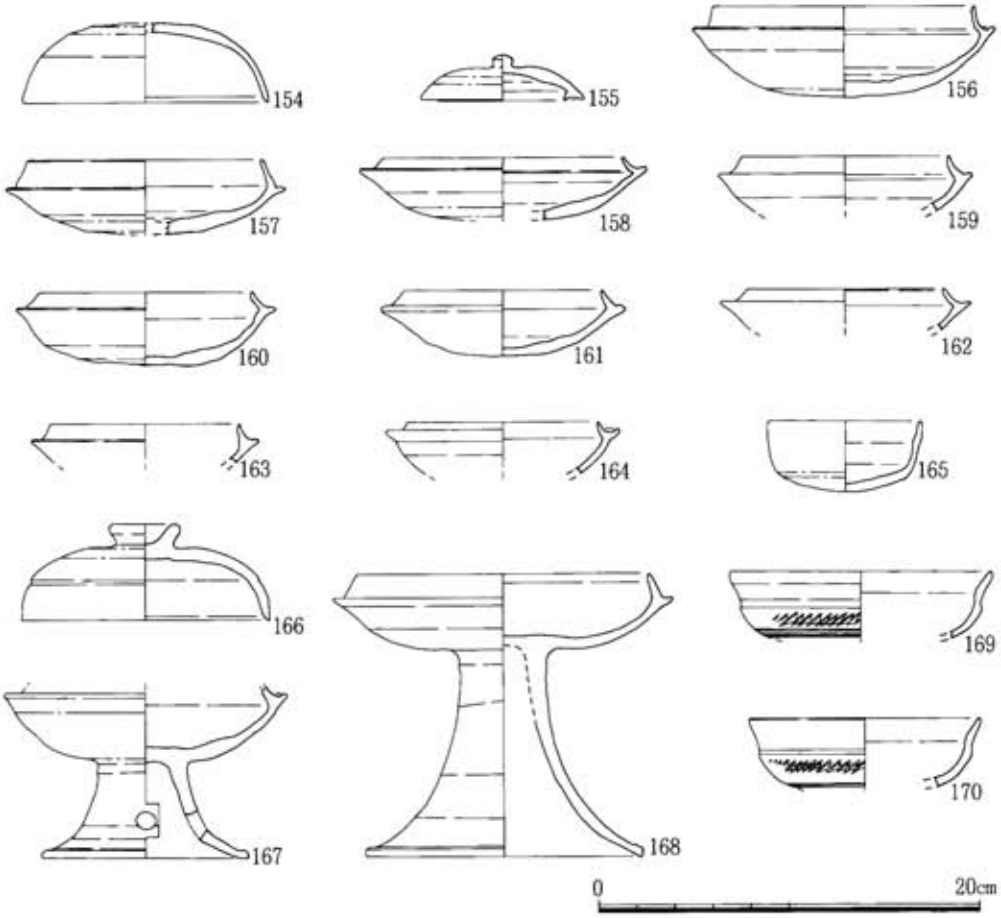


図145　ＳＴ003古墳出土土器２（１／４）

表22　ＳＴ003古墳出土土器観察表３　　Ａ：口径　Ｂ：器高　Ｃ：たちあがり高　Ｄ：底径　（　）は残存

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	器　種	法量(cm)	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
145—154 77	渋道前面表土中 土器Ａ群	蓋	Ａ：(12.9) Ｂ：4.3	天井部は比較的高く立ち上り，口縁内面に面を残す。天井部の頂部付近のみヘラケズリ。	内面：灰色 外面：褐灰色～暗灰色	良	92003163 931711
—155 77	渋道前面 土器Ａ群	蓋	Ａ：8.6 Ｂ：2.5	小型の宝珠つまみ。口縁部に短い身受け。前面の½をヘラケズリ。	黄灰色	良	92003165 964500
—156 77	西側墳丘撹乱部 渋道　トレンチ内 渋道　前面Ｂ群	杯　身	Ａ：13.6 Ｂ：4.9 Ｃ：1.3	立ち上りは比較高く，内傾度はゆるい。口縁端部は丸い。底面付近を若干ヘラケズリ。	灰　色	良	92001600 931702
—157	渋道前面表土中・ 渋道前面土器Ａ群	杯　身	Ａ：(12.3) Ｂ：3.9 Ｃ：1.5	立ち上りは比較的高く，内傾度はゆるい。口縁端部は丸い。底体部の⅓をヘラケズリ。	灰　色	良	92003152
—158	渋道前面表土中・ 渋道前面土器Ａ群	杯　身	Ａ：(12.6) Ｃ：0.6	立ち上りは低く，内傾する。底体部の⅓をヘラケズリ。	褐灰色	良	92003153
—159	渋道前面・ 西側墳丘撹乱部	杯　身	Ａ：(10.7) Ｃ：1.0	立ち上りは低く，内傾する。	灰　色	良	92001598
—160 77	西側墳丘撹乱部	杯　身	Ａ：11.2 Ｂ：3.9 Ｃ：0.9	立ち上りは低く，内傾する。底面付近を若干ヘラケズリ。	灰　色	良	91002603 964502
—161	渋道前面表土中・ 土器集積１	杯　身	Ａ：(10.4) Ｂ：3.5 Ｃ：0.9	立ち上りは低く，内傾する。体部の⅔をヘラケズリ。	暗灰色 ～黒色	良	92001599

A：口径　B：器高　C：たちあがり高　D：外径　（　）は残存

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	器　種	法量(cm)	形態・調査の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
145—162	羨道前面 表土中	杯　身	A：(10.1) C：(0.8)	立ち上りは低く，内傾する。	内面:灰色 外面:褐灰色	良	92003154
—163	羨道前面	杯　身	A：(10.0) C：0.9	立ち上りは低く，内傾する。	暗灰色 ～褐灰色	不良	92003159
—164	羨道前面 土器A群	杯　身	A：(10.0) C：0.6	立ち上りは，矮小化。	灰　色 褐灰色	良	92003156
—165 77	羨道前面 土器A群	杯　身	A：7.8 B：3.8	底部は丸く，体部は直線的に立ち上がる。底部のみをヘラケズリ。	黄灰色 ～黒灰色	良	92003164 964505
—166 77	A群	高 杯 蓋	A：13.1 B：5.1	頂部のくぼむつまみが付く。天井部と口縁部の境には沈線がある。口縁端部内面にはわずかに面を残す。	灰　色	良	91002602 931701
—167	周溝	高　杯	D：10.8	有蓋で，立ち上りを欠く。短脚。	褐灰色	良	92002705
—168 77		高　杯	A：(14.5) B：15.2 D：14.5	有蓋。長脚。立ち上りは比較的高く，口縁端部内面に若干の面を残す。	黒　色	良	91002605 931224
—169	羨道　トレンチ内	高　杯	A：(13.6)	無蓋。体部に櫛描波状文。	外面:黒色 一部褐灰色 内面:褐灰色	良	92002713
—170	羨道前面 土器A群	高　杯	A：(12.0)	同上。	褐灰色	不良	92002712

鉄刀

171は玄室内から出土した鉄製の大刀。刀身の約1/2付近で折れ曲がっている。全長112.4cm。茎には３ヵ所の目釘孔があるが、刀身の関付近にもいわゆる鎺元孔が１つある。

鉄鏃

172～178は平根式。171･172は五角形式で173は腸抉がある。174は鋒を欠くが、椿葉式。175は圭頭式であるが、菱形に近い。176･177は方頭式だが、前者の鋒は円くＳＴ002古墳出土の92に近い。179～191は尖根式。いずれも、柳葉あるいは小形柳葉式とされるものであるが、179～181は鏃身の平面形が五角形を呈する。

刀子

192～195の４点出土。いずれも破片である。

弓付属金具

196～198はいわゆる両頭金具で、弓に付属する金具とされるもの。

馬具

199は、鐙金具の破片と考えられる。

胡禄

200は、胡禄金具破片。幅2.45cmで、鋲が２列に５個残っている。

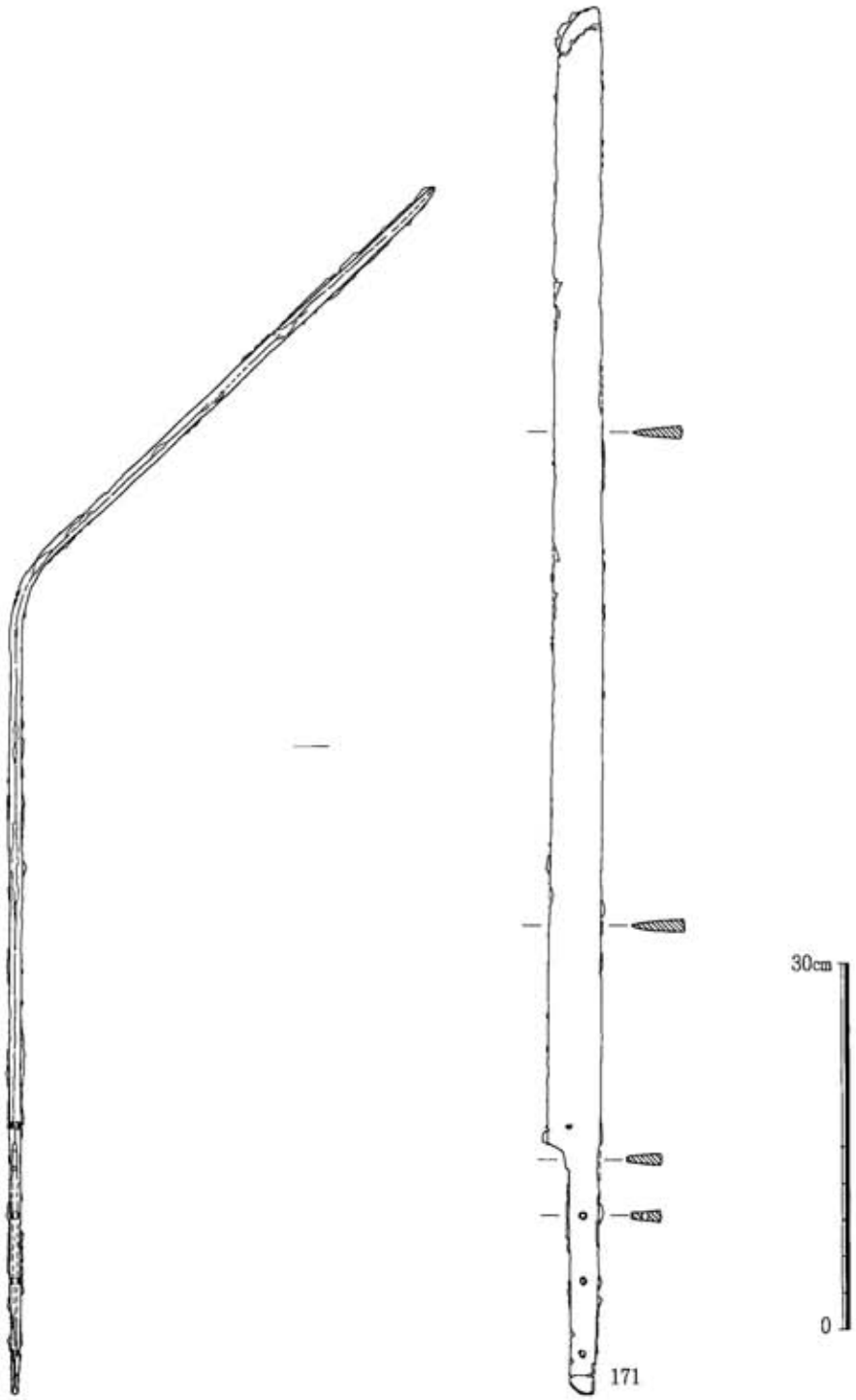


図146　ＳＴ003古墳出土鉄刀（１／６）

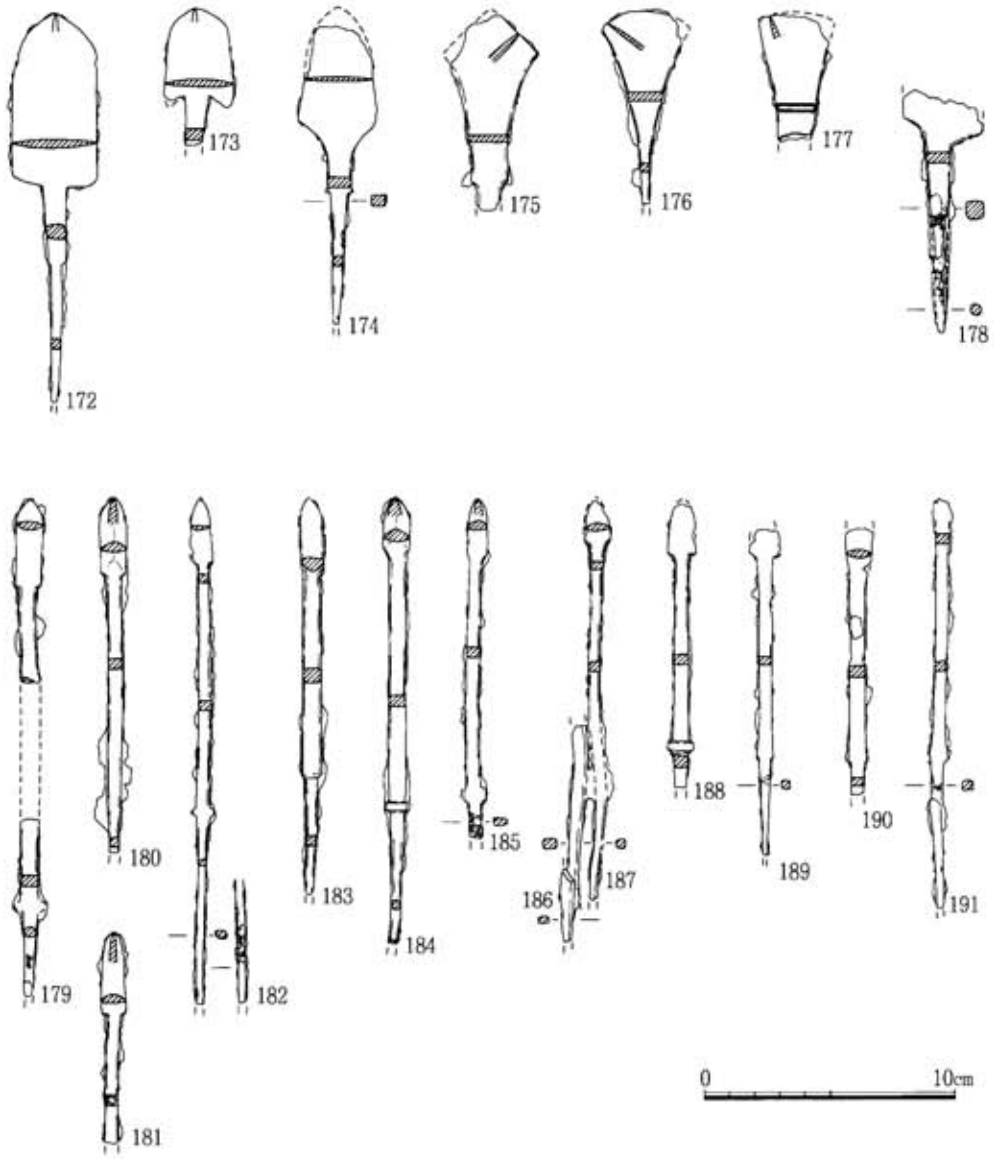


図147　ＳＴ003古墳出土鉄鏃（１／３）

表23　ＳＴ003古墳出土鉄刀観察表

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号
			最大長	最大幅	
146－171 78	石室内No.1	鉄刀	112.4	4.4	93002628 891314

表24　ＳＴ003古墳出土鉄鏃観察表　　（　）は残存長

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	型　式	法　量(cm) 鏃身長	鏃身幅	県遺物登録番号 写真登録番号	図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	型　式	法　量(cm) 鏃身長	鏃身幅	県遺物登録番号 写真登録番号
147−172 78	石室内No.16	平根　五角形	6.9	3.35	92000743 960139	−182 78	No.32	尖根　小形柳葉	(2.6)	(0.9)	92003612 960139
−173 78	石室内No.19	平根　鳥抉五角形	4.0	2.75	92000742 960139	−183 78	石室内No.12	尖根　小形柳葉	3.15	0.95	92000750 960139
−174 78	石室内No.28	平根　椿葉	(3.7)	3.0	92000745 960139	−184 78	石室内No.11	尖根　小形柳葉	2.4	1.1	92000747 960139
−175 78	石室内No.25	平根　圭頭	(6.75)	(3.4)	92000739 960139	−185 78	石室内No.4	尖根　小形柳葉	2.4	0.8	92003605 960139
−176 78	No.33	平根　方頭	6.0	(3.15)	92000740 960139	−186 78	石室内No.5	?　?			92003601 960139
−177 78	No.35	平根　方頭	(5.1)	(2.75)	92000741 960139	−187 78	石室内No.5	尖根　小形柳葉	(1.8)	1.1	92003601 960139
−178 78	側壁抜跡中	平根　不明	(2.25)	(3.2)	92000746 960139	−188 78	石室内No.13	尖根　小形柳葉	(2.1)	1.1	92003606 960139
−179 78	石室内No.10	尖根　小形柳葉	3.5	1.05	92000749 960139	−189 78	No.32	尖根　小形柳葉	(1.15)	(1.2)	92003611 960139
−180 78	石室内No.8	尖根　小形柳葉	3.1	1.05	92000748 960139	−190 78	石室内No.29	尖根　小形柳葉	(1.5)	(1.1)	92003608 960139
−181	石室内No.14	尖根　小形柳葉	3.3	0.95	92003633	−191 78	No.30	?　?			92003609 960139

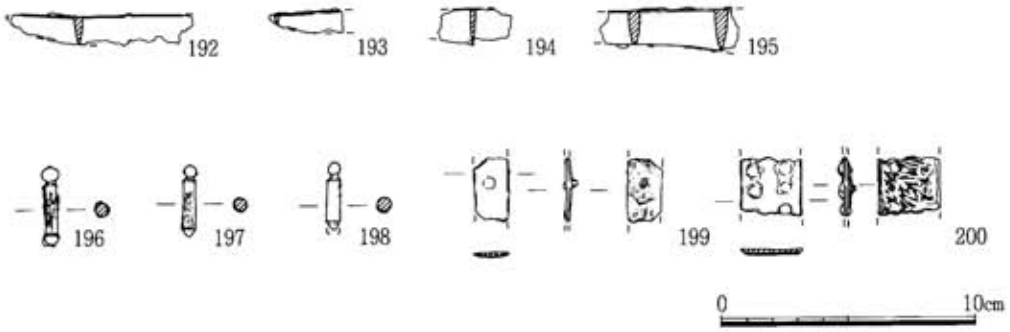


図148　ＳＴ003古墳出土工具・武器付属金具・馬具（１／３）

表25　ＳＴ003古墳出土工具・武器付属金具・馬具観察表　　（　）は残存長

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm) 最大長	最大幅	県遺物登録番号 写真登録番号	図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm) 最大長	最大幅	県遺物登録番号 写真登録番号
148−192 79	攪乱中	刀　子	(7.2)	1.15	92003624 960141	−197 79	石室内No.26	弓付属金具	(2.85)	(0.6)	92003619 960141
−193 79	石室内No.6	刀　子	(2.88)	0.95	92003615 960141	−198 79	攪乱中	弓付属金具	(2.68)	(0.6)	92003622 960141
−194 79	石室内埋土中	刀　子	(2.8)	(1.4)	92003620 960141	−199 79	攪乱中	鋲留金具	(2.5)	1.4	92003626 960141
−195 79	攪乱中	刀　子	(5.45)	(1.7)	92003623 960141	−200 79	石室内No.3	鋲留金具	(2.3)	2.45	92003614 960141
−196 79	羨道	弓付属金具	3.75	0.7	92003621 960141						

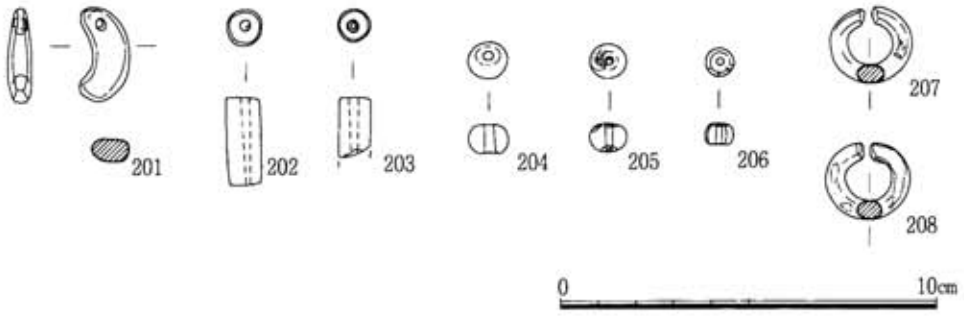


図149　ＳＴ003古墳出土玉類・耳環（１／２）

玉類

201は滑石製の勾玉。白色を呈し碧玉製に比較し成形が粗略で、偏平である。202･203は、碧玉製管玉。いずれも片面穿孔。204～206はガラス製の丸玉。いずれも紺色であるが、206は空気による線状の孔が複数みられ、一見模様のようにみえる。

耳環

207・208は銅地金張の耳環。207は玄室内、208は羨道前面の出土である。

表26　ＳＴ003古墳出土玉類観察表　　丸玉は長径・短径　丸玉以外は長さ・幅　　（　）は残存

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種類	材質	法量(cm)		色調	県遺物登録番号 写真登録番号	図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種類	材質	法量(cm)		色調	県遺物登録番号 写真登録番号
149－201 79	石室内	勾玉	滑石？	2.5	1.3	白色 (風化している)	93001533 960142	－204 79	表採	丸玉	ガラス	1.05	0.95	紺色	93002729 960142
－202 79	床面下No.36	管玉	碧玉	2.35	1.0	淡緑色 (風化している)	93001530 960142	－205 79	表採	丸玉	ガラス	0.95	0.93	紺色	93002728 960142
－203 79	石室撹乱土中	管玉	碧玉	(1.6)	0.85	暗緑色	93001529 960142	－206 79	表採	丸玉	ガラス	0.78	0.75	紺色	93002730 960142

表27　ＳＴ003古墳出土耳環観察表

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種類	法量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号	図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種類	法量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号
			最大外径	最大幅					最大幅	鐵身幅	
149－207 79	石室内No.2	耳環 (銅地金張)	2.2	0.53	92003628 960142	－208 79	羨道前面	耳環 (銅地金張)	2.25	0.53	93002125 960142

小結

須恵器は、杯身杯蓋ともにＡ－１・Ａ－２・Ｃ－１類が出土しており、小田編年のⅢＢ～Ⅴ期にあたる。鉄刀は、玄室内が攪乱された際に曲げられたものと考えられる。また、小破片ながら、鐙金具や胡禄金具が確認されたことは注目される。

ＳＴ013古墳出土遺物（写真図版79・80）

土器

209は杯蓋の破片。Ａ－２類。210・211は杯身。Ａ－２類とＣ類。212・215は高杯。213・216は甕。216は周溝から破砕された状況で出土したが完形に復元されたもの。体部は若干肩の張る球形の器形で、口縁部は短く外反する。下半部を中心に自然釉がかかる。214は高台の付く底部の破片で、壺と考えられる。

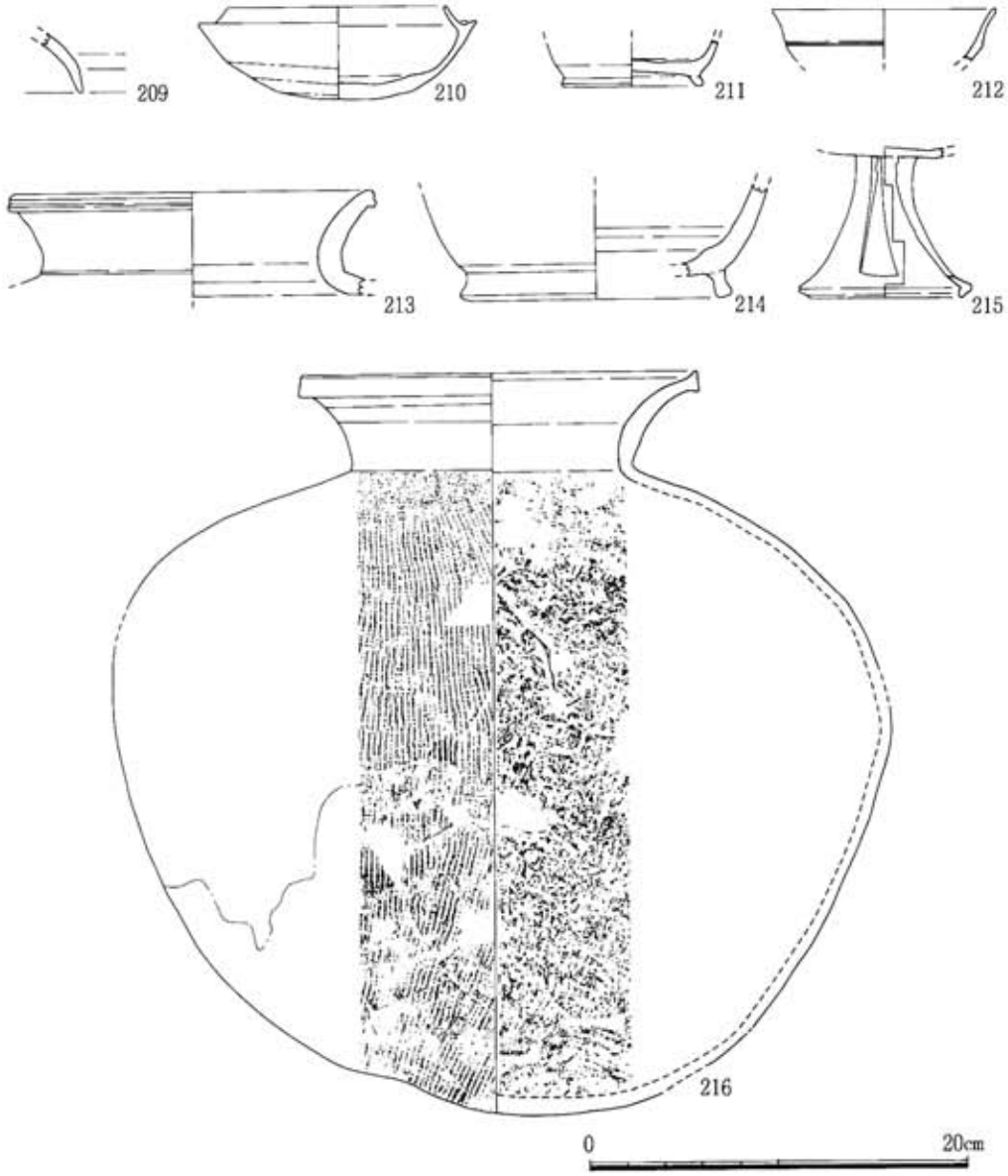


図150　ＳＴ013古墳出土土器（１／４）

表28　ＳＴ013古墳出土土器観察表　　Ａ：口径　Ｂ：器高　Ｃ：たちあがり高　Ｄ：底径　（　）は残存

図—遺物番号 写真図版番号	出土地点	器　種	法量(cm)	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
150—209	土器だまり	杯　蓋		口縁端部は丸い。	明灰色	良	94001357
—210 79	土器だまりⅠ	杯　身	Ａ：11.6 Ｂ：4.9 Ｃ：1.0	立ち上がりは低く，内傾する。底体部の⅗にヘラケズリ。	明灰色	良	94001355 964507
—211	周溝埋土中	杯　身	Ｄ：(7.2)	短い高台は，若干外側へふんばる。	灰色	良	94001358
—212	土器だまりⅠ	高　杯	Ａ：(11.6)	無蓋。	明灰色	良	94001351
—213	周溝埋土中	甕	Ａ：(19.2)	肩部に格子状タタキ。	灰色～ 褐灰色	良	94001359
—214	周溝埋土中	壺	Ｄ：(14.5)	高台付き。	灰色～ 褐灰色	良	94001360
—215	土器だまり	高　杯	Ｄ：7.9	脚部に一段のスカシ。	灰色	良	94001354
—216 79	周溝土器溜り	甕	Ａ：21.2 Ｂ：39.7	体部に格子状タタキ。下半部に自然釉。	外面灰色	良	9200762 931230

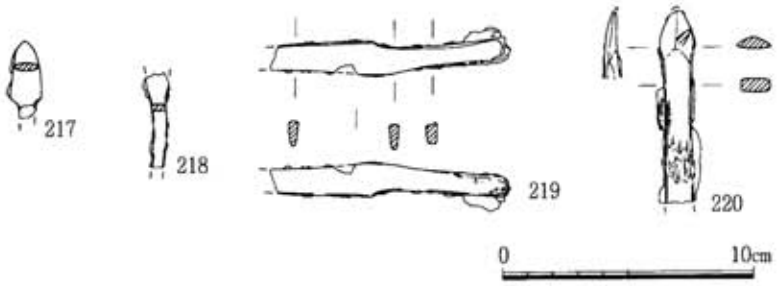


図151　ＳＴ013古墳出土鉄器（１／３）

鉄器

217・218は鉄鏃。前者は鏃身部のみの破片で尖根の柳葉式。後者は頸部付近の破片だが、同型式と想定される。

219は刀子。刀身部の約1/2を欠く。220は鉄鉾。鋒から7.6cmを残す破片。先端から約３cmの付近より木質が残っている。

表29　ＳＴ013古墳出土鉄鏃観察表　　（　）は残存長

図—遺物番号 写真図版番号	出土地点	型　式	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号	図—遺物番号 写真図版番号	出土地点	型　式	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号
			鏃身長	鏃身幅					鏃身長	鏃身幅	
151—217 80	No.32	不明	2.4	1.25	92004494 960144	—218 80	No.32	不明	(1.0)	(0.9)	92004495 960144

表30　ＳＴ013古墳出土鉄器観察表　　（　）は残存長

図—遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号	図—遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号
			最大長	最大幅					最大長	最大幅	
151—219 80	No.6	刀子	(9.1)	1.3	92004493 960144	—220 80	No.38	鉄鉾	(7.6)	1.35	92004496 960144

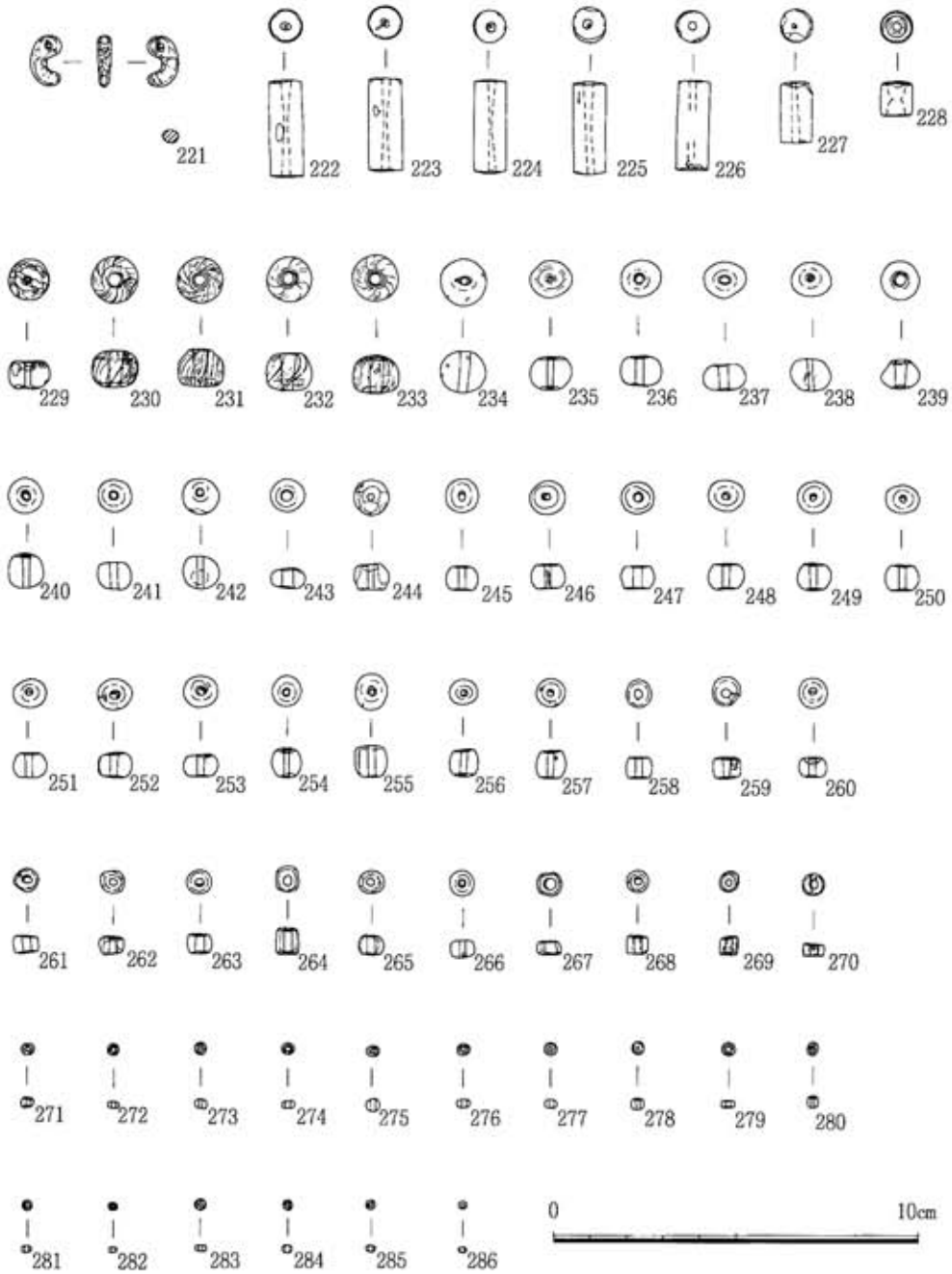


図152　ＳＴ013古墳出土玉類（１／２）

玉類

221は小形の滑石製勾玉。222～227は碧玉製管玉。228はメノウ製管玉。碧玉製に比較し長さが短く、孔も大きい。229・244はメノウ製の丸玉。230～243・245～286はガラス製の丸玉。

ガラス製丸玉の大きさは長径1.3cmから0.25cmの間に分布する。色調は紺色が最も多くその他に青色、水色などがある。また、230～233は、螺旋状の模様を表出させている。以上の他にも管玉１個、ガラス丸玉223個が玄室床面より出土している。

小結

当墳からは少量の土器しか出土しなかったが、小田編年のⅣ・Ⅵ期に対応する須恵器が出土した。また、勾玉１個、管玉８個の他に２点のメノウ製を含む281個のガラス製を中心とした多量の丸玉が出土したことも注目される。

表31　ＳＴ013古墳出土玉類観察表　　丸玉は長径・短径　丸玉以外は長さ・幅

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種類	材質	法量(cm)		色調	県遺物登録番号 写真登録番号	図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種類	材質	法量(cm)		色調	県遺物登録番号 写真登録番号
152－221 80	No.30	勾玉	石	1.4	0.85	緑がかったうすい淡色でおおがぼけている	93002788 960145	－237 80	No.35	丸玉	ガラス	1.15	1.0	紺　色	93002789 960145
－222 80	No.162	管玉	碧玉	2.65	0.9	深緑色	93002857 960145	－238 80	No.157	丸玉	ガラス	1.1	0.95	紺　色	93002837 960145
－223 80	No.164	管玉	碧玉	2.55	0.95	深緑色	93002858 960145	－239 80	No.194	丸玉	ガラス	1.05	1.05	紺　色	93002853 960145
－224 80	No.27	管玉	碧玉	2.55	0.9	深緑色	93002785 960145	－240 80	No.49	丸玉	ガラス	0.98	0.95	紺　色	93002801 960145
－225 80	No.43	管玉	碧玉	2.53	0.9	深緑色	93002796 960145	－241 80	No.161	丸玉	ガラス	0.95	0.9	紺　色	93002839 960145
－226 80	No.37	管玉	碧玉	2.45	0.85	深緑色	93002791 960145	－242 80	No.84	丸玉	ガラス	1.0	1.0	紺　色	93002836 960145
－227 80	No.75	管玉	碧玉	1.68	0.9	深緑色	93002827 960145	－243 80	No.178	丸玉	ガラス	0.95	0.9	紺　色	93002851 960145
－228 80	No.134	管玉	メノウ	0.95	0.9	オレンジ色	93002855 960145	－244 80	No. 4	丸玉	メノウ	0.95	0.95	オレンジ色	93002766 960145
－229 80	No.181	丸玉	メノウ	1.15	1.1	オレンジ色	93002856 960145	－245 80	No. 5	丸玉	ガラス	0.95	0.88	紺　色	93002767 960145
－230 80	No.74	丸玉	ガラス	1.3	1.25	紺　色	93002826 960145	－246 80	No.173	丸玉	ガラス	0.95	0.9	紺　色	93002848 960145
－231 80	No.10	丸玉	ガラス	1.25	1.25	紺　色	93002771 960145	－247 80	No.80付近	丸玉	ガラス	0.9	0.85	紺　色	93002835 960145
－232 80	No.42	丸玉	ガラス	1.25	1.2	紺　色	93002795 960145	－248 80	No.73	丸玉	ガラス	0.98	0.85	紺　色	93002825 960145
－233 80	No.13	丸玉	ガラス	1.25	1.25	紺　色	93002774 960145	－249 80	No.163	丸玉	ガラス	0.9	0.88	紺　色	93002840 960145
－234 80	No.204	丸玉	ガラス	1.3	1.25	紺　色	93002854 960145	－250 80	No.160	丸玉	ガラス	0.93	0.75	紺　色	93002838 960145
－235 80	No.54	丸玉	ガラス	1.15	1.0	紺　色	93002806 960145	－251 80	No.60	丸玉	ガラス	0.93	0.8	紺　色	93002812 960145
－236 80	No.165	丸玉	ガラス	1.1	1.0	紺　色	93002841 960145	－252 80	No.45	丸玉	ガラス	0.95	0.85	紺　色	93002798 960145

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種類	材質	法量(cm)		色調	県遺物登録番号 写真登録番号	図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種類	材質	法量(cm)		色調	県遺物登録番号 写真登録番号
152－253 80	No.176	丸玉	ガラス	0.95	0.85	紺色	93002850 960145	－270 80	No.39	丸玉	ガラス	0.6	0.6	紺色	93002792 960145
－254 80	No.51	丸玉	ガラス	0.85	0.8	紺色	93002803 960145	－271 80	No.64	丸玉	ガラス	0.38	0.35	水色	93002816 960145
－255 80	No.8	丸玉	ガラス	0.95	0.9	紺色	93002769 960145	－272 80	No.65	丸玉	ガラス	0.35	0.3	青色	93002817 960145
－256 80	No.1	丸玉	ガラス	0.75	0.68	紺色	93002763 960145	－273 80	No.66	丸玉	ガラス	0.33	0.3	緑がかった 水色	93002818 960145
－257 80	No.170	丸玉	ガラス	0.8	0.8	紺色	93002845 960145	－274 80	No.69	丸玉	ガラス	0.35	0.33	紺色	93002821 960145
－258 80	No.59	丸玉	ガラス	0.75	0.7	紺色	93002811 960145	－275 80	No.70	丸玉	ガラス	0.35	0.3	紺色	93002822 960145
－259 80	No.61	丸玉	ガラス	0.8	0.75	紺色	93002813 960145	－276 80	No.72	丸玉	ガラス	0.38	0.35	紺色	93002824 960145
－260 80	No.62	丸玉	ガラス	0.8	0.78	紺色	93002814 960145	－277 80	石室内埋土中	丸玉	ガラス	0.35	0.35	緑がかった 青色	93002752 960145
－261 80	No.50	丸玉	ガラス	0.7	0.6	紺色	93002802 960145	－278 80	石室内埋土中	丸玉	ガラス	0.35	0.33	水色	93002753 960145
－262 80	No.52	丸玉	ガラス	0.7	0.6	紺色	93002804 960145	－279 80	石室内埋土中	丸玉	ガラス	0.4	0.35	緑がかった 青色	93002754 960145
－263 80	No.53	丸玉	ガラス	0.68	0.65	紺色	93002805 960145	－280 80	石室内埋土中	丸玉	ガラス	0.35	0.3	緑がかった 水色	93002755 960145
－264 80	No.57	丸玉	ガラス	0.75	0.6	紺色	93002809 960145	－281 80	No.67	丸玉	ガラス	0.28	0.25	緑がかった 水色	93002819 960145
－265 80	No.24	丸玉	ガラス	0.7	0.6	緑色	93002782 960145	－282 80	No.68	丸玉	ガラス	0.25	0.2	青色	93002820 960145
－266 80	No.7	丸玉	ガラス	0.7	0.65	青がかった 深緑色	93002768 960145	－283 80	No.71	丸玉	ガラス	0.3	0.3	水色	93002823 960145
－267 80	石室内埋土中	丸玉	ガラス	0.7	0.6	紺色	93002762 960145	－284 80	床面	丸玉	ガラス	0.3	0.25	青色	93002733 960145
－268 80	No.3	丸玉	ガラス	0.6	0.55	紺色	93002765 960145	－285 80	石室内埋土中	丸玉	ガラス	0.28	0.25	紺色	93002750 960145
－269 80	No.36	丸玉	ガラス	0.6	0.5	紺色	93002790 960145	－286 80	石室内埋土中	丸玉	ガラス	0.25	0.23	群青色	93002751 960145

ＳＴ014古墳出土遺物（写真図版81～89）

土器

図151と152の323～343、および図154の360～371、図155の374～393・396は須恵器杯蓋と杯身。このうち杯蓋では287～289・360がＡ－１類。290～302・361・374・379がＡ－２類。361は

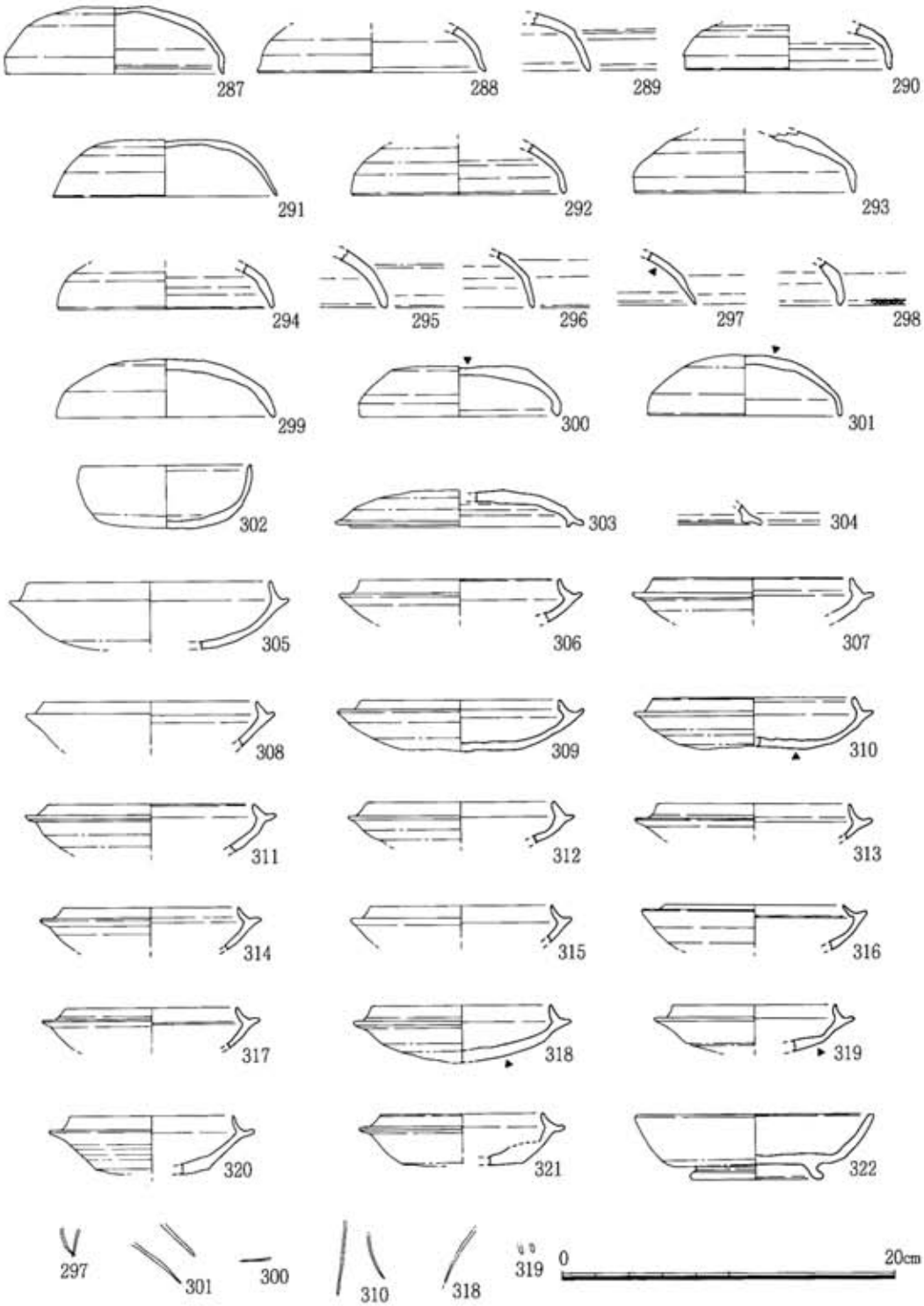


図153　ＳＴ014古墳出土土器１（１／４）

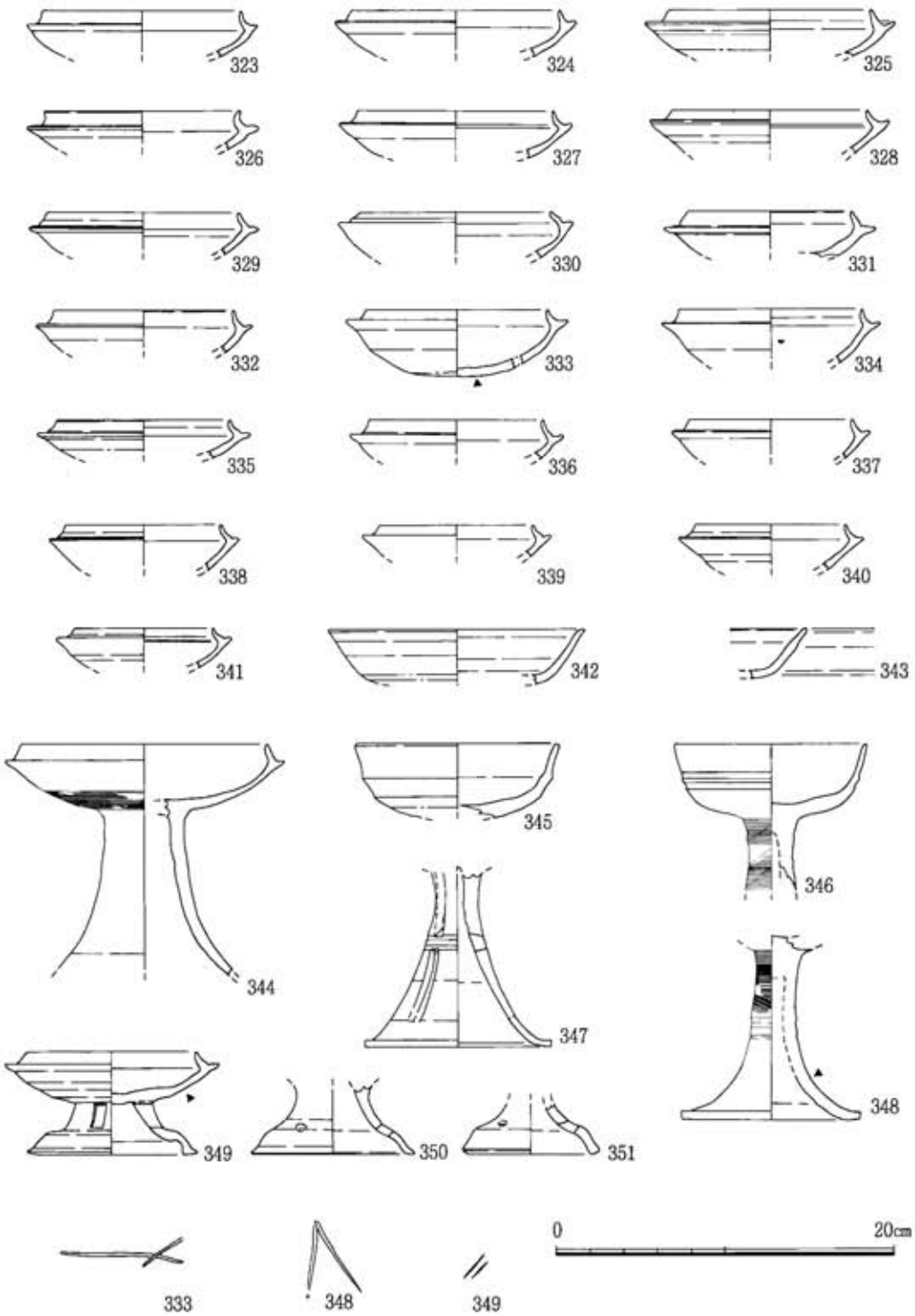


図154　ＳＴ014古墳出土土器２（１／４）

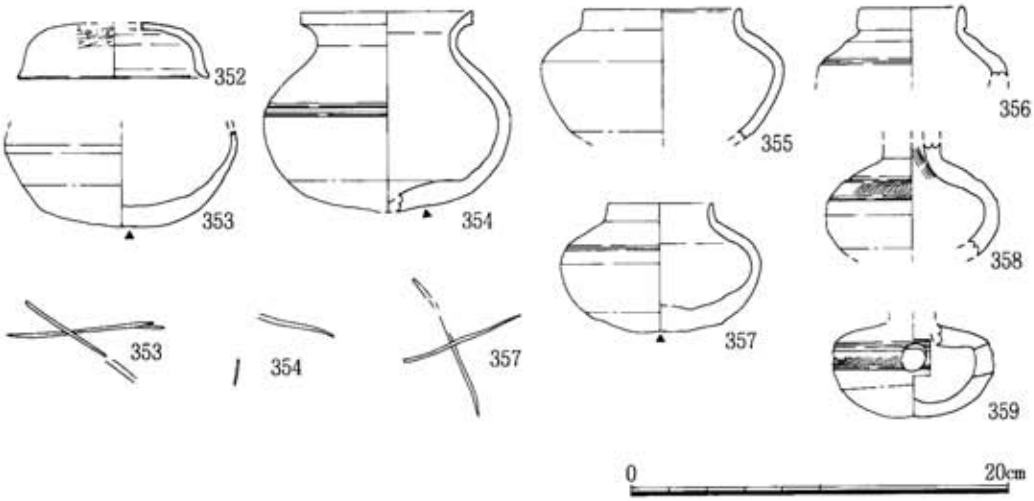


図155　ＳＴ014古墳出土土器３（１／４）

口縁部に刻みがある。380はＢ類。370はＣ－２類。381はＣ－３類。396も見受けが長いがＣ－３類であろう。303・304・371はＢ・Ｃ類のいずれか不明。

杯身では305・382がＡ－１類。306～321・323～341・363～368・383～389がＡ－２類。302・362・369がＢ類。322・342・343・392・393がＣ類。391がＤ類。杯蓋、杯身ともにＡ－２類が最も多い。

高杯では、344・372・395・397が長脚の有蓋高杯ならびにその蓋である。蓋は、天井部に頂部のへこむ撮みがつく。345～348・398～400・402・407が長脚の無蓋高杯である。また、349は短脚の有蓋高杯であるが、350・351・403～405も同形態と考えられ、透かしは長方形のものと円孔のものがある。401も短脚有蓋であろう。406は小形の短脚無蓋高杯の脚部。

352は壺の蓋。短頸壺の蓋であろう。353～357・413～415は壺である。354・415は、体部が丸く、口縁部が外反し肥厚するもの。後者は小形。また、353も354と同形態と考えられる。355～357・414は、頸部が短く口縁部が短く直立するいわゆる短頸壺である。また、413はこれらより大形の直口壺の口縁部片である。

373は横瓶。偏平な体部に外反する口縁部がつく。

358・359・408～412は甕。大小あるが、いずれも体部が小形で、頸部のくびれが強い、最大径がほとんど口縁部にくるようなものである。このうち408は、口縁部のみの破片で、口縁部と頸部の境で大きく屈曲する。412は体部のみの破片であるが、やや大形のものである。358・359・412の体部には櫛歯状の工具を斜めに押し付けることによる文様が施されている。

図157・158は須恵器大形壺。いずれも口縁部および肩部から頸部の破片。416・420は口縁直

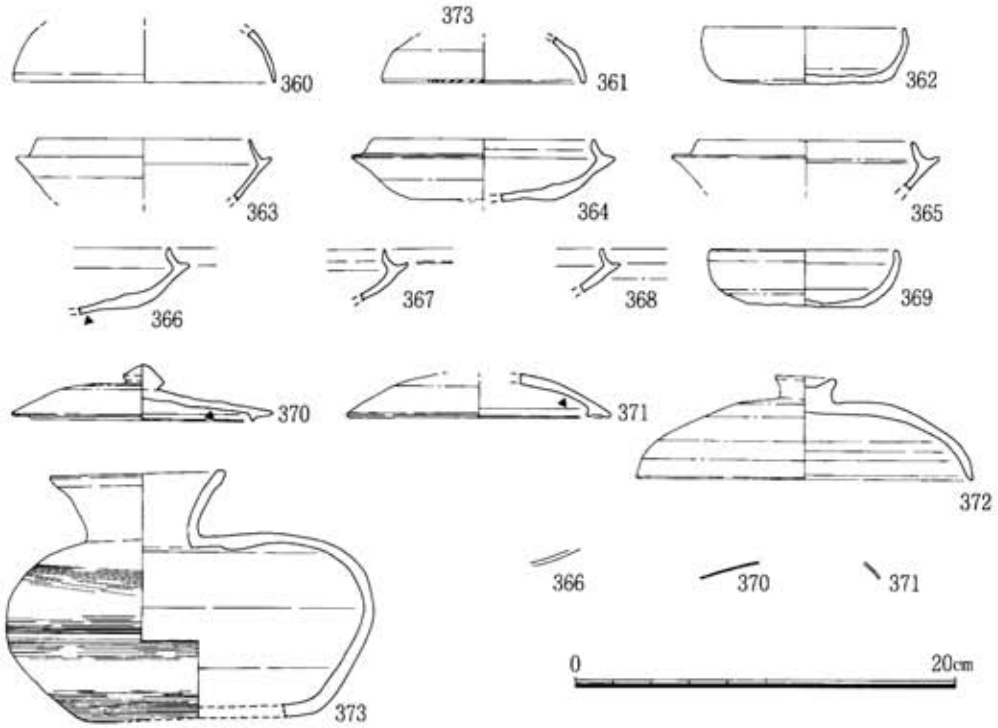


図156　ＳＴ014古墳出土土器４（１／４）

下に横位の沈線のみが施されるが、418・419は横位の沈線間に斜行の沈線を加える。

また、421～423は沈線間に櫛描き波状文を施したものである。417・424は無文。

394は、土師器杯身。

表32　ＳＴ014古墳出土土器観察表１　　Ａ：口径　Ｂ：器高　Ｃ：たちあがり高　Ｄ：底径　（　）は残存

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	器　種	法量(cm)	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
153－287 81		杯　蓋	Ａ：13.0 Ｂ：4.0	口縁端部内面に若干の面を残す。天井部の另にヘラケズリ。	暗灰色	良	91000043 931696
288		杯　蓋	Ａ：(13.4)	口縁端部内面に面を残す。	褐灰色	良	92001539
289		杯　蓋		天井部と口縁部の境に浅い沈線。	灰色	良	92001547
290		杯　蓋	Ａ：(12.2)	口縁部は短く，屈曲する。	褐灰色	良	92001533

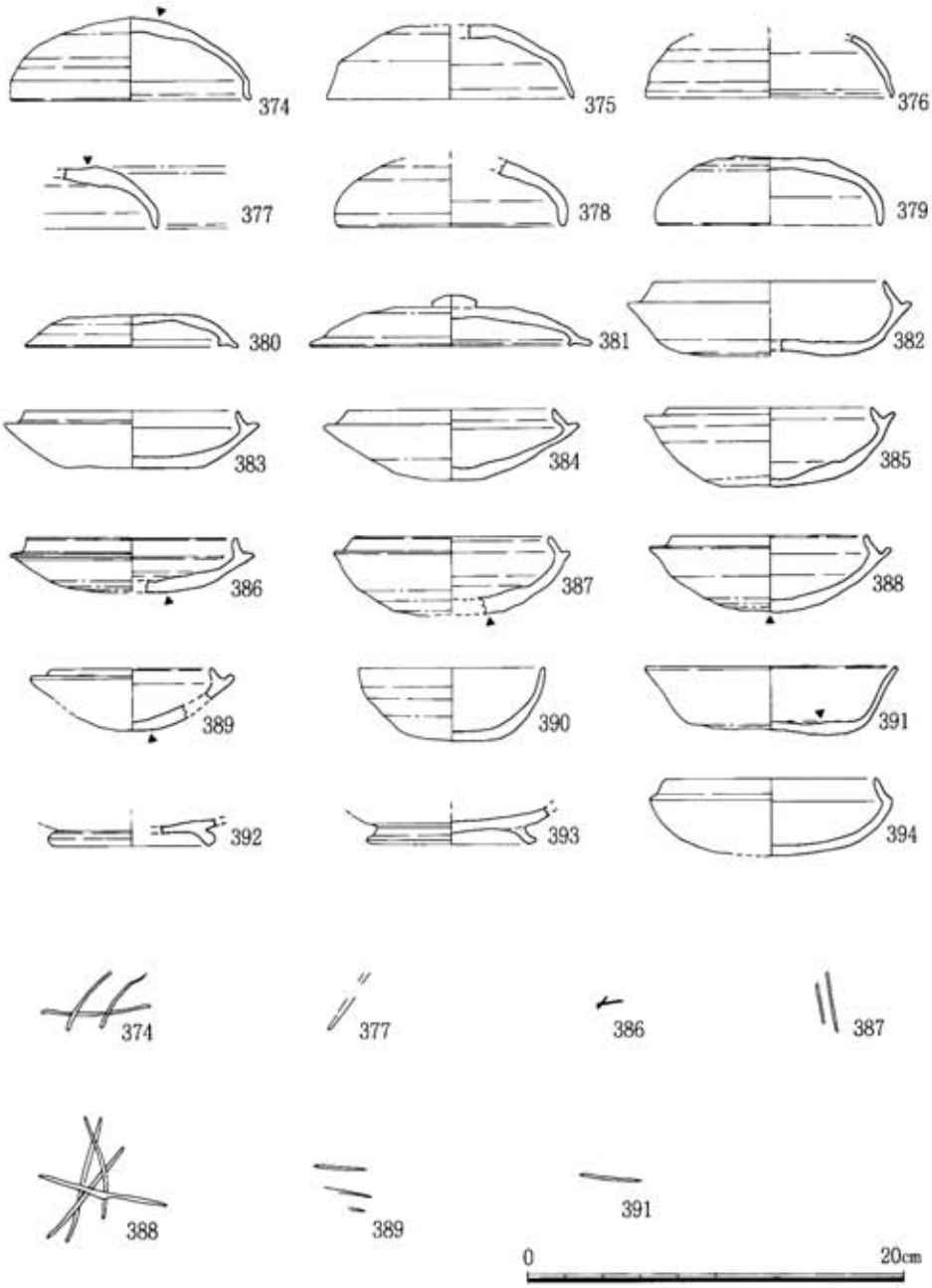


図157　ＳＴ014古墳出土土器５（１／４）

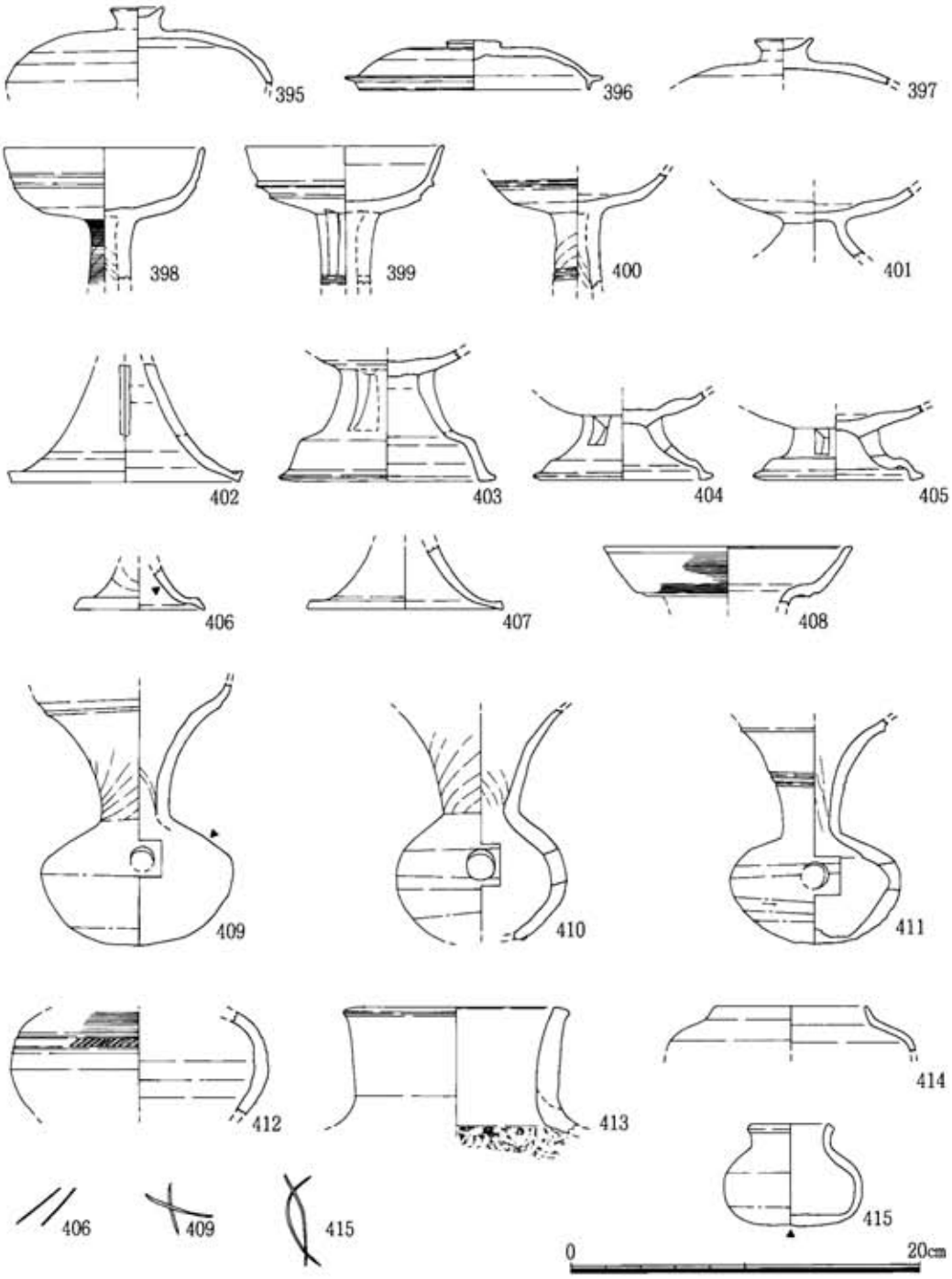


図158　ＳＴ014古墳出土土器６（１／４）

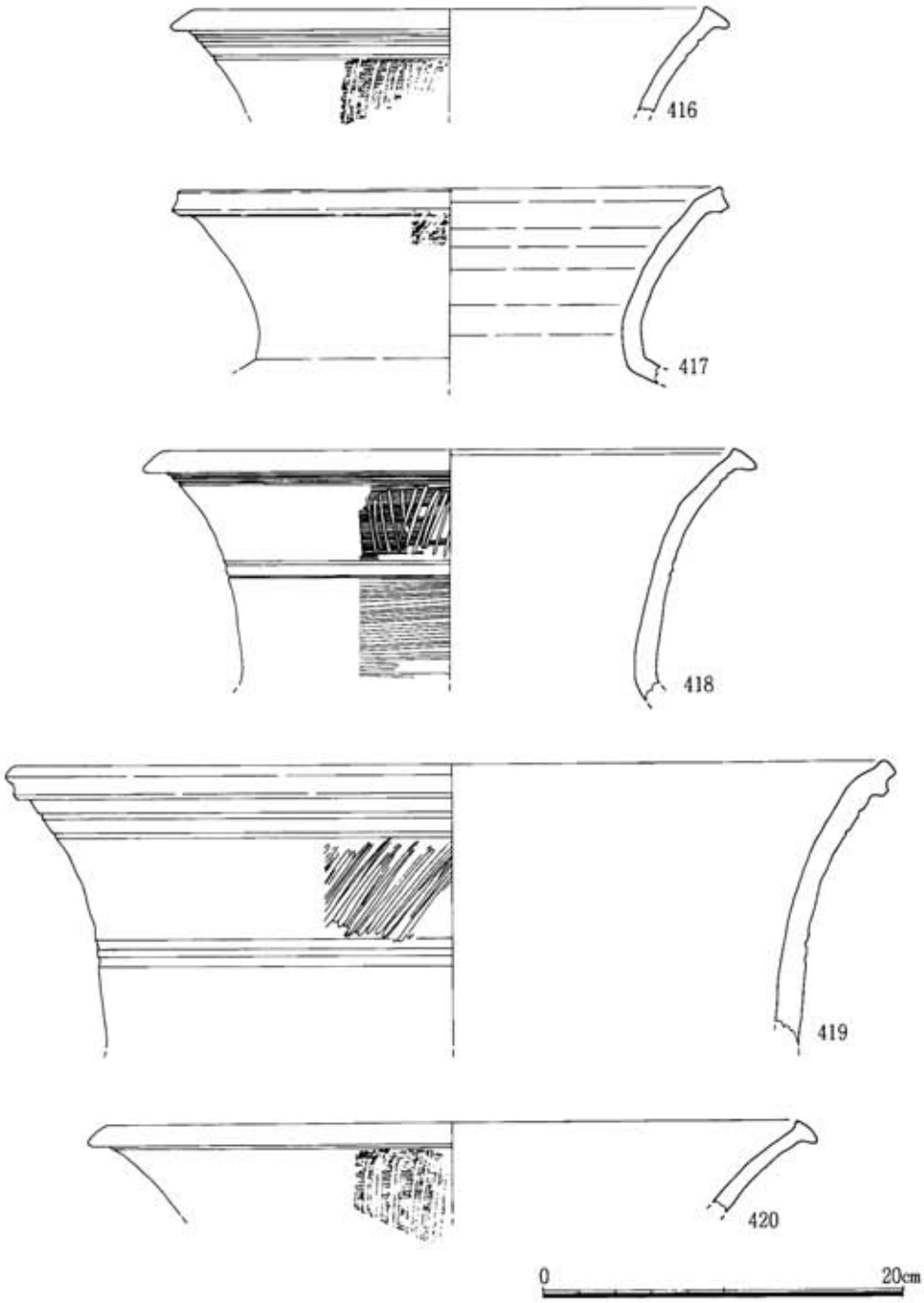


図159　ＳＴ014古墳出土土器７（１／４）

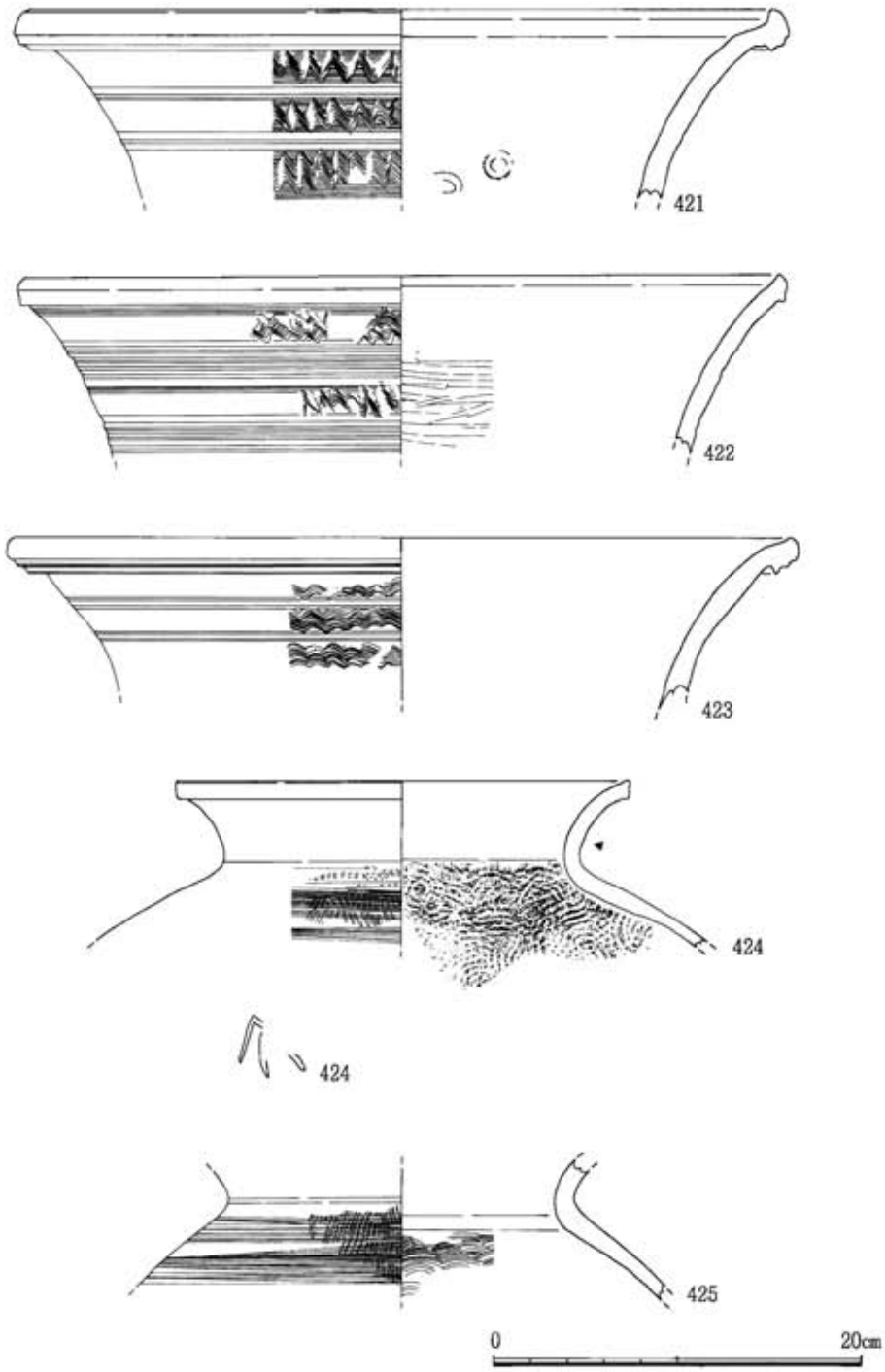


図160　ＳＴ014古墳出土土器８（１／４）

表33　ＳＴ014古墳出土土器観察表２　　Ａ：口径　Ｂ：器高　Ｃ：たちあがり高　Ｄ：底径　（　）は残存

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	器　種	法量(cm)	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
153-291		杯　蓋	A：(13.3)	口縁端部は，薄くとがる。天井頂部にヘラケズリ。	明灰色	良	91000049
—292		杯　蓋	A：(12.6)	口縁端部は丸い。 全面の⅔をヘラケズリ。	暗灰色	良	92001538
—293		杯　蓋	A：(13.0)	口縁端部は丸く，とがり気味。 天井部の½をヘラケズリ。	明灰色	良	91000050
—294		杯　蓋	A：(12.6)	口縁端部は丸く，とがり気味。	黄灰色	やや不良	92001540
—295		杯　蓋		口縁端部は丸い。 天井部のほぼ全面にヘラケズリ。	灰　色	良	92001546
—296		杯　蓋		口縁端部は丸い。	褐灰色	良	92001544
—297		杯　蓋		口縁端部は先細り。 内部にヘラ記号。	褐灰色	良	92002701
—298		杯　蓋		口縁部にキザミ目。	灰　色	良	92001545
—299		杯　蓋	A：(13.0) B：3.5	天井頂部にヘラケズリ。	明灰色	良	91000044
—300		杯　蓋	A：(11.8) B：(2.9)	天井頂部にヘラケズリ後ナデ。	暗灰色	良	91000045
—301		杯　蓋	A：(11.4) B：(3.7)	口縁部は短く，天井部は低く立ち上がる。天井頂部のみヘラケズリ。	灰　色	良	91000048
—302 81	玄室 No.102	杯　身	A：10.2 B：3.8	底は平たく，口縁端部は丸い。 底部のみヘラケズリ。	暗灰色	良	91000677 964509
—303		杯　蓋	A：(13.0)	つまみの付くタイプ。身受は短い。 天井部の½をヘラケズリ。	灰　色	良	92001542
—304		杯　蓋		身受け短く矮小。	褐灰色	良	92001534
—305		杯　身	A：(14.4) C：1.1	蓋受けは短いが，内傾度はゆるい。 底面にヘラケズリ。	内面:灰色 外面:黒色	良	91002636
—306		杯　身	A：(11.8) C：(1.0)	蓋受けは短く，内傾する。	褐灰色	良	92001511
—307		杯　身	A：(11.8) C：1.0	同上。 底体部の⅓をヘラケズリ。	褐灰色	良	92001512
—308		杯　身	A：(12.7) C：0.8	同上。	暗灰色	良	92001563
—309		杯　身	A：(11.6) C：0.8	同上。	暗灰色	良	92001506
—310		杯　身	A：(12.0) C：0.8	同上。 底体部の½をヘラケズリ。底部にヘラ記号。	褐灰色	良	92001504
—311		杯　身	A：(12.2) C：0.65	同上。 底体部の約½をヘラケズリ。	褐灰色	良	92001502

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	器　種	法量(cm)	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
153-312		杯　身	A：(10.1) C：0.9	蓋受けは短く，内傾する。 底体部の約⅔をヘラケズリ。	暗灰色	良	92001503
—313		杯　身	A：(11.4) C：1.0	同上。	灰　色	良	92001569
—314		杯　身	A：(10.4) C：0.7	同上。	灰色～ 暗灰色	良	92001564
—315		杯　身	A：(10.8) C：0.8	同上。	灰　色	良	92001581
—316		杯　身	A：(10.6) C：0.6	同上。 立ち上がりの内傾度強い。	灰色～ 暗灰色	良	92001572
—317		杯　身	A：(10.2) C：0.8	同上。 もっとも小型化したもの。	暗灰色 ～褐灰色	良	92001561
—318		杯　身	A：(10.6) C：0.8	同上。 底体部の½をヘラケズリ。ヘラ記号あり。	黄灰色	不良	92001509
—319		杯　身	A：(9.6) C：0.8	同上。 底体部の½をヘラケズリ。ヘラ記号あり。	暗灰色	良	92001507
—320		杯　身	A：(9.7) C：0.9	同上。 ヘラ切り未調整。	内面：灰色 外面：暗灰色 ～褐灰色	良	92001571
—321		杯　身	A：(9.6) C：0.8	同上。 ヘラ切り未調整。	暗灰色	良	92001508
—322 81		高台付杯	A：(14.0) B：(3.9) D：7.6	高台は外側へふんばる。体部は外方へ立ち上がる。	灰　色	良	92001536 931706
154-323		杯　身	A：(11.7) C：0.9	立ち上がりは低く，外反気味に内傾する。	内面：灰色 外面：暗灰色	良	92001580
—324		杯　身	A：(12.2) C：0.7	立ち上がりは低く，内傾する。	内面：灰色 外面：暗灰色	良	92001575
—325		杯　身	A：(11.8) C：1.0	同上。 底体部の½をヘラケズリ。	暗灰色	良	92001514
—326		杯　身	A：(11.4) C：0.9	立ち上がりは低く，外反気味に内傾する。	暗灰色	良	92001501
—327		杯　身	A：(11.4) C：0.8	立ち上がりは低く，やや外反気味に内傾する。	灰色～ 暗灰色	良	92001568
—328		杯　身	A：(11.4) C：0.7	同上。	灰色～ 暗灰色	良	92001579
—329		杯　身	A：(11.2) C：0.9	立ち上がりは低く，内傾する。	暗灰色	良	92001567
—330		杯　身	A：(11.2) C：0.7	同上。	明灰色 ～褐灰色	良	92001562
—331		杯　身	A：(9.6) C：0.9	同上。	黄灰色	良	92001510
—332		杯　身	A：(10.6) C：1.0	同上。	褐灰色	良	92001505

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	器　種	法量(cm)	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
154-333		杯　身	A：(10.6) B：(4.0) C：0.7	立ち上がりは低く，内傾する。 底面にヘラケズリ。ヘラ記号あり。	暗灰色 ～褐灰色	良	92001565
—334		杯　身	A：(10.8) C：0.9	立ち上がりは低く，外反気味に内傾する。	暗灰色 ～褐灰色	良	92001566
—335		杯　身	A：(10.2) C：0.8	同上。 底体部の½をヘラケズリ。	褐灰色	良	92001513
—336		杯　身	A：(10.2) C：1.0	同上。	明灰色	不良	92001577
—337		杯　身	A：(9.5) C：0.7	同上。もっとも小型化したもの。	灰　色	良	92001570
—338		杯　身	A：(9.2) C：0.8	同上。	灰　色	良	92001573
—339		杯　身	A：(9.0) C：0.7	同上。	灰色～ 褐灰色	良	92001578
—340		杯　身	A：(8.8) C：0.8	同上。	灰色～ 暗灰色	良	92001574
—341		杯　身	A：(8.2) C：0.6	同上。	灰　色	良	92001576
—342		杯　身	A：(15.0)	体部は外方へ直線的に立ち上がる。	灰　色	良	92001537
—343		杯　身		同上。	褐灰色	良	92001549
—344		高　杯	A：(14.4) C：1.0	有蓋。 杯部の⅓にカキ目。	内面：暗灰色 外面：黒色	良	92000755
—345		高　杯	A：(11.8)	無蓋。 杯部の½にヘラケズリ。	暗灰色	良	91002622
—346		高　杯	A：(11.2)	無蓋。 脚部残存部にカキ目。	内面：明灰色 外面：暗灰色	良	91002609
—347		高　杯	D：(10.9)	長脚二段スカシ。	黒　色	良	92000753
—348		高　杯	D：(10.4)	脚部の⅓にカキ目。	暗灰色	良	92000754
—349 81		高　杯	A：10.2 B：6.1 D：(10.2)	蓋受けの付く杯部に短い脚部が付く。 脚部は一度屈曲し，外方に広がる。 長方形スカシ。ヘラ記号。	灰　色	良	89009955 964510
—350		高　杯	D：9.5	同上。小円孔のスカシ。	黒　色	良	91002612
—351		高　杯	D：8.4	同上。小円孔のスカシ。	暗灰色	良	91002617
155-352		壺　蓋	A：(10.0)	天井部⅓を静止ヘラケズリ。	灰　色	良	92001541
—353		壺		底部を静止ヘラケズリ。ヘラ記号あり。	黒　色	良	91000695

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	器　種	法量(cm)	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
155-354 81		壺	A：(9.0)	口縁部は断面三角形に肥厚。体部に二条の沈線。底部をヘラケズリ。ヘラ記号あり。	暗灰色	良	91000693 931222
—355		壺	A：(8.1)	肩部がはり，口縁部は短い直口。	明灰色	良	91000694
—356		壺	A：(5.3)	肩部に沈線。口縁部は短い直口。	明灰色	良	91000696
—357		壺	A：(5.4) B：6.9	肩部に沈線。口縁部は短い直口で肥厚。底面をヘラケズリ。ヘラ記号あり。	内面：灰色 外面：黒色	良	91000692
—358		壺		体部に櫛描列点文あり。	明灰色	良	91000691
—359		甕		体部に櫛描列点文あり。	明灰色	良	91000690
156-360	No.17	杯　蓋	A：(13.7)	口縁部は，比較的高く立ち上がり，端部は細くとがる。	灰色～ 褐灰色	良	92001559
—361		杯　蓋	A：(10.5)	口縁部は低く立ち上がり，端部にキザミ目。	暗灰色	良	92001560
—362	玄室 No.83	杯　身	A：10.6 B：3.1	底部は平底で，体部は内湾気味に立ち上がる。底部ヘラキリ未調整後一部不定方向のヘラケズリ。	暗灰色	良	91000678
—363	墓　前	杯　身	A：(11.2) C：1.05	蓋受けの立ち上がりは，直線的で内傾する。	内面：褐灰色 外面：暗灰色	良	92001554
—364	No.21	杯　身	A：(11.6) C：0.75	蓋受けの立ち上がりは短く，外反気味に内傾する。底体部の½をヘラケズリ。	明灰色	良	92001551
—365	墓　前	杯　身	A：(11.2) C：0.95	同上。	明灰色 ～褐灰色	良	92001555
—366		杯　身	C：0.8	同上 底体部の½をヘラケズリ。ヘラ記号あり。	明灰色	良	92001552
—367	墓　前	杯　身	C：0.9	同上。	暗灰色 ～黒色	良	92001556
—368		杯　身	C：0.8	同上。	内面：明灰色 外面：暗灰色	良	92001553
—369	玄室 No.84	杯　身	A：9.7 B：3.0	底部は平底で，体部は内湾気味に立ち上がる。底部はヘラキリ後，不定方向のヘラケズリ。	灰　色	良	89009952
—370 81	玄室 No.82	杯　蓋	A：11.7 B：2.9	宝珠つまみが付き，口縁内面に短い身受けが付く。天井部のみヘラケズリ。ヘラ記号あり。	内面：灰色 外面：白灰色	不良	89009958 964513
—371	No.5	杯　蓋	A：(13.6)	口縁内面に短い身受けが付く。ヘラ記号あり。	灰　色	良	92001558
—372 81	No.14	高杯蓋	A：(17.4) B：5.5	頂部のくぼむつまみが付く。口縁部は細くとがり気味。天井部をヘラケズリ。	暗灰色	良	92001543 931223
—373 81		平　瓶	A：9.1 B：13.2 D：11.9	比較的肩部のはる体部に外反する口縁部が付く。底部は平たい。体部にカキ目。	暗灰色	良	89009959 964514
157-374 82	前　庭	杯　蓋	A：12.5 B：4.3	口縁部は短く，天井部はゆるく立ち上がる。天井頂部のみヘラケズリ。ヘラ記号あり。	暗灰色	良	91000679 931697

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	器　種	法量(cm)	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
157-375	前　　庭	杯　蓋	A：(13.0)	口縁部は短く，天井部はゆるく立ち上がる。 天井部の½をヘラケズリ。	灰　色	良	91000046
—376	前庭表土中	杯　蓋	A：(13.0)	口縁部は比較的高く立ち上がり，口縁端部内面には浅い沈線がある。	褐灰色	良	92002702
—377	前庭表土中	杯　蓋		口縁部は短く天井部の立ち上がりはゆるい。 天井部のみヘラケズリ。ヘラ記号あり。	灰　色	良	92002703
—378	前　　庭	杯　蓋	A：(11.8)	同上。 天井部の½をヘラケズリ。	明灰色	良	91000042
—379 82	前　　庭	杯　蓋	A：11.6 B：3.6	同上。 天井部の½をヘラケズリ。	白灰色 外面：一部灰　色	やや不良	89009960 964516
—380 82	玄室No101	杯　蓋	A：11.2 B：1.8	つまみのつかない天井部は平たく，口縁内部に短い身受けがつく。天井部を不定方向のヘラケズリ。	内面：灰色 外面：灰色～灰黒色	良	89009951 964518
—381 82	前　　庭	杯　蓋	A：14.6 B：2.7	頂部の丸い，偏平なつまみが付く。口縁内部に短い身受けが付く。天井部の⅓をヘラケズリ。	灰　色 一部白灰色	不良	89009962 964521
—382 82	前　　庭	杯　身	A：(12.1) C：1.25	蓋受けは比較的高く，内傾して立ち上がる。底体部の⅓をヘラケズリ。	灰　色	良	91002637 931704
—383 82	前　　庭	杯　身	A：(11.2) B：3.0 C：0.75	蓋受けは短く，内傾する。 底部はヘラキリ未調整。	明灰色	良	91000682 931699
—384 82	前　　庭	杯　身	A：(10.8) B：3.7 C：0.85	同上。 底体部の⅓をヘラケズリ。	明灰色	良	91000686 931705
—385 82	前　　庭	杯　身	A：10.8 B：4.1 C：0.55	蓋受けは短く矮小。内傾強い。 底面のみをヘラケズリ。	明灰色	良	91000687 964522
—386	前　　庭	杯　身	A：(11.0) B：2.9 C：0.8	蓋受けは短く，内傾する。 底体部の⅓をヘラケズリ。ヘラ記号あり。	褐灰色	良	92001515
—387 83	前　　庭	杯　身	A：(10.2) B：4.1 C：0.8	底体部の⅓をヘラケズリ。	黄灰色	やや不良	89009957 964524
—388 83	前　　庭	杯　身	A：10.2 B：4.1 C：0.95	同上。 底体部の¼をヘラケズリ。ヘラ記号あり。	灰　色	良	89009956 964527
—389	前　　庭	杯　身	A：(8.4) B：3.3 C：0.6	蓋受けは矮小。底部は小さく，底細りの器形。 底面のみヘラケズリ。ヘラ記号あり。	褐灰色	良	92001516
—390 83	前　　庭	杯　身	A：9.7 B：3.9	丸底気味の底部に，口縁は端部の丸い直口。 底体部の⅓をヘラケズリ。	暗灰色	良	91000681 964529
—391 83	前　　庭	杯　身	A：13.2 B：3.4	平底に外反気味の口縁部が付く。 底部のみヘラケズリ。	灰　色	良	89009961 964530
—392	前庭表土中	高台付杯	D：(8.8)	外方にふんばる形態の高台。	暗灰色	良	92001583
—393	前庭表土中	高台付杯	D：(9.1)	同上。	暗灰色 ～褐灰色	良	92001582
—394 83	西側周溝埋土中（P-2）	杯　身 （土師器）	A：(11.1) B：4.1	蓋受けは短く内傾し，体部は丸い。 蓋受けと体部の境は段をなす。ナデ調整。	褐　色 ～茶褐色	不良	92003184 964532
158-395	前庭・表土中	高 杯 蓋		頂部のくぼむつまみが付く。口縁部欠損。 天井部のみヘラケズリ。	内面：暗灰色 外面：褐灰色	良	92001585

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	器　種	法量(cm)	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
158-396	前　　庭	高 杯 蓋	A：13.0 B：2.9	偏平なつまみが付く。口縁部に身受け付く。 天井部をヘラケズリ。	暗灰色	良	91002601
—397	前庭表土中	高 杯 蓋		頂部のくぼむつまみが付く。口縁部欠損。 天井部のみヘラケズリ。	暗灰色 ～黒色	良	92001584
—398 83	前　　庭	高　　杯	A：11.5	杯口縁部と底部の境に二条の段。 脚部にカキ目あり。	内面：明灰色 外面：暗灰色	良	91000684 931708
—399 83	前 庭 部	高　　杯	A：11.3	同上。脚部に長方形スカシ。	明灰色	良	91000685 931709
—400	前庭表土中	高　　杯		杯口縁部と底部の境に二条の沈線。	暗灰色	良	92001592
—401	前庭表土中	高　　杯		杯下半から脚上半までの破片。 杯底部をヘラケズリ。	灰　色	良	92001590
—402	前庭表土中	高　　杯	D：(13.1)	長脚二段スカシ。脚端部ははね上がり気味に肥厚。	黄灰色	不良	92001594
—403	前庭表土中	高　　杯	D：(12.4)	脚部は一度屈曲し，外方へ広がる。 長方形スカシ。	灰　色	良	92001596
—404	前　　庭	高　　杯	D：9.3	同上。	明灰色	良	91002607
—405	前　　庭	高　　杯	D：8.3	同上。	明灰色	良	91002606
—406	前庭表土中	高　　杯	D：(7.5)	脚部は端部が短く折れ，とがる。	暗灰色	良	95001595
—407	前庭表土中	高　　杯	D：11.2	脚部は端部が三角形に肥厚。	黒　色 ～褐灰色	良	92001593
—408	前庭表土中	甕	A：(14.0)	口縁のみ。	灰　色	良	92001587
—409	前　　庭	甕		口縁部を欠く。頸部は体部との境でしぼられ，外広きに立ち上がる。体部の½をヘラケズリ。	明灰色	良	91000689
—410	前　　庭	甕		同上。 体部の½をヘラケズリ。	明灰色	良	91000688
—411	前　　庭	甕		同上。頸部中位に沈線。 体部の½をヘラケズリ。	灰　色 ～黄灰色	良	89009953
—412	前庭表土中	甕		体部に櫛描列点文。	灰　色	良	92001588
—413	前庭表土中	直 口 壺	A：(11.4)	口縁部と肩部の破片。	内面：白褐色 外面：黒灰色	良	92000737
—414	前庭表土中	壺	A：(8.5)	肩部がはり，口縁部は短い。	褐灰色	良	92001586
—415 83	前　　庭	壺	A：(4.9) D：5.9	口縁部は若干肥厚。 体部下方から底部にかけてヘラケズリ。底部にヘラ記号あり。	暗灰色	良	91000683 931710
159-416	前庭表土中	甕	A：(28.4)	口縁逆L字形。 頸部にカキ目後，縦方向の沈線文。	明褐色	良	91002650

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	器　種	法量(cm)	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
159-417	前庭表土中	甕		口縁肥厚。	褐灰色	良	91002642
—418	前庭表土中	甕	A：(31.3)	口縁逆L字形。 頸部に横方向のカキ目とヘラ描き文あり。	褐灰色	良	91002643
—419	前庭表土中	甕	A：(47.9)	頸部にヘラ状工具による縦方向の沈線文あり。	褐灰色	良	91002647
—420	前庭表土中	甕	A：(38.0)	口縁逆L字形。 頸部にカキ目後，縦方向の沈線文。	茶褐色	良	91002649
160-421	前庭表土中	甕	A：(40.6)	頸部にカキ目後，櫛描波状文。	内面：褐色 外面：黒褐色	良	92000729
—422	前庭表土中	甕	A：(41.1)	頸部に櫛描波状文あり。	内面：黒色 外面：暗灰色	良	92000730
—423	前庭表土中	甕	A：(41.9)	頸部に櫛描波状文あり。	明褐色	良	91002648
—424	前庭表土中	甕	A：(24.4)	体部に格子目タタキ後，カキ目。体部内部に同心円文タタキ。 口縁部にヘラ記号あり。	内面：灰色 外面：明灰色	良	92000732
—425	前庭表土中	甕		体部に格子目タタキ後，カキ目。体部内部に同心円文タタキ。	内面：灰色 外面：暗灰色	良	92000733

馬具

426・427は鉄地金銅張の雲珠。いずれも破損し、金箔の剝落も激しい。両者は、同一個体の可能性もあるが、決め手に乏しいため別個体とする。426は、約4分の1を欠損するが、端部が直立気味に立ち上がる偏平な径8.5cmの半球形を呈し、高さは約2.7cmである。脚は8脚で、先端が方頭のものと円頭のものが交互に配される。実測図上では、6脚を実際の出土遺物で復元しているが、位置の確実なものは3脚のみで、残りの3脚の位置は推定である。427は約4分の1の破片であるが、形態は426に酷似する。脚は円頭形の1脚のみが同一個体として取り上げられている。

428～432は、鉄地金銅張の辻金具。428は、最も完形に近い個体で、径4cmの半球形を呈し4脚が十字形に付く。脚は先端が方頭のもの1脚、円頭3脚で、前者が長さ1.5cm、後者が3cm程度である。方頭のものには1個、円頭のものには3個の鋲が付く。また頂部には、飾り部分を欠くものの、飾金具がある。428・429も同形態である。このうち428は、2分の1弱の破片で、方頭、円頭の脚金具が1個ずつ残っている。429は、4脚のうち方頭の1脚を欠く。また、頂部には錆膨れが激しいものの球形の金具が残っており、飾金具の形態を推測させる。430は、円頭形の先端部の脚が1脚しか残っていない。431は、約4分の1の破片。

432～434は、鋲が1つ付く鋲留金具。鉄地金銅張。雲珠の脚金具と考えられるが、鋲が3つ付く辻金具の脚金具の先端部分が折れたものの可能性もあり断定できない。これに対して434・435も鉄地金銅張であるが、鋲が3つ付く先端が円頭の辻金具の脚金具である。428・430・431のいずれかのものと推定されるが、特定できないため別図とした。

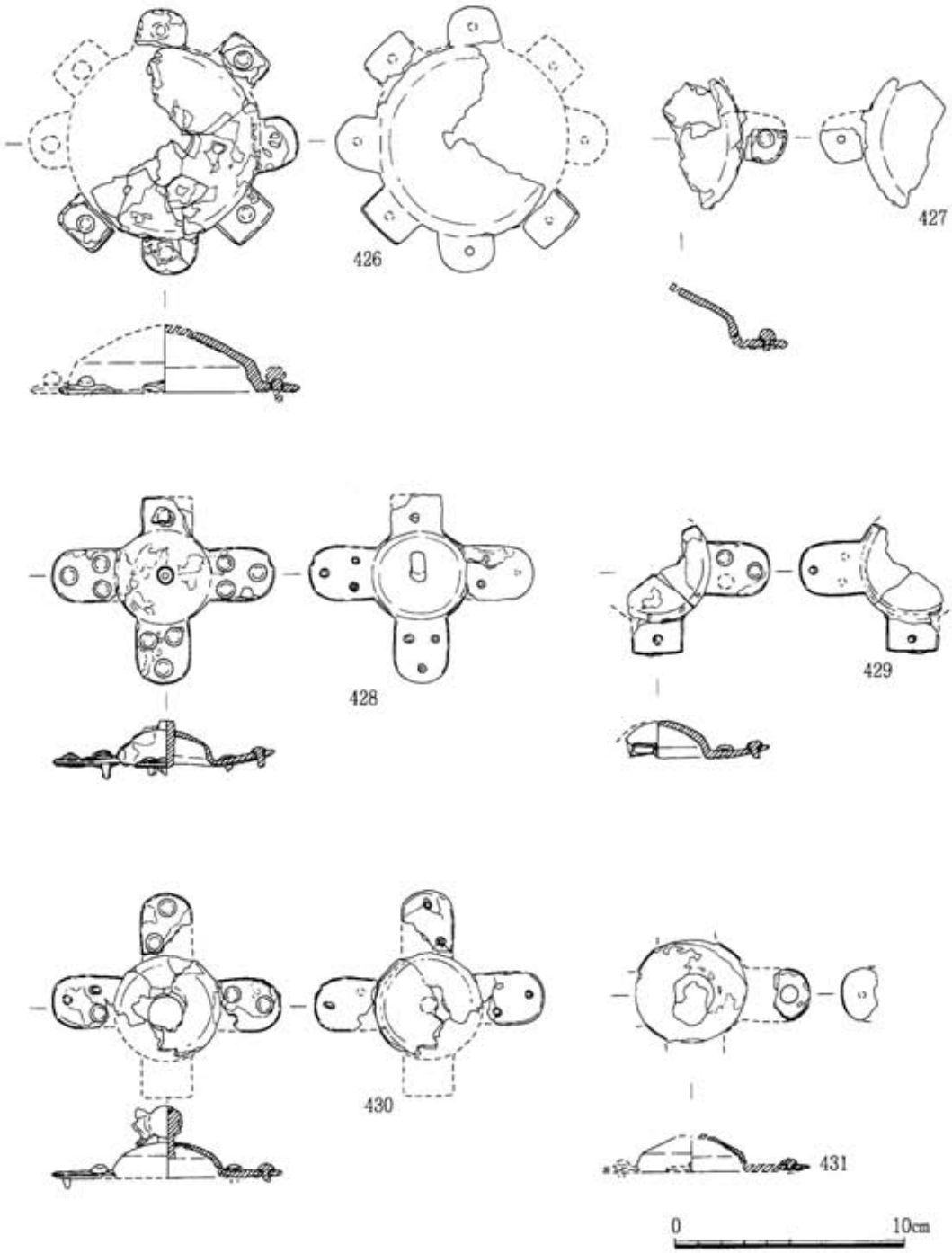


図161　ＳＴ014古墳出土馬具１（１／３）

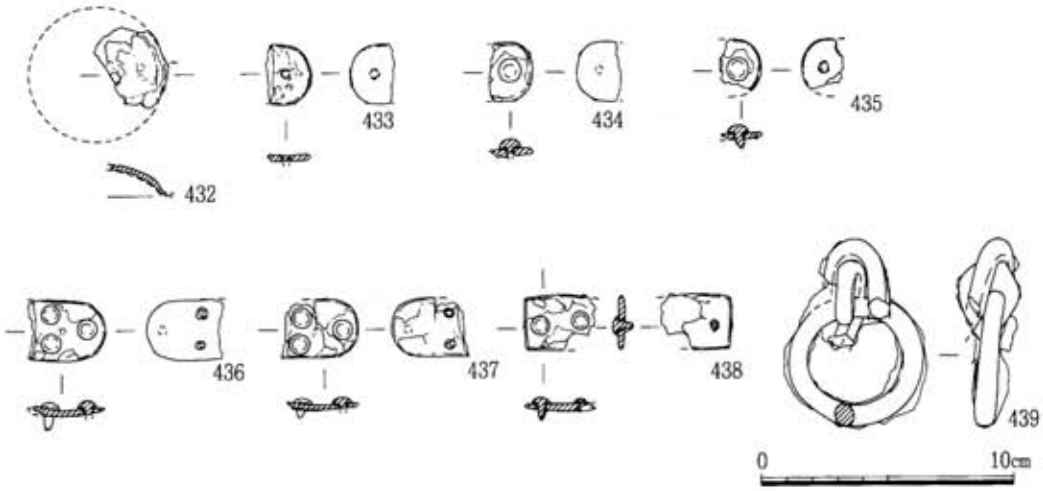


図162　ＳＴ014古墳出土馬具２（１／３）

437は、厚さ0.3cmの平面長方形の鉄地金銅張製の板に２個の鋲が付く鋲留金具。

438は、素環の鉄製鏡板。径５cmの円径で、太さ約0.8cm。一端に引手と銜の一部が錆着している。

表34　ＳＴ014古墳出土馬具観察表　　（　）は残存長

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm) 最大幅	高さ	県遺物登録番号 写真登録番号
161-426 84	石室床面直上 №1	雲珠 （有脚半球形 鉄地金銅張）	11.75	(2.7)	93002109 960147
—427 84	№1 №24	雲珠 （有脚半球形）	(5.75)	(2.6)	93002116 960147
—428 84	石室床面直上 №2	辻金具 （有脚半球形）	9.85	2.65	93002108 960147
—429 84	②、③	辻金具 （有脚半球形）	(6.15)	(1.7)	93002111 960147
—430 84	石室床面直上 №21 №24	辻金具 （有脚半球形）	10.1	3.6	93002117 960147
—431 84	石室床面直上 №4	辻金具 （有脚半球形） （鉄地金銅張）	(7.55)	(1.5)	93002113 960147
162-432 84	③	辻金具	(2.95)	(1.15)	93002110 960147
—433 84	石室床面直上 №59	雲珠の脚	2.4		93002120 960147
—434 84	石室床面直上 №?	辻金具？ （の脚）	2.35		93002118 960147
—435 84	石室床面直上 №96	辻金具？ （の脚）	(2.15)		93002121 960147
—436 84	石室床面直上 №5	辻金具の脚	(3.05)		93002114 960147
—437 84	石室床面直上 №96周辺より	辻金具の脚	(3.0)		93002122 960147
—438 84	石室床面直上 №6	鋲留金具	(2.8)		93002115 960147
—439 84	前庭部表土中	轡 （素環鏡板）	5.3	轡のみ 5.05 全体 7.35	92003908 960147

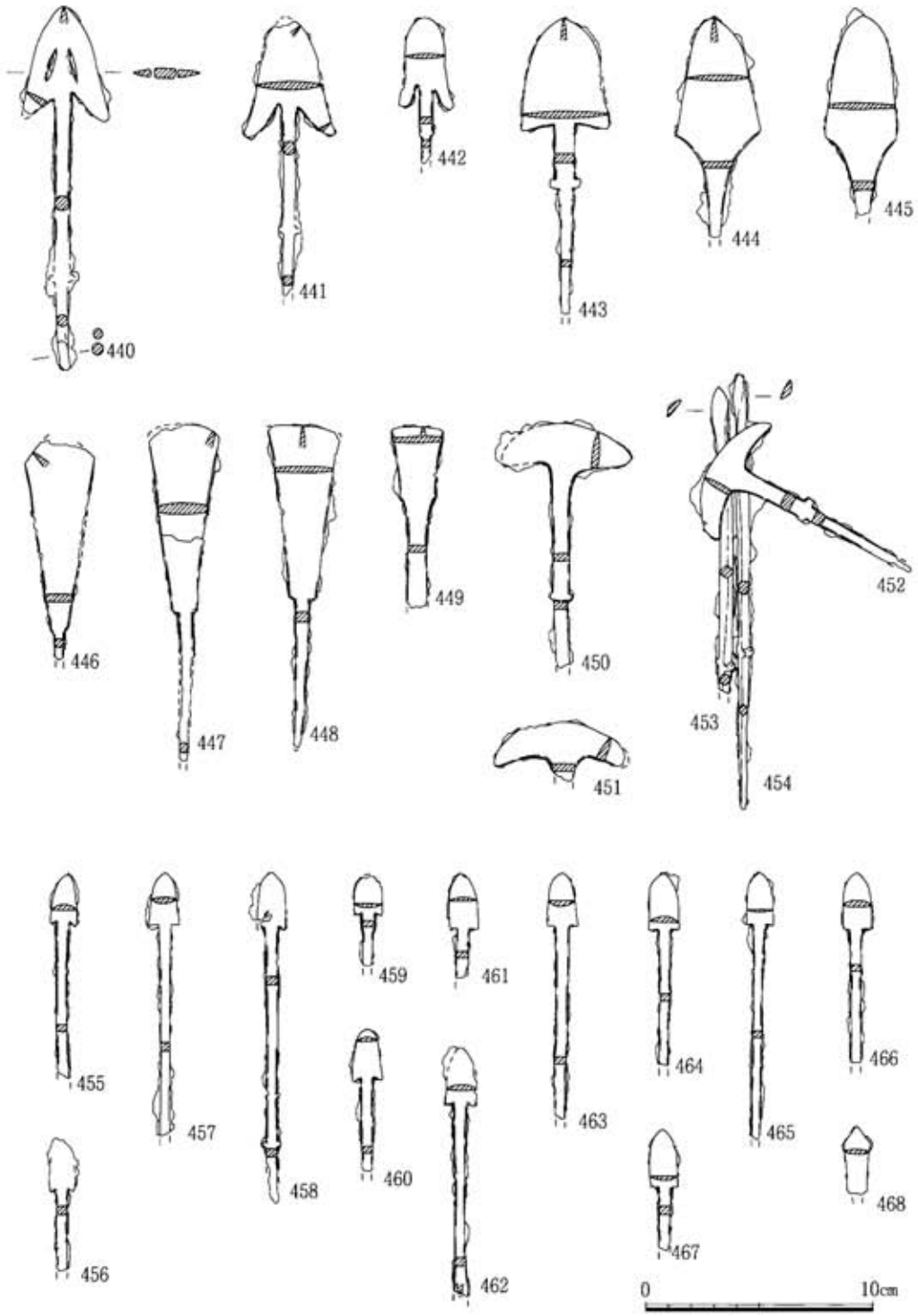


図163　ＳＴ014古墳出土鉄鏃１（１／３）

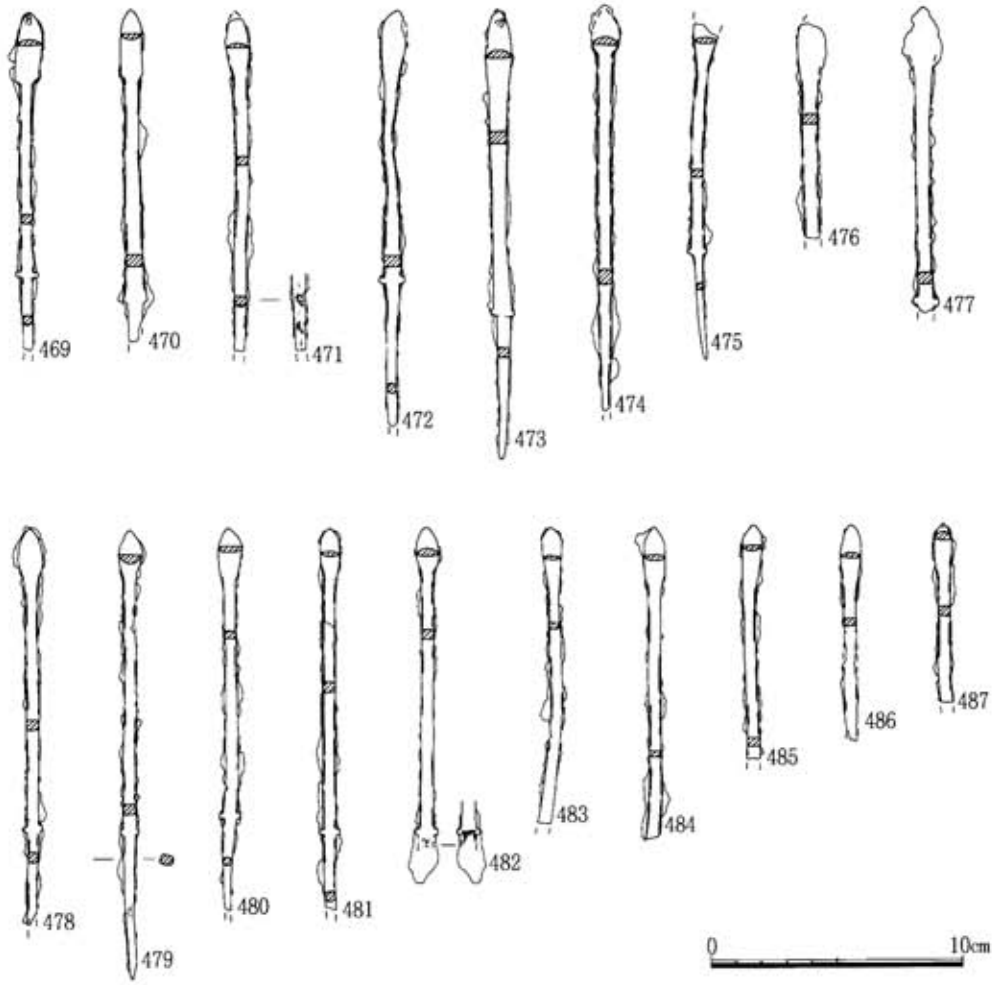


図164　ＳＴ014古墳出土鉄鏃２（１／３）

鉄鏃

鉄鏃は、平根式と尖根式とに大別される。440～452は平根式。440～443は、鏃身部に腸抉のある平根式で、平面形から440・441が平根腸抉三角形式、442が平根腸抉柳葉式である。443は平根腸抉五角形式。440・441・443は茎に突起状の箆被、いわゆる棘箆被がある。440は透かしがある。444･445は、腸抉のないもので椿葉式。446は、圭頭式。鏃身部の先端を欠く。447～449は方頭式。このうち449は小形。450～452は、飛燕式。鏃身幅が鏃身長の約３倍の長さがある。棘箆被である。

453～502は尖根式。453・454は451に銹着したもので、小形柳葉式。454～463・465～467は小形三角形式。このうち、457・458・460～463・465～467は五角形に近い。また、454～461は鏃身部の関が短い逆刺状につくられる。464は、圭頭状の鏃身部。

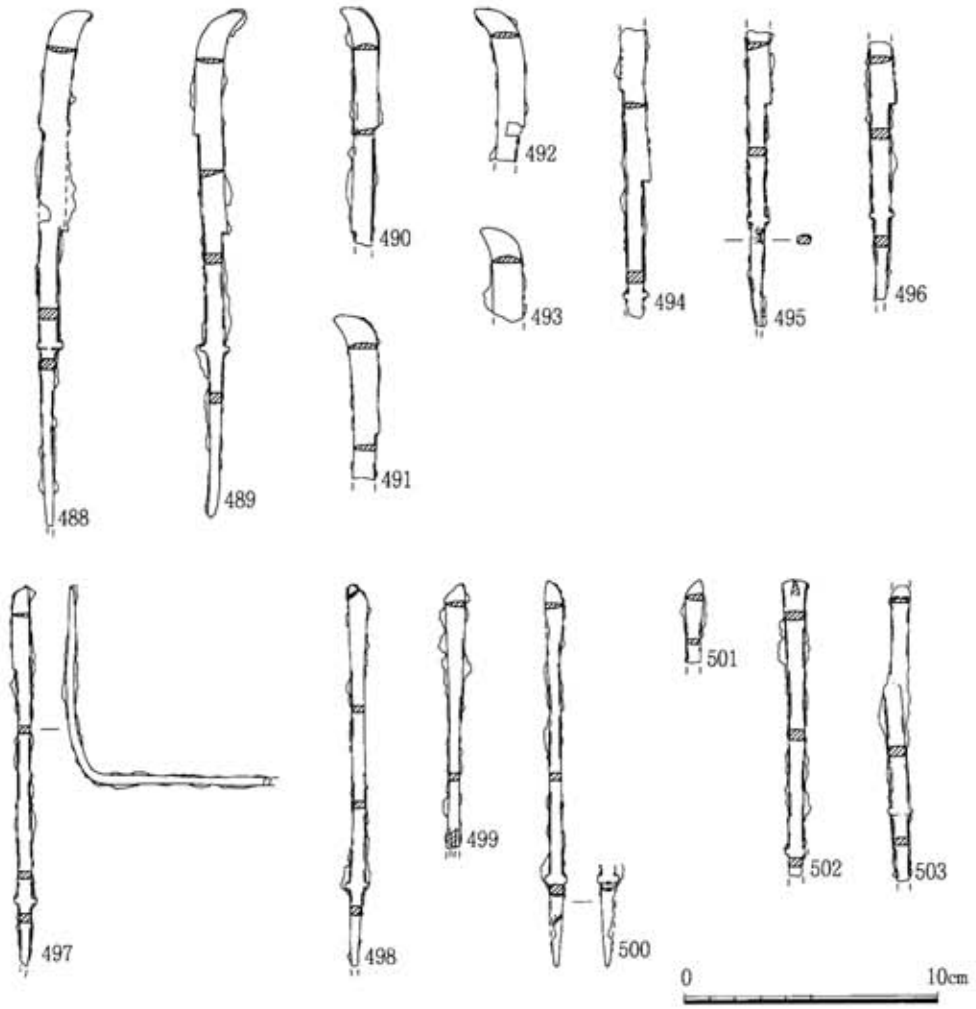


図165　ＳＴ014古墳出土鉄鏃３（１／３）

469～487は小形柳葉式。469・470は明確な関がつくられるが、そのほかは不明確か漸次的に頸部に移行する。以上の鏃身部は片丸つくりが大半である。

488～496は、鏃身部が特異な形態を呈するもの。鏃身長は8.5～９cmと長く、先端が片方に湾曲する。関は鏃身部の中央付近とその反対側に段違いの関がつく両関式。刃のつくりも刃の先端から鏃身部の中央付近の関までが片丸式で両刃であるのに対し、これより下部は片刃である。頸部と茎の篦被は棘篦被である。この鉄鏃と同じものは、かつて末永雅雄氏が細根式に分類された「上野上瀧」出土の例がある（末永　1943）。

496～500は、片刃鏃式。このうち496は小さな関がつくが、497～500は段をなすような明確な関がない。茎まで遺存する496・497・499は棘篦被である。

501は、棘篦被鑿鏃式。502は鏃身部の形態不明。

表35　ＳＴ014古墳出土鉄鏃観察表

（　）は残存長

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	型　式	法　量(cm) 鏃身長	鏃身幅	県遺物登録番号 写真登録番号	図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	型　式	法　量(cm) 鏃身長	鏃身幅	県遺物登録番号 写真登録番号
163-440 85	石室床面直上 №12	透根　扁抉三角形	5.1	(3.8)	92003706 960149	164-472 86	石室床面直上 №71	尖根　小形柳葉	2.4	(1.0)	92003672 960151
—441 85	石室床面直上 №12	平根　扁抉三角形	(5.0)	3.95	92003707 960149	—473 86	石室床面直上 №40	尖根　小形柳葉	(3.1)	1.03	92003630 960151
—442 85	石室床面直上 №12	平根　扁抉三角形	3.95	2.4	92003708 960149	—474 86	石室床面直上 №12	尖根　小形柳葉	1.8	1.1	92003722 960151
—443 85	石室床面直上 №12	平根　三角形	4.9	3.78	92003705 960149	—475 86	石室床面直上 №114	?	(1.7)	(0.95)	92003691 960151
—444 85	石室床面直上 №13	平根　椿葉	5.1	3.7	92003916 960149	—476 86	石室床面直上	?	(2.1)	不明	92003944 960151
—445 85	石室床面直上 №124付近	平根　椿葉	5.48	3.1	92003930 960149	—477 86	№153	?	不明	不明	92003902 960151
—446 85	石室床面直上 №100の下より	平根　圭頭	(8.5)	3.1	92003926 960149	—478 86	石室床面直上 №12	尖根　小形柳葉	1.6	0.95	92003698 960151
—447 85	石室床面直上 №30　№100	平根　方頭	8.25	(3.05)	92003917 960149	—479	石室床面直上 №12	尖根　小形柳葉	1.6	0.95	92003697
—448 85	石室床面直上 №70	平根　方頭	7.7	(3.2)	92003668 960149	—480	石室床面直上 №12	尖根　?	2.0	0.95	92003723
—449 85	石室床面直上 №10	平根　方頭	3.15	2.3	92003914 960149	—481	石室床面直上 №92　№96	尖根　小形柳葉	1.8	0.75	92003689
—450 85	石室床面直上 №12	平根　飛燕	1.95	5.7	92003695 960149	—482	石室床面直上 №12	尖根　小形柳葉	1.7	0.9	92003721
—451 85	石室床面直上 №14	平根　飛燕	2.05	(5.8)	92003694 960149	—483	№153	尖根　小形柳葉	2.6	0.8	92003903
—452 85	石室床面直上 №12	平根　飛燕	1.7	5.5	92003696 960149	—484	№153	尖根　小形柳葉	2.6	0.85	92003904
—453 85	石室床面直上 №12	尖根　小形柳葉	1.8	0.9	92003696 960149	—485	№153	尖根　小形柳葉	3.0	0.8	92003901
—454 85	石室床面直上 №12	尖根　小形柳葉	1.8	0.9	92003696 960149	—486 86	石室床面直上 №100の下より	尖根　小形柳葉	3.0	0.8	92003928 960153
—455 85	石室床面直上 №12	?	2.3	1.2	92003717 960149	—487 86	石室床面直上	尖根　小形柳葉	(1.95)	0.75	92003942 960153
—456	石室床面直上 №12	?	(不明)	1.15	92003712	165-488	石室床面直上 №60	(細根)	8.7	1.15	92003667
—457 85	石室床面直上 №9	尖根　小形三角形	2.3	1.4	92003629 960149	—489	石室床面直上 №69	(細根)	8.85	1.15	92003669
—458 85	石室床面直上 №12	尖根　小形三角形	2.55	(1.15)	92003720 960149	—490 86	石室床面直上 ①のすみ	(細根)	8.9	1.05	92003936 960153
—459 85	石室床面直上 №12	尖根　小形三角形	(1.75)	1.25	92003711 960149	—491 86	石室床面直上 №142	(細根)	(6.55)	1.2	92003932 960153
—460 85	石室床面直上 №12	尖根　小形三角形	2.3	1.35	92003714 960149	—492 86	石室床面直上 №142	(細根)	(6.15)	1.15	92003933 960153
—461 85	石室床面直上 №12	尖根　小形三角形	2.5	1.25	92003710 960149	—493 86	石室床面直上 ①のすみ	(細根)	(3.7)	(1.2)	92003937 960153
—462 85	石室床面直上 №12	尖根　小形三角形	2.55	1.38	92003718 960149	—494	石室床面直上 №49	(細根)	(6.1)	(1.0)	92003665
—463 85	石室床面直上 №7	尖根　小形三角形	2.38	(1.35)	92003912 960149	—495	石室床面直上 №75	(細根)	(2.9)	(0.95)	92003671
—464 85	石室床面直上 №12	尖根　小形三角形	2.55	1.35	92003716 960149	—496	石室床面直上 №75	(細根)	(2.45)	(1.03)	92003673
—465 85	石室床面直上 №12	尖根　小形三角形	2.4	1.2	92003719 960149	—497	石室床面直上 №89	尖根　片刃箭	3.25	0.75	92003688
—466 85	石室床面直上 №12	尖根　小形三角形	2.5	1.25	92003715 960149	—498 86	石室床面直上 №88	尖根　片刃箭	0.8	0.8	92003686 960153
—467	石室床面直上 №12	尖根　小形三角形	2.6	1.25	92003713	—499 86	石室床面直上 №12	尖根　片刃箭	1.0	0.85	92004402 960153
—468	石室床面直上	尖根　圭頭	(3.0)	1.2	92003945	—500 86	石室床面直上 №8	尖根　片刃箭	2.5	0.75	92003913 960153
164-469 86	石室床面直上 №64	尖根　小形柳葉	2.9	1.0	92003666 960151	—501	石室床面直上	尖根　片刃箭	0.85	0.73	92003946
—470 86	石室床面直上 ①のすみ	尖根　小形柳葉	2.7	0.85	92003935 960151	—502 86	石室床面直上 №12	尖根　鏃箭	0.6	1.0	92003725 960153
—471 86	石室床面直上 №47	尖根　小形柳葉	(2.35)	0.9	92003664 960151	—503	石室床面直上 №118	尖根　不明			92003692

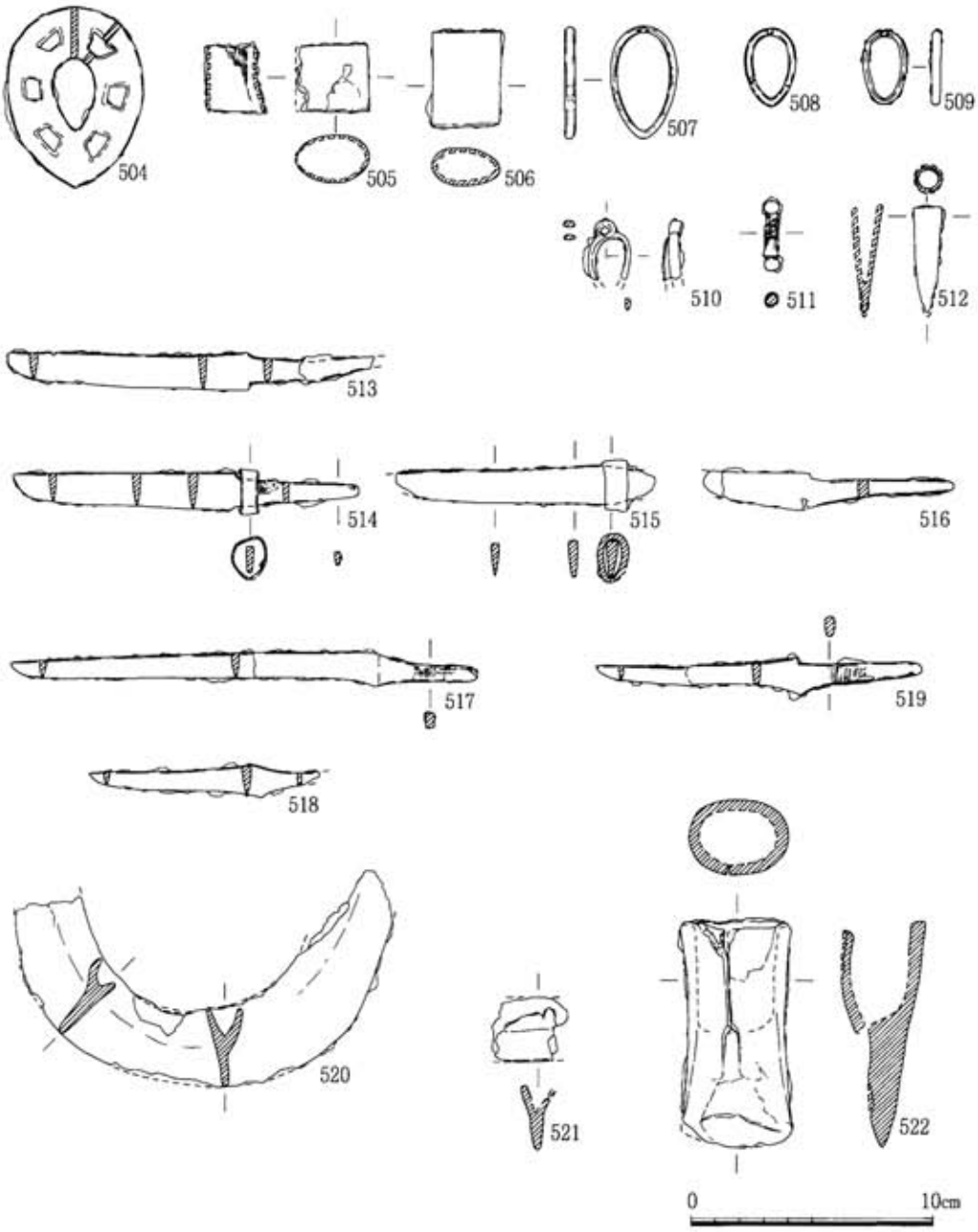


図166　ＳＴ014古墳出土農工具（１／３）

武器付属金具

504は、大刀の鐔。鉄製で長さ7.55cm、幅5.65cmの倒卵形の平面形を呈する。台形の透かしが6ヵ所ある。505は鞘元金具、506は鞘尻金具である。507～509は責金具。510は足金具。511は弓付属金具とされる両頭金具である。表面に木質が付着する。512は、石突と考えられる。

表36　ＳＴ014古墳出土武器付属金具観察表　　（　）は残存長

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号	図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号
			最大長	最大幅					最大長	最大幅	
166-504 87	石室床面直上 №117	鐔	7.55	5.65	92003929 960155	—509 87	石室床面直上 №11	責金具(鉄製品)	2.95	1.8	92003915 960155
—505 87	石室床面直上 №3	鞘元金具？	2.75	(2.95)	92003911 960155	—510 87	石室床面直上 №90	足金具(鉄製品)	(2.5)	1.75	92003923 960155
—506 87	石室床面直上 №12	鞘尻金具	4.05	2.85	92003709 960155	—511 87	石室床面直上 №91	弓付属金具	2.9	0.6	92003924 960155
—507 87	石室床面直上 116	責金具(銅地金張)	4.58	2.7	93002124 960155	—512 87	石室床面直上 №90	石突(鉄製品)	(4.4)	1.2	92003922 960155
—508 87	№105	責金具	3.2	2.1	93002123 960155						

農工具

513～519は刀子。このうち514・515には柄の責金具が残っている。520・521はＵ字形の鋤先。520はわずかに両端が欠損するものの完形に近い。522は、袋穂の鉄斧。

表37　ＳＴ014古墳出土農工具観察表　　（　）は残存長

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号	図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号
			最大長	最大幅					最大長	最大幅	
166-513 87	石室床面直上 №76	刀　子	(15.2)	1.6	92003674 960156	166-518 87	石室床面直上 №124付近	刀　子	(9.65)	1.4	92003931 960156
—514 87	石室床面直上 №74　№143	刀　子	14.3	1.9	92003921 960159	—519 87	石室床面直上 №78	刀　子	(13.3)	1.6	92003675 960156
—515 87	石室床面直上 №67	刀　子	(10.7)	2.17	92003920 960156	—520 87	石室床面直上 №52	鋤(Ｕ字形)	(9.0)	(15.8)	92003925 960156
—516 87	石室床面直上 №50	刀　子	(10.3)	1.55	92003919 960156	—521 87	床面直上	鋤(Ｕ字形)	(2.7)	(3.15)	92003906 960156
—517 87	石室床面直上 №70　№72	刀　子	19.25	(1.35)	92003670 960156	—522 87	石室左側壁中	鉄　斧	9.5	4.55	92003907 960156

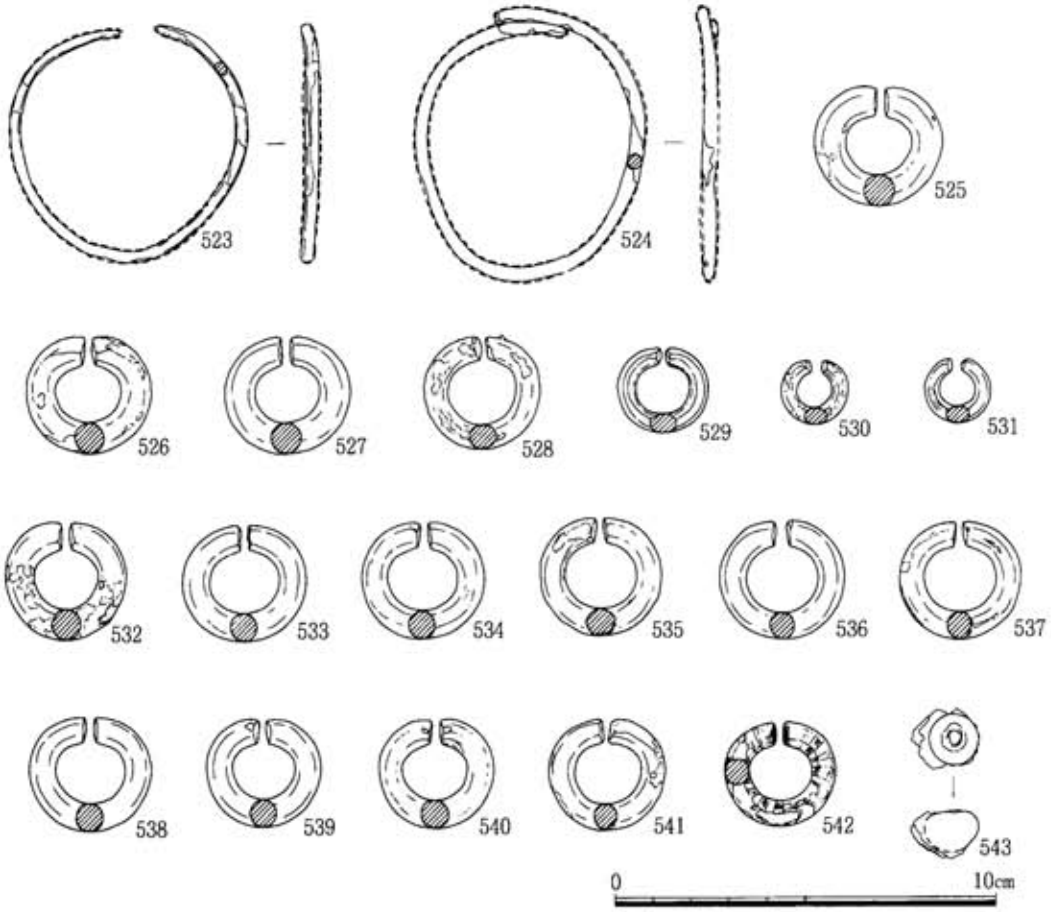


図167　ＳＴ014古墳出土銅釧・耳環（１／２）

銅釧

523・524は銅釧。523は最大外径6.4cmを測る円形。太さは0.33cm。524は最大外径6.9cmの楕円形である。太さは0.4cmを測る。いずれも錆のため表面の剥落が進行している。出土状況から、両者は一対のセットと思われる。

表38　ＳＴ014古墳出土銅釧観察表

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号	図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号
			最大外径	最大幅					最大外径	最大幅	
167-523 88	石室床面直上 №22	銅　釧	6.4	0.33	93002831 964554	—524 88	石室床面直上 №23	銅　釧	6.9	0.4	93002832 964554

耳環

525～542は耳環。このうち、525～531が銅地金張。525～528は、外径が3.05～3.35cmを測り、比較的大形である。529は外径2.4cm、530・531は同じく1.75cmと、それぞれ中形、小形とすることが可能である。532～541は銅地銀張。外径は3.05～3.3cmと銅地銀張の大形と同大である。

542は、銅地金銀張と呼ぶべきもので、銅地に金と銀を螺旋状に巻いたもの。近くでは、佐賀県有明町の龍王崎古墳群第3号墳で複数出土している。

表39　ＳＴ014古墳出土耳環観察表

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号	図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号
			最大外径	最大幅					最大外径	最大幅	
167-525 88	石室床面直上 ④	耳　環 (銅地金張)	3.35	0.83	93001340 960157	—534 88	石室床面直上 №129	耳　環 (銅地銀張)	3.25	0.7	93002102 960157
—526 88	石室床面直上 №17	耳　環 (銅地金張)	3.35	0.8	93001343 960157	—535 88	石室床面直上 №121	耳　環 (銅地銀張)	3.2	0.7	93001350 960157
—527 88	石室床面直上 №147	耳　環 (銅地金張)	3.35	0.83	93002104 960157	—536 88	石室床面直上 №150	耳　環 (銅地銀張)	3.25	0.7	93002106 960157
—528 88	石室床面直上 №15	耳　環 (銅地金張)	3.05	0.65	93001341 960157	—537 88	石室床面直上 №122	耳　環 (銅地銀張)	3.2	0.7	93002101 960157
—529 88	石室床面直上	耳　環 (銅地金張)	2.4	0.5	93002859 960157	—538 88	石室床面直上 №148	耳　環 (銅地銀張)	3.25	0.7	93002105 960157
—530 88	石室床面直上 №18	耳　環 (銅地金張)	1.75	0.45	93001344 960157	—539 88	石室床面直上 №16	耳　環 (銅地銀張)	3.05	0.7	93001342 960157
—531 88	石室床面直上 №20	耳　環 (銅地金張)	1.75	0.43	93001346 960157	—540 88	石室床面直上 №19	耳　環 (銅地銀張)	3.05	0.7	93001345 960157
—532 88	石室床面直上 №113	耳　環 (銅地銀張)	3.25	0.8	93001348 960157	—541 88	石室床面直上 №119	耳　環 (銅地銀張)	3.1	0.65	93001349 960157
—533 88	石室床面直上 №130	耳　環 (銅地銀張)	3.3	0.73	93002103 960157	—542 88	石室床面直上 №39	耳　環 (銅地金銀巻)	2.9	0.65	93001347 960157

不明金銅製品

543は、中空になった球形の金銅製品。外径1.28cmで、一端に小孔がある。器種については不明であるが、馬具の一部の可能性がある。

表40　ＳＴ014古墳出土不明金銅製品観察表

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号
			最大厚	最大幅	
167-543 88	石室床面直上 №12	不明青銅製品 (銅地金張)	1.05	1.28	92004492 960157

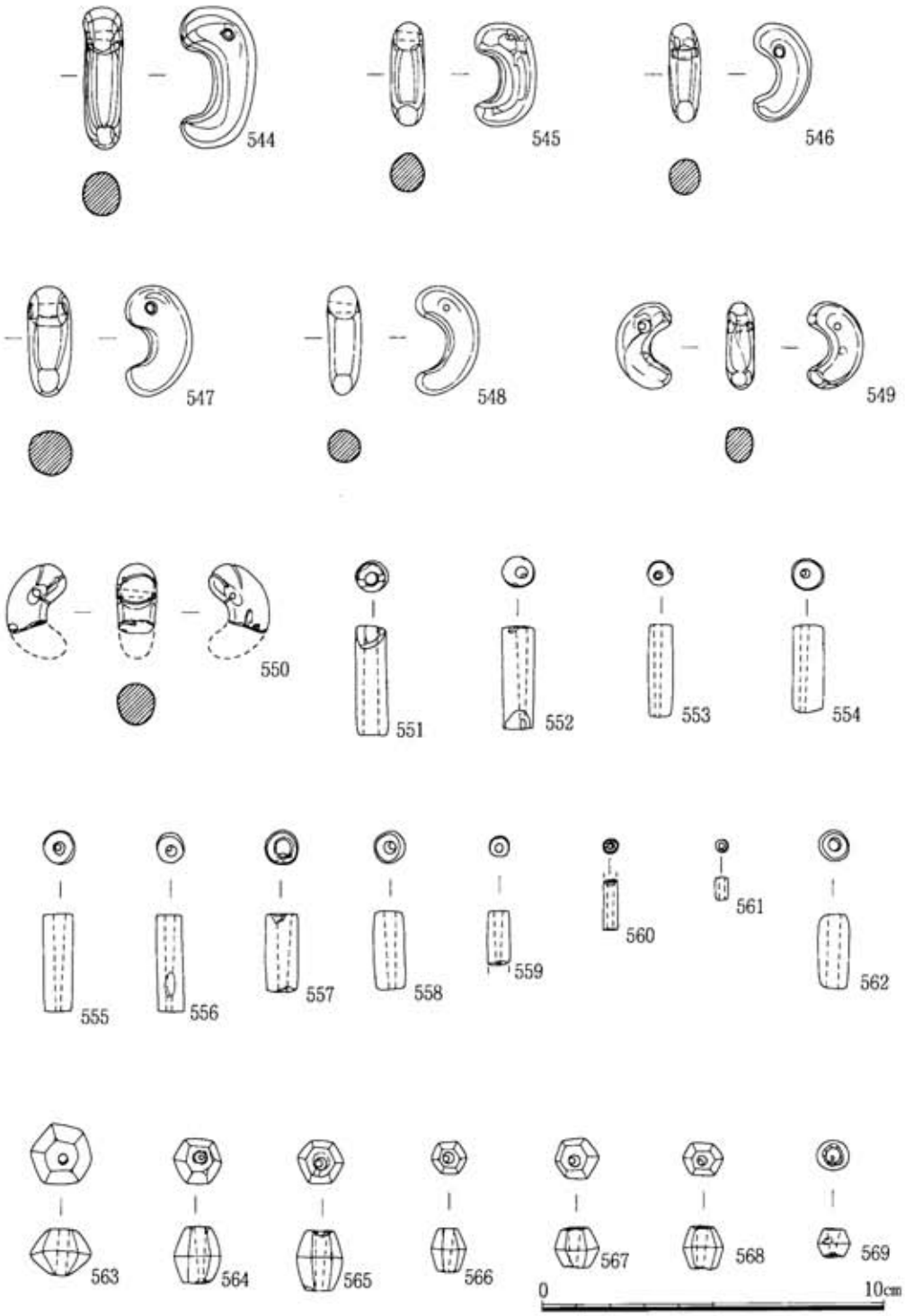


図168　ＳＴ014古墳出土玉類１（１／２）

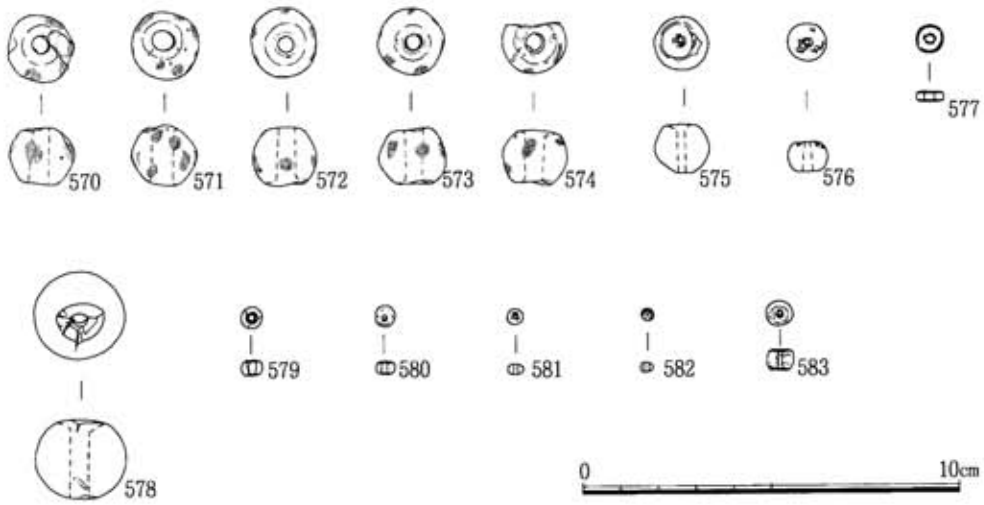


図169　ＳＴ014古墳出土玉類２（１／２）

玉類

544～550は勾玉。544・545はコの字形でメノウ製。546・548・550はＣの字形で碧玉製。550は、頭部に３状の沈線がある丁字頭。549もＣの字形で、ヒスイ製と考えられる。

551～561は碧玉製の管玉。いずれも片面穿孔。551～558は長さ2.23～3cm、径0.73～１cmの大形であるのに対し、559～561は長さ0.65～1.5cm、径0.39～0.6cmの小形である。562は、ガラス製管玉と考えられる。

563～568は、切子玉。563はメノウ製で、径が1.87cmと大形である。564～566は水晶製、567・568は碧玉製である。569は、水晶製の算盤玉である。

570～574は、ガラス製トンボ玉。575はメノウ製丸玉、576は水晶製丸玉、577は滑石製丸玉である。578～582はガラス製丸玉。特に、578は、緑色のガラス製で、径が2.4cmと飛び抜けた大きさを測る、当墳出土の丸玉で最大のものである。583は、土製の丸玉。表面は黒色を呈する。

表41　ＳＴ014古墳出土玉類観察表　　丸玉は長径・短径　丸玉以外は長さ・幅　　（　）は残存

国一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種類	材質	法量(cm)		色　調	県遺物登録番号 写真登録番号	国一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種類	材質	法量(cm)		色　調	県遺物登録番号 写真登録番号
168-544 89	No.104	勾玉	メノウ	4.15	2.25	黄茶褐色	93001538 960159	—564 89	No.141	切子玉	水晶	1.7	1.48	透　明	93001552 960159
—545 89	No.106 or145 or146	勾玉	メノウ	3.03	1.8	黄茶褐色	93001537 960159	—565 89	No.138	切子玉	水晶	1.8	1.4	透　明	93001565 960159
—546 89	No.106 or145 or146	勾玉	碧玉	2.9	1.7	深緑色	93001536 960159	—566 89	No.95	切子玉	水晶	1.28	1.03	透　明	93001567 960159
—547 89	No.109	勾玉	ヒスイ	3.23	1.98	灰白色と 明緑灰色	93001534 960159	—567 89	床面直上	切子玉	碧玉	1.2	1.35	暗緑灰色	93001564 960159
—548 89	No.106 or145 or146	勾玉	碧玉	3.2	1.88	深緑色	93001535 960159	—568 89	石室床面直上 No.35	切子玉	碧玉	1.3	1.17	暗緑灰色	93001566 960159
—549 89	No.151	勾玉	ヒスイ?	2.58	1.6	緑色がかった 白灰色	93002872 960159	—569 89	石室床面直上	そろば ん玉	水晶	0.85	0.95	透　明	93002874 960159
—550 89	No.112	勾玉	碧玉	(2.05)	1.78	深緑色	93002871 960159	169-570 89	No.27	トンボ玉	ガラス	1.5	1.78	青　色 白　色	93001545 960161
—551 89	石室床面直上 No.33	管玉	碧玉	3.2	0.95	明緑灰色	93001570 960159	—571 89	No.58	トンボ玉	ガラス	1.68	1.85	青　色 白　色	93001546 960161
—552 89	No.53	管玉	碧玉	3.0	0.95	深緑色	93001543 960159	—572 89	No.97	トンボ玉	ガラス	1.55	1.85	青　色 白　色	93001547 960161
—553 89	No.34	管玉	碧玉	2.7	0.75	深緑色	93001540 960159	—573 89	No.126	トンボ玉	ガラス	1.48	1.78	青　色 白　色	93001548 960161
—554 89	No.32	管玉	碧玉	2.55	0.98	深緑色	93001539 960159	—574 89	No.140	トンボ玉	ガラス	1.38	1.7	青　色 白　色	93001549 960161
—555 89	No.81	管玉	碧玉	2.88	1.0	深緑色	93001544 960159	—575 89	③	丸玉	メノウ	1.43	1.4	赤　色	93001553 960161
—556 89	No.37	管玉	碧玉	2.85	0.9	深緑色	93001542 960159	—576 89	②	丸玉	水晶	1.05	1.0	透　明	93002865 960161
—557 89	No.36	管玉	碧玉	2.3	1.0	深緑色	93001541 960159	—577 89	①	丸玉	滑石	0.75	0.73	緑灰色にうす い黄土色がま じっている	93002864 960161
—558 89	No.139	管玉	?	2.35	0.95	黒　色	93001569 960159	—578 89	No.57	丸玉	ガラス	2.4	2.3	緑　色	93001550 960161
—559 89	①	管玉	碧玉	(1.65)	0.6	深緑色	93004985 960159	—579 89	石室床面直上 No.93	丸玉	ガラス	0.58	0.55	黄緑色 (かなりもろい)	93002863 960161
—560 89	石室床面直上 No.25	管玉	碧玉	(1.5)	0.45	灰緑色	93002873 960159	—580 89	床面直上	丸玉	ガラス	0.55	0.53	茶色	93002862 960161
—561 89	床面直上	管玉	碧玉	0.65	0.39	緑灰色	93001571 960159	—581 89	②	丸玉	ガラス	0.43	0.4	黄　色	93001554 960161
—562 89	No.136	管玉	ガラス	2.2	0.9	明緑灰色	93001568 960159	—582 89	①	丸玉	ガラス	0.34	0.3	黄　色	93001555 960161
—563 89	No.125	切子玉	メノウ	1.4	1.87	赤色	93001551 960159	—583 89	No.109付近	丸玉	土	0.73	0.65	うす茶色	93002866 960161

小結

当古墳は、中世に墓として再利用されているなど早くから開口していたにもかかわらず、金銅製の馬具、銅鋺、各種の玉類、特殊な鉄鏃等に代表されるように、他の古墳に比較して優れた副葬品を多量に出土した。また、造営時期はわずかにＡ－１類の須恵器杯・身をふくむものの、大半がＡ－２類であり、石室床面からはＢ類が馬具などと一所に出土していることから、小田編年のⅣ～Ⅴ期を中心にしていると考えられる。

ＳＴ015古墳出土遺物（写真図版90）

土器

584～587は、周溝出土の土師器である。584は壺。球形の体部。585は杯の破片。口縁部が短く外反する。586は小形の鉢。587は小形高杯の脚部片。

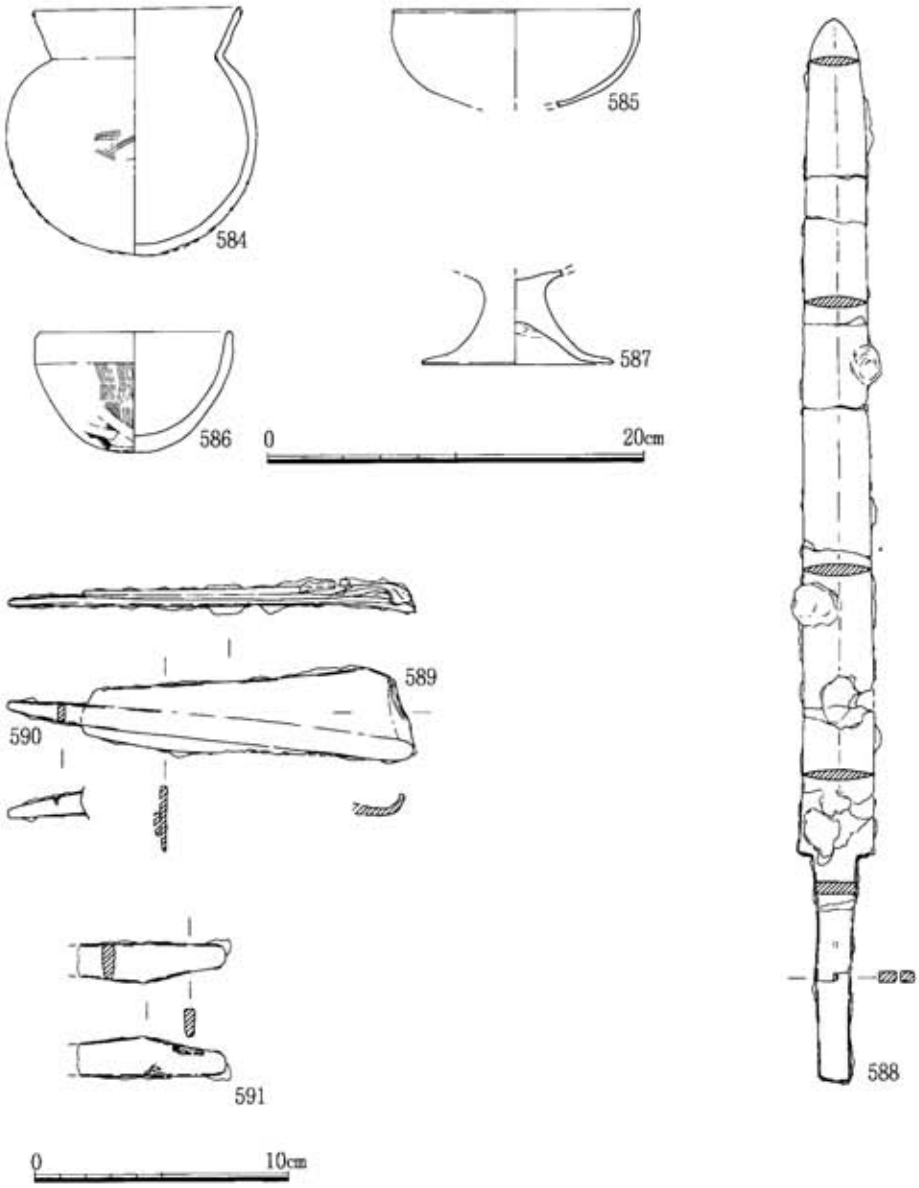


図170　ＳＴ015古墳出土遺物（584～587は１／４・588～591は１／３）

表42　ＳＴ015古墳出土土器観察表　　Ａ：口径　Ｂ：器高　Ｃ：たちあがり高　Ｄ：底径　（　）は残存長

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	器　種	法量(cm)	形態・調整の特徴	色調	焼成	県遺物登録番号 写真登録番号
170-584 90	周　　溝	壺 （土師器）	A：10.9 B：14.2	球形の体部に，外方に直線的に立ち上がる口縁部が付く。口縁ヨコナデ。体部外面の一部にハケ，内面の一部にヘラケズリ。	褐色	不良	91002627 964534
—585 90	周　　溝	杯 （土師器）	A：(13.1)	底部は丸く，口縁部は短く折れる。	明褐色	不良	91002630 964536
—586 90	周　　溝	鉢 （土師器）	A：10.0 B：6.4	丸底で口縁端部は丸い。口縁ヨコナデ。体部はハケ。底部はヘラケズリ。	赤～黒褐色	良	9200758 964538
—587 90	周　　溝	高　　杯	D：(10.05)	脚部は短く，端部は先端付近で折れる。	赤～褐色	良	91002629 964540

武器

588は鉄剣。北側主体部棺内から出土したもの。全長41.75cm、剣身長32.7cmを測る。茎に目釘孔が一つある。

表43　ＳＴ015古墳出土鉄剣観察表　（　）は残存長

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号
			最大長	最大幅	
170-588 90	北側主体部	鉄剣	41.75	(3.0)	93002875 891312

農工具

589は直刃の鉄鎌、590は鉄鋤。北側主体部棺内から出土したもので、錆着している。589は全長13cm、590は、全長15.9cmを測る。591は北側主体部棺外粘土中より出土した刀子。茎と刃部の一部を残す、残存長5.8cmの破片である。

表44　ＳＴ015古墳出土農工具観察表　（　）は残存長

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種　類	法　量(cm)		県遺物登録番号 写真登録番号
			最大長	最大幅	
170-589 90	北側主体部	鎌	13.0	3.65	92004499 964560 964561
—590 90	北側主体部	鋤	(15.9)	1.0	92004499 964560 964561
—591	北側主体部 粘土層中	刀　子	(5.83)	1.53	92004498

小結

本墳は、割竹形木棺と箱形木棺の２基を内部主体とする方墳である。周溝出土の土器は、少量であるが、584･586は布留式の範疇に入り、その新しい段階と考えられる一方、585の杯は初期須恵器と並行するものであろう。したがって、実年代は５世紀の初頭から前半に位置付けられる。同時期の古墳としては、武雄盆地を挟んだ西側の矢ノ浦前方後円墳(武雄市教委　1980)があげられる。

ＳＴ018古墳出土遺物

玉類

592は、ガラス小玉。色調は、水色。

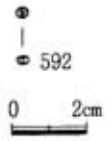


図171　ＳＴ018古墳出土玉類（１／２）

小結

ガラス玉は、一個のみでしかも埋土中からの出土であり、確実に共伴するものか不明である。また、少量の土器片が出土しているが、これらからは時期を特定することはできない。

表45　ＳＴ018古墳出土玉類観察表

図一遺物番号 写真図版番号	出土地点	種類	材質	法量(cm)		色　調	県遺物登録番号 写真登録番号
171-592	石室内埋土	丸玉	ガラス	長径 0.3	短径 0.28	緑青色	93004986

参考文献

宇美町教育委員会　1981　宇美観音浦
大阪府教育委員会　1976　陶邑Ⅰ
末永雅雄　1943　日本上代の武器　第三版
武雄市教育委員会　1980　矢ノ浦遺跡

5．まとめ

(1) 弥生時代

弥生時代の遺構の検出は、調査当初まったく期待されていなかった。しかし、予想に反して竪穴建物6基と不明遺構としたＳＸ３基が確認された。これらは、検出が極めて困難なほど削平の度合が強く、全形が判明するものはない。しかし、ＳＨ005は、方形の平面形で壁体溝を有し、ＳＨ006は壁は全くなかったが、壁体溝の形態から中央に炉を配する比較的大形の隅丸長方形ということがわかる。これらの住居跡は、概ね弥生時代中期の前半～中頃に位置付けられ、後に小楠遺跡で確認されるが(武雄市教委1991)、武雄市内では当遺跡の発見が初出であり、当該期の集落が標高20ｍ前後の丘陵上に展開していたことを明らかにするものであった。今後、市内のこのような地形に同様の集落跡が確認されることを期待する。また、当遺跡でも調査区東側の丘陵上方にも当然広がっており、今後とも注意していくことが必要である。

(2) 古墳時代

古墳の種類と分布

調査前の東福寺古墳群は、いわゆる後期古墳群と認識されていた。これは昭和49年の佐賀県教育委員会の分布調査によるもので、この時点で円墳13基が確認された（佐賀県教委1981)。

今回の調査で記録保存の対象となった古墳はＳＴ001・002・003・013・014・015・017・018、ＳＣ016の９基であるが、003と014の２基は昭和49年に確認されていたものである。したがって新たにＳＴ001・002・013・015・017・018の６基の古墳とＳＣ016石棺墓が確認されたことになる。時期の比定がそのままでは困難なものもあるが、次項で検討するようにすべて古墳時代の墳墓と想定できる。とすれば合わせて少なくとも、20基からなる古墳群ということができる。しかしながら、昭和49年以後に消滅したものも多く、今日の段階で古墳群の実態を把握するには困難な点が多い。

そこで、今回の調査対象古墳とそれ以外の現存する古墳、昭和49年の段階で確認されている古墳を整理することにしたい。

調査対象古墳

前章までに見てきた調査対象古墳から整理する。ＳＴ001・002・003・013・014・015・017・018、ＳＣ016の９基の古墳のうち出土遺物から時期が比定できるのは、ＳＴ002･003･013･014･015の５基だけである。このうち、015は周溝出土遺物から４世紀の末～５世紀の前半に位置付けられる。近くでは、盆地を挟んだ西側丘陵に位置する矢ノ浦古墳と概ね同時期か後続すると考えられる。矢ノ浦古墳は、全長37ｍを測る前方後円墳で、内部主体は後円部上に２基の並列

した粘土床を持つものと後円部斜面に石蓋土壙墓１基がある（武雄市教委1980）。後円部の内部主体の配置は015のそれに近いものがある。002・003・013・014は出土遺物、特に須恵器から６世紀後半から７世紀前半の間に造営されたことが知れる。すなわち002は小田編年のⅣ期の須恵器が出土していることなどから６世紀末～７世紀初頭、003はⅢＢ～Ⅴ期の須恵器が出土しており６世紀後半～７世紀前半、013はⅣ・Ⅴ期の須恵器が出土しており６世紀末～７世紀前半。014は、わずかにⅢＢ期がふくまれるものの大半がⅣ期の須恵器であり、石室床面からはⅤ期も出土していることから、Ⅳ～Ⅴ期が中心であり、６世紀末～７世紀前半を中心とした造営と考えられる。

一方001・017・018は遺物が未出土かストレートに時期を比定できる遺物が出土していない。001は竪穴系横口式石室を内部主体とするものであるが、石室は腰石を有し袖石が無いもので、蒲原宏行氏の石室分類のⅡ－ｂ類に当たり（蒲原1983）、佐賀県鈴熊ＳＴ002古墳石室、福岡県久戸12号墳石室など５世紀後半の古墳石室に類例が見られる。しかしながら、石室から出土した鉄鏃は、広根の腸抉三角形式と圭頭式であり、後者の類例には、５世紀前半～中頃に位置付けられる佐賀県北方町追分古墳の竪穴式石室出土のものなどがあるものの（北方町教委1983）、一般的には６世紀代の形式とされている。破壊が著しい状況であり、出土遺物のオリジナル性に疑問をいだくのも一つの解決方法ではあるが、一応この古墳の造営時期の下限を示すものとしたい。したがって、ＳＴ001古墳は、５世紀後半～６世紀前半に位置付けたい。017・018は、竪穴式石室という石室形態以外に時期を比定する根拠はない。017は破壊が激しく、ほとんど石室の特徴を知ることができない。018は蓋石が無かった以外は大半が遺存していた。前者は長さ1.94ｍ、幅0.4～0.34ｍ、後者が長さ1.63ｍ、幅0.4～0.28ｍで、いずれも小形の竪穴式石室ということができる。この種の石室としては、佐賀県佐賀市丸山遺跡ＳＴ006号墳などがあるが（佐賀県教委1986）、４世紀末～５世紀初頭に位置付けられる。このことなどから、017・018両古墳を４世紀後半～５世紀初めくらいに位置付けたい。最後に、ＳＣ016石棺墓であるが、鉄器片以外には共伴する遺物はなく、ＳＴ002古墳より古いという事実以外は時期判断の証拠はない。石棺墓自体、弥生時代中期から古墳時代の前期まで継続する棺形態であり、これだけから時期を特定するのは困難である。根拠に乏しいが、甕棺墓などの先行墓制からの継続制がないことなどから、一応古墳時代前期に考えたい。

調査対象以外の古墳

図172は、現段階で確認される古墳に昭和49年に確認された古墳の略図から知れる消滅した古墳の大体の位置を重ねたものである。また、表46はこれらの一覧である。これらによれば、昭和49年の分布調査で確認された古墳のうち現在確認できないものが６基あることもさることながら、概ね２分の１以下の調査対象地にもかかわらず、表面の墳丘確認だけでは見つけること

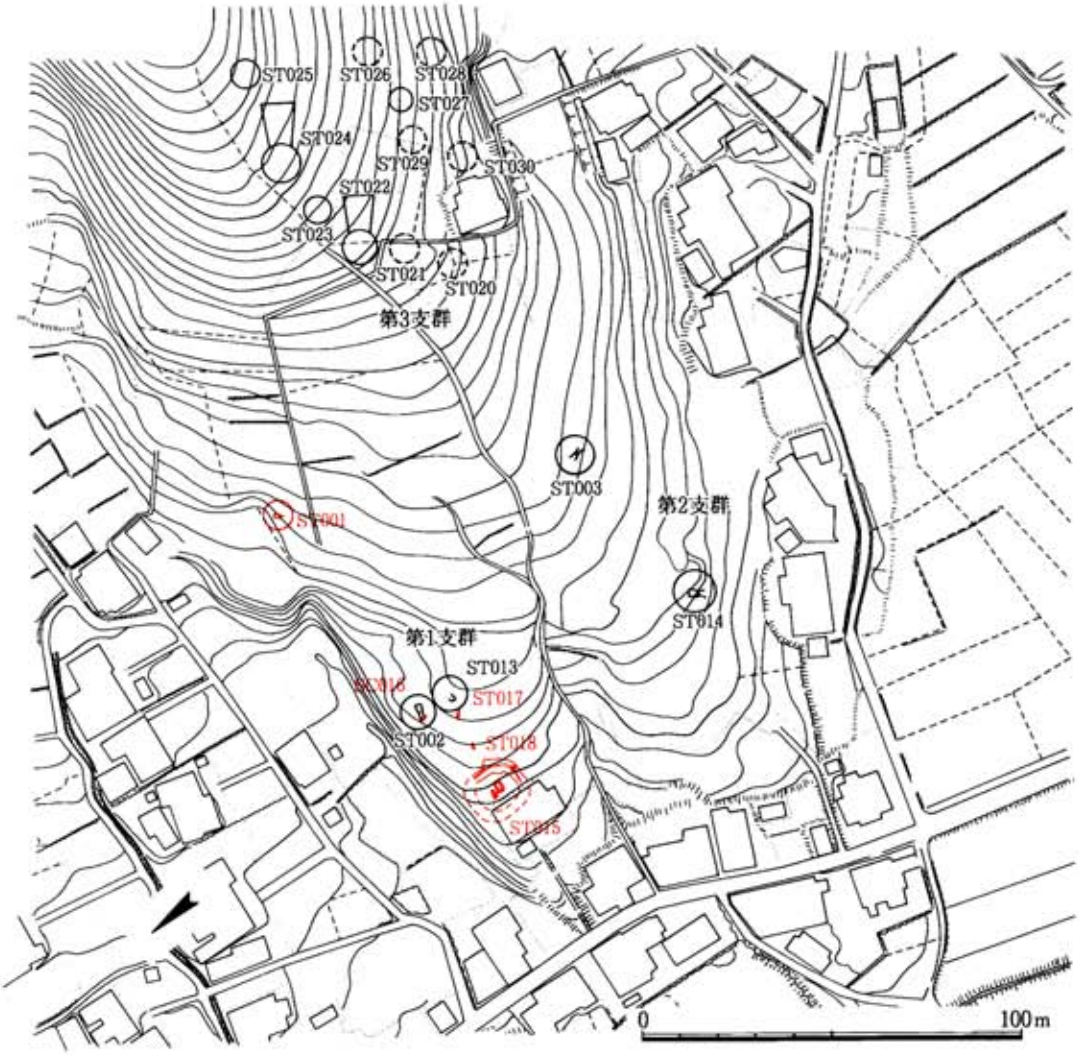


図172　東福寺古墳群古墳分布図（1／2000）　破線は調査前に消滅。

ができなかった古墳が7基もあったことは注目せねばならない。したがって、丘陵上部の未調査地区にもある程度の古墳、特に低墳丘の古墳乃至墳丘を持たない石棺墓などの主に5世紀以前の墳墓の存在を考慮しなければならないと考える。しかしながら、現在知ることのできる20基でもある程度の古墳群の構造を知ることは可能なので、以下、これらの資料でわかることを述べることにする。

当古墳群全体は、武雄盆地に向かって伸びる丘陵先端部の標高15～45mの斜面に立地している。しかし、これらはさらにいくつかの平面的なまとまりに分けることが可能である。すなわち、西側の丘陵下部でも北側に面した第1支群（ＳＴ001・002・013・017・015、ＳＣ016）と同じく丘陵下部の南側に面した第2支群（ＳＴ003·014）、丘陵上部の尾根線から南側の谷に面

表46　東福寺古墳群新旧古墳対照表

No.	昭和49年分布調査		昭和62～63年発掘調査	
	遺構	内容	遺構	内容
1	未確認		ＳＴ001	円･径８ｍ･竪穴系横口式石室
2	未確認		ＳＴ002	円･径９ｍ･葺石･横穴式石室
3	２号墳	板石が数枚散乱。内部主体が石棺であったか石室であったか不明。以前塚があったとのことである。	ＳＴ003	円・径９ｍ・横穴式石室
4	未確認		ＳＴ013	円・径6.5ｍ・横穴式石室
5	１号墳	円･径約20ｍ。横穴式石室（羨道部を半ば削平されている。南へ開口。前庭部には須恵器片散乱。	ＳＴ014	円・径12.4ｍ・葺石・横穴式石室・線刻文様
6	未確認		ＳＴ015	方・一辺14ｍ
7	未確認		ＳＣ016	箱式石棺墓
8	未確認		ＳＴ017	竪穴式石室・墳丘不明
9	未確認		ＳＴ018	竪穴式石室・墳丘不明
10	３号墳	円･径約15ｍ、高さ約２ｍ。墳頂陥没。内部構造不明。保存良好。	ＳＴ020	確認不能・須恵器大甕片散布
11	４号墳	円･径約10ｍ、比高約２ｍ。内部構造不明。残存状態良好。	ＳＴ021	確認不能・須恵器片散布
12	５号墳	４号墳と隣接。円･径約10ｍ。内部構造不明、葺石が部分的に露出。残存状態良好。	※ ＳＴ022	前方後円・全長19.7ｍ・横穴式石室・葺石
13	６号墳	５号墳の東方約20ｍ。円・径約20ｍ、比高約２ｍ。内部構造不明。極めて残存状態良好。未盗掘、未破壊。	ＳＴ023	円・径8.6ｍ
14	７号墳	６号墳から尾根沿いに２～30ｍ程登る。円・径約12～13ｍ、高さ２ｍ。内部構造不明。残存良好。	ＳＴ024	前方後円・全長約22ｍ・外護列石
15	８号墳	７号墳より10ｍ程離れた尾根上。円･径約12～13ｍ、比高約２ｍ。内部状態不明。葺石有。保存良好。	ＳＴ025	円・8.5ｍ
16	９号墳	８号墳と同一レベル上の南斜面。円･径６～７ｍ。内部構造不明だが南へ開口した横穴式石室か？	ＳＴ026	確認不能
17	10号墳	東福寺西方約100ｍの標高40ｍの雑木林の中。小円墳か？破壊ひどい。	ＳＴ027	円・墳丘低い
18	11号墳	東福寺の西方約100ｍの標高40ｍの雑木林の中。円･径約５～６ｍ。封土は大部分削平され、石材も半分ほど抜き取られている。	ＳＴ028	確認不能
19	12号墳	４、５号墳と同じレベル上の南側斜面。散乱する石材から古墳と推定。	ＳＴ029	確認不能
20	13号墳	東福寺へ至る山中の小道の下方の雑木林。円･径約10ｍ、高さ２ｍ程度の小円墳。保存状態良好。	ＳＴ030	確認不能

※（近藤，1992）ではＳＴ018。

図173　各古墳の造営時期

する斜面に分布する第３支群（ＳＴ020～030）の少なくとも３つの平面的なまとまりに分けることが可能である。

ところで前項で見たとおり当古墳群の古墳は、

①４世紀～５世紀前半の箱式石棺墓、竪穴式石室を内部主体とするもの。

②５世紀後半～６世紀前半の竪穴系横口式石室を内部主体とするもの。

③６世紀後半～７世紀前半の横穴式石室を内部主体とするもの。

に分かれる。このうち①・②は丘陵下部の北側斜面の第１支群の中にのみ立地する。一方③は、この古墳群全体に分布しており、分布上でも分けることができる。横穴式石室の開口方向をみても、第１支群のＳＴ002・013古墳は西、第２支群のＳＴ003・014は南側である。また、第３支群のうち、ＳＴ022前方後円墳も南側と推定され、支群により特徴が見られる。以上をもとに、想定も含めた各古墳の造営時期を示したのが表47である。特に、第３支群の古墳については、時期比定の根拠は３群の前方後円墳であるＳＴ022の内部主体が横穴式石室であることと、ＳＴ020古墳の跡と思われる地点で小田編年のⅣ期の須恵器片が散布していることなどの他にはないが、確実には６世紀の第４四半期に開始される当古墳群の一つの支群として位置付け

ておくことがことが、一応妥当と考えられる。

しかし、6世紀後半以降の後期古墳に限ってみると第1・2支群が2基ずつであるのに対し、第3支群のみが11基と極端に多い。したがって、第3支群が尾根上の前方後円墳を含む一群と南斜面の円墳のみの一群に2分される可能性もある。また、造営時期がさらに細かく判明すれば、例えば、さらに細かな支群に分離されることも可能であるし、第3支群から他の2群に展開したことも想定できよう。

いずれにしても、当古墳群は、4世紀から5世紀末～6世紀前半までの古墳と6世紀後半から横穴式石室を内部主体とする古墳群に分かれるということができる。蒲原宏行氏は6世紀前半において古墳群の造営が一時中断される古墳群が多いことを指摘したが(蒲原1983)、当古墳群もその一例に加えられるだろう。

今後の課題

以上、若干のまとめを述べてきたが、今回の調査の後、9基の古墳が失われたものの、東側にはまだ多くの古墳が残っている。特に第3支群とした古墳群は、2基の前方後円墳を含む4基の古墳が良好な墳丘を残している。武雄市内のいわゆる首長墓には、5世紀初頭～前半の矢ノ浦古墳（全長40m）と5世紀前半の多蛇古古墳の2基の前方後円墳が知られているが（武雄市教委1993)、いずれも横穴式石室以前の古墳である。また、玉島古墳は5世紀末～6世紀初頭の大形円墳(武雄市教委1973)、潮見古墳は豊富な馬具などを出土した6世紀中葉の円墳である(武雄市教委1975)。したがって、当古墳群に含まれる2基の前方後円墳はそれ以後に続く首長墓の可能性があり、馬具や銅釧、豊富な玉類などの装身具など他より優秀な副葬品を出土したＳＴ014古墳も後続する首長墓の可能性がある。前項までに見てきたように、昭和49年から62年のわずか13年間に6基の古墳が確認できなくなっていた。したがって、このように重要な残された古墳の保存を今後の課題として特に記し、まとめとしたい。

参考文献

蒲原宏行　1983　竪穴系横口式石室考「古墳文化の新視角」　雄山閣出版

北方町教育委員会　1983　追分古墳

近藤義郎 編　1992　前方後円墳集成　九州編　山川出版社

佐賀県教育委員会　1981　佐賀県遺跡地図（杵西地区）

1986　久保泉丸山遺跡

武雄市教育委員会　1973　武雄市玉島古墳

1975　武雄市潮見古墳

1980　矢ノ浦遺跡

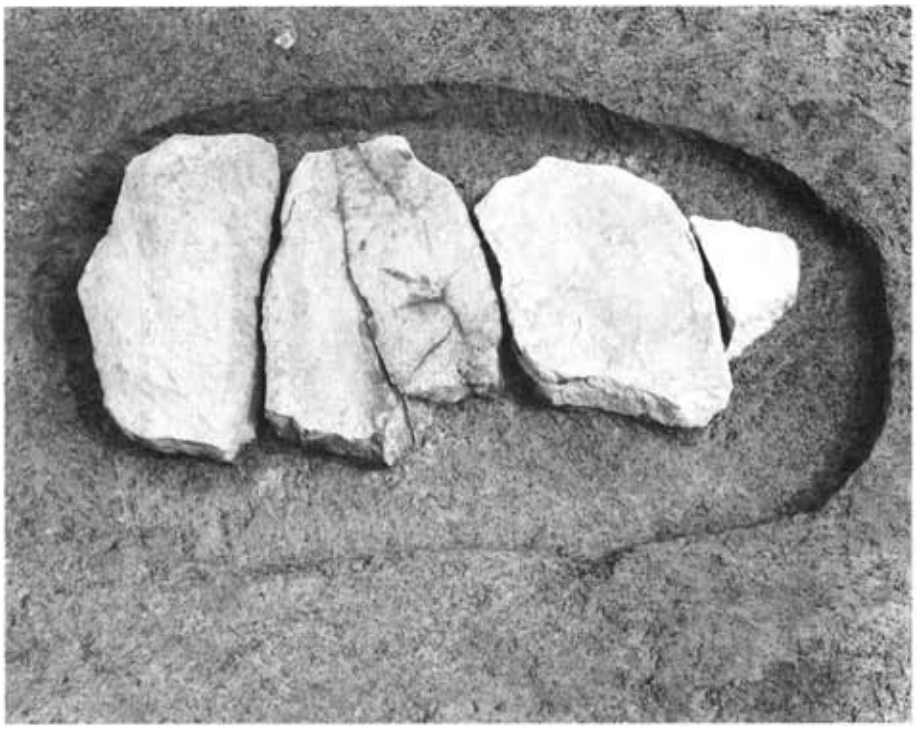
1991　小楠遺跡

1993　多蛇古古墳群

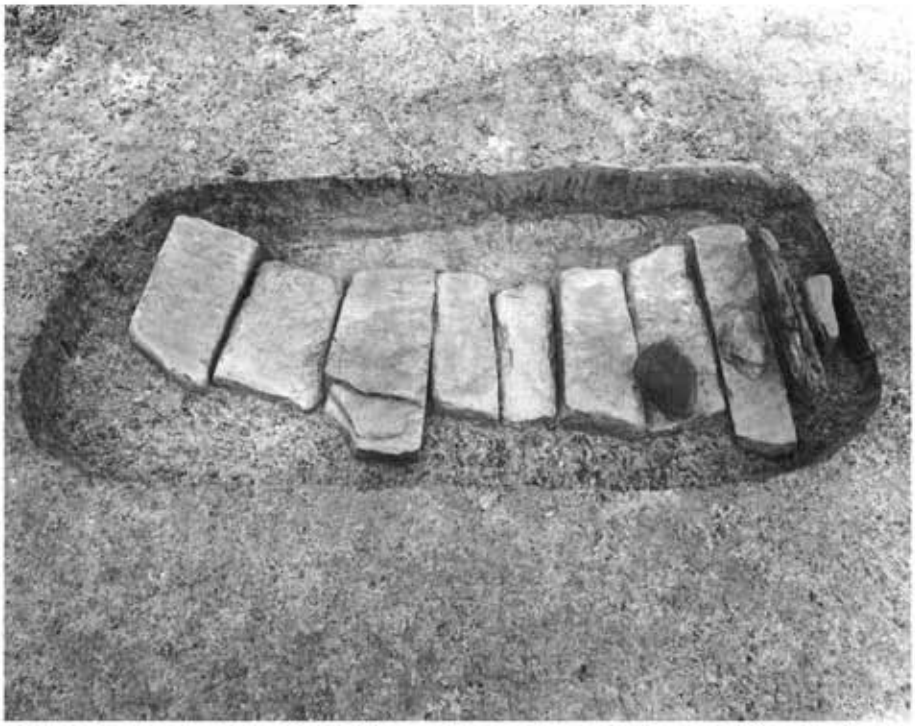
東宮裾遺跡　写真図版

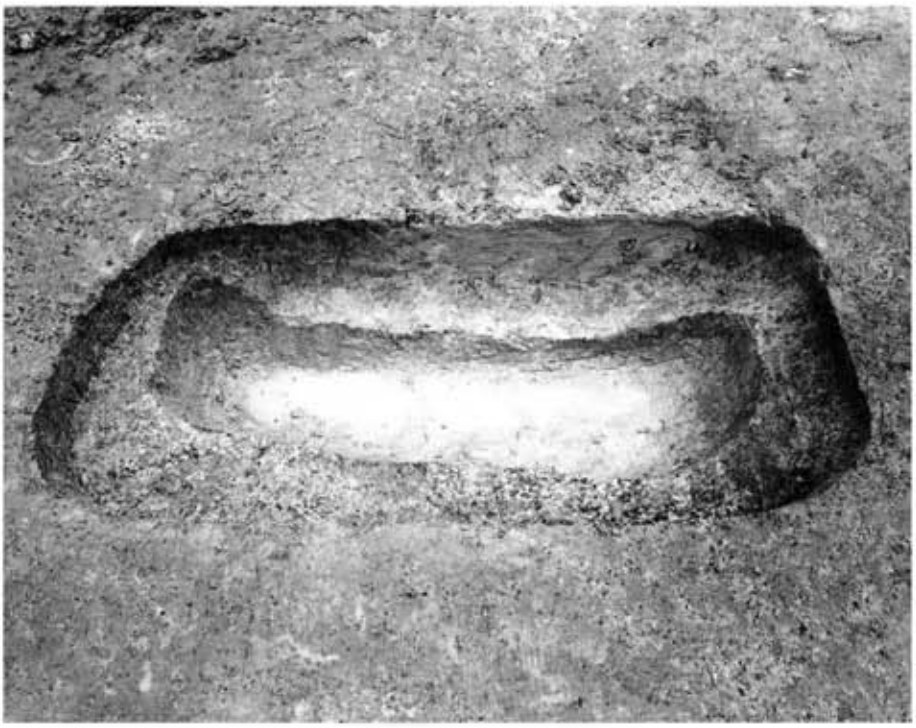
Ⅰ区全景（南東から）

Ⅰ区ＳＫ026・ＳＫ027（東から）



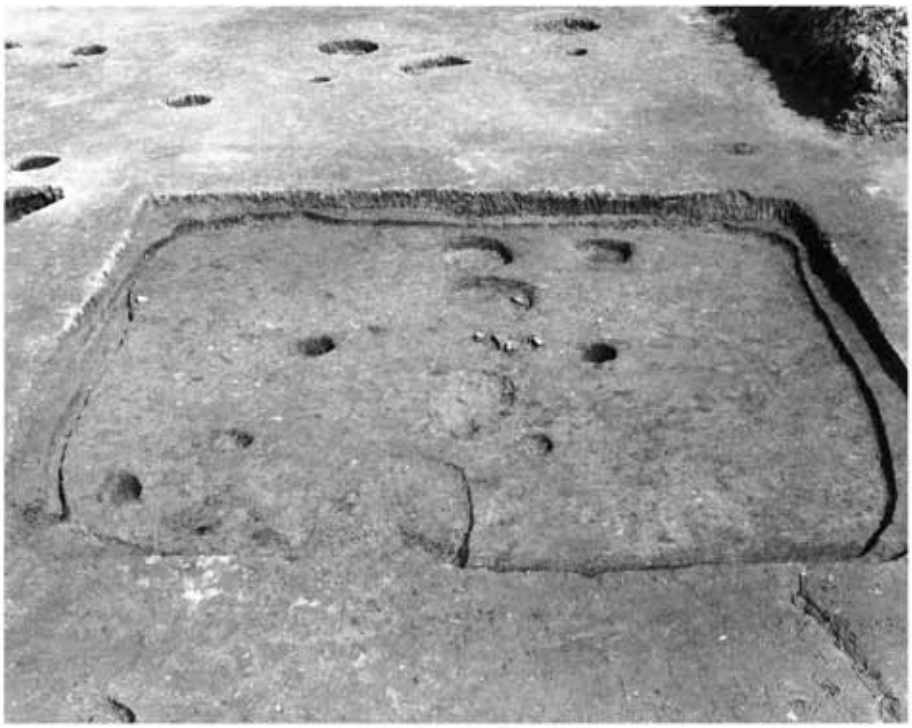
Ⅰ区ＳＣ024（北から）



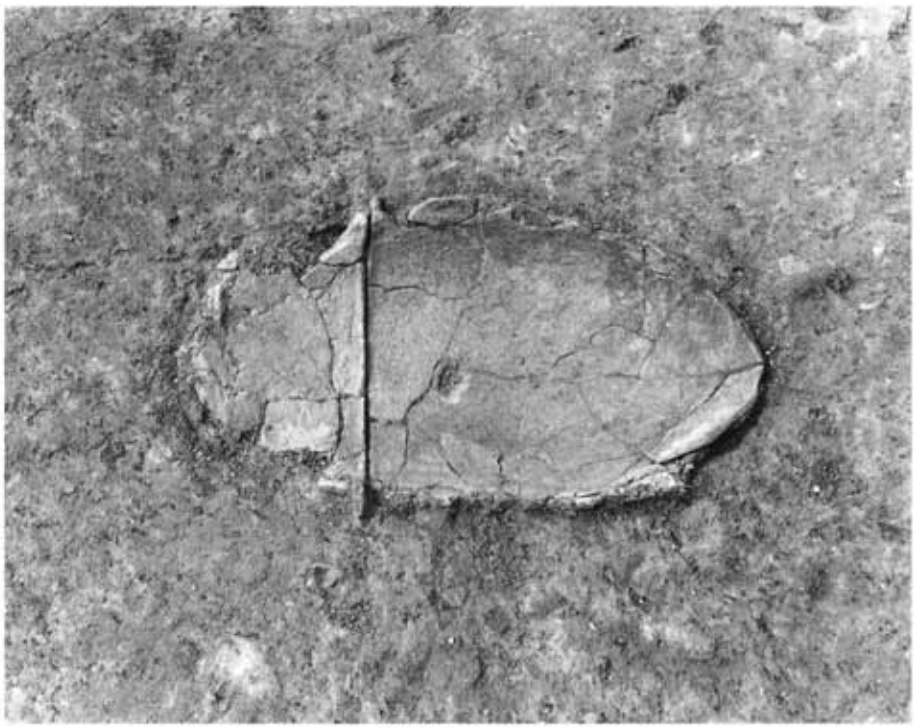


Ⅰ区ＳＣ025（東から）

ⅡB区全景（北から）



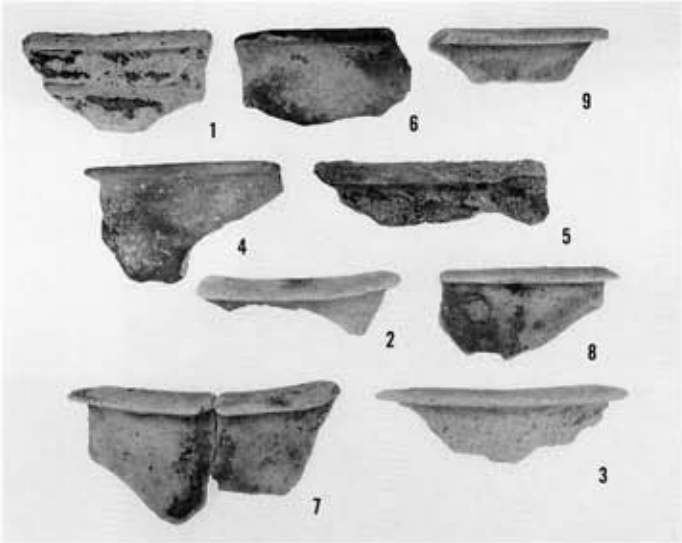
ⅡA区SH009（西から）



ⅡA区SJ001（東から）

ⅡB区SK014（西から）

Ⅲ区全景（東から）

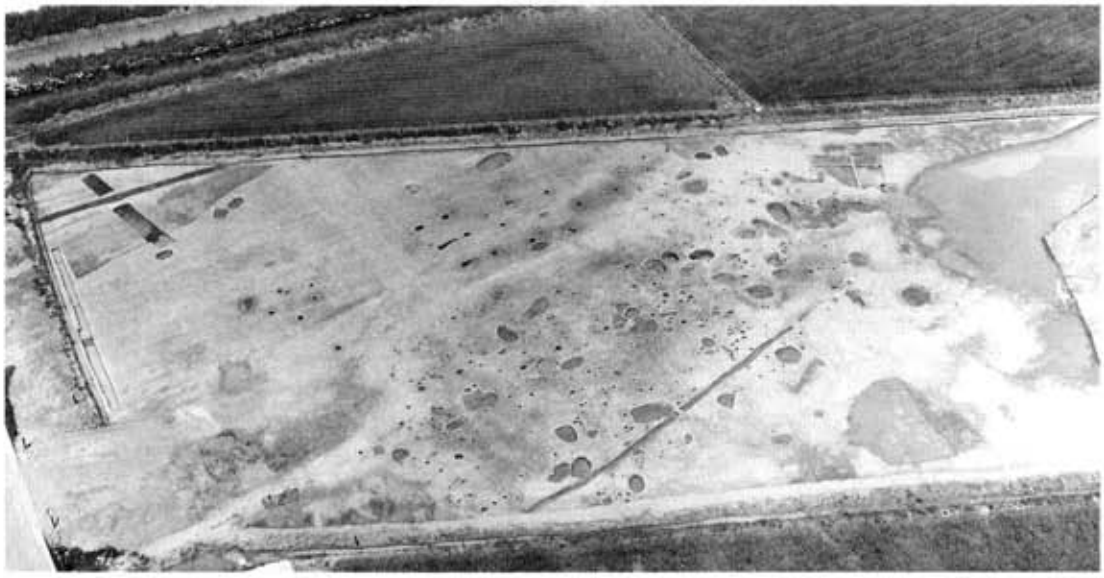


I区SK026出土土器

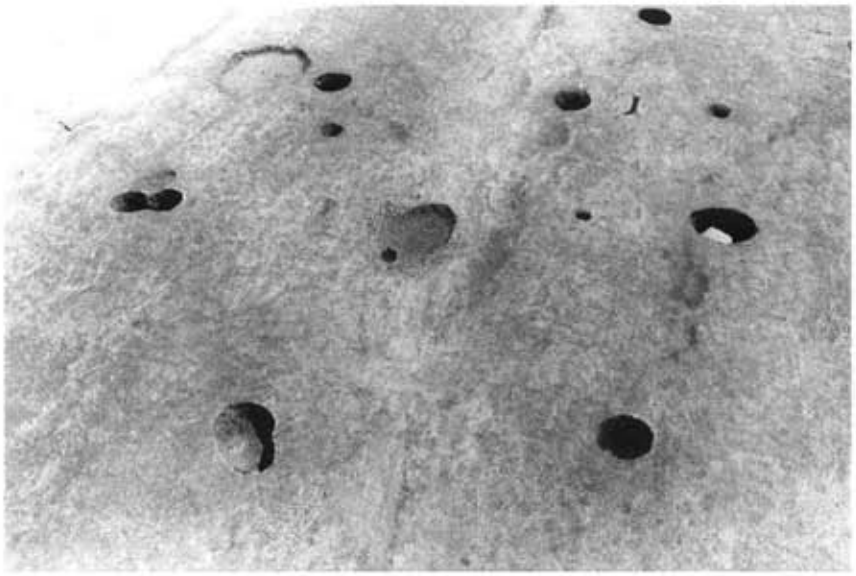
IIB区SK014出土土器

馬場遺跡　写真図版

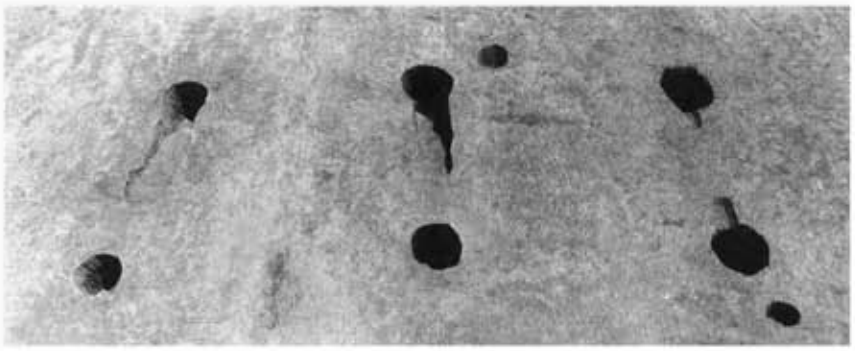
馬場遺跡全景（北東上空から）



馬場遺跡調査区全景（南東から）

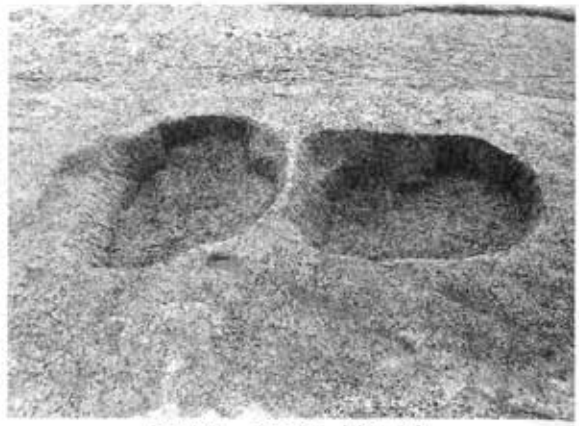


ＳＨ056（北から）

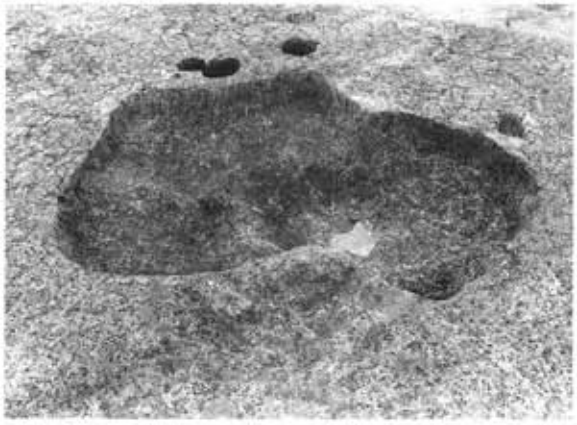


ＳＢ040（北から）

ＳＫ003（東から）

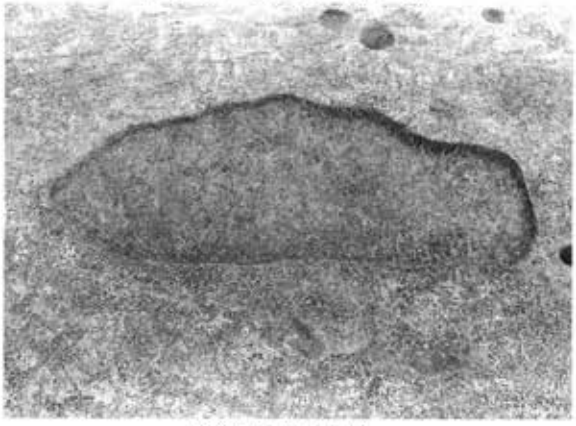


ＳＫ004・ＳＫ005（東から）

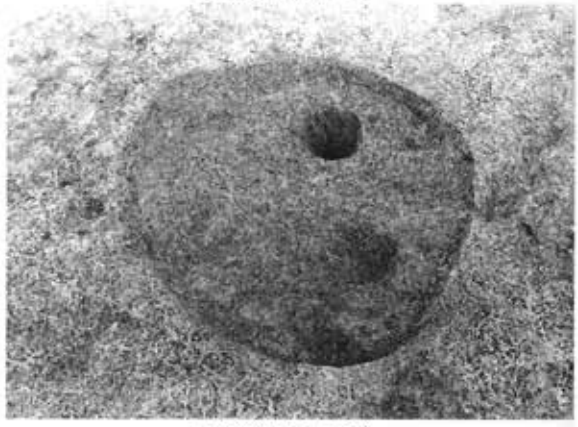


ＳＫ006・ＳＫ016（東から）

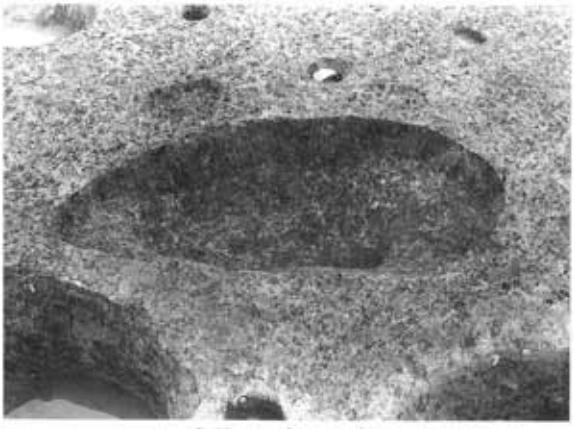
ＳＫ007（北から）



ＳＫ008（西から）

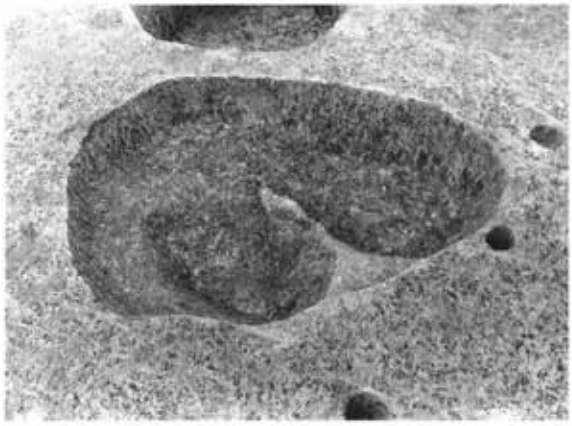


ＳＫ009（南から）



ＳＫ010（西から）

ＳＫ010土層堆積状況（南から）

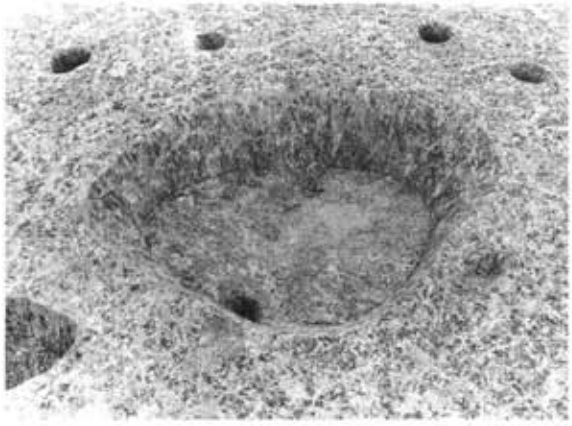


S K011（南から）

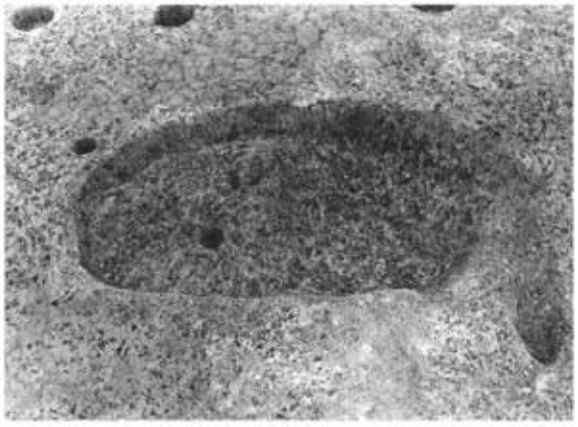
S K012（北から）

S K013（北から）

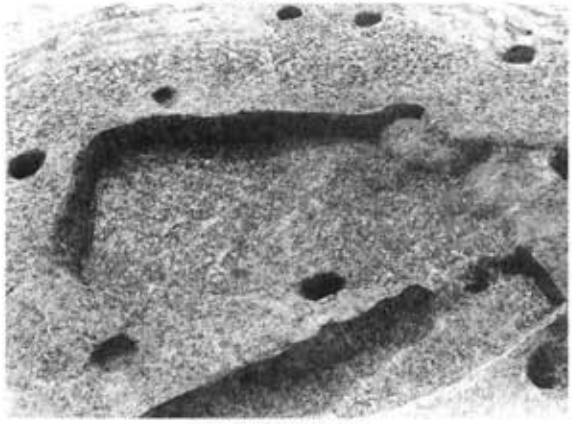
S K014（西から）



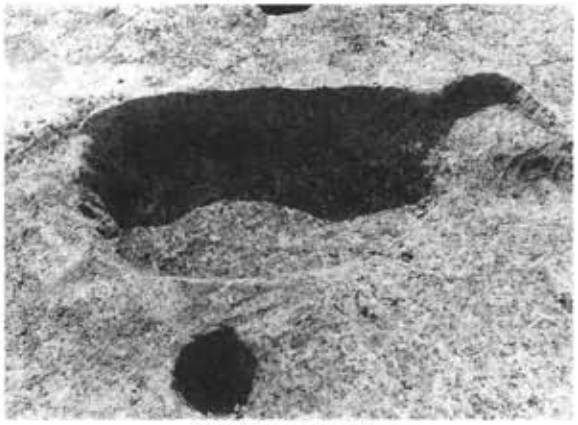
S K015（北から）



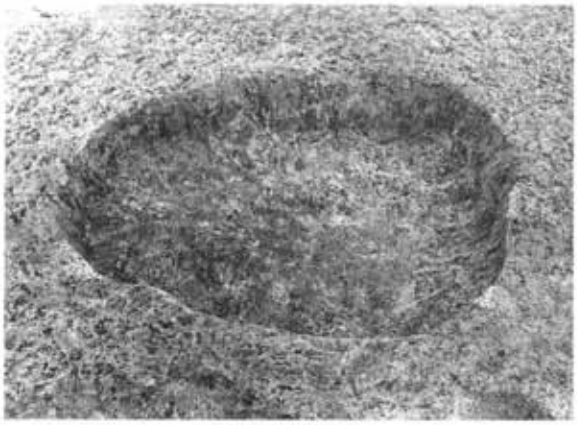
S K017（西から）



S K018（東から）

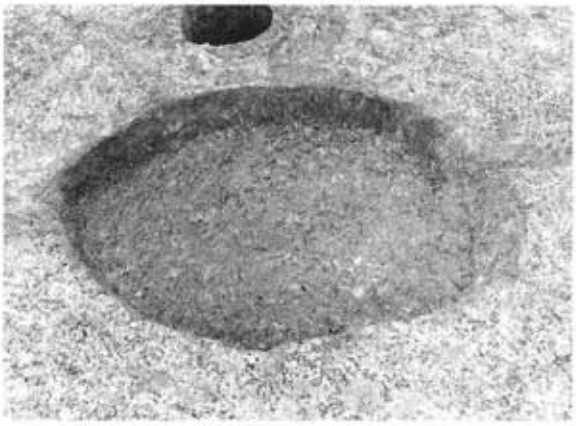


S K019（東から）

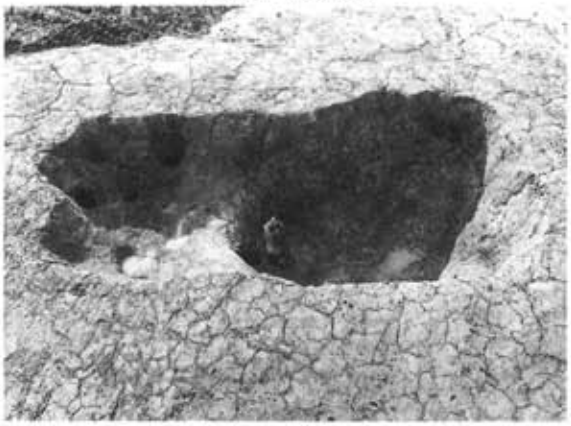


ＳＫ020（北から）

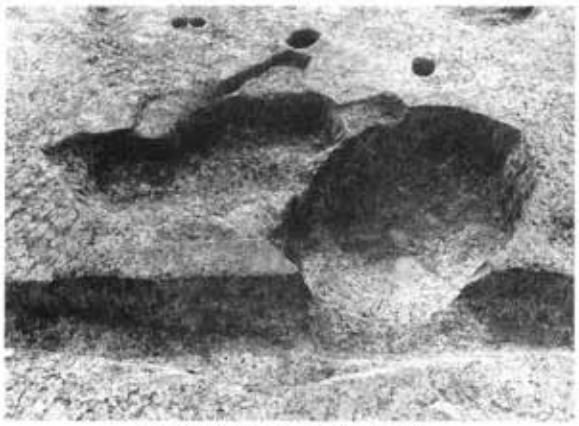
ＳＫ021（北から）



ＳＫ022（東から）



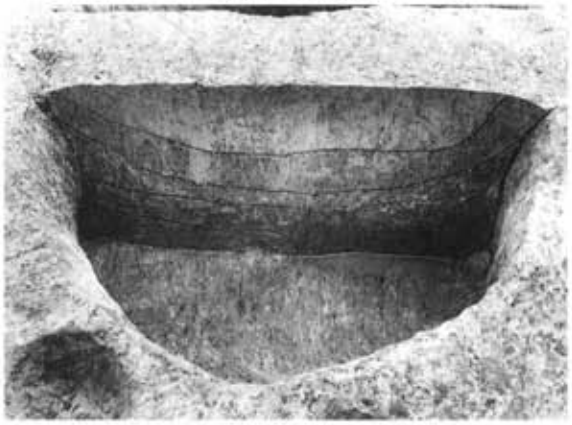
ＳＫ023（東から）



ＳＫ024・ＳＫ025（東から）

ＳＫ028（南から）

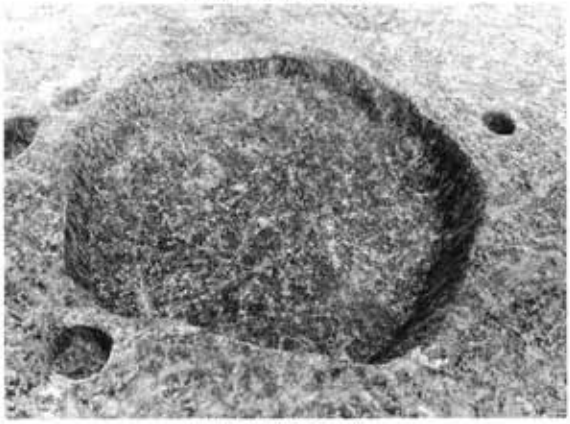
ＳＫ026（北から）



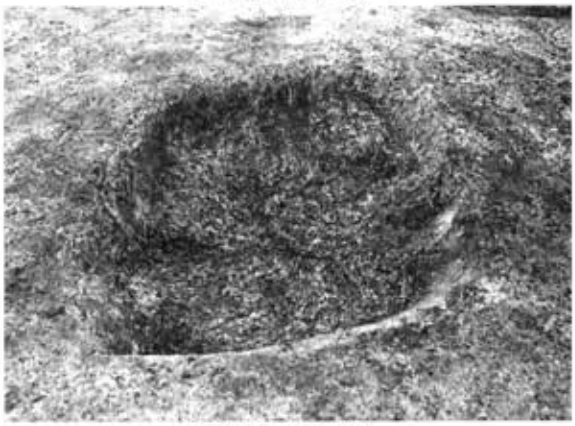
ＳＫ026土層堆積状況（西から）

S K029（東から）

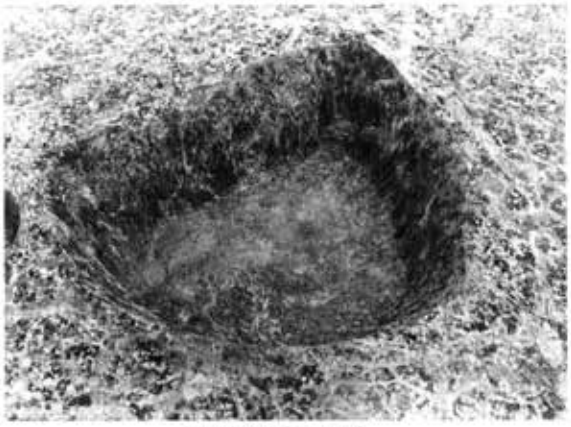
S K030（東から）



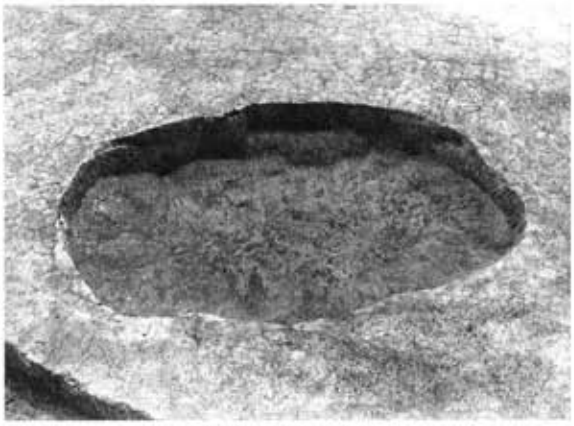
S K031（西から）



S K035（東から）



S K036（西から）



S K037（西から）

S K038（西から）

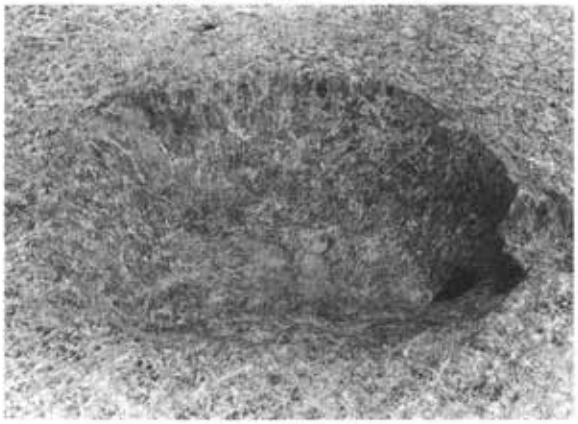
S K039（東から）

ＳＫ041（北から）

ＳＫ045（北から）

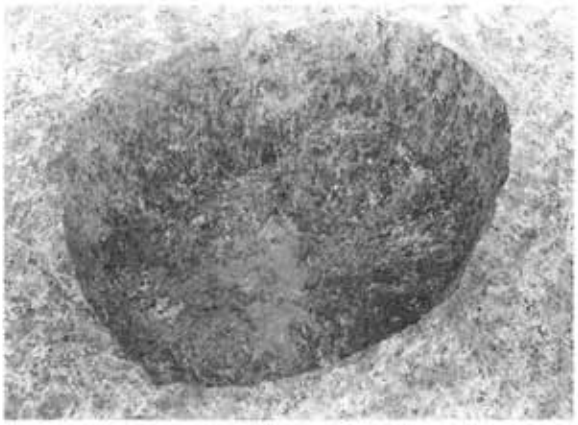
ＳＫ047・ＳＫ048（西から）

ＳＫ049（南から）

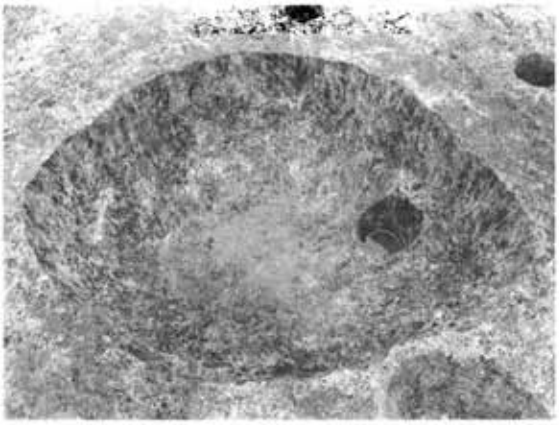


ＳＫ051（西から）

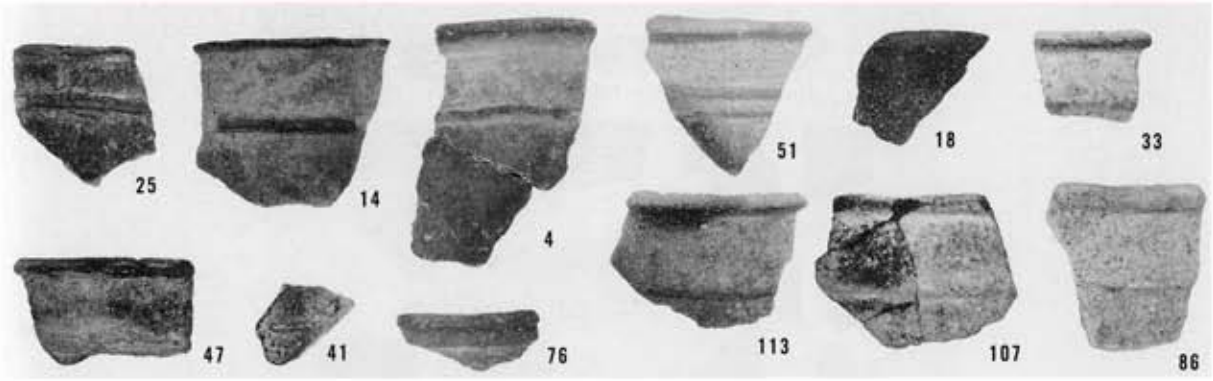
ＳＫ052（北から）



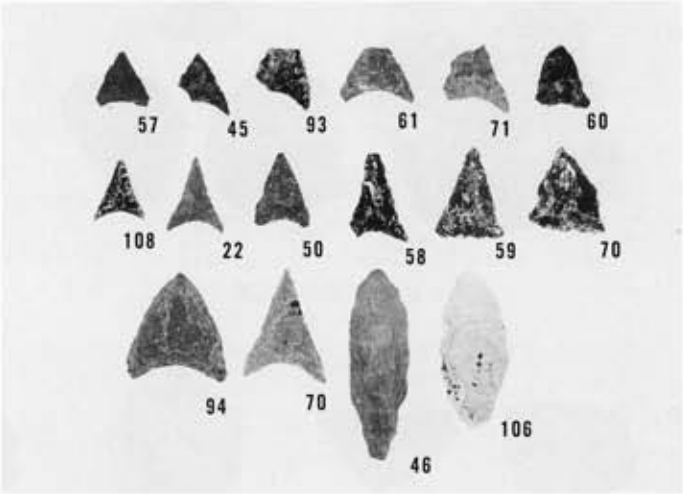
ＳＫ053（北から）

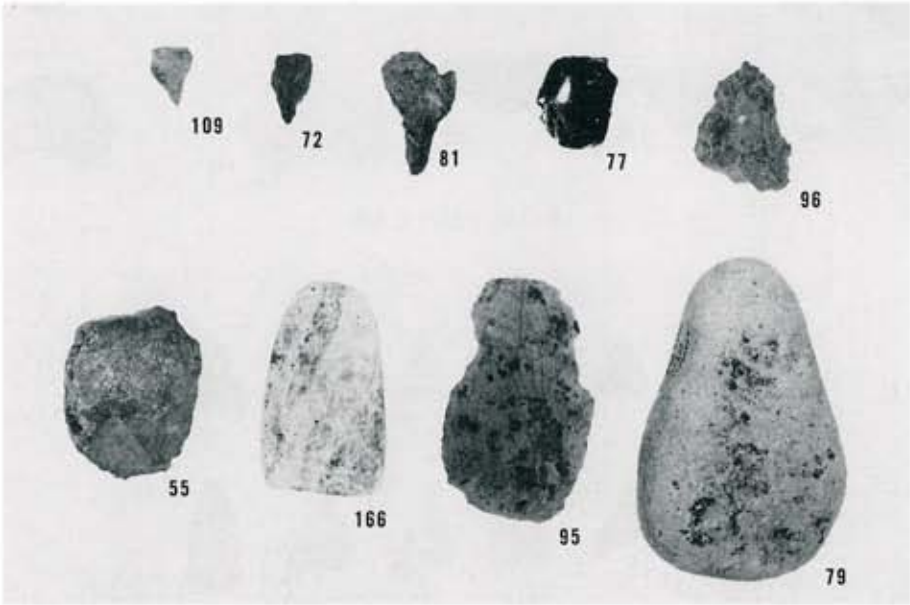


ＳＫ054（西から）

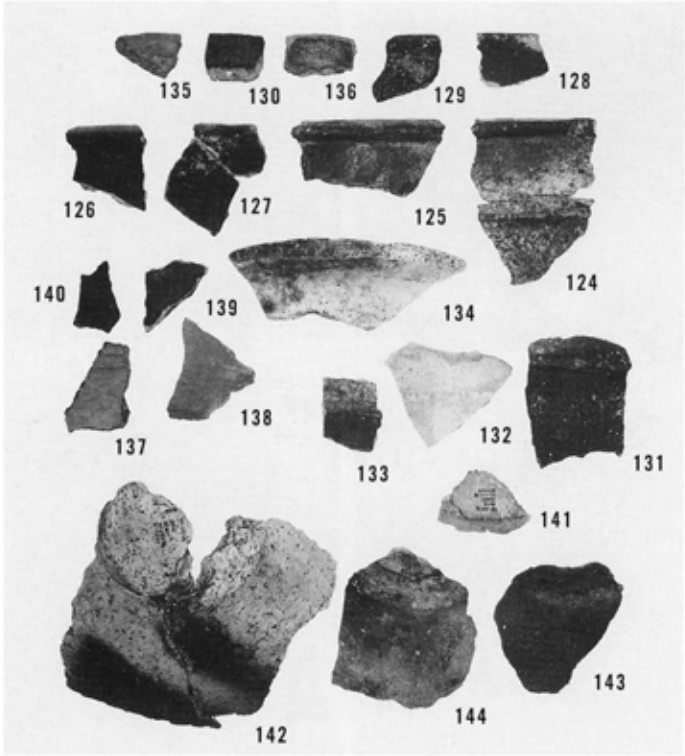


土坑出土土器

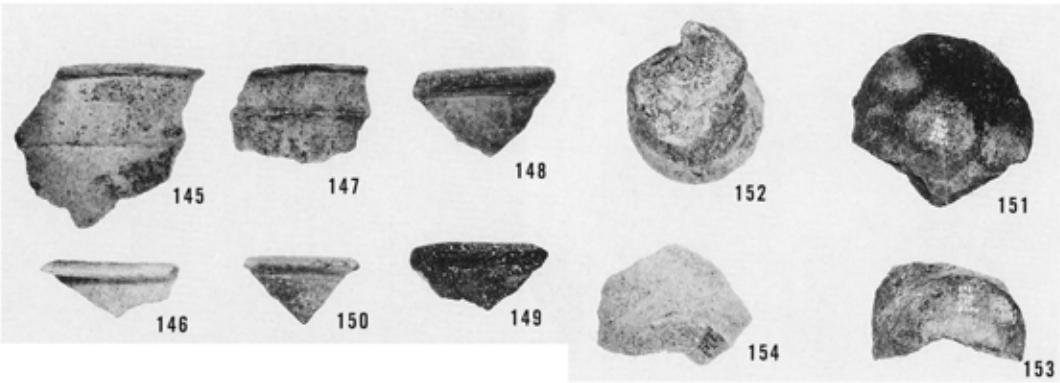




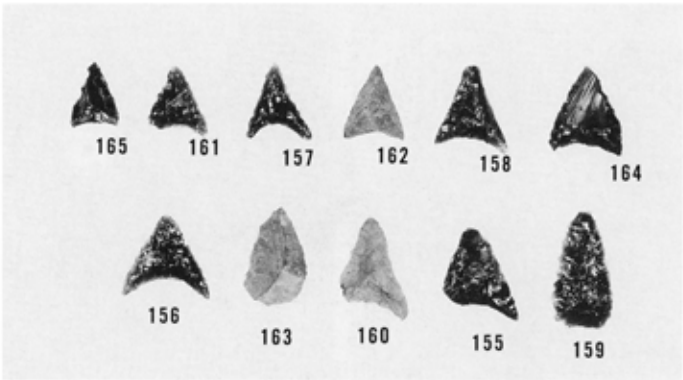
土坑その他出土石器



ＳＤ001下部出土土器



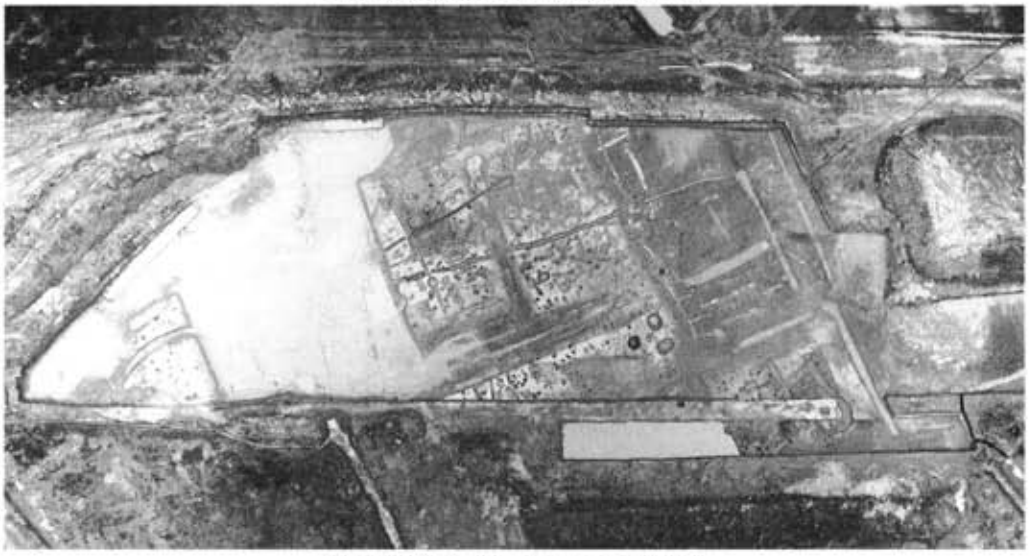
ＳＤ001上部出土土器



ＳＤ001出土石器

小野原遺跡Ａ区　写真図版

小野原遺跡A区全景（北東上空から）



小野原遺跡A区全景（南東上空から）

ＳＸ009・ＳＤ007・ＳＤ030（北上空から）

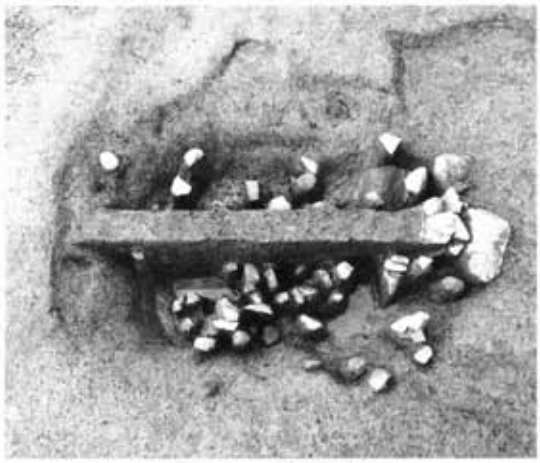
ＳＥ005（北から）

ＳＥ015（西から）

ＳＥ020（西から）

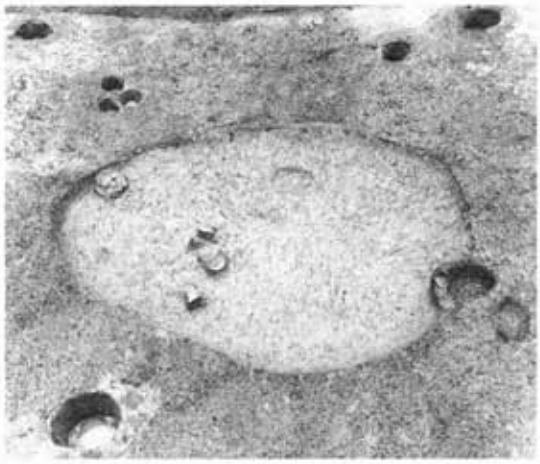
S K013（東から）

S K018（東から）

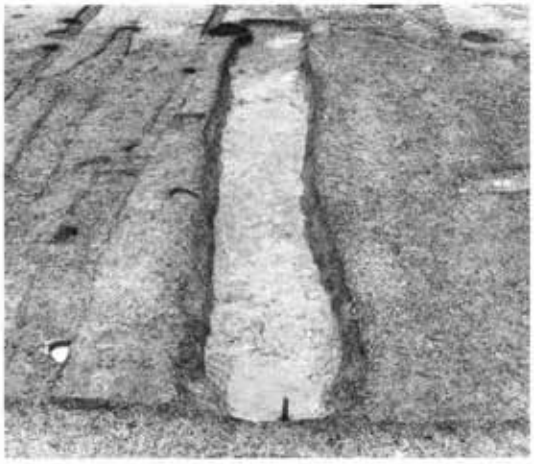


S K024（東から）

S K042（南から）

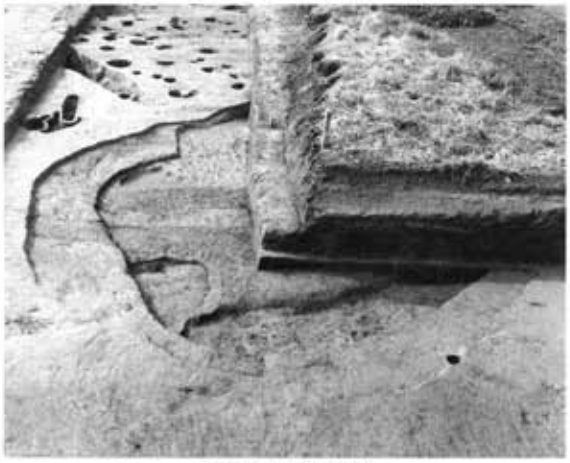


S K043（西から）



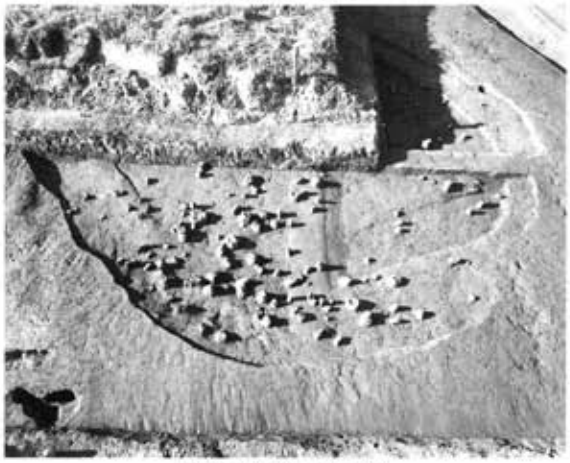
S D032（北から）

ＳＸ009（東から）

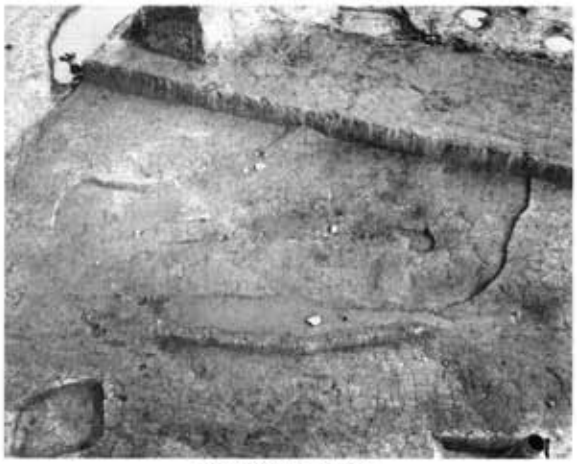


ＳＸ009東側部分

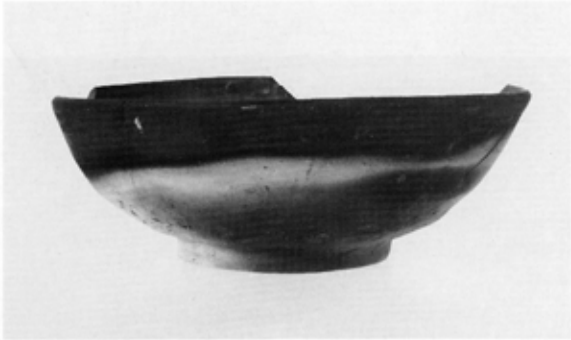
ＳＸ009西側部分



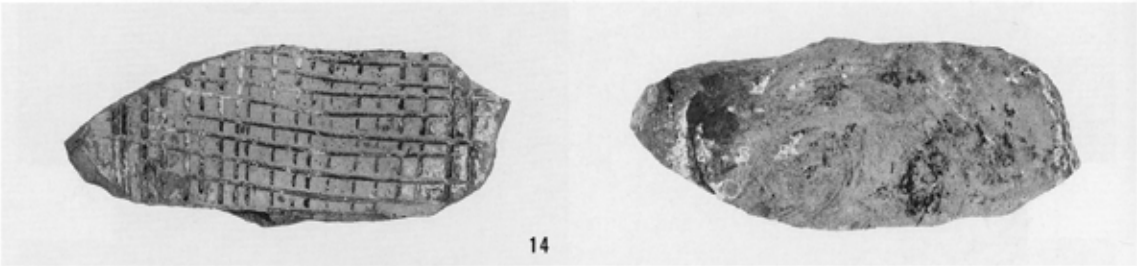
ＳＸ009遺物出土状況



ＳＸ033（西から）



ＳＥ015出土瓦器椀



ＳＫ024出土古瀬戸卸皿

ＳＤ016出土遺物

ＳＤ032出土遺物

ＳＸ009出土遺物

みやこ遺跡Ｂ・Ｃ区　写真図版

B区全景（北から）

B区ＳＤ001（南西から）

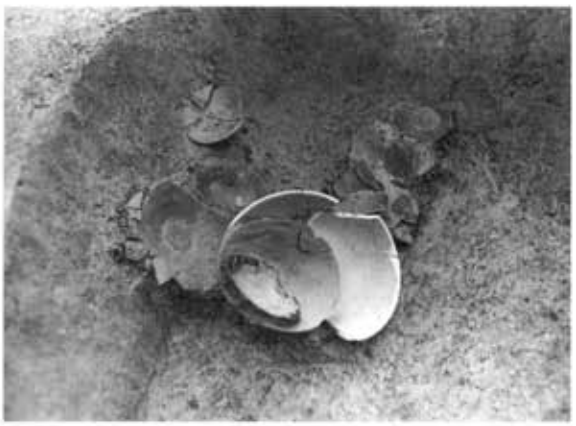
B区西側の遺構（北から）

C区全景（北から）

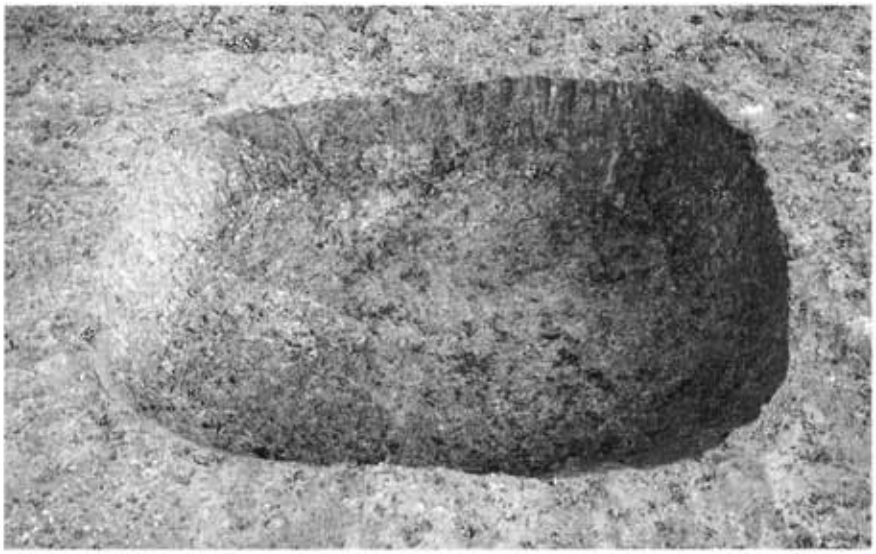
C区ＳＰ001・ＳＰ002（西から）

C区ＳＰ001土層（北から）

C区ＳＰ003（南から）



C区ＳＰ003遺物出土状況



C区ＳＰ010（西から）

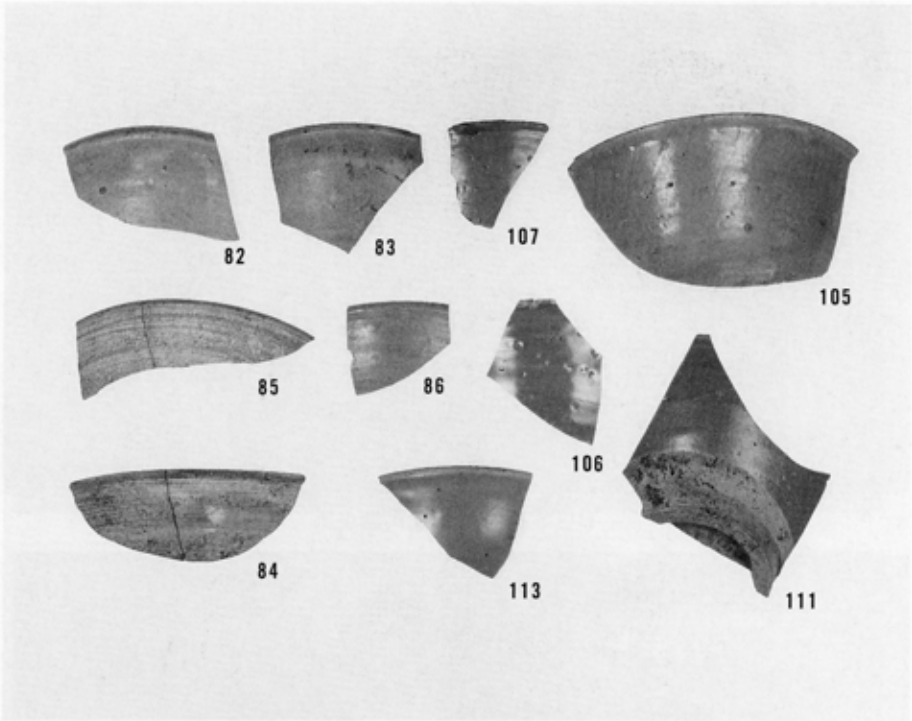
C区ＳＸ004（西から）

C区ＳＸ006（北から）

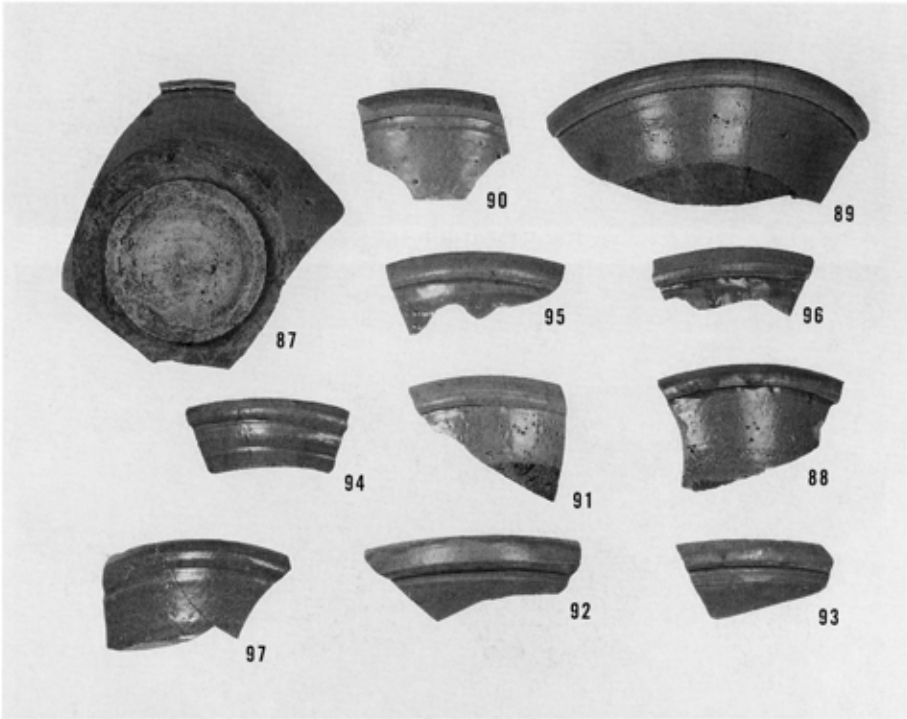
B区ＳＤ001出土土師器小皿

B区ＳＤ001出土土師器杯

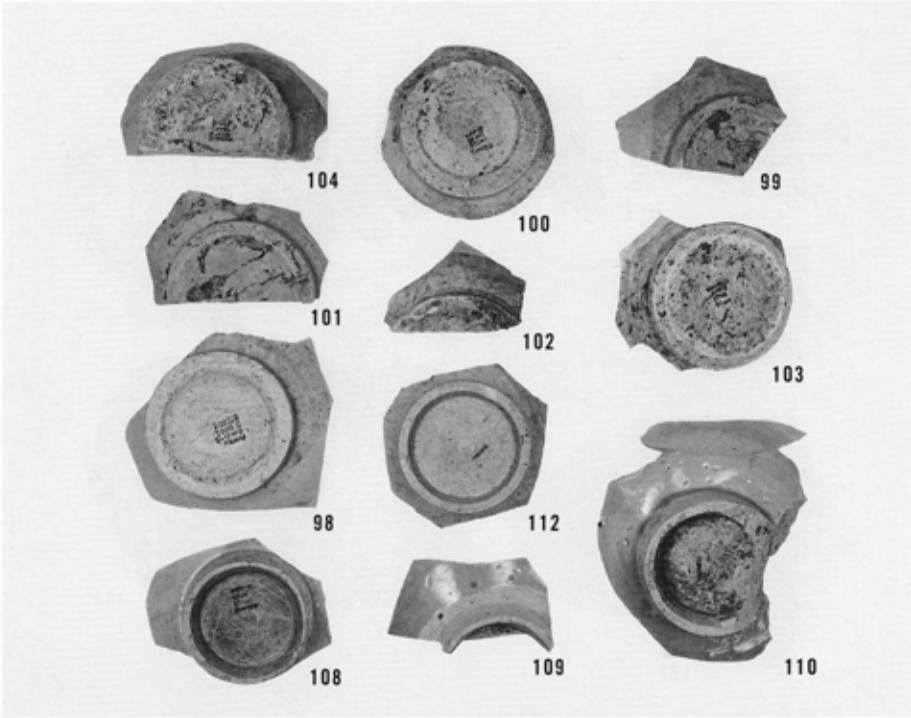
B区ＳＤ001出土瓦器椀



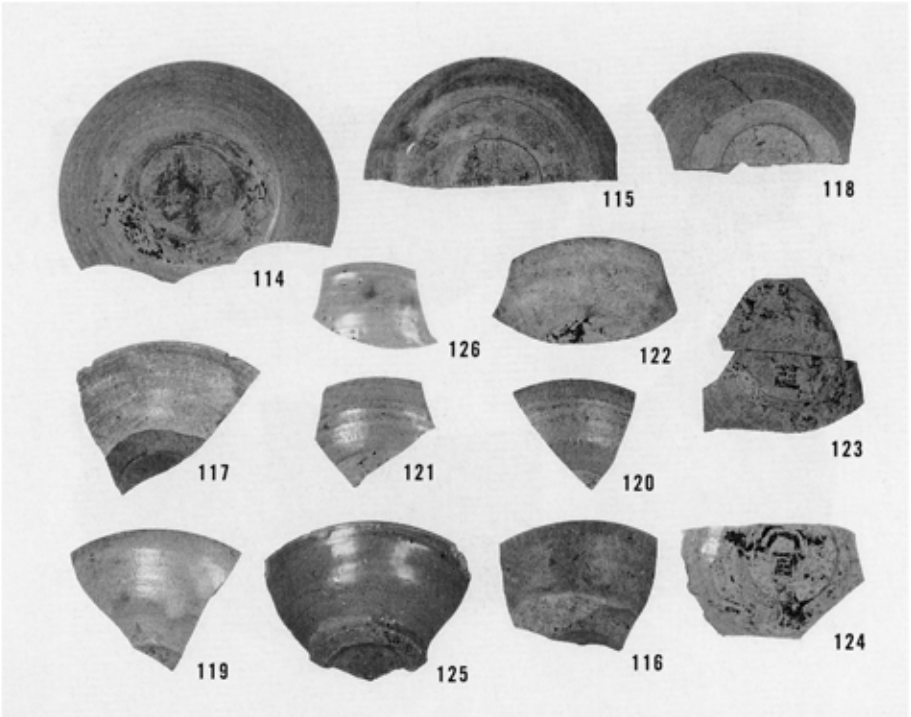
B区ＳＤ001出土白磁椀



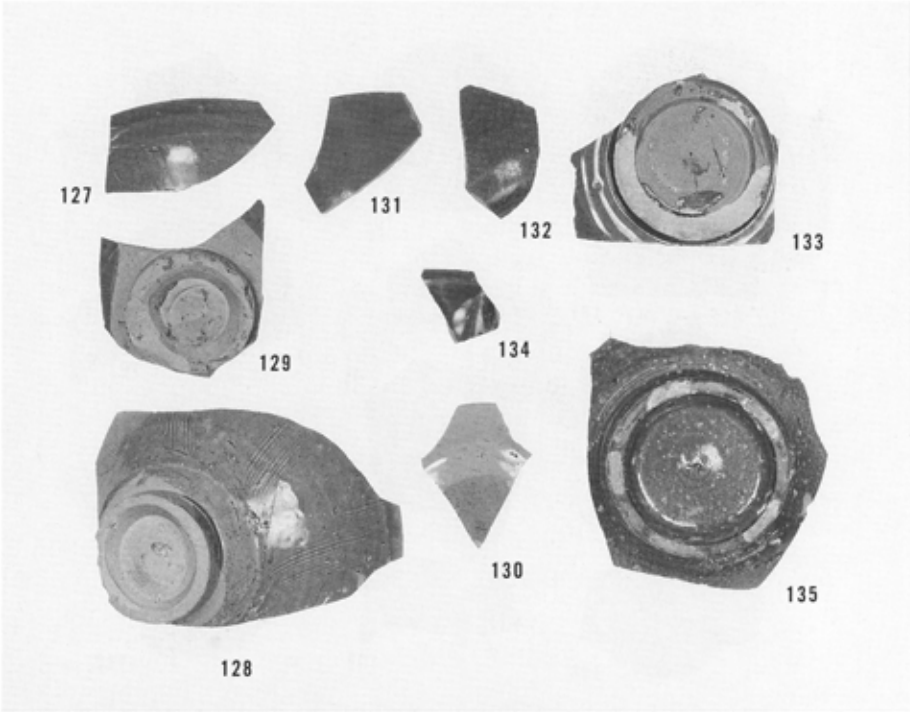
B区ＳＤ001出土白磁椀



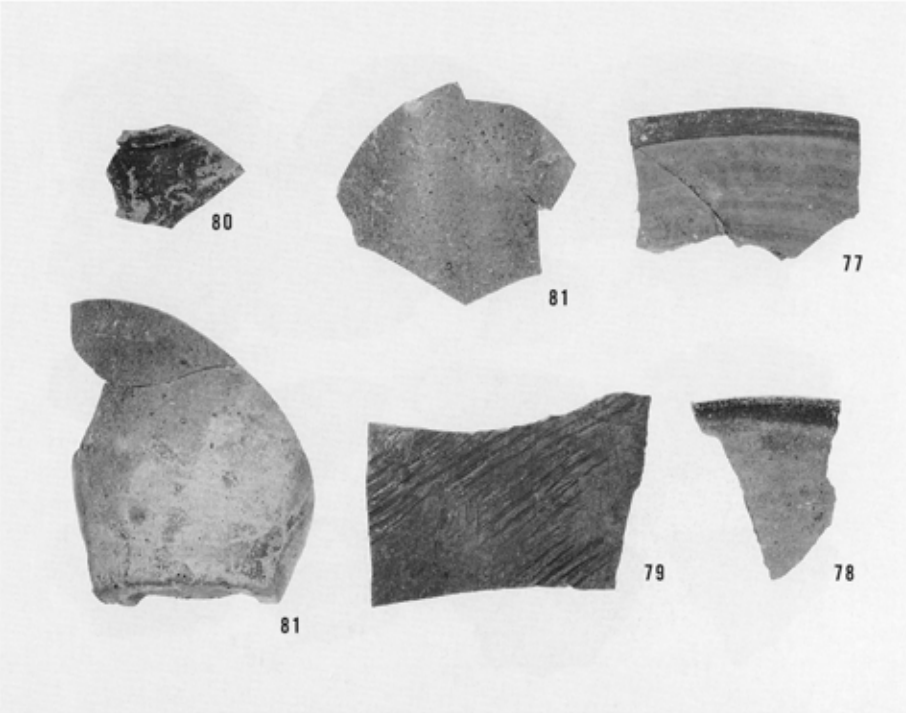
B区SD001出土白磁椀



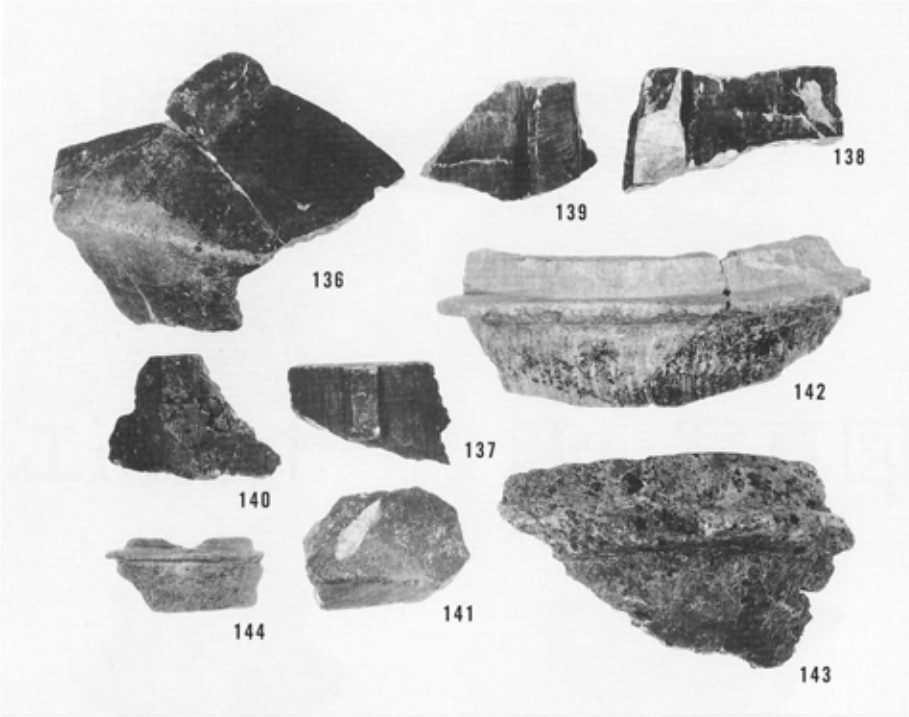
B区SD001出土白磁皿



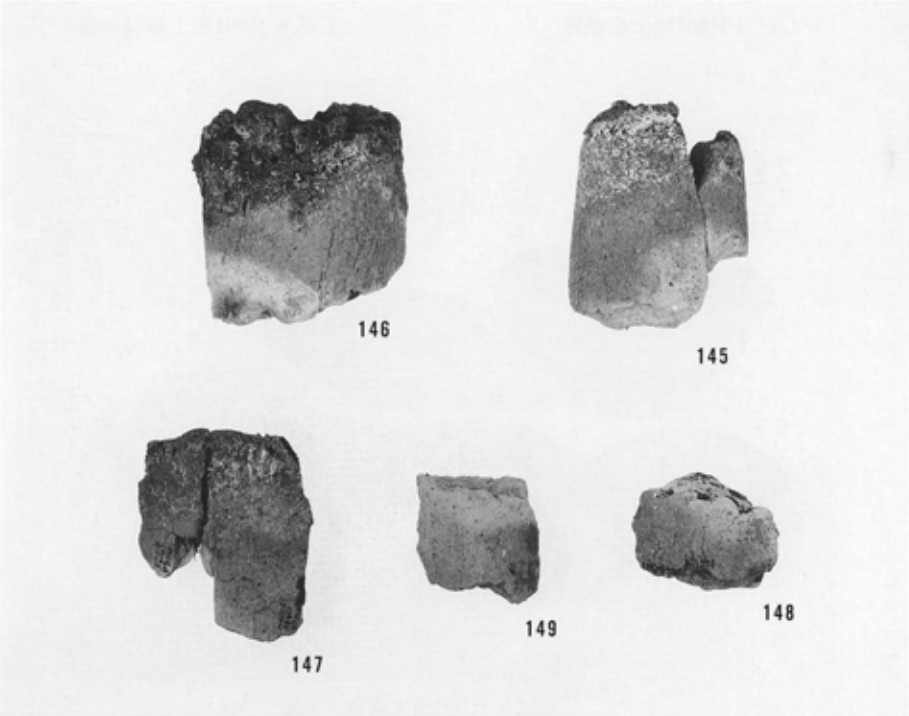
B区ＳＤ001出土青磁椀・皿



B区ＳＤ001出土陶器・須恵器



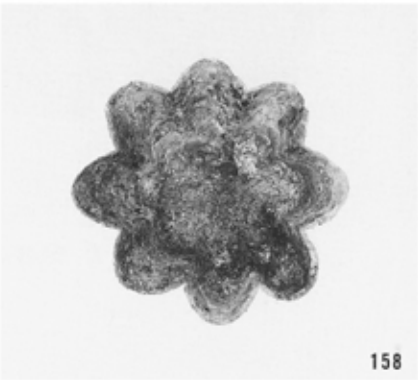
B区ＳＤ001出土石鍋



B区ＳＤ001出土鞴羽口

C区ＳＰ001・ＳＰ002出土遺物

C区ＳＰ001出土白磁杯



C区ＳＰ001出土銅製容器

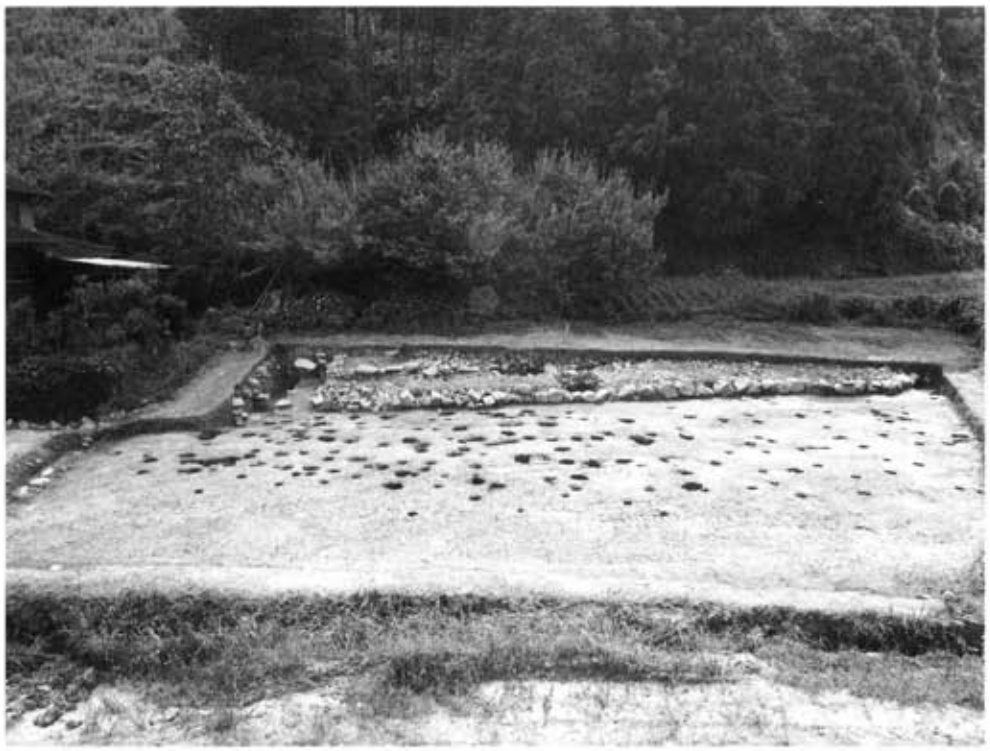
C区ＳＰ003出土遺物

玉江遺跡１～３区　写真図版

玉江遺跡全景（南東上空から）

玉江遺跡全景（西上空から）

1区全景（南東から）



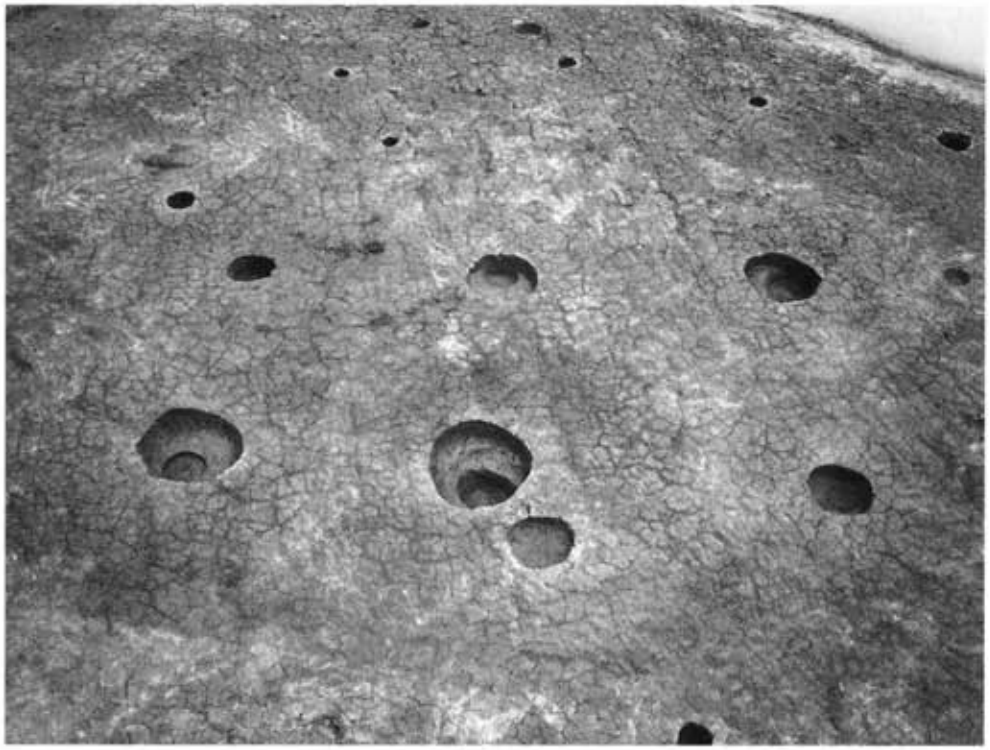
1区全景（西から）

1区全景（北から）

1区ＳＸ001・ＳＸ002（南から）

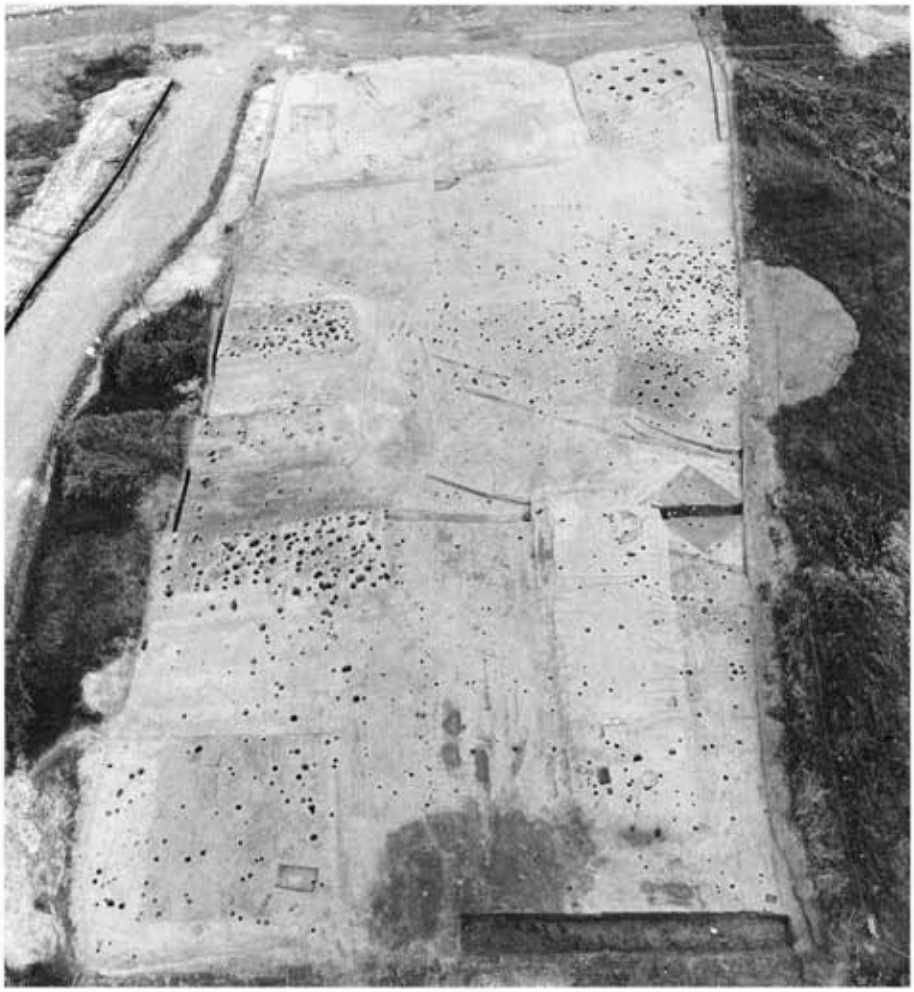
1区ＳＸ001・ＳＸ002（南から）

2区全景（西から）



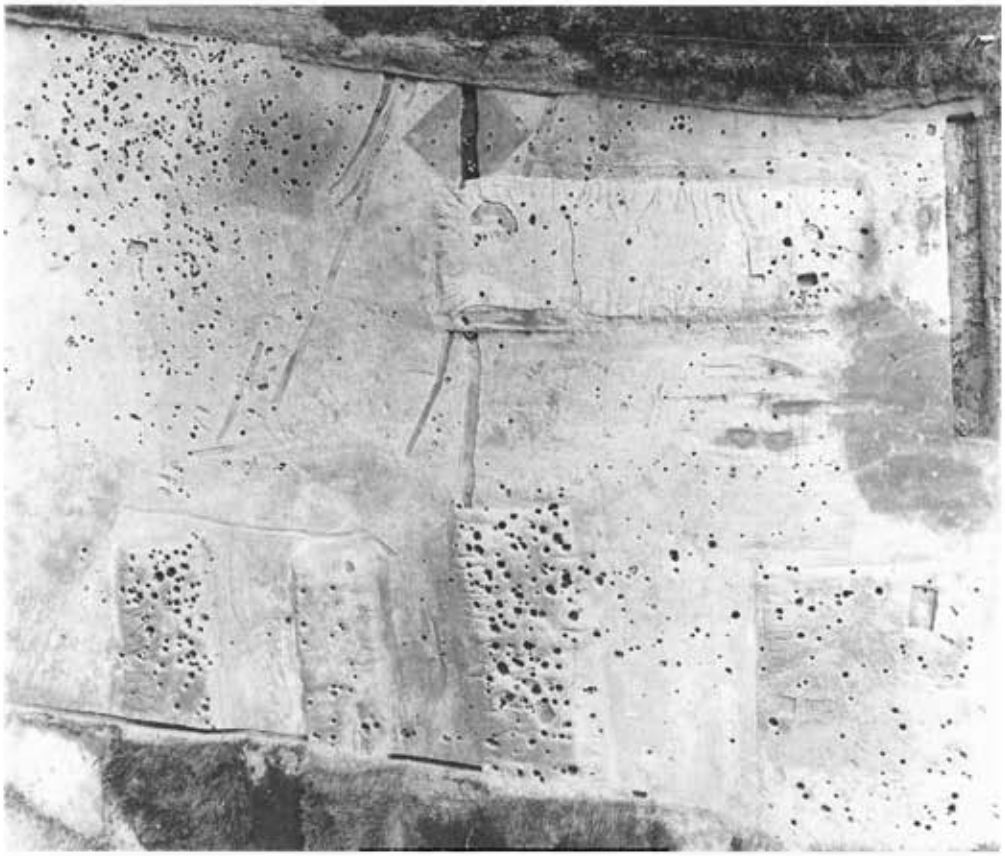
2区ＳＢ001（西から）

3区全景（北西上空から）



3区全景（南西上空から）

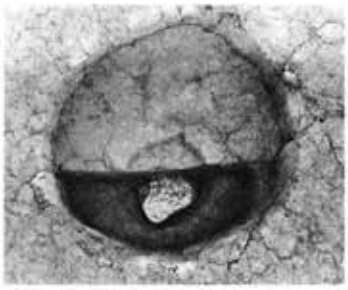
3区全景（北西上空から）



3区南側（北西上空から）

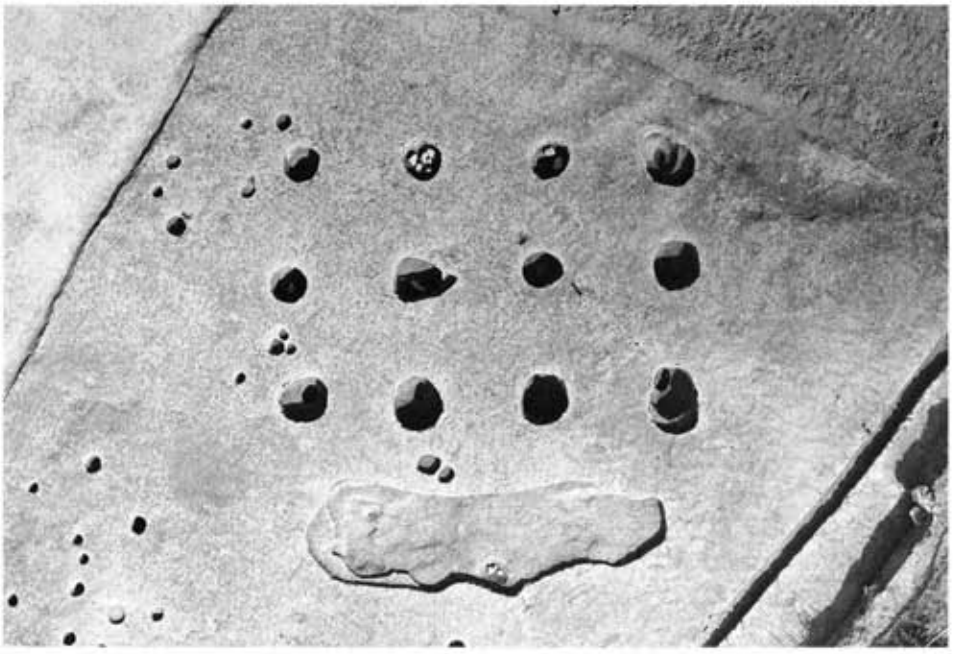
3区ＳＢ306検出状況（南西から）

3区ＳＢ306　Ｐ－２



3区ＳＢ306　Ｐ－３

3区ＳＢ306　Ｐ－７

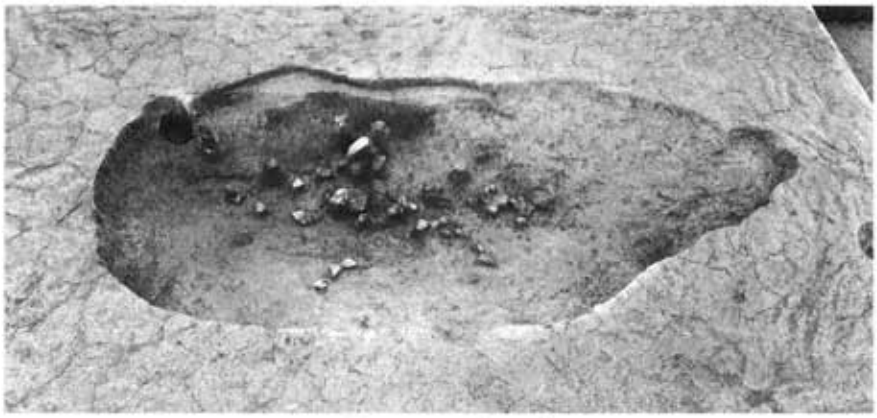


3区ＳＢ306（南上空から）

3区SB309（西から）

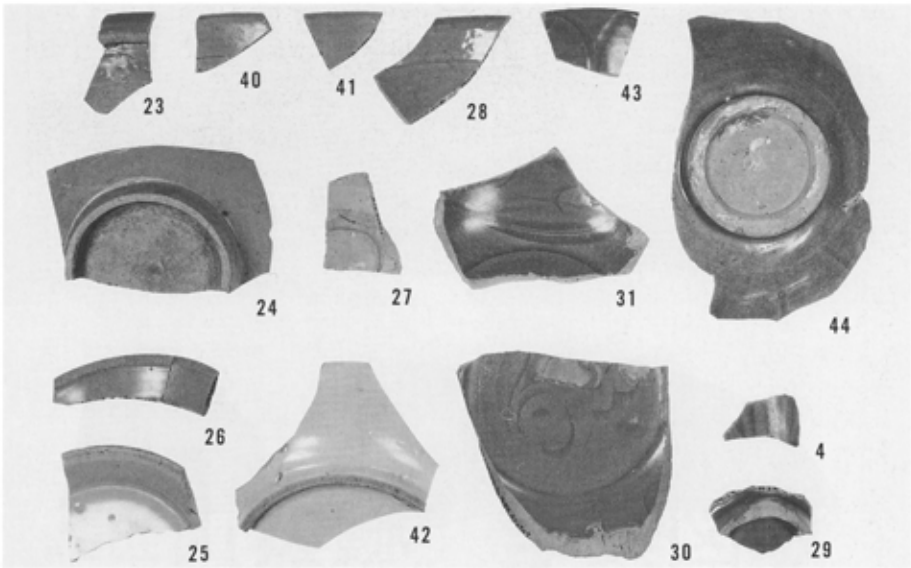
3区SB315（西から）

3区ＳＤ310（南東から）

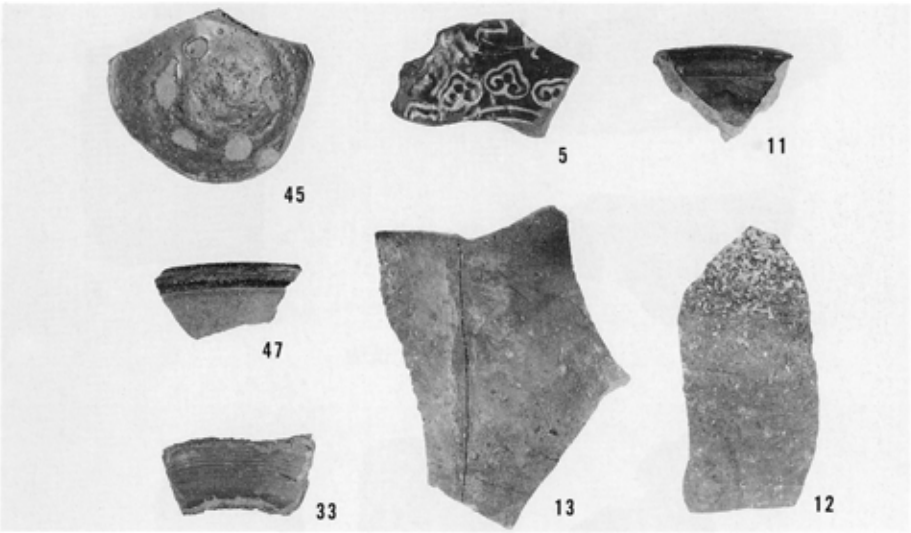


3区ＳＫ316（東から）

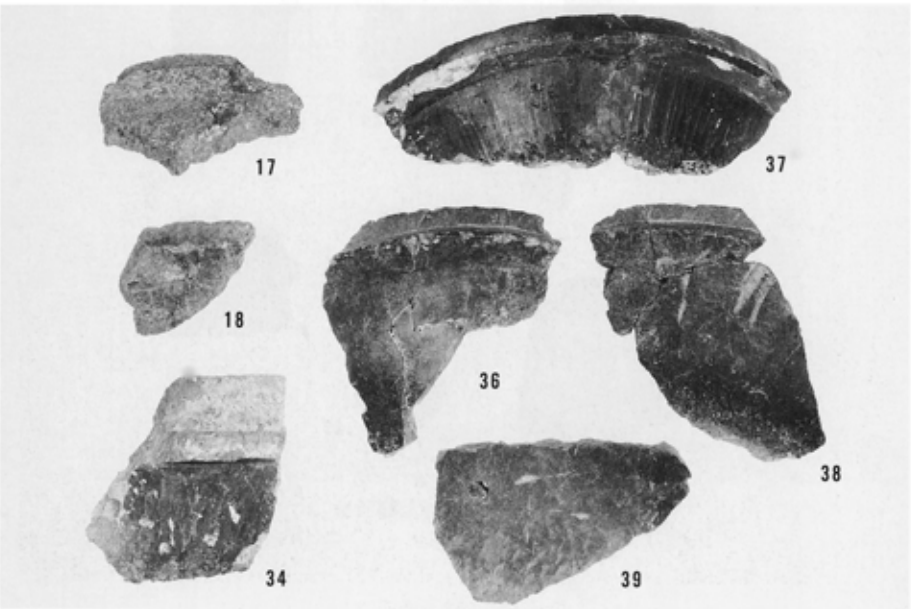
3区ＳＰ308（西から）



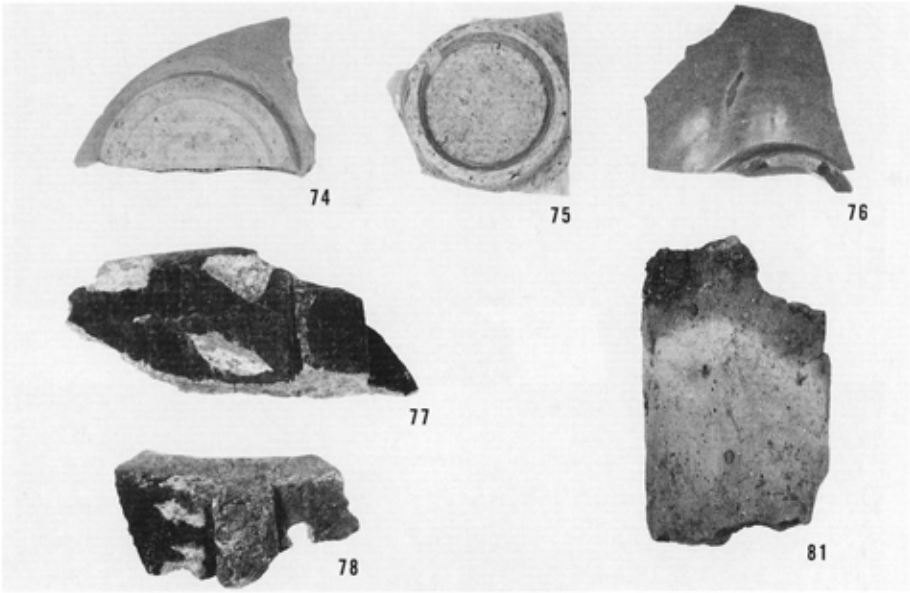
1区出土中国磁器



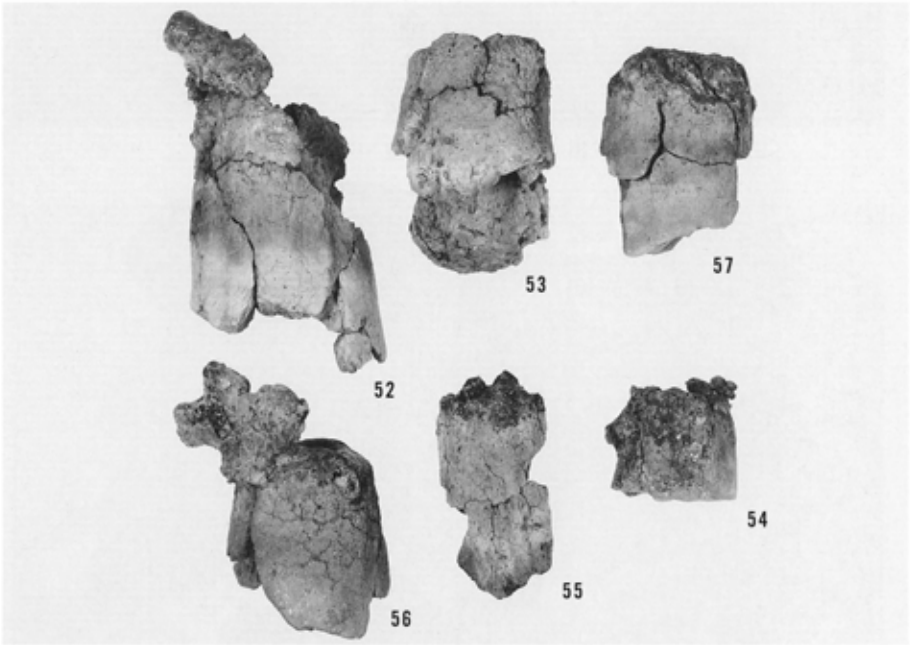
1区出土朝鮮王朝陶磁器・国産陶器



1区出土石鍋



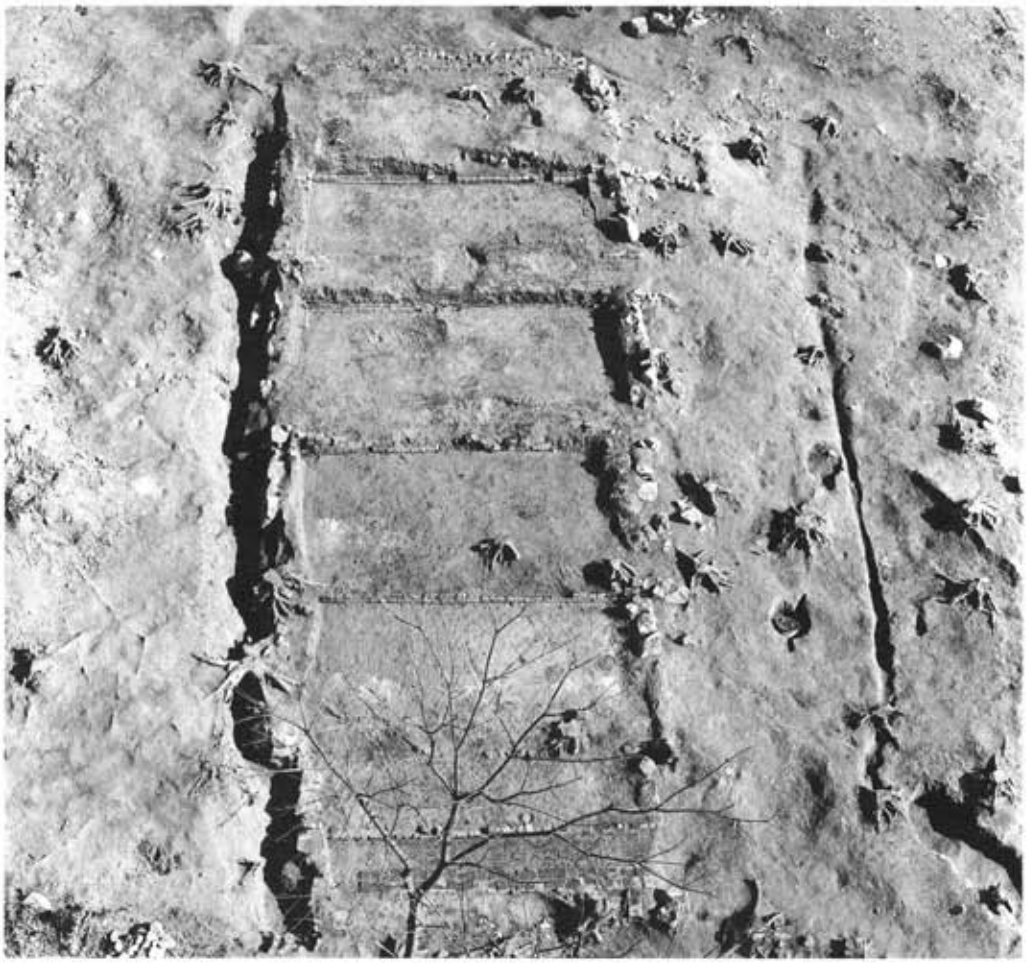
3区ＳＤ310出土遺物



3区ＳＫ316出土鞴羽口

皿山窯跡　写真図版

皿山窯跡全景（西から）



皿山窯跡窯体（西から）

皿山窯跡下半部

皿山窯跡上半部

5室南側部分

皿山窯跡出土窯道具

窯道具の使用状況を示す遺物

型紙摺と銅版摺の同時焼成を示す遺物

1・2

3・4

9

11

10

8

7

6

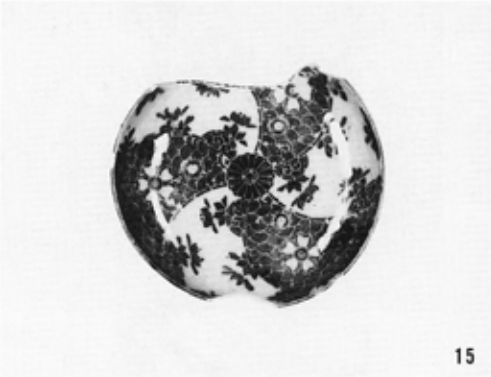
5

12

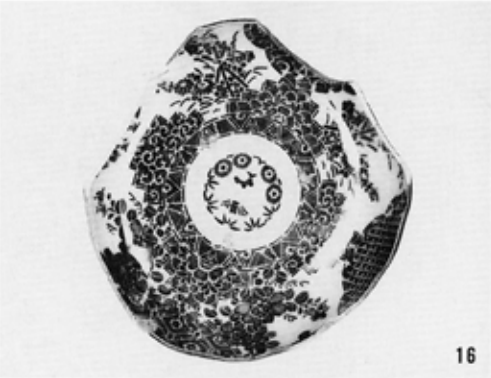
13

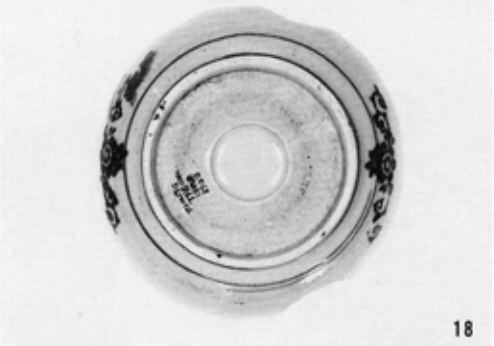
13

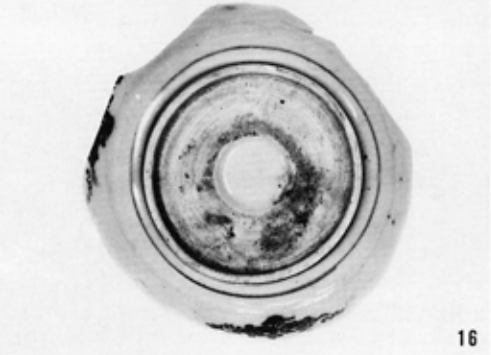
14


15

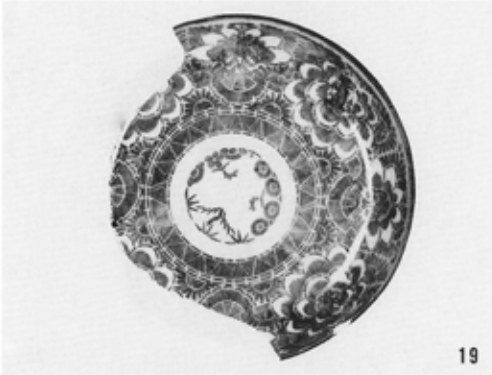
18


16


18


16

皿山窯跡出土染付鉢・皿


19

20

22

23

24

25

24

25

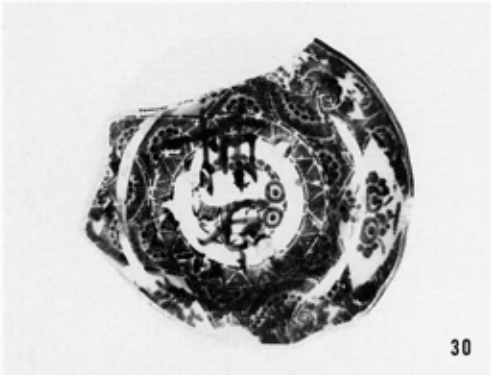
皿山窯跡出土染付皿

26

27

28

29


30

32

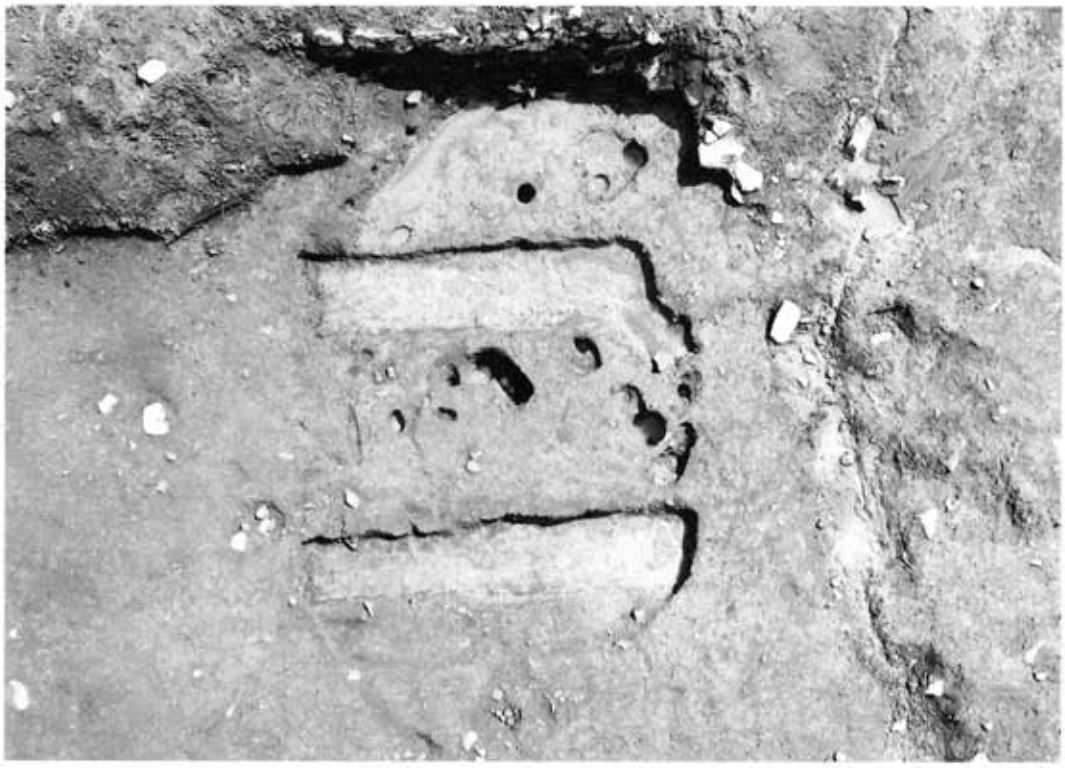
30

31

皿山窯跡出土染付皿

東福寺遺跡　写真図版

東福寺遺跡・皿山窯跡全景（西上空から）

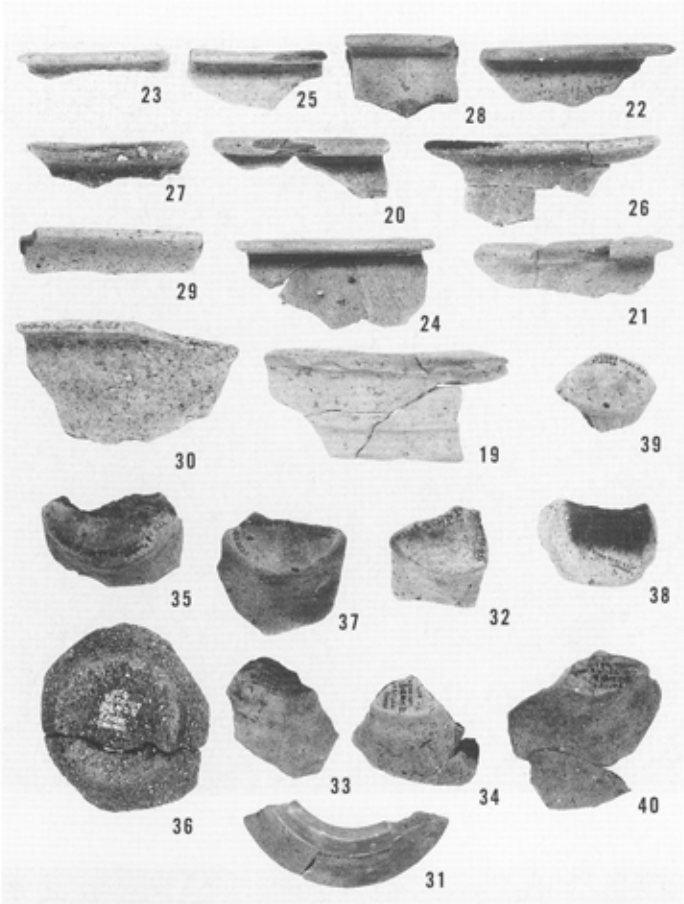


ＳＨ004・ＳＨ009（西から）

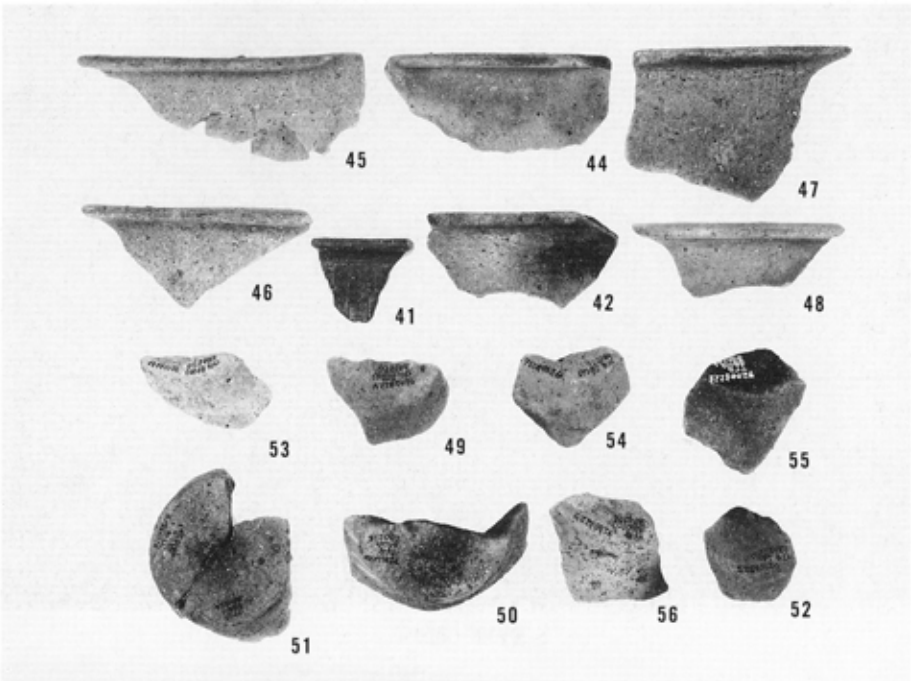
ＳＨ005（西から）

ＳＨ006・ＳＨ007（西から）

ＳＨ010（西から）



ＳＨ006・ＳＨ007出土土器



ＳＨ010出土土器

ＳＸ019（羨道部側から）

ＳＸ019（北から）

ＳＸ019西側

ＳＸ019東側

ＳＸ019南側遺物出土状況

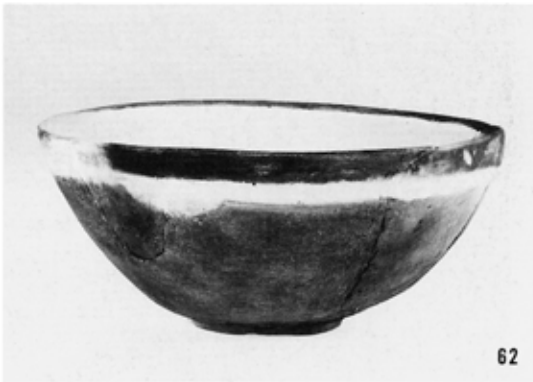
ＳＸ019人骨遺存状況

ＳＸ019出土土器・磁器

ＳＸ019出土白磁椀

ＳＸ019出土白磁椀

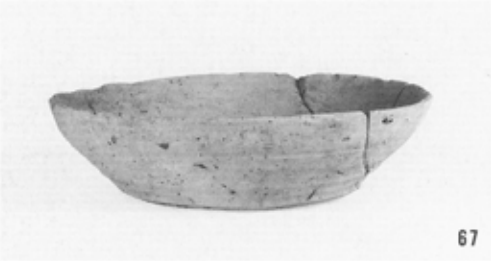
ＳＸ019出土白磁椀



ＳＸ019出土瓦器椀

65

66

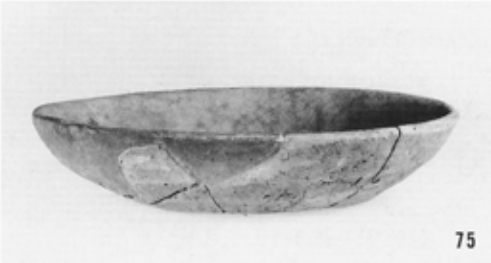

67

68

70

71

72


75

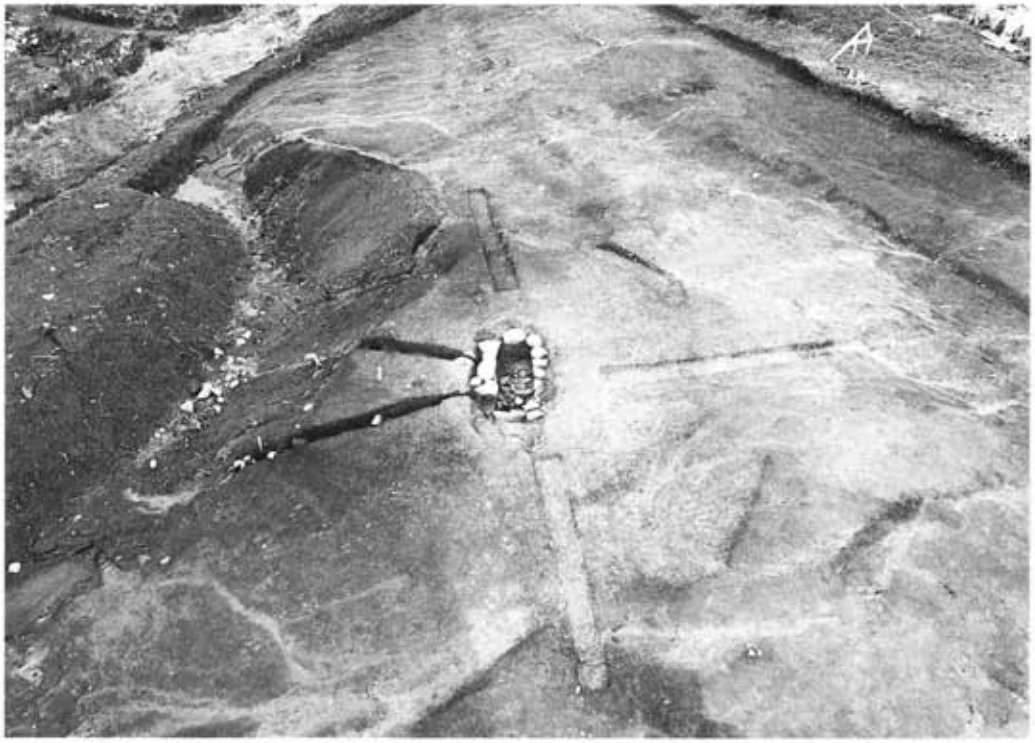
77

78

63

ＳＸ019出土土師器杯・小皿

検出状況（北西から）



全景（南西から）
ＳＴ001古墳

石室全景（南西・墓道側から）

石室全景（南東から）

右壁（北東から）

左壁（南東から）

奥壁（南西から）

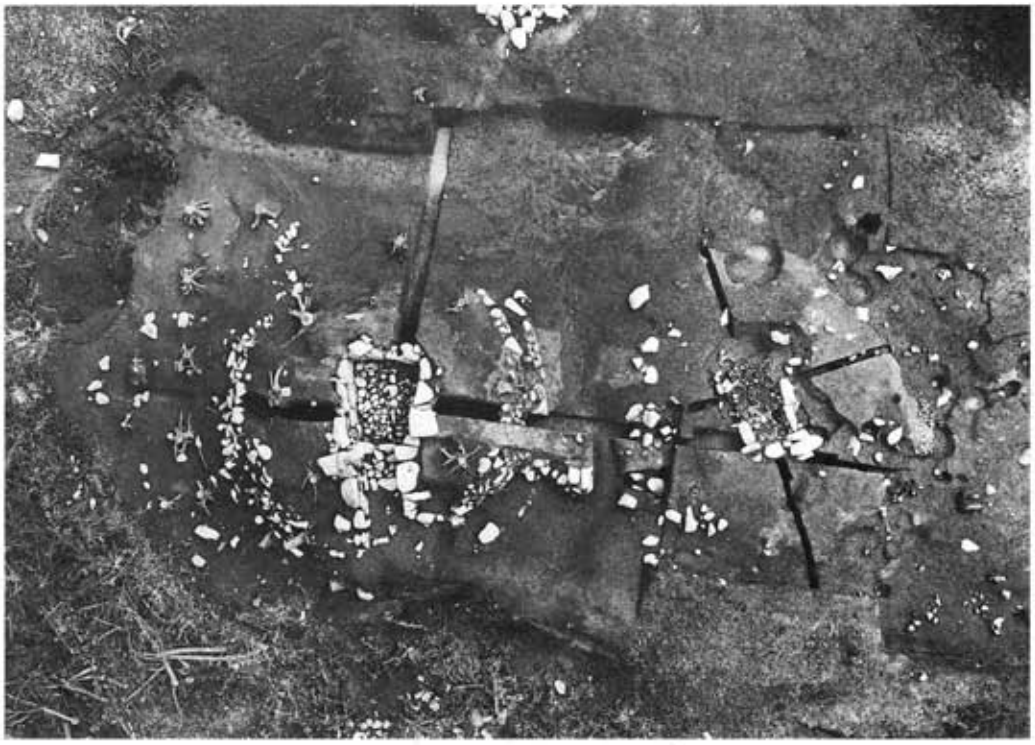
奥壁（南西から）

石室二次床面（南西から）

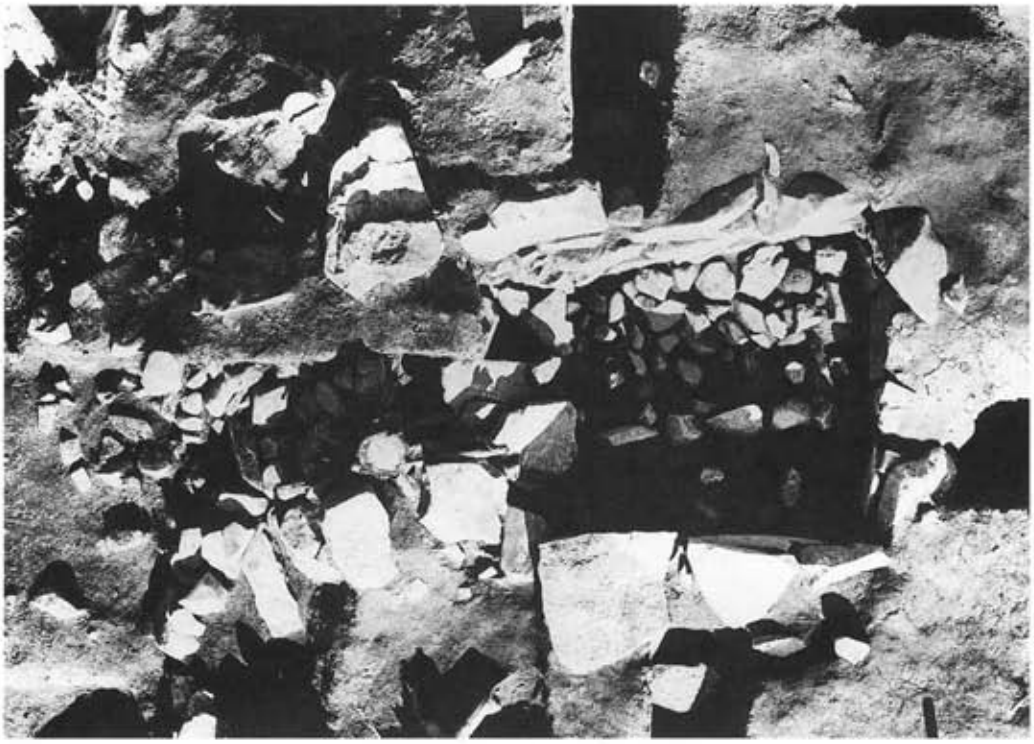
石室一次床面（南西から）

ＳＴ001古墳

ＳＴ002古墳調査前検出状況（南から）



ＳＴ002・013古墳全景（下が西）



石室全景（下が南）

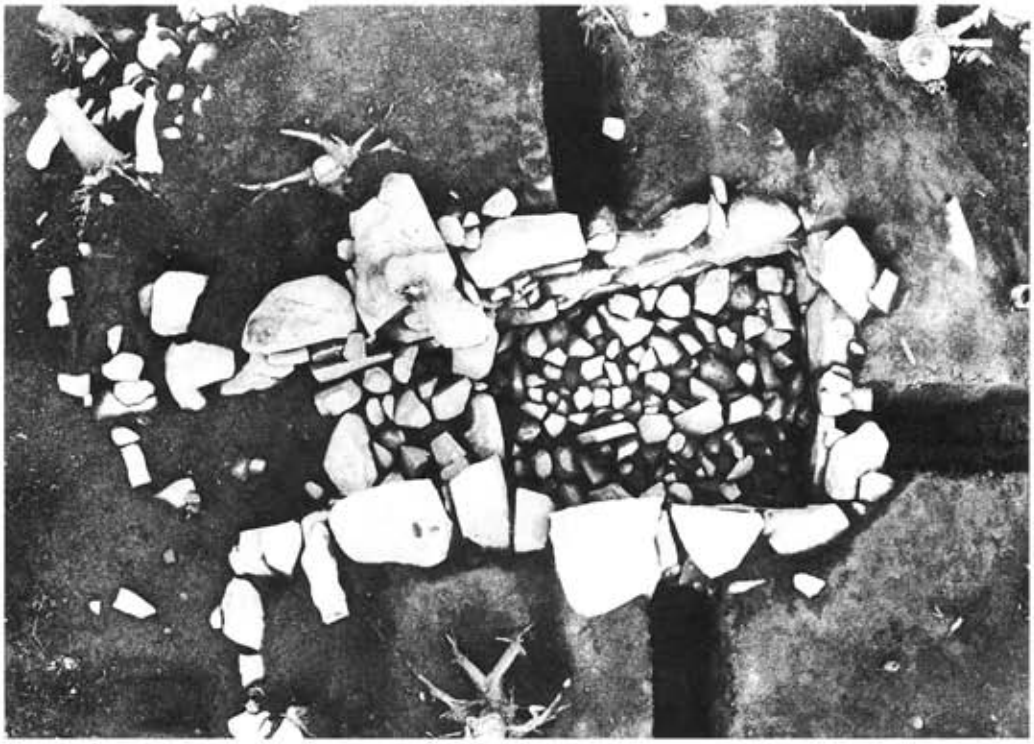
閉塞（西から）

玄室右壁（北から）

玄室および閉塞状況（東から）

ＳＴ002古墳

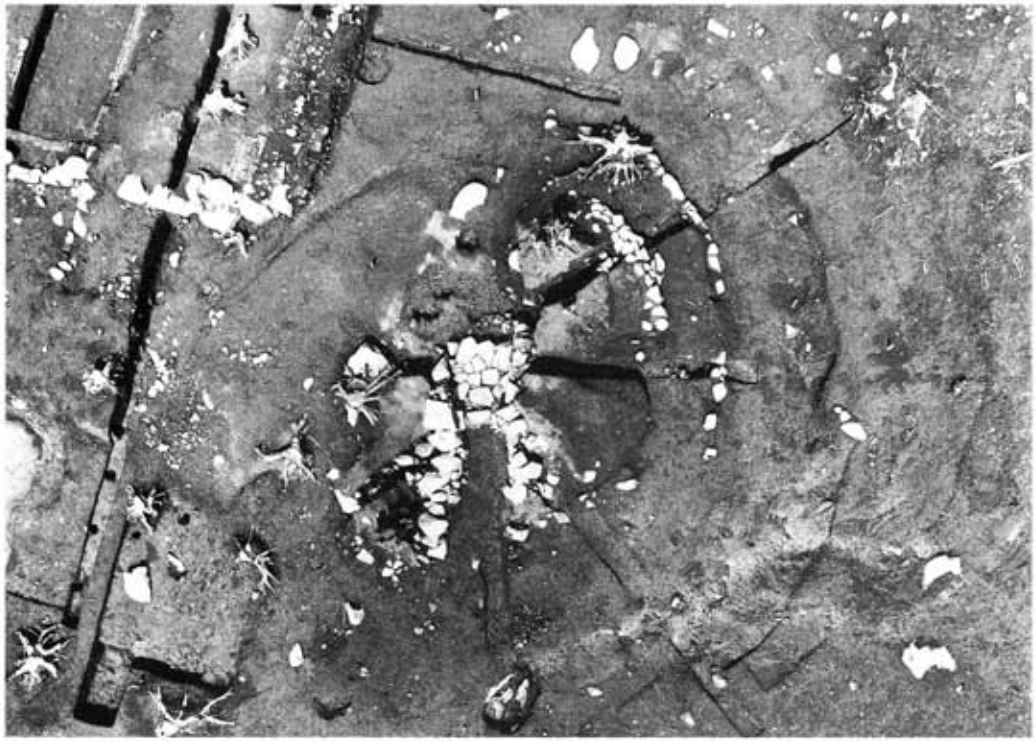
完掘後全景（西から）



完掘後石室（下が南）

ＳＴ002古墳

全景（南から）



全景（下が南）

ＳＴ003古墳

墳丘（北から）

墳丘および羨道（南から）

玄室内遺物出土状況（奥側から）

玄室完掘後（奥側から）

羨道左壁（東から）

玄室左壁（東から）

玄室右壁（西から）

羨道右壁（西から）

ＳＴ003古墳

全景（この石室の下面にＳＴ017が埋まっていた。下が西）

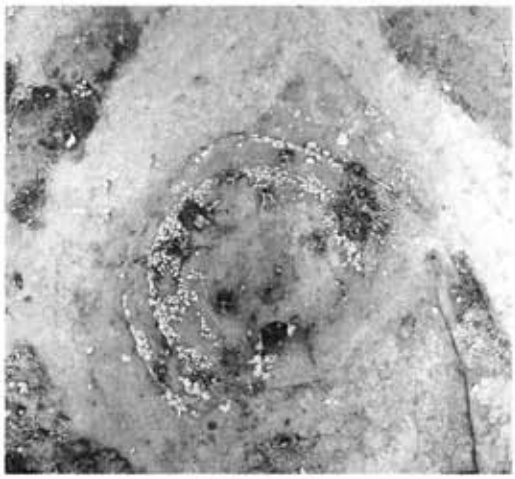
石室全景（西から）

ＳＴ013古墳

調査前墳丘（南から）

同（下が南）

表土除去後墳丘（南から）



同（下が南）

同（北から）

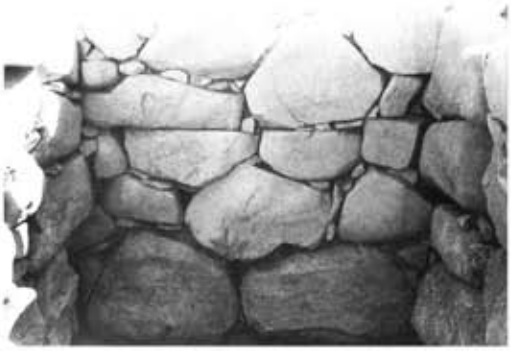
同（西から）

ＳＴ014古墳

玄室床面（羨道から）

玄室内遺物出土状況（西から）

石室全景（前庭から）



玄室奥壁（玄門部から）

玄室左壁（東から）

玄室右壁（西から）

羨道左壁（東から）

羨道右壁線刻文様（西から）

ＳＴ014古墳

ＳＴ014古墳線刻文様（左玄門立石）

全景（下が東）

北側主体（東から）

北側主体棺内遺物出土状況（南から）

南側主体（東から）

南・北主体完掘状況（東から）

ＳＴ015古墳

ＳＴ017古墳石室（南東から）

ＳＴ018古墳石室（西から）

ＳＴ018古墳石室（南から）

蓋石検出状況（後方はＳＴ002左壁・南から）

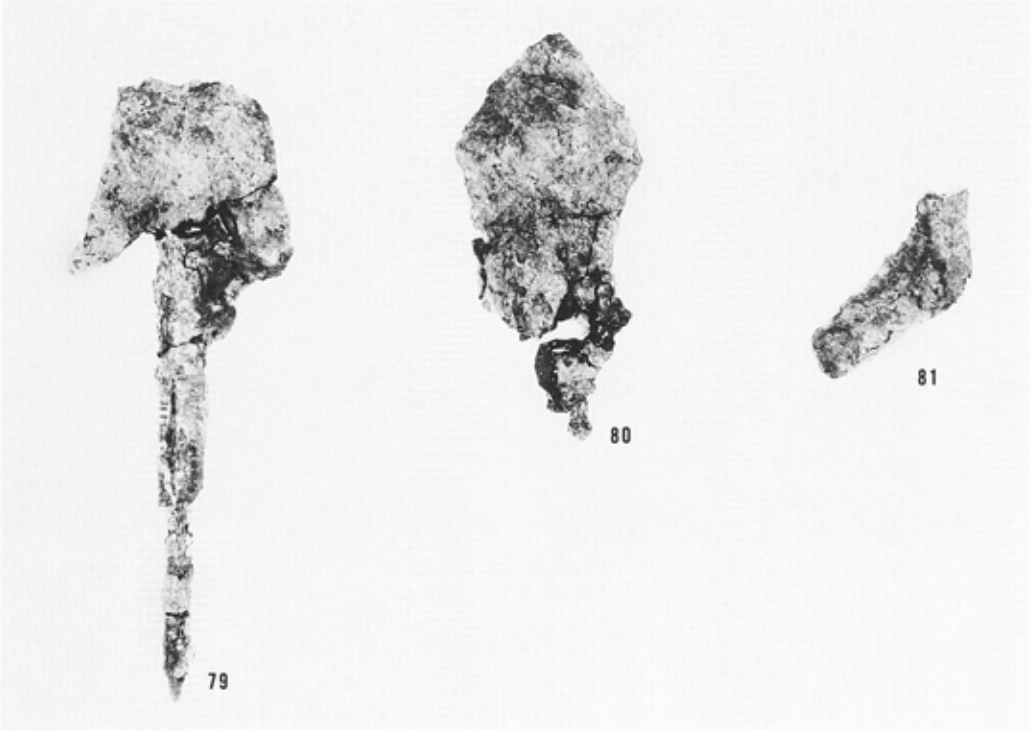
蓋石撤去後（南から）

ＳＣ016石棺墓

人骨出土状況（南から）

鉄器出土状況（頭位側）

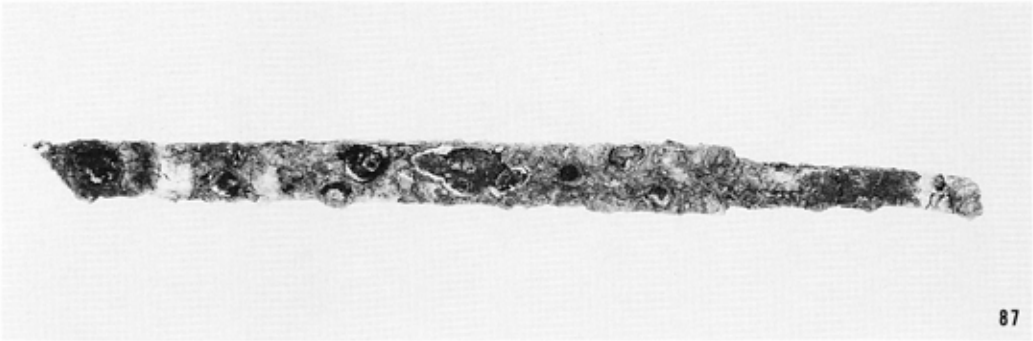
完掘状況（南から）
ＳＣ016石棺墓



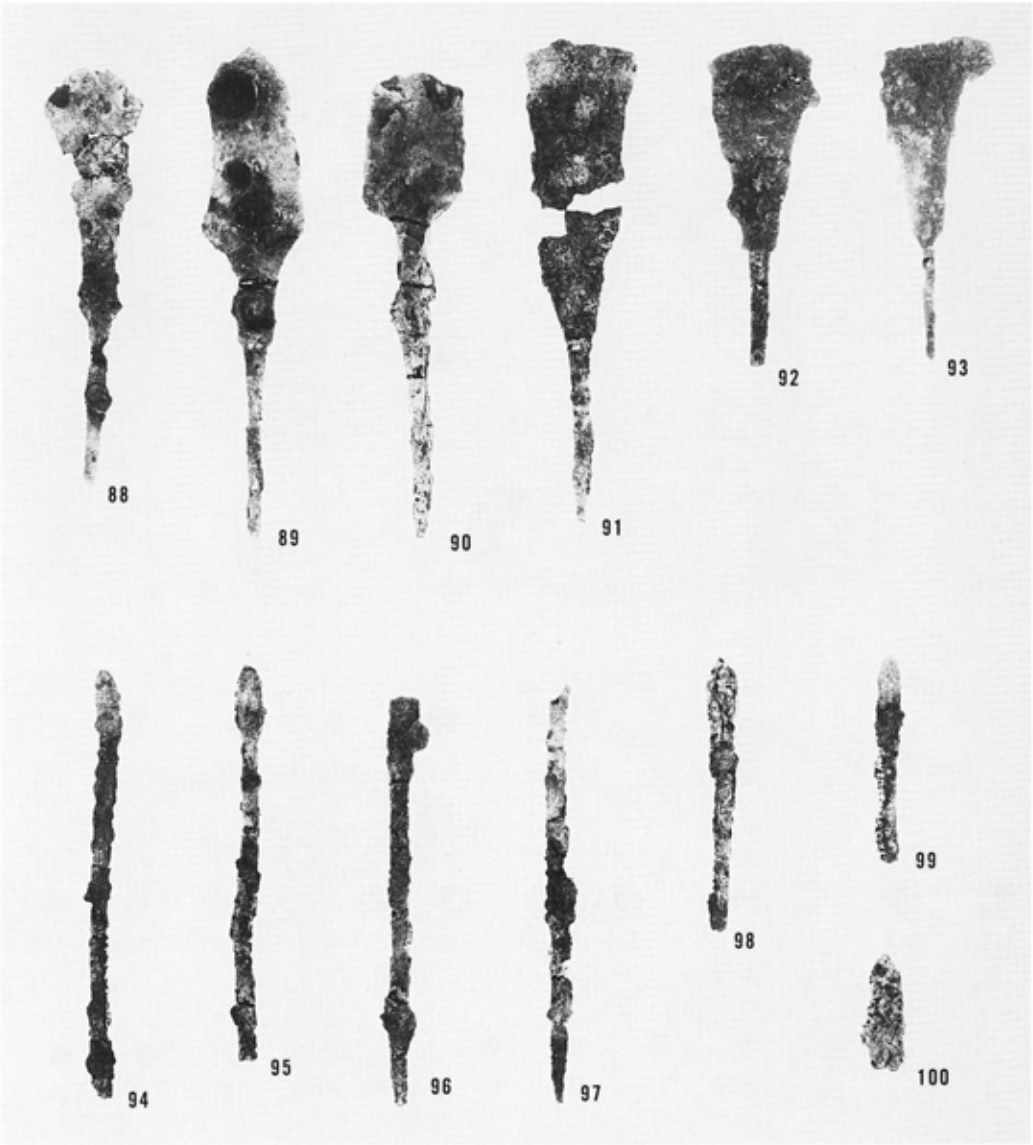
ＳＴ001古墳出土鉄器

ＳＴ002古墳出土須恵器

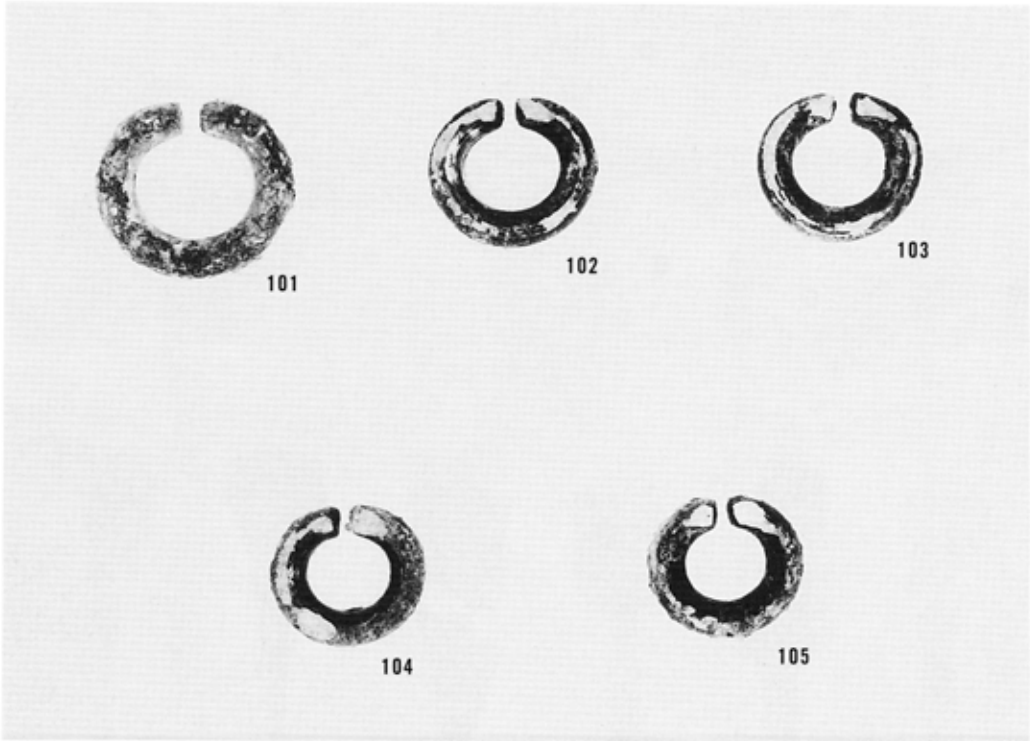
ＳＴ002古墳出土土製品



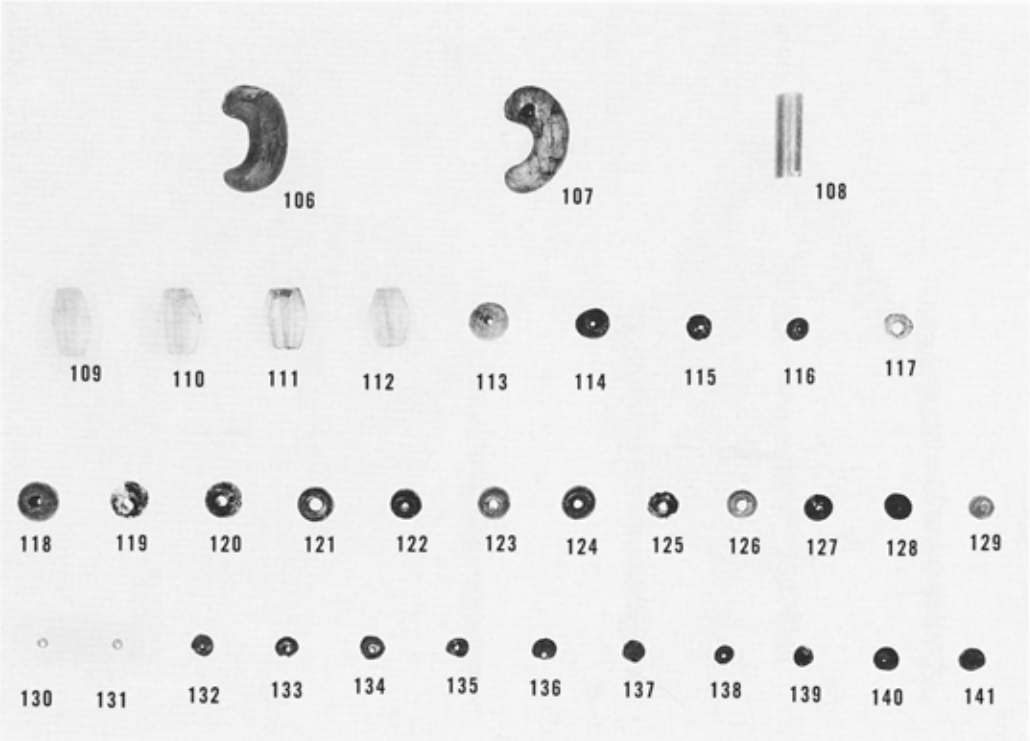
ＳＴ002古墳出土鉄刀



ＳＴ002古墳出土鉄鏃



ＳＴ002古墳出土耳環



ＳＴ002古墳出土玉類

143

145

147

149

150

153

ＳＴ003古墳出土土器１

154

155

156

160

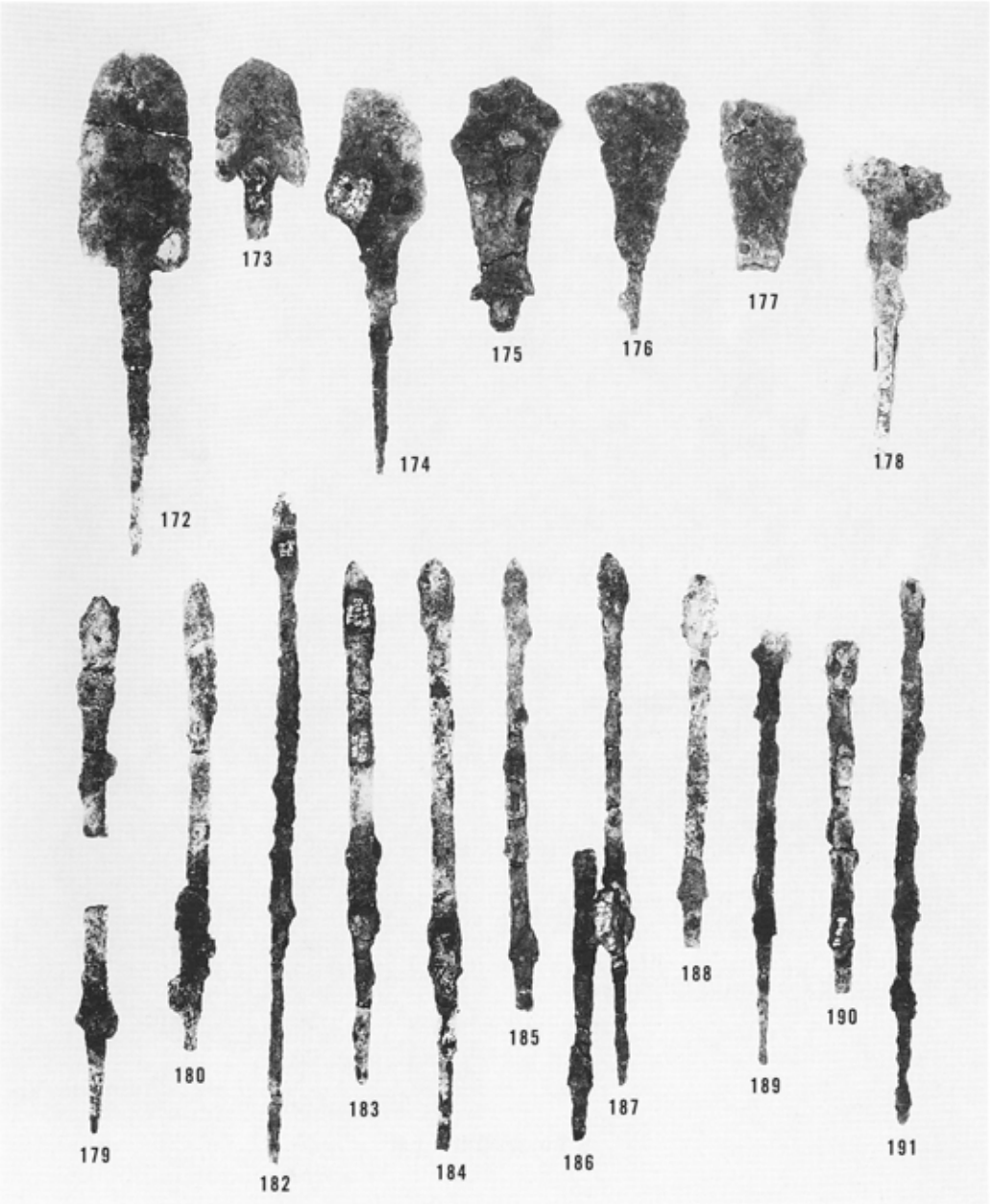
165

168

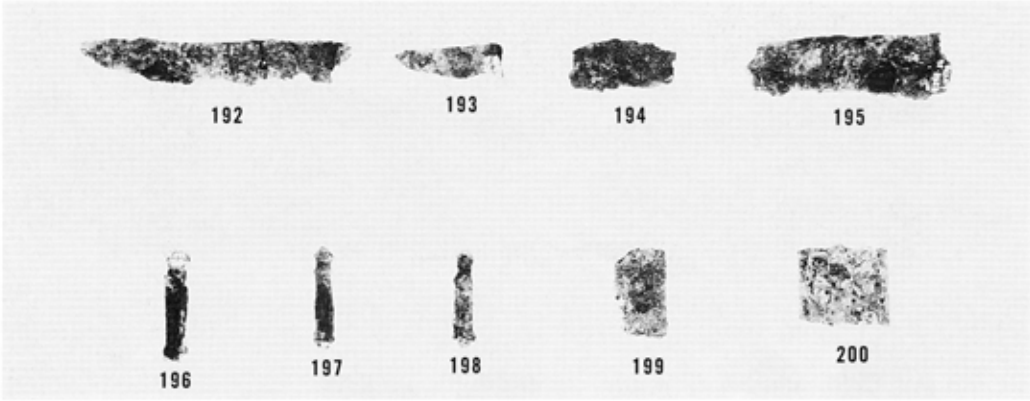
166

ＳＴ003古墳出土土器２

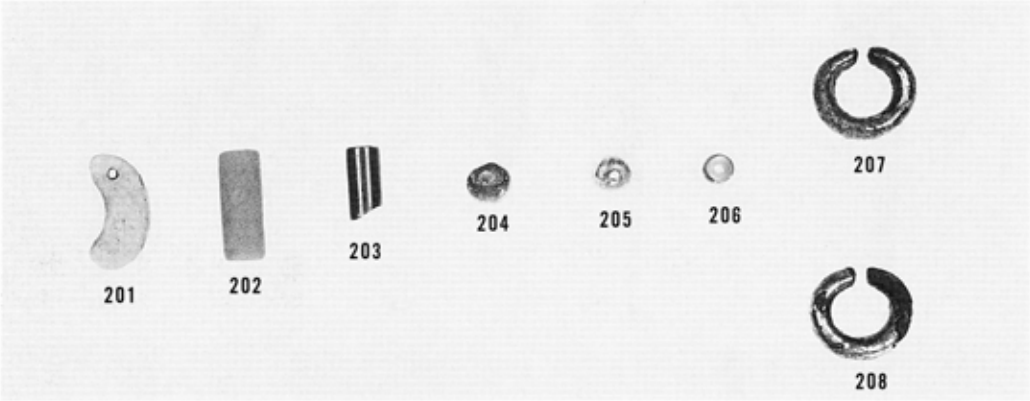
ＳＴ003古墳出土鉄刀



ＳＴ003古墳出土鉄鏃

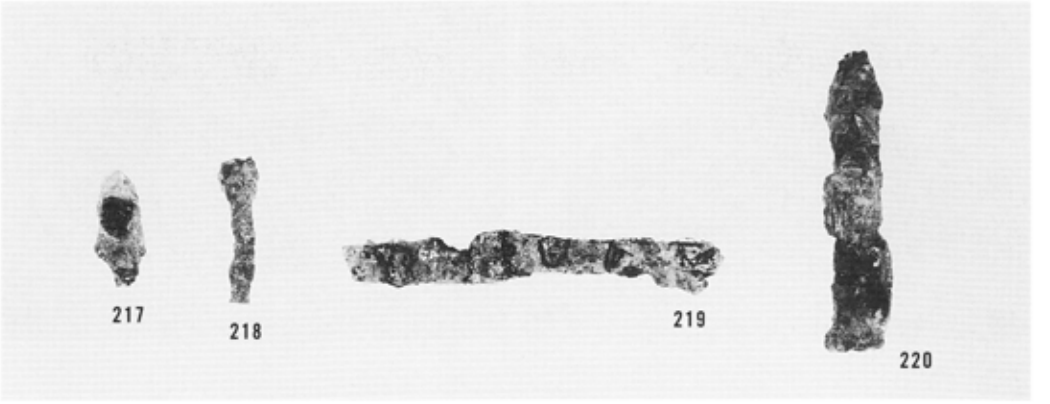


ＳＴ003古墳出土鉄器

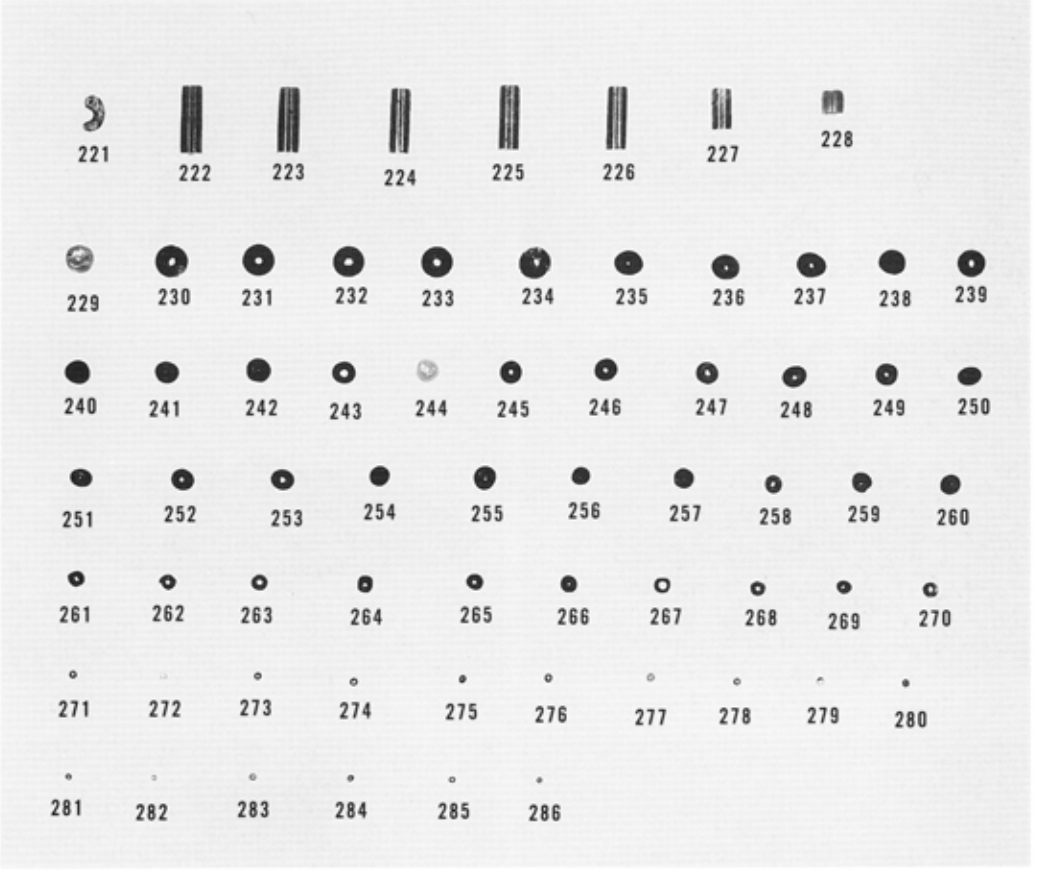


ＳＴ003古墳出土玉類

ＳＴ013古墳出土土器



ＳＴ013古墳出土鉄器



ＳＴ013古墳出土玉類

287

302

322

349

354

370

372

373

ＳＴ014古墳出土土器１

374

379

380

381

382

383

384

385

ＳＴ014古墳出土土器２

387

388

390

391

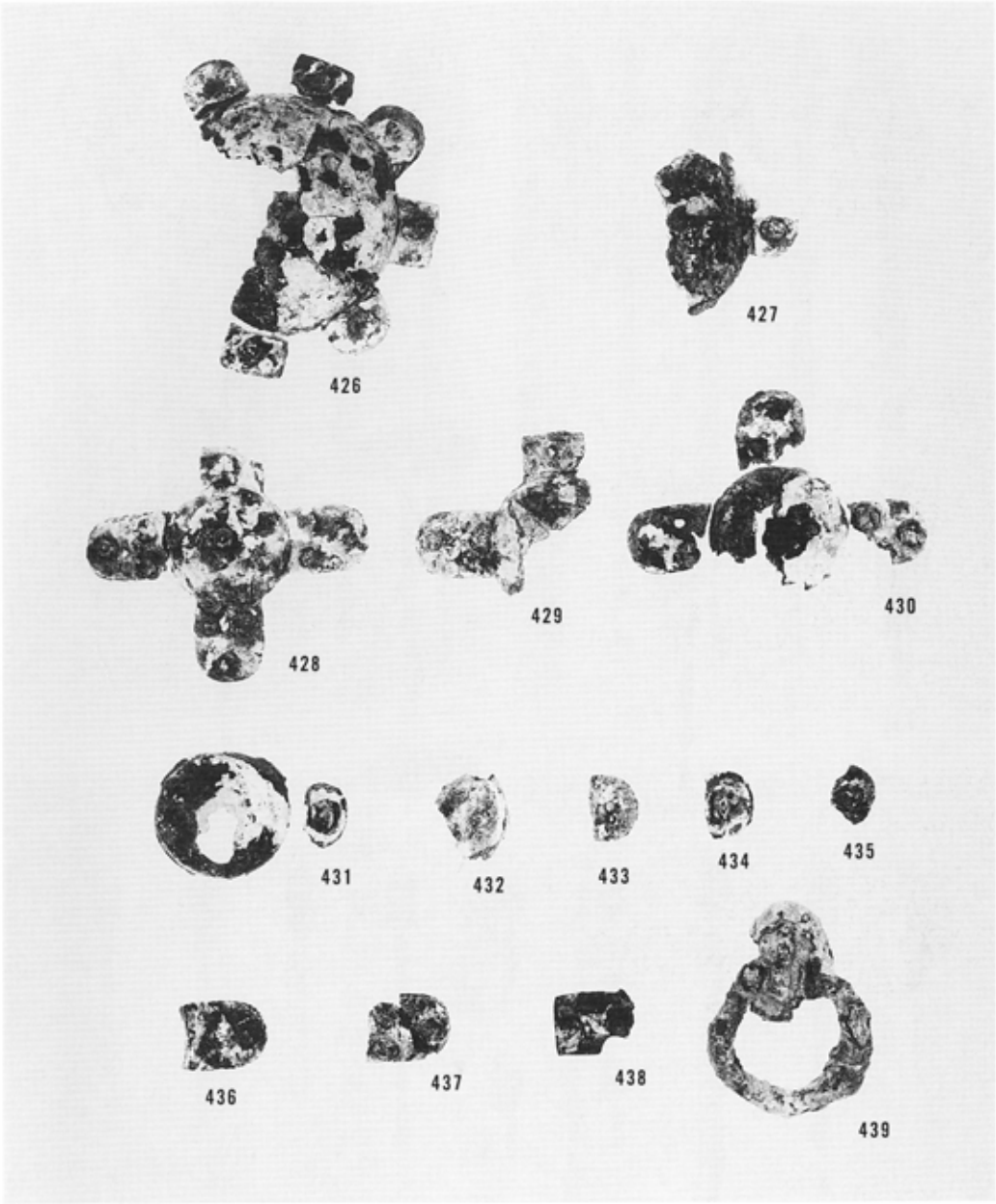
394

398

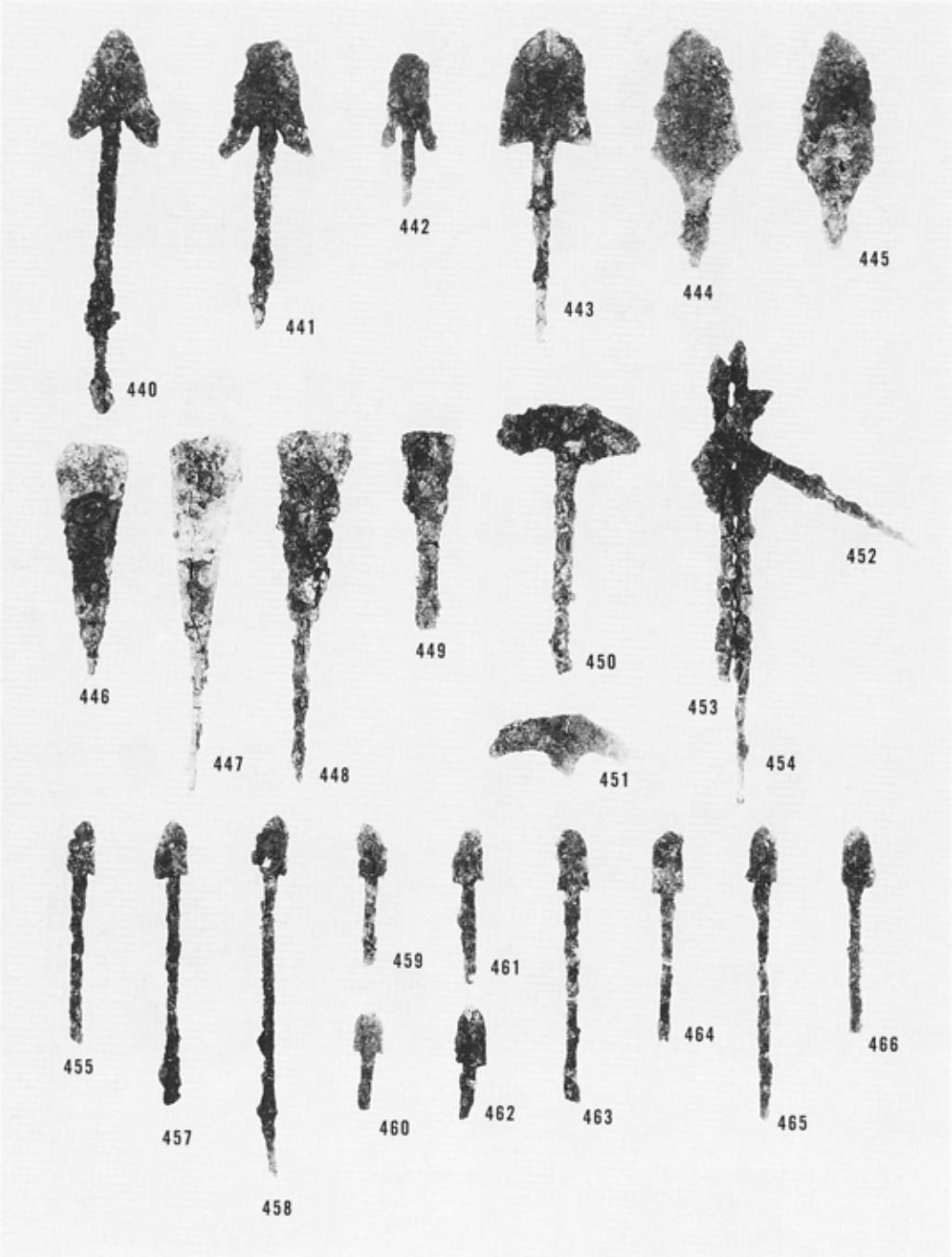
399

415

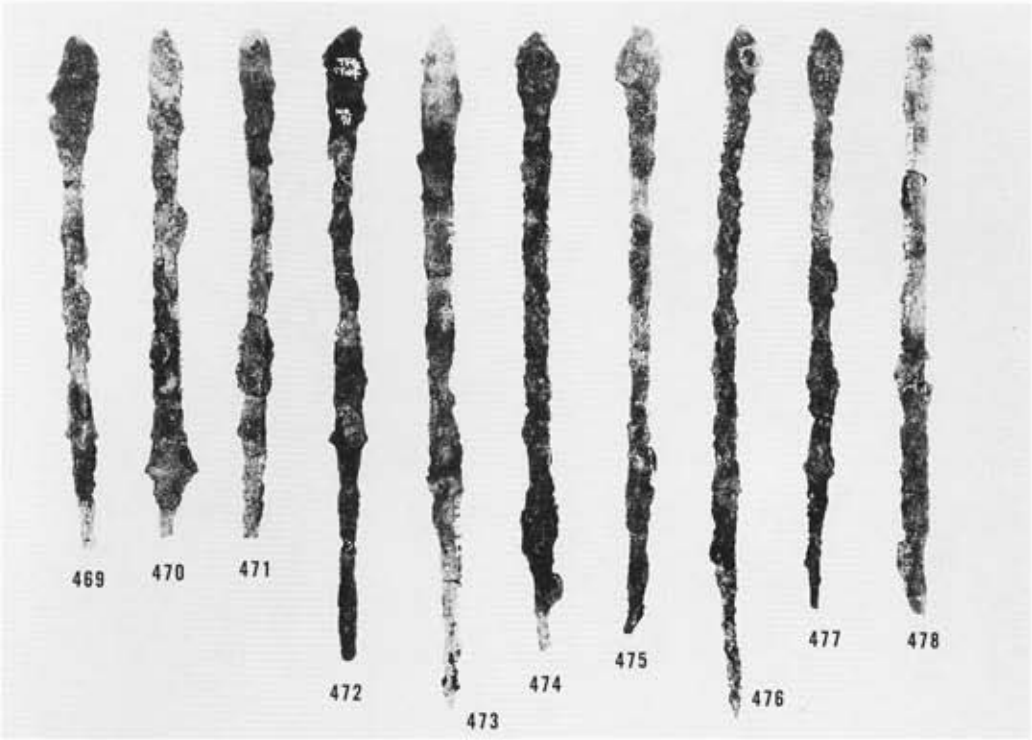
ＳＴ014古墳出土土器３



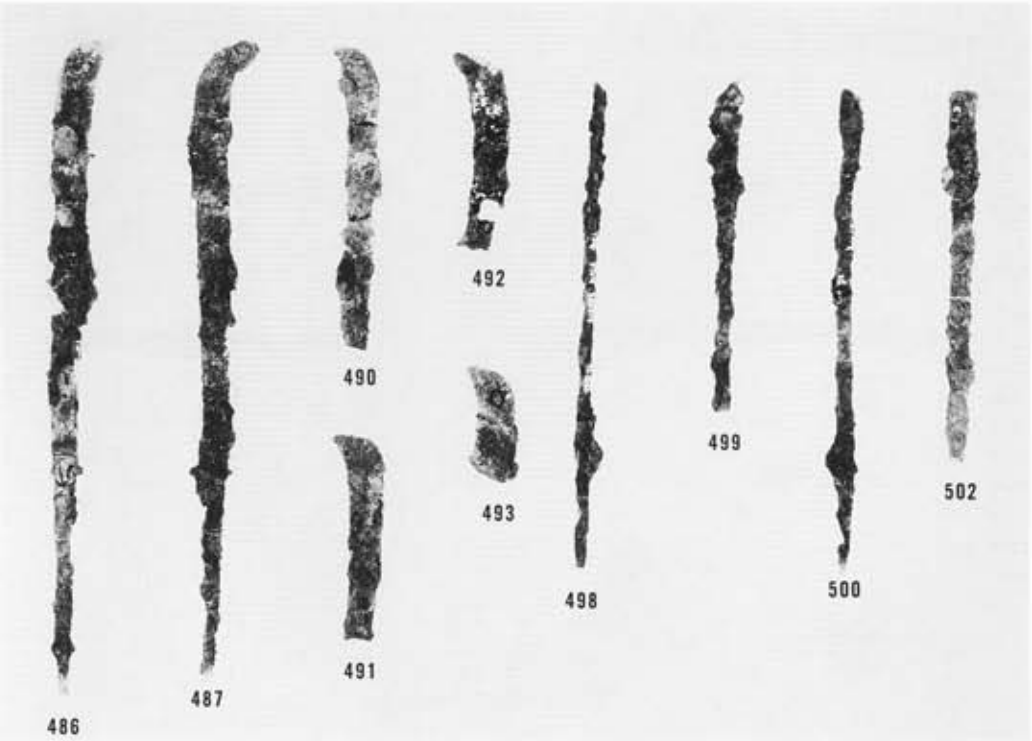
ＳＴ014古墳出土馬具



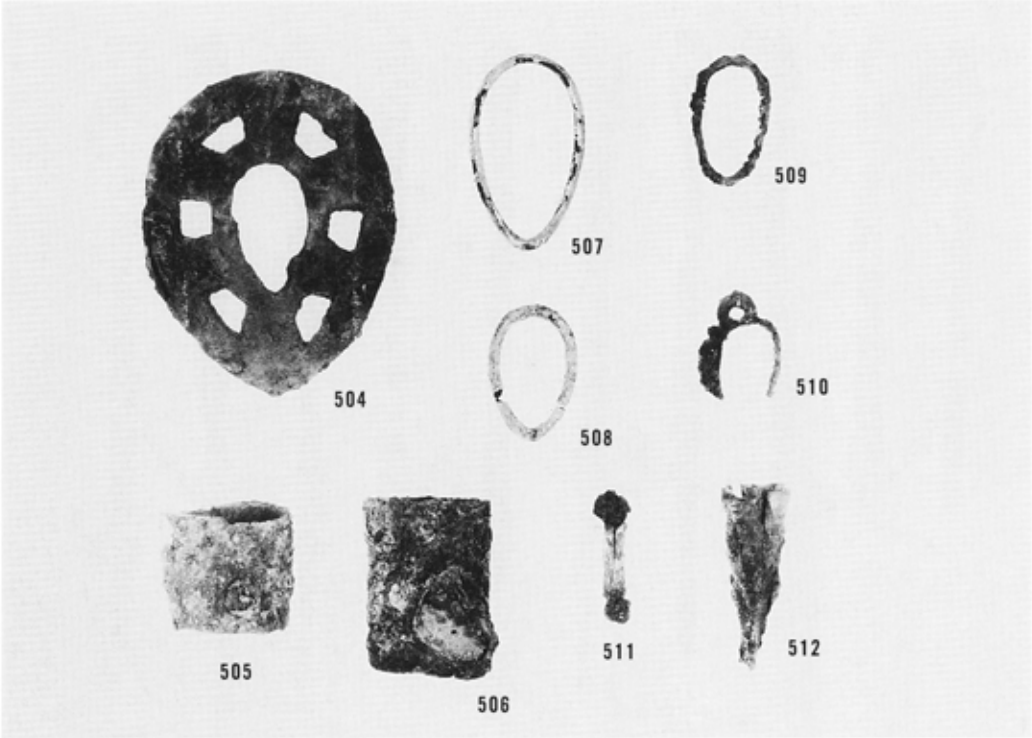
ＳＴ014古墳出土鉄鏃１



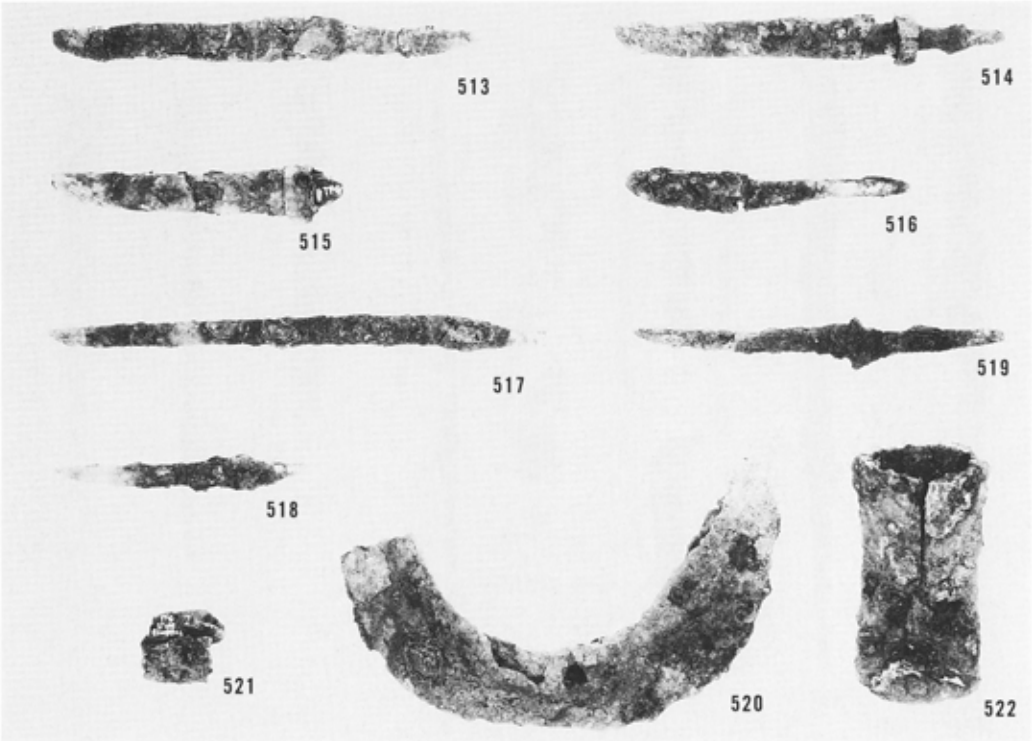
ＳＴ014古墳出土鉄鏃２



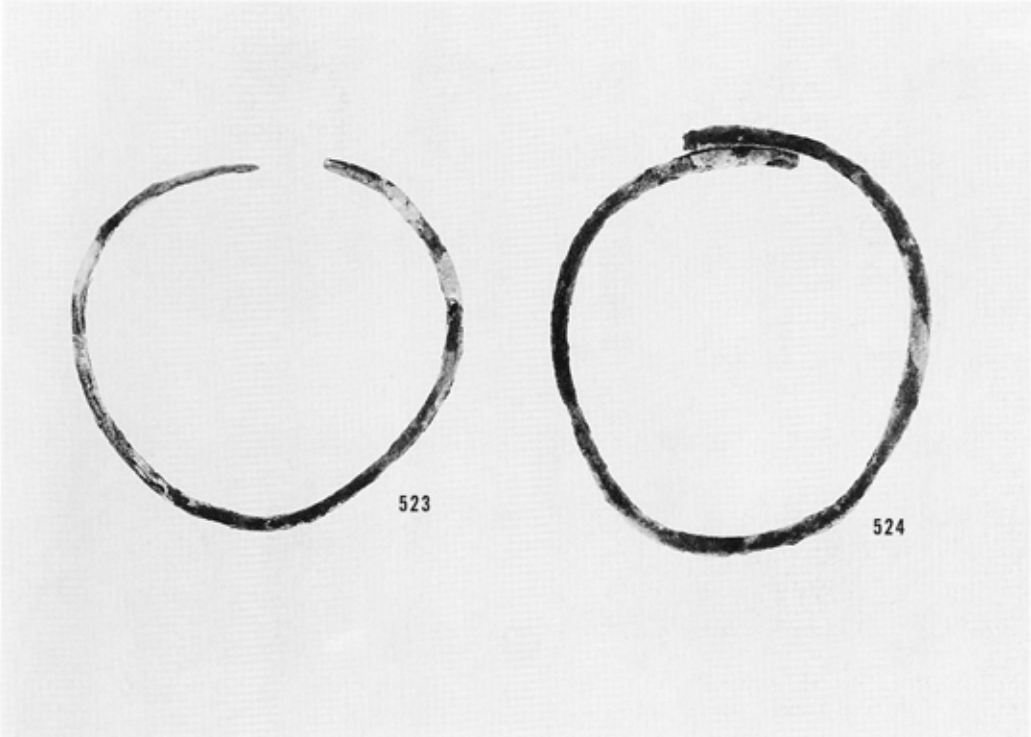
ＳＴ014古墳出土鉄鏃３



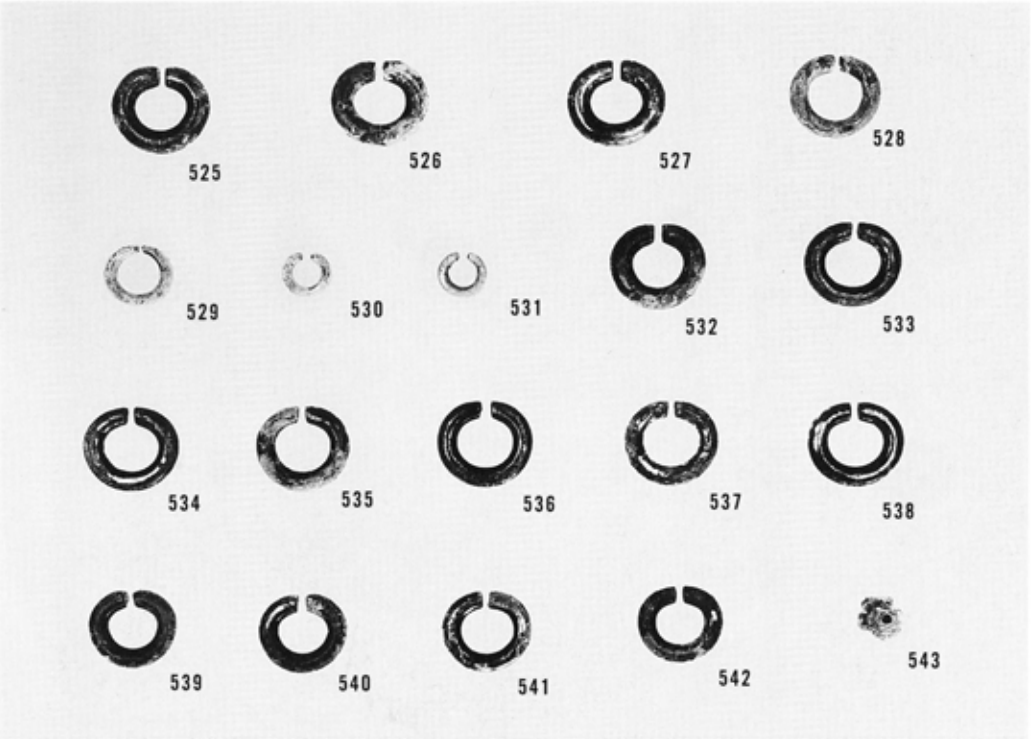
ＳＴ014古墳出土武器付属金具



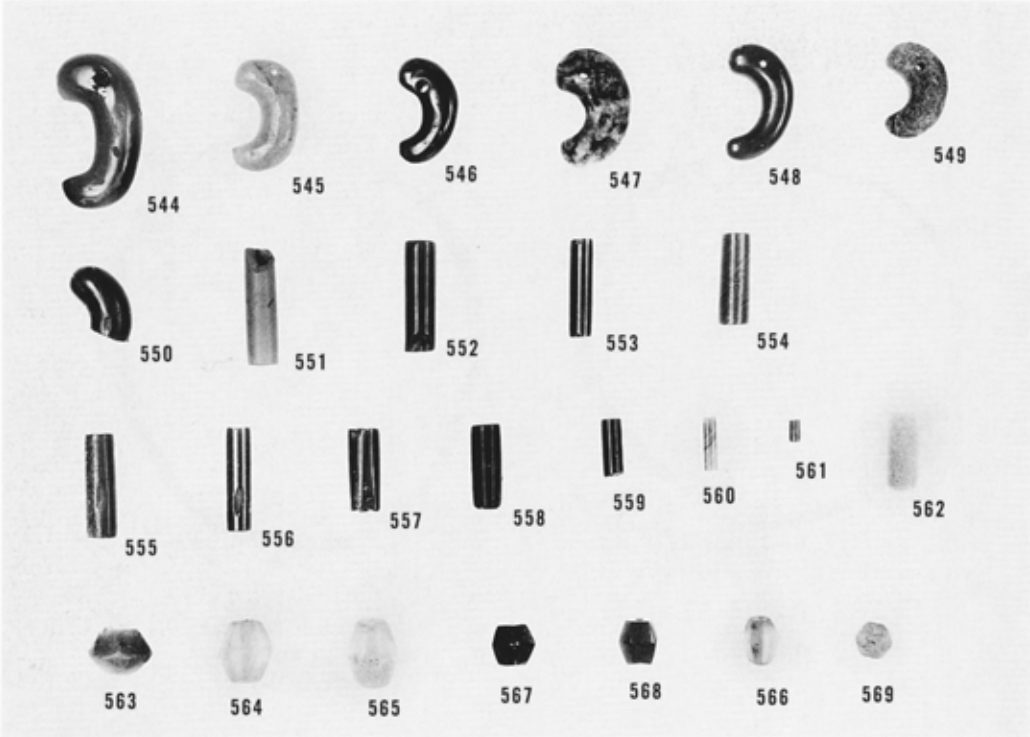
ＳＴ014古墳出土農工具



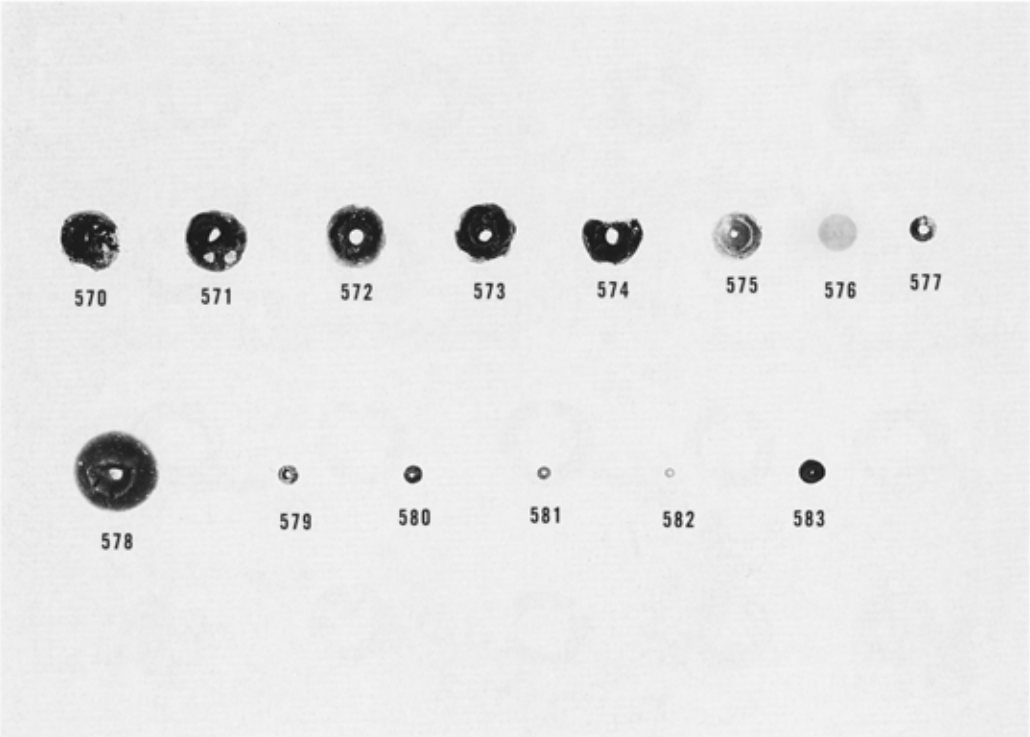
ＳＴ014古墳出土銅釧



ＳＴ014古墳出土耳環・その他

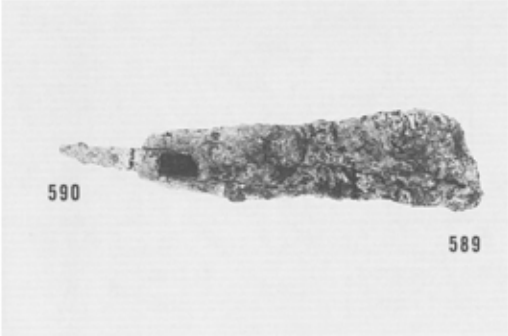


ＳＴ014古墳出土玉類１

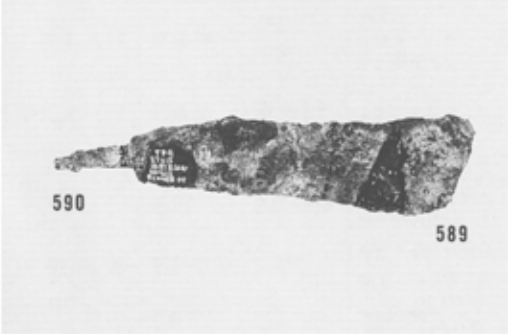


ＳＴ014古墳出土玉類２

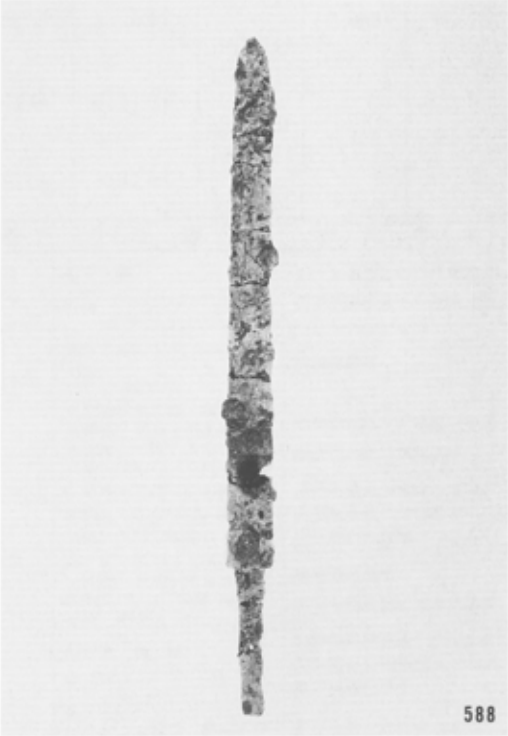
ＳＴ015古墳出土土器



ＳＴ015古墳出土鉄鎌・鉄鉋



同上　裏



ＳＴ015古墳出土鉄剣

報告書抄録

ふりがな	とうふくじいせき
書名	東福寺遺跡
副書名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	17
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書
シリーズ番号	第121集
編著者名	德永　貞紹、高瀬　哲郎、家田　淳一
編集機関	佐賀県教育委員会
所在地	〒840　佐賀県佐賀市城内1丁目1番59号　PHONE：0952—25—7232
発行年月日	西暦1994年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
東宮裾	佐賀県杵島郡 北方町大字大崎	414221	—	130°03′16″	33°13′18″	19831205 ～ 19840428	3,390	九州横断自動車道（長崎自動車道）建設に伴う事前調査
馬場	佐賀県武雄市 橘町大字片白	412066	—	130°03′30″	33°10′53″	19870402 ～ 19870605	2,070	
小野原A区	佐賀県武雄市 橘町大字大日	412066	—	130°03′28″	33°10′50″	19861201 ～ 19870331	3,350	
みやこB・C区	佐賀県武雄市 橘町大字大日	412066	—	130°03′08″	33°10′33″	19870907 ～ 19871224	1,490	
玉江1～3区	佐賀県武雄市 橘町・武雄町	412066	—	130°02′36″	33°10′05″	19870519 ～ 19871119	3,960	
皿山窯跡	佐賀県武雄市 橘町大字片白	412066	—	130°03′44″	33°11′05″	19871027 ～ 19880331	6,650	
東福寺	佐賀県武雄市 橘町大字片白	412066	—	130°03′44″	33°11′05″	19871027 ～ 19880801		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東宮裾	集落跡 墓地	弥生	竪穴建物1・土器棺墓1 石棺墓1・石蓋土坑墓1	弥生土器 石器	1・2次調査の巴形銅器等 周溝土器棺墓と一連の墓地
馬場	集落跡	弥生	竪穴建物1・土坑50 掘立柱建物1・溝1・流路	弥生土器 石器	前期の集落
小野原A区	集落跡	奈良 中世	土坑3 土坑6・井戸3・溝 鍛冶関連遺構	土師器・須恵器・縄羽口 土師器・瓦器・須恵器 陶磁器（中国・古瀬戸） 石鏃・縄羽口・土錘・砥石	条里型地割りと同方向の溝 鎌倉期の鍛冶関連遺構
みやこB・C区	集落跡	中世	大溝・土葬墓4	土師器・瓦器・須恵器 陶磁器・銅製容器・銭貨 石鏃・茶臼・縄羽口	中世前期の大規模な溝 土器類多数　墨書磁器 中世後期の墓地
玉江1～3区	集落跡 墓地	古墳 古代～中世	掘立柱建物2・鍛冶関連 石積遺構・掘立柱建物 土坑・溝・土葬墓1 道路状遺構	須恵器・鉄刀子・縄羽口 土師器・瓦器・須恵器 陶磁器（中国・朝鮮・備前） 石鏃・茶臼	鍛冶関連遺構 平安末期以前の道路状遺構
皿山窯跡	磁器窯跡	明治	階段式連房状登窯1 物原・排水溝・柱穴	染付皿・椀・鉢 窯道具	明治30年開業の「片白陶釜」型紙摺から銅版摺への移行期の様相を示す
東福寺	集落跡 古墳 墓地	弥生 古墳 中世	竪穴建物6 古墳8（木棺・竪穴式石室・竪穴系横口式石室・横穴式石室）・石棺墓1 古墳石室再利用墓	弥生土器 須恵器・土師器・鉄製武器 馬具・装身具・人骨 土師器・瓦器・磁器・人骨	彎曲古墳（白山神社風穴祠） 割竹形と箱形の木棺を主体とする方墳 人骨約3体分

佐賀県文化財調査報告書　第121集

東福寺遺跡

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査報告書 (17)

編集
発行　佐賀県教育委員会
佐賀県佐賀市城内1丁目1番59号

1994年3月31日

印刷　株式会社宮地印刷
佐賀県佐賀市長瀬町11-20